

南島原市文化財調査報告書 第6集

# 日野江城跡 総集編 I

—平成21年度までの調査成果—

2011

長崎県南島原市教育委員会



日野江城跡二ノ丸地区遺構検出状況



1



2



3



4

1 土師質土器

2・3 法花

4 金箔瓦

## 発刊にあたって

国史跡「日野江城跡」は、中世の戦国大名である有馬氏の本城であり、地域の拠点的城郭として知られています。16世紀末の南島原市は、イエズス会への口之津港の提供や布教の許可などにより、キリスト教文化が深く定着した地域がありました。13代目当主晴信はキリシタン大名となり、城下にはセミナリヨを建設するなどしました。

周辺には島原の乱終焉の地となった国史跡「原城跡」や日本最古のローマ字碑文をもつ国史跡「吉利支丹墓碑」などをはじめとして、キリスト教文化にまつわるたくさんの歴史スポットがあり、観光にもたくさんの方々にお越しいただいています。

さて平成7年度以来、日野江城跡では旧北有馬町が主体となって発掘調査事業を実施してまいりました。平成18年3月31日には北有馬町を含む島原半島南東部の8カ町が合併して南島原市となりました。発掘調査事業についても南島原市が引き継ぎ、現在は日野江城跡の整備に向けてさまざまな計画をすすめているところです。

これまでの発掘調査では、仏塔を使った階段遺構の検出や金箔瓦の出土など多くの成果が上がり、日野江城跡の地下に眠っていた多くの歴史的事実が明らかとなっています。

本書を通じて日野江城跡における貴重な発掘調査の成果についてより多くの方々に知っていただき、学術研究や教育、観光など多方面で活用していただくことを願つてやみません。

最後になりましたが、日野江城跡の発掘調査と保存整備に多大なご指導とご鞭撻をいただきました文化庁記念物課、長崎県教育委員会学芸文化課、長崎県世界遺産登録推進室、並びに文化財専門委員会の先生方をはじめ、関係各位の皆様に心より感謝申し上げます。

平成23年3月31日

南島原市 教育長 定方 郁夫

## 例　　言

- 1 本書は、平成7年度から平成21年度にかけて実施した国史跡日野江城跡（長崎県南島原市北有馬町所在）における発掘調査の報告書である。
- 2 本書は、平成22年度の国庫補助事業を受けて作成した。
- 3 調査は、旧北有馬町教育委員会及び南島原市教育委員会が主体となって行った。
- 4 本書の作成にかかわる整理調査の主体及び担当は以下のとおりである。

整理調査主体 南島原市教育委員会 教育長 定方 郁夫

教育次長 井口 敬次

文化財課長 松本 慎二

整理調査担当 南島原市教育委員会 文化財課文化財班 主査(学芸員) 伊藤 健司

同上 主査(学芸員) 本多 和典

同上 文化財調査員 林田 好子

- 5 本書の執筆は、伊藤、林田、本多が分担し、本文目次に担当者名を記した。また、階段遺構出土の転用石塔について、大石一久氏より玉稿を賜った。
- 6 出土遺物の整理と本書の作成には、荒木秀之、岩永英子、上田五月、末永利恵、本多瑠美、松尾ひとみ、溝田利枝の協力を得た。
- 7 本書における遺物・図面・写真等は南島原市深江埋蔵文化財整理室及び旧坂下小学校で保管し、遺物の一部を原城文化センター内の展示室で公開している。
- 8 本書の刊行にあたって以下の方々からご助言、ご指導ならびにご協力をいただいた。記して謝意を表します。  
上野淳也、近江俊秀、大石一久、岡林隆敏、川口洋平、北島大輔、楠田真典、坂井秀弥、沢田正昭、下川達彌、白石美紀、千田嘉博、高瀬要一、高野晋司、竹田将仁、玉井哲雄、辻田直人、寺井邦久、寺田正剛、デ・ルカ・レンゾ、中尾篤志、中村季彦、中村信吉、服部英雄、林隆広、東貴之、福田一志、福田八郎、古門雅高、本田雄峰、水ノ江和同、宮崎貴夫、三宅克弘、宮武正登、本中真、森田良藏、山口勝也、分部哲秋、渡邊康行  
(五十音順、所属・敬称略)
- 9 本書の編集は、本多和典による。

## 本文目次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
第1節 地理的環境（本多）	1
第2節 歴史的環境（林田）	3
第Ⅱ章 調査組織と調査の経過（本多）	7
第1節 調査組織	7
第2節 調査区の配置と調査の経過	9
第Ⅲ章 調査の成果	16
第1節 地形調査（伊藤）	16
第2節 本丸地区的調査	47
(1) 曲輪10の調査（概要・調査成果：林田、遺物：本多）	47
(2) 曲輪2の調査（本多）	52
(3) 曲輪3ほかの調査（概要・調査成果：伊藤、遺物：本多）	85
第3節 二ノ丸地区的調査（概要・土層・遺構：林田、遺物：本多）	104
(1) A地区的調査	104
(2) B地区的調査	130
(3) C地区的調査	169
(4) D地区的調査	191
(5) E地区的調査	210
(6) F地区的調査	232
(7) G地区的調査	256
第4節 大手川地区的調査（概要・土層・遺構：林田、遺物：本多）	268
第Ⅳ章 総 括	275
第1節 日野江城跡の遺構と遺物（本多）	275
第2節 日野江城跡階段遺構出土の転用石塔について（大石）	293

## 挿図目次

第1図	日野江城跡位置図	1
第2図	南島原市内主要遺跡分布図	4
第3図	日野江城跡曲輪配置図	10
第4図	日野江城跡調査区配置図	11
第5図	本丸地区調査区配置図	12
第6図	二ノ丸地区・大手川地区調査区配置図	12
第7図	二ノ丸地区・大手川地区遺構配置図	13・14
第8図	日野江城跡全体図	17
第9図	日野江城跡縄張図	18
第10図	曲輪1平面図	19
第11図	曲輪2平面図	20
第12図	曲輪2下平面図および細分図	21
第13図	曲輪3平面図	23
第14図	曲輪4平面図および細分図	25
第15図	曲輪5平面図および細分図	27
第16図	曲輪5-①東側石垣立面図	28
第17図	曲輪6平面図および細分図	30
第18図	曲輪6-①東側石垣立面図	31
第19図	曲輪7平面図および細分図	32
第20図	曲輪7の石塔拓本	33
第21図	曲輪8・9周辺図	35
第22図	曲輪10および本丸西側平面図	36
第23図	曲輪11および南側平面図	37
第24図	曲輪12周辺図	38
第25図	曲輪12-①・②の平面観	38
第26図	曲輪13平面図	40
第27図	土橋	41
第28図	堅堀配置図	41
第29図	浦口周辺図	43
第30図	南側登城道	45
第31図	本丸地区曲輪10遺構配置図	47
第32図	37区実測図	48
第33図	38区実測図	49
第34図	39区実測図	49
第35図	40区実測図	50
第36図	41区実測図	50
第37図	本丸地区曲輪10出土の遺物	51
第38図	本丸地区曲輪2土層断面図①	53
第39図	本丸地区曲輪2土層断面図②	54
第40図	本丸地区曲輪2遺構配置図	55
第41図	掘立柱建物跡実測図	56
第42図	柱穴列1実測図	57
第43図	柱穴列2実測図	57
第44図	柱穴列3実測図	57
第45図	本丸地区曲輪2出土の遺物①	61
第46図	本丸地区曲輪2出土の遺物②	62
第47図	本丸地区曲輪2出土の遺物③	63
第48図	本丸地区曲輪2出土の遺物④	64
第49図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑤	65
第50図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑥	66
第51図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑦	67
第52図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑧	69
第53図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑨	71
第54図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑩	72
第55図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑪	73
第56図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑫	75
第57図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑬	76
第58図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑭	77
第59図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑮	78
第60図	本丸地区曲輪2出土の遺物⑯	79
第61図	トレンチ1-1・トレンチ1-2実測図	87
第62図	トレンチ2実測図	88
第63図	トレンチ3実測図	89
第64図	トレンチ4実測図	89
第65図	トレンチ5実測図	91
第66図	トレンチ6実測図	92
第67図	トレンチ7実測図	92
第68図	トレンチ8実測図	93
第69図	トレンチ9実測図	93
第70図	トレンチ10実測図	94
第71図	本丸地区曲輪3ほか出土の遺物①	97
第72図	本丸地区曲輪3ほか出土の遺物②	98
第73図	本丸地区曲輪3ほか出土の遺物③	99
第74図	本丸地区曲輪3ほか出土の遺物④	100
第75図	本丸地区曲輪3ほか出土の遺物⑤	101
第76図	二ノ丸A地区遺構配置図	105・106
第77図	二ノ丸A地区土層断面図①	107
第78図	二ノ丸A地区土層断面図②	108
第79図	階段4・石垣6・礎石群2実測図	110
第80図	掘立柱建物跡1	111
第81図	掘立柱建物跡2	111
第82図	掘立柱建物跡3	112
第83図	二ノ丸A地区出土の遺物①	114
第84図	二ノ丸A地区出土の遺物②	115
第85図	二ノ丸A地区出土の遺物③	117
第86図	二ノ丸A地区出土の遺物④	118
第87図	二ノ丸A地区出土の遺物⑤	119
第88図	二ノ丸A地区出土の遺物⑥	121
第89図	二ノ丸A地区出土の遺物⑦	122
第90図	二ノ丸A地区出土の遺物⑧	123
第91図	二ノ丸A地区出土の遺物⑨	124
第92図	二ノ丸A地区出土の遺物⑩	125
第93図	二ノ丸A地区出土の遺物⑪	126
第94図	二ノ丸B地区遺構配置図	131・132
第95図	二ノ丸B地区土層断面図①	133・134
第96図	二ノ丸B地区土層断面図②	135
第97図	階段4・石垣7・石垣8・溝跡10実測図	137・138
第98図	ピット群4実測図	139
第99図	柱穴列3実測図	140
第100図	二ノ丸B地区出土の遺物①	142
第101図	二ノ丸B地区出土の遺物②	143
第102図	二ノ丸B地区出土の遺物③	144

69	第103図	二ノ丸B地区出土の遺物④	145
71	第104図	二ノ丸B地区出土の遺物⑤	146
72	第105図	二ノ丸B地区出土の遺物⑥	147
72	第106図	二ノ丸B地区出土の遺物⑦	148
73	第107図	二ノ丸B地区出土の遺物⑧	150
75	第108図	二ノ丸B地区出土の遺物⑨	151
76	第109図	二ノ丸B地区出土の遺物⑩	152
77	第110図	二ノ丸B地区出土の遺物⑪	153
78	第111図	二ノ丸B地区出土の遺物⑫	154
79	第112図	二ノ丸B地区出土の遺物⑬	155
87	第113図	二ノ丸B地区出土の遺物⑭	156
88	第114図	二ノ丸B地区出土の遺物⑮	157
89	第115図	二ノ丸B地区出土の遺物⑯	158
89	第116図	二ノ丸B地区出土の遺物⑰	159
91	第117図	二ノ丸B地区出土の遺物⑱	160
92	第118図	二ノ丸B地区出土の遺物⑲	161
92	第119図	二ノ丸B地区出土の遺物⑳	162
93	第120図	二ノ丸C地区遺構配置図	171・172
93	第121図	二ノ丸C地区土層断面図①	173
94	第122図	二ノ丸C地区土層断面図②	174
97	第123図	階段2(19区)・石垣3・溝跡8実測図	175
98	第124図	階段2(21区)・石垣4実測図	176
99	第125図	集石4実測図	177
100	第126図	二ノ丸C地区出土の遺物①	179
101	第127図	二ノ丸C地区出土の遺物②	180
5・106	第128図	二ノ丸C地区出土の遺物③	181
107	第129図	二ノ丸C地区出土の遺物④	183
108	第130図	二ノ丸C地区出土の遺物⑤	184
110	第131図	二ノ丸C地区出土の遺物⑥	185
111	第132図	二ノ丸C地区出土の遺物⑦	186
111	第133図	二ノ丸C地区出土の遺物⑧	187
112	第134図	二ノ丸D地区遺構配置図	191
114	第135図	二ノ丸D地区土層断面図	192
115	第136図	階段2(2D区)・溝跡9実測図	194
117	第137図	階段3・石垣1・石垣2実測図	195
118	第138図	石列5実測図	196
119	第139図	二ノ丸D地区出土の遺物①	198
121	第140図	二ノ丸D地区出土の遺物②	199
122	第141図	二ノ丸D地区出土の遺物③	200
123	第142図	二ノ丸D地区出土の遺物④	201
124	第143図	二ノ丸D地区出土の遺物⑤	202
125	第144図	二ノ丸D地区出土の遺物⑥	203
126	第145図	二ノ丸D地区出土の遺物⑦	204
11・132	第146図	二ノ丸D地区出土の遺物⑧	205
33・134	第147図	二ノ丸D地区出土の遺物⑨	206
135	第148図	二ノ丸E地区遺構配置図	211・212
37・138	第149図	二ノ丸E地区土層断面図①	213
139	第150図	二ノ丸E地区土層断面図②	214
140	第151図	二ノ丸E地区土層断面図③	215
142	第152図	二ノ丸E地区土層断面図④	216
143	第153図	階段1・石列2実測図	217
144	第154図	石列3実測図	217
	第155図	礎石群1実測図	218
	第156図	柱穴列1実測図	219
	第157図	柱穴列2実測図	219
	第158図	二ノ丸E地区出土の遺物①	221
	第159図	二ノ丸E地区出土の遺物②	222
	第160図	二ノ丸E地区出土の遺物③	223
	第161図	二ノ丸E地区出土の遺物④	224
	第162図	二ノ丸E地区出土の遺物⑤	225
	第163図	二ノ丸E地区出土の遺物⑥	226
	第164図	二ノ丸E地区出土の遺物⑦	227
	第165図	二ノ丸E地区出土の遺物⑧	228
	第166図	二ノ丸F地区遺構配置図	232
	第167図	二ノ丸F地区土層断面図	233
	第168図	土坑1実測図	234
	第169図	二ノ丸F地区出土の遺物①	236
	第170図	二ノ丸F地区出土の遺物②	237
	第171図	二ノ丸F地区出土の遺物③	239
	第172図	二ノ丸F地区出土の遺物④	240
	第173図	二ノ丸F地区出土の遺物⑤	241
	第174図	二ノ丸F地区出土の遺物⑥	242
	第175図	二ノ丸F地区出土の遺物⑦	243
	第176図	二ノ丸F地区出土の遺物⑧	244
	第177図	二ノ丸F地区出土の遺物⑨	245
	第178図	二ノ丸F地区出土の遺物⑩	246
	第179図	二ノ丸F地区出土の遺物⑪	247
	第180図	二ノ丸F地区出土の遺物⑫	248
	第181図	二ノ丸F地区出土の遺物⑬	249
	第182図	二ノ丸F地区出土の遺物⑭	250
	第183図	二ノ丸G地区遺構配置図	256
	第184図	二ノ丸G地区土層断面図	257
	第185図	5・2区実測図	258
	第186図	22区実測図	258
	第187図	二ノ丸G地区出土の遺物①	260
	第188図	二ノ丸G地区出土の遺物②	261
	第189図	二ノ丸G地区出土の遺物③	262
	第190図	二ノ丸G地区出土の遺物④	263
	第191図	二ノ丸G地区出土の遺物⑤	264
	第192図	二ノ丸G地区出土の遺物⑥	265
	第193図	大手川地区遺構配置図	269
	第194図	1区実測図	270
	第195図	2区実測図	271
	第196図	3区実測図	272
	第197図	4区実測図	272
	第198図	5区実測図	273
	第199図	大手川地区出土の遺物	274
	第200図	日野江城跡曲輪配置図	279
	第201図	曲輪2遺構検出状況	279
	第202図	二ノ丸地区における通路想定図	281
	第203図	土師質土器分類図	287
	第204図	瓦分類図	287
	第205図	階段4実測図	296

## 表 目 次

第1表 南島原市内主要遺跡一覧表	5	第28表 二ノ丸D地区出土遺物観察表①	207
第2表 日野江城跡発掘調査履歴	15	第29表 二ノ丸D地区出土遺物観察表②	208
第3表 本丸地区曲輪10出土遺物観察表	51	第30表 二ノ丸D地区出土遺物観察表③	209
第4表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表①	79	第31表 二ノ丸E地区出土遺物観察表①	229
第5表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表②	80	第32表 二ノ丸E地区出土遺物観察表②	230
第6表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表③	81	第33表 二ノ丸E地区出土遺物観察表③	231
第7表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表④	82	第34表 二ノ丸F地区出土遺物観察表①	250
第8表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表⑤	83	第35表 二ノ丸F地区出土遺物観察表②	251
第9表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表⑥	84	第36表 二ノ丸F地区出土遺物観察表③	252
第10表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表⑦	84	第37表 二ノ丸F地区出土遺物観察表④	253
第11表 本丸地区曲輪3ほか出土遺物観察表①	102	第38表 二ノ丸F地区出土遺物観察表⑤	254
第12表 本丸地区曲輪3ほか出土遺物観察表②	102	第39表 二ノ丸F地区出土遺物観察表⑥	255
第13表 本丸地区曲輪3ほか出土遺物観察表③	103	第40表 二ノ丸G地区出土遺物観察表①	265
第14表 二ノ丸A地区出土遺物観察表①	126	第41表 二ノ丸G地区出土遺物観察表②	266
第15表 二ノ丸A地区出土遺物観察表②	127	第42表 二ノ丸G地区出土遺物観察表③	266
第16表 二ノ丸A地区出土遺物観察表③	127	第43表 二ノ丸地区検出遺構対応表	267
第17表 二ノ丸A地区出土遺物観察表④	128	第44表 大手川地区出土遺物観察表①	274
第18表 二ノ丸A地区出土遺物観察表⑤	129	第45表 大手川地区出土遺物観察表②	274
第19表 二ノ丸B地区出土遺物観察表①	163	第46表 階段3出土石塔(総計)	293
第20表 二ノ丸B地区出土遺物観察表②	164	第47表 階段4出土石塔(総計)	294
第21表 二ノ丸B地区出土遺物観察表③	165	第48表 階段4における各段ごとの点数	294
第22表 二ノ丸B地区出土遺物観察表④	166	第49表 階段4右側部分の擾乱土中出土石塔(総計)	295
第23表 二ノ丸B地区出土遺物観察表⑤	167	第50表 階段と掘立柱建物跡間の通路出土石塔(総計)	295
第24表 二ノ丸B地区出土遺物観察表⑥	168	第51表 合計点数	295
第25表 二ノ丸C地区出土遺物観察表①	188	第52表 製作時期による分類	300
第26表 二ノ丸C地区出土遺物観察表②	189	第53表 主な石塔類出土・転用城郭	301
第27表 二ノ丸C地区出土遺物観察表③	190		

## 図版目次

図版1 本丸地区曲輪10遺構検出状況	309	図版27 出土遺物⑪	335
図版2 本丸地区曲輪2遺構検出状況ほか①	310	図版28 出土遺物⑫	336
図版3 本丸地区曲輪2遺構検出状況ほか②	311	図版29 出土遺物⑬	337
図版4 本丸地区曲輪3ほか調査状況①	312	図版30 出土遺物⑭	338
図版5 本丸地区曲輪3ほか調査状況②	313	図版31 出土遺物⑮	339
図版6 本丸地区曲輪3ほか調査状況③	314	図版32 出土遺物⑯	340
図版7 二ノ丸A地区遺構検出状況・遺物出土状況	315	図版33 出土遺物⑰	341
図版8 二ノ丸B地区遺構検出状況①	316	図版34 出土遺物⑱	342
図版9 二ノ丸B地区遺構検出状況②	317	図版35 出土遺物⑲	343
図版10 二ノ丸C地区遺構検出状況	318	図版36 出土遺物⑳	344
図版11 二ノ丸D地区遺構検出状況	319	図版37 出土遺物㉑	345
図版12 二ノ丸E地区遺構検出状況・遺物出土状況	320	図版38 出土遺物㉒	346
図版13 二ノ丸E地区遺構検出状況	321	図版39 出土遺物㉓	347
図版14 二ノ丸F地区遺構検出状況・遺物出土状況	322	図版40 出土遺物㉔	348
図版15 二ノ丸G地区遺構検出状況	323	図版41 出土遺物㉕	349
図版16 大手川地区遺構検出状況	324	図版42 出土遺物㉖	350
図版17 出土遺物①	325	図版43 出土遺物㉗	351
図版18 出土遺物②	326	図版44 出土遺物㉘	352
図版19 出土遺物③	327	図版45 出土遺物㉙	353
図版20 出土遺物④	328	図版46 出土遺物㉚	354
図版21 出土遺物⑤	329	図版47 出土遺物㉛	355
図版22 出土遺物⑥	330	図版48 出土遺物㉜	356
図版23 出土遺物㉟	331	図版49 出土遺物㉝	357
図版24 出土遺物㉞	332	図版50 出土遺物㉞	358
図版25 出土遺物㉞	333	図版51 出土遺物㉞	359
図版26 出土遺物㉞	334	図版52 出土遺物㉞	360

# 第Ⅰ章 地理的・歴史的環境

## 第1節 地理的環境

### (1) 位置と地勢

日野江城跡は、長崎県南島原市北有馬町に所在し、有馬氏の本城として昭和57年7月3日国の史跡として指定を受けている。

日本列島九州島の西北部に位置する長崎県は、島原半島、長崎半島、西彼杵半島、松浦半島といった半島と、壱岐、対馬、五島列島をはじめとする大小600ほどの島々から構成される。「平成の大合併」により、長崎県は平成11年に8市70町1村であったのが、平成23年3月現在、13市8町に統合が進んでいる。

南島原市は、旧南高来郡であった深江町、布津町、有家町、西有家町、北有馬町、南有馬町、口之津町、加津佐町の8町が平成18年3月31日に合併して誕生した。島原半島の南東部に位置し、北東部は島原市に、北西部は雲仙市に接している。人口約5万4千人からなる市の主要産業は、農業・漁業で、雲仙山系のふもとに広がる肥沃な土地と、有明海・橘湾からとれる豊富な魚介類によって支えられている。

旧8町はすべての町が海岸線に面していて、海岸沿いに島原半島をめぐる国道251号線が生活道路の中心として利用されている。海路では口之津港が天草鬼池港と結ばれている。

### (2) 島原半島の地形と地質

胃袋形をなす島原半島は、愛野地峡によって長崎県本土部の交通の要衝である諫早地区とつながっている。北部から南東部は有明海に面して佐賀方面や熊本方面を臨むとともに、西部は橘湾を挟んで長崎半島に対峙している。



第1図 日野江城跡位置図 (S=1/200,000)

島原半島の始まりは、今から430万年前の海底火山の活動に始まるとされている。海中に形成された火山島が徐々に火山活動とともに成長し、また島原半島の南東部では口之津層群とよばれる堆積層が発達して、陸化が進んでいったと考えられている。70万年前には口之津層群の堆積が終了し、50万年前になると、雲仙火山が活動を開始した。半島中央に雲仙山系の山々が噴火活動によってつぎつぎと形成され、周囲に裾野を広げる現在の島原半島の姿が徐々にできあがった。

口之津層群及び雲仙火山噴出物からなる島原半島は、東西方向の断層がよく発達しており、南落ちの千々石断層と北落ちの布津断層にはさまれた半島の中央部は、雲仙地溝を形成している。また、この地溝を境に半島の北側では南落ちの断層群が、南側では北落ちの断層群が階段状にそれぞれ発達している。

島原半島の中央にそびえる雲仙普賢岳は、有史以来3回の噴火の記録がある。最も古い記録は1663年で、九十九島火口から噴煙を上げ、山腹から溶岩を流している（古焼溶岩）。次は1792年で、地獄跡火口から噴煙を上げ、山腹から溶岩を流している（新焼溶岩）。このときの噴火では、普賢岳の東に位置する眉山が崩壊を起こし、その土砂が有明海へと流れ込んで、大津波を発生させている。大津波はいったん肥後地方を襲って、その後さらに返し波となって島原地方を襲った。死者・行方不明者は1万5千人にもものぼり、「島原大変肥後迷惑」として現在に言い伝えられている。

最も新しい噴火は、1990年に始まり、翌1991年からは普賢岳山頂に粘り気の強い溶岩が溶岩ドームとなって出現し、成長と崩落を繰り返した。崩落した溶岩は火碎流となって山の斜面をかけくだって周囲を熱風で焼き尽くし、その堆積物は降雨のたびに土石流となって水無川流域や中尾川流域を埋め尽くして民家を押し流した。このときの噴火災害による死者・行方不明者は44名にも及んだ。

現在普賢岳の噴火活動は沈静化し、山頂の溶岩ドームは新たな島原半島の主峰となり、「平成新山」と名づけられて国の天然記念物に指定されている。

### (3) 日野江城跡周辺の地形と地質

日野江城跡は、島原半島の南東部に位置しており、雲仙山系から南へ延びる丘陵の先端部をその縄張りにしている。丘陵の東には大手川が、西には有馬川の支流である裏口川が流れている。現在城跡から800m程の距離にある海岸線は、海平面の下降と近世以降の新田開発によるものであり、中世期には現在よりも前進していたと考えられている。

日野江城跡周辺の地質は、淡水成層の大屋層、浅海成層である北有馬層が順に堆積し、これらが口之津層群として呼びならわされている。また、北有馬層と同時期の堆積とされる輝石安山岩の碎屑岩及び溶岩からなる南串山層が一部に見られる場合がある。口之津層群の上には、さらに雲仙火山噴出物からなる竜石層が不整合をなして堆積している。こうした堆積の標識的な状況は、日野江城跡から約2.5kmの距離にある竜石海岸の金比羅神社の露頭で観察することができる。

## 第2節 歴史的環境

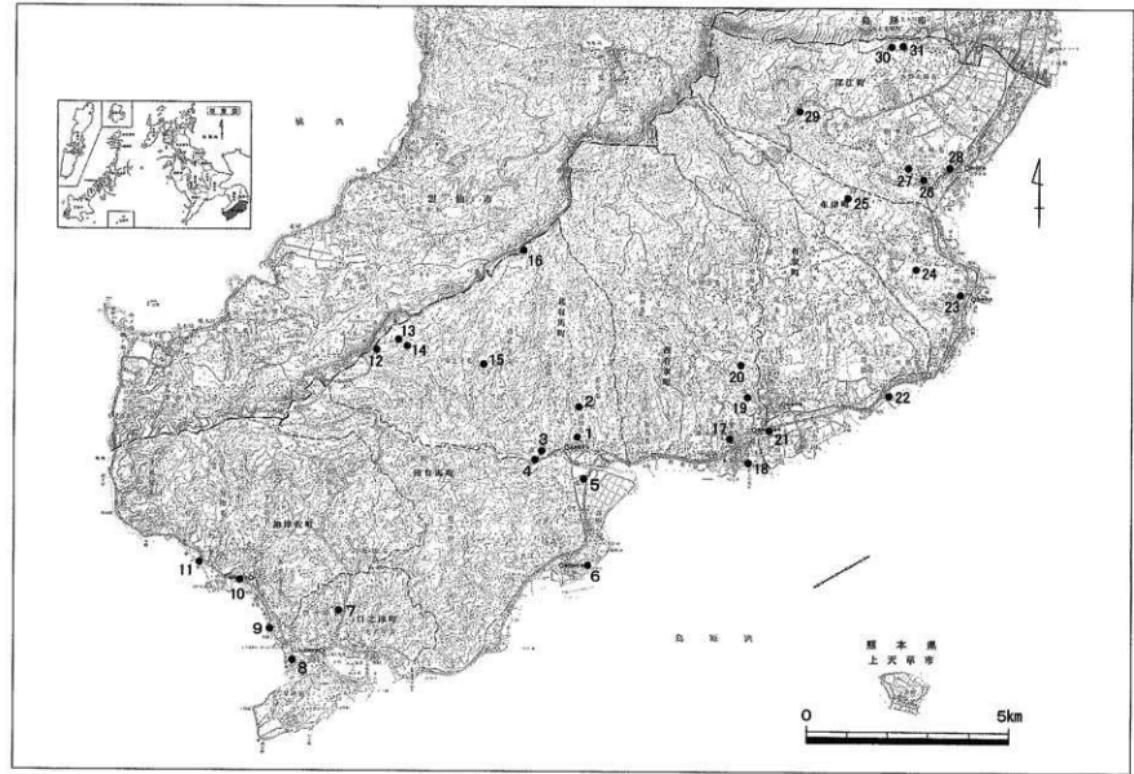
日野江城跡の所在する長崎県南島原市内には、現在約180の周知遺跡がある。ここでは、市内の主要な遺跡について日野江城跡周辺を中心に概観し、当該地域の歴史的な変遷について確認したい。

南島原市域における旧石器時代の遺跡としては、発掘調査の際にナイフ形石器と台形様石器が出土した西有馬町須川名所在の風呂川遺跡、分布調査において台形様石器が発見された北有馬町西正寺名所在の論所原遺跡がある。島原半島北部では旧石器時代の遺跡が標高200~250mの丘陵上に集中してみられるが、これらの遺跡と比較すると遺物の出土量も少なく、層によって生活の痕跡をたどることも出来ない。このほか、北有馬町今福名所在の今福遺跡では、遺跡の盛期である弥生・中世の包含層からの出土ではあるが、三稜尖頭器、ナイフ形石器、台形様石器、細石刃など40点の遺物が出土している。遺跡の調査事例が少なく様相の不明な点が多いが、日野江城跡周辺を含めた島原半島南部域における土地利用が旧石器時代に始まっていたことが伺える。

縄文時代になると、島原半島全体で遺跡数が急増する。南島原市域では、特に市北部にあたる深江から布津・有家町一帯において、緩やかな丘陵や台地上、またその縁辺部に縄文時代早期および縄文時代後期から弥生時代初頭にかけての遺跡が集中してみられる。縄文時代晩期の代表的な遺跡には、「山ノ寺式土器」の標識遺跡である深江町田中名所在の山ノ寺梶木遺跡があるが、このほか、近年発掘調査が行われた椎現脇遺跡をはじめ、上珪津遺跡、深江木場遺跡、三本松遺跡、堂崎遺跡など多数の遺跡において縄文時代晩期から突帯文期にかけての土器が出土している。市南部域では、丘陵が海岸線郊まで延びており北部域に比べて扇状地などの低地が狭い。これに起因するのか、北部域に比べ確認されている遺跡数も少ない。また、南部域では縄文時代中期から弥生時代にかけての遺跡が知られており、加津佐町水月名所在の水瀬貝塚は、阿高式・北久根山式・鍾崎式・市来式土器が出土した縄文時代中期から後期頃の遺跡である。水瀬貝塚で出土した市来式土器は南部九州系のため、有明海を挟んだ対岸との関係が注目される。このほか、縄文時代晩期の遺跡としては北有馬町坂上下名所在の原山支石墓群があり、すでに破壊された支石墓を含め、100基を超える支石墓が3群に分かれて存在していることが発掘調査において確認されている。

以上のように、縄文時代から弥生時代移行期については市北部域を中心に多数の遺跡が確認されており、この時代における歴史像が明らかにされつつある。しかし、これに続く弥生時代前期については当該期の様相がわかる遺跡や遺物の出土が少なく、前段階で盛行した遺跡群がどのように廃絶し、転換していくのか明らかにされていない。続く弥生時代中期から後期にかけては、丘陵縁辺部や海岸段丘上で再び遺跡が確認されるようになる。日野江城跡周辺では、有馬川の沖積地に南有馬町北岡名所在の金比羅遺跡が立地しており、昭和42・54年の調査において弥生時代中期の集団墓地であることが明らかとなった。また、有馬川を挟んで約1.2km北方にある今福遺跡では中期のドングリ貯蔵穴が検出されたほか、後期にあたる堅穴住居、甕棺墓群、環濠の一部も検出されており、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて大規模な集落遺跡を形成している。

古墳時代については、布津町坂下名に所在する鬼の岩屋古墳（天ヶ瀬古墳）で横穴式石室をもつ古墳時代終末期頃の円墳が確認されるが、石室は露出し開口している。現在、南島原市域で石室の形態を留める古墳は他に知られておらず、鬼の岩屋古墳についても対応する集落遺跡を含め不明な点が多い。日野江城跡周辺では、北有馬町今福名において小学校建設に伴い沼地を埋めるための土取で丘陵



第2図 南島原市内主要遺跡分布図 (S=1/120,000)

第1表 南島原市内主要遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	種別	時期
1	日野江城跡	北有馬町谷川名	城跡	中世
2	北有馬町谷川のキリシタン墓碑	北有馬町谷川名字中屋敷	キリシタン墓碑	近世
3	塚田古墳	北有馬町今福名塚田	古墳	古墳
4	今福遺跡	北有馬町今福名字今福	遺物包含地	旧石器・弥生～近世
5	金比羅記遺跡	南有馬町北岡名宮の脇茂	墳墓	弥生・奈良
6	原城跡	南有馬町	城跡	中世・近世
7	三軒家貝塚	口之津町西大屋名三軒家	貝塚・遺物包含地	弥生
8	口之津町白浜のキリシタン墓碑	口之津町町名白浜	キリシタン墓碑	近世
9	永瀬貝塚	加津佐町水月名永瀬	遺物包含地	縄文・弥生
10	加津佐町須崎のキリシタン墓碑	加津佐町水月名字須崎	キリシタン墓碑	中世
11	加津佐町砂原のキリシタン墓碑	加津佐町野田名字砂原付	キリシタン墓碑	中世
12	原山第1支石墓群	北有馬町坂上下名字原山	墳墓	縄文
13	原山第2支石墓群	北有馬町坂上下名字新田	墳墓	縄文
14	原山第3支石墓群	北有馬町坂上下名字原ノ尻河	墳墓	縄文
15	西正寺のキリシタン墓碑	北有馬町西正寺名字服田	キリシタン墓碑	近世
16	論所原遺跡	北有馬町西正寺名字茶屋谷	遺物包含地	旧石器
17	風呂川遺跡	西有家町須川名・五反田名	遺物包含地	旧石器～弥生・中世
18	吉利支丹墓碑	西有家町須川名松原	キリシタン墓碑	近世
19	有家城跡	西有家町里坊名字本丸平	城跡	中世
20	大垣城跡	西有家町恩寺名本ノ松	城跡	中世
21	有家町中須川のキリシタン墓碑	有家町中須川名	キリシタン墓碑	近世
22	堂崎遺跡	有家町石田名	遺物包含地	縄文
23	布津町キリシタン墓碑群	布津町乙	キリシタン墓碑	中世
24	三本松遺跡	布津町坂下名三本松	遺物包含地	縄文・弥生
25	鬼の岩屋古墳(天ヶ瀬古墳)	布津町坂下名西天ヶ瀬	古墳	古墳
26	深江城跡	深江町馬場名立馬場	城跡	中世
27	上畦津遺跡	深江町田中名上畦津	遺物包含地	縄文・弥生・中世
28	深江町井手口のキリシタン墓碑	深江町馬場名井手口	キリシタン墓碑	中世・近世
29	山ノ寺桶木遺跡	深江町田中名山ノ寺	遺物包含地	縄文・弥生
30	権現塚遺跡	深江町大野木場名	遺物包含地	縄文・弥生・中世・近世
31	深江木場遺跡	深江町大野木場名権ノ木坂	遺物包含地	縄文・弥生

を切り崩した際、箱式石棺墓をもつ塙田古墳が発見され、副葬品として八花双竜鏡、勾玉、管玉、鉄刀が出土している。

古代においても、調査例が少なくその様相は明らかでない。

中世から近世にかけて、再び遺跡数が増加する。その中心は、北有馬町に所在する有馬氏の居城である日野江城跡やその支城である南有馬町所在の原城跡に代表される城郭関連の遺跡と、キリシタン墓碑に代表されるキリシタン関連の遺跡である。城郭関連の遺跡については、市南部域では日野江城跡を中心に支城である原城跡、有家城跡、大垣城跡があり、市北部の深江町には中世に深江庄の地頭であった安富氏が築いた深江城の痕跡が残されている。このうち原城跡では、発掘調査において大量の貿易陶磁器類や瓦のほか、クルス、ロザリオの珠、メダイといったキリシタン遺物、銃弾や砲弾が出土している。大量の人骨も出土しており、城郭が機能していた時期の遺構や遺物に加え、島原の乱時の遺構、遺物が確認されている。城郭を除いたキリシタン関連の遺跡では、現在その所在が明らかな遺跡としてキリシタン墓碑がある。市内全体で100基余りが確認されているが、特に有家・西有馬町域に分布が集中する。このほか、キリシタンに関連するものとしては、イエズス会の教育機関であるセミナリヨやコレジオが建設されていたものと思われるが、日野江城下の発掘調査等でも現在その所在を明らかにできておらず、今後の課題である。

#### 〔参考文献〕

- 伊藤健司編 2010 「三本松遺跡・木場製鉄遺跡」 南島原市文化財調査報告書第2集 南島原市教育委員会  
高野晋司編 1981 「国指定史跡原山支石墓群環境整備事業報告書」 北有馬町教育委員会  
長崎県教育委員会編 1994 「長崎県遺跡地図」 島原市・南高来郡地区 長崎県文化財調査報告書第111集  
長崎県教育委員会  
長崎県教育庁文化財課埋蔵文化財班編 1998 「原始・古代の長崎県」 通史編 長崎県教育委員会  
本多和典編 2007 「権現脇遺跡」 南島原市文化財調査報告書第1集 南島原市教育委員会  
宮崎貴夫編 1985 「今福遺跡Ⅱ」 長崎県文化財調査報告書第77集 長崎県教育委員会

## 第Ⅱ章 調査組織と調査の経過

### 第1節 調査組織

日野江城跡の発掘調査における調査組織は、以下のとおりである。

平成7年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 城谷 東洋

調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 田中 哲雄

長崎県教育庁学芸文化課 課長補佐 田川 肇

調査担当 北有馬町教育委員会 社会教育係 木村 岳士

平成8年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 城谷 東洋

調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 田中 哲雄

長崎県教育庁学芸文化課 課長補佐 高野 晋司

調査担当 北有馬町教育委員会 社会教育係 木村 岳士

平成9年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 城谷 東洋

調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 田中 哲雄

長崎県教育庁学芸文化課 課長補佐 高野 晋司

調査担当 北有馬町教育委員会 社会教育係 木村 岳士

平成10年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 城谷 東洋

調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 田中 哲雄

長崎県教育庁学芸文化課 課長補佐 高野 晋司

調査担当 北有馬町教育委員会 社会教育係 木村 岳士

平成11年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 山本 忠喜

調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 本中 真

長崎県教育庁学芸文化課  
調査担当 北有馬町教育委員会

課長補佐 高野 晋司  
生涯学習係 木村 岳士

平成12年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 山本 忠喜  
調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 本中 真  
長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監 高野 晋司  
調査担当 北有馬町教育委員会 生涯学習係 木村 岳士

平成13年度

事業主体 北有馬町

総括 北有馬町教育委員会 教育長 山本 忠喜  
調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 本中 真  
長崎県教育庁学芸文化課 文化財指導監 田川 肇  
調査担当 北有馬町教育委員会 生涯学習係 木村 岳士

平成20年度

事業主体 南島原市

総括 南島原市教育委員会 教育長 菅 弘賢  
調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 主任調査官 板井 秀弥  
同 上 調査官 三宅 克弘  
長崎県教育庁学芸文化課 指導主事 伊藤 修一  
同 上 生文化財保護主事 中尾 篤志  
調査担当 南島原市教育委員会文化財課 主査(学芸員) 木村 岳士  
同 上 主事(学芸員) 本多 和典

平成21年度

事業主体 南島原市

総括 南島原市教育委員会 教育長 菅 弘賢  
調査指導 文化庁文化財保護部記念物課 調査官 三宅 克弘  
長崎県教育庁学芸文化課 課長補佐 古門 雅高  
同 上 主任文化財保護主事 中尾 篤志  
調査担当 南島原市教育委員会文化財課 主査(学芸員) 伊藤 健司

## 第2節 調査区の配置と調査の経過

### (1) 調査区の配置と調査の経過

日野江城跡における発掘調査は、旧北有馬町教育委員会によって平成7年度から平成14年度にかけて主に二ノ丸地区を対象として、平成20年度・平成21年度には合併後の南島原市教育委員会において本丸地区を対象として発掘調査を行っている。平成7年度から開始された日野江城跡の発掘調査の面積は、本丸地区477.3m<sup>2</sup>、二ノ丸地区1785.3m<sup>2</sup>、大手川地区99.0m<sup>2</sup>で、合計2361.6m<sup>2</sup>に達している。

旧北有馬町教育委員会における発掘調査のうち最初の2カ年は、曲輪の利用状況を確認することを調査の目的として二ノ丸地区最下段の曲輪7を中心とした調査区を設定している。調査の結果、曲輪7北部で階段遺構の検出に至ったことで、平成9年度以降はその階段遺構の補完的な調査を実施するとともに、階段遺構の延長確認と城内での通行ルート解明を目的とした調査を実施している。平成11年度には仏塔を使った階段遺構の検出に至り、曲輪6から曲輪5への進入ルートが解明されるとともに、キリシタン大名としての有馬氏の性格を特徴付ける日野江城跡を代表する遺構の検出となった。

平成12年度には、城の東端と想定される大手川右岸の状況を確認するために、二ノ丸地区から東に下りた地点の調査を実施している。ここでは石垣、石列、柱穴列の検出があり、曲輪6から検出した階段遺構との関係や大手川を利用した海上ルートとの連結などが想定されている。

合併後の南島原市教育委員会においては、それまではほとんど調査の手の及んでいなかった本丸地区の利用状況とその変遷を確認するために平成21年度に曲輪2の調査を実施している。平成21年度には、さらに本丸地区で最も広い曲輪である曲輪3の調査を実施している。調査の目的は、本丸地区外から本丸地区への進入ルートの解明と曲輪3の造成状況の確認であった。調査の結果、曲輪2では掘立柱建物跡や柱穴列、大型土坑などの検出に至り、曲輪3においては大規模な曲輪の盛土造成の様子が明らかとなっている。

なお、今回報告を行うにあたって、旧北有馬町教育委員会によって7カ年にわたって設定・調査した1区～36区の調査区（25区は欠番）が二ノ丸地区の各曲輪に散在しているため、A～Gの整理地区を設けてその地区ごとに報告を行うことにした。B地区においては、調査区名のない箇所があったため、新たにB-1・2・3区の調査区名を与えた。また、21区と22区については、整理にあたって調査区名の混乱があることが判明したため、曲輪6の方を21区、曲輪7区のほうを22区と定めた。両調査区の遺物については、今回の報告では除外している。

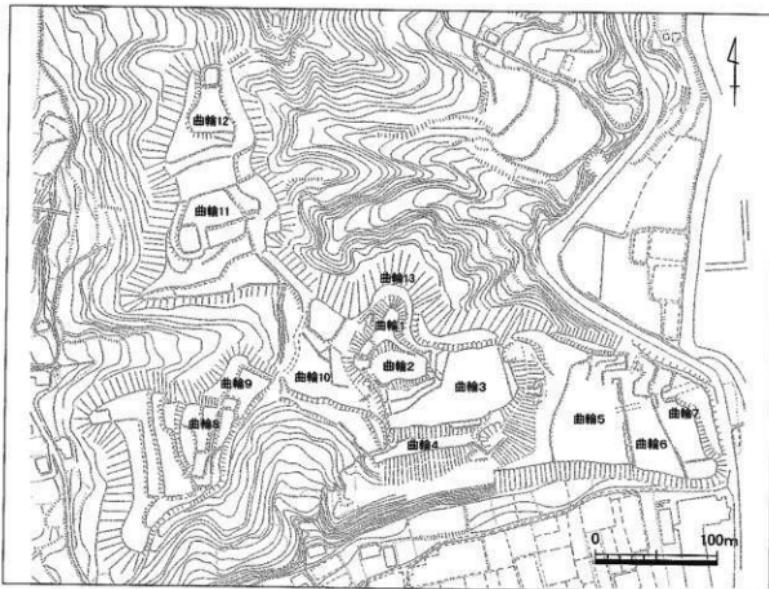
### (2) 大規模無断現状変更の経過について

平成17年旧北有馬町は、国指定の史跡である日野江城跡において文化庁長官への許可申請を行わないうま無断で現状変更を行った。無断現状変更の内容は、ショベルカーなどによって史跡範囲の28%にあたる3.2haもの広大な面積を掘削するというもので、石垣などの遺構の毀損は30箇所にも及んだ。翌年文化庁は町長と地元団体代表者を文化財保護法違反で刑事告発し、このことは大きく報道などでも取り上げられた。結果的には不起訴処分となつたが、失われた文化財は決して元に戻ることはなく、その損失はばかりしないものである。

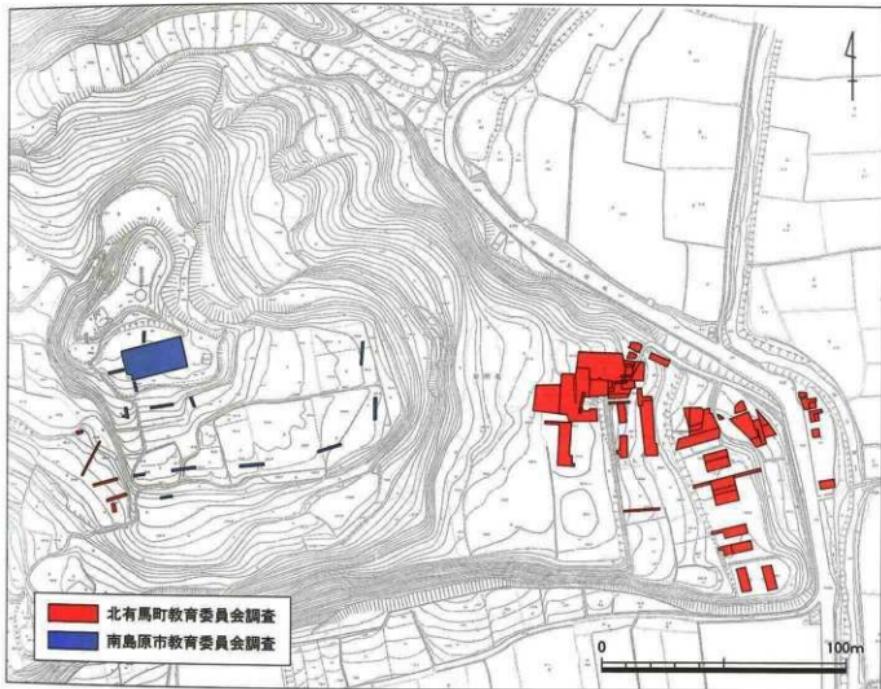
発端は、町が城跡内のササやタケを伐採して桜の苗木800本を植樹するという計画を立てたことによる。その際町は業務を地元団体に委託したが、業務の委託は口頭によってのみ行われ、しかも町か

ら地元団体へは史跡の取り扱いについてなんら説明することはなかった。結果、通常の維持・管理の範囲を超えて、史跡の現状を大規模に無断で変更してしまう事態となつた。本来、文化財を管理すべき町が、史跡の取り扱いに対する十分な説明責任を果たさず、業務を受けた地元団体も文化財に対する意識を欠如したまま作業を行つたことで史跡に対する保護が疎かになつてしまつた。

その後、毀損箇所については緊急保存措置を行い、各分野の専門家による復旧・整備のための委員会を南島原市教育委員会に設置して整備計画等の検討を行つた。また、平成19年には、毀損箇所において復旧工事を行つた。



第3図 日野江城跡曲輪配置図 (S=1/4,000) (長崎県教育委員会の作図に一部加筆)



第4図 日野江城跡調査区配置図 (S=1/2,000)



第5図 本丸地区調査区配置図 (S=1/1,000)



第6図 二ノ丸地区・大手川地区調査区配置図 (S=1/1,000)



第7図 二ノ丸地区・大手川地区造構配置図 (S=1/500)

第2表 日野江城跡発掘調査履歴

調査年度	調査区	調査箇所	面積 (m <sup>2</sup> )	整理地区	調査主体	備考
平成7 (1995)	1区	二ノ丸地区曲輪7	40.0	E地区	北有馬町教育委員会	
	2区	二ノ丸地区曲輪7	40.0	E地区		
	3区	二ノ丸地区曲輪7	45.6	E地区		
	4区	二ノ丸地区曲輪7	17.2	E地区		
	5区	二ノ丸地区曲輪7	40.0	F地区		
	6区	二ノ丸地区曲輪7	40.0	F地区		
	7区	二ノ丸地区曲輪7	25.0	G地区		
	8-1区	二ノ丸地区曲輪7	40.0	E地区		
	8-2区	二ノ丸地区曲輪7	11.3	E地区		
	8-3区	二ノ丸地区曲輪7	7.0	E地区		
平成8 (1996)	9区	二ノ丸地区曲輪7	32.0	E地区	北有馬町教育委員会	
	10区	二ノ丸地区曲輪7	29.0	E地区		
	11区	二ノ丸地区曲輪7	7.4	G地区		
	12区	二ノ丸地区曲輪6	22.0	C地区		
	13区	二ノ丸地区曲輪7	90.0	D地区		
	14-1区	二ノ丸地区曲輪6	30.4	B地区		
	14-2区	二ノ丸地区曲輪6	35.0	B地区		
	14-3区	二ノ丸地区曲輪6	18.5	B地区		
	15-1区	二ノ丸地区曲輪7	10.5	G地区		
	15-2区	二ノ丸地区曲輪7	50.3	G地区		
平成9 (1997)	15-3区	二ノ丸地区曲輪7	14.2	G地区	北有馬町教育委員会	
	16区	二ノ丸地区曲輪7	15.5	E地区		
	17区	二ノ丸地区曲輪7	33.5	D地区		
	18区	二ノ丸地区曲輪7	4.8	G地区		
	19区	二ノ丸地区曲輪6	118.3	C地区		
	20区	二ノ丸地区曲輪7	12.5	D地区		
	21区	二ノ丸地区曲輪6	29.0	C地区		
	22区	二ノ丸地区曲輪7	18.1	G地区		25区は欠番
	23区	二ノ丸地区曲輪6	5.4	C地区		
	24区	二ノ丸地区曲輪6	10.2	C地区		
平成10 (1998)	26区	二ノ丸地区曲輪5	98.2	A地区	北有馬町教育委員会	
	27区	二ノ丸地区曲輪6	55.0	D地区		
	28区	二ノ丸地区曲輪5	212.0	A地区		
	29区	二ノ丸地区曲輪5	131.2	A地区		
	30区	二ノ丸地区曲輪5	48.0	B地区		
	31区	二ノ丸地区曲輪6	24.0	C地区		
	32区	二ノ丸地区曲輪7	17.5	D地区		
	33-1区	二ノ丸地区曲輪5	180.0	B地区		
	33-2区	二ノ丸地区曲輪5	7.3	B地区		
	33-3区	二ノ丸地区曲輪5	2.4	B地区		
平成11 (1999)	33-4区	二ノ丸地区曲輪5	4.8	B地区	北有馬町教育委員会	
	33-5区	二ノ丸地区曲輪5	11.2	B地区		
	33-6区	二ノ丸地区曲輪5	8.1	B地区		
	33-7区	二ノ丸地区曲輪5	13.2	B地区		
	B-1区	二ノ丸地区曲輪6	26.6	B地区		
	B-2区	二ノ丸地区曲輪6	9.0	B地区		
	B-3区	二ノ丸地区曲輪6	4.0	B地区		
	1区		37.5			
	2区		23.0			
	3区		10.5			
平成12 (2000)	4区		7.0		北有馬町教育委員会	
	5区		21.0			
	34区	二ノ丸地区曲輪5	12.1	B地区		
	35区	二ノ丸地区曲輪5	7.5	B地区		北有馬町教育委員会
	36区	二ノ丸地区曲輪6	20.5	B地区		
平成13 (2001)	37区		16.0		北有馬町教育委員会	
	38区		11.5			
	39区		8.0			
	40区		4.8			
	41区		6.0			
平成20 (2008)	H20調査区		332.5		南島原市教育委員会	
	トレンチ1		5.0			
	トレンチ2		7.5			
平成21 (2009)	トレンチ3		4.5			
	トレンチ1-1		5.0		南島原市教育委員会	
	トレンチ1-2		1.5			
	トレンチ2		10.0			
	トレンチ3		5.0			
	トレンチ4		5.0			
	トレンチ5		10.0			
	トレンチ6		5.0			
	トレンチ7		10.0			
	トレンチ8		10.0			
	トレンチ9		10.0			
	トレンチ10		10.0			

## 第III章 調査の成果

### 第1節 地形調査

#### 調査の概要

一般的に遺跡の内容を把握するためには発掘調査を要することが旨である。ただ、城跡や古墳など地表に顕在化する構造物としての性格を持つものについては、踏査や地表観察が事前調査として非常に有効である点は広く知られているところである。とりわけ、非破壊的手法によって遺跡の情報を収集できる点に最大の有効性がある(註1)。特に日野江城跡のように広大な城跡においては、こうした作業を丹念に行い、全体構造を可能な限り把握することが極めて重要である。今回の調査はそのような観点から実施したものであり、今後実施する発掘調査や整備などの作業計画の一助とすることを目的とした。

基本的な手法としては、城が平面と立面の連続から成る構造物であるという特徴に基づいて全体的な把握を試みた。曲輪などの平坦面であれば形状や規模の把握に主眼を置き、勾配の状況についても若干の点検を行った。また近現代の畑化による水路跡や説明板などの設置物についても、現況の情報としてなるべく提示することとした。立面に関しては、石垣・石積み・自然面の別、高さなどの確認を行っている。なお城に伴う構造物としての「石垣」と確実に呼べそうなものは、今のところ二ノ丸地区で見られるものに限られ、それ以外は今回報告において「石積み」と表記した。また、これらに用いられる石材は、文中特に断らない場合、玄武岩や雲仙山系起源の安山岩質のものが主である。

調査対象地区的区分・呼称については、日野江城跡において用いられている曲輪番号を基本とし(第9図)、説明の必要に応じて曲輪のなかでの細分番号を設けた。このほか調査の対象とした範囲は第8図のとおりである。全体的な評価を予め述べるとすれば、これまでも指摘されている事ではあるが、丘陵や谷部といった自然地形を巧みに活かしつつも、部分的にはかなり大規模に地形の改変を加えて築かれた城という事になるであろう。以下、曲輪番号を基本に記述を進め、関連の深い周辺状況は併せて説明していく。その他の地区については後半部分で述べる。

#### 調査成果

##### 曲輪1 (第10図、写真1・2)

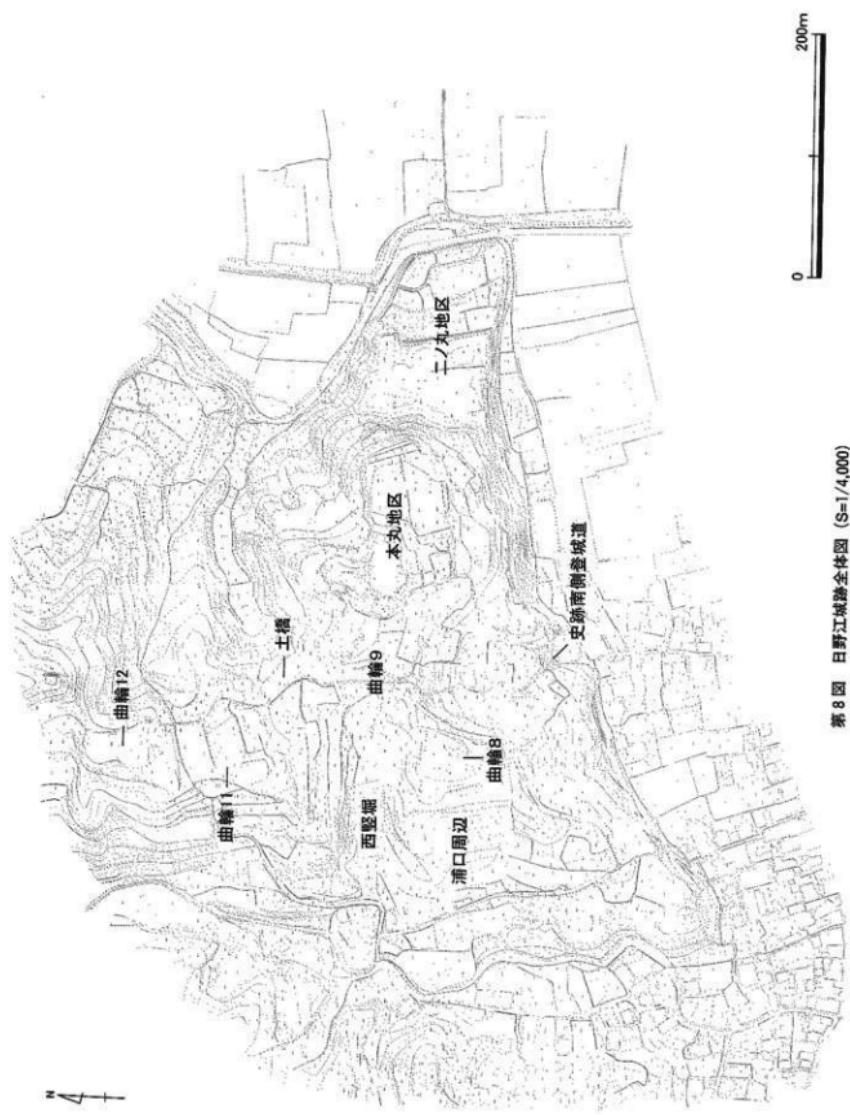
本丸に区分される曲輪であり、史跡のおよそ中央付近、やや東寄りに位置する。標高は78m前後域であり、周囲に対して最も高い位置にある。北東から南西にかけて長軸を持ち、距離は約45mを測る。長軸に対する幅は北東側で広く約12m、中央付近で幅を減じ、南西側では6m程となる。

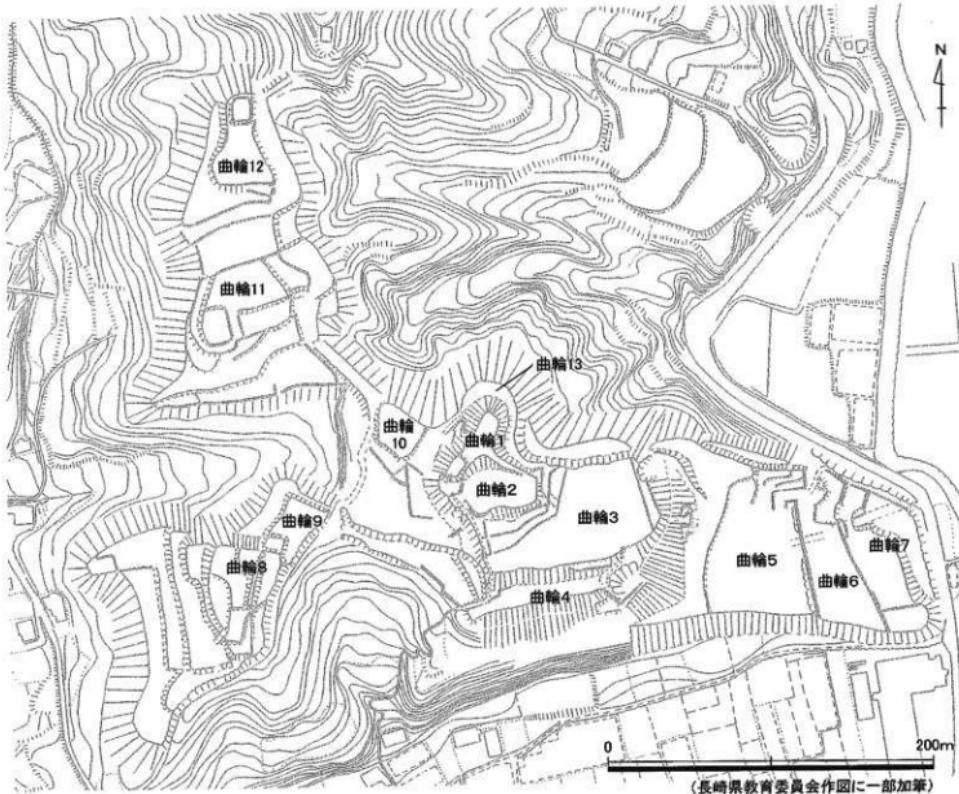
南側の曲輪2へ繋がる斜面は比高差約5mを測る。畠化の影響で部分的に段状となっており、小規模な石積みもみられるが、元来は曲輪2の造成に伴って斜面が抉り取られたものと考えられる。斜面の南北両側には曲輪2へと下る細いスロープ状の通路がある。このほか平場部分には説明板や顕彰碑、地元で祀られている日野江神社の祠など構造物が多くみられる。

##### 曲輪2 (第11図、写真3~6)

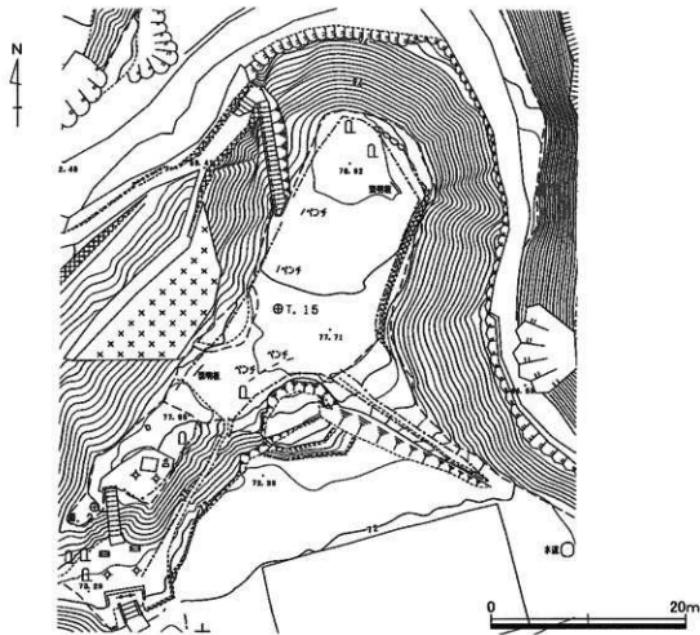
本丸に区分される略五角形の曲輪である。東西方向に長軸を持ち、約46mを測る。短軸はやや西寄

第8図 日野江城跡全体図 (S=1/4,000)





第9図 日野江城跡縄張図 (S=1/3,000)



第10図 曲輪1平面図 (S=1/500)



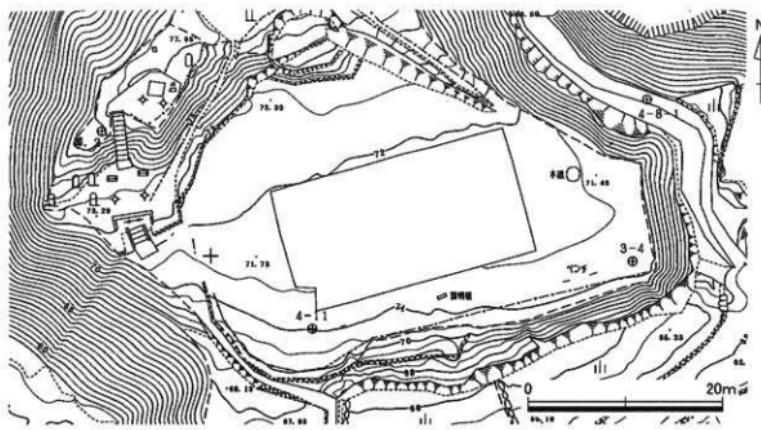
写真1 曲輪1平場（南西より）



写真2 日野江神社の建立物

りの最も長くなる部分で28m程度となる。標高は72m前後域である。北から南にかけて緩やかな勾配を持ち、南側の方がやや低くなる。

南側崖面は最大で5m程の高さを持つ。崖面は西寄りの一部において、中位付近が段状となっており、小規模な石積みを伴う。石積みの高さは最大で1mほどであり、主に30~40cm大の亜角礫を積み上げたものである。畑化の影響によるものか。構造物として、史跡の説明板が設置されている。曲輪から北西に外れた付近では、日野江神社関連の鳥居、狛犬、石碑および曲輪1へ上の石段などが設置されている。



第11図 曲輪2平面図 (S=1/500)



写真3 曲輪2平場（東より）



写真4 曲輪2南側の法面



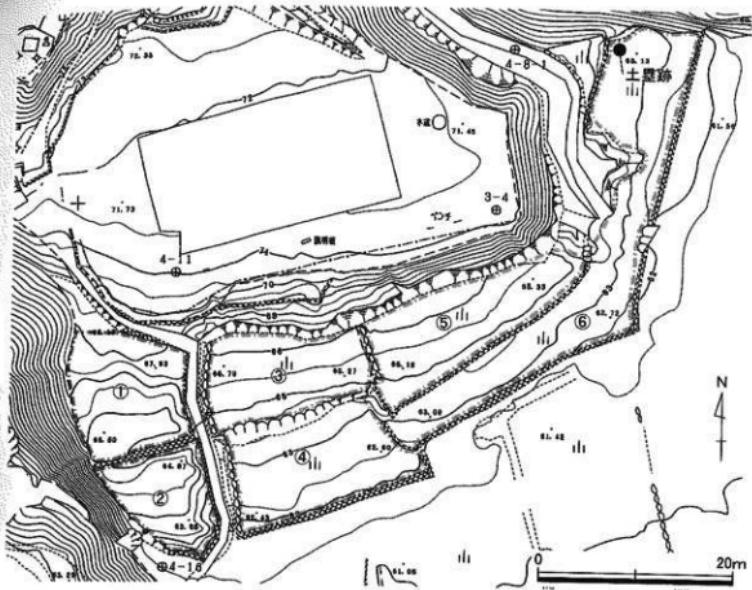
写真5 日野江神社関係の構造物群



写真6 曲輪2より原城跡方面の眺望

#### 曲輪2下 (第12図、写真7~10)

曲輪2と曲輪3の間にみられる段状の箇所を曲輪2下として扱った。便宜的に6の小区画に細分している(第12図)。曲輪2下-①・②と曲輪2下-③・④の間が狭い通路状になっており、曲輪2と曲輪3を結んでいる。平坦面は何れも狭小であり、勾配が強い傾向にある。曲輪2下-③を除いては概ね30~40cm大の亞角礫による低い石積みを伴うが、畑利用の影響と考えられる。ただし、曲輪2下-



第12図 曲輪2下平面図および細分図 (S=1/500)



写真7 曲輪2下全景（南東より）



写真8 曲輪2下-⑤石積み（南より）



写真9 曲輪2下-⑥石積み（南より）

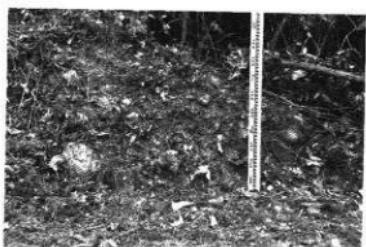


写真10 曲輪2下-⑥土壠跡

⑤および曲輪2下-⑥の石積みの一部では、使用される石材の規模に異なる傾向が見られたので、以下に述べておく。

曲輪2下-⑤の石積みは高さ1.2mほどであるが、石積みの西端を起点として約2~9m地点（7m分）では、石積みの下位2/3程に70~100cm大の大型の石材がみられる（写真8）。

曲輪2下-⑥の石積みは、おおよそ南側と東側に面を持つ。南面の石積みの高さは中央付近で1.3m程である。南面の西端を起点として、約13~19m地点（約6m分）の下位2/3程に50~70cm大のやや大振りな石材が用いられている（写真9）。

その他の状況として、曲輪2下-⑥の北端において土壘の痕跡らしきものが見られる（写真10）。

### 曲輪3（第6図、写真11~14）

本丸に区分される曲輪のうち最も広大な曲輪である。平面はおよそ「L」字を倒した様な形態を呈する。東西方向に長軸を持ち、約107mを測る。短軸は曲輪の東半で見た際に60m程である。曲輪の標高は概ね59~61.5m程であり、南側および東側に向かって低くなる。特に、東側の縁辺付近において勾配が強くなる傾向にある。平成21年度実施の確認調査で近辺に設定したトレーンチでは、硬化粘土のブロックよりも分厚い堆積を確認している。平場の造成に伴うとみられるものであるが、同層には間隙が多くみられ、これが徐々に沈下することで、地表での傾斜となって顕在化しているのではないかと考えられる（95頁参照）。

曲輪南側縁辺の中ほどでは「横矢掛かり」風に張り出した箇所が認められる（写真12）。平面形は偏平な台形状であり、上端における基部幅は約14m、先端の幅は約11m、奥行は2m強である。東側下方に対して約2m、南側下方に対して約5mの比高差がある。周囲の法面には石積みの痕跡らしきものが僅かに見られるが、現況では概ね自然面である。ただし、東側の基部にあたる付近では崩落も見られることから、本来東側と一連であった可能性もある。なお平成21年度の確認調査においては周辺のトレーンチで溝状造構を検出している。北西から南東方向のものであり、曲輪の内部側が切り立つ構造である。初期大手道との説もある曲輪の南西側に面しており、関連性の有無を含めて、慎重に点検していく必要があるだろう（86・91頁参照）。

曲輪の周縁には部分的に石積みがみられる。曲輪南縁の中央付近にみられる石積みは高さが1.0~1.5mほどであり、東側が低く西側が高い（写真13）。石材規模は主に30~40cm大の亜角礫であるが、天端部分には10~20cm大の小振りなものが用いられている。曲輪東縁の北側では高さ約0.8~0.9mの



写真11 曲輪3平場（東より）



写真12 曲輪3横矢掛かり風張り出し（西より）

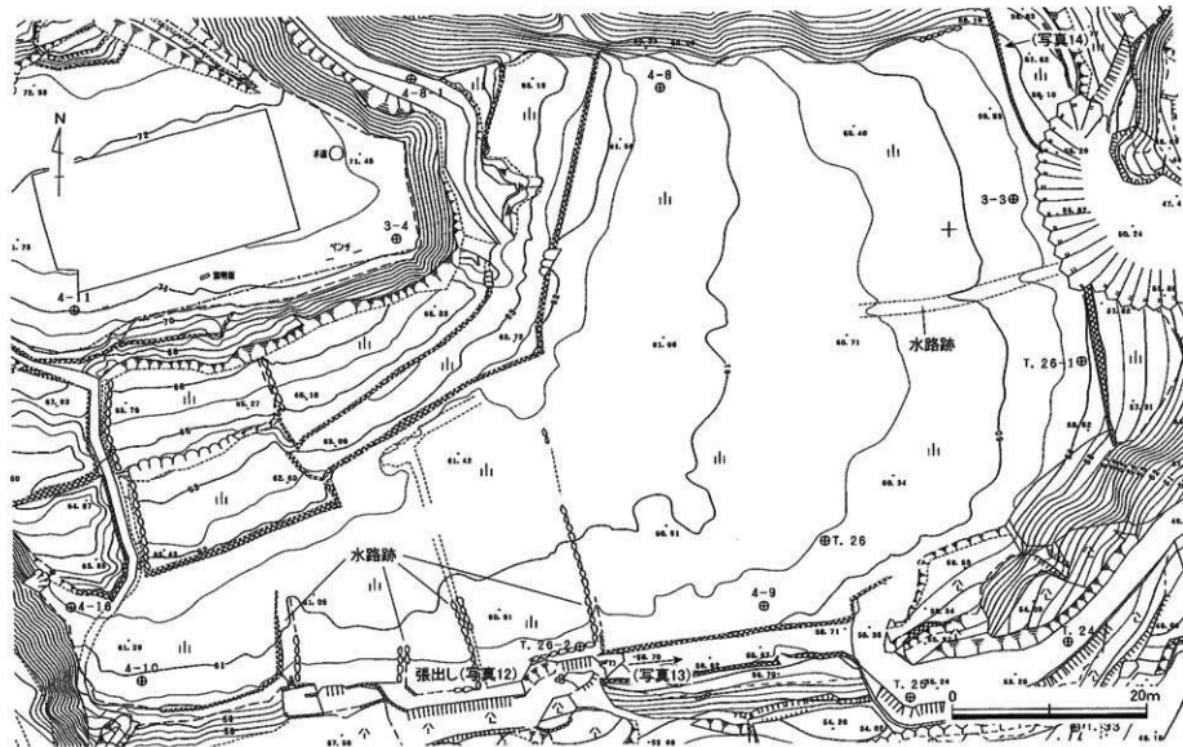
1

7 m

星の  
金

三

一〇



第13図 曲輪 3平面図 (S=1/500)



写真13 曲輪3南線の石積み



写真14 曲輪3東線の石積み

石積みが見られ（写真14）、石材規模としては、下部に60～70cmの大振りなものが用いられている。そのほか平場においては、近現代の畑化に伴うと考えられる排水路跡が5条ほど確認できる。

#### 曲輪4（第14図、写真15～20）

曲輪3の南側に取りつく比較的小規模な平坦面の集合を曲輪4としている。大まかな区分としては本丸に含めている。説明の都合により5つの区画に細分した（第14図）。曲輪4-③は曖昧な形で一括りとしたが、今後はさらに精査が必要である。全体的にみると東西に長く、140m程の延長がある。南北幅は広い部分で30m程度である。平坦面はいずれも傾斜が強い傾向にあり、南側または南東側に向かって低くなる。曲輪4-④や曲輪4-⑤が最も勾配が強く、15%程の勾配となっている。各平坦面の周縁で石積みが散見される。全体的には小振りな砾を用いた低い積み上げが多いが、曲輪4-②東



写真15 曲輪4-①・②方面（東より）



写真16 曲輪4-⑤（西より）



写真17 曲輪4-②南側石積み（南より）



写真18 曲輪4-④北面の露頭（南より）

第14図 曲輪4平面図および細分図 (S=1/600)

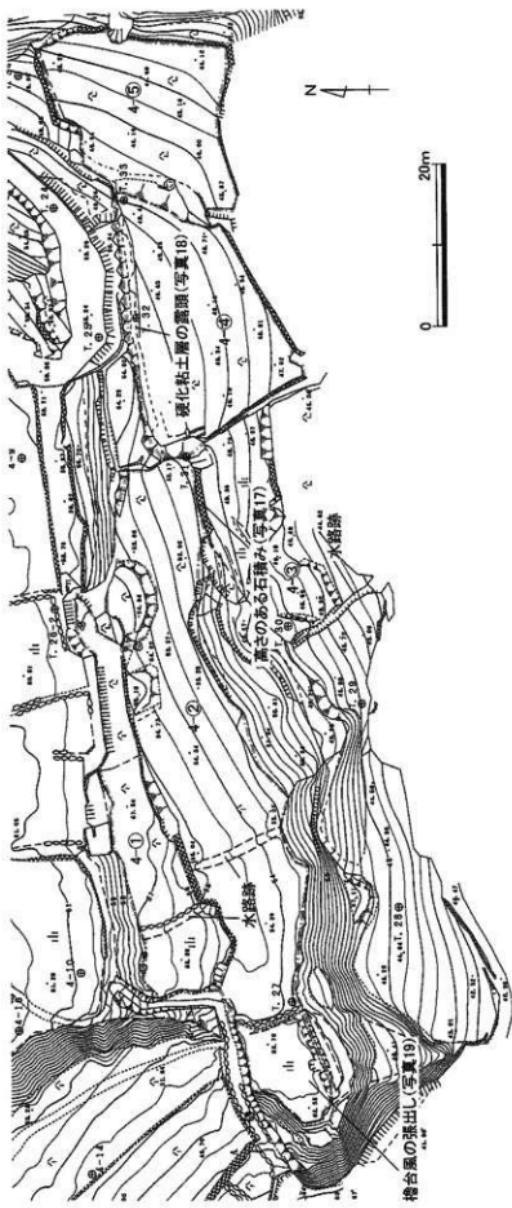




写真19 曲輪4-②西側の張り出し (樁台)



写真20 曲輪4-②素掘り水路跡 (北より)

側の南縁でみられる石積みは2.5m程の高さがあり、20~30cm程度の疊と50~70cm程度のやや大振りな疊が混在している状況である（写真17）。また曲輪4-④の北に面した露頭では、硬化粘土層の分厚い堆積と、その葉理状況が観察される（写真18）。曲輪4-②の西端には南北約10m×東西約13mの突き出した小区画がみられるが、特に西側下方との比高差は10m以上に及んでおり、樁台として利用された可能性が想定されている箇所である（写真19）。このほか畑化に伴うとみられる排水路跡が散見され（写真20）、石組を伴うものと素掘りのものがある。

#### 曲輪5（第15・16図、写真21~28）

二ノ丸に区分される曲輪である。大きく分けて3段（曲輪5~7）で構成される二ノ丸のうち、西侧最上段に位置する。曲輪の西側に一段高くなった小区画があるため、これを曲輪5-②として区分し、残りの主要な平場部分を曲輪5-①とした（第15図）。

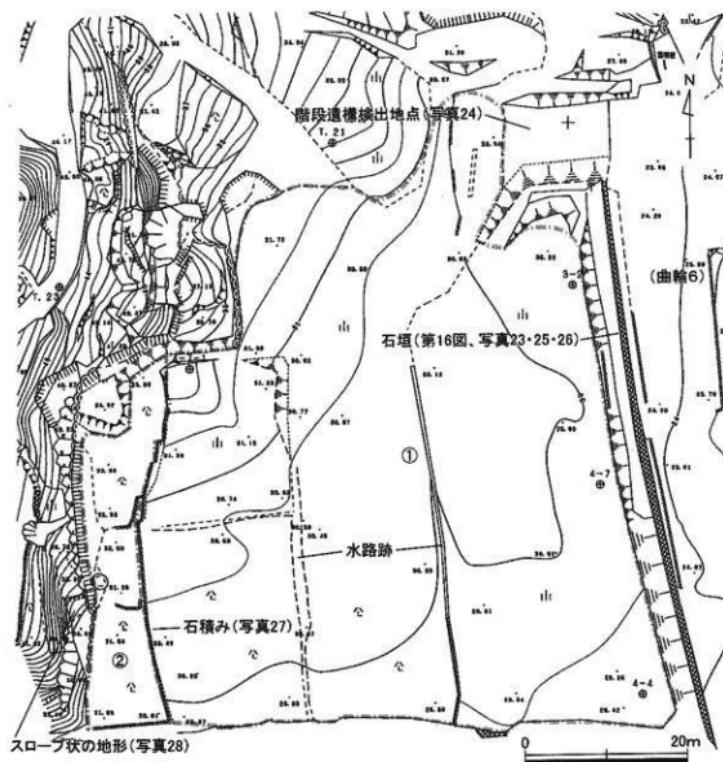
曲輪5-①の平面規模は南北約70m、東西約60mを測る。標高は30m前後域であり、南東側に向かって緩やかに低くなる。畑化によると考えられる南北方向の水路跡が2条みられる。曲輪5-①東側には南北延長が約70m、高さ約3mの乱積みによる石垣がある（第16図、写真25）。石垣の天端部分は2m近い高さの土羽となっているため、立面全体の高さとしては5m程に及ぶ。石垣の下端部分のうち、北寄りの2/3程の範囲は幅1m前後の段状となっている。石垣の築石には自然石が用いられており、玄武岩質で70~120cm大と大型のものが多い。築石の隙間からは栗石の充填を確認することができる（写真23）。また石垣下端部分の一部において、一辺25cm程の方形の石材を確認した（写真26）。表面には「ほぞ」と考えられる半球状の突起がみられた（註2）。石垣の北端部分においては、後述の



写真21 曲輪5-① (北西より)



写真22 曲輪5-①より雲仙方面の谷合を望む



第15図 曲輪5 平面図および細分図 (S=1/600)



写真23 粟石の充填状況



写真24 階段造構検出地点

L=30.0m



(階段造様)

L=30.0m

第16図 曲輪5-①東側石垣立面図 (S=1/400)

0 20m

- 28 -



写真25 曲輪5-①東側石垣（北東より）



写真26 石垣内に見られる石柱



写真27 曲輪5-②東側の石積み



写真28 曲輪5-②西側の法面に見られるスロープ状地形

曲輪6へと繋がる階段遺構が発掘調査によって確認されているが、現在は遺構保護の為に埋め戻している（写真24）。

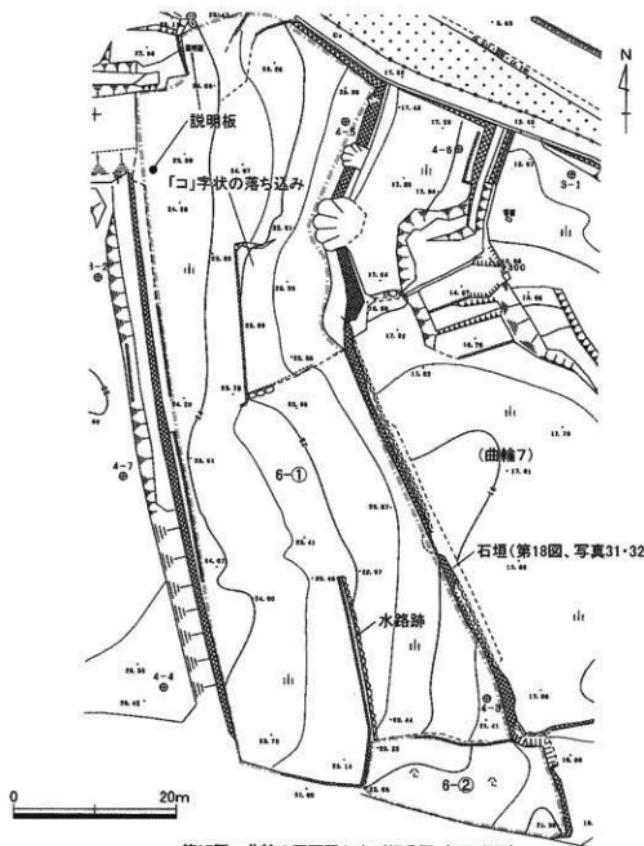
曲輪5-②は平面規模が南北約40m、東西が10m弱の区画である。東側の石積みを介し、曲輪5-①より1mほど高くなっている（写真27）。石積みの礫は40~50cm大のものが主であるが、天端部分には拳大ほどの小礫が用いられている。曲輪5-②と曲輪4-⑤との間に介在する露頭は、曲輪4でも述べたような硬化粘土の葉理状況が観察されるものである。この露頭の一部にはスロープ状の地形がみられるが（写真28）、人為的なものであるのか単なる自然地形であるのか、今一つ判然としない。

#### 曲輪6（第17・18図、写真29~32）

二ノ丸の中段に位置する曲輪である。南北約100m、東西は30m前後である。南東隅の一段高い区画を曲輪6-③とし、その他の広範な部分を曲輪6-①とした（第17図）。曲輪6-①の勾配は上段の曲輪5-①に比べるとやや強い傾向にあり、約7%の勾配で東側に向けて低くなる。平場の中ほどには小規模な石積みを伴い「コ」字状に落ち込む部分が見られる。過去の調査で階段遺構の一部が検出されている付近であり、南辺をなす石積みは階段遺構の袖積みである。西縁をなす石積みの南北延長は約19mであり、高さは約0.7mである。50cm大前後の割り石が用いられている（写真30）。平場の南側においては、南北延長20m程の石組を伴う排水路跡がみられる。排水路の西面がやや高く約0.4m、東側は約0.2mとなっている。

曲輪6-①の東縁においては、総延長約85mの石垣が見られ、北側がやや東へ折れている（第17・18図、写真31）。北寄りの約30m分については近現代に構築されたもの、または元來の石垣に被せる形で築かれたものと考えられる箇所がある（写真32）。南寄りの約55m分についてであるが、立面全体の高さをみると北側から中央付近は5m弱程度である。南側に向けて徐々に低くなり、南端付近では3.5m程の高さとなっている。ただし南端部を除く大部分においては、盛り上がった硬化粘土層上に石垣が築かれており、石垣部分と硬化粘土層の高さは概ね同程度となっている。東側へと下る舌状に石垣が築かれており、石垣部分と硬化粘土層の高さは概ね同程度となっている。なお石垣の特徴は曲輪5のものと丘陵を直角にカットし、この上に石垣を築いたものと考えられる。なお石垣の特徴は曲輪5のものと類似しており、玄武岩質の自然石を主とする乱積みである。石材規模は50~100cm大のものが多く、やはり築石の間隙からは栗石の充填を確認することができる。

曲輪6-②については、南北10m×東西25mほどの小区画である。平坦面部分は荒蕪化が著しく詳細確認は行っていない。北の曲輪6-①側に対して、最大で0.6m程度高くなっている。境には小礫の



第17図 曲輪6平面図および細分図 (S=1/600)



写真29 曲輪6全景（北より）



写真30 曲輪6に見られる割石積み

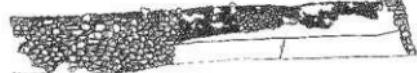
L=25.0m



L=25.0m

L=25.0m

L=25.0m



第18図 曲輪6-①東側石垣立面図 (S=1/400)

- 31 -



写真31 曲輪6-①東側石垣



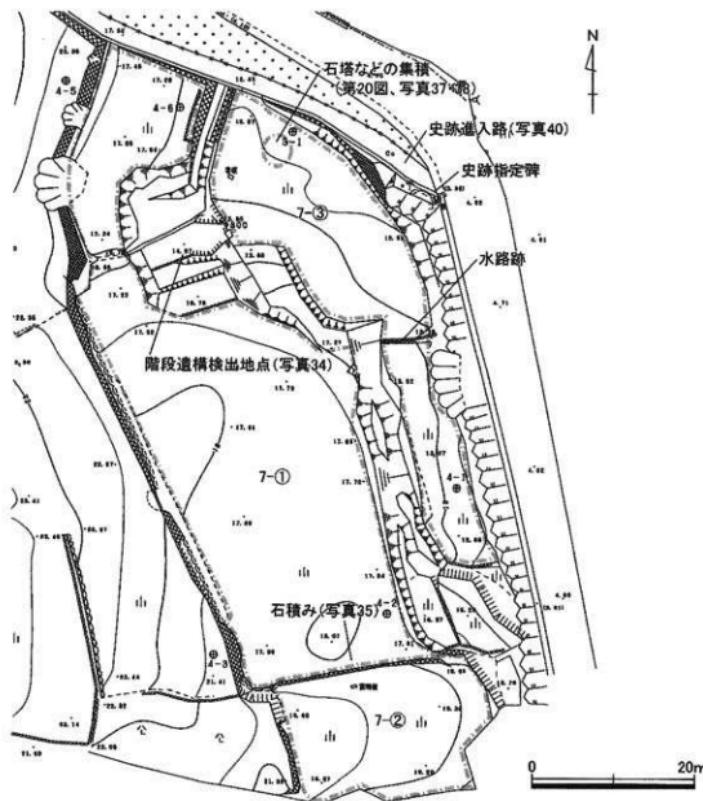
写真32 曲輪6-①東側石垣張り出し部分

石積みがみられる。曲輪内の設置物としては、階段遺構検出地点の周辺に説明板が2基ある。

#### 曲輪7（第19・20図、写真33～40）

二ノ丸地区の東側最下段の曲輪である。史跡全体で見た場合でも最も東側に位置する。現地の状況から3つの区画に細分した。西寄りの最も広い部分を曲輪7-①とし、その南側で一段高くなった小区画を曲輪7-②とした。また、曲輪7-①から東側に一段下がった範囲を曲輪7-③として扱った（第19図）。説明の都合により3つの区画に分けたが、いわゆる曲輪としての主要部分は7-①であり、7-②および7-③については、その付帯的な部分と考えられるものである。

曲輪7-①は南北幅が約80m、東西幅は20～25mほどである。北側が上段の曲輪6と連動する恰好



第19図 曲輪7平面図および細分図 (S=1/600)

状況  
た小  
った  
なり、  
恰好



写真33 曲輪7（北西より）



写真34 曲輪7階段遺構検出地点



写真35 曲輪7-②北面の石積み（北より）



写真36 曲輪7-③（北より）



写真37 曲輪7-③石塔類を含む石の集積



写真38 曲輪7-③石塔



第20図 曲輪7の石塔拓本 (S=1/10)

で東へ折れる。平坦面の傾斜は僅かであり、標高域は17m後半台である。北半部分では発掘調査によって、階段遺構が検出されている（写真34）。保護のため埋め戻してあるが、袖石の一部が地表に現れている。階段遺構の幅は約7mであるが、南北両側が段状に落ちており、全体として南北幅約13mの落ち込みとして見られる。上端と下端の比高差は4m強である。また、階段遺構の軸方向は先に述べた曲輪6-①東側の石垣と概ね直交する関係にあることが見てとれる。階段遺構検出地点より北側でみられる石垣については、近現代に築造されたと考えられるものである。

曲輪7-②は南北約15m、東西約25mの小区画である。過去の調査等により物見台としての機能が想定されている箇所である。北側の石積みを介して曲輪7-①よりも約1.5m高くなっている。石積みは玄武岩または安山岩の亜角礫によるもので、10~30cm大の小振りなものが多い。石の隙間があまり目立たず、これまでに述べた石積みに比べると、やや丁寧に積まれた印象がある（写真35）。北縁の中ほどに説明板が1基設置されている。

曲輪7-③の平坦面部分は南北幅が65mほどである。東西は北側で15m前後、南側はやや狭く7mほどである（写真36）。標高域は13m前後であり、曲輪7-①との比高差は4mほどある。曲輪7-①との間の法面は所々で狭いテラス状の段がみられるが、基本的に自然面である。南端付近に限っては畑化の影響が認められる。曲輪7-①との関係性をみると、やや幅狭である点、階段を介在して4m程の比高差があることから、曲輪7-①に付帯する腰曲輪のような位置付けが適当か。東側は自然面の法面を介して道路と接しており、比高差は8m程度である。このほか中央付近には東西方向の規模な石組排水路の跡がみられる。先に述べた階段遺構を降りた付近には、1mを超える大型のものを含む石が集積されており、中には仏教系の石塔も見られる（写真37・38、第20図）。また、側には説明板が1基設置されている。

周囲の現況についても簡単に触れておきたい。曲輪7-③を東へ降りた道路のすぐ東には大手川が流れているが、道路と川の間に駐車利用されている小区画があり、二ノ丸側からの史跡進入路の起点となっている。構造物として史跡説明板などが設置されている（写真39）。史跡への進入路は、歩行者が通行できる程度のスロープ状の舗装路であり、曲輪6および曲輪7の北側に接続する。入口付近には史跡指定の石碑などが設置されている（写真40）。



写真39 大手川沿いの駐車スペース



写真40 ニノ丸方面への史跡進入路

#### 曲輪8・9周辺（第21図、写真41～43）

三ノ丸と考えられている箇所である。荒廃化が著しく、今回調査では詳しく見る事が出来なかつたため概述に留めたい。史跡の中央よりやや西側に位置し、平場部分の標高域は曲輪8が38m前後、曲

輪9が約35mである。平面規模は曲輪8が南北約65m×東西約40m、曲輪9が南北約25m×東西約40mであり、それぞれ三角形に近い形状を呈する。曲輪8においては、土壘状の盛土がこれまでに確認されている。

曲輪8南側の史跡進入路沿いには、「尾藤碑」が建てられている（写真42・43）。寛永十五年（1638）二月二十七日、島原天草一揆における幕府軍の第三回原城総攻撃において、細川家番頭として出陣した尾藤金佐衛門が投石で負傷を負い、絶命の際に名号を自然石に刻んだとの言い伝えがある。写真のものは、金佐衛門の墓石に相当すると考えられ、本人が名号を刻んだと伝えられるものではない。石碑前面の頂部付近には円が描かれており、碑文は3行構成で右のとおり記されている。

中列に記されたものは、おそらく金佐衛門の戒名であり、寛永拾五および二月二十七日は命日を指しているであろう。しかし、この碑がいつ頃に建てられたものかは正確に判らない。

○  
為即霊良心禪定門  
岩寛永拾五白 施主  
二月二十七日 敬白



第21図 曲輪8・9周辺図 (S=1/2,500)



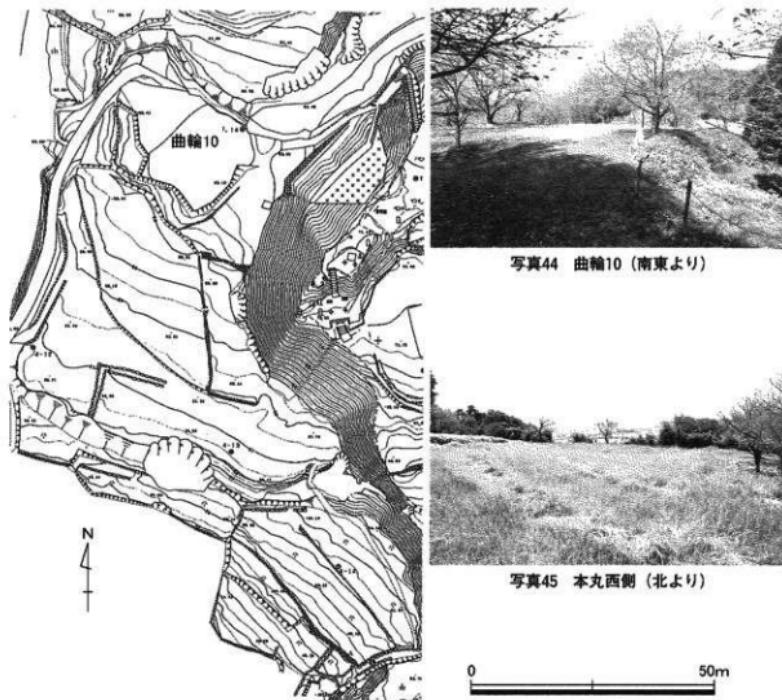
写真42 尾藤碑①



写真43 尾藤碑②

#### 曲輪10および本丸西側（第22図、写真44・45）

本丸の北西側に位置する曲輪である。平面は北西—南東方向が約30m、北東—南西方向が約20mであり、標高は63mほどである。周囲は自然面の法面で、南西側下方の平場とは3m程の比高差がある。また、曲輪の北側は谷地形となっている。平場の東縁付近に説明板が設置されている。平場の東側に取り付くスロープ状の通路と石段を介して、前述の曲輪1へと上ることができる。



第22図 曲輪10および本丸西側平面図 (S=1/1,000)

曲輪10の南側に広がる一帯は、便宜的に「本丸西側」と呼ぶこととした。畠地利用された時期の影響が大きいようであり、小振り亞角砾の低い石積み、石組の排水路跡などが見られる。平坦面はやや強めに傾斜しており、南西側に向かって低くなる。

#### 曲輪11および南側（第23図、写真46～51）

曲輪11は日野江城跡の史跡範囲において、北側の頂点付近に位置する。台形の右下を切り取ったような形状であり、南北軸は約45m、東西軸は約60mである。平場部分の標高は約70mであるが、荒蕪化により今回詳しく見る事ができなかった。曲輪の北側に面する石積みは高さ1.2～1.5m程であり、中央付近では1mを超える大型の石材が見られ、鏡石風の様相を呈している（写真46）。石積みの天端部分は畠化の影響で改変を受けているようである。

曲輪11南側の一帯は畠化の影響により、狭い区画が段状に連なる地形である。点検した石積みの規模等について簡単に示しておく。（第23図、写真47～51）

石積a…高さ約3.2m。下端近くに1m前後の大型の石がみられる。天端近くの石は小さい。

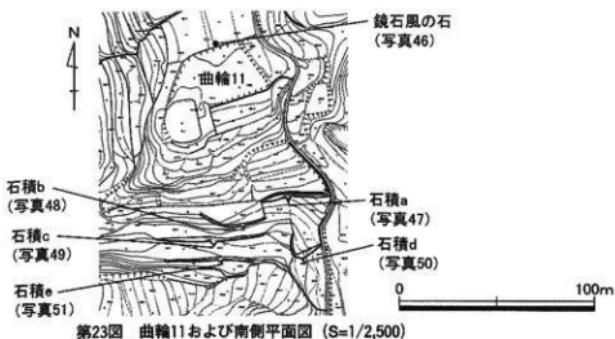


写真46 曲輪11北面の石積み



写真47 曲輪11南・石積a



写真48 曲輪11南・石積b



写真49 曲輪11南・石積c



写真50 曲輪11南・石積d (西より)

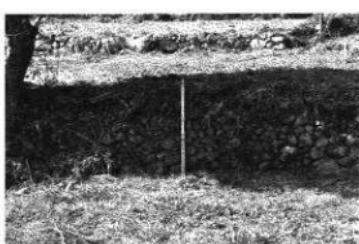


写真51 曲輪11南・石積e

石積b…高さ約2.0m。他の状況は石積aに準ずる。

石積c…高さ約1.0m。他の状況は石積aに準ずる。

石積d…隅部分で徐々に高くなり、約2.0m。石は大きいもので50cm大程度。隅のみ割石を使用。

石積e…高さ約1.8m。下端近くに50~70cm大の大きめの石が見られる。天端近くの石は小さい。

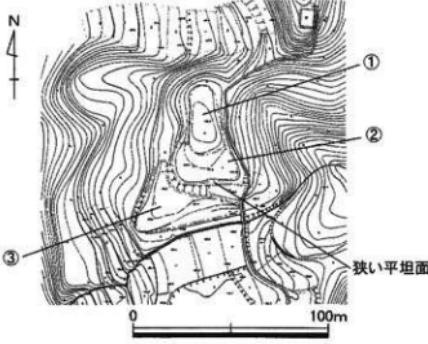
### 曲輪12（第24・25図、写真52~57）

前述した曲輪11の北方に位置し、物見台としての機能が想定されている曲輪である。史跡の指定範囲には含まれていない。概ね上、中、下の三段による構成として認められるため、上段から順に曲輪12-①、12-②、12-③として説明する（第24図）。

最上段の曲輪12-①は南北が約18m、東西が約12mの略方形を呈する。標高は約82mであり、本丸の曲輪1との比較で4mほど高い位置にある。北側と西側の縁に高さは20~30cm程度の低い石積みがある（写真53）。南側の法面は高さが3m程度であり、部分的に石積みの痕跡が見られる（写真54）。林道に接する東側は自然面の露頭であり、4.5m程の高さを持つ。ほぼ垂直に近い傾斜であり、人為的な削平を幾分受けている印象がある。

曲輪12-②の平面形は先述した曲輪11の形状に似ており、やはり台形の右下を切り取ったような形状となっている。南北の長さは約22m、東西方向の長辺は30m強である。西縁の中央付近が、「横矢掛かり」風に若干張り出している（第25図）。平場の傾斜はやや強く、南側に向かって低くなり、標高域は概ね77~79mである。平場の西側と南側には、小振りな自然石による石積みを伴っており、南側でみた場合に高さ約1.7mを測る。また石積みの下場に沿って、幅1m強の狭い平坦面が巡っている（写真56）。

曲輪12-③の平面は、曲輪12-②からみて南西方向へ舌状に突き出した様な形態を呈する。東西方向の幅は約50mであり、南側と西側の周囲には石積みを伴っている。南側の石積みは東寄りで高さ約1.6



第24図 曲輪12周辺図 (S=1/2,500)



第25図 曲輪12-①・②の平面図 (S=1/600)



写真52 曲輪12-① (南西より)



写真53 曲輪12-①西縁の低い石積み (南西より)



写真54 曲輪12-①南側法面の石積み痕跡



写真55 曲輪12-②西半付近 (北より)



写真56 曲輪12-②南側の石積みと狭い平坦面



写真57 曲輪12-③ (東側上方より)

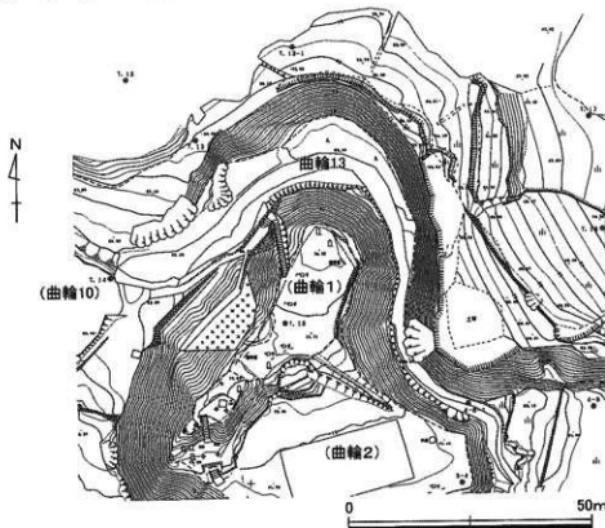
m、西に向けて高さを増し、中央付近から西半部分での高さは約2.3mとなっている。また、西側にみられる石積みの高さは最大で1.7mほどである。

なお曲輪12-①・②では平成22年度に試掘調査を実施したが、遺構・遺物は検出していない（未報告）。

#### 曲輪13（第26図、写真58・59）

本丸地区において、曲輪1の北側から曲輪2の東側を巡る帯曲輪である。道のりにすると大体120m程である。幅はおよそ3～5m程度であるが、無断現状変更の影響を受けており旧来の形状よりはやや広くなっている箇所もある。曲輪1の北側付近ではテラス状に拡張している部分がある。標高については上下動があるが、概ね63～67m付近に集約される。前述のテラス状地形のあたりが最も高く、

曲輪2下-⑤・⑥および曲輪10に接続する付近が最も低くなる。



第26図 曲輪13平面図 (S=1/1,000)



写真58 曲輪13(曲輪10より)



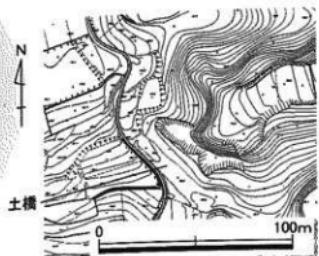
写真59 曲輪13(中間付近より曲輪2下への進行方向)

#### 土橋 (第27図、写真60)

曲輪10より北側へ4m程度下がった地点から、北西の曲輪11方向へ延びる通路造構である。延長はおよそ40mであり、通路面の幅は約6~7mである。次に述べるが、東西両側が堅堀を含む谷地形であり、その間を結ぶ機能を持っていたと考えられる。未調査であるため、削り出しによってのみ築かれているのか、盛土の突き固めなどが行われているのか現時点では判っていない。

#### 西堅堀 (第28図、写真61~66)

先に述べた土橋の東西両側においては長大な堅堀状の地形がある。過去の報告では、「東堅堀」および「西堅堀」として扱われているものである(註3)。ほかに曲輪11と曲輪12の間に東西に走る堅



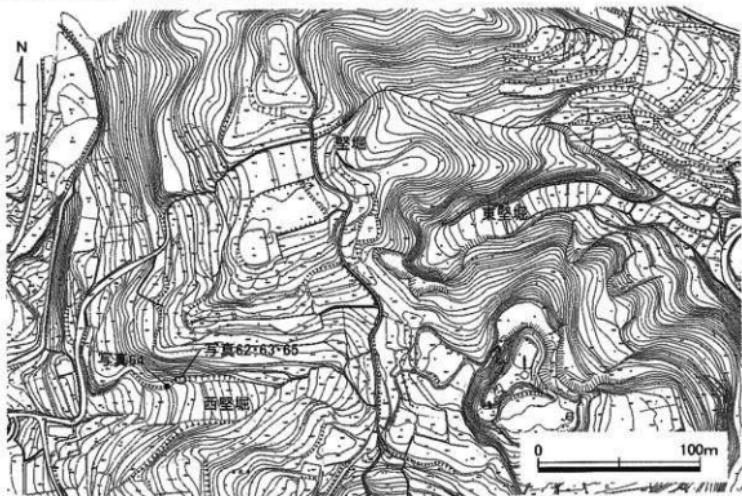
第27図 土橋 (S=1/2,500)



写真60 土橋 (曲輪10より)

壠状の地形がある。また「東堅堀」の南側には、地形図から畝状堅堀らしきものが読み取れるため、詳細な確認をする。今回は荒蕪化の影響と時間的な制約から西堅堀の点検作業のみ行った。

西堅堀は城跡西側の浦口方面より史跡へ進入した付近から、曲輪9の北側まで東西に延びており、延長は約170mである。幅については途中で狭まっている箇所があるが、最も広い部分で20m強である。深さについては、特に西側2/3程の範囲における北面が切り立っており、概ね3~5.5m程度の高さがある。垂直に近い自然面の露頭であり、厚い硬化粘土層の露頭となっている（写真62・63）。一部では、露頭の崩れた部分を石積みによって補修したような箇所がみられる（写真64）。また今述べた付近では下端に沿って“水みち”もみられた（写真65）。このほか、堅堀内部は畑利用の影響が認められ、石積みを伴う段状の地形となっている（写真66）。



第28図 堅堀配置図 (S=1/3,000)



写真61 西堅堀全景

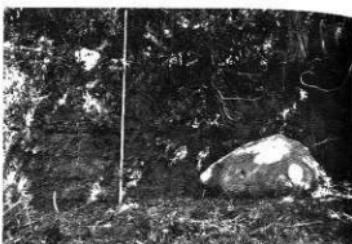


写真62 西堅堀北壁



写真63 西堅堀北壁（接写）



写真64 西堅堀露頭の補修



写真65 西堅堀内部・北壁沿いの水みち

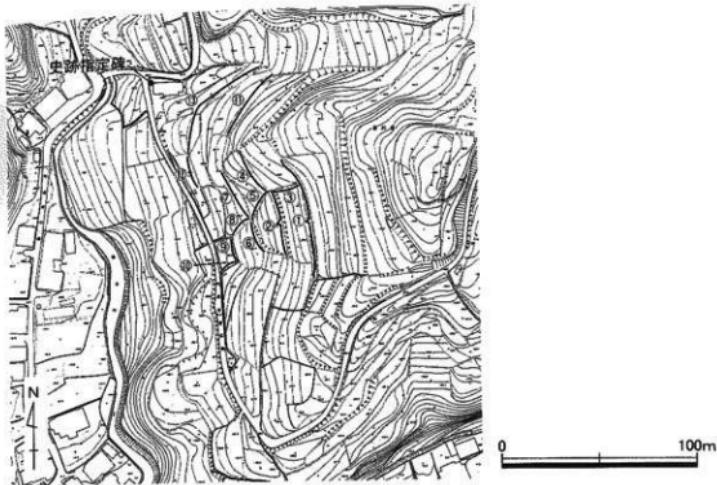


写真66 西堅堀内部の状況

堅堀の狭まる辺りに向けて壁面はやや低くなつており、曲輪9の北では南北両側が少し開けたような状態となる。谷状の自然地形を活かした堅堀であることは既に指摘されているが(註4)、一部に大規模な地形の改変を加える事で堅堀の完成をみているようである。

#### 浦口周辺（第29図、写真67～72）

曲輪8の西側、西堅堀の南側と史跡進入路に挟まれる範囲の状況確認を行った。今回調査においては便宜的に「浦口周辺」と呼称する事にした。全体的な状況としては、畑利用の影響が色濃くみられる地点である。ここでは石積みの点検を主な作業とし、作業番号は第29図のとおり付した。大部分は畑化に伴う石積みのようだが、大型の石を使用した個所も散見され、今後丁寧に検討していく必要もあるだろう。なお以下の説明で石材規模について触れていない場合、概ね20cm程度を超えない小規模



第29図 浦口周辺図 (S=1/2,500)

なものが主に用いられていると理解されたい。また石材規模に関わらず、いずれも自然石である。

石積①…高さ約1.2m。北寄りの幅11m分程の範囲で、1m超の大型の石が使用されている。

(写真68)

石積②…高さ約1m。

石積③…東側は低く、西側に向けて徐々に高くなり西端で約2.2mとなる。西端付近では1mを超える大型の石も数個みられる。

石積④…石積③と交差するもの。高さ約2.2m。南端から北に向けて約12m分の範囲で、1m前後の大型の石が多く使用されている。

石積⑤…高さ約1.0~1.2m。

石積⑥…高さ約1.3~1.7m。中ほどに1m超の大型の石が数個みられる。

石積⑦…南側で低く、高さ約1.0m。北側に向けて徐々に高くなり、高さ約1.7m。天端部分の石は小振りだが、全体的には40~50cm大の石が多い。1m超の大型の石も数個みられる。

石積⑧…高さ約1.4m。

石積⑨…高さ約2.0m。上部2/3程の石は小振りだが、下部1/3程には1m弱の大振りな石がみられる。

石積⑩…高さ約2.0m。上半の石は小振りであり、下半の石は40~50cm大のものが多い。

石積⑪…南西側で低く、高さ約1.1m。石も小振りである。北東側に向けて徐々に高くなり、端附近で高さ約2.6m。北東寄りでは50cm大前後の石が目立ち、1m前後の大型の石も若干みられる。

石積⑫…高さ約1.7m。南側半分は崩落によると考えられるが、石が無くなっている。

石積⑬…高さ約0.8m。

このほか周辺では、史跡進入路に沿って案内板や史跡指定碑などが設置されている（写真71・72）。



写真67 浦口周辺の状況（南東より）



写真68 浦口周辺・石積①（西より）



写真69 浦口周辺・石積③④の交差部分（南西より）



写真70 浦口周辺・石積④（西より）



写真71 浦口方面入口の案内板（北より）



写真72 浦口方面入口付近の史跡指定碑（右）と農道改良記念碑

#### 南側登城道（第30図、写真73～76）

日野江城跡を訪れる際に一般的に利用されているのは、本丸方面であれば浦口側からの進入路であり、二ノ丸方面であれば大手川方面からの进入路である。あまり広くは知られていないが、史跡の南側から登城するルートも存在している。人が通れる程度の狭い道である。起点は日野江城跡南縁のほぼ中央、日野江町公民館付近である。ルートを先に確認しておくと、城内方向へ進入してすぐに北側と東側への分岐がある。北へ進むルートは緩やかに蛇行しながら、曲輪9の東側辺りに到達する。荒蕪化が著しく、現在は機能していない。東へ進むルートは、すぐに北東寄りに進路を変え、曲輪4



第30図 南側登城道 ( $S=1/2,500$ )



写真73 南側登城道・進入口付近の石垣（南より）



写真74 南側登城道の切り通し・左手に溝（北より）



写真75 南側登城道・龜岩

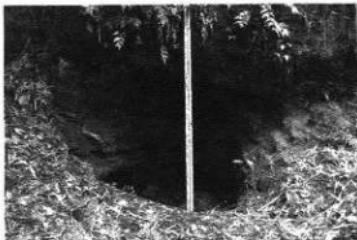


写真76 南側登城道・水溜め風の割り抜き

-②の西端付近へと繋がる。こちらのルートは蛇行がきつく、傾斜も急である。いずれにも石垣が貼られているが（写真73）、残りの良さには地点ごとのバラつきがある。相対的には、北側への進路の方が石垣の残りが良い。聞くところによれば、昭和の途中頃までは地元の方によって維持補修が繰り返されていたそうである。初源については定かでない。分岐点から北へ進むとすぐに、地山を切り通して道を設けた状況がみられ、東西両側が硬化粘土層の露頭となっている（写真74）。同様の状況が、曲輪9方面の出口に近付いた辺りでもみられる。また曲輪9方面への進路沿いでは、道の北側に排水路と考えられる溝を伴っており、やや曖昧となっている箇所があるものの、ほぼ全体的に見られる。

このほか先に述べた起点から城跡へ進入した際、分岐点の手前の畠の一角には、巨石が2つ重ねて置かれているものがある。地元では「龜岩」と呼ばれているようである（写真75）。また北側への進

路を曲輪9に近づいた付近では、切り通しの壁をくり抜いて水溜め状の施設が設けられている箇所もみられた。(写真76)。

〔註釈〕

- (註1) 千田嘉博・小島道裕・前川要 1993 『城館調査ハンドブック』 新人物往来社  
(註2) 大石一久氏より石柱の一部であろうとの教示を頂いた。また他の石垣石材との間に隙が見られる為、石垣の築造時から嵌め込まれていたかについては疑問であるとの意見を頂いた。  
(註3) 木村岳士編 1998 『日野江城跡』 北有馬町文化財調査報告書第2集 北有馬町教育委員会  
(註4) 註3文献に同じ。



上空から望む日野江城跡（東より）

## 第2節 本丸地区的調査

### (1) 曲輪10の調査

#### 概要

本丸地区的南西側にあたる曲輪10では、平成13年度に37区 ( $16.0\text{m}^2$ )、38区 ( $11.5\text{m}^2$ )、39区 ( $8.0\text{m}^2$ )、40区 ( $4.8\text{m}^2$ )、41区 ( $6.0\text{m}^2$ ) の5箇所の調査区を設け、発掘調査を行う。

以下では調査区ごとに概要を記述するが、層位については土色の注記がなく詳細がわからぬため省略する。

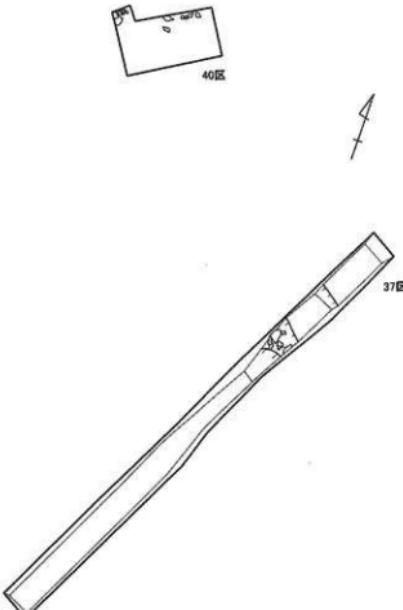
また、各調査区の標高については不明であるが、標高51.5~53.5mの平場に調査区を設けている。

#### 調査成果

##### 37区

長さ16.0m、幅1.0mの調査区を設けており、調査区北側は崖下付近まで延びる。

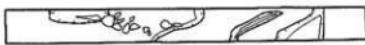
北側で2段の段差を確認するが性格については不明である。



##### 38区

長さ11.2m、幅1.0mの調査区を設ける。

調査区中央付近で高低差0.4mほどの落ち込みを確認するが、性格については不明である。また、落ち込みの西側では幅10~30cmほどの石を多量に検出するが、これについても性格を明らかにできない。

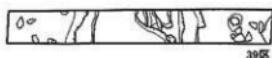


38区

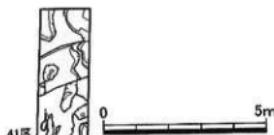
##### 39区

長さ8.0m、幅1.0mの調査区を設ける。

調査区西側で高低差0.5mほどの落ち込みを確認するが、性格については不明



39区

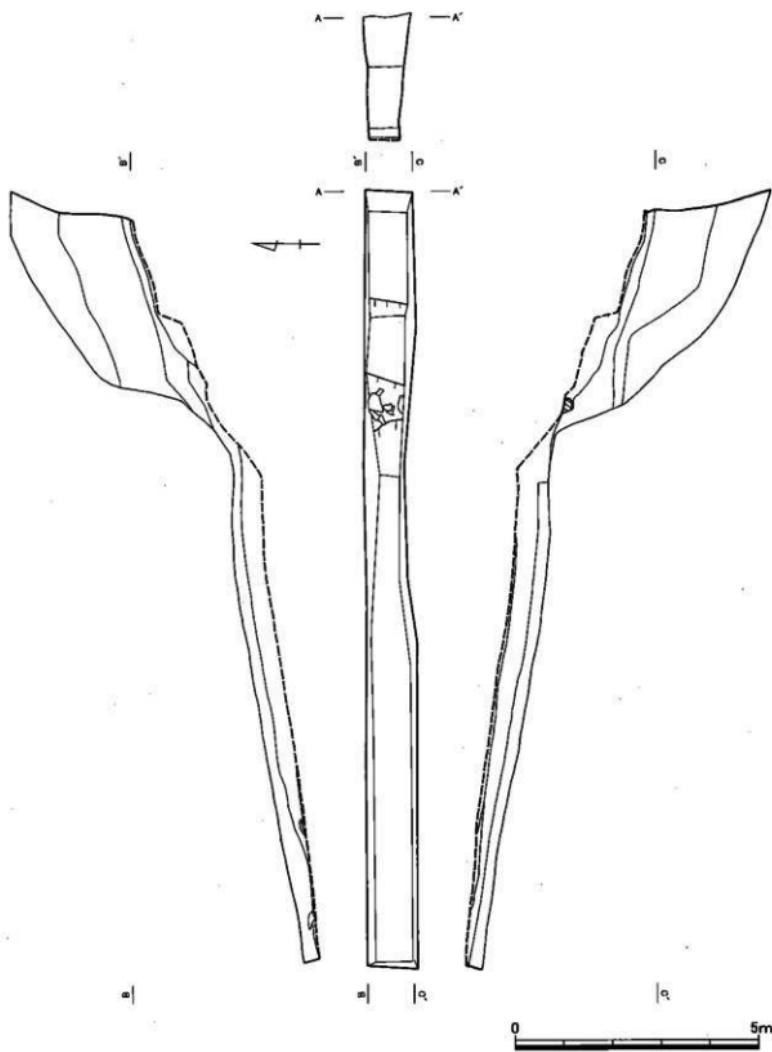


41区

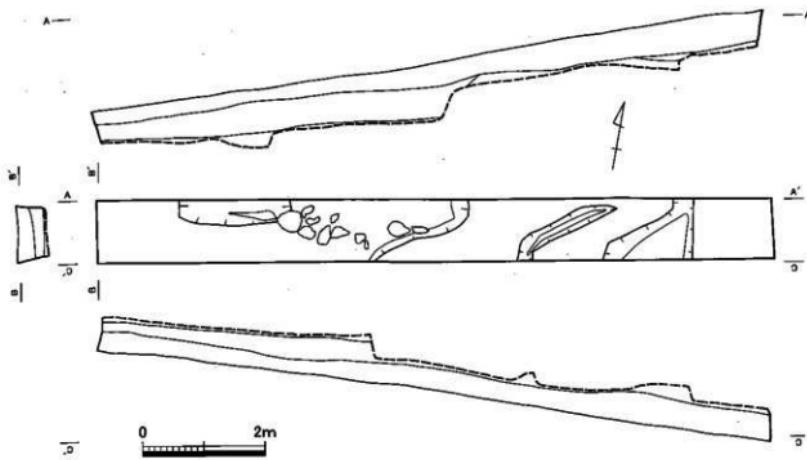
0

5m

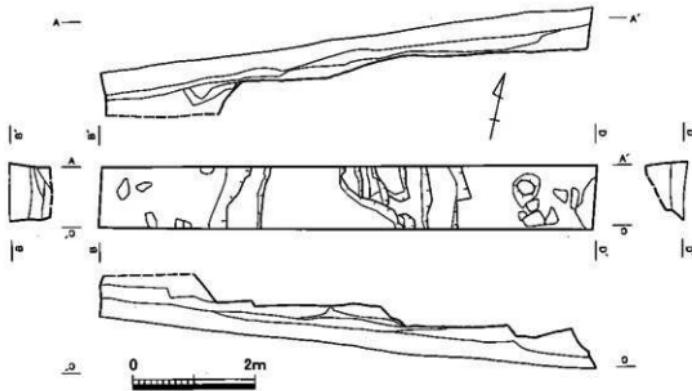
第31図 本丸地区曲輪10遺構配置図 (S=1/150)



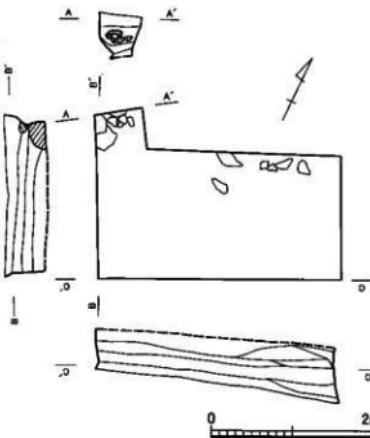
第32図 37区実測図 ( $S=1/100$ )



第33图 38区实测图 ( $S=1/80$ )



第34图 39区实测图 ( $S=1/80$ )



第35図 40区実測図 ( $S=1/60$ )

である。また、38区中央で確認した高低差が0.4mある落ち込みとの関係も明らかにできていない。

#### 40区

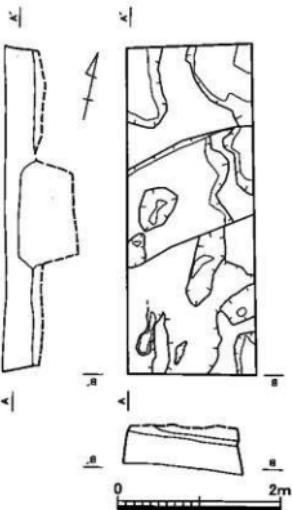
長さ3.0m、幅2.0mの調査区を設ける。

調査区北西隅では幅8~20cmほどの石が集積していたが、性格については不明である。

#### 41区

長さ4.0m、幅1.5mの調査区を設ける。41区は39区より1.2m南側に位置しており、調査区北西隅で39区より延びる落ち込みを確認する。

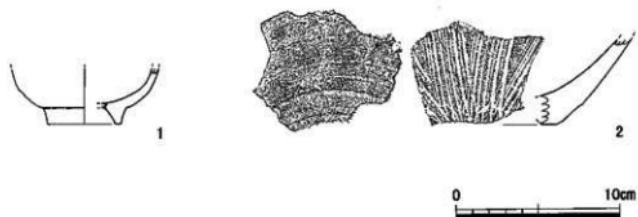
また、調査区中央では、上幅1.2m、深さ0.38mの東西に延びる溝状の落ち込みを確認する。どちらの落ち込みについても性格は不明である。



第36図 41区実測図 ( $S=1/60$ )

遺物

1は陶器碗である。高めの断面逆三角形をなす高台で、体部は丸みを帯びる。内外面に褐色の釉が掛かり、高台付近は露胎である。2は非常によく焼け締まった陶器擂鉢の体部下位である。外面には成形時のケズリ調整が残り、高台付近は露胎であるが、それより上には暗褐色釉が掛かる。



第37図 本丸地区曲輪10出土の遺物 (S=1/3)

第3表 本丸地区曲輪10出土遺物観察表

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	陶器	碗	本丸地区	38区	—	復元底径4.5cm
2	陶器	擂鉢	本丸地区	39区	—	—

## (2) 曲輪 2 の調査

### 概要

曲輪 2において、曲輪の利用状況や曲輪 3からの進入路の検討など目的として、南北13m、東西25mの調査区を設定し、約325m<sup>2</sup>の調査を行った。その結果、掘立柱建物跡、柱穴列、大型土坑、溝状遺構などの遺構を確認した。遺物としては、大量の土師質土器や国内できわめて出土例の少ない中国產陶磁器「法花」などを検出した。また発掘調査によって大型土坑の検出があつたため、その規模と性格をさらに追跡するため、1m幅のトレンチを3箇所設定して発掘調査を行った。

### 土層

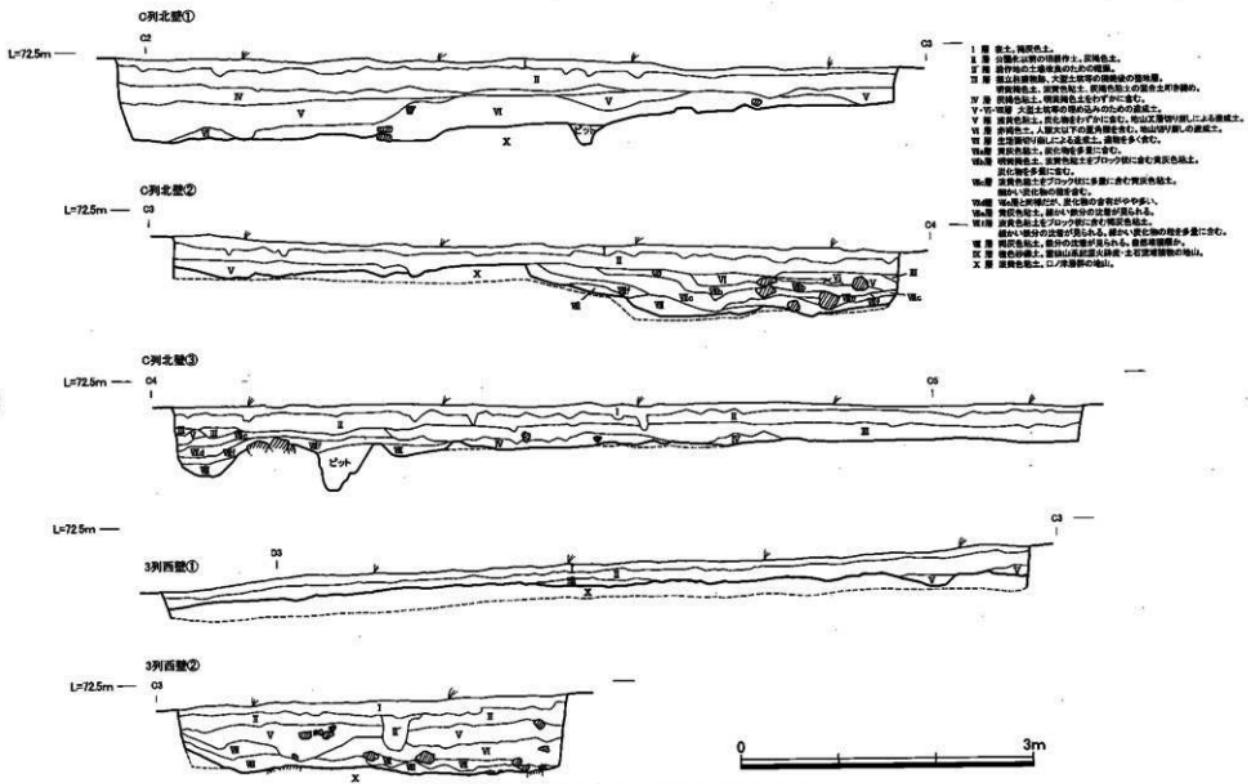
基本土層は以下のとおりである。

- I層 表土。褐灰色土。
- II層 公園化以前の旧耕作土。灰褐色土。
- II'層 耕作地の土壤改良のための暗渠。
- III層 掘立柱建物跡、大型土坑等の廃絶後の整地層。  
明黄褐色土、淡黄色粘土、灰褐色粘土の混合土。叩き締め。
- IV層 灰褐色粘土。明黄褐色土をわずかに含む。
- V・VI・VII層 大型土坑等の埋め込みのための造成土。
- V層 浅黄色粘土。炭化物をわずかに含む。地山 X層切り崩しによる造成土。
- VI層 赤褐色土。人頭大以下の亜角礫を含む。地山切り崩しの造成土。
- VII層 生活面切り崩しによる造成土。遺物を多く含む。
  - VIIa層 黄灰色粘土。炭化物を多量に含む。
  - VIIb層 明黄褐色土、淡黄色粘土をブロック状に含む黄灰色粘土。炭化物を多量に含む。
  - VIIc層 淡黄色粘土をブロック状に多量に含む黄灰色粘土。細かい炭化物の粒を含む。
  - VId層 淡黄色粘土をブロック状に多量に含む黄灰色粘土。VIIc層に比べ、炭化物の含有がやや多い。
  - VIIe層 黄灰色粘土。細かい鉄分の沈着が見られる。
  - VIf層 淡黄色粘土をブロック状に含む褐灰色粘土。細かい鉄分の沈着が見られる。細かい炭化物の粒を多量に含む。
- VII層 褐灰色粘土。鉄分の沈着が見られる。自然堆積層か。
- IX層 橙色砂礫土。雲仙山系起源火碎流・土石流堆積物の地山。
- X層 淡黄色粘土。口ノ津層群の地山。

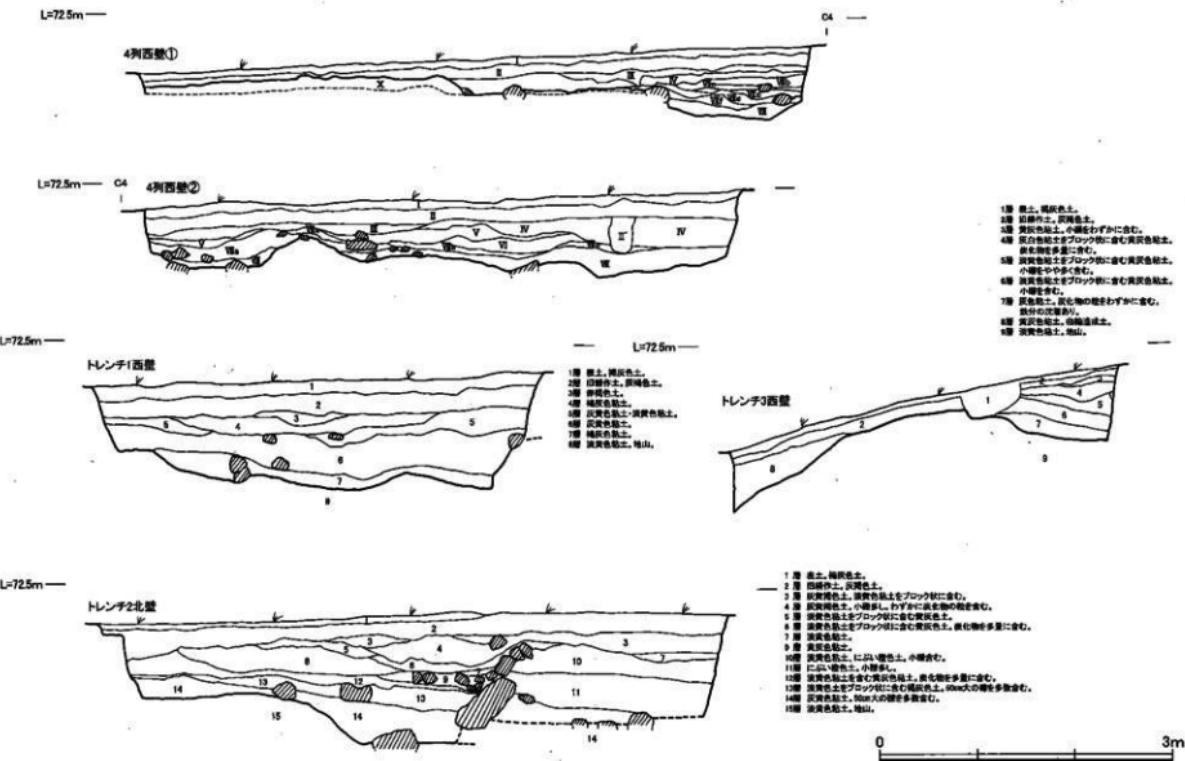
### 遺構

#### 掘立柱建物跡

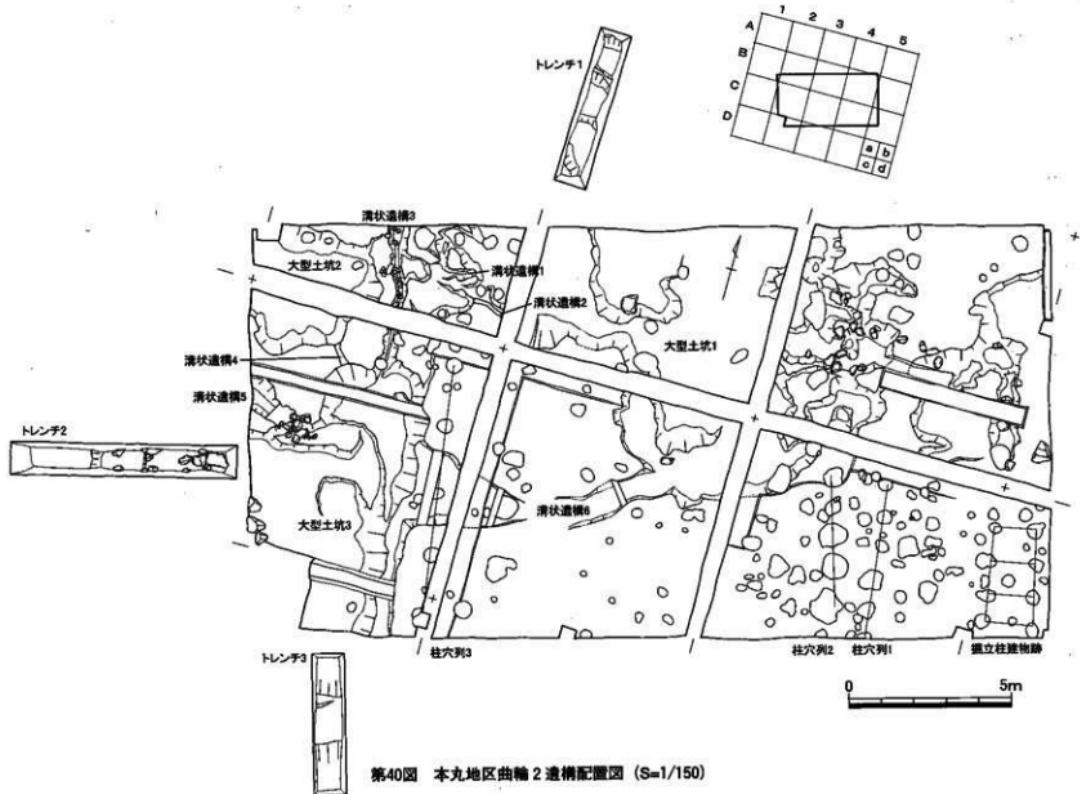
南北3間×東西1間の掘立柱建物である。調査区の南東端での検出であるため、調査区外へ規模を拡大する可能性もあるが、曲輪自体の縁辺部でもあるので、南側への拡張はあっても1~2間ほどであろう。柱の間隔は南北方向で約1m(半間)を測る。東西方向の間隔はやや広く、約1.3mである。柱穴の掘削は、西側半分にとどめたが、いずれの柱穴も0.5m程度の深度を持ち、覆土からは多くの



第38図 本丸地区曲輪2土層断面図① (S=1/50)



第39図 本丸地区曲輪2土層断面図② (S=1/50)

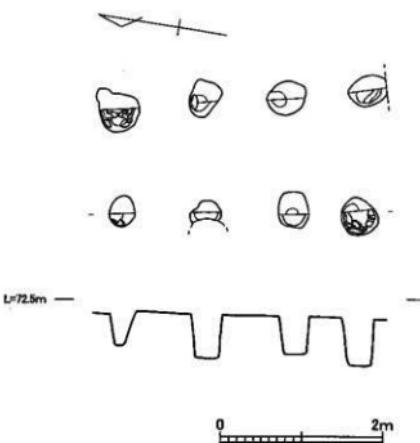


第40図 本九地区曲輪2造構配置図 (S=1/150)

根固めのためと思われる縦の検出が見られた。また、ある程度残存度のよい土師質土器の出土が頻繁に見られたため、建物の築造にあたっては地鎮などの儀礼的行為が行われたものと推測される。柱穴はⅩ層上面での検出である。主軸はN-10°-Wをとる。

#### 柱穴列 1

検出面はⅩ層上面であり、柱穴が6つ並ぶ。柱はそれぞれ約1mの間隔を測り、半間の間取りである。主軸はN-8°-Wをとり、掘立柱建物や柱穴3や大型土坑3の東側上端ラインとも軸をそろう。



第41図 掘立柱建物跡実測図 (S=1/60)

#### 柱穴列 2

Ⅹ層上面での検出である。柱穴は5つが約1mの半間間隔で並んで掘立柱建物跡や柱穴列1、柱穴列2とも共通するが、直径は60~70cm程度と他に比べ大きく、主軸はN-18°-Wをとり、掘立柱建物跡や他の柱穴列とはややずれている。

#### 柱穴列 3

Ⅹ層上面での検出である。主軸はN-9°-Wをとり、約2m(1間)の間隔で5つの柱穴が並ぶ。そのうち1つは溝状遺構6の埋没後に掘り込んでいる。

#### 大型土坑 1

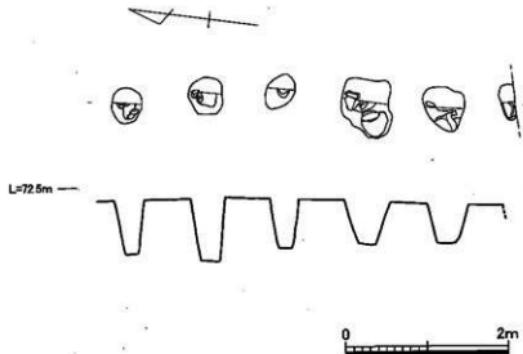
不整形の土坑で、基本的にはⅩ層への掘り込みであるが、遺構の東側部分ではⅩ層の上にⅩ層が堆積しており、その上面からの掘り込みである。東西幅は約10mを測り、南北幅は西側で約9m、東側で約14mを測る。深度は最大で約0.5mである。東側は、埋め戻し段階での縁辺部の切り崩しを行ったためか、大きく乱れている。覆土は人為的な造成による堆積を見せるが、最下層では自然堆積層と思われる褐灰色粘土層を確認した。造成土中においては土師器を主体に大量の遺物の出土がみられ、埋め込み途中での一括廃棄と考えられる土師質土器の集中的な検出もあった。

#### 大型土坑 2

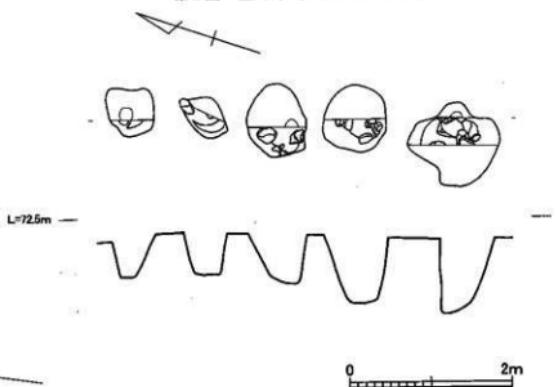
調査区の北西端での検出であり、さらに調査区の西側へ拡張する。Ⅹ層への掘り込みである。南北約4m、東西4.5m以上の不整形で、深さは最大で35cmである。溝状遺構4によって大型土坑3と連結している。

### 大型土坑 3

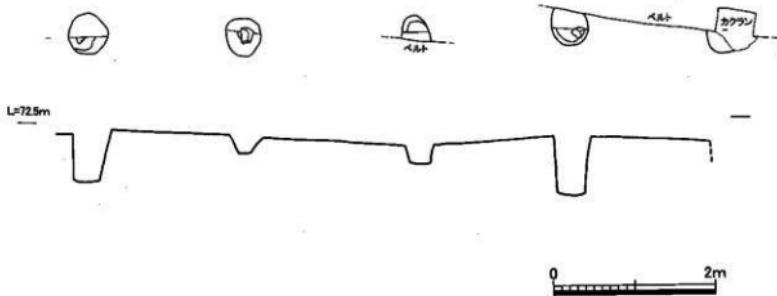
X層への掘り込みである。南北7.5~10m、深さは最深部で105mを測る。トレンチ2の調査で西の上端である可能性のある立ち上がりを確認したが、この場合東西幅は約10mである。ただしこの西側の立ち上がりのレベルは東側に比べるとやや低いため、さらに西側に広がっていた可能性も残る。しかしながら、トレンチ2の西側には曲輪1に築かれた神社へと登る通路が現在通っており、削平を受けているため確認はできない。東側の縁は一旦深さ約20cmで幅50cmほどの櫻を作つてから深掘りしている。



第42図 柱穴列1実測図 (S=1/60)



第43図 柱穴列2実測図 (S=1/60)



第44図 柱穴列3実測図 (S=1/60)

#### **溝状遺構 1**

長さ約1.0m、幅20~30cm、深さ約15cm前後で大型土坑1と溝状遺構3とを結ぶような配置をとり、東西に延びる。覆土はVI層土である。

#### **溝状遺構 2**

長さ約2.0m、幅約15cmで、遺構の掘削は行っていない。溝状遺構1と並行して大型土坑1と溝状遺構3とを結ぶような配置で東西に走る。覆土はVI層土である。

#### **溝状遺構 3**

幅は0.2~0.3mで、大型土坑1と大型土坑2の間を通って北から南へ走り、大型土坑3に接続する。北側ではあまり深度を持たないが、大型土坑との接続部分では深さ0.3mの断面「U」字状の溝となる。覆土はVI層土である。

#### **溝状遺構 4**

大型土坑2と大型土坑3を連結する遺構で、幅15~20cmを測る。部分的に掘削を行い、深さは13cmほどであることを確認した。覆土はVI層土である。

#### **溝状遺構 5**

北西から大型土坑3に向かって延びる。部分的に掘削を行い、幅は最大1.0mで、深さは0.4mを測る。大型土坑3との結合部では、礫が多数検出された。覆土はVI層土である。

#### **溝状遺構 6**

大型土坑1と大型土坑3を結合するようにやや弧をなした平面形で検出した。深さは最大で20cm程度で、幅は大型土坑1との結合部で約1mを測り、途中後世の削平により途切れるが、大型土坑3との結合部では2.5mと幅を広める。覆土の状況や幅が他の溝状遺構とは異なっており、性格・機能はまったく別のものであろう。

### 遺物

1～10は青磁の資料である。1は同安窯系の碗である。口縁部は外傾して外面に柳描文が入る。2～8は龍泉窯系の碗である。2は無文で、体部は大きく膨らむ。3～5は粗雑な蓮弁文が外面に入る。6は内面見込みに圓線を入れ、中央には草花文のスタンプを入れる。7は外面体部に蓮弁文を入れ、内面見込みには捻花文を描く。高台内は釉剥ぎを施すが、疊付部分は釉を残す。8はしっかりとした厚みのある底部である。疊付部分まで釉が掛かる。9は皿の口縁部で、外面口縁部下には段を持ち、口唇部には刻目を施す。また、内面には蓮弁文を入れる。10は燭台で、突帯が1条巡る。

11～30は白磁の資料である。11は端反の口縁部を持つ碗である。12～23は端反の口縁部を持つ皿である。12、15～17、25～28は高台疊付付近を釉剥ぎする。15・27には高台付近に砂粒の付着が認められる。12には細かい貫入が入る。

29は菊花皿である。内面に捻花文とみられる隆線があり、型押し作りであろうと思われる。30は幅広の高台を削りだす。外面高台付近は露胎で、内面見込み部分は蛇の目状に釉剥ぎを施す。

31～88は青花の資料である。31～50は碗である。31は端反の口縁部で、内外面ともに口縁部に界線を1条引き、外面には虫文を描く。32は内外面に界線1条を引き、外面に草花文を描く。33は内外面に2条ずつの界線を入れ、外面には渦巻文を描く。34は口縁部内外面に2条の界線を引き、外面には唐草文を描く。35は内外面ともに界線1条ずつを引く。36は内外面ともに幅の広い界線を1条引き、外面には草花文を描く。37は内面に界線2条、外面にやや太目の界線1条を引き、外面にはさらに唐草文を描く。38は内外面ともに2条の界線を引き、外面には文様を描く。39は内外面ともに2条の界線を引き、外面には鳥の図柄を描く。40は内面には2条の界線を入れ、外面には界線1条の下に唐草文を描く。

41は内外面ともに界線2条ずつを入れ、外面は丸文でうめる。42は外傾して立ち上がる口縁部で内面には2条の界線が入る。外面は1条の界線の下に波濤文を描く。43・44は同一個体であろう。文様は淡い色調の細線描きで、外面には唐草文を、内面口縁部には四方棒文を描く。45は内面に2条の界線を、外面口縁部に四方棒文を入れ、体部にも文様を描く。46は外面口縁部に雷文を、内面には2条の界線を入れる。47は外面に雲文であろうか、文様を描き、内面口縁部に四方棒文を描く。48は体部の資料で、外面には唐草文を描く。49は鉢削りの痕跡が高台内に残り、外面体部には丸文を充填する。内面見込みには2条の界線と文様が入る。高台は重ね焼きによる融着のためか、破損が著しい。50は太筆による文様が見込みに描かれ、器面には貫入が入る。

51～77は皿の資料である。51～56は端反の皿である。51は外面に唐草文を描き、内面には口縁部に1条、見込みに2条の界線を引き、見込み内には玉取獅子を描く。52は外面口縁部には1条の界線を引いて体部には唐草文を描き、内面には口縁部に1条、見込みに2条の界線を引き、見込み界線内には十字花文を描く。高台付近には砂粒の付着が認められる。53は外面口縁部に界線1条を入れて体部には唐草文を描き、内面口縁部には1条の界線を引く。54は内外面ともに口縁部に2条の界線を引き、外面体部には文様を描く。55は外面が無文で、内面口縁部には2条の界線を引く。

57～61は内済する口縁部を持つ皿である。57・58は内外面口縁部に1条の界線を引き、57には内面見込みにも2条の界線が入る。59～64は外面口縁部に波濤文が入る資料である。62～64は体部に芭蕉葉文を描き、64の内面体部には鳥の図柄を描く。

56・65・66は銅皿の資料である。56は外面に果実文を描き、内面には2条の界線を入れ、文様を描く。65は口縁部が稜花となり、体部は内外面ともに蓮弁文を入れる。外面口縁部の文様は馬であろうか。内面口縁部には「水」の字が入る。66は内外面ともに口縁部に1条界線を入れ、外面は体部と口縁部に、内面は口縁部に文様を描く。

67・68は皿の見込み・底面付近の資料である。67は見込みに玉取獅子と思われる図柄が見られ、高台内には字款が入る。68は大皿の資料と思われ、見込み内には龍であろうか、鱗状の図柄表現が見られる。

69～77は皿底部の資料である。69は高台外端部を釉剥ぎする。外面には唐草文を描き、見込みには樓閣を描く。70は高台が高く、疊み付け外端部は釉剥ぎを施す。見込みには十字花文を描き、高台内には兔を描く。71は内面に果実文を描く。72は高台疊み付近に細かい砂粒の付着が認められ、内面には文様を描く。73は内外面に文様を描く。74は高台内に放射状の鉋削りの痕跡が見られ、字款を入れる。75は内面見込みに2条の界線と文様を描き、高台内には字款を入れようである。76は外面に唐草文を描き、内面にも文様を描く。77は基筒底をなし、外面体部には2条の界線の上に芭蕉葉文を、内面見込みには捻花文を描く。

78～85は小坏である。80は外面口縁部下に如意頭文を描き、周囲を塗りつぶす。81・82は同一個体で、外面体部に青海波文を沈線で描き、釉溜りによる漫淡を文様とする。84は外面に馬の絵柄を描く。85は底部の資料で、外面に界線2条を入れる。二次的な被熱のためか、器面の状態がよくないが、内外面に文様を描き、高台内に「福」字を入れる。

86は芙蓉手の鉢と思われ、非常に薄い作りで、外面には草花文が入る。

87・88は壺の資料である。いずれも胴継ぎの段を内面に残す。87は外面に柳葉文、唐草文などを区画された文様帯に描く。

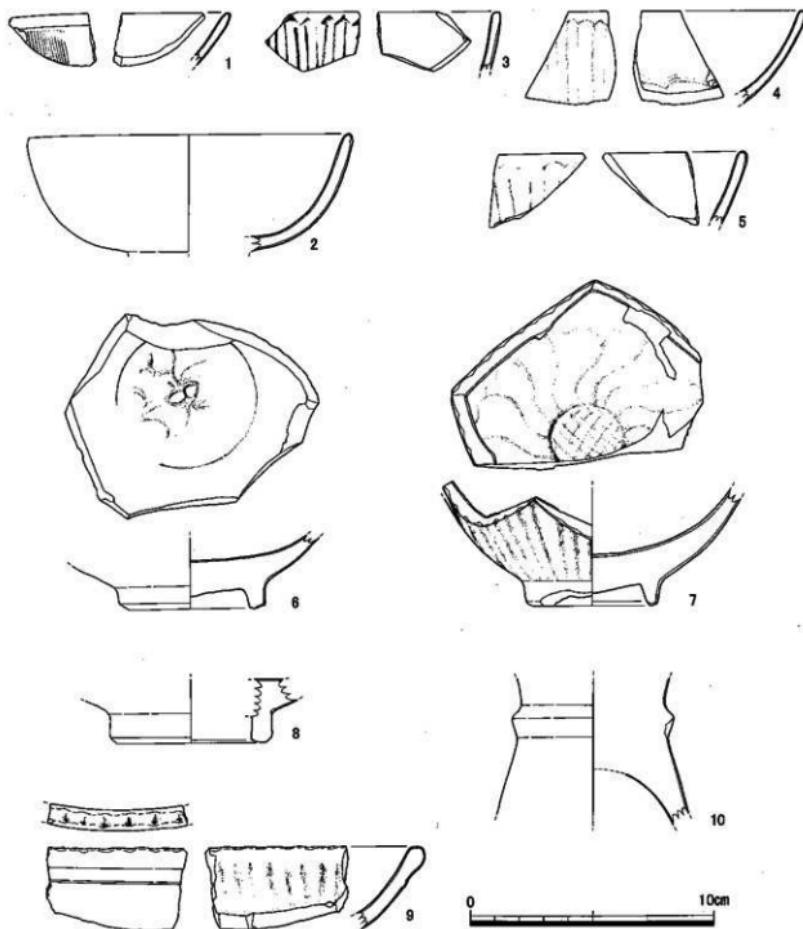
89は瑠璃釉磁器の小坏で、口縁部が大きく外反する。外面全体に瑠璃釉を施す。

90は翡翠釉陶器の小皿である。口縁部は稜花となる。発色にむらがあり外面の一部と内面は緑釉に近い。91・92は緑釉陶器の小皿である。91は口縁部が稜花となり、高台内には「製」の字が入る。90～92はいずれも型押し成形である。93は翡翠釉の人形である。器面の釉の剥落が進むが、沈線によって鱗状の表現がなされている。

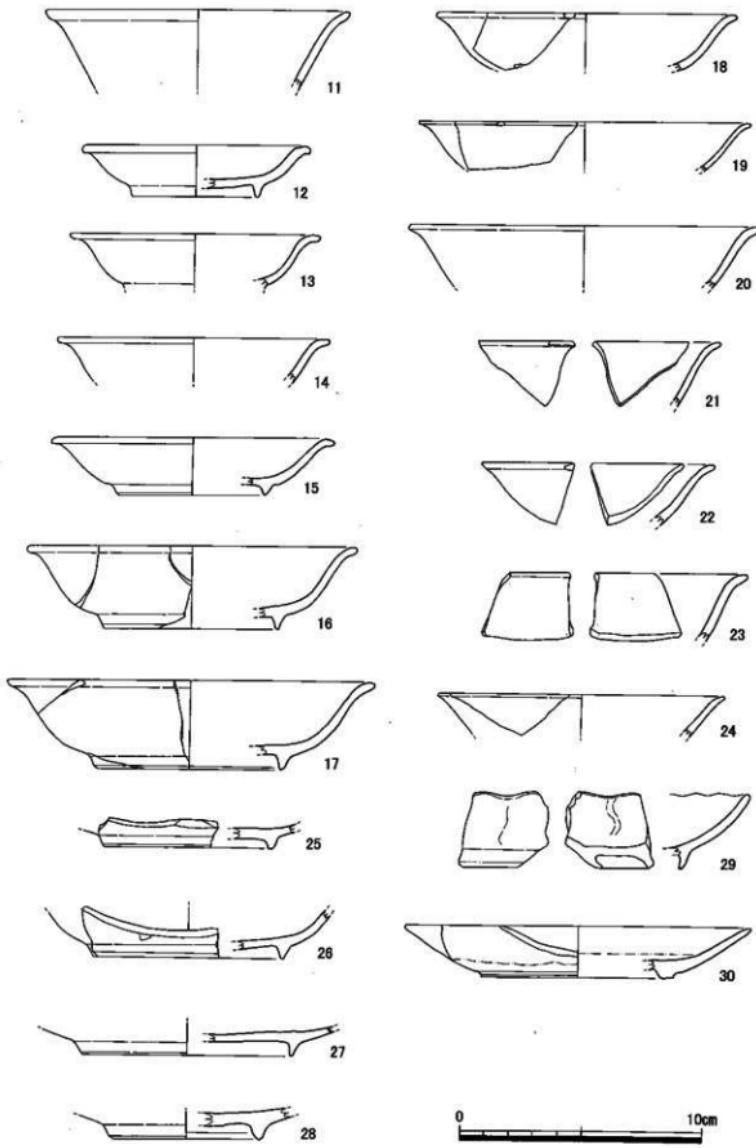
94～98は緑釉陶器である。94～99は同一個体と思われ、胎土は灰白色を呈し、内外面ともに緑釉が掛かる。94～96は外面に稜を作る。99は三彩で、焼成が悪いが沈線による文様と緑釉、黄釉、褐色釉が掛かる。100は型押し成形と思われる薄手で小型の資料で、外面には緑釉、内面には黄釉が掛かる。外面には花弁状の文様がある。101は緑釉の陶器で、手捏ね成形と思われ、無釉の内面にユビオサエの痕が残る。

102～110は華南三彩である。胎土は赤褐色を呈して軟質で、いずれも同一個体であると思われる。102・103は口縁部の資料で、外側を肥厚させる。102・103はボタン状の貼り付けを外面に施す。102, 105～107には割花文が入る。

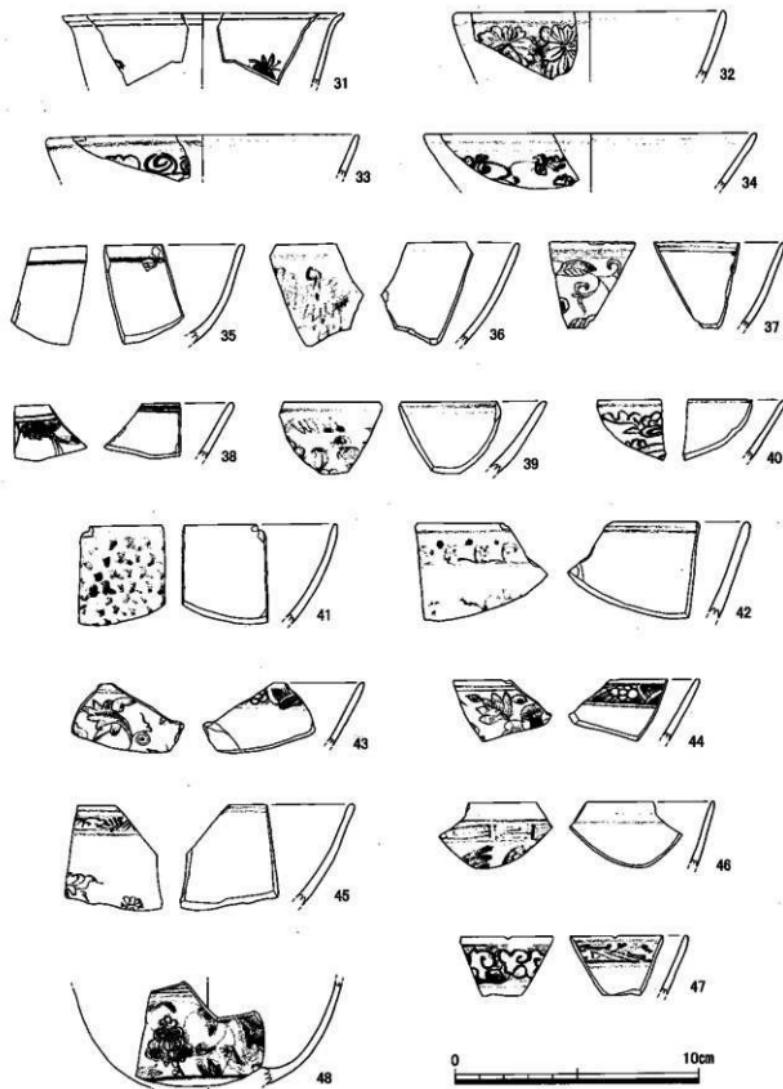
111～127は法花の資料である。いずれも同一個体であろうと判断され、壺形をなすものと思われる。外面には捺り出しによる細い隆線と沈線によって文様が描かれ、剥落が著しいが、瑠璃釉、翡翠釉、黄釉、赤釉が掛けられている。瑠璃釉が全体的な基本色調である。内面の欠損する125以外は、いず



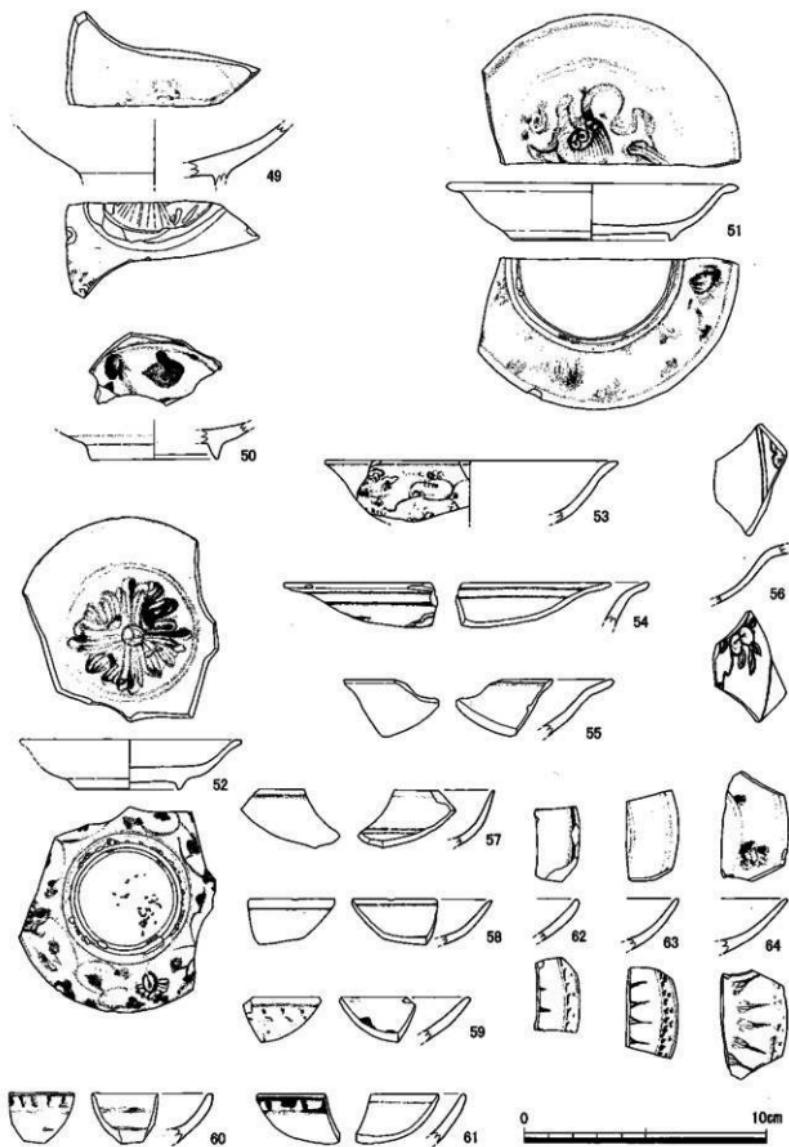
第45図 本丸地区曲輪2出土の遺物① (S=1/2)



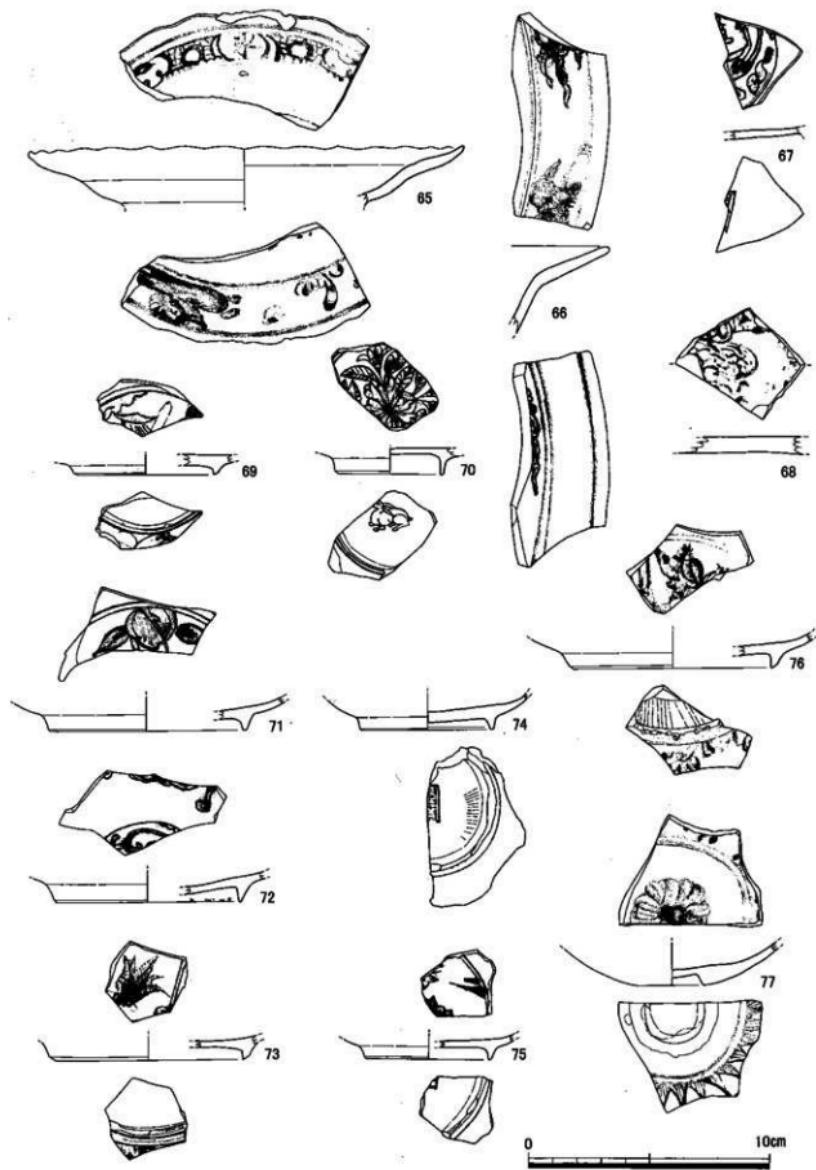
第46図 本丸地区曲輪2出土の遺物② (S=1/2)



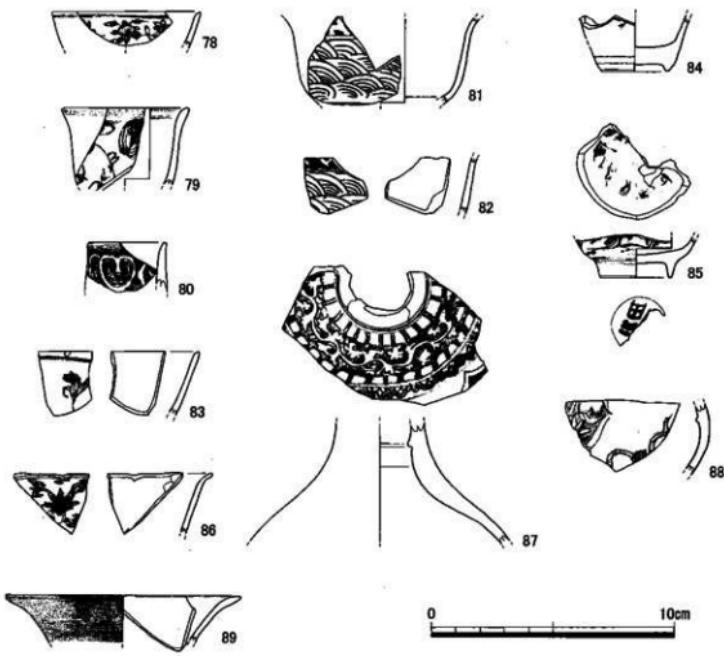
第47図 本丸地区曲輪2出土の遺物③ (S=1/2)



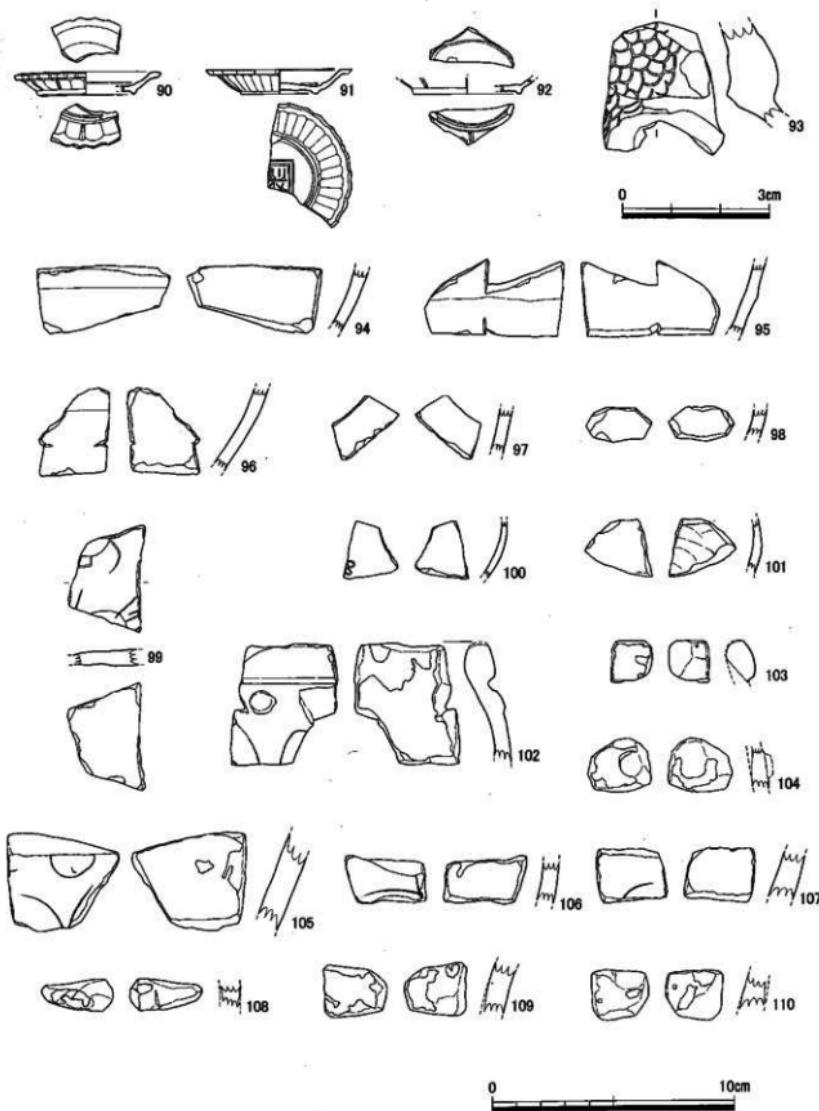
第48図 本丸地区曲輪2出土の遺物④ (S=1/2)



第49図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑤ (S=1/2)



第50図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑥ (S=1/2)



第51図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑦ (93:S=1/1, その他:S=1/2)

れも内面にロクロ成形時の横方向の筋状の調整痕を残し、緑釉が掛かる。111は頸部で、やや内傾する。隆線と瑠璃釉、翡翠釉が観察される。

112は肩部の資料で、上下それぞれ2条の界線に区画された部分に雲文を配し、その下には蓮弁文を表現する。雲文と上下の2重の界線内には翡翠釉、蓮弁文は瑠璃釉、翡翠釉、黄釉、赤釉で表現する。113は体部上位の資料である。横方向の波状の隆線に2本単位の区画隆線を組み合わせる。また3本単位の沈線による表現も見られる。瑠璃釉、翡翠釉、黄釉が見られる。

114～119は胴部の資料で、隆線による衣の襞に似た表現があることから、人物文とも考えられる。114は隆線による襞状の表現があり、黄釉である。また横方向に走る2本の隆線内は翡翠釉が入り、帯の表現であるかもしれない。115は右側の文様内には黄釉が掛かり、接合はしないが114へとつながる資料かもしれない。116も右側の隆線文様内には黄釉が入る。117には瑠璃釉が、118・119には瑠璃釉と翡翠釉が掛かる。

120は隆線というより小さな粘土塊の貼り付けに近く、その上には葉脈を沈線で描いて木の葉を表現している。瑠璃釉が掛かる。121・122は瑠璃釉と翡翠釉が掛けられ、植物を表現しているようである。124は文様が不明であるが、隆線が見られ、瑠璃釉が一部に残る。125・126は体部の中ほどから下位に近い位置のものと見られ、127とも文様が共通する。瑠璃釉と翡翠釉が認められる。127は分厚い器壁で、底部近くの資料である。資料の下位には蓮弁文を隆線によって表現し、瑠璃釉、翡翠釉、赤釉が掛けられる。隆線は輪郭部分を太く表現する。その上には珠点が見られ、隆線と沈線による区画状の表現、同じく隆線と沈線による花卉状の表現も見られる。区画部分には蕨手状の沈線表現もある。区画部分には瑠璃釉と翡翠釉が、花卉状の部分には瑠璃釉、翡翠釉、赤釉、黄釉が施される。

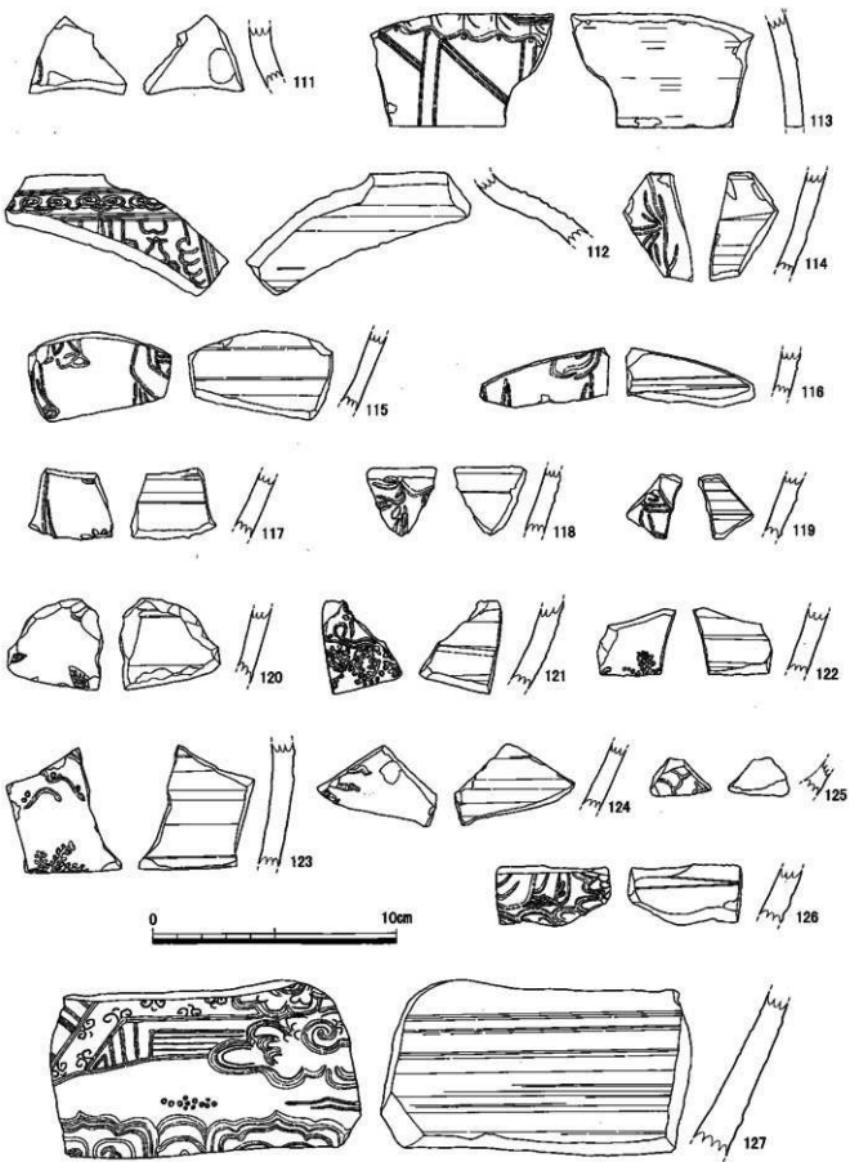
128～130は灰釉磁器である。128は皿の底部から体部にかけての資料で、底部は平底をなし、露胎である。129は底部の資料で、外面は高台と体部の境が見られない。全体に細かく貫入が入る。130は分厚い釉が掛けられ、貫入が入る。木瓜皿であろうか。

131は板作りの資料である。器面は無釉でよく焼け締まっており、暗灰色を呈する。

132は褐釉陶器の資料で、外面には模描文が入る。内面は釉を掛けたのち、搔き取った痕跡が残る。133は陶器の壺で、体部は上位で最大径をとり、一旦内傾して幅広の肥厚した口縁部がつく。外面には口縁部下に1条の沈線が走る。胎土はにぶい褐色を呈し、外面は無釉であるが、内面には体部に黒褐色釉が掛けられる。134は壺底部の資料で、外面には黒褐色釉が掛けられる。内面は無釉で、部分的にタタキ目の痕が残るが、その後に回転ナデ調整が施されている。大型品でありながら、非常に薄手の作りである。

135は備前焼の壺である。なで肩の肩部から立ち上がる頸部は直立し、口縁部は外側を肥厚させる。136・138は瓦質の火鉢で、同一個体の可能性もある。136は口縁部が肥厚し、口縁部下に2条の突帯を貼り付ける。外面には模描文とスタンプ文がみられる。胎土に金色雲母を多量に含む。138も多量に金色雲母を含む胎土で、外面には2条の突帯を貼り付ける。外面には斜方向の刷毛目調整が残る。137は瓦質の擂鉢である。内面には6本単位のクシ目が入る。

139～306は土師質土器の資料である。139～172は壺である。139～142は胎土に赤色粒子を多量に含み、明赤褐色系の色調を呈する。いずれも径の小さい粘土柱からの切り離しで、底面の糸切痕は粗い。内外面に回転成形時の凹凸を顕著に残す。139は口縁部がやや外反する。143～146は139～142に作り



第52図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑧ (S=1/2)

は似るが、胎土は赤色粒子が少なく、色調も異なる。糸切痕は、146は粗いが、ほかは細かく入る。143・144には炭化物の付着が認められる。

147・148は橙色を呈する赤色粒子を含む胎土で、内外面には成形時の凹凸を残さない。底径は小さく、糸切痕は粗い。

149～157、159～162は内面に広く見込みを作つてから体部が立ち上がる資料で、底径は大きめで、外面体部の中ほどに1段から2段の膨らみを作る。底部の立ち上がりは糸切によって低く抑えられ、底面の糸切痕は細かい。151・155・156・159には炭化物の付着がある。

158は赤色粒子をわずかに含む胎土で、内面には成形時の凹凸を顕著に残し、外面は丁寧になる。底面の糸切痕は細かい。163・164は焼成が甘く、器面の状態が悪い。165は内面の見込みを広くとり、底径は大きい。外面には工具による調整が顕著に残り、その後のナデ調整は甘い。底面の糸切痕は粗い。166は口縁部が外反して大きく開く資料で、外面は3段の膨らみを持つ。底面は細かい糸切痕が観察される。167は器面の状態がよくない。底径は小さく、糸切痕は細かい。口縁部に炭化物が付着する。

168は白色雲母を含む精製された灰白色の胎土で、底径は小さい。底面には細かい糸切痕と棒状工具の痕跡が残る。169～172は非常に軟質のにぶい黄橙色の色調で、細かい赤色粒子を含む精製された胎土である。器面の状態が悪いが、粘土柱からの切り離しはいずれも糸切である。

173～180は皿である。173・174は、外面に工具による調整のちナデ調整を施しており、凹凸が器面に残る。175は内面に成形時の凹凸が細かく入る。いずれも底径は小さめで、糸切痕は細かい。

176は比較的全体的に薄手の作りで、底径は大きく、糸切痕は細かい。坏の器高が低いものとして捉えておくほうがよいかもしれない。177は外面・底面の器面の状態がよくなく、糸切痕は不明瞭である。底径は大きい。178は外面にナデ調整前の工具調整による段が顕著に残る。底面の糸切痕は細かい。179は内面に成形時の凹凸を細かく残す。底径は小さく、糸切痕は細かい。180は外面に工具による成形時の段を顕著に残す。炭化物が付着する。

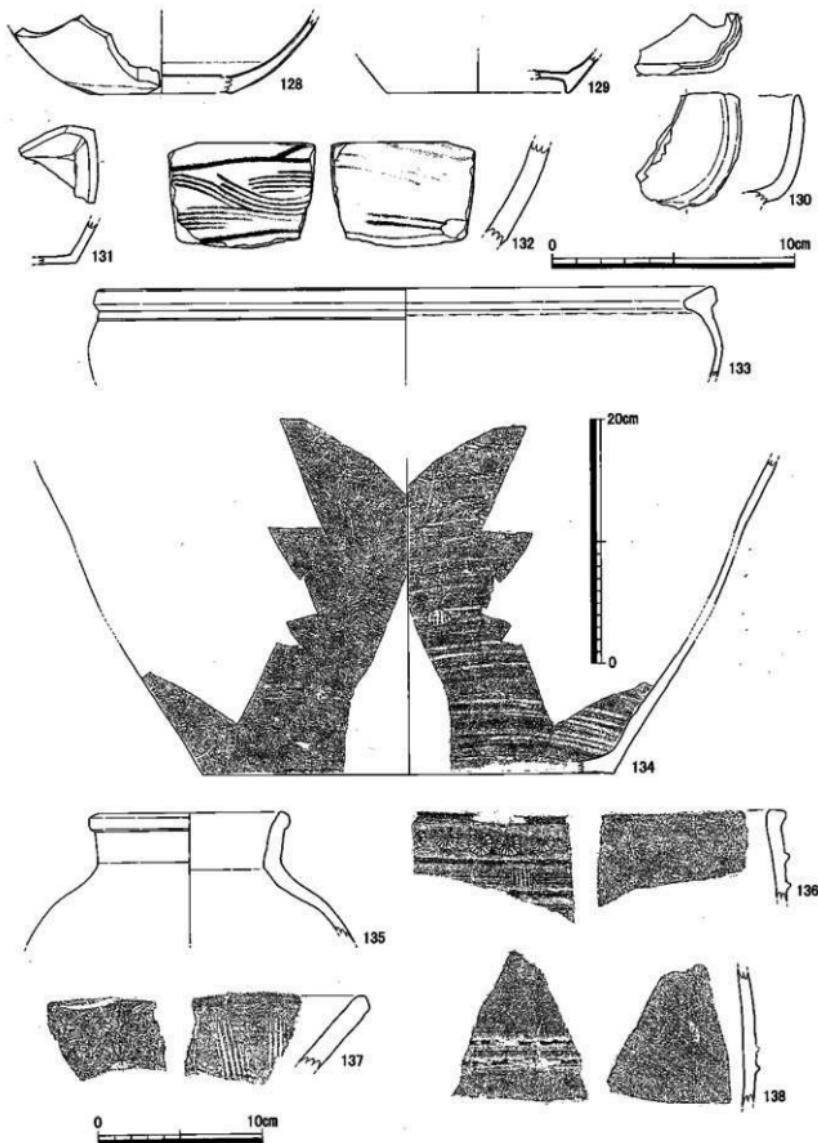
181は非常に分厚い作りで、坏などの模造品であろうか。赤色粒子を多く含んで、色調は淡橙色を呈する。軟質で器面の状態が悪く、糸切痕などは観察できない。

182～270は、小皿の資料である。182～188は、赤色粒子を多く含む胎土で、明赤褐色を呈するものである。体部から口縁部へは外へ大きく開き、185～188のように口縁部が外反するものもある。体部外面には成形時の凹凸を顕著に残す。底面の糸切痕は細かい。

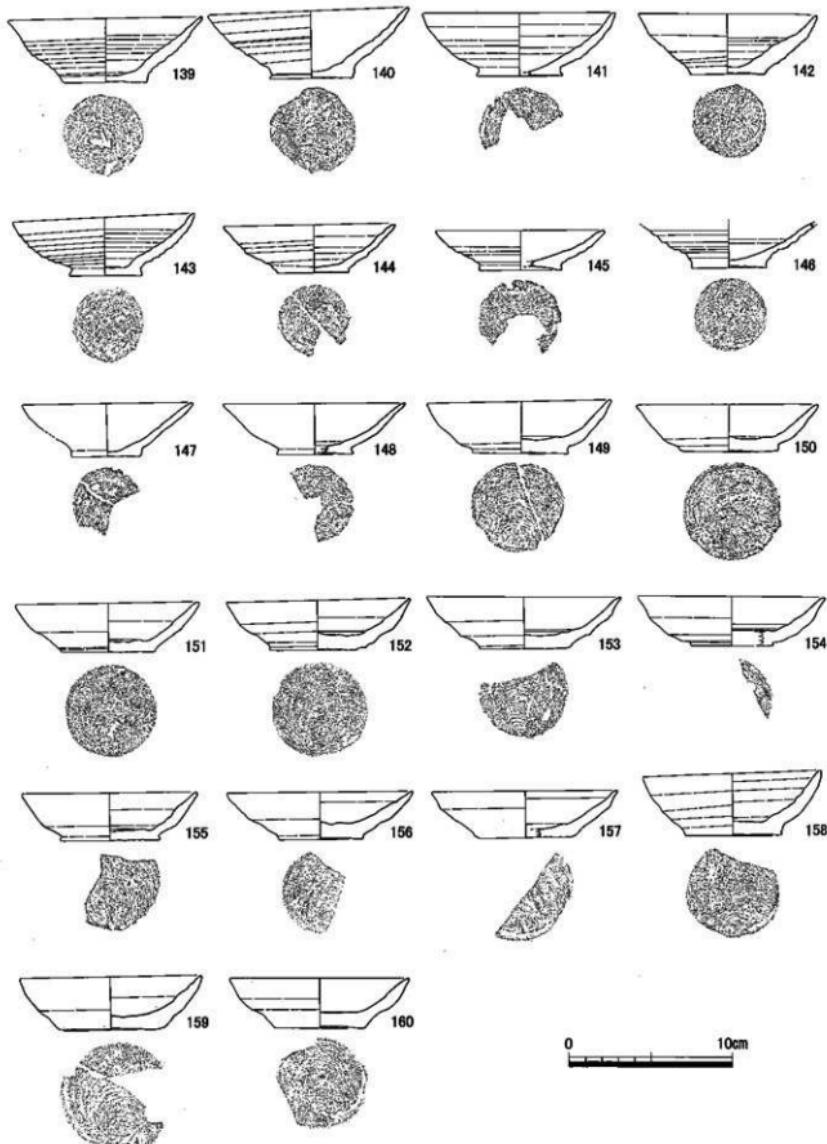
189～215は底面の糸切痕が粗いものである。213以外は胎土に赤色粒子を含む。いずれも内面見込み中央にボタン状もしくはドーナツ状の高まりを持つ。189・196・202・206・208・213には炭化物の付着が認められる。215はやや作りが粗く、底面が大きく歪む。そのため器高は高めである。口縁部に炭化物が付着する。

216～221、226、228は細かい砂粒を多く含む胎土で、器面がざらつくものである。器面の状態が悪く、糸切痕も明瞭でないが、細かく入るものが多いようである。228以外は内面見込み中央にボタン状、ドーナツ状の見込みを持つ。223～225、227は底面に粗い糸切痕を残す。223の内面にはドーナツ状の高まりが明瞭である。216～219には口縁部に炭化物が付着する。

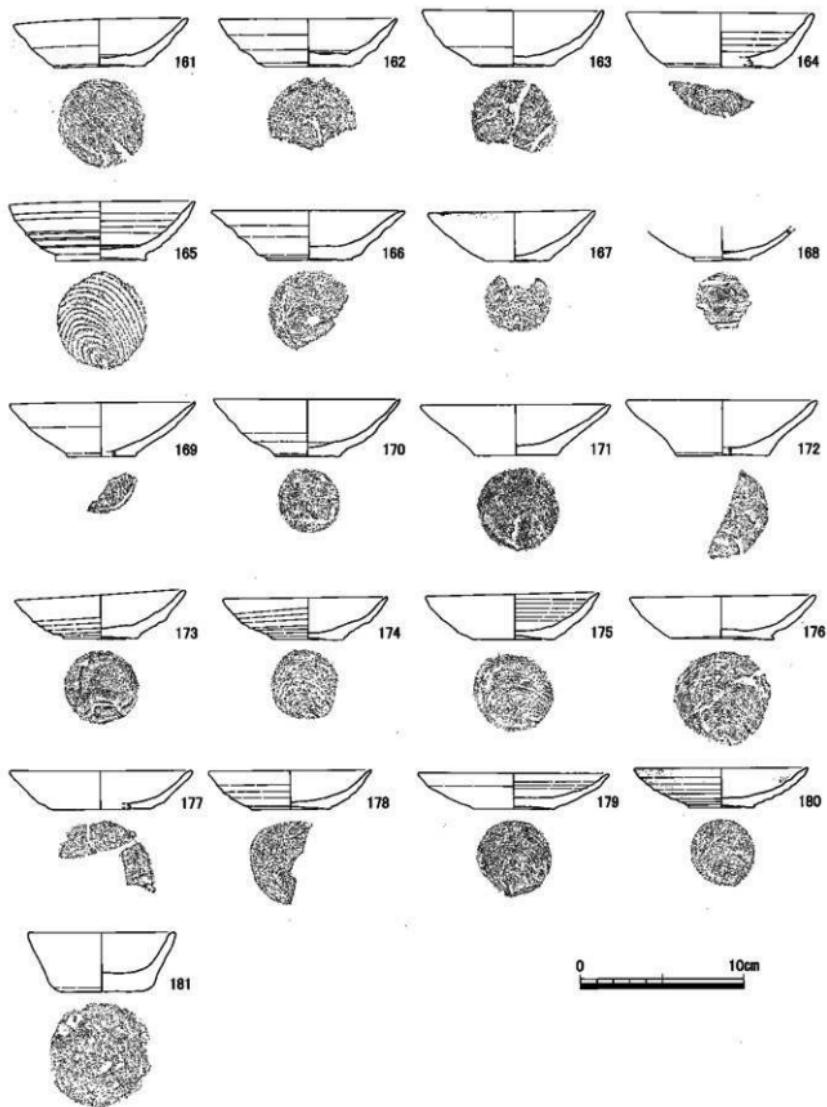
229～245はにぶい褐色、橙色系の色調を呈し、底面の径が小さく、糸切痕が細かく入る一群である。



第53図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑨ (134:S=1/4, 135~138:S=1/3, その他:S=1/2)



第54図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑩ (S=1/3)



第55図 本丸地区曲輪2出土の遺物① (S=1/3)

胎土には赤色粒子の混入が非常に少ない。外面体部に1段程度の段が残る場合もあるが、おむね丁寧になされている。内面見込みは229～238のように中央が低く尖り気味になるものと、239～245のようく低いドーナツ状になるものとが見られる。231・237・239・242・244には口縁部に炭化物の付着がある。

246～248は薄手の作りで、内面見込み中央に高まりを持たない。底面は径が小さく、糸切痕は細かい。247と248は重なった状態で検出した。247には口縁部に炭化物の付着がある。249は橙色を呈して、細かい赤色粒子を含む胎土である。非常に薄い作りでありながら、復元径は他に比べて大きい。

250は白色系の色調で、胎土は精製され、砂粒の混入がほとんどない。口縁部は外反して大きく開く。内面には見込みと体部の境に工具によって圓線を1条入れる。底面には細かい糸切痕が残り、底部の張り出しがケズリ調整によって除去している。251・252は精製された胎土で、底径は小さく、細かい糸切痕が残る。

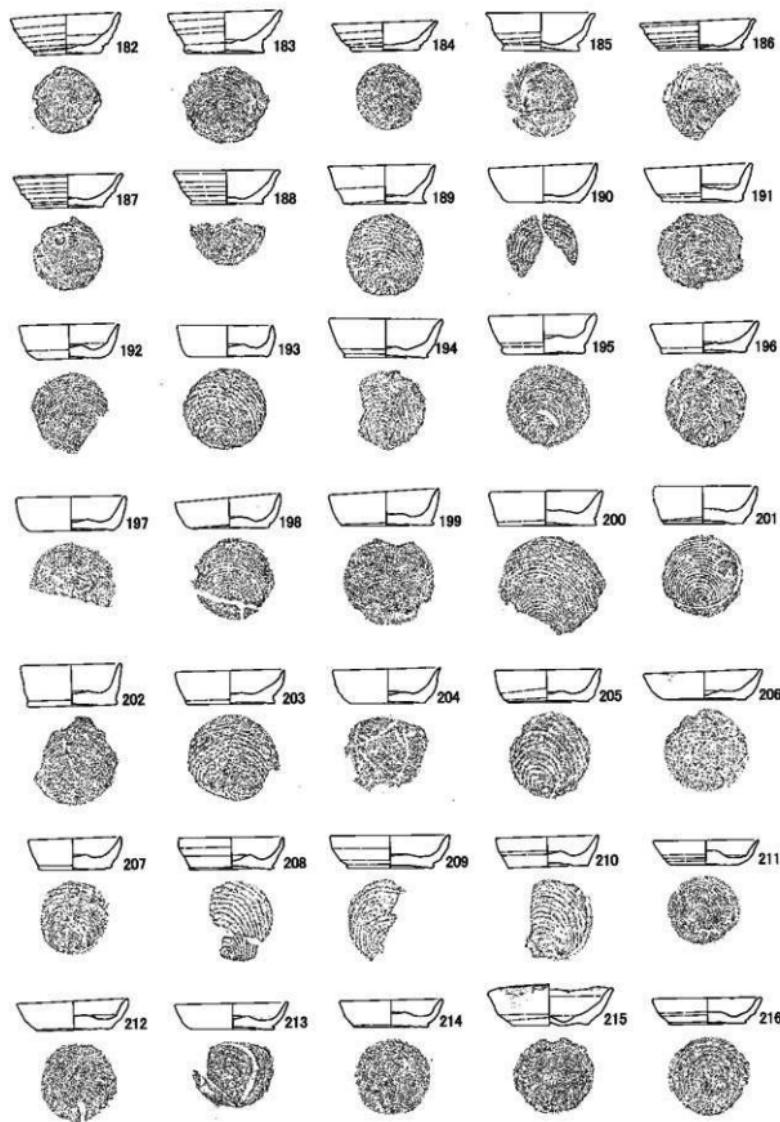
253・254は浅黄色系の色調で、非常に細かい赤色粒子を含む精製された胎土である。非常に軟質で、器面の状態はよくないが、253には細かい糸切痕が残る。255～268は浅黄橙色系の色調で、細かい赤色粒子を含む精製された胎土である。253・254に比べると硬質である。器面の状態があまりよくないが、糸切痕は粗いものが多いようである。269・270は細かい赤色粒子を含む胎土であるが、砂粒の混入が多い。糸切痕は細かい。色調的には浅黄橙色で、白色系の焼き上がりを狙ったものかもしれない。

271～274は小坏である。271は細かい砂粒を多く含み、口縁部は大きく開く。底面には細かい糸切痕が残る。272～274は精製された胎土で白色系の色調を呈する。273・274は金色雲母を含む。非常に薄手の作りである。272は底面に細かい糸切痕を残す。

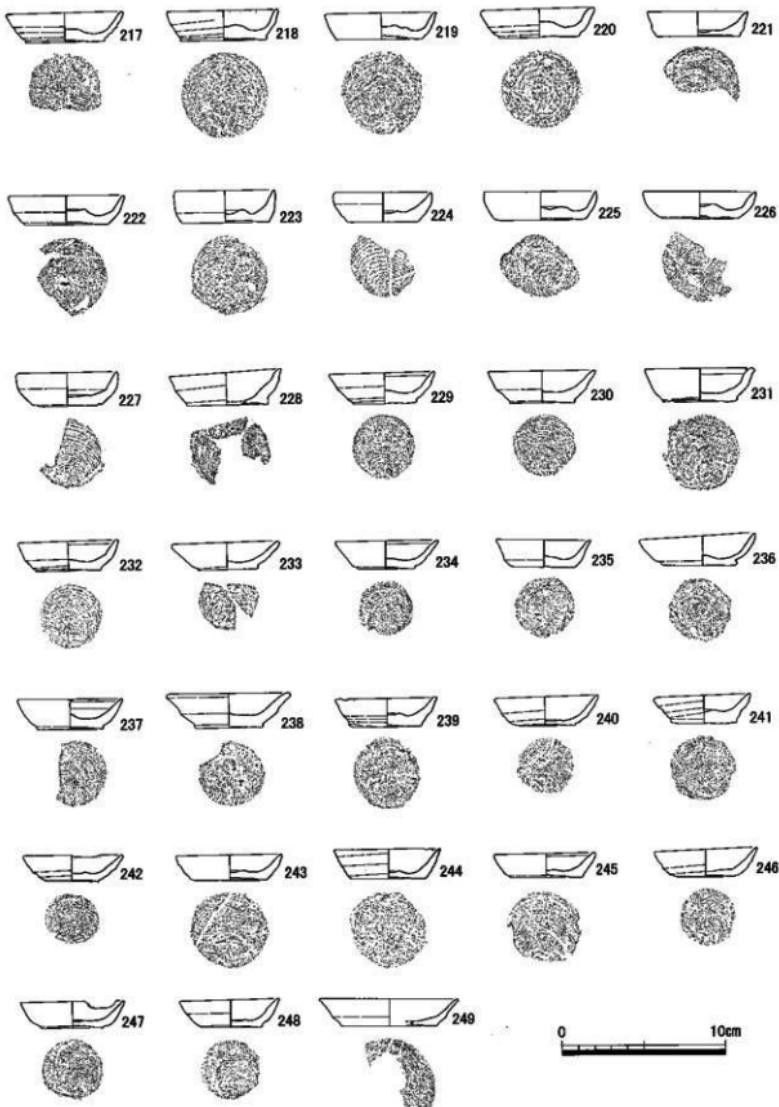
275～283はミニチュア土器である。いずれも回転クロコ成形で、275・278は赤色粒子を多く含む胎土、279は砂粒の混入の多い胎土。281～283は細かい赤色粒子を含む精製された浅黄色の胎土である。

284～306は耳皿である。284～290はミニチュア土器からの作り出しで、口縁部の2箇所を内側へ巻きこむようにして成形している。291は全体を両方から挟み込んで作り出す。292～302は白色系の色調を呈し、精製された胎土で、非常に薄い作りである。底面には糸切痕が残り、299にはスダレ状の圧痕が認められる。外面はいずれも塗汁でなでられる。303～306は細かい赤色粒子を含んでおり精製された胎土で、焼きが甘いためか非常に軟質である。

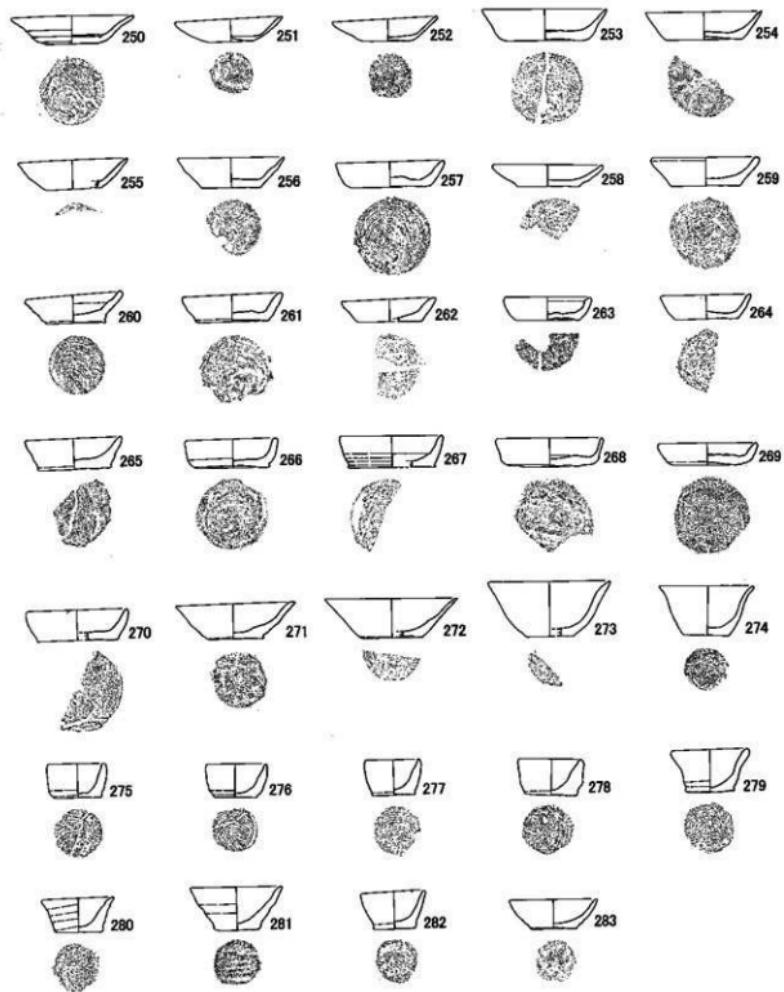
307は石製の風炉である。在地産のアイサイト質安山岩を素材としている。3個の脚を作り出して焚口部を持つが、その両端は欠損する。内面には炭化物の付着が認められる。



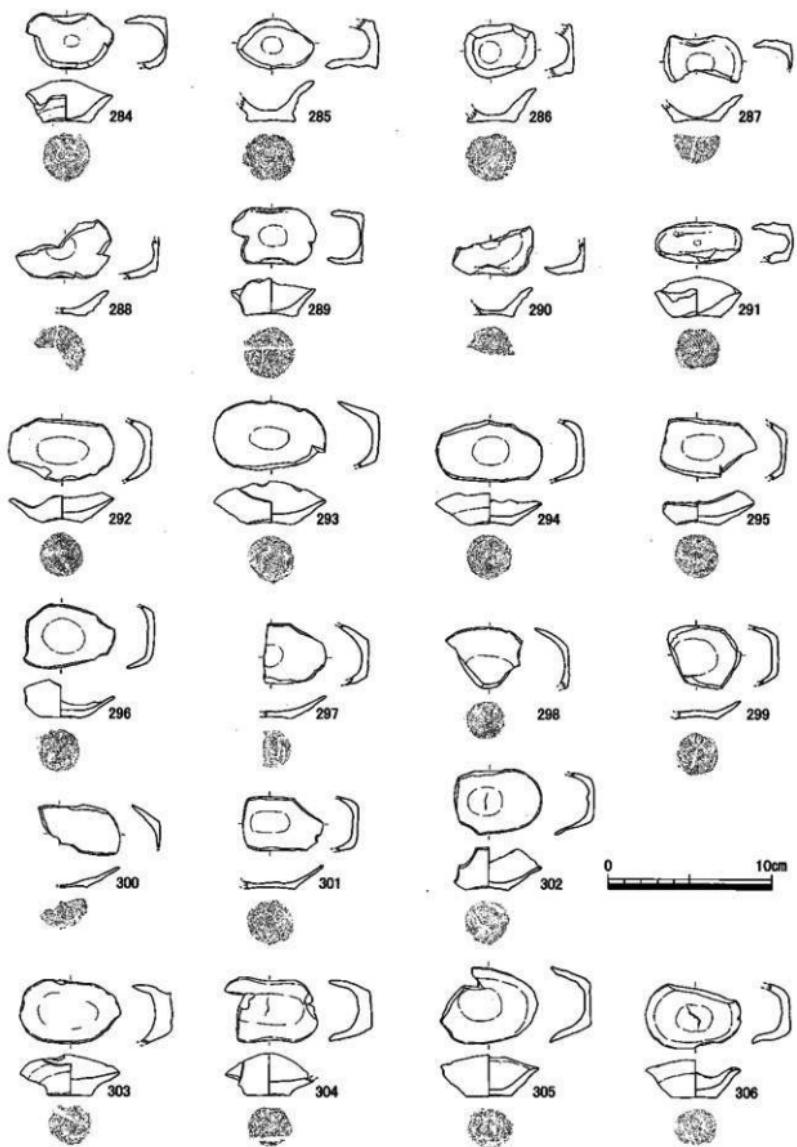
第56図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑫ (S=1/3)



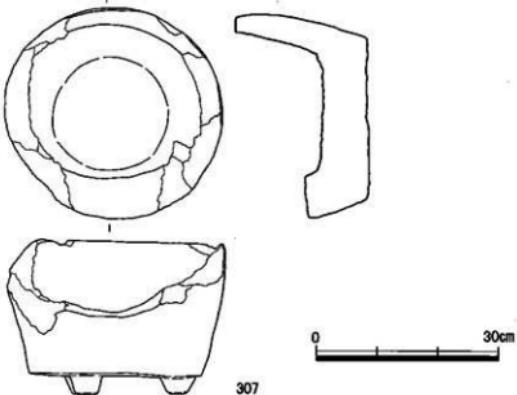
第57図 本丸地区曲輪2出土の遺物① (S=1/3)



第58図 本丸地区曲輪2出土の遺物① (S-1/3)



第59図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑤ (S=1/3)



第60図 本丸地区曲輪2出土の遺物⑯ (S=1/8)

第4表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	グリッド	層位	法量
1	青磁	碗	本丸地区	C3-b	VI層	
2	青磁	碗	本丸地区	C2-d	VII層	復元口径13.4cm
3	青磁	碗	本丸地区	D2-b	VI層	
4	青磁	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
5	青磁	碗	本丸地区	B4-a	V層	
6	青磁	碗	本丸地区	C3-a	III層	底径5.1cm
7	青磁	碗	本丸地区	C2-d	VI層	復元底径4.8cm
8	青磁	碗	本丸地区	C2-d	VI層	復元底径6.1cm
9	青磁	鉢	本丸地区	C2-d	III層	
10	青磁	燭台	本丸地区	B2-d	VI層	
11	白磁	碗	本丸地区	B4-b	IV層	復元口径12.4cm
12	白磁	皿	本丸地区	B3-d	VI層	復元口径9.0cm, 復元底径5.2cm, 器高2.1cm
13	白磁	皿	本丸地区	B3-c	VI層	復元口径10.2cm
14	白磁	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元口径11.0cm
15	白磁	皿	本丸地区	C2-d	VI層	復元口径10.9cm, 復元底径5.9cm, 器高2.4cm
16	白磁	皿	本丸地区	B3-b	IV層	復元口径13.1cm, 復元底径7.2cm, 器高3.4cm
17	白磁	皿	本丸地区	B1-d	V層	復元口径14.7cm, 復元底径7.5cm, 器高3.6cm
18	白磁	皿	本丸地区	B4-b	IV層	復元口径12.0cm
19	白磁	皿	本丸地区	B3-b	II層	復元口径15.8cm
20	白磁	皿	本丸地区	B3-d	V層	復元口径14.2cm
21	白磁	皿	本丸地区	B4-b	II層	
22	白磁	皿	本丸地区	B4-b	IV層	
23	白磁	皿	本丸地区	B3-d	IV層	
24	白磁	皿	本丸地区	B3-d	IV層	復元口径11.6cm
25	白磁	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元底径6.8cm
26	白磁	皿	本丸地区	B3-b	IV層	復元底径7.8cm
27	白磁	皿	本丸地区	B4-d, B3-b	II層, VI層	復元底径8.6cm
28	白磁	皿	本丸地区	B3-d	IV層	復元底径5.9cm
29	白磁	皿	本丸地区	B3-b	IV層	
30	白磁	皿	本丸地区	C2-a	III層	復元口径14.1cm, 復元底径7.9cm, 器高2.1cm

第5表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表(2)

番号	種別	器種	地区	グリッド	層位	法量
31	青花	碗	本丸地区	C2-d	II層	復元口径11.5cm
32	青花	碗	本丸地区	B3-b	II層	復元口径10.8cm
33	青花	碗	本丸地区	B3-d	IV層	復元口径12.7cm
34	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	復元口径13.5cm
35	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
36	青花	碗	本丸地区	C2-c	II層	
37	青花	碗	本丸地区	B3-b	III層	
38	青花	碗	本丸地区	B3-d	IV層	
39	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
40	青花	碗	本丸地区	B4-d	II層	
41	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
42	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
43	青花	碗	本丸地区	B4-b	IV層	
44	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
45	青花	碗	本丸地区	B4-b	IV層	
46	青花	碗	本丸地区	C5-a	III層	
47	青花	碗	本丸地区	C2-d	VII層	
48	青花	碗	本丸地区	C5-a	III層	
49	青花	碗	本丸地区	B4-d	IV層	
50	青花	碗	本丸地区	C2-d	VII層	復元底径5.2cm
51	青花	皿	本丸地区	B1-d	V層	復元口径11.5cm, 復元底径6.4cm, 器高2.3cm
52	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元口径9.1cm, 底径4.0cm, 器高2.1cm
53	青花	皿	本丸地区	B4-b	IV層	復元口径12.0cm
54	青花	皿	本丸地区	B3-b	VI層	復元口径15.0cm
55	青花	皿	本丸地区	C2-a	II層	
56	青花	皿	本丸地区	B3-b	IV層	
57	青花	皿	本丸地区	C2-a	II層	
58	青花	皿	本丸地区	B4-b	IV層	
59	青花	皿	本丸地区	B3-a	II層	
60	青花	皿	本丸地区	B2-c	II層	
61	青花	皿	本丸地区	B4-b	IV層	
62	青花	皿	本丸地区	C5-a	II層	
63	青花	皿	本丸地区	C2-d	III層	
64	青花	皿	本丸地区	C2-a	II層	
65	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元口径17.9cm
66	青花	皿	本丸地区	B4-b	IV層	
67	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	
68	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	
69	青花	皿	本丸地区	B3-b	IV層	復元底径5.5cm
70	青花	皿	本丸地区	B2-c	VII層	復元底径4.5cm
71	青花	皿	本丸地区	B3-b	VII層	復元底径6.1cm
72	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元底径7.6cm
73	青花	皿	本丸地区	B3-b	IV層	復元底径7.7cm
74	青花	皿	本丸地区	B3-d	IV層	復元底径5.6cm
75	青花	皿	本丸地区	B4-d	II層	復元底径5.1cm
76	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元底径5.1cm
77	青花	皿	本丸地区	B4-d	IV層	復元底径5.6cm
78	青花	小环	本丸地区	B3-d	IV層	復元口径6.1cm
79	青花	小环	本丸地区	B3-b	VII層	復元口径5.0cm
80	青花	小环	本丸地区	B2-c	II層	復元口径3.0cm
81	青花	小环	本丸地区	B3-b, B3-d	IV層, V層	
82	青花	小环	本丸地区	B3-b	V層	
83	青花	小环	本丸地区	B2-d	II層	
84	青花	小环	本丸地区	B3-b	V層	復元底径2.7cm
85	青花	小环	本丸地区	B3-b	V層	復元底径2.9cm
86	青花	鉢	本丸地区	C2-b	III層	
87	青花	壺	本丸地区	C2-c	III層	
88	青花	壺	本丸地区	C2-c	III層	
89	環葉輪器	小环	本丸地区	B4-b	II層	復元口径9.6cm
90	蘿蔓輪器	小环	本丸地区	B4-d	IV層	復元口径5.6cm
91	綠釉陶器	小环	本丸地区	B3-b	V層	復元口径6.0cm, 復元底径3.2cm, 器高1.0cm
92	綠釉陶器	小环	本丸地区	B4-d	IV層	復元底径4.5cm
93	蘿蔓輪器	人形	本丸地区	B2-d	II層	
94	綠釉陶器	-	本丸地区	C2-d	II層	
95	綠釉陶器	-	本丸地区	C2-c, D2-b	III層	

第6表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表③

番号	種別	器種	地区	グリッド	層位	法量
96	縄輪陶器	—	本丸地区	B2-c, C2-b, C3-a	Ⅰ層	
97	縄輪陶器	—	本丸地区	C2-c	Ⅱ層	
98	縄輪陶器	—	本丸地区	B3-c	Ⅱb層	
99	三形	—	本丸地区	B4-d	Ⅱ層	
100	縄輪陶器	—	本丸地区	B5-b	Ⅳ層	
101	縄輪陶器	—	本丸地区	C2-a	Ⅱ層	
102	華南三形	壺	本丸地区	C2-d	Ⅱ層	
103	華南三形	壺	本丸地区	C3-a	Ⅱ層	
104	華南三形	壺	本丸地区	C3-c	Ⅲ層	
105	華南三形	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
106	華南三形	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
107	華南三形	壺	本丸地区	B2-d	V層	
108	華南三形	壺	本丸地区	D2-b	Ⅱ層	
109	華南三形	壺	本丸地区	C3-c	Ⅲ層	
110	華南三形	壺	本丸地区	B4-c	Ⅱ層	
111	法花	壺	本丸地区	B2-d	Ⅱ層	
112	法花	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
113	法花	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
114	法花	壺	本丸地区	C3-c	V層	
115	法花	壺	本丸地区	C3-a	Ⅱ層	
116	法花	壺	本丸地区	C3-a	Ⅱ層	
117	法花	壺	本丸地区	B3-c	Ⅱ層	
118	法花	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
119	法花	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
120	法花	壺	本丸地区	B2-c	Ⅱ層	
121	法花	壺	本丸地区	C2-d	Ⅱ層	
122	法花	壺	本丸地区	C2-d	Ⅱ層	
123	法花	壺	本丸地区	C2-d	V層	
124	法花	壺	本丸地区	B2-d	Ⅱ層	
125	法花	壺	本丸地区	D2-b	Ⅱ層	
126	法花	壺	本丸地区	C2-b	Ⅱ層	
127	法花	壺	本丸地区	C2-d	V層	
128	灰輪磁器	皿	本丸地区	B3-b	Ⅳ層	復元底径5.6cm
129	灰輪磁器	—	本丸地区	B3-b	Ⅱ層	復元底径7.5cm
130	灰輪磁器	皿	本丸地区	B4-d	IV層	
131	陶器	—	本丸地区	B2-d	V層	
132	縄輪陶器	壺	本丸地区	C2-a	Ⅱ層	
133	陶器	壺	本丸地区	C2-c, D2-b	Ⅳ層	復元口径37.6cm, 復元体部最大径38.9cm
134	陶器	壺	本丸地区	B3-c, B4-a, B4-c	V層, VI層	復元底径33.8cm
135	陶器	壺	本丸地区	C2-c	VI層	復元口径11.1cm

第7表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表④

番号	種別	器種	地区	グリッド	出土位置	色調	胎土	件数(cm)			
								外径		内径	
								表面	底面	高さ	
136	瓦質土器	火鉢	本丸地区	B4-a	電柱	に赤い黄褐色	長石、石英、赤色粒子、金色顔料				
137	瓦質土器	壺	半丸地区	B3-d	電柱	灰褐色	長石、石英、2~5mmの大砂礫				
138	瓦質土器	火鉢	半丸地区	B4-a	電柱	に赤い黄褐色	長石、石英、金色顔料				
139	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	明赤褐色	明赤褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.8	5.0	4.0
140	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	明赤褐色	明赤褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	12.1	5.1	4.3
141	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	明赤褐色	明赤褐色	長石、石英、赤色粒子	11.7	5.2	3.0
142	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	明赤褐色	明赤褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.9	4.5	3.7
143	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅黄色	浅黄色	長石、赤色粒子	11.1	4.4	3.8
144	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	電柱	赤褐色、黒褐色、暗褐色、黑色	赤褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.4	4.3	2.9
145	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	電柱	浅黄色	浅黄色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.2	(5.0)	(2.4)
146	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	電柱	浅黄色	浅黄色	長石、石英、角閃石、赤色粒子			4.4
147	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.3	4.1	3.2
148	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	電柱	浅色	浅色	長石、角閃石、赤色粒子	11.0	4.6	(3.1)
149	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.1	5.8	3.2
150	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.0	5.9	3.0
151	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.0	5.7	3.1
152	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.1	5.8	3.2
153	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.7	5.4	3.2
154	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	浅色	浅色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.4	(5.0)	3.0
155	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	電柱	に赤い褐色	に赤い褐色	長石、石英、角閃石	(19.6)	(6.1)	(3.9)
156	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	電柱	淡色、黒褐色	淡色	長石、角閃石	(11.1)	(5.0)	2.9
157	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	H4-c	に赤い褐色、に赤い青褐色	に赤い褐色	長石、石英、角閃石	(11.2)	(5.0)	(2.6)
158	土師質土器	壺	半丸地区	C2-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.8	5.8	4.0
159	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	に赤い褐色、に赤い青褐色	に赤い褐色、青褐色	長石、石英、角閃石	(11.1)	6.0	3.3
160	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	に赤い褐色	に赤い褐色	長石、石英、角閃石	(10.4)	(5.4)	3.1
161	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.0	5.4	2.9
162	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	褐色、赤褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.8)	5.4	2.9
163	土師質土器	壺	半丸地区	C2-b	V管	褐色	褐色	長石、角閃石、赤色粒子	(10.9)	5.1	3.4
164	土師質土器	壺	半丸地区	C3-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.4)	(6.6)	3.2
165	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.4)	5.6	3.6
166	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	に赤い褐色	に赤い褐色	長石、角閃石、赤色粒子	(11.7)	(5.2)	3.0
167	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.0	3.9	3.0
168	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	灰白色	灰白色	長石、白色粘土			3.4
169	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	灰白色	灰白色	赤色粒子	(11.5)	(4.2)	2.5
170	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	に赤い青褐色	に赤い青褐色	長石、角閃石、赤色粒子	(11.4)	3.9	3.5
171	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	褐色	褐色	細粒、質粗、に赤い褐色	(11.5)	5.9	3.1
172	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	に赤い青褐色	に赤い青褐色	赤色粒子	(11.5)	(5.6)	3.4
173	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.4	4.5	3.0
174	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	9.9	4.3	2.7
175	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	黄褐色	黄褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.4	4.9	2.9
176	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	に赤い青褐色	に赤い青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.2	6.2	2.5
177	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.3)	(6.5)	2.3
178	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	に赤い青褐色	に赤い青褐色	長石、石英、角閃石	9.9	4.7	3.4
179	土師質土器	壺	半丸地区	B4-d	V管	に赤い青褐色	に赤い青褐色	長石、石英、角閃石	(11.6)	4.9	2.2
180	土師質土器	壺	半丸地区	B4-h	電柱	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.0)	3.9	2.5
181	土師質土器	壺	半丸地区	B3-c	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	9.9	5.1	3.6
182	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	4.0	2.5
183	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.8	4.7	2.6
184	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	3.9	1.8
185	土師質土器	壺	半丸地区	C3-d	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.8	2.4
186	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.9	4.9	1.9
187	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	青褐色	青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.7)	4.3	2.0
188	土師質土器	壺	半丸地区	B3-d	V管	赤褐色	赤褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.2)	4.4	2.1
189	土師質土器	壺	半丸地区	B4-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.1	2.4
190	土師質土器	壺	半丸地区	C2-b	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.5	2.0
191	土師質土器	壺	半丸地区	C3-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.8	2.4
192	土師質土器	壺	半丸地区	C2-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.1)	4.0	2.1
193	土師質土器	壺	半丸地区	C2-c	V管	に赤い青褐色、褐色	に赤い青褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	5.8	5.0	1.9
194	土師質土器	小壺	半丸地区	C3-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.9)	5.2	2.4
195	土師質土器	小壺	半丸地区	C2-c	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.8	2.4
196	土師質土器	小壺	半丸地区	B4-c	V管	暗褐色	暗褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.1	1.9
197	土師質土器	小壺	半丸地区	C2-b	V管	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.6)	5.2	2.1

カッコ付者は鑑定結果

第8表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表⑤

番号	種類	器種	地区	グリッド	出土層位	色調			胎土	計量(cm)			
						外側		底面		口径	底径	器高	
						内面	底面						
158	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4, C4-5	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色	6.4	4.7	2.1
199	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	灰白色、褐色	灰白色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	5.7	2.3
200	土師質土器	小皿	本丸地区	D2-4	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	4.9	2.1
201	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	褐色	灰褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.9	2.3
202	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	(6.1)	(5.6)	2.6
203	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	5.4	2.1
204	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	4.6	2.2
205	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	灰褐色	明赤褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.2	4.9	2.0
206	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	褐色、明赤褐色	褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	7.1	5.3	1.9
207	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	三層	褐色、赤褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.6	4.0	2.0
208	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	灰褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	(6.2)	5.1	1.9
209	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	褐色	褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	(7.3)	(5.1)	2.0
210	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-4	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.9	1.8
211	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.1	1.5
212	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、赤色粒子	6.8	4.7	1.8
213	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英	6.8	5.0	1.7
214	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	にぼい褐色	褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、赤色粒子	6.3	4.6	1.7
215	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-4	三層	褐色	にぼい褐色、褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、赤色粒子	7.7	4.5	2.3
216	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	三層	褐色	褐色	褐色	灰白色	灰白色、石英、赤色粒子	6.5	4.7	1.5
217	土師質土器	小皿	本丸地区	C5-4	三層	褐色	にぼい褐色、褐色	褐色	にぼい褐色、褐色	灰白色、石英、赤色粒子	7.0	4.8	1.8
218	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-4	三層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、赤色粒子	6.8	5.2	1.9
219	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	明赤褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英	6.7	5.5	1.7
220	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.8	4.8	1.8
221	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英	(6.1)	(5.1)	1.5
222	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	褐色	褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	(6.0)	5.1	1.8
223	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	褐色	褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、赤色粒子	(6.0)	5.4	2.0
224	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英	(5.9)	4.3	1.8
225	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	褐色	褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英	(5.8)	(5.8)	1.8
226	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英、角閃石	(6.0)	(4.7)	1.7
227	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-4	V層	褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英	(6.0)	4.2	2.3
228	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-4	V層	明赤褐色	明赤褐色	褐色	明赤褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	4.9	2.2
229	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	明赤褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	3.8	2.0
230	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	灰青褐色	灰青褐色	褐色	灰青褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	3.9	2.6
231	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	灰青褐色	灰青褐色	褐色	灰青褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.5	2.1
232	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、角閃石	6.6	4.0	1.9
233	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、角閃石	6.3	3.5	1.7
234	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	3.5	1.8
235	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.8	3.7	1.7
236	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、赤色粒子	7.0	4.4	2.0
237	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.5	2.1
238	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、角閃石	(7.2)	4.1	2.1
239	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.8	4.1	1.8
240	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	4.6	1.6
241	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.7	3.9	1.9
242	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石	6.0	3.3	1.8
243	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	4.5	1.6
244	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.8	4.6	1.8
245	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、角閃石	5.6	4.3	1.5
246	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.0	3.6	1.8
247	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	3.6	1.5
248	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.8	3.6	1.8
249	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、赤色粒子	(8.0)	(5.8)	1.7
250	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色	(7.5)	3.2	1.7
251	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	白鷺岩	6.5	2.8	1.5
252	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	白色鹿鳴	6.4	3.0	1.6
253	土師質土器	小皿	本丸地区	C3-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、赤色粒子	(7.0)	4.7	2.0
254	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色	7.1	4.0	1.7
255	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、赤色粒子	(6.7)	(3.6)	1.8
256	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、赤色粒子	(6.0)	(3.6)	1.8
257	土師質土器	小皿	本丸地区	C4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、石英、角閃石、赤色粒子	5.5	4.5	1.6
258	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	褐色	褐色	褐色	褐色	灰白色、赤色粒子	(6.0)	(3.6)	1.3
259	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-4	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	褐色	にぼい褐色	灰白色、石英、赤色粒子	(6.0)	(4.2)	1.8

カッコ付きは複数個

第9表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表⑥

番号	種別	器種	地区	グリッド	出土層位	色調	胎土	寸法(cm)				
								口径	底径	高さ		
260	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色、浅黄色	にぼい緑色、明黄色	灰白、赤色粒子	5.8	3.7	1.9	
261	土師質土器	小皿	本丸地区	C7-c	V層	褐色	褐色	灰白、赤色粒子	4.0	4.4	1.7	
262	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	II層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子	5.7	3.8	1.5	
263	土師質土器	小皿	本丸地区	C7-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子	(5.2)	(3.0)	1.4	
264	土師質土器	小皿	本丸地区	D3-b	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、赤色粒子	(5.3)	(3.0)	1.5	
265	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	(5.6)	4.4	1.9	
266	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、石英	5.3	4.3	1.8	
267	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-d	V層	褐色	褐色	赤色粒子	(6.0)	(4.0)	1.9	
268	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、石英、赤色粒子	(6.4)	5.4	1.8	
269	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	灰白、石英、赤色粒子	6.0	4.6	1.4	
270	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-d	V層	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	灰白、赤色粒子	(6.1)	(5.0)	1.9	
271	土師質土器	小杯	本丸地区	B4-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子	7.0	5.3	2.3	
272	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色	浅黄色	白色颗粒	(8.1)	(3.9)	2.4	
273	土師質土器	小杯	本丸地区	B3-d	V層	灰褐色	浅黄色	白色颗粒	(7.2)	(2.8)	2.4	
274	土師質土器	小杯	本丸地区	B3-d	V層	灰白色	灰白色	金色颗粒、白色颗粒	5.7	2.7	3.1	
275	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子	3.4	2.9	2.1	
276	土師質土器	小皿	本丸地区	C7-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英	3.6	2.6	2.1	
277	土師質土器	小皿	本丸地区	D3-b	V層	褐色	褐色	灰白、石英	(3.2)	2.4	2.2	
278	土師質土器	小皿	本丸地区	C7-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子	3.8	3.2	2.3	
279	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-d	V層	にぼい褐色	にぼい褐色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	4.7	2.9	2.6	
280	土師質土器	小皿	本丸地区	C7-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子	4.3	2.7	2.2	
281	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色	浅黄色	浅黄色	5.5	2.6	2.8	
282	土師質土器	小皿	本丸地区	B3-d	V層	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	灰白、赤色粒子	3.8	2.6	2.5	
283	土師質土器	小皿	本丸地区	B4-c	V層	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	灰白、赤色粒子	(3.2)	2.6	1.8	
284	土師質土器	耳皿	本丸地区	B1-b	V層	褐色	褐色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	2.9	2.5		
285	土師質土器	耳皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	3.0	3.2		
286	土師質土器	耳皿	本丸地区	B1-b	V層	褐色	にぼい黄褐色	褐色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	2.9		
287	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	褐色	褐色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	2.8	2.5		
288	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-c	V層	褐色	褐色	灰白				
289	土師質土器	耳皿	本丸地区	B4-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、角閃石、赤色粒子	3.1	2.1		
290	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	褐色	褐色	灰白、石英、赤色粒子			2.4	
291	土師質土器	耳皿	本丸地区	B4-c	V層	褐色	褐色	灰白、石英、角閃石	5.3	3.0	2.4	
292	土師質土器	耳皿	本丸地区	B4-c	V層	灰白色	灰白色	灰白、白色颗粒	6.5	2.6		
293	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-c	V層	灰白色	浅黄色	金色颗粒、白色颗粒	6.5	2.7	2.6	
294	土師質土器	耳皿	本丸地区	B4-c	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、白色颗粒、白色颗粒	6.4	2.6		
295	土師質土器	耳皿	本丸地区	C7-c	V層	灰白色	灰白色	灰白、赤色粒子			2.7	
296	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、石英、金色颗粒			2.2	
297	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	灰白色	灰白色	白色颗粒				
298	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	灰褐色	浅黄色	灰白			2.2	
299	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	灰褐色	浅黄色	白色颗粒				
300	土師質土器	耳皿	本丸地区	B4-d	V層	灰褐色	浅黄色	灰白			1.8	
301	土師質土器	耳皿	本丸地区	B2-d	V層	灰白色	灰白色	灰白			3.0	
302	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	灰褐色、灰白色	浅黄色	石英			2.7	
303	土師質土器	耳皿	本丸地区	C7-c	V層	灰褐色	にぼい黄褐色	灰白、赤色粒子	6.2	2.8	2.5	
304	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-d	V層	灰褐色	浅黄色	灰白、石英、赤色粒子	2.6	2.5		
305	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-c	V層	にぼい黄褐色	にぼい黄褐色	灰白、石英、赤色粒子	2.7	2.5		
306	土師質土器	耳皿	本丸地区	B3-c	V層	灰褐色	浅黄色	石英、赤色粒子	5.9	2.7	2.3	

カッコ付きは複数

第10表 本丸地区曲輪2出土遺物観察表⑦

番号	種別	器種	地区	グリッド	層位	法量
307	石製品	墨炉	本丸地区	B3-c	Ⅴ層	口径36.0cm、底径28.0cm、高さ14.5cm、奥深さ3.0cm

## (2) 曲輪3ほかの調査

### 概要

二ノ丸側から本丸への進入の在り方を確認することを主目的とし、曲輪3周縁を中心に10箇所のトレンチ調査を実施した（第5図）。この課題に対する明快な解答は得られなかったものの注1）、調査の結果として次のような成果が得られた。主だった遺構としては、トレンチ5において溝状遺構の一部を検出した。曲輪2と曲輪3の間に設けたトレンチ1では、人工的な盛土層を確認した。曲輪3においては、20~30cm程度の浅い深度で遺構を検出する場合が多く、現況地形が廃城時の地形をほぼ踏襲していることが判ってきた。また、旧地形の起伏を大規模に切り盛りすることで、広大な曲輪3を築いていることも概ね明らかとなった。各トレンチの土層であるが、調査後に大まかな層の統一を行っている。I層は表土、II層は旧耕作土と考えられる層、V層は幾つかのトレンチ深部でみられた明るい黄色系の硬化粘土層を充てている。残る堆積土のうち、地山に近いと考えられるものをIV層、曲輪造成土を含むその他をIII層としている。各層の同じ層番号が、層の一致を示すものではない。以下、各トレンチの調査状況について説明する。

### 調査成果

#### トレンチ1（第61図）

曲輪2下西端付近に設けた南北5m×東西1mの調査区（トレンチ1-1）を基本とし、調査の過程でサブトレンチ（トレンチ1-2）を追加した。地表に近い部分は、樹木の根などによる搅乱の影響も強いようである。旧耕作土などと考えられるII層までを取り除くと、1m強の厚さに渡って、黄色系、灰色系、黒（褐）色系などの細かい層が折り重なる様に堆積していた。およそ版築風で、人工的な盛土層と考えられるものである。トレンチ1-1中ほどの下位において特に細かな堆積となっていて、また盛土を南側から土留めするような、1m程度の自然石を検出した。西側に設けたサブトレンチでも同様の状況がみられ、この土留め状の自然石は東西方向に配列されていることが判った。盛土層の性格について断定は難しいが、可能性としては小規模な平場の造成、あるいは建物の基礎などが考えられよう。範囲の把握を含め、周辺の追加調査が今後必要であろう。このほか、地山の一部と考えられるV層（黄色系の硬化粘土層）の上面でピット状の遺構を検出した。これについては半裁認を行ったが、深さがあまりなく、建物跡の一部と積極的に評価することは難しい。

#### トレンチ2（第62図）

曲輪2下に設けた南北1m×東西10mの調査区である。調査区の東半においては、地山とみなされる無遺物層が地表面より浅い深度で検出されるのに対し、西半においては地山面が大きく落ち込んでいる状況がみられた。また落ち込みの内部には、5~10cm程度の大量の自然石が、しまりのない土砂とともに崩落堆積したような状況がみられた。曲輪2の南側斜面から崩落した可能性などが考えられるが、定かではない。このほか調査区の南西隅において硬化粘土層に掘り込むピットがみられた。

#### トレンチ3（第63図）

曲輪2下に設けた南北5m×東西1mの調査区である。やや厚めに堆積する旧耕作土を除去した段

階で、細かい炭化物粒を含むピット状遺構を検出した。狹小なトレンチであり、史跡内でもあることから検出のみに留めているが、やや不整形であり検出面の傾斜もかなり強いことから建物に伴う遺構の可能性は低いと考えられる。南端の無遺構部分を深掘し、地山の硬化粘土層が大きく落ち込む状況を確認している。

#### トレンチ4（第64図）

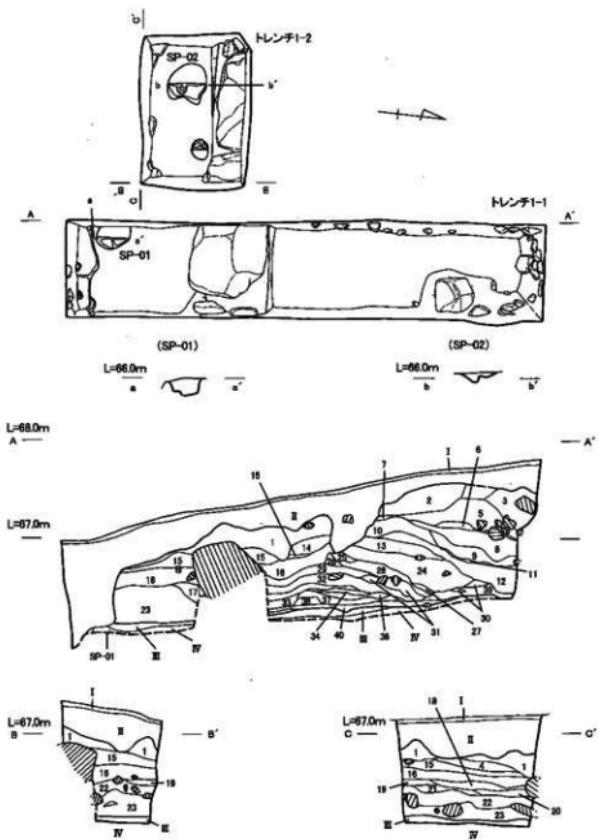
曲輪3南辺の西端付近に設けた南北1m×東西5mの調査区である。地表より30cm程の深度に遺構面が見られ、土坑と溝状遺構を検出している。土坑（SK-01）は一部を検出したのみで、正確な規模は把握していない。断ち割りを行ったところ、断面はすり鉢に落ちる形状である。溝状遺構（SD-01）としたものは、長さは不明であるが、東西幅は30cm程の小規模なものである。深度は最大で15cm程である。埋土に0.5~3cm程度の炭化物粒を多く含んでいる。調査区の西寄りでは遺構が認められなかつた為、深掘して土層堆積の確認を行った。地表面より約90~160cmの深度においては、旧地表とみられる黒褐色土と地山の硬化粘土層が、南側へ強く下る傾斜で堆積していることが判った。旧地表の上層から遺構面をなすⅢ層までは、硬化粘土ブロックを多く含む厚い層であり、下部にみられた強い傾斜をほぼ平坦近くに緩和するような堆積となっている。曲輪の造成に伴う堆積とみることが可能であろう。なお旧地表と考えられる黒褐色土層からは、底面に糸切り痕のある土師器の小片が出土している（図版4参照）。造成時期を検討するうえで参考となるが、この1点をもって細かな時期を決定することは困難か。

#### トレンチ5（第65図）

曲輪3南辺の西寄りに設けた南北1m×東西10mの調査区である。調査区の中央付近から少し西寄りにかけては、耕地利用されていた当時のものと考えられる水路跡が2条残っている。石組の痕跡から地表面観察の段階で視認できていたものである。水路の方向は南北であり、南の曲輪4方向に排水していたのであろう。およそ水路跡付近から西側の範囲においては、旧耕作土を除去した段階で玉砂利状の小礫が敷き詰められている状況を確認した。この直上においては、炭化物や焼土塊などもみられ、上部で火が焚かれたようである。性格については判然としない。

調査区の東側においては、やや規模の大きい溝状遺構の一部を地表より15~20cm程の深度で検出した。略方向は北西~南東であり、上端での推定幅は約260cmである。深さは最大で110cm程であり、相対的に曲輪の中心側が切り立ち、曲輪の外側はゆるく立ち上がる構造となっている。また曲輪内部側の下端は、幅40cm余りの一筋深い溝状となる。矢板を立てるための杭木の痕などと考えられるが、底には直径10cm余りの小さい掘り込みがみられた。埋土の掘削段階では識別が困難であったが、北壁土層の精査によって、この小溝部分では先行する層を切り込む形で埋土が堆積している事が判った。埋没過程での掘り返しまたは、遺構を改變する形での再利用が行われた可能性が考えられる。遺構の掘り込まれる層は地山の硬化粘土層であるが、この層が地表近くでみられる点もこのトレンチの特徴である。旧地形における尾根筋などの高い部分が平坦化された可能性がある。この点については、トレンチ10の説明で後述する。

溝状遺構の性格について現段階では排水のための施設を想定しておきたいが、曲輪2の調査成果や



【1】 黒色土。腐殖。

【2】 黑色土。

【3】 反オーリーブ色土。弱い粘性あり。1~3mm大の炭化物を少量含む。

【4】 反オーリーブ色土。弱い粘性。1~3mm大の炭化物を少量含む。

【5】 反オーリーブ色土。弱い粘性。灰。

【6】 反オーリーブ色土。

【7】 反オーリーブ色土。

【8】 反オーリーブ色土。弱い粘性。1~3mm大の炭化物を少量含む。根。

【9】 反オーリーブ色土。弱い粘性。根。

【10】 反オーリーブ色土。弱い粘性。根。

【11】 黑色土。

【12】 黑色土。根。

【13】 反オーリーブ色土。弱い粘性。根。

【14】 嫩黃色土。粘質。弱い粘性。根状で根。

【15】 嫩黃色土。粘質。根。

【16】 嫩黃色土。粘質。根。

【17】 嫩黃色土。

【18】 嫩黃色土。弱い粘性。

【19】 嫩黃色土。弱い粘性。

【20】 嫩黃色土。弱い粘性。

【21】 嫩黃色土。弱い粘性。

【22】 嫩黃色土。弱い粘性。

【23】 黑色土。砂礫多く混い。灰。

【24】 嫩黃色土。砂質多く含む。灰。

【25】 反オーリーブ色土。灰。

【26】 反オーリーブ色土。灰。

【27】 反オーリーブ色土。砂質。

【28】 黑色土。

【29】 黑色土。

【30】 反オーリーブ色土。

【31】 反オーリーブ色土。灰。

【32】 黑色土。

【33】 黑色土。少し砂質を含む。灰。

【34】 反オーリーブ色土。粘性強い。

【35】 黑色土。

【36】 黑色土。

【37】 反オーリーブ色土。粘性強い。

【38】 嫩黃色土。

【39】 嫩黃色土。

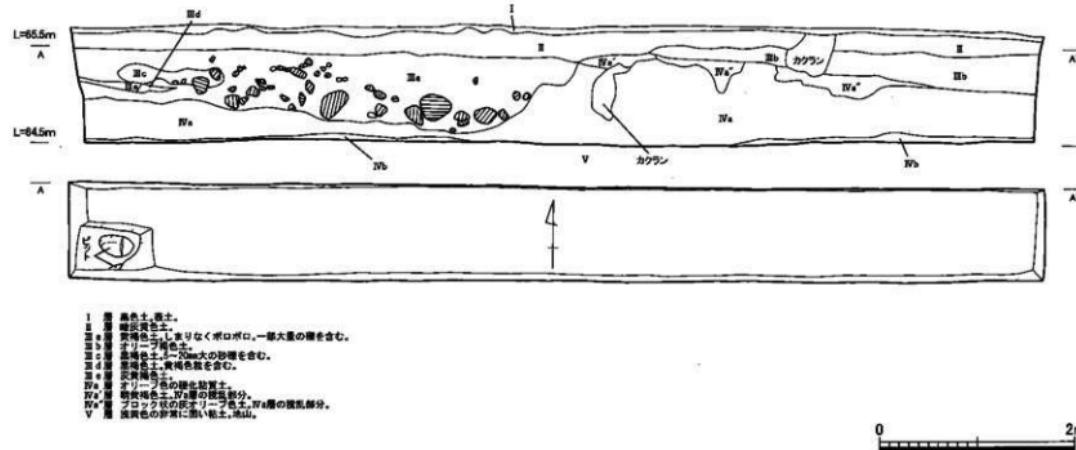
【40】 黑色土。

【41】 反オーリーブ色土。

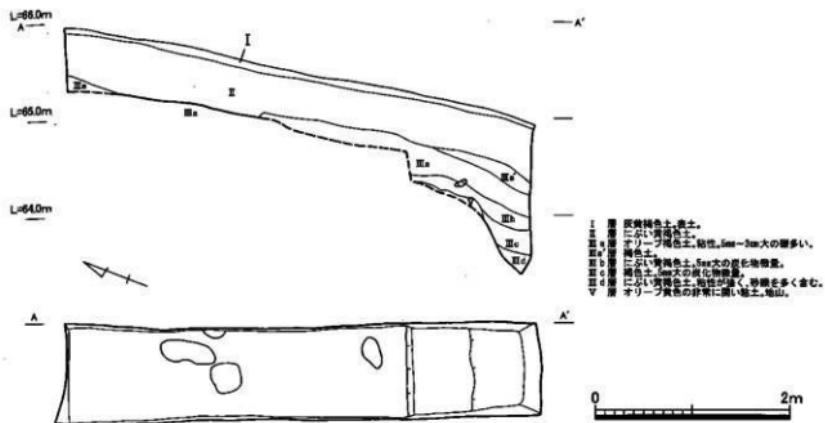
SP-01 嫩黃色土。粘性やや強い。1~3mm大の炭化物を少量含む。

SP-02 嫩黃色土。粘性強い。1~3mm大の炭化物を少量含む。

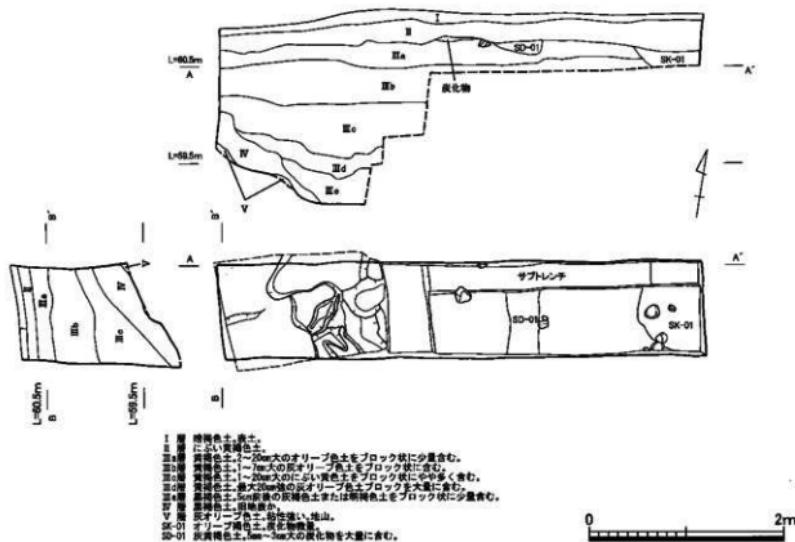
第61図 トレンチ1-1・トレンチ1-2実測図 (S=1/50)



第62図 トレンチ 2 実測図 (S=1/50)



第63図 トレンチ3実測図 (S=1/50)



第64図 トレンチ4実測図 (S=1/50)

今後の調査と併せて詳細に点検していく必要があるだろう。曲輪の外側に面する緩やかな立ち上がり部分だが、掘り込まれている粘土層が非常に硬質で、周辺地形の最頂部が曲輪1付近であることから自然の流路とは考えにくい。したがって、この部分についても人為的な造構と判断される。

#### トレンチ6（第66図）

曲輪4西端付近に設けた南北1m×東西5mの調査区である。表土、旧耕作土の下位に遺物包含層二枚を挟み、地山の硬化粘土層に至る。地山の硬化粘土層が造構面を成しており、傾斜はほとんど無い。造構として直径40cm前後のピットを概ね直線上に並ぶ形で検出した。建物跡の可能性も十分考えられるが、史跡内でもあり、周囲の拡張と造構プランの点検を踏まえてからの調査が有効と判断した為、造構の掘削は今回控えた。このほか調査区の東隅付近においては、5~20cm大ほどの自然礫が崩落堆積したような状況を検出している。

#### トレンチ7（第67図）

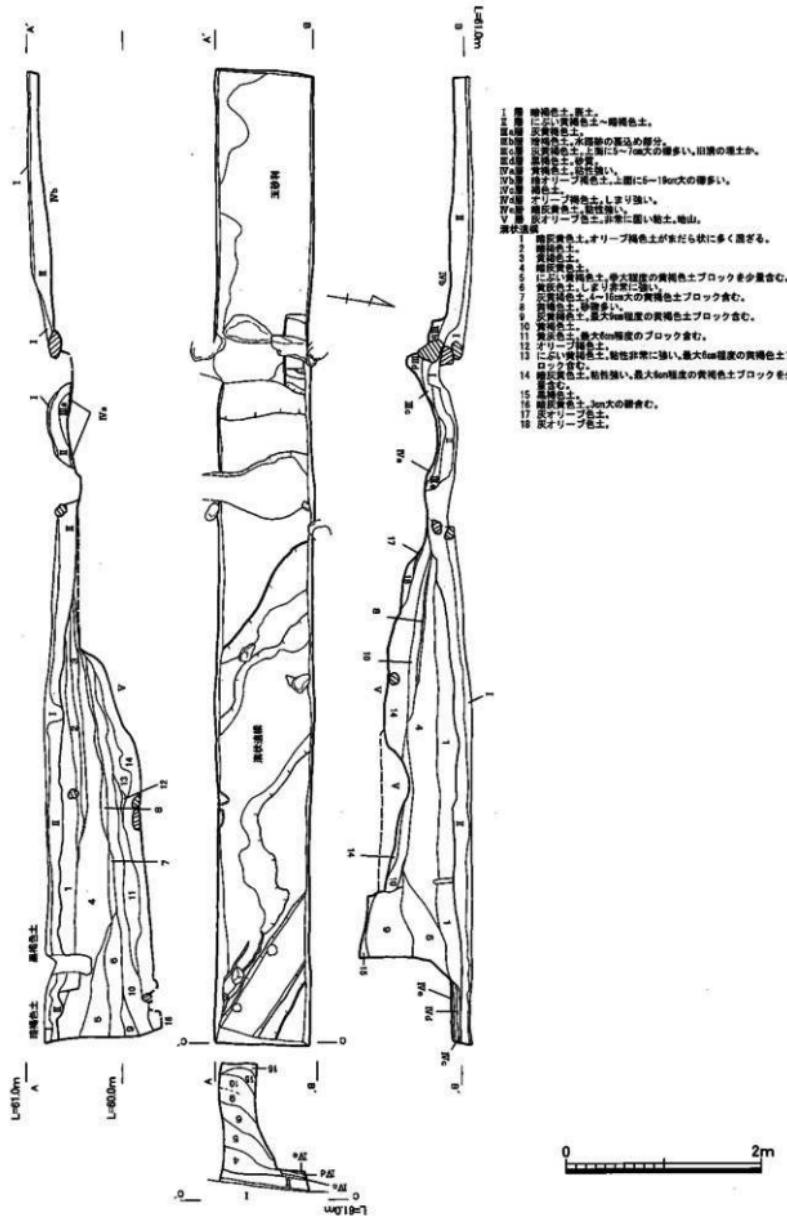
曲輪3南辺の中央付近に設けた南北1m×東西10mの調査区である。調査区の西隅付近において、旧耕作土下に幅50cm程の石組水路跡を検出した。耕作期の暗渠と考えられる。地表より30cm程度の深度が造構面とみなされる。調査区中央から東寄りにかけては炭化物の広がりがあり、その上部に土師器が多く散布している状況であった。また調査区中ほど南寄りで、数点の陶磁器が重なる様にして出土した。胞衣のようなものか（図版6参照）。調査区東隅は無造構であることから、土層確認の為の深掘を行った。ここにおいても160cm程の旧地形の落ちを埋めるような盛土層を確認した。トレンチ4と堆積層の構成は異なり、版築のような堆積状況となっている。

#### トレンチ8（第68図）

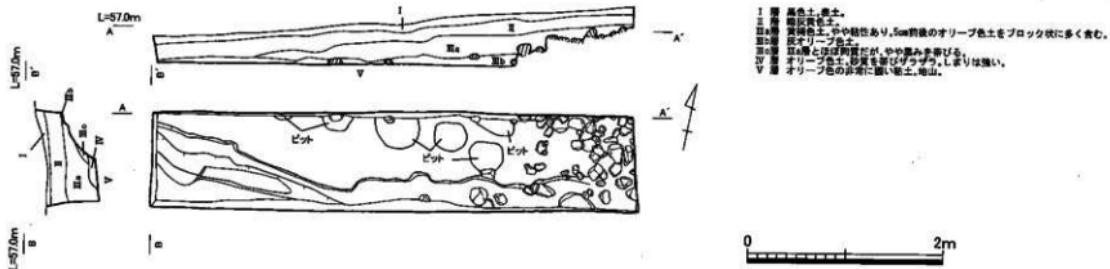
曲輪3南辺の東寄りに設けた南北1m×東西10mの調査区である。地表より30cm程の深度を造構面として捉える事ができる。調査区のおよそ東半では層序が整然としており、造構面の上層にあたるⅢa層から出土した土師器には、残りの良いもの多く見受けられた。この付近の造構掘削は前述の理由で控えた。調査区西半部では擾乱の影響が多く、結果やや過掘気味となったが、Ⅲb層・Ⅲc層としたオリーブ色系の粘質土上面が基本的な造構面である。あまり形の整わない溝状の落ち込み、40cm四方程度の自然石の周間に炭化物が集中している状況などがみられた。性格は今ひとつ判らない。またこの付近は先に述べたⅢ層がみられず、旧耕作土系のⅡ層に直接覆われている恰好であるため、日野江城が機能していた当時の状況とみてよいか、今後の調査も踏まえて慎重な判断が必要である。なお、調査区の西隅にみられる石組は、南側の地表面にみられるものと一連であり、高さとしては一石分のみの高さで並べられている。

#### トレンチ9（第69図）

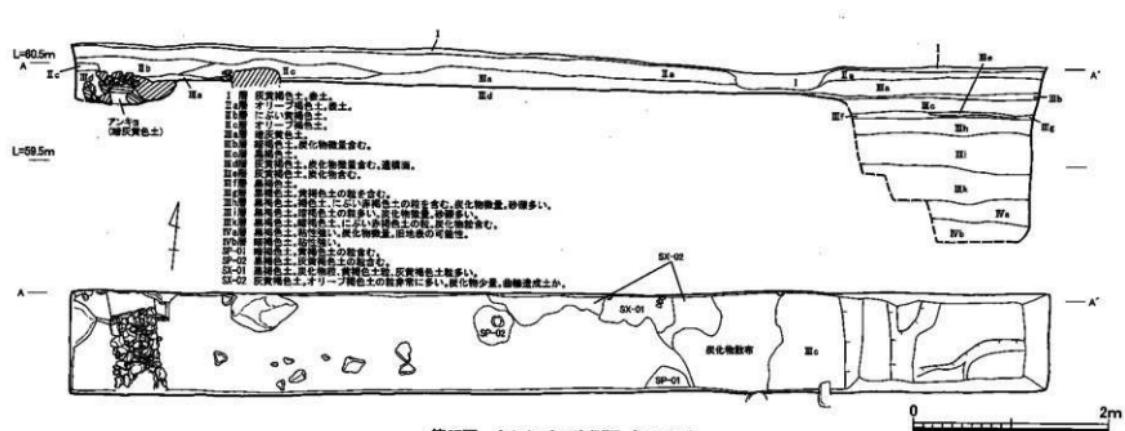
曲輪3東辺の北寄りに設けた南北1m×東西10mの調査区である。旧耕作土下のⅢ層上面に小規模なピットがみられたが、城跡に伴う造構であるか判然としなかったため、記録作業後にⅢa層まで掘削を行っている。Ⅲa層は残りのよい土師器を多く包含している。Ⅲb層は15~30cm大の硬化粘土ブロック



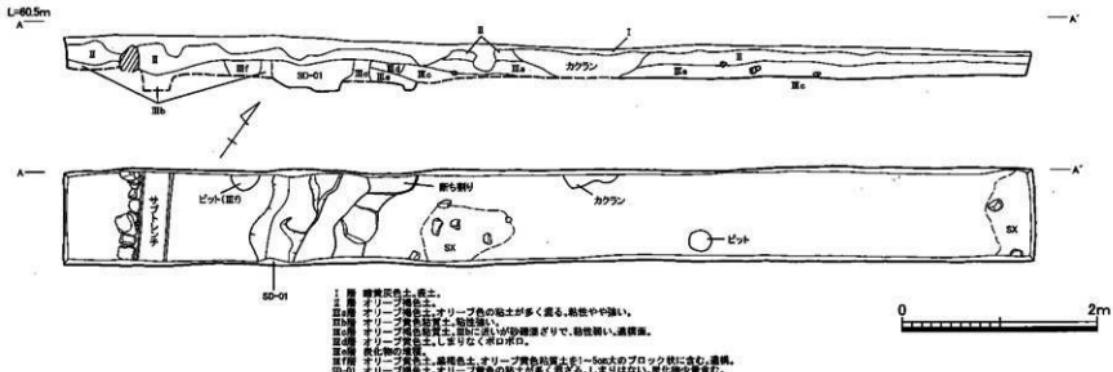
第65図 トレンチ5実測図 (S=1/50)



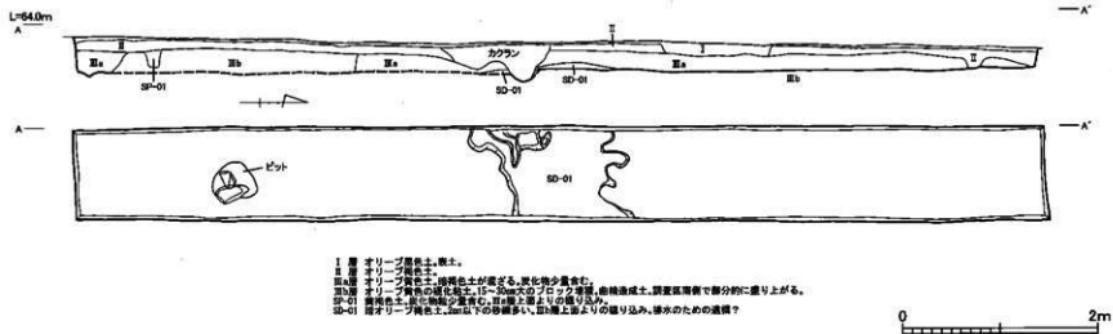
第66図 トレンチ 6 実測図 (S=1/50)



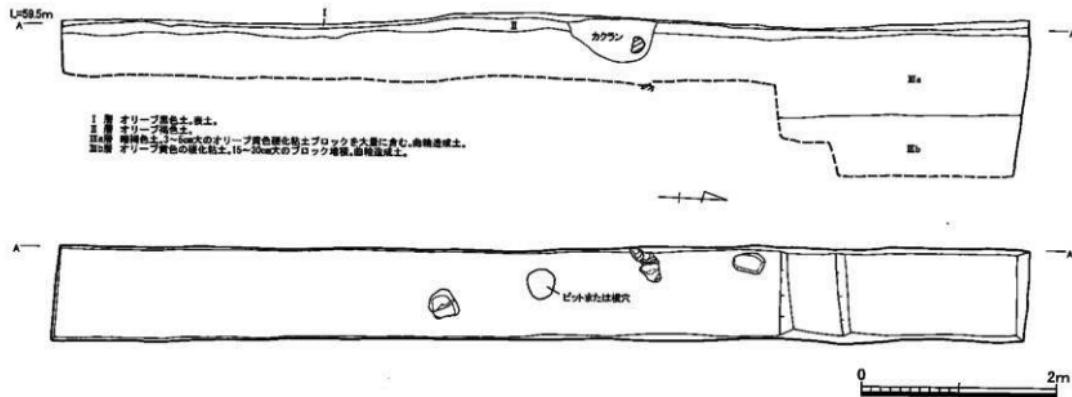
第67図 トレンチ7実測図 (S=1/50)



第68図 トレンチ 8 実測図 (S=1/50)



第69図 トレンチ 9 実測図 (S=1/50)



第70図 トレンチ10実測図 (S=1/50)

ク層であり、曲輪の造成に伴う層と考えられる。調査区の南半で一部せり上がったような状態が認められた。トレンチ中央付近においては、IIIb層に掘り込む幅1m程の浅い溝状の堆積層がみられた。埋土には小さい砂利が多く含まれている。可能性として、排水の為の造構などが考えられるだろうか。なお、IV層に含まれる硬化粘土ブロックの質をみると、トレンチ5などで述べた地山のものと同質である。

#### トレンチ10（第70図）

曲輪3東辺の南寄りに設けた南北1m×東西10mの調査区である。ピットらしきものが1基みられたが、造構としてよいかは調査範囲を狭く設定した事もあり、今のところ不明である。調査区の北隅部分を深掘し、土層の堆積状況を確認した。旧耕作土下には、これまで述べた硬化粘土の細かいブロックを大量に含む層が80cm程の厚さで堆積しており、さらに下位では同じ硬化粘土の15~30cm程の大きいブロックが主となって厚く堆積している状況を確認した。調査面積と深度の兼ね合いから、安全性を考慮して完掘は行わなかったが、東側が崖地であることから、かなり深くなる可能性があるだろう。これまで述べた状況も踏まえつつ、曲輪の造成状況を大局的に見るならば、トレンチ5付近を南北に走る尾根筋があり、これを切り崩して特に東側へ大きく押し寄せ事で広大な曲輪3が築かれたものと考えられる。

#### 〔註釈〕

(註1) 日野江城跡の空間構造について検討を行った宮武正登氏は、「有機的運動が互いに困難な距離・位置関係を保って、大型の曲輪群が分立している」状況を、「城主権力の未成熟さに起因するとの見方が強い」とし、また有馬関連の文書から当時の「内部分離状態」についても言及されている(宮武2008)。本丸と二ノ丸の曲輪規模に見合う城道が存在していたことを想起しがちであるが、そうした前提に警鐘をならすものであり、今後調査を実施していくうえで重要な視点であろう。

宮武正登 2008 「原城・日野江城の歴史的評価」『原城と島原の乱 有馬の城・外交・折り』 新人物往来社

## 遺物

### トレンチ 1-1

1は備前焼の壺である。頸部は直立し、口縁部を肥厚させる。2は瓦質の火鉢で、口縁部と口縁部直下に突帯を貼り付け、スタンプ文を施す。口縁部上面は平坦に整える。3・4は土師質土器の壺である。どちらも底面には粗い糸切痕を残し、胎土には赤色粒子を多く含む。

### トレンチ 1-2

5~10は土師質土器である。5・6は壺で、いずれも底面には粗い糸切痕を残し、胎土には粒の大きい赤色粒子を多く含む。7~10は小皿である。いずれも底部に糸切痕を残すが、8はその上から板目状の圧痕がつく。10は胎土に大粒の赤色粒子を大量に含み、やや厚手で、色調も赤みが強い。

### トレンチ 2

11・12は中国南方產褐釉陶器の壺であり、おそらく同一個体であろう。11は肩部から頸部にかけての資料で突帯が一条巡る。11は、外面は無釉であるが、内面に褐色釉がかかり、部分的に掻き取ったあとが残る。13は須恵質の擂鉢である。内面には8本単位の櫛目が入る。14は土師質土器の壺である。

### トレンチ 3

15は青花の碗底部である。全体に釉が掛かるが、疊付部分は釉剥ぎを施す。16~18は土師質土器である。16・17は小皿で、どちらも胎土に粒の大きい赤色粒子を多く含む。16は底部に粗い糸切痕が残る。18はミニチュアで、胎土は16・17と共通する。

### トレンチ 4

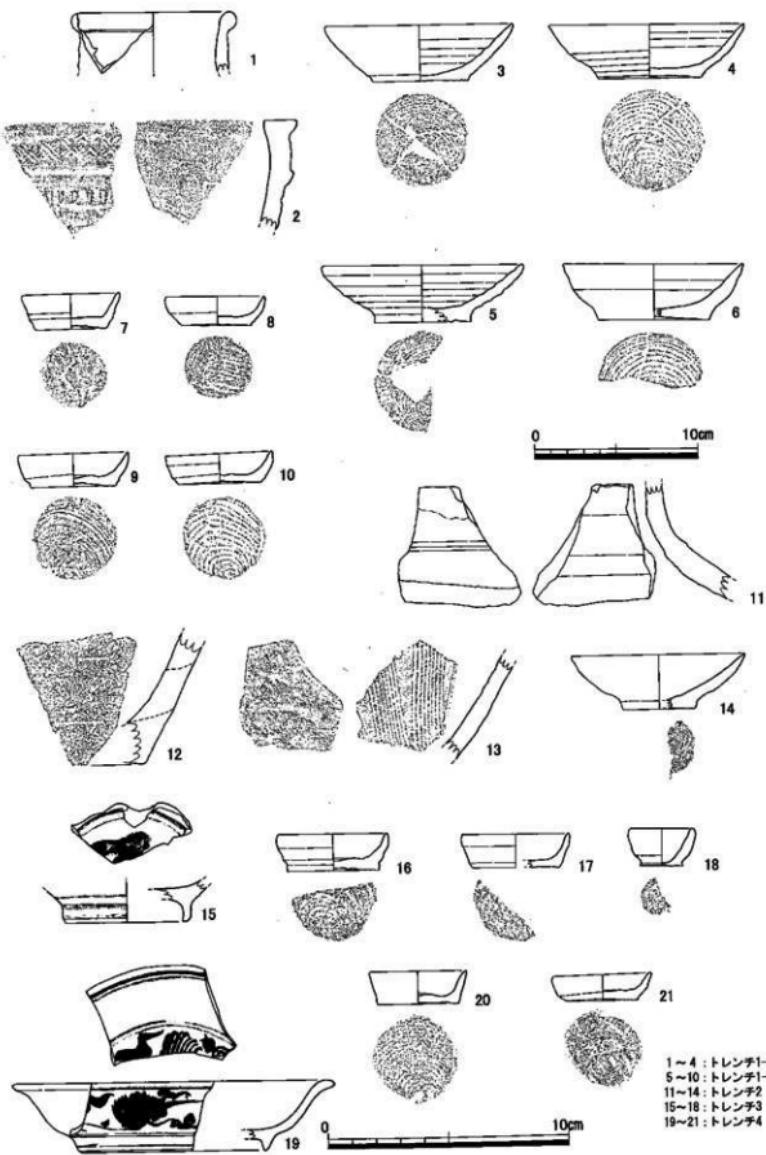
19は青花の端反皿である。高台疊付部分は釉剥ぎを施し、内外面に文様を描く。20・21は土師質土器の小皿である。20は磨耗が進むが、底部には粗い糸切痕を残し、胎土には赤色粒子を含む。21は精選された混入物の少ない胎土で、白みの強い色調である。

### トレンチ 5

22は青花の碗である。見込み部分はやや膨らみを持つものと思われる。23・24は土師質土器である。23は壺で、全体的に磨耗しているが、底面には粗い糸切痕が確認できる。口縁部には炭化物の付着がある。24は小皿で、底面には細かい糸切痕が残る。

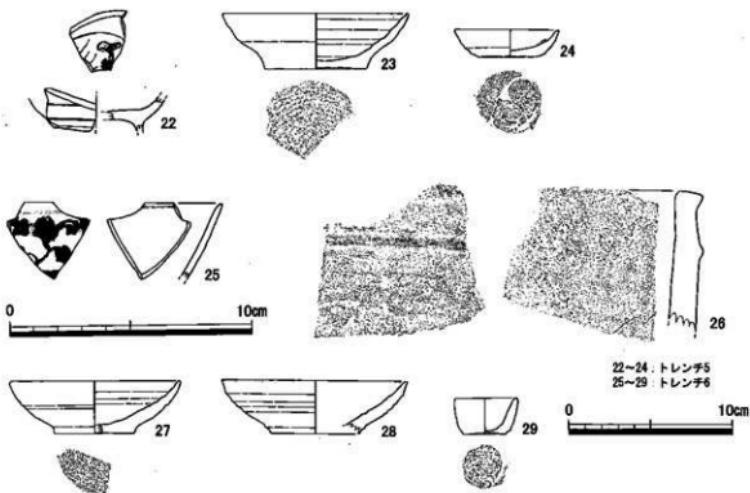
### トレンチ 6

25は青花の碗口縁部である。26は焼きの悪い瓦質の火鉢で、外面には口縁部と口縁部直下に突帯をめぐらす。突帯間には花形のスタンプ文を施す。27~29は土師質土器である。27・28は壺である。28は胎土に大粒の赤色粒子を多量含み、色調も赤みが強い。口縁部には炭化物が付着する。29はミニチュア土器で、底部には粗い糸切痕が残る。



第71図 本丸地区曲輪3ほか出土の遺物① (15・19: S=1/2, その他: S=1/3)

1~4: トレンチ1-1  
5~10: トレンチ1-2  
11~14: トレンチ2  
15~18: トレンチ3  
19~21: トレンチ4



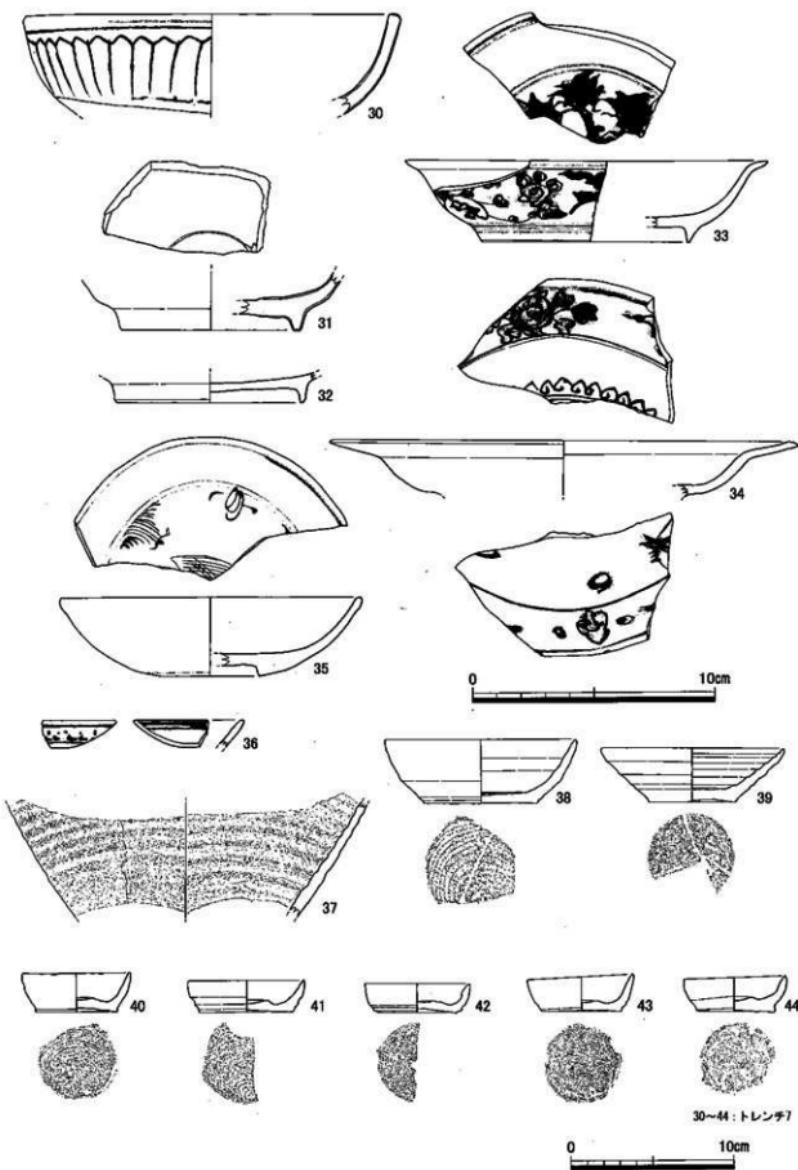
第72図 本丸地区曲輪3ほか出土の遺物② (22・25: S=1/2, その他 S=1/3)

#### トレンチ7

30・31は青磁である。30は碗で、丸みを帯びた胴部を持ち、外面には口縁部に1条の界線を入れ、胴部には簡略化した蓮弁文を描く。全体に貢入が粗く入る。31は碗底部の資料で、見込みと高台内の中心部は釉が掛からないが、豊付部分には釉が掛かる。32は白磁の皿底部で、豊付部分のみ釉剥ぎを施す。全体に貢入が入る。33~36は青花の資料である。33は端反の皿で、豊付部分は釉剥ぎを施す。外面には唐草文、内面には草花文を描く。34は錫皿である。35は粗製の葵筒底をなす皿である。内面見込みには釉が掛けず、模様が入っている。全体に発色が悪く、地の部分は灰色をなす。36は皿の口縁部で、内湾する。外面には簡略化した波瀾文を描く。37は赤褐色をなす地で、内外面ともに成形時の凹凸が器面に残る。外面には白濁釉が重ね掛けられている。38~42は土師質土器である。38・39は壊である。38は底面に粗い糸切痕を残し、内外面ともに、ナデ調整を施す前の工具痕が残る。39は胎土に細かい赤色粒子をやや多めに含む。底部の糸切痕は磨耗によって明確ではなく、内面には成形時の凹凸が顕著で、見込みから口縁部に向かって渦巻状に残る。40~44は小皿である。42は細めの糸切痕が、その他は粗めの糸切痕が観察される。

#### トレンチ8

45~62はいずれも土師質土器である。45は壊で、胎土には非常に細かい砂粒が多量に混入している。器面の状態が悪いが、底面の糸切痕は粗い。46~55は小皿である。46は胎土に赤色粒子を多く含み、色調も他に比べ赤みが強い。48には口縁部に炭化物の付着が認められる。55は精選された砂粒の混入しない胎土で、焼きが甘く軟質である。色調は白みがかっている。底面の糸切痕は、55は磨耗のため観察できず、47は細かくはいるが、あとはいざれも粗い。56~59はミニチュア土器である。57・58は



第73図 本丸地区曲輪3ほか出土の遺物③ (30~36: S=1/2, その他: S=1/3)

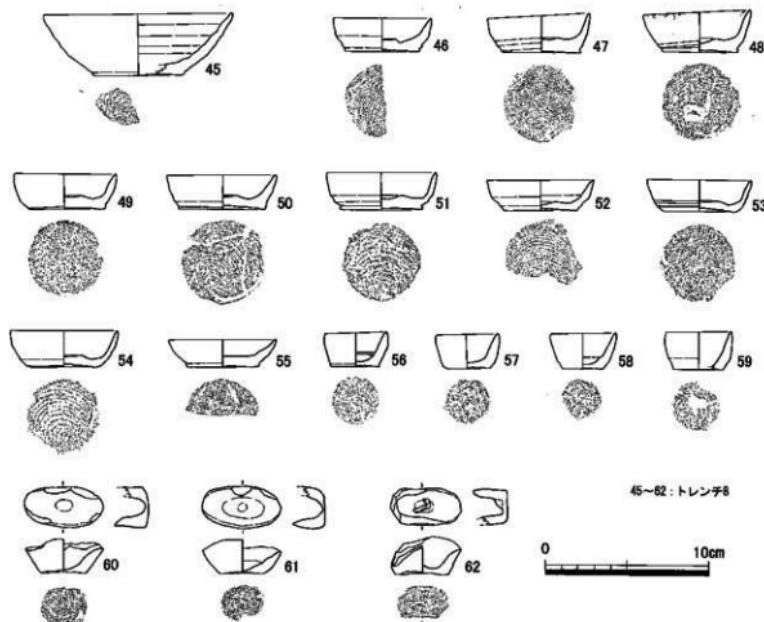
赤色粒子を胎土に多く含む。59は粘土柱からの切り離しが浅く、底面が欠損している。60~62は耳皿である。61は胎土に赤色粒子を多く含む。いずれも小皿からではなく、ミニチュア土器からの作り出しである。

#### トレンチ9

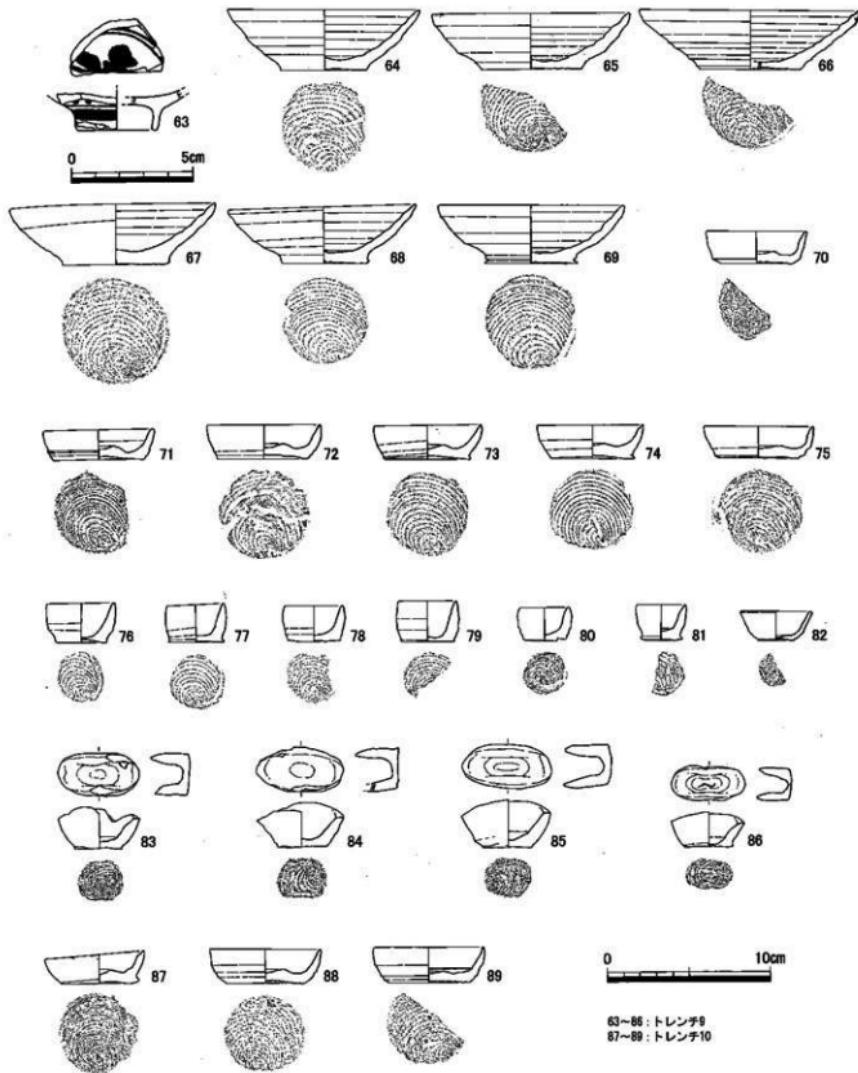
63は青花の碗底部である。二次的に被熱したためか器面はくすんでいる。やや高めの高台を持ち、見込みに文様が入る。64~66は土師質土器の資料である。64~69は壺である。いずれも底面に粗い糸切痕を残し、内面に成形時の凹凸を顕著にとどめる。70~75は小皿である。70の底部糸切痕は細かいが、他はみな粗い。76~82はミニチュア土器である。82は色調が白色系で、胎土には微細な白色雲母と思われる鉱物を含む。底部には細かい目の糸切痕が観察される。内面は明褐色をなしており、彩色がなされていた可能性もある。他の底部は粗い糸切痕である。83~86は耳皿である。いずれもミニチュアからの作り出しであり、底部糸切痕は粗い。

#### トレンチ10

87~89は土師質土器の小皿である。いずれも粗い糸切痕を底部にもつ。87の口縁部には炭化物が付く。88は赤色粒子を多く含む胎土である。



第74図 本丸地区曲輪3ほか出土の遺物④ (S=1/3)



第75図 本丸地区曲輪3ほか出土の遺物⑤ (63:S=1/2, その他:S=1/3)

第11表 本丸地区曲輪3ほか出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	陶器	壺	本丸地区	トレンチ1-1	盛土最下層	復元口径9.3cm
11	褐釉陶器	壺	本丸地区	トレンチ2	Ⅲa層	
12	褐釉陶器	壺	本丸地区	トレンチ2	Ⅲa層	
15	青花	碗	本丸地区	トレンチ3	Ⅱ層	復元底径5.1cm
19	青花	皿	本丸地区	トレンチ4	Ⅲa層	復元口径12.9cm, 復元底径7.6cm, 器高2.9cm
22	青花	碗	本丸地区	トレンチ5	Ⅱ層	
25	青花	碗	本丸地区	トレンチ6	Ⅱ層	
30	青磁	碗	本丸地区	トレンチ7	Ⅲa層	復元口径15.4cm
31	青磁	碗	本丸地区	トレンチ7	Ⅲ層整地層	復元底径7.3cm
32	白磁	皿	本丸地区	トレンチ7	Ⅲa層	復元底径7.7cm
33	青花	皿	本丸地区	トレンチ7	Ⅲa層	復元口径15.0cm, 復元底径8.5cm, 器高3.3cm
34	青花	皿	本丸地区	トレンチ7	Ⅲa層	復元口径18.9cm
35	青花	皿	本丸地区	トレンチ7	Ⅲa層	復元口径12.2cm, 復元底径4.0cm, 器高3.2cm
36	青花	皿	本丸地区	トレンチ7	Ⅲa層	
37	陶器	壺	本丸地区	トレンチ7	Ⅲ層	
63	青花	碗	本丸地区	トレンチ9	Ⅰ層	復元底径3.1cm

第12表 本丸地区曲輪3ほか出土遺物観察表②

番号	種別	器種	地区	調査区	出土単位	外面	色調			粘土	法量 (cm)		
							前面	内面	裏面		口径	底径	高さ
2	瓦質土器	火鉢	本丸地区	トレンチ1	土盛上層	にい黄色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.8	3.3
3	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	6.2	3.3
4	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	6.0	3.5
5	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	6.0	3.5
6	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	6.0	3.5
7	土質瓦土器	瓶	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.3	2.3
8	土質瓦土器	瓶	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.2	1.8
9	土質瓦土器	瓶	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.3	2.1
10	土質瓦土器	瓶	本丸地区	トレンチ1	盛土	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.9	2.0
11	瓦質土器	瓶	本丸地区	トレンチ1	山嘴	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	-	-
14	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.5	3.4
15	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.6	2.3
17	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.4	2.1
18	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	2.7	2.3
20	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	0.9	2.0
21	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、赤色粒子	(1.0)	4.3	1.7
23	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	6.3	3.4
24	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ2	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.0	1.7
25	瓦質土器	火鉢	本丸地区	トレンチ3	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.6	3.2
27	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ3	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.4	3.2
28	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.4	3.2
29	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	2.5	2.2
36	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	6.0	3.9
39	土質瓦土器	杯	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.3	3.4
40	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.0	2.4
41	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.6	2.3
42	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.9	1.7
43	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.5	2.3
44	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.7	2.2
45	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	5.2	3.8
46	土質瓦土器	小瓶	本丸地区	トレンチ4	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(1.0)	4.6	2.1

カッコ付は復元値

第13表 本丸地区曲輪3ほか出土遺物観察表(3)

番号	種類	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	寸法(cm)		
						外面	内面	底面		口径	底径	厚さ
47	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅱ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 に赤色斑点	6.2	4.8	2.4
48	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 に赤色斑点	6.5	4.8	2.6
49	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅳ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	6.1	4.6	2.2
50	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅴ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	6.5	4.8	2.1
51	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅵ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(6.6)	4.5	2.3
52	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅶ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(6.4)	4.4	1.8
53	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅷ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(6.3)	4.4	1.9
54	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅸ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(6.5)	4.8	2.3
55	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅹ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(6.5)	4.0	1.7
56	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅺ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	3.8	3.0	2.1
57	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅻ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	3.7	2.8	2.1
58	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅼ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	5.9	2.4	2.2
59	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅽ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	3.9	3.0	2.0
60	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅾ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	4.8	2.8	2.0
61	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	Ⅿ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	4.8	2.6	2.1
62	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅰ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英	4.3	3.2	2.3
64	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅱ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	11.7	5.2	3.7
65	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅲ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(12.0)	(6.1)	(3.4)
66	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅳ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(12.4)	6.1	3.6
67	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅴ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	12.7	6.8	3.8
68	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅵ層	褐色	褐色	褐色	黄石、角閃石	11.3	5.1	3.6
69	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅶ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(11.2)	5.7	3.6
70	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅷ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	(6.1)	(4.2)	2.6
71	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅸ層	褐色	褐色	褐色	黄石、角閃石	(6.7)	5.6	1.8
72	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅹ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	6.8	3.5	2.1
73	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅺ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	6.5	3.3	2.1
74	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅻ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	6.3	5.1	2.1
75	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅼ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	6.5	4.9	2.0
76	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅽ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	4.1	3.0	2.5
77	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅾ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	3.4	3.5	2.4
78	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅿ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(3.4)	3.2	2.2
79	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅰ層	褐色	褐色	褐色	黄石、角閃石	(2.5)	(3.1)	2.5
80	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅱ層	褐色	褐色	褐色	黄石、角閃石 赤色斑点	(2.9)	2.6	2.1
81	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅲ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	(2.9)	(1.8)	2.2
82	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ9	ⅳ層	灰白色	赤褐色	灰白色	白介素	(4.1)	2.2	1.8
83	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅴ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	5.0	3.0	2.5
84	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅶ層	褐色	褐色	褐色	黄石、角閃石 赤色斑点	5.3	3.0	2.7
85	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅷ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	5.4	2.9	2.9
86	土師質土器	耳皿	本丸地区	トレンチ9	ⅸ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	4.5	2.8	2.1
87	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ10	Ⅰ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	6.0	4.8	2.0
88	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ10	Ⅱ層	褐色	褐色	褐色	黄石、赤色斑点	(6.7)	4.7	2.1
89	土師質土器	小皿	本丸地区	トレンチ10	Ⅲ層	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石 赤色斑点	(6.7)	5.0	2.3

カッコ付者は微偏

### 第3節 ニノ丸地区の調査

ニノ丸地区では、平成7年度から平成12年度にかけて主郭の内容確認調査のため47箇所の調査区を設定し、発掘調査を行う。遺構によっては調査年度をまたいで検出されているものもあり、本書では年次ごとの記述ではなく、ニノ丸地区をA～Gの七つに分けた地区ごとに記述する。A～G地区の区割りについては、調査区の立地および検出遺構から大まかに分けており、同一の遺構や時期差については考慮していない。

なお、各調査区の遺構平面図を掲載するにあたっては以下のようない注意点がある。

まず、調査区全体の平面図が未実測で一部遺構のみ実測している場合は、発掘調査時に作成した調査区配置測量図(S=1/250)を基に調査区の上端を作図している。また、下端については実測部分のみ実線で掲載しており、未実測部分は点線で表現するか省略する。平面図を実測していない調査区については、上端のみ調査区配置測量図を基に作図している。

#### (1) A地区の調査

##### 概要

現状地形において、ニノ丸地区の西側にあたる曲輪5と曲輪6は南北に走る野面積の石垣によって隔てられており、石垣の北側部分にある幅10m程の緩い傾斜によって結ばれる。A地区はこの傾斜の西側で、曲輪5の東側入口にあたる。

A地区では、平成10年度に26区(98.2m<sup>2</sup>)、28区(212.0m<sup>2</sup>)、29区(131.2m<sup>2</sup>)の発掘調査を行う。

##### 土層

基本層序については、各調査区の土層断面図から堆積状況を対比することが困難であった。また、旧北有馬町教育委員会刊行の報告書(註1)において、平成7～12年度調査の成果を踏まえ土層の堆積状況を再検討しており、本書ではニノ丸地区の基本層序についてはこれを踏襲している。このため、基本層序と各調査区の土層断面図から読み取れる堆積状況が異なる部分がある。

A地区的基本層序は以下のようになる。なお、これはB地区の基本層序と共通する。

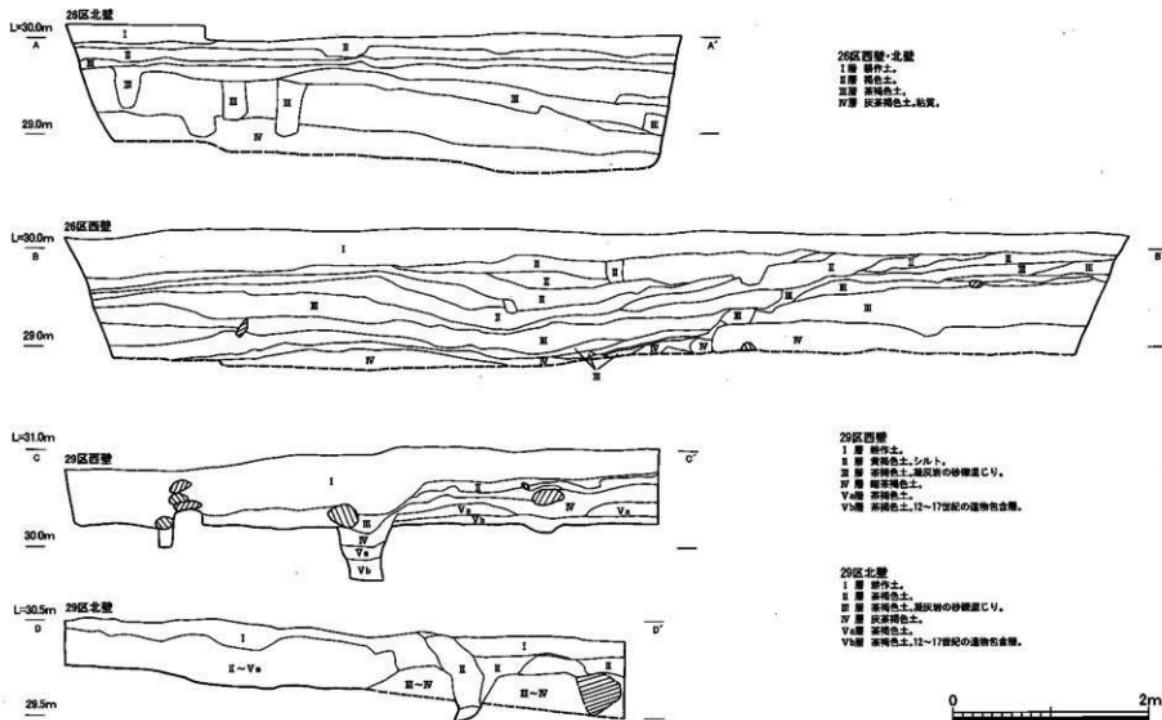
- I層 耕作土層
- II層 砂土層
- III層 黒色土層
- IV層 棕褐色土層
- V層 暗茶褐色土層（整地層で慶長期頃の生活面）
- VI層 暗茶褐色土層（慶長期整地層の基盤層）
- VII層 粘質灰茶褐色土層
- VIII層 慶長期以前の生活面
- 地山 一部焦土化（弥生時代の土器片を含む）

##### 遺構

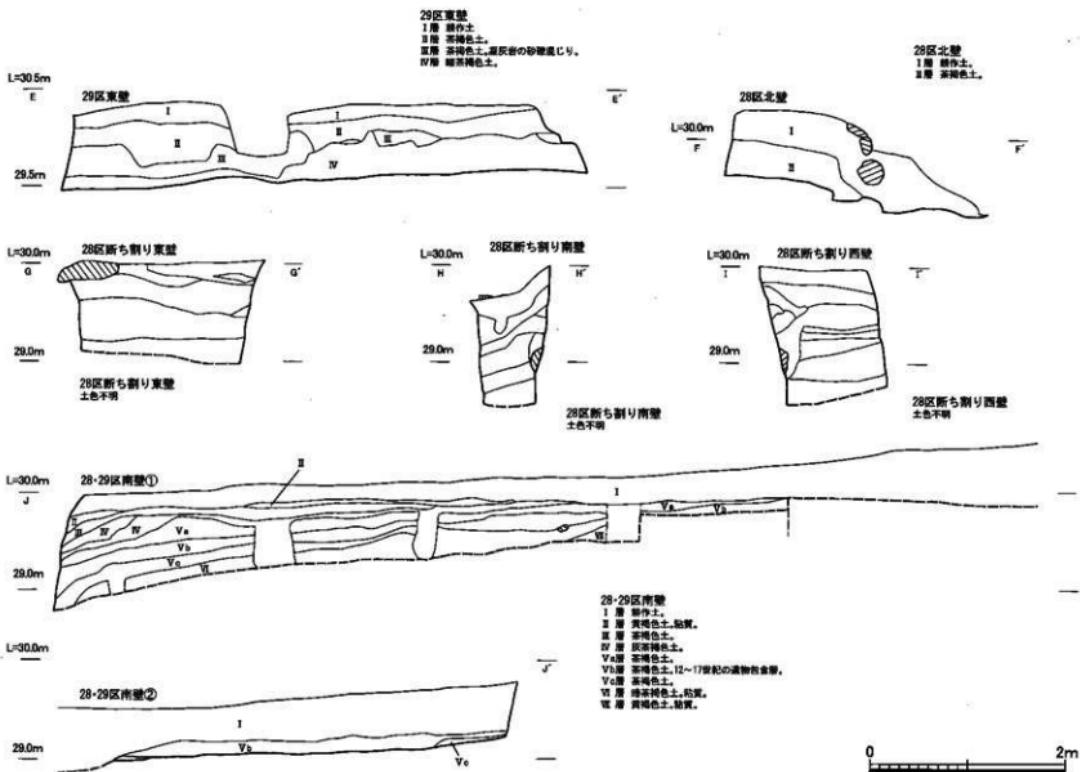
A地区では、各調査区において遺構を検出している。



第76図 二ノ丸A地区遺構配図 (S=1/150)



第77図 ニノ丸A地区土層断面図① (S=1/50)



第78図 ニノ丸A地区土層断面図② (S=1/50)

26区は二ノ丸地区の東側から本丸地区へ向けて延びる城道を確認するため、平成8～9年度の調査でC・D地区より検出した階段2の延長上に設置する。階段の踏石列は確認していないが、調査区南西隅付近で検出した石の様相が階段2の踏石に近いことから、C・D地区より延びる階段2の一部と思われる。

28・29区についても、本丸地区へ続く城道を確認するために上下の曲輪を結ぶ傾斜付近に調査区を設定しており、階段4とこれに伴う石垣6、溝跡10を検出する。また、石垣南方では礎石群2を確認している。このうち、階段4についてはB地区の30区、33-1区に渡っており、詳細は遺構の大部分を占めるB地区において記述する。

29区で検出したピット群においては、並びとピット間の間隔から少なくとも3棟の掘立柱建物跡が確認できたが、時期や前後関係については調査において確認できていない。また、これらの掘立柱建物跡に伴う柱穴はより広範囲に拡がっていたものと推測されるが、東側の28区では階段4と石垣6造成時の整地に伴い削平されており、柱穴を検出していない。26区では北側で数基確認するが、未実測のため29区との対比は困難である。

#### 石垣6（28区）

28区の西端より検出した残存長7.5m、残存高1.0mの南北に延びる石垣で、北側では隅角部の石積が残存するものの南側では石積が倒壊しており、総延長は不明である。また、残存する石積の高さは2石までであるが、切石片の投棄量より何石か上積みされていた可能性がある。

石材は溶結凝灰岩の切石で、石面幅50～90cm、高さ30～50cmと石材間で幅はあるものの規格化され、石積自体の高さは残存している2石目で揃うように積まれる。石材と石積技法はB地区で検出されている石垣7と共通しており、石垣7が階段4に伴うことから石垣6も階段4と同時に造成されたと考えられる。

階段4西端の踏石から石垣6にかけて東西幅約6mの枠形が構成されており、石垣6は北西隅角部にあたる。枠形は動線が本丸側からみて右に屈折しており、内側形の虎口空間を構成する。

石垣隅角部では、瓦当部全面に金箔が付着した金箔瓦が出土する。

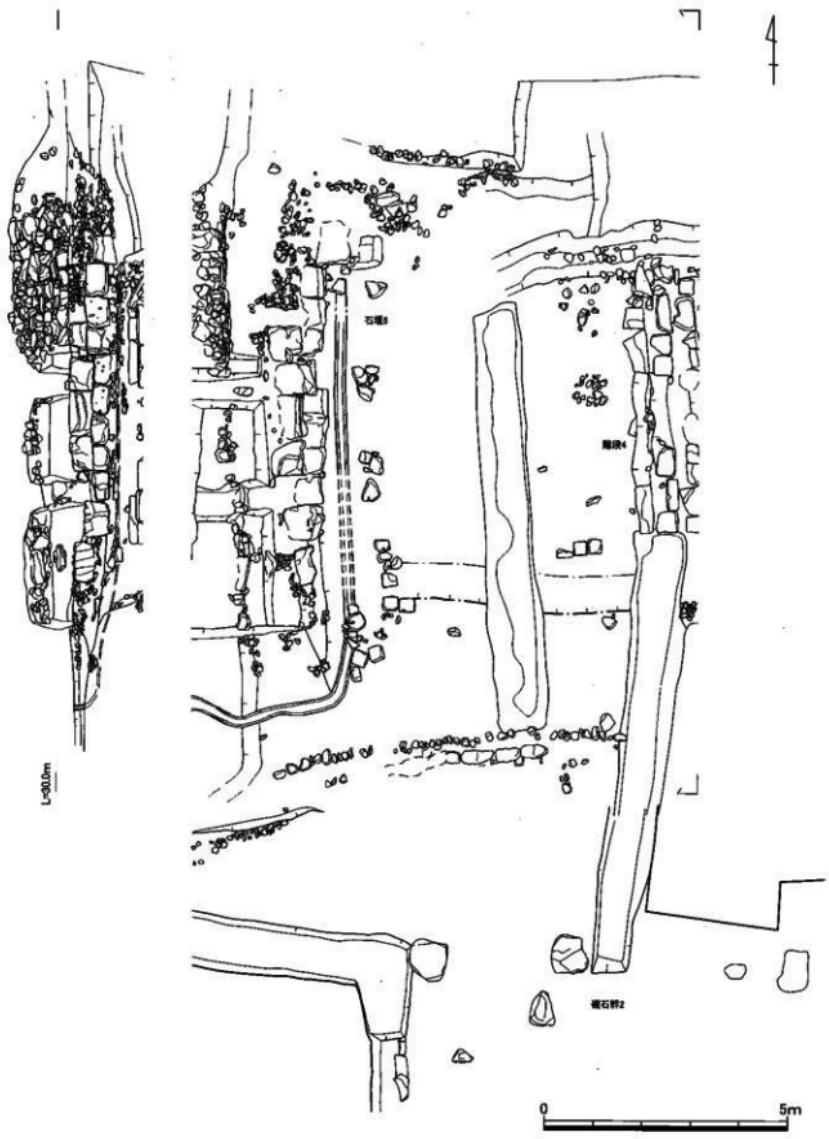
#### 礎石群2（28区）

28区南側において、幅80～90cmの平石を四つ検出する。平石は、三つが東西方向には一直線上に並んでおり、間隔は東より4.5m、2.9mである。直線上に並ぶ平石のうち、中央の石の南側でも同様の石を検出する。石材や根固めの有無、石上面の高さについては不明。

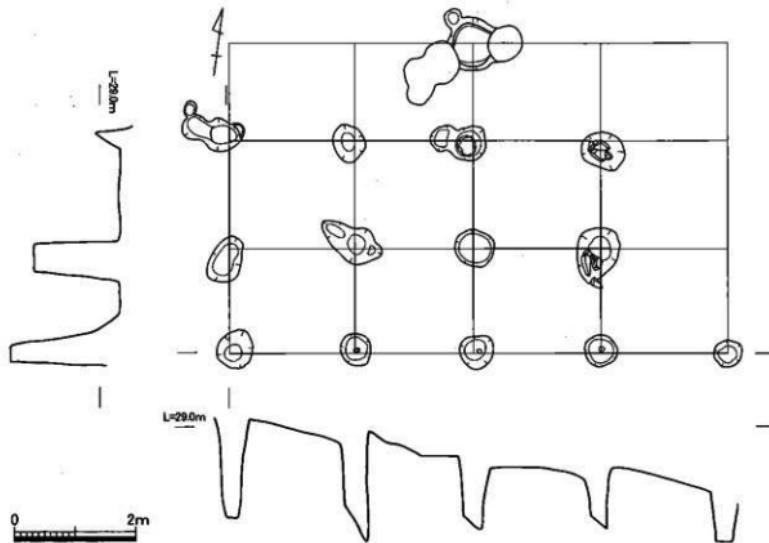
北側では階段4と石垣6によって虎口空間が形成されており、平石も虎口に関わる建物の礎石と思われる。

#### 掘立柱建物跡1（29区）

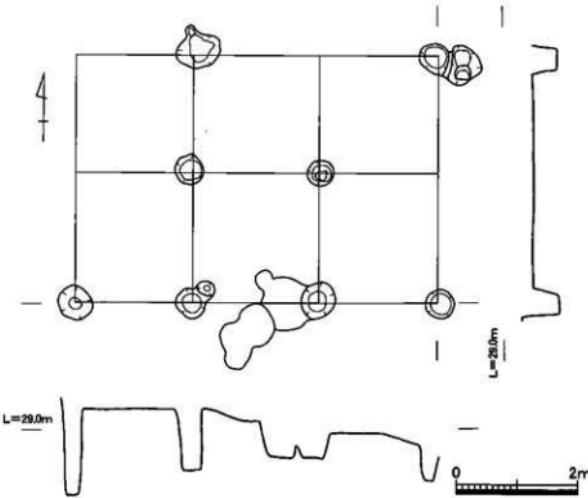
29区南側において、桁行4間×梁行3間の掘立柱建物跡を検出する。検出した柱穴は14基で柱構造を探っており、柱掘方の径は0.4～0.6m、深さは0.2～0.6mを測る。柱掘方は底の標高が北から南へ向けて低くなっている、基盤層の傾斜に合わせて標高が低い南側ほど掘方を深くしていた可能性がある。



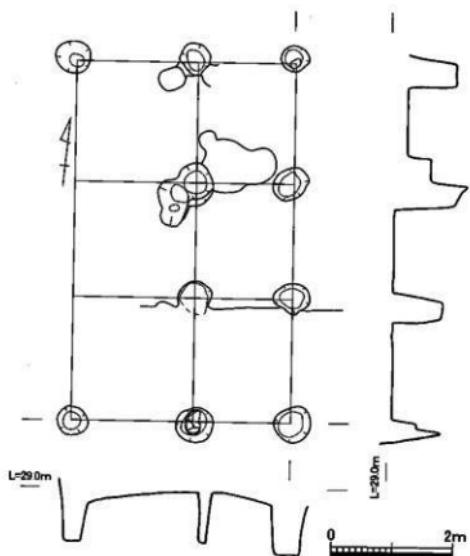
第79図 隅段4・石垣6・礎石群2実測図 ( $S=1/100$ )



第80図 振立柱建物跡1 (S=1/80)



第81図 振立柱建物跡2 (S=1/80)



第82図 掘立柱建物跡3 (S=1/80)

ある。柱痕跡については不明であるが、柱掘方の底から幅10~30cmほどの割石を検出しており、根石が据えられていたものと思われる。

主軸は東西方向に延びており、柱間寸法は桁行で2.0m前後、梁行で1.7m前後と桁行がやや長い。

掘立柱建物跡はさらに拡がっていた可能性が高いが、調査成果からの復元が困難で、上屋構造の検討を含め今後の課題である。

#### 掘立柱建物跡2 (29区)

29区北側で検出した東西方向に主軸を探る掘立柱建物跡で、桁行3間×梁行2間の総柱構造を探る。柱穴は8基確認しており、柱掘方の径は0.4~0.6m、深さは0.2~0.7mを測る。

柱掘方は底の標高が29.6~29.7mとほぼ揃っており、底に幅20cmほどの根石を据える柱穴も確認される。

柱間寸法は桁行で東から1.88m、2.0m、1.86m、梁行で北から1.9m、2.02mを測る。

#### 掘立柱建物跡3 (29区)

29区中央で検出した南北方向に主軸を探る掘立柱建物跡で、桁行3間×梁行2間の総柱構造を探る。柱穴は10基確認しており、柱掘方の径は0.4~0.6m、深さは0.4~1.0mを測る。柱掘方の深さに幅はあるものの、底の標高は大部分の柱穴において29.5m前後に揃う。南側中央の柱掘方では、底から幅20cmほどの割石を検出しており、根石と思われる。

柱間寸法は、桁行で北から1.9m, 1.82m, 1.94mと1.9m前後に揺っているのに対し、梁行では東から1.54m, 1.9mと西側が広くなる。

## 階段 2 (26区)

26区南側より二つの石を検出する。検出位置、層位等の詳細は不明。旧北有馬町教育委員会刊行の報告書(註2)において、26区下層で階段と思われるものを検出したと報告がある。

検出した石の様相が、後述するC地区の19・21区で検出した階段2の踏石と共に伴う側溝の側壁石に類似することから、階段2として報告する。周辺でこれに並ぶ石は検出されていない。

### (註釈)

(註1) 木村岳士編 2005 「日野江城跡」北有馬町文化財発掘調査報告書第5集 北有馬町教育委員会

(註2) 木村岳士編 2001 「日野江城跡」北有馬町文化財発掘調査報告書第4集 北有馬町教育委員会

## 遺物

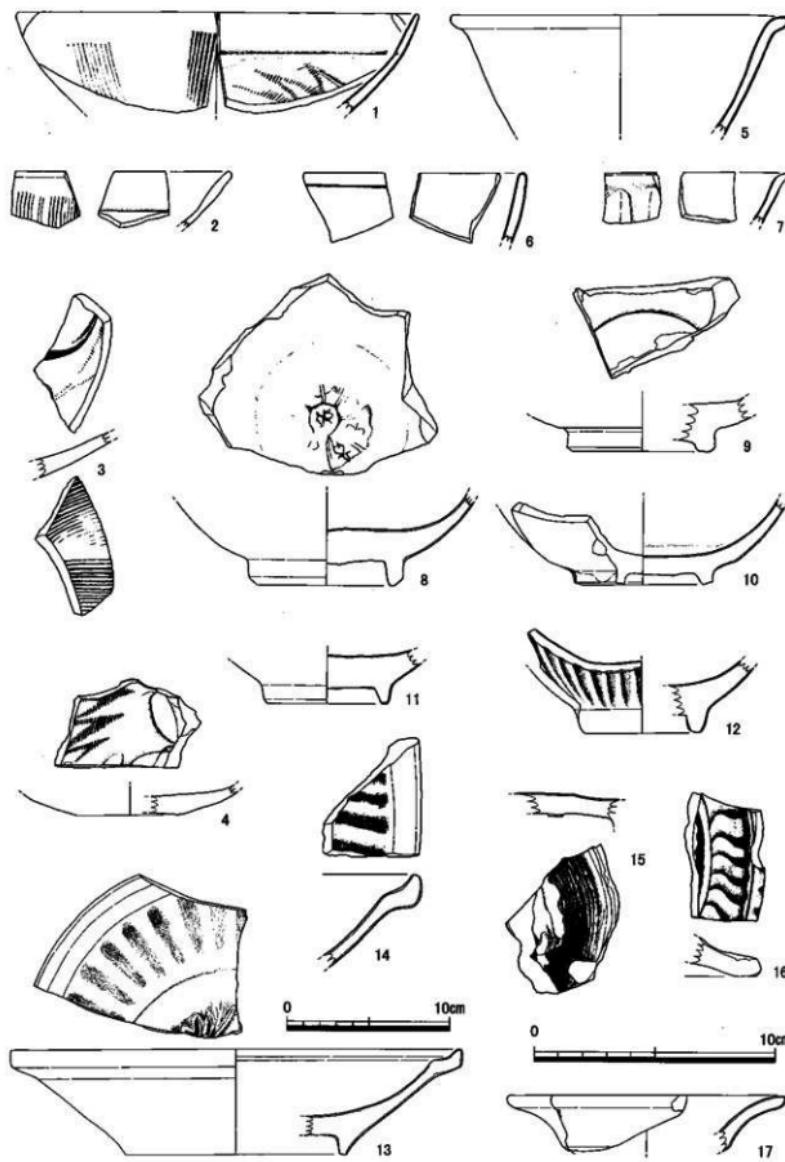
1~17は青磁の資料である。1~4は同安窯系の青磁である。1は外面には縦方向の櫛描文を施す。内面には口縁部からやや下がった位置に界線を1条巡らし、体部には櫛描文を入れる。2はやや口縁部が肥厚する作りで、外面には縦方向の櫛描文を施す。3は外面に縦方向の櫛描文を施し、内面には割花文を施す。4は平底をなす皿の資料で、内面には割花文と櫛描文を入れる。

5~17は龍泉窯系の青磁である。5はやや丸みを帯びた碗の体部で、口縁部は外反する。6は碗の口縁部で、外面口縁部に1条の界線を施す。7は口縁部が外反し、外面には鎮蓮弁文を施す。8は碗底部の資料で、円圈が一周する見込みにスタンプを入れる。9は見込みに1条の円圈を入れる。10の高台は露胎である。11は分厚い碗底部の資料で、疊付部分にも釉が掛かるが、高台内は蛇の目状に釉剥ぎを施す。12は外面体部に蓮弁文を施す。高台は丸みを帯び、釉が掛かる。

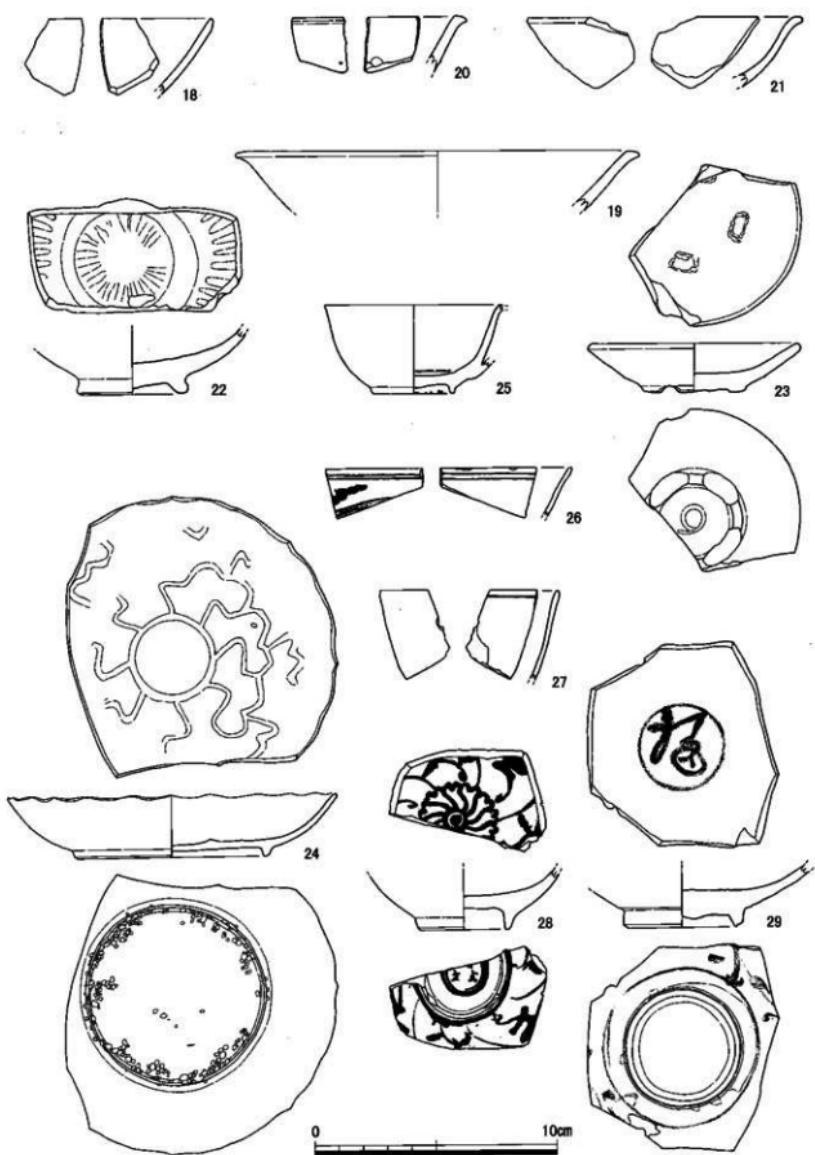
13・14は皿の資料である。いずれも口縁部は一旦折れて、さらに上方に立ち上がる。13の外面は、高台と体部の境が明瞭ではなく、内面には蓮弁文を入れる。見込みにはスタンプを印刻する。高台疊付まで釉が掛けられ、高台内は蛇の目状に釉剥ぎを施す。15は皿の底部の資料と思われ、高台内は蛇の目状に釉剥ぎを施す。16は蓋の資料であると思われる。17は体部が腰折れとなる皿で、口縁部は大きく外反する。

18~25は白磁の資料である。18はわずかに内湾して立ち上がる碗の口縁部で、口縁端部である。19・20は碗口縁部の資料で口縁端部は外側に折れる。21は端反となる碗の口縁部である。22は碗の底部で、高台断面は外側へ張り出し、内面の体部と見込みには蓮弁文が入る。高台疊付と高台内は釉剥ぎを施す。

23は高台に抉りの入る皿で、焼成はやや悪く、白濁した釉には貫入が細かく入る。内面には目跡が残る。24は型押し作りの稜花皿で、内面には捺花文が陰線となって表現されている。高台疊付付近は釉剥ぎを施し、高台内には多量の砂粒が付着する。25は取手のついた小壺で、内面の見込みと体部の境に段を持つ。高台には砂粒の付着が認められる。



第83図 ニノ丸A地区出土の遺物① (13:S=1/3, その他:S=1/2)



第84図 ニノ丸A地区出土の遺物② (S=1/2)

26~42は青花の資料である。26~30は碗である。26は直線的に開いて立ち上がる口縁部で、口縁部内面に2条の界線、外面には2条の界線と文様を描く。27も直線的に外傾する口縁部である。内面に1条の界線を引く。28は丸い体部に先細りとなる高台がつく。外面には唐草文を、内面には捻花文を描き、高台内には字款が認められる。高台疊付付近には釉剥ぎを施す。29は外面に界線と唐草文を描き、内面見込みには「福」字を入れる。高台付近には釉を掛けない。30は体部下位で腰折れとなる。内面見込みには十字花文を入れる。

31~42は皿の資料である。31は焼成がやや悪く、黄色味を帯びた発色である。鍍皿で、外面には体部から口縁部への屈曲部に1条の界線を入れる。内面は口縁部鍍の部分に四方棒文を描く。貢入が細かく入る。32も鍍皿で、非常に薄手の作りである。口縁部内面には果実文を描く。33・34は内面に削りを施して蓮弁状に文様を入れており、同一個体であるかもしれない。高台と体部の境は不明瞭で、高台付近には釉剥ぎを施す。34は口唇部に紅を施す。35は高台外面に2条の界線を入れ、内面見込みに文様を描く。高台疊付付近には釉剥ぎを施す。36は吳須の発色がやや悪い資料で、外面高台から体部下位に3条の界線を入れる。内面には見込みに2条の界線を引き、中に文様を描く。高台疊付は釉剥ぎを施す。37は内面には草花文を描き、高台内には字款を入れる。38は高台内に鉋削りの痕跡を残す資料で、疊付には釉剥ぎを施す。内面には植物文を描く。39は茎筒底をなす資料で茎筒底内には2重の界線を入れ、内面には草花文を描く。40も茎筒底の資料で、外面には芭蕉葉文を描く。41は高台付近の資料で、非常に薄手の作りである。高台内には字款を入れ、内面には玉取獅子を描く。42は盤の高台付近の資料である。低めの高台には砂の付着が認められ、見込みには文様が描かれる。

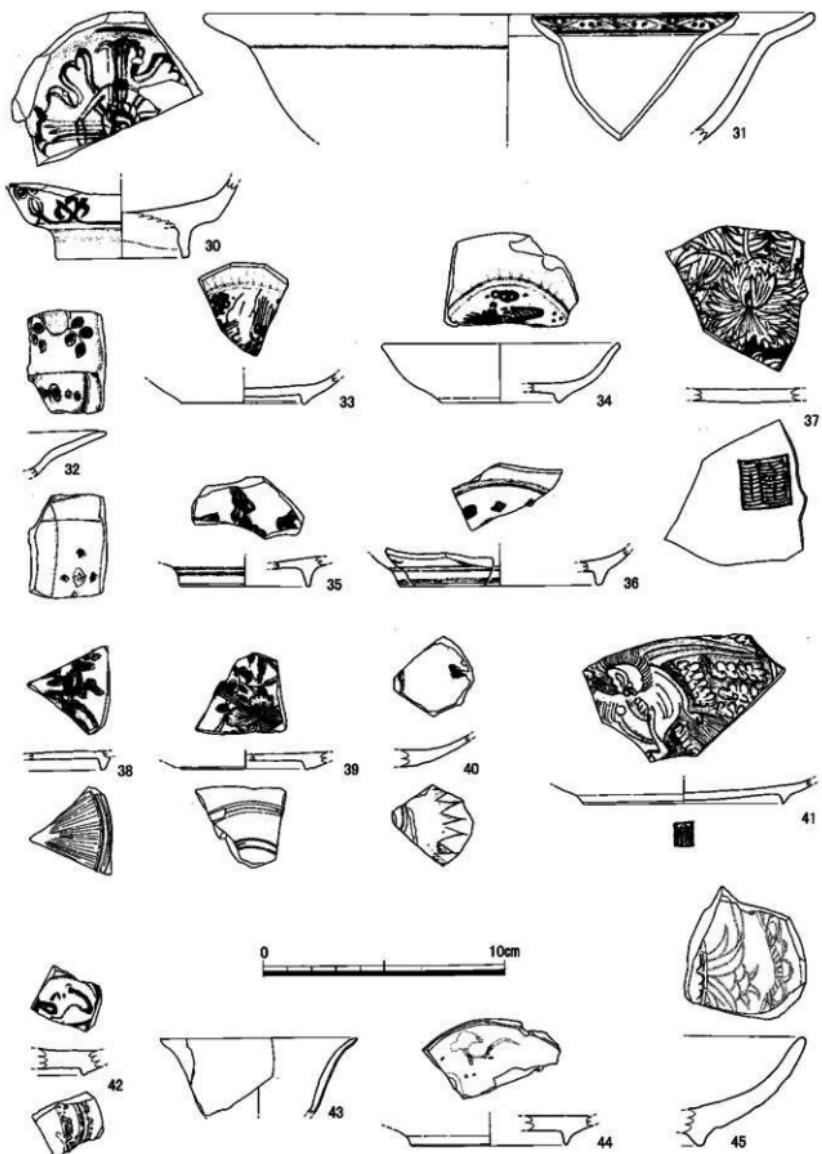
43は瑠璃釉磁器の小壺である。口縁部は大きく外反し、内面は白色である。

44・45は五彩の皿である。44は高台付近の資料で、見込みには淡緑色の絵付けが一部確認できるが、剥落している。文様は雲文であろうか。45は体部から口縁部へと内湾して立ち上がり、見込みには蛇の目状の釉剥ぎを施しているようである。体部内面に剥落した絵付けの痕跡が残り、見込みと体部の境付近には暗赤色の界線と黒褐色の蓮弁状の絵付けが確認できる。

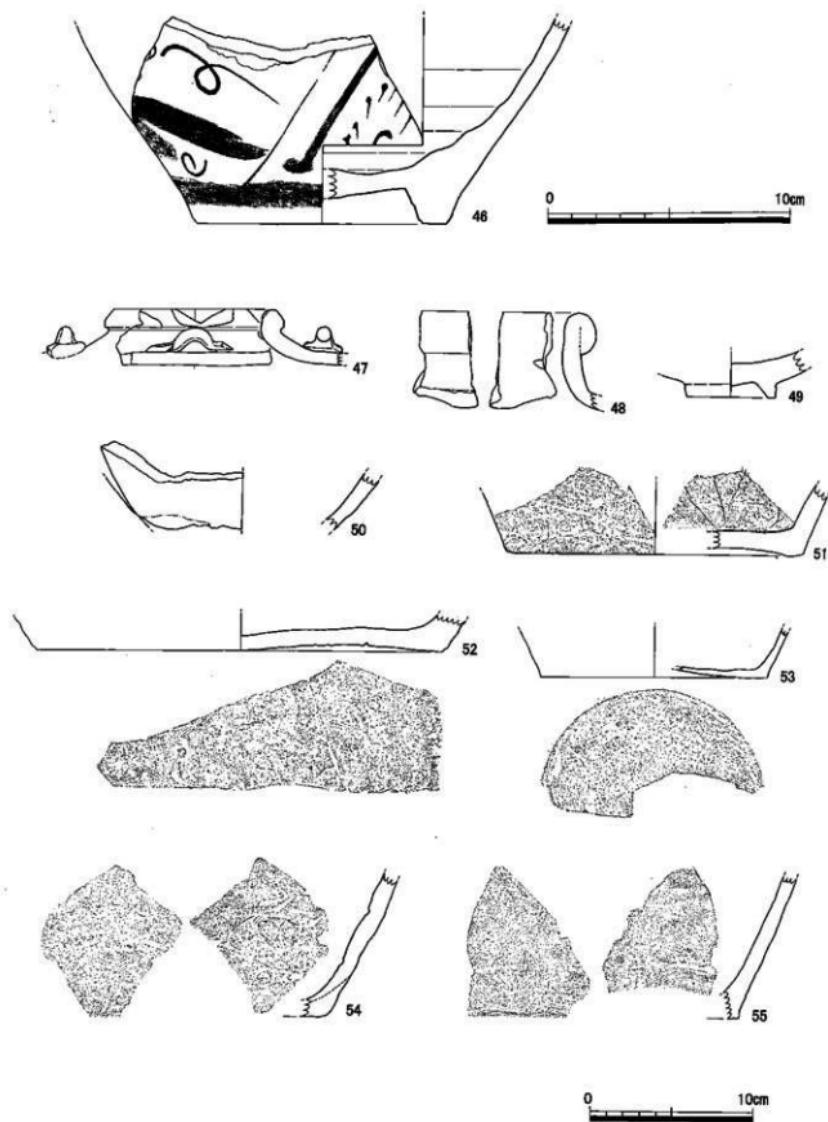
46は翡翠釉磁器である。壺になるものと思われる磁州窯系の資料で、底部から体部が残る。しっかりとした高台を持ち、内面にはロクロ成形時の凹凸が見られる。分厚い白濁釉を内外面に掛け、外面にはその上に鉄釉による絵付けを行い、さらにその上を翡翠釉が覆う。翡翠釉には非常に細かい貢入が入る。

47は耳付きの褐釉陶器の壺である。短い頸部は内傾して、口縁部は外側に肥厚する。48は焼き締め陶器壺の直立する頸部から口縁部の資料で、口縁部は外側へ折り返して肥厚させる。49・50は天目茶碗である。49は底部の資料で、外面と高台内は無釉で、内面には厚い褐色の釉が掛かる。50は体部で、暗赤褐色・黒褐色の釉が掛かる。体部下位から高台にかけては無釉であったものと思われる。細かい橙色の粒子を含んだ灰白色の胎土である。51~55は焼き締め陶器である。51はにぶい黄橙色の底部で、内面底部付近には砂粒の付着が認められる。52は1~2mm大の灰黄色自然釉が内底面に多数付着する。53は非常に薄い作りで、外底面には糸切痕が残る。54は白色礫を胎土に多く含み、内外面ともに工具による擦過調整が認められる。55は内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。底面には砂粒が多量に付着する。

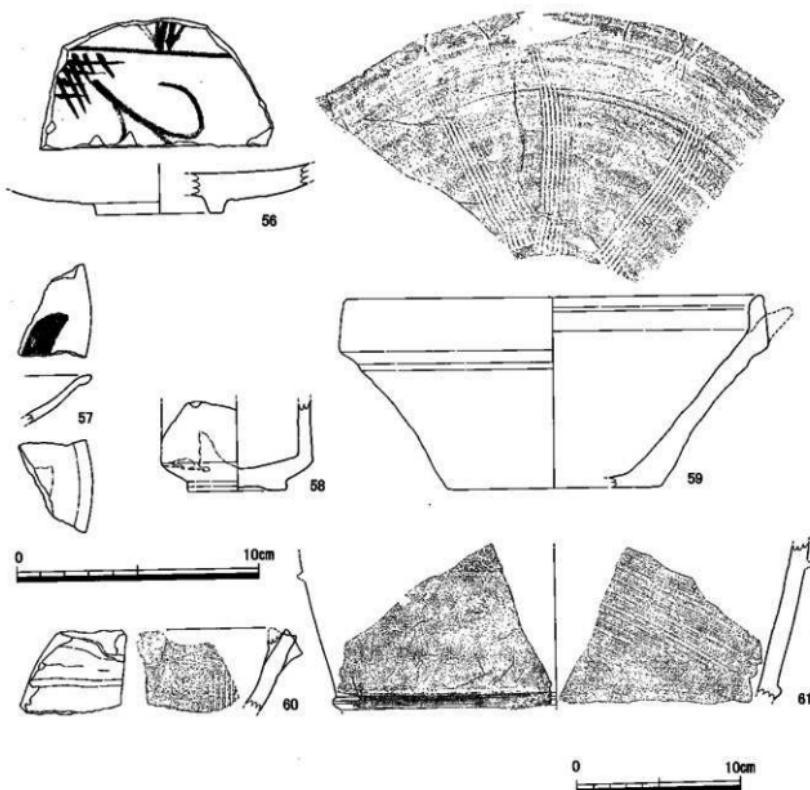
56~58は唐津焼の資料である。56は皿底部の資料で鉄絵が描かれる。高台付近は無釉である。57は



第85図 ニノ丸A地区出土の遺物③ (S=1/2)



第86図 ニノ丸A地区出土の遺物④ (46:S=1/2, その他:S=1/3)



第87図 ニノ丸A地区出土の遺物⑤ (59・61:S=1/3, その他:S=1/2)

皿口縁部の資料で、外反する。焼成がやや悪い。内面には鉄絵が施される。58は筒型碗で体部から口縁部は直立する。高台付近は無釉である。

59は備前焼の擂鉢である。平底から体部は外傾して立ち上がり、やや内傾する口縁帯がつく。口縁部の一箇所を指押しし、片口にする。内面には10本単位のクシ目が放射状に施される。外面は明赤褐色、内面は灰白色を呈する。

60は擂鉢口縁部の資料で、片口を持つ。内面にはクシ目が施される。

61・65は瓦質の深鉢タイプの火鉢である。突帯を2条持つが、上位は剥落する。スタンプ文を施す。65は赤色粒子を多く含む胎土で、突帯が1条巡る。

62・63は瓦質の擂鉢である。62は外面に棒状工具によるタタキ痕が残り、内面には6本単位のクシ目が放射状に入る。63は赤色粒子を多く含む胎土で、内面に5本単位のやや粗くて鋭利なクシ目が入

る。64は土師質の擂鉢である。外面にはタタキ痕が残り、内面は刷毛目調整ののち、6本単位のクシ目が入る。

66~70は瓦器碗の資料である。いずれも内外面にミガキ調整が施される。69・70は高台を持つ。

71~125は土師質土器である。71~76は壺である。71は底面の糸切痕は細かく、体部は底部と境を持たずして立ち上がる。器面の凹凸は少ない。赤色粒子を多少含む胎土である。72~75は赤色粒子を多く含む胎土で、底面の糸切痕はいずれも粗い。73・74は内面の成形時の凹凸が顕著である。76は分厚い体部が口縁部に向かって先細りとなる断面で、口縁部下で外面がやや膨らむ。内面は見込みを作らず、直線的に体部が立ち上がる。底部糸切痕は粗い。

77~88は皿である。77は、広い底部のわりに口縁部の立ち上がりは浅く、時期的に他の土師質土器より先行するものであろう。底部の粘土柱からの切り離しの痕跡は、器面の状態が悪く、判然としない。いずれも細めの粘土柱からの切り離しで、糸切痕は細かい。82・84・85には口縁部に炭化物の付着がある。

89~116は小皿である。102・103・104・115・116を除いて、大粒の赤色粒子を含む胎土である。底部の糸切痕はいずれも粗い。94・96・97・102・103・110は口縁部に炭化物が認められる。107・111は黒斑状に変色する。多くが見込み中央にドーナツ状あるいはボタン状の高まりを持つが、92・97・100・105・111のように持たないものもある。

117・118は小壺である。117は赤色粒子を多く含む胎土で、やや器面の状態は悪いが、底部の糸切痕は細かいようである。体部上位でいったん段を作り、口縁部は外反気味である。118は黒斑状に内外面が変色している。見込みは中心がわずかに尖り、体部は直線的に外傾するが、口縁部下で一端厚みを持つ。

119~122はミニチュア土器である。いずれも胎土に赤色粒子があり、底部は糸切である。119ははっきりしないが、残りはいずれも糸切痕は粗い。122はやや厚い作りで、淡橙色を呈し、焼成時に白色の焼き上がりを狙ったものであろう。

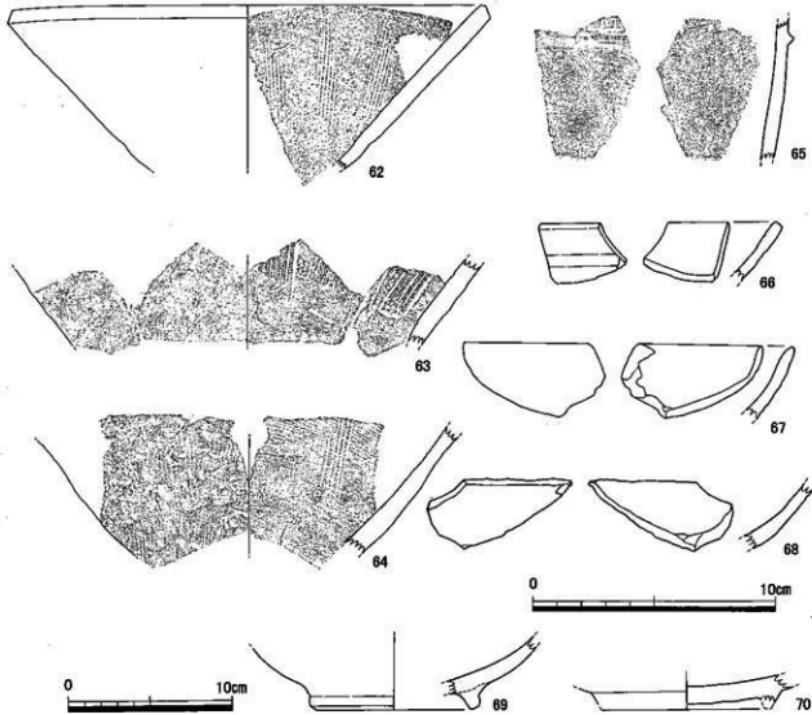
123~125は耳皿である。いずれもミニチュアからの作り出しで、底部には糸切痕が残る。124ははっきりしないが、123の糸切痕は粗く、125の糸切痕は細かい。

126~134は瓦である。126・129は鳥巣瓦である。126の瓦当部は、周縁が上部で幅広となり巴文と珠文17個が入る。金箔が瓦当部に貼り付けられる。129は丸瓦部から瓦当部だけが剥離しており、剥離面には接着を高めるためのクシ目が入れられている。瓦当部周縁の一部が幅広となっている。瓦当部裏面は粗いユビナデ調整が施される。

127・128・130は軒丸瓦である。130は13個の珠文を持つ。

131~133は丸瓦である。131は玉縁をもつ尻部の資料で、燃しが弱く、径が大きくて分厚い作りである。凸面はヘラ状工具によってなでられ、凹面にはコビキB痕、吊り紐痕が見られ、棒状工具によるオサエ痕が残る。凹面の周縁には面取りが施される。132は玉縁部の資料で、焼成が悪い。凸面はヘラ状工具による調整のあとナデ調整が施される。凹面は大量の離れ砂が付着し、棒状工具のオサエ痕も残る。周縁には面取りが施される。133は頭部の資料で、燃しが弱い。凸面は籠状工具によるナデ調整が施され、凹面にはコビキB痕、布目が残り、離れ砂が付着する。頭には面取りが施される。

134は面戸瓦で、凹面にはコビキA痕が残り、周縁には面取りが施される。

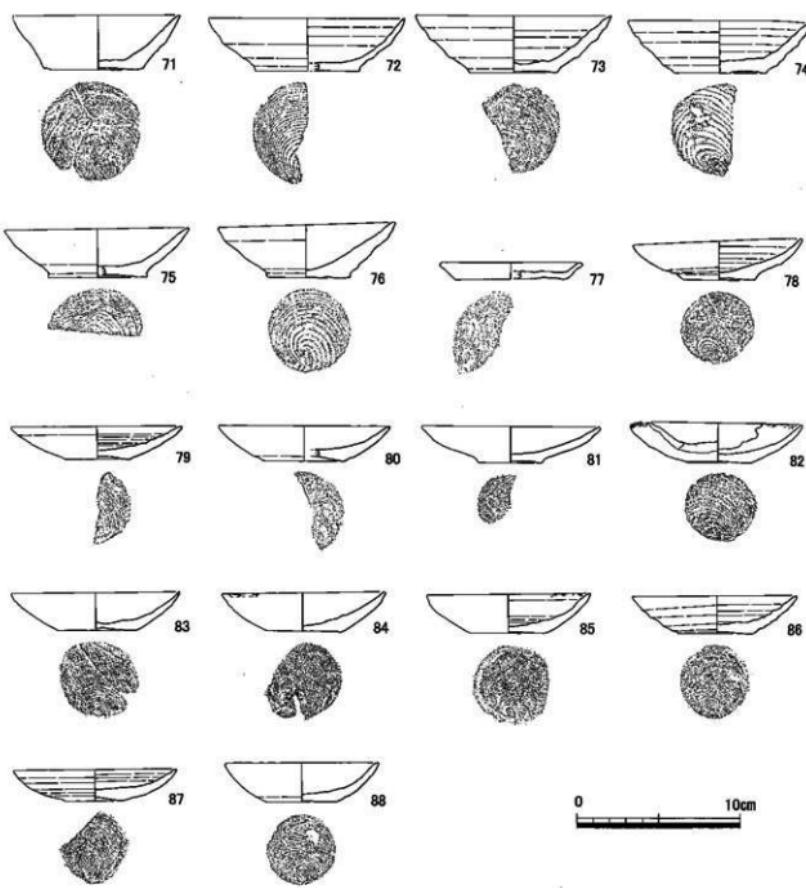


第88図 ニノ丸A地区出土の遺物⑤ (62~65: S=1/3, その他:S=1/2)

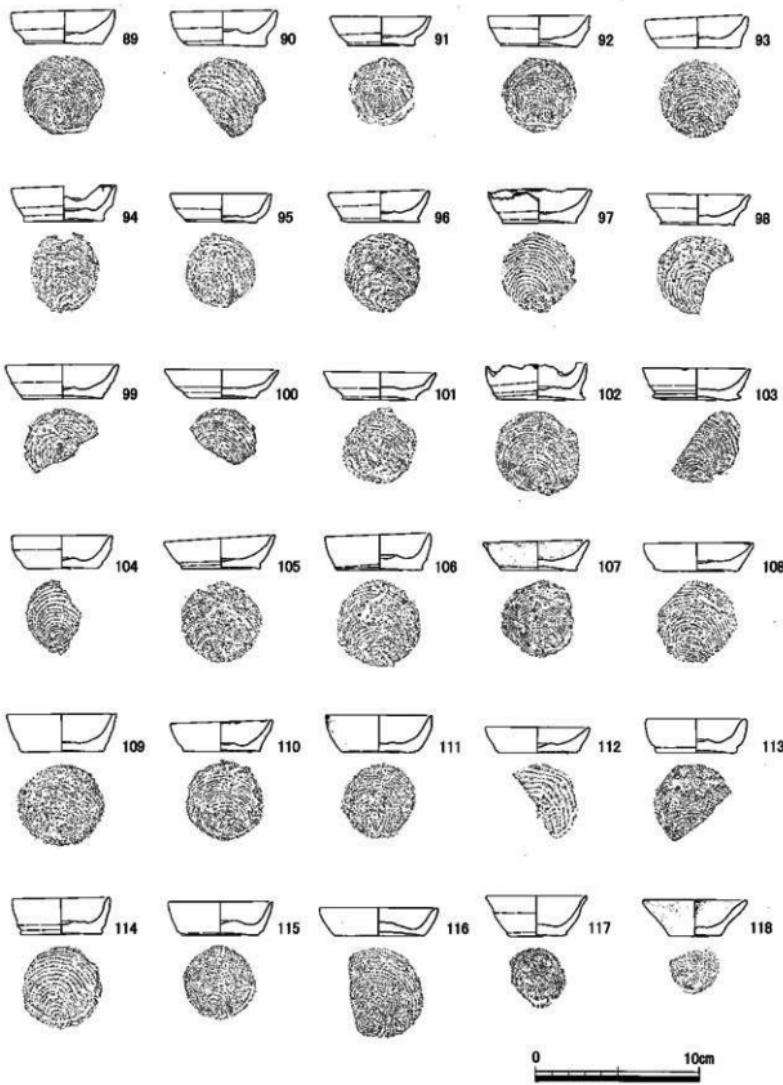
135・136は軒平瓦である。135は、瓦当部の文様は三葉文の中心飾りと連なった唐草文である。136は焼しが弱く厚手の資料で、瓦当部の高さも高い。瓦当部には逆さの三葉文に独立した唐草文がつく。

137~139は平瓦である。137・139は焼しが弱く、厚手である。137は上下面ともに離れ砂が大量に付着する。139には下面に離れ砂が付着する。

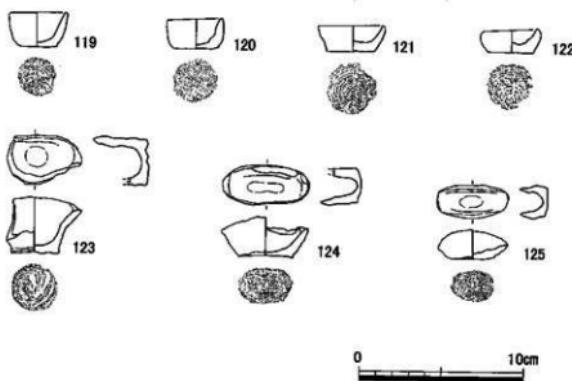
140・141は飾り瓦の一種であろう。140は板状で、一辺で屈曲部を持つ。141は葉脈を沈線で描いて木の葉を表現している。作りの上では軒丸瓦と共通する。



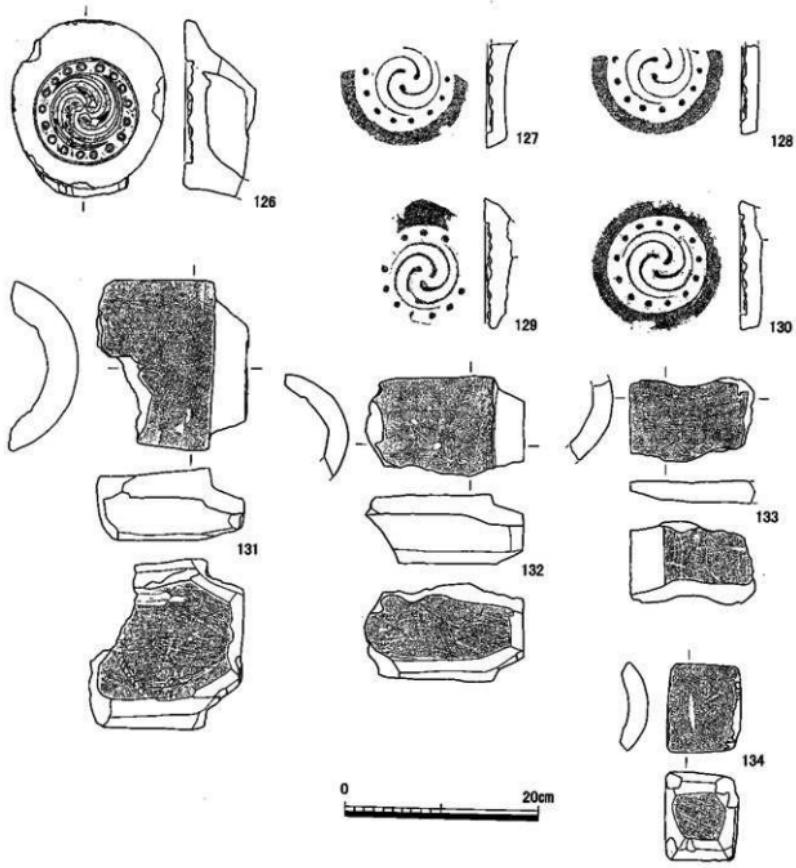
第89図 ニノ丸A地区出土の遺物⑦ (S=1/3)



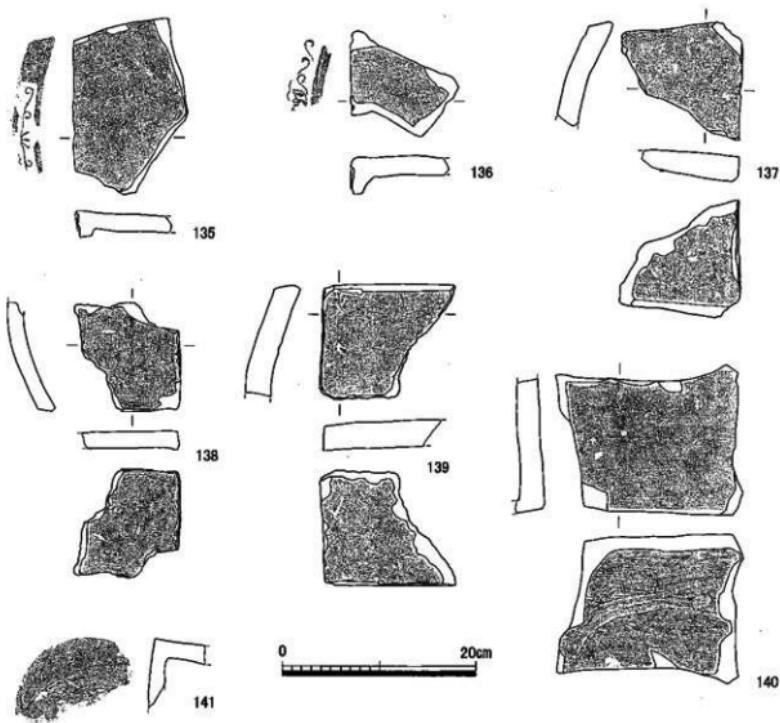
第90図 ニノ丸A地区出土の遺物⑧ (S=1/3)



第91図 ニノ丸A地区出土の遺物⑨ (S=1/3)



第92図 ニノ丸A地区出土の遺物⑩ (S=1/5)



第93図 ニノ丸A地区出土の遺物① (S=1/5)

第14表 ニノ丸A地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	壺	二ノ丸地区	29区	II層	復元口径16.5cm
2	青磁	壺	二ノ丸地区	29区	III層	
3	青磁	壺	二ノ丸地区	29区	II層	
4	青磁	壺	二ノ丸地区	28区	I層	復元底径4.3cm
5	青磁	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	復元口径13.7cm
6	青磁	碗	二ノ丸地区	28区	I層	
7	青磁	碗	二ノ丸地区	29区	皿層	
8	青磁	碗	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径5.6cm
9	青磁	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径5.6cm
10	青磁	瓶	二ノ丸地区	28区	表探	復元底径5.0cm
11	青磁	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径4.9cm
12	青磁	瓶	二ノ丸地区	28区	II層	復元底径4.6cm
13	青磁	壺	二ノ丸地区	29区	I層	復元口径27.4cm, 復元底径13.5cm, 器高6.5cm
14	青磁	壺	二ノ丸地区	29区	I層	
15	青磁	壺	二ノ丸地区	28区	I層	

第15表 二ノ丸A地区出土遺物観察表②

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
16	青磁	壺	二ノ丸地区	29区	I層	
17	青磁	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	復元口径11.3cm
18	白磁	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	
19	白磁	瓶	二ノ丸地区	28区	II層	復元口径15.5cm
20	白磁	瓶	二ノ丸地区	28区	I層	
21	白磁	壺	二ノ丸地区	28区	I層	
22	白磁	瓶	二ノ丸地区	28区	II層	底径4.1cm
23	白磁	壺	二ノ丸地区	29区	I層	復元口径8.4cm, 復元底径2.9cm, 高さ2.1cm
24	白磁	壺	二ノ丸地区	29区	II層	復元口径13.5cm, 底径7.7cm, 高さ2.6cm
25	白磁	小環	二ノ丸地区	28区	II層	復元口径7.2cm, 復元底径3.3cm, 高さ3.7cm
26	青花	瓶	二ノ丸地区	28区	I層	
27	青花	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	
28	青花	瓶	二ノ丸地区	28区	II層	復元底径3.7cm
29	青花	瓶	二ノ丸地区	28区	II層	底径4.3cm
30	青花	瓶	二ノ丸地区	28区	II層	復元底径5.3cm
31	青花	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	復元口径24.7cm
32	青花	壺	二ノ丸地区	29区	II層	
33	青花	壺	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径5.0cm
34	青花	壺	二ノ丸地区	29区	I層	復元口径9.6cm, 復元底径4.8cm, 高さ2.4cm
35	青花	壺	二ノ丸地区	28区	II層	復元底径6.3cm
36	青花	壺	二ノ丸地区	28区	I層	復元底径8.2cm
37	青花	壺	二ノ丸地区	29区	II層	
38	青花	壺	二ノ丸地区	29区	II層	
39	青花	壺	二ノ丸地区	28区	I層	復元底径5.0cm
40	青花	壺	二ノ丸地区	29区	II層	
41	青花	壺	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径8.2cm
42	青花	壺	二ノ丸地区	28区	I層	
43	環噴射装置	小環	二ノ丸地区	29区	I層	復元口径8.0cm
44	五彩	壺	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径6.3cm
45	五彩	壺	二ノ丸地区	28区	I層	
46	翡翠軸組器	轆	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径10.2cm
47	翡翠軸組器	轆	二ノ丸地区	28区	I層	復元口径9.7cm
48	陶器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	
49	陶器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	底径3.7cm
50	陶器	壺	二ノ丸地区	29区	I層	
51	陶器	-	二ノ丸地区	28区	II層	復元底径16.8cm
52	陶器	-	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径33.4cm
53	陶器	-	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径13.9cm
54	陶器	-	二ノ丸地区	29区	I層	
55	陶器	-	二ノ丸地区	29区	II層	
56	陶器	-	二ノ丸地区	28区	II層	復元底径5.2cm
57	陶器	-	二ノ丸地区	29区	II層	復元底径4.0cm
58	陶器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	

第16表 二ノ丸A地区出土遺物観察表③

番号	種別	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	法量 (cm)		
						外面	内面	裏面		口徑	底径	厚さ
59	陶器	壺	二ノ丸地区	29区	I層	明赤褐色	灰白色	褐色	長石、2~10mmの大砂砾	(35.4)	(33.2)	11.7
60	陶器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	淡褐色	褐色	褐色				
61	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	29区	II層	黃褐色	黃褐色	黃褐色	長石、赤色粒子			
62	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	灰褐色	灰白色	灰白色	長石、褐色、赤色粒子、2~5mmの大砂砾	(38.4)		
63	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	褐色	長石、赤色粒子			
64	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	灰白色	灰白色	褐色	長石、石英、赤色粒子			
65	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	29区	II層	にじみ黄褐色	にじみ黄褐色	褐色	長石、石英、純白石、白雲母、1~10mmの砂砾			
66	瓦器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	灰褐色	灰白色	灰白色	長石			
67	瓦器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	灰褐色	灰白色	灰白色	長石			
68	瓦器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	灰褐色	灰白色	灰白色	長石			
69	瓦器	壺	二ノ丸地区	29区	II層	灰褐色	灰白色	灰白色	長石			(8.4)

カッコ付は複数

第17表 二ノ丸A地区出土遺物観察表④

番号	種別	層別	地区	調査区	出土番号	色調			土質	寸法(cm)			
						外観		底面		口幅	底幅	高さ	
						内面							
70	瓦器	板	二ノ丸地区	29区	II層	灰色	灰白色	灰色	灰石	19.2	5.2	3.3	
71	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.9)	6.4	3.3	
72	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(11.9)	5.4	3.5	
73	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	5.7	3.2	
74	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	6.1	3.0	
75	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.2)	6.1	3.0	
76	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	19.7	5.0	3.5	
77	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(3.6)	6.9	1.0	
78	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	に赤い褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.3	4.4	2.7	
79	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	に赤い褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.4)	4.0	2.9	
80	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(10.4)	5.0	3.2	
81	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.5)	3.6	2.2	
82	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.6	4.0	2.4	
83	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.2	4.5	2.3	
84	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	9.9	4.5	2.5	
85	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	に赤い黃褐色	に赤い黃褐色	に赤い黃褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.0	4.6	2.6	
86	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.1	4.6	2.3	
87	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い黃褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(9.8)	3.7	1.9	
88	土師質土器	瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(9.2)	4.1	2.4	
89	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	4.7	2.1	
90	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.5	2.2	
91	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.0	1.8	
92	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	6.2	4.6	2.0	
93	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.2	4.9	1.9	
94	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.9	2.2	
95	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.3	1.8	
96	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.9	2.0	
97	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.2	4.5	2.1	
98	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	明黄色	6.0	4.6	1.9	
99	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.9)	4.8	2.0	
100	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.9)	4.0	1.7	
101	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.9)	4.7	1.7	
102	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	4.1	3.2	2.3	
103	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英	(6.5)	5.4	1.9	
104	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.1)	4.6	2.1	
105	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	4.5	2.1	
106	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、赤色粒子	6.4	5.2	2.3	
107	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	黒褐色	黒褐色	黒褐色	灰石、赤色粒子	6.3	4.6	1.9	
108	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	深褐色	深褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	4.6	1.7	
109	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	4.3	2.3	
110	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.7	1.9	
111	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色帶白、黒褐色	に赤い褐色	黒褐色	灰石、石英、赤色粒子	6.5	4.4	2.3	
112	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(6.3)	4.9	1.6	
113	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.0)	4.9	2.1	
114	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.0)	5.0	2.2	
115	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐褐色	褐褐色	に赤い褐色	灰石、石英	(5.3)	4.7	2.1	
116	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(7.2)	5.5	1.7	
117	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	に赤い褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	(5.1)	3.2	2.5	
118	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐褐色	褐褐色	褐褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.3)	3.1	2.2	
119	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	3.3	2.3	2.1	
120	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	3.3	2.6	1.9	
121	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	I層	に赤い褐色	に赤い褐色	に赤い褐色	灰石、石英、赤色粒子	3.9	3.0	1.4	
122	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	29区	II層	赤褐色	赤褐色	赤褐色	灰石、赤色粒子	3.2	2.6	1.5	
123	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	29区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	4.5	2.8	2.5	
124	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.4	3.3	2.5	
125	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	29区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	4.3	2.6	1.8	

カッコ付は複数

第18表 ニノ丸A地区出土遺物観察表⑤

測量番号	種別	出土地区	測量区	出土層位	文様	調査		色調			法量	備考
						表面	凸面	表面	凸面	瓦当		
126	鳥糞瓦	二ノ丸地区	26区	高文三巴文 (左側)	ナデ	ナデ	ナデ			灰色	(瓦当部) 外径幅16.0cm、内径幅11.0cm、周縁幅2.0~4.0cm、厚さ0.8cm、重さ8.0kg	薄削打
127	新丸瓦	二ノ丸地区	26区	3層	高文三巴文 (瓦当部)	ナデ				黑色	(瓦当部) 瓦当幅11.0cm、内径幅9.0cm、周縁幅3.0cm、厚さ0.8cm	
128	新丸瓦	二ノ丸地区	26区	2層	高文三巴文 (左側)	ナデ				黑色	(瓦当部) 瓦当幅11.0cm、内径幅10.0cm、周縁幅3.0cm、厚さ0.8cm	
129	鳥糞瓦	二ノ丸地区	26区	2層	高文三巴文 (瓦当部)	ナデ				灰色	(瓦当部) 周縁幅2.0cm、厚さ0.4cm、重さ3.0kg	
130	新丸瓦	二ノ丸地区	26区	2層	高文三巴文 (瓦当部)	ナデ				灰色	(瓦当部) 外径幅13.0cm、内径幅10.0cm、周縁幅3.0cm、厚さ0.6cm、重さ5.0kg	薄削打
131	丸瓦	二ノ丸地区	26区	2層	ナデ、ケズリ、吊鉤頭、 コビキ目	ナデ	灰黄色	灰黄色			幅17.5cm、厚さ7.0cm、重さ23.1kg、 三脚部長さ3.2cm	
132	丸瓦	二ノ丸地区	26区	2層	ナデ、ケズリ	ナデ	黄灰色	黄灰色			厚さ2.0cm、三脚部長さ3.2cm	凹面丸れ唇面有
133	丸瓦	二ノ丸地区	26区	1層	ナデ、ケズリ、吊鉤頭、 コビキ目	ナデ	暗灰色	灰白色			厚さ2.0cm	
134	面付・ 輪邊瓦	二ノ丸地区	26区	1層	ナデ、ケズリ、コビキ目	ナデ	黑色	黑色			長さ7.6cm、幅9.0cm、高さ1.8cm、厚さ1.5cm	
135	新平瓦	二ノ丸地区	26区	2層	三葉文・ 阿彌陀佛文	ナデ	ナデ	瓦色	瓦色	灰色	(平付) 幅9.1cm、谷深さ1.0cm、 (瓦当部) 幅22.0cm、内径幅14cm	
136	新平瓦	二ノ丸地区	26区	1層	三葉文・ 阿彌陀佛文	ナデ	ナデ	瓦色	瓦色	灰色	(平付) 幅22.0cm、 (瓦当部) 幅22.0cm、内径幅23cm	
137	平瓦	二ノ丸地区	26区	2層		ナデ	ナデ	瓦色	瓦色		厚さ2.0cm	凸面丸れ唇面有
138	平瓦	二ノ丸地区	26区	2層		ナデ	ナデ	瓦色	瓦色		厚さ1.7cm	
139	平瓦	二ノ丸地区	26区	1層		ナデ	ナデ	黄灰色	黄灰色		厚さ2.0cm、谷深さ3.0cm	凸面丸れ唇面有
140	日板瓦	二ノ丸地区	26区	2層		ナデ	ナデ	瓦色	瓦色		厚さ2.0cm	
141	唐瓦	二ノ丸地区	26区	2層		ナデ	ナデ	暗灰色	暗灰色	暗灰色	厚さ1.8cm	側面で擦耗を有

## (2) B地区の調査

### 概要

B地区は、A地区東側の曲輪5と曲輪6の連結部および曲輪6の北側部分にあたる。曲輪5と曲輪6の連結部は現状地形において緩やかな傾斜となっており、平成10年度に行った発掘調査によりこの傾斜の下から二つの曲輪を結ぶ階段を検出する。

B地区では、平成8年度に14-1区（30.4m<sup>2</sup>），14-2区（35.0m<sup>2</sup>），14-3区（18.5m<sup>2</sup>）の発掘調査を行う。また、平成10年度には30区（48.0m<sup>2</sup>）が調査されており、平成11年度には33-1区（180.0m<sup>2</sup>），33-2区（7.3m<sup>2</sup>），33-3区（2.4m<sup>2</sup>），33-4区（4.8m<sup>2</sup>），33-5区（11.2m<sup>2</sup>），33-6区（8.1m<sup>2</sup>），33-7区（13.2m<sup>2</sup>），12年度には34区（12.1m<sup>2</sup>），35区（7.5m<sup>2</sup>），36区（20.5m<sup>2</sup>）の調査を行う。

なお、14-3区，30区，33-2・7区で囲まれる範囲については調査区として設定していないが、溝跡7の範囲確認のため発掘調査を行っており、説明の便宜上この範囲をB-1区とする。また、14-1区と14-2区の間および30区，33-1・2区で囲まれる範囲についても同様で、調査区の設定はないが平成11年度に地山まで掘り下げており、この範囲をそれぞれB-2区，B-3区とする。

### 土層

B地区的基本層序は以下のようになる。

I層 耕作土層

II層 碳土層

III層 黒色土層

IV層 褐色土層

V層 暗茶褐色土層（整地層で慶長期頃の生活面）

VI層 暗茶褐色土層（慶長期整地層の基盤層）

VII層 粘質灰茶褐色土層

VIII層 慶長期以前の生活面

地山 一部焦土化（弥生時代の土器片を含む）

### 造構

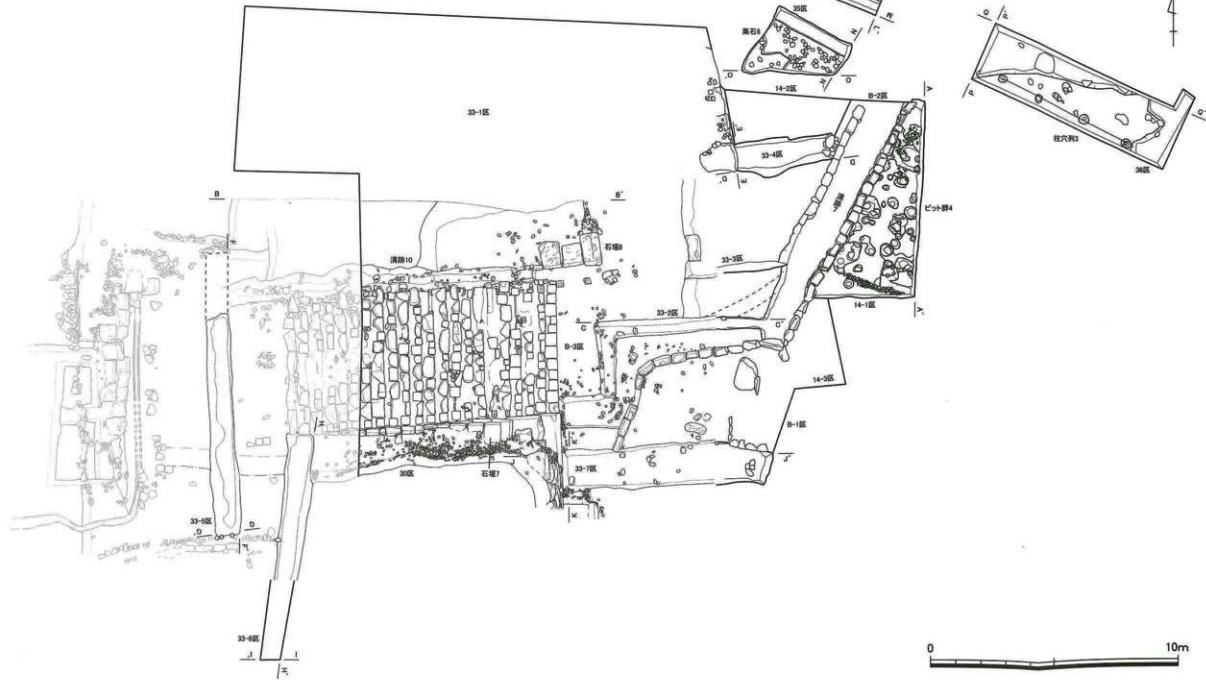
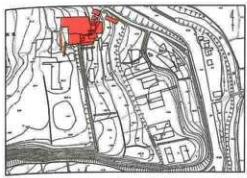
B地区は平成8年度および平成10年度から平成12年度にかけて発掘調査を行っており、平成8年度の調査では、14-1区においてピット群を、14-2区においてピット群と瓦の集積を確認している。

平成10年度から平成11年度の調査では、二ノ丸地区から本丸地区へ向かう城道を確認する目的で30区，33-1～7区を設定しており、階段4とこれに伴う石垣7・8，溝跡10を検出する。

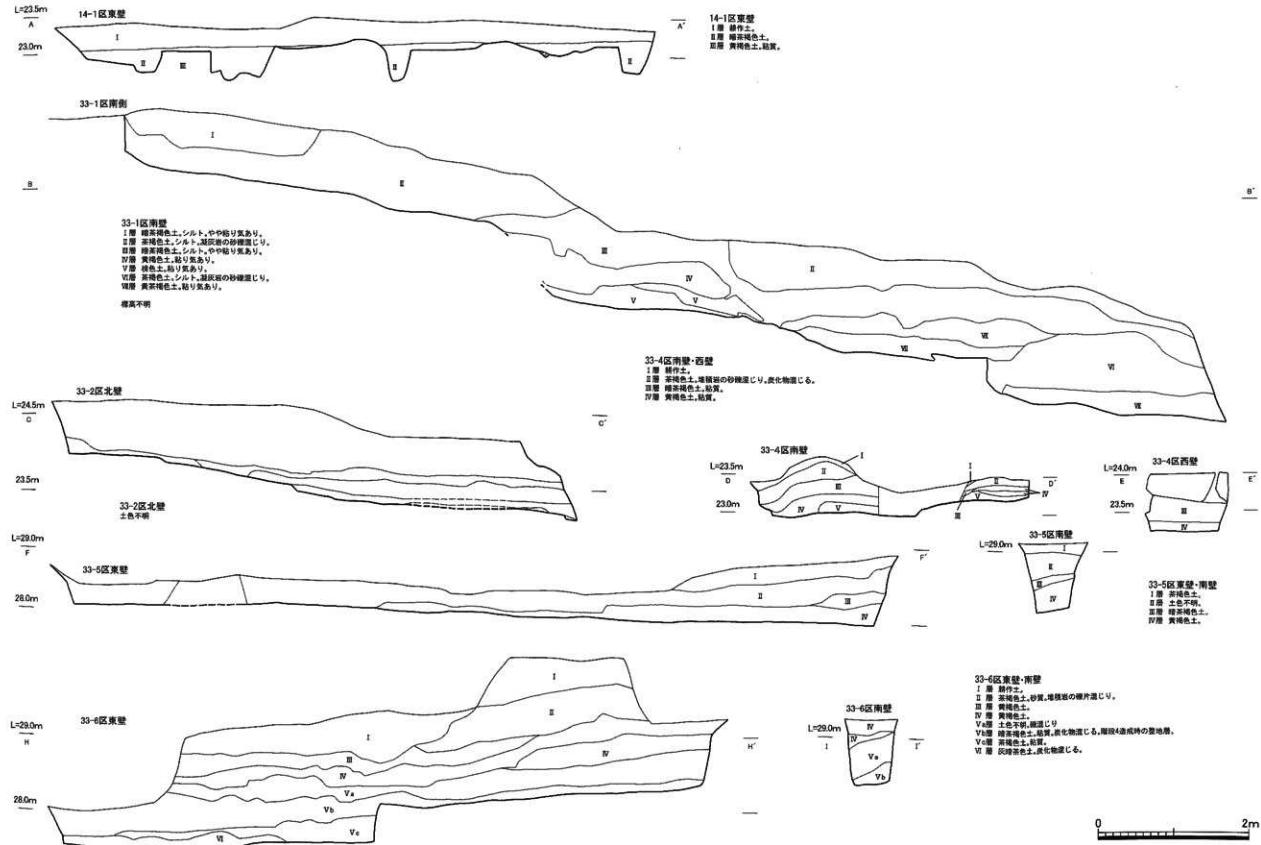
階段の上り口付近については、利用状況を把握するために平成12年度に34・35区の調査を行い拳大の礫を大量に検出するが、集石の性格については不明である。平成12年度の調査では、36区から柱穴列3も検出している。

### 階段4（28区，30区，33-1区）

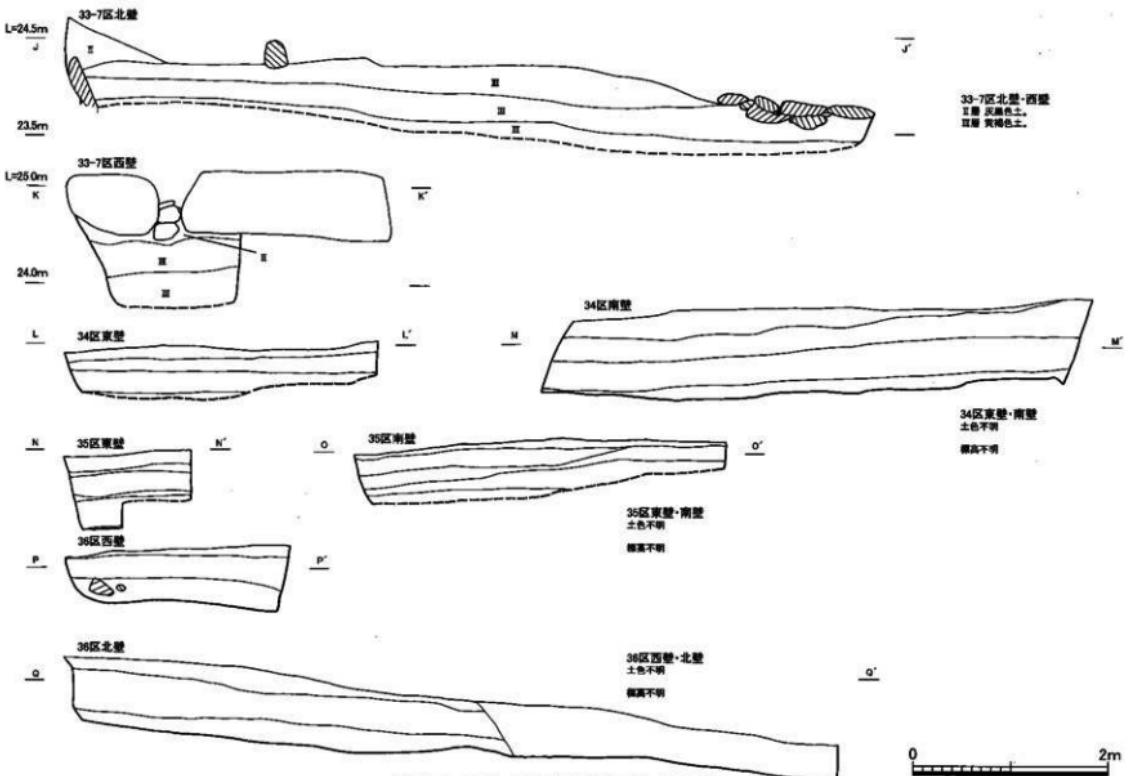
曲輪5と曲輪6を隔てる野面積石垣は北側において幅約6mほど途切れており、この部分は西から



第94図 二ノ丸B地区造構配置図 (S=1/150)



第95図 ニノ丸B地区土層断面図① (S=1/50)



第96図 二ノ九B地区土層断面図② (S=1/50)

東へ下る緩やかな傾斜となっている。

平成10年度および平成11年度の発掘調査において、この傾斜下より検出幅5.7m、踏石列の残存段数22段の階段を検出する。踏石列間の間隔は約0.5m、高低差は約0.2mを測る。踏石は摩滅した瓦の小片や拳大の蝶で覆われており、覆土に明確な時期差はみられない。また、踏石列の北側は倒壊しており、この部分の覆土からは踏石に使用されたと思われる五輪塔や宝篋印塔を検出している。

階段4において原位置を留める踏石は186点あるが、このうち五輪塔地輪が76点、宝篋印塔の基礎が7点、塔身が11点と、踏石に使用された石材の大半を転用石塔が占める。転用石塔以外には、柱石2点と幅0.4~1.2mの不整形な自然石を用いる。石塔の製作年代は、大部分が16世紀後葉にあたる。

#### 溝跡10（33-1区）

階段4の北側で検出された東西に延びる残存長13.5mの溝跡で、上幅0.5~0.8m、下幅0.3m、深さ約0.4mを測り、断面はU字形を呈する。

階段踏石の掘付面から掘り込まれており、階段4に伴う側溝である。階段4北端の踏石は原位置を留めないものが多く、溝跡10についても東端の一部を除き上端部分が残存しておらず上幅や護岸施設の有無について明らかにできない。溝底では拳大の小砾が確認されているが、これは後世の擾乱による混入と思われ、敷石は検出していない。

#### 石垣7（30区）

階段4の南側より検出した残存長9.4mの石垣で、階段4の南側袖石垣にあたる。

石材には溶結凝灰岩の切石が使用されており、石面が幅60~70cm、高さ40~50cmに揃えられる。規格的な石材を、各段の横目地が通るように積むため、間詰石はほとんどみられない。石材の表面には加工痕跡が確認できる。また、隅角部に直角型の「削りこみ」を持つ石材が、東端の2段目と階段中段から上段にかけて検出される。石積みの際に、石材の「削りこみ」を相互に「かみ合わせ」で積まっていたものと考察されている。(註1)

石積は1~3石だが裏込め石がこれより高い位置で検出されており、さらに上積みされていたものと推測される。この場合、石垣の高さは不明だが、裏込め石の高さが0.5~2.9mであることから、標高28.8mほどに石垣の天端が抑えられていた可能性がある。

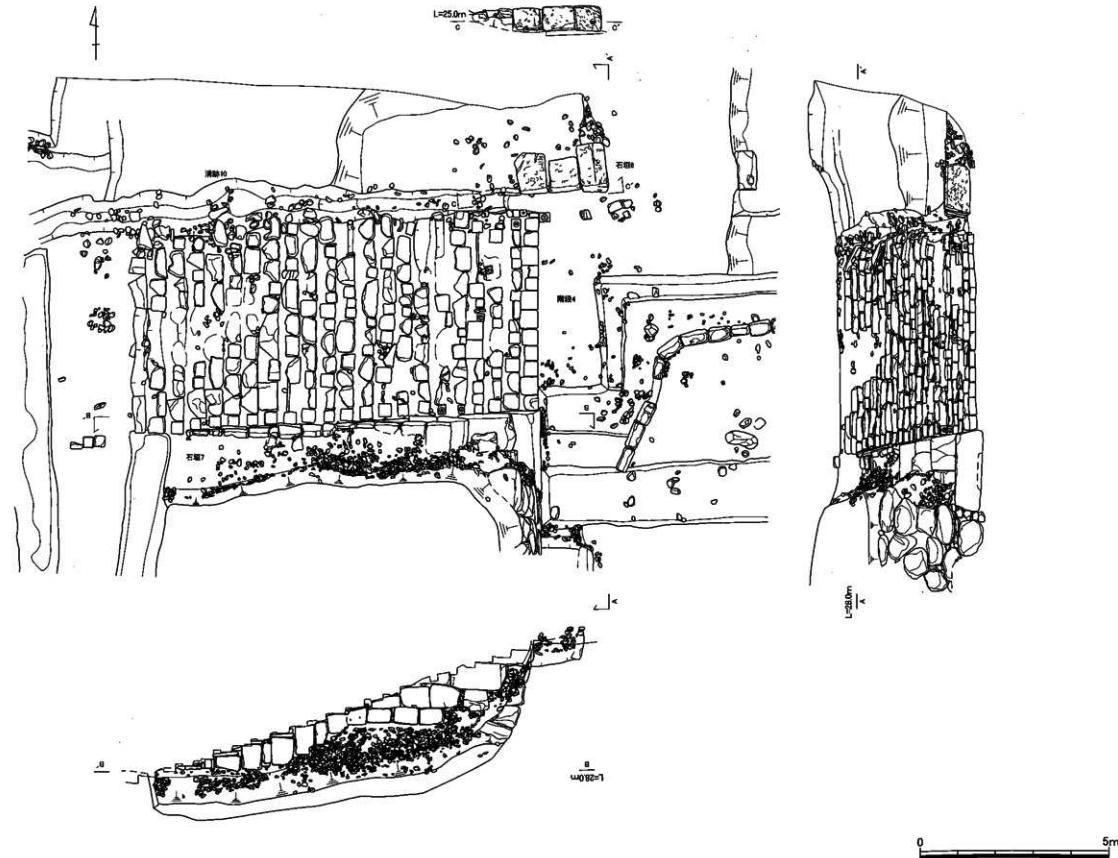
#### 石垣8（33-1区）

階段4の北東より検出した石垣で、石積は根石のみが残存する。石垣の石材は溶結凝灰岩の切石で、主軸方向は階段4、石垣7と揃っており、石垣7と対になる階段北側袖石垣の一部と考えられる。階段4の北側路肩部分については、擾乱により詳細は不明である。

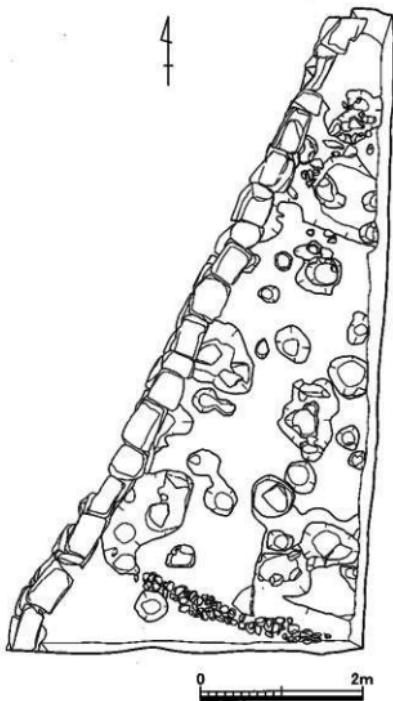
石積技法について残存するのが基底部のみで明確には出来ないが、溶結凝灰岩の切石を横目地が通るように積まれており、石垣7と同様の石積技法を探る。石材の隅角部に直角型の「削りこみ」は確認できない。

石垣は残存長5.3m、高さ0.7m、石材は石面幅70~80cm、高さ60cmで、控えの長さは0.9~1.3mを測る。

存段  
瓦の  
して  
基礎  
主石  
。  
地  
を設  
よ  
  
見ま  
コト  
一  
ト



第97図 路段4・石垣7・石垣8・溝跡10実測図 (S=1/100)



第98図 ピット群4実測図 (S=1/60)

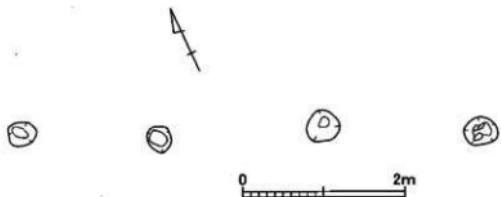
#### 溝跡7 (14-1区, 14-2区, 14-3区, B-1区, B-2区)

階段4の東側で、二度屈曲しながら南北方向に延びる溝跡を検出する。溝跡は残存長16.6m、上幅1.2mで、両側石には砂岩の切石が使用される。

溝跡の東側側石は北端を14-1区で検出しており、33-7区まで続く。南北両端とも途中で石列が途切れしており、遺構の全体像は明らかでない。また、14-1区では、2石の石積みを確認する。西側の側石は33-2区では検出していないが、14-2区南端とB-2区で東側の側石に平行する形で検出している。

側壁に用いられた切石は長辺50~70cm、短辺30cmほどの長方形に整形されたものが多く、短辺を合させて配石されているため控えは短いが、東西両面が揃えられる。

時期については明らかに出来ないが、14-1区から検出したピット群を切っており、これより新しい時期の遺構である。



第99図 柱穴列3実測図 (S=1/60)

#### ピット群4 (14-1区, 14-2区)

14-1区ではピットを多数重複して検出しており、底に平石を据えるものもあることから建物跡の柱穴と思われる。また、未実測ではあるが遺構の写真から14-2区でもピットが確認できる。

両調査区で確認されたピットから建物跡を確認することは困難だが、14-2区では瓦の集積が確認されており、付近に瓦葺の建物が建てられていたと推測される。

#### 柱穴列3 (36区)

36区南側より検出した4基の柱穴列で、東西方向へ直線上に並ぶ。検出長は6.4mを測り、柱穴は径0.3~0.42m、深さ0.1~0.2mを測る。東端の柱穴には底に拳大の自然石が詰められており、東より3番目の柱穴にも、底に22×16cmの平坦な自然石が据えられる。柱間寸法は東より1.95m、2.0m、1.7mで、一定しない。

南西方向にある14-1区と14-2区で検出したピット群4とは、柱筋が並ばない。

#### 集石5 (34区)

34区において、拳大の石を大量に検出する。性格については不明である。

#### 集石6 (35区)

35区において、拳大の石を大量に検出する。性格については不明であるが、34区で検出した集石5と同様の遺構と思われる。

#### 〔註釈〕

(註1) 石垣7で確認された「削りこみ」と石積技法については、宮武正登 2003 「九州における織島系城郭研究10年の現状と課題」『織島城郭』第10号 織島系城郭研究会 17~40頁を参照。

## 遺物

1～6は青磁の資料である。1は劃花文を内面に施す皿である。2は碗口縁部で、やや丸みを帯びて体部から口縁部へといたる。外面口縁部に1条の沈線を引く。3は碗の底部から体部下半にかけての資料である。内面見込み中央は釉剥ぎしてあり、スタンプ文が入り、重ね焼き時の高台の痕が残る。高台は疊付まで釉が掛かるが、高台内は無釉である。4は皿で内外面ともに無文であり、高台は外面まで釉が掛かるが、疊付と高台内は無釉である。5は口縁部が肥厚する皿で、外面体部には蓮弁文をいれ、口縁部下には段を設ける。内面にも口縁部からやや下がったところに段を作る。6は腰折れとなる皿の口縁部で、屈曲後口縁部は大きく外反する。

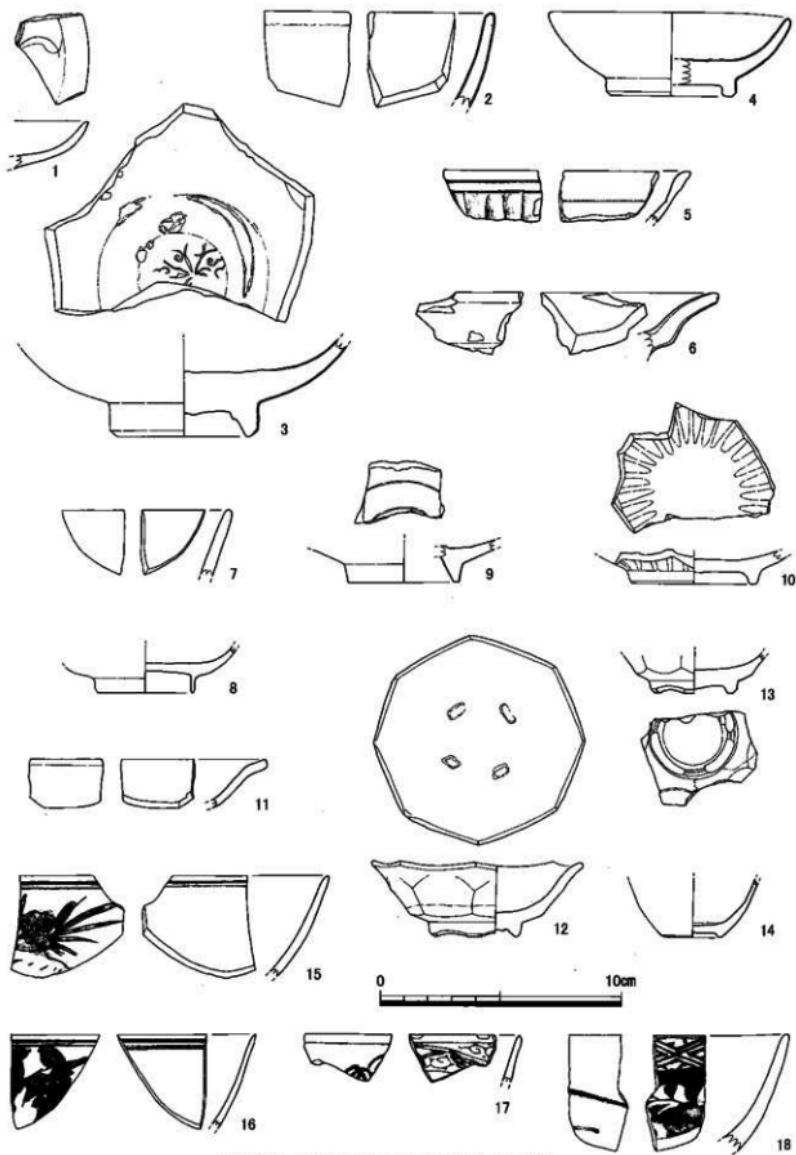
7～13は白磁の資料である。7は碗の直立する口縁部で、やや外傾する。8は薄手の高い高台を持つ資料である。高台疊付部分には釉剥ぎを施す。9は内面見込みに蛇の目状の釉剥ぎを施す。10は皿の底部付近で、内外面に蓮弁文を入れる。高台疊付には粗い釉剥ぎを施す。貫入が細かく入る。11は端反となる口縁部の皿である。貫入が入る。12・13は朝鮮半島産の八角皿である。どちらも円形皿の高台部分に抉りを入れ、体部から口縁部にかけて外面に削りを施して八角に整える。釉は体部下位までで、高台には掛からない。12には見込みに4カ所の目痕が残る。

14は灰釉磁器の小杯である。疊付部分には釉剥ぎを施し、細かく貫入が入る。

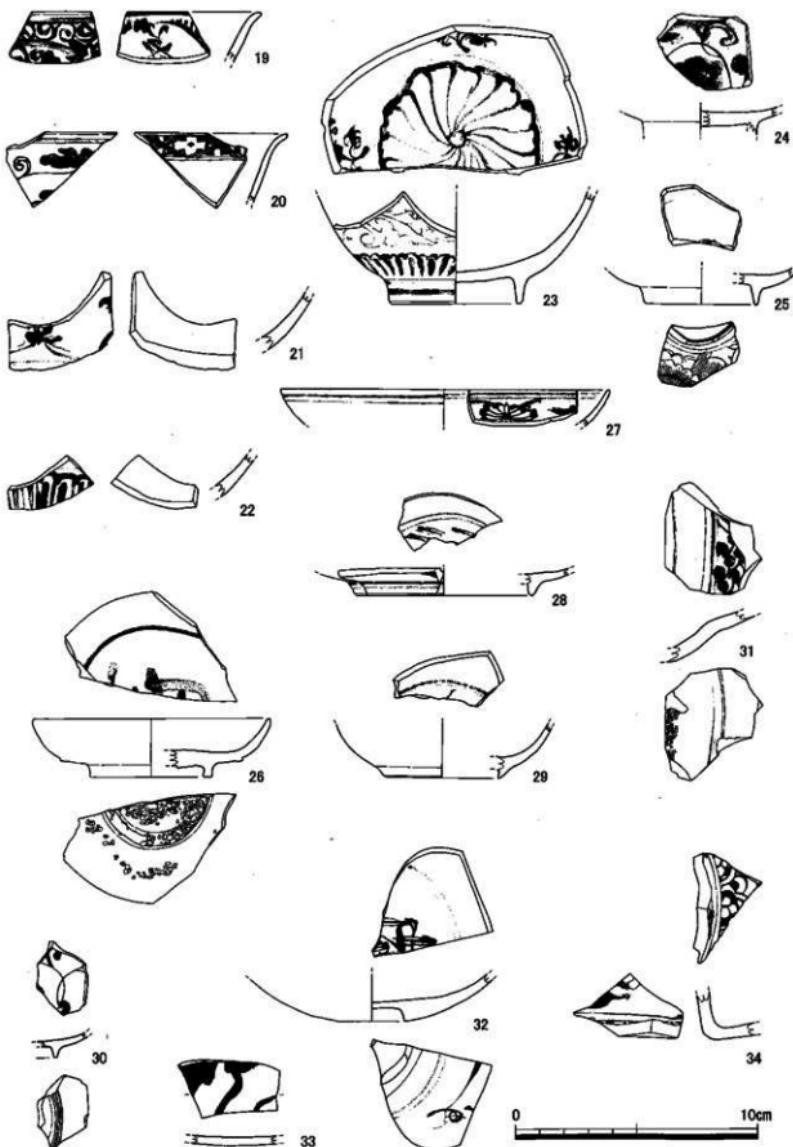
15～34は青花の資料である。15～25は碗の資料である。15は緩やかに内湾して立ち上がる口縁部で、内外面ともに2条の界線を引き、外面体部に文様を描く。16はごくわずかに口縁部が外反する薄手の作りの碗である。内外面に2本ずつの界線を引き、外面には鳥文を描く。17はやや外傾する口縁部の資料で、内面には唐草文を描く。18は内面口縁部に四方擇文を入れ、体部には植物文を描く。19は端反の口縁部で、外面には渦巻き文を、内面にも文様を描く。20は端反の碗で、外面には口唇部直下の界線の下に唐草文を、内面には口縁部に四方擇文を書く。21は脣部の資料で、外面に文様が入る。22は外面に蓮弁文を描く。23は底部から体部にかけての資料である。外面には高台に2本の界線を入れ、体部下半には蓮弁文を描き、さらにその上には沈線文を施して、釉溜りによって文様を表す。内面には見込みに界線2条を引いて捺花文を描き、その周囲に草花文を描く。疊付部分には釉剥ぎを施す。24は底部付近であるが、高台は欠損する。内面見込みに十字花文を入れる。25は細線描きの文様で、淡く発色する。

26～33は皿の資料である。26の体部はしっかりと腰を作って口縁部は低く立ち上がる。高台と高台内及び体部外面には大量の砂が付着する。内面見込みには太線で界線が巡り、「寿」の字が入る。27は口縁部内外面に2条の界線を引き、内面には草花文を描く。28は底部の資料で、高台と見込みに2条の界線を引き、内面見込みには文様を描く。29は、外面は無文で、内面見込みには2条の界線を引き文様を描く。また体部内面には蓮弁文をいれる。高台疊付には釉剥ぎを施す。30は内面には唐草文を描き、外面には高台に2条の界線を引く。高台疊付部分には釉剥ぎを施す。高台には砂粒の付着が認められる。31は折れ縁の口縁部で、外面には2条の界線を引き、内面鶴部には青海波文を描く。32は基筒底の資料で、内面見込みには2条の界線内に描くのは「寿」字であろうか。33は皿の見込み部分と思われる。34は蓋の肩部から頸部にかけての資料で、外面に文様が入る。

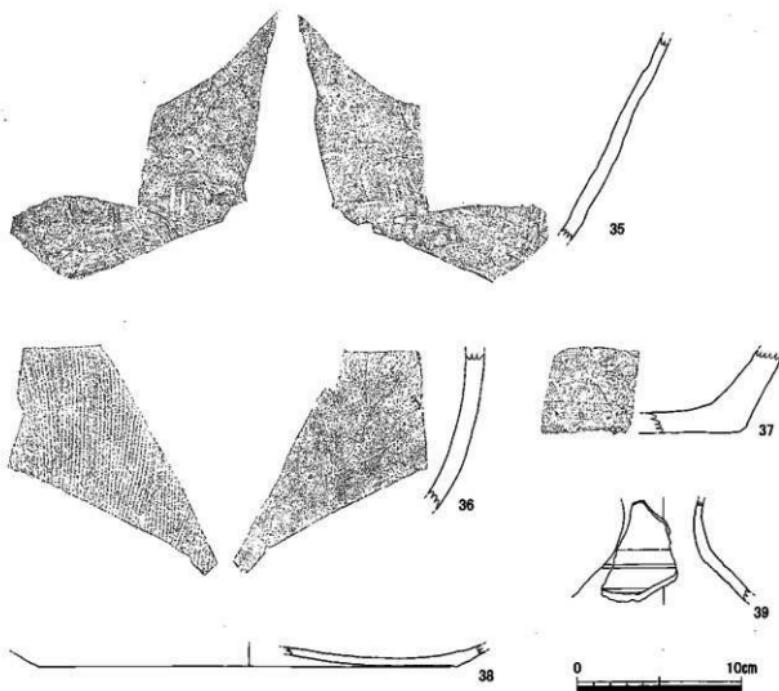
35～44は陶器の資料である。35は非常によく焼け締まった大型の甕の資料で、外面には工具による縱方向の擦過調整を施す。36は外面に褐色釉の掛かる資料で、破片であるため縱横逆になる可能性もある。



第100図 ニノ丸B地区出土の遺物① (S=1/2)



第101図 ニノ丸B地区出土の遺物② (S=1/2)



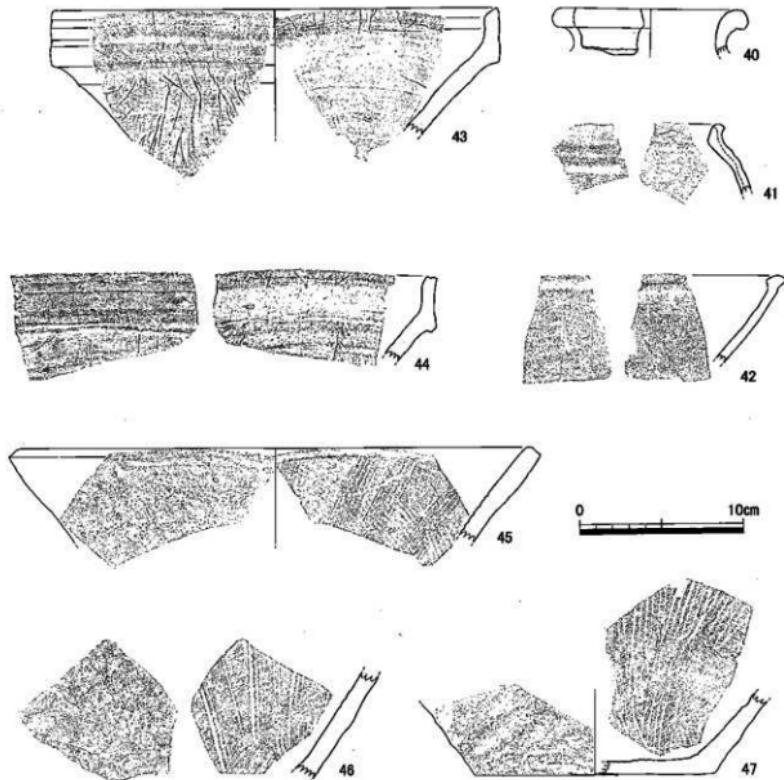
第102図 ニノ丸B地区出土の遺物③ (S=1/3)

ある。外面には刷毛目調整を入れ、内面には工具によるナデ調整を施す。37は非常に厚手の底部資料である。38は褐色釉が掛かる底部の資料で、薄手の作りである。底面は粗く釉剥ぎを行っている。39は壺の肩部から頸部の資料で、外面と内面頸部付近まで褐色釉が掛かる。肩部には2条の沈線を引く。40は壺で、短い頸部に外側を肥厚させた口縁部がつく。41は無頸壺で、なで肩の肩部には外面に凹凸を持つ。42は須恵質の焼き上がりで、口縁部を玉縁状に肥厚させる。外面は無釉で、内面に掛かるのは自然釉であろうか。43・44は口縁部帯を持つ擂鉢である。

45~51は瓦質の擂鉢である。45は口縁部の資料で、口縁部上端は平坦に整え、内面には6本単位のクシ目を入れる。46の内面のクシ目は6本単位で、外面に見られる器面の凹凸は成形時のユビオサエ痕であろうか。48~50は内面のクシ目が2方向に走る。49は片口の部分である。48は口縁部外面を、50は口縁部からやや下がった位置の体部外面を横方向に強くユビナデする。

51の内面にはクシ目の下に刷毛目調整が観察される。48・51には焼しが掛かる。

52~59は瓦質の火鉢の資料である。52は口縁部を内側に張り出させて、上面を平らにし、内面には刷毛目調整を施す。外面は丁寧にミガキをかけている。58・59は底部付近の資料で、支脚を持つ。53・



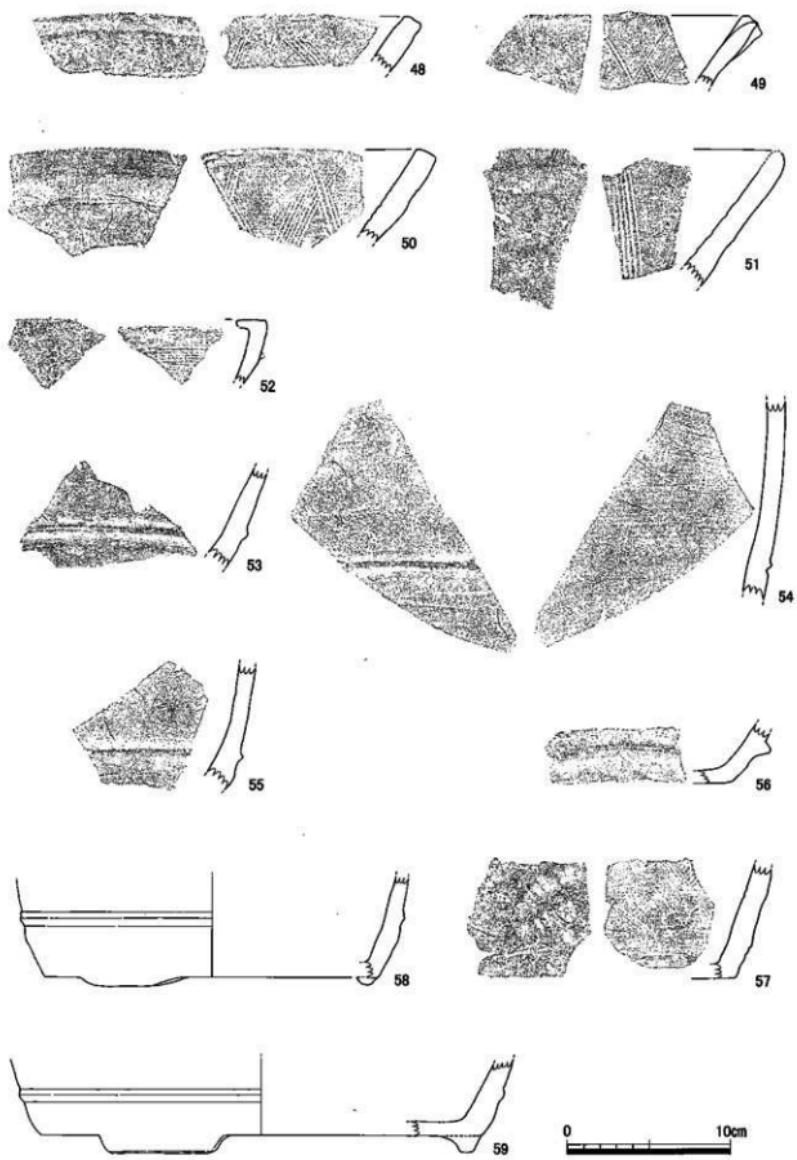
第103図 ニノ丸B地区出土の遺物① (S=1/3)

57・59は焼しが掛かる。

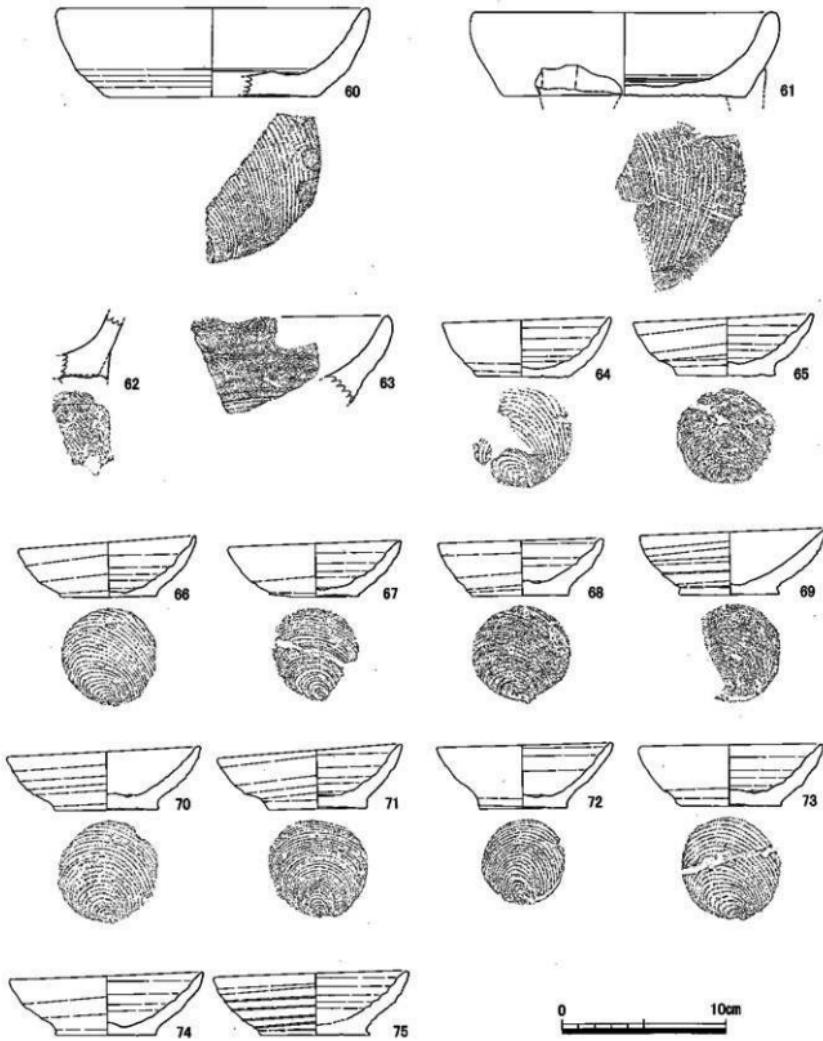
60~93は土師質土器である。60~63は火鉢である。60・61は底面に粗い糸切痕を残し、61は脚部の剥落部が残っている。脚部は一端粘土塊を貼り付けたあとに刃物で切り取って成形したらしく、器面に刃物傷がつく。62は脚部付近の資料で、剥落部に糸切痕が観察できる。

64~107は壺である。64~101は同類と思われる。いずれも底面には粗い糸切痕を残し、内面見込み中央には工具痕の痕跡と思われるボタン状の高まりが残る傾向にある。成形は、外面は工具調整の後ナデ調整を行うがナデ調整の精粗には個体差がある。また、64~73のように胎土に赤色粒子を多く含み、焼き上がりの色調も橙色系をなし、赤みが強い一群が含まれる。

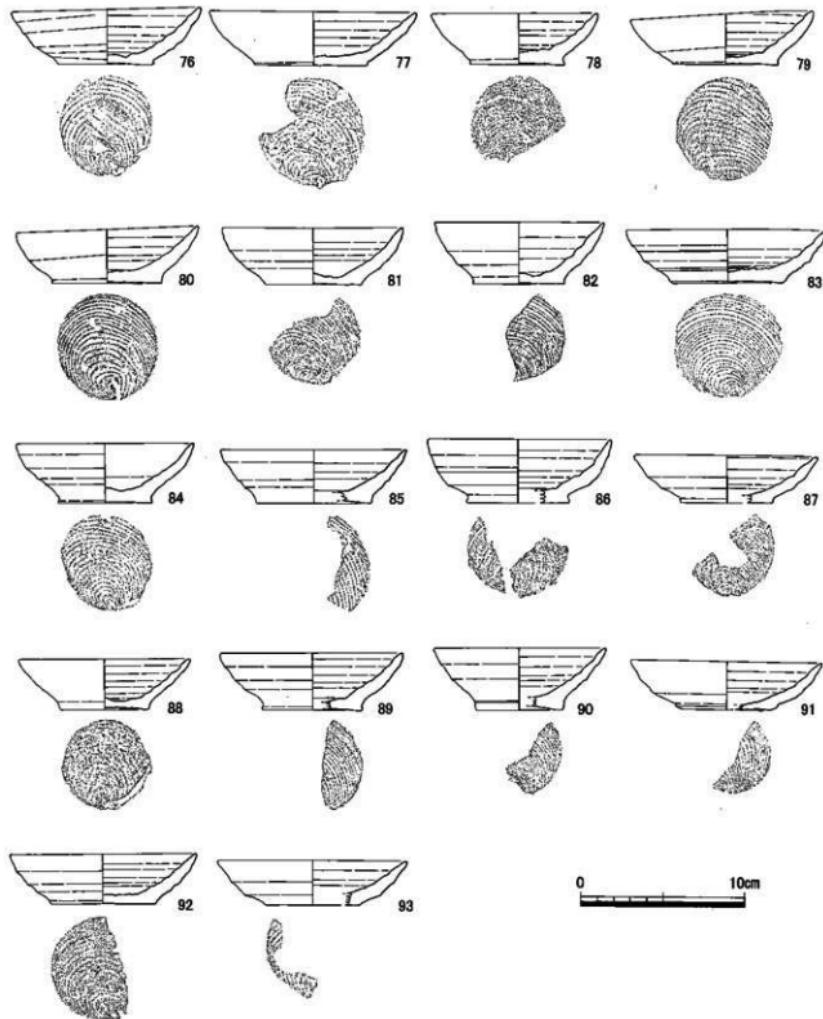
99は小縫の混入が多い胎土で、底面には粗い糸切痕が残る。体部は腰が張り、全体に薄手の作りである。色調は赤みの強い橙色である。100は底面に粗い糸切痕を残し、内面見込みには螺旋状工具痕



第104図 ニノ丸B地区出土の遺物⑤ (S=1/3)



第105図 ニノ丸B地区出土の遺物⑥ (S=1/3)



第106図 ニノ丸B地区出土の遺物⑦ (S=1/3)

がつく。胎土には小礫が多数含まれ、成形は歪みが大きい。101は赤色粒子を含む胎土であり、内面見込み付近は黒色化する。底面の糸切痕は粗い。

102~104は見込みを作らずに体部が直線的に外傾して口縁部に至るものである。内面の体部立ち上がり付近ではゆるい大きな段を1~2段作る。105は大粒の赤色粒子を非常に多く含む胎土である。底面の糸切痕は粗い。106は径の小さい粘土柱からの切り離しで、糸切痕は粗い。非常に薄手の作りで、体部は丸みを帯びる。107は底面に粗い糸切痕があり、腰が張る器形で、器壁は非常に厚く重量がある。

108~119は皿である。いずれも径の小さい粘土柱からの切り離しで、底面には細かい糸切痕が残る。109・114・116・117・118には口縁部に炭化物が付着する。118は器面の状態が悪いが、赤色粒子を多く含む胎土である。

120~155は小皿である。120・121は赤色粒子を多く含む胎土で、どちらも橙色を呈する。120は細かい糸切痕で、外面には成形の凹凸が細かく残り、口縁部は外反する。121の糸切痕は粗く、口縁部は外反する。122~129も赤色粒子含む胎土を用いている。いずれも底面の糸切痕は粗く、127~129は非常に厚手である。130~149は胎土に赤色粒子をほとんど含まないか、まったく含まないもので、136のように細かい糸切痕のものもあるが、多くが粗い糸切痕である。130~135のようにやや器高が低く、体部中ほどで屈曲するものと、136~149のようにやや器高が高く、口縁部は直線的にやや外傾して立ち上がるものが見られる。

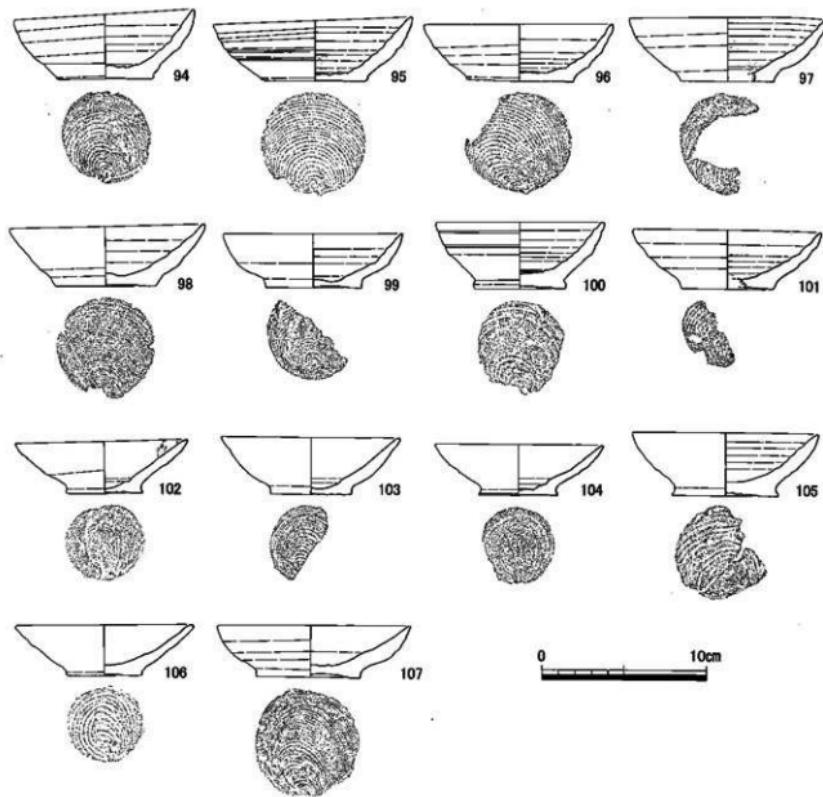
150・151は外面に底部と体部の境を作らない。150は薄手の作りで、口縁部に炭化物の付着が認められる。152は軟質の焼き上がりで口縁部は大きく開く。底面には糸切痕が残る。153は径の大きな粘土柱からの切り離しで、細かい糸切痕が残る。口縁部は径の割りに浅い立ち上がりである。154は赤色粒子を含む胎土で、焼成が甘い。底部の器壁が厚く、にぶい黄橙色を呈するが、白色の焼き上がりを期待したものであろうか。

155は白色系であり、内面に螺旋状の工具痕を残す。

156~158はミニチュア土器である。156・157の糸切痕は粗く、158は細かい。158は外面に成形時の筋状の調整痕が残る。

159~166は耳皿である。159は小皿から、ほかはミニチュア土器からの作り出しである。159の糸切痕は粗く、口縁部を内側に巻き込んで成形する。160も口縁部を内側に巻き込み、両端にエビオサエを施す。162・163・165はやや細かい砂粒を多く含んだ胎土で、厚手である。全体を両方から挟み込んで成形する。161・164・166は口縁部が先細りとなるミニチュア土器を用い、やはり全体を両方から挟み込んで成形する。

167~253は瓦の資料である。167~175は軒丸瓦である。167は釘穴が開き、凸面には丁寧なナデ調整を施す。凹面にはコビキA痕と布目、吊り紐痕が残り、両側縁は面取りしたあとにナデ調整を施す。168~171は瓦当面の資料である。いずれも巴文と珠文によって文様が構成され、凹面は丁寧なナデ調整が施される。丸瓦との接合部の剥離面にはクシ目が残る。172~175は瓦当部が剥離した丸瓦部である。いずれも剥離面にはクシ目が観察される。また、凸面は丁寧にナデ調整を施し、凹面はコビキA痕が残り、173以外は布目も残る。側縁は面取り後にナデ調整を施す。172には離れ砂が凹面に認められる。

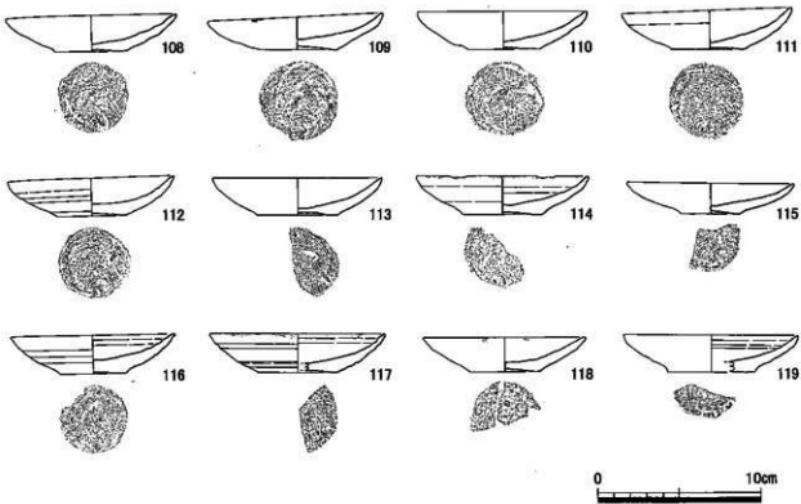


第107図 ニノ丸B地区出土の遺物⑧ (S=1/3)

176～206は丸瓦である。176～179は頭部から尻部までが残存する資料である。凸面には丁寧なナデ調整を施し、凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕が残り、側縁は面取りして丁寧にナデ調整を施す。177の凸面には一部に砂粒が付着する。179は釘穴が開く。180～187は頭部の資料である。いずれも凸面は丁寧なナデ調整を施し、凹面にはコビキA痕、布目が見られ、183・186・187には吊り紐痕も見られる。また、いずれも頭部と側縁に面取りを施すが、側縁はそのあとナデ調整を施す。181は焼成が甘く、胎土に粒の大きい赤色粒子を多く含む。

188～196は尻部の資料で、玉縁のように段を作ることなく先細りになるものである。いずれも凸面は丁寧にナデ調整を施す。凹面はコビキA痕、布目、吊り紐痕を残し、離れ砂の付着が顕著である。また、尻部と側縁に面取りを行うが、側縁はそのあとにナデ調整を施す。

197～205は尻部が玉縁となる資料である。いずれも凸面は丁寧にナデ調整を施し、凹面にはコビキ



第108図 ニノ丸B地区出土の遺物⑨ (S=1/3)

A痕、布目、吊り紐痕が残る。玉縁部と側辺には面取りを施す。

206は頭部と尻部を欠損する丸瓦で、凸面は丁寧にナデ調整を施す。凹面にはコビキB痕と布目が残り、側縁は面取り後にナデ調整を施す。

207・208は丸瓦を利用した面戸瓦である。どちらも斜め方向に切断する。いずれも凹面にコビキA痕、布目、吊り紐痕が残る。

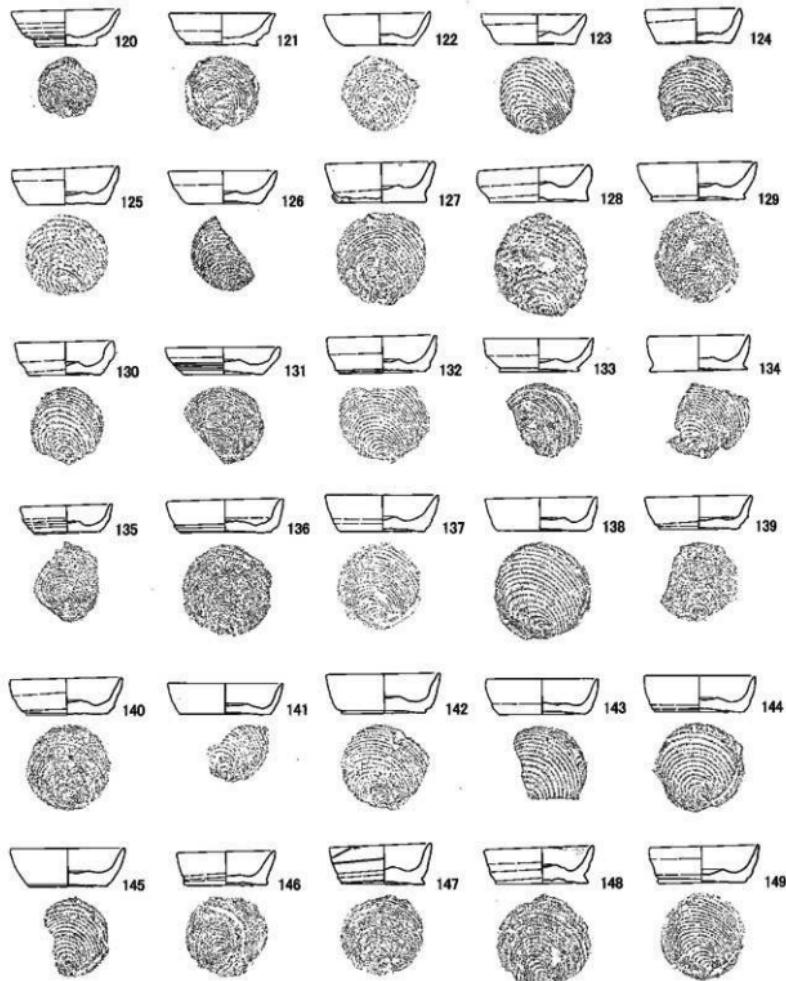
209～220は面戸瓦である。209～212、216～218は凹面にコビキA痕を残す。210・211以外は布目も残る。214は布目、吊り紐痕が残り、離れ砂が付着する。215の凹面は工具による調整が行われ、その後にナデ調整が施される。219・220は玉縁の部分を利用したものである。

221～228は軒平瓦の資料である。いずれも瓦当部の文様は三葉文と違なった唐草文である。

229～245は平瓦である。いずれも凹凸面ナデ調整を施すが、凹面のほうが丁寧である。229・230は凸面に離れ砂が付着する。242・243は厚手の作りで、243はほとんど焼しが掛かっていない。

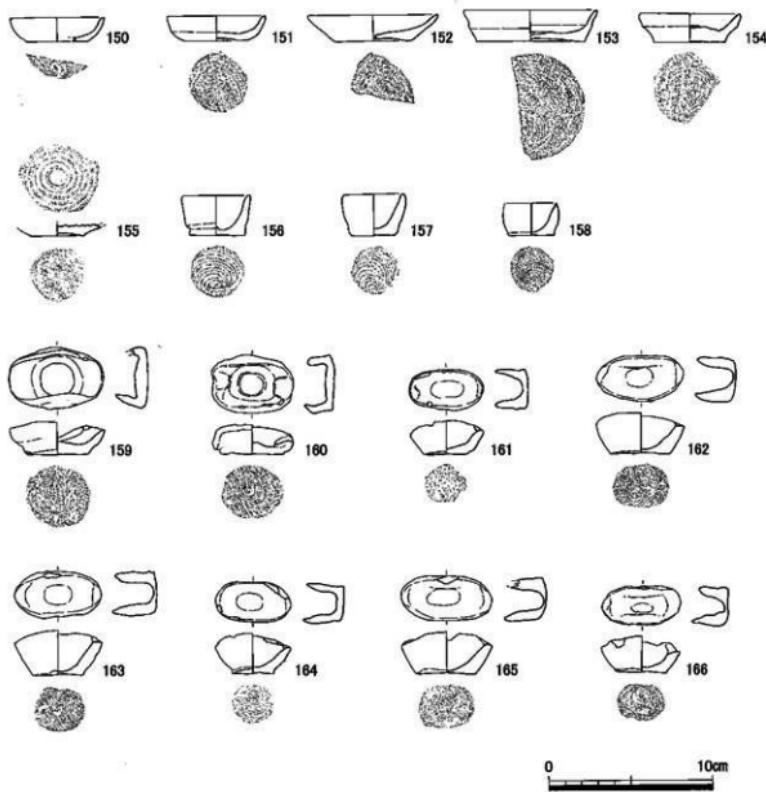
246～252は熨斗瓦である。基本的に刃物による切断のようだが、248の側縁には鉄線切りのような痕跡が残る。

253は鬼瓦の袖部分であろう。表面は丁寧になでて整えられ、裏面はユビナデの痕が明瞭に残る。側面の剥落部分にはクシ目が入っている。

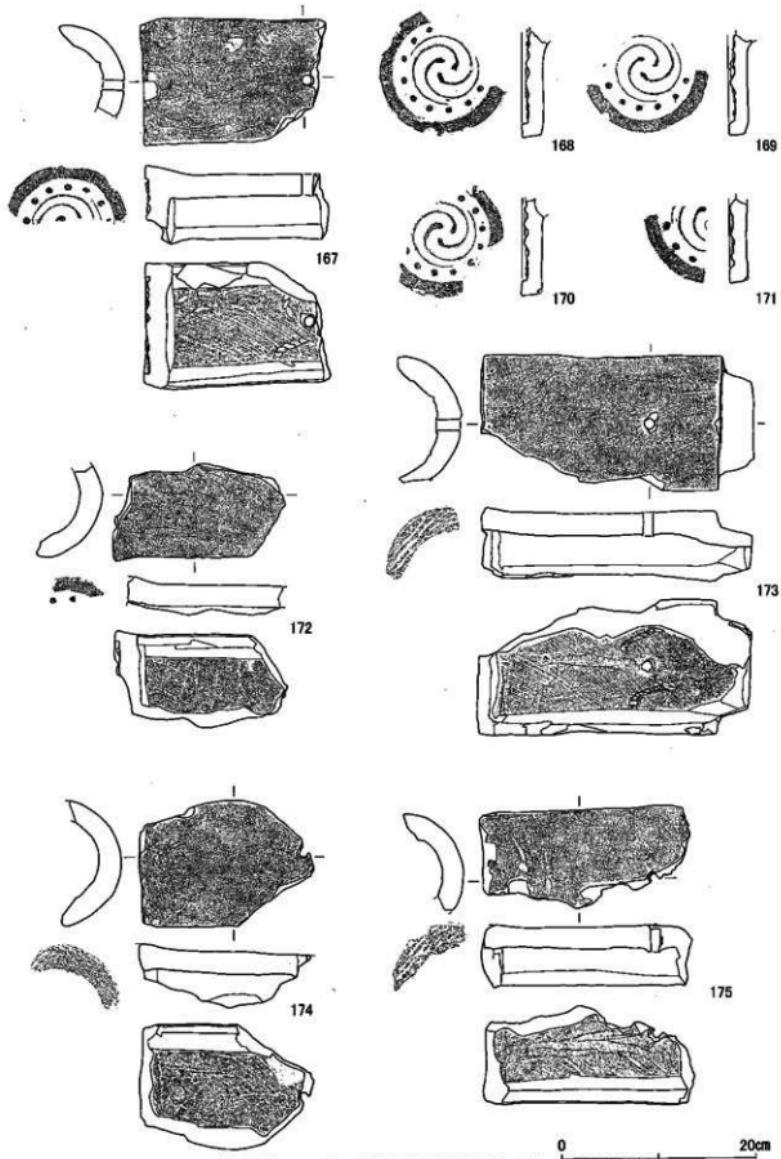


0 10cm

第109図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/3)

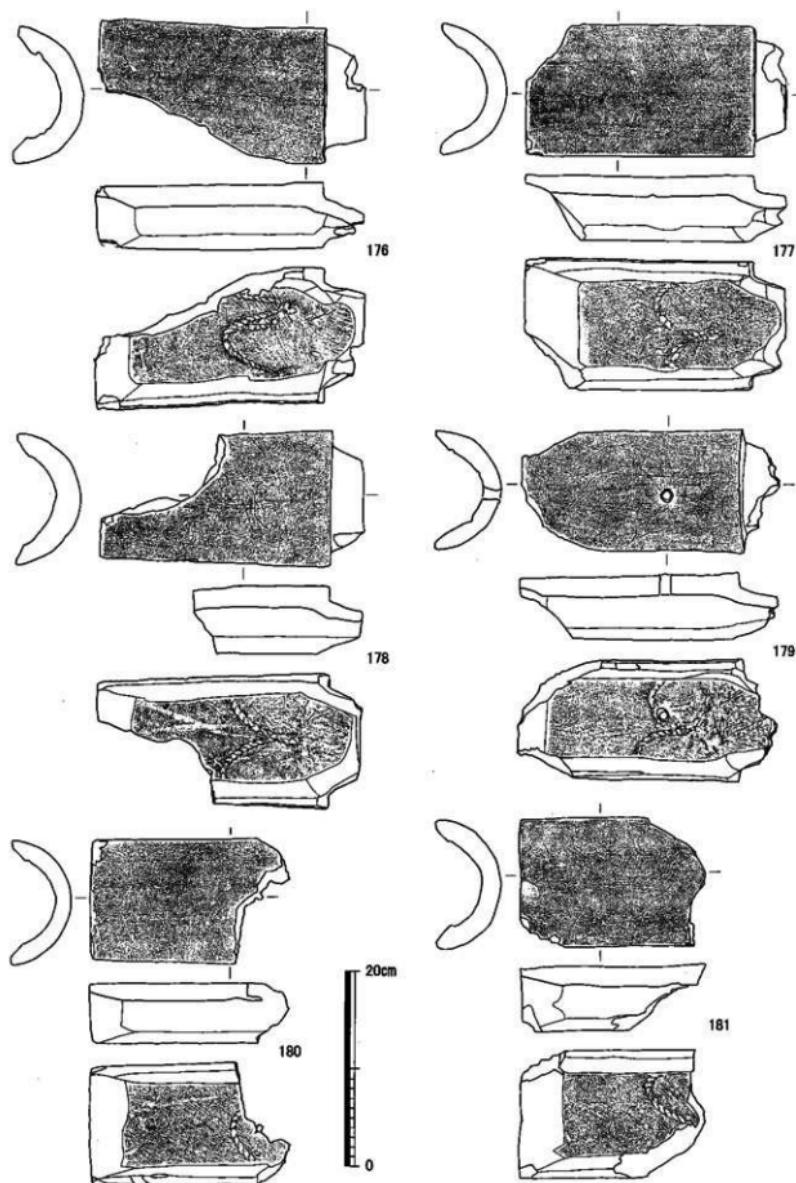


第110図 ニノ丸B地区出土の遺物① (S=1/3)

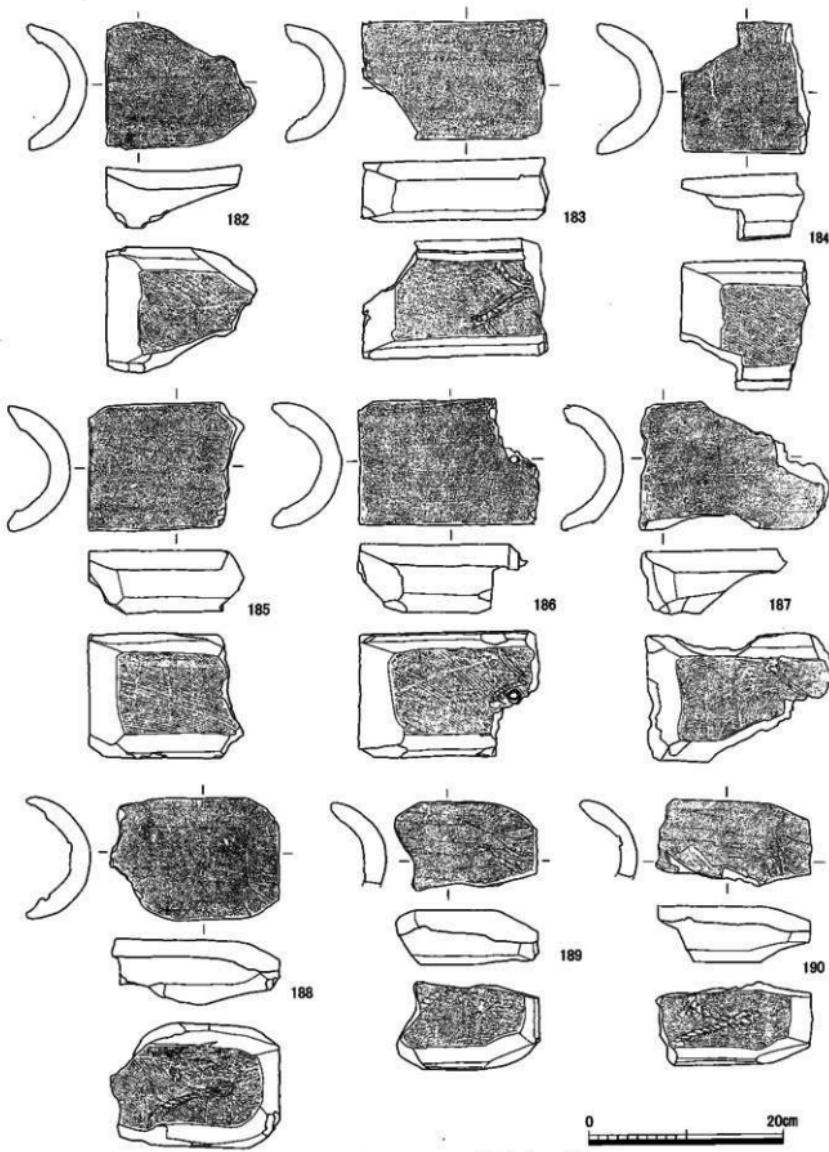


第111図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)

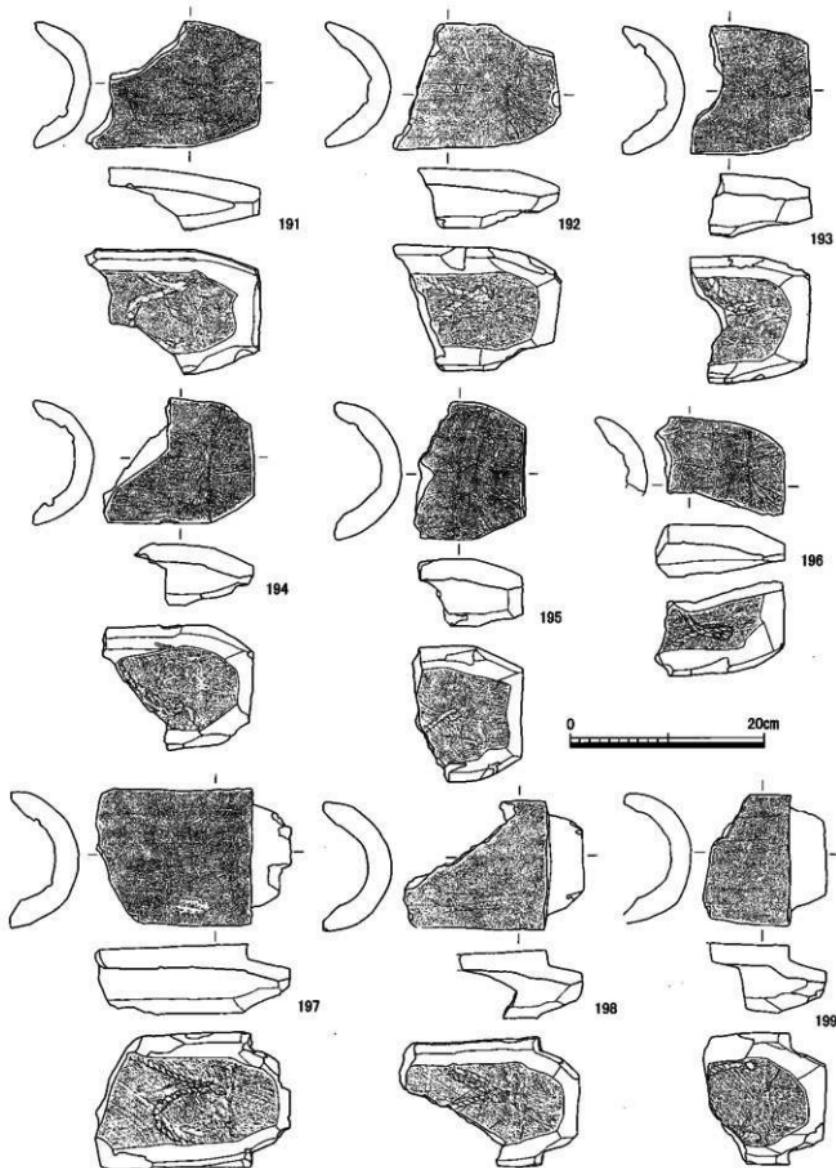
0 20cm



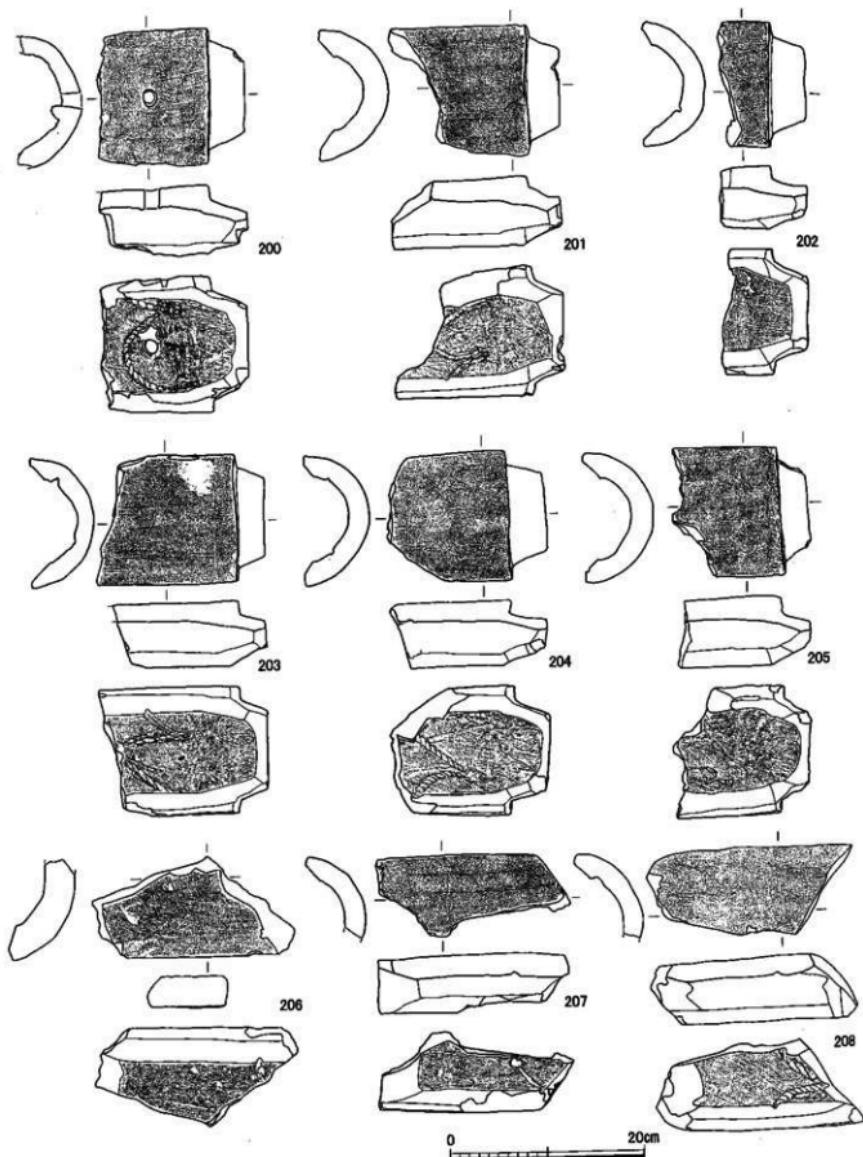
第112図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)



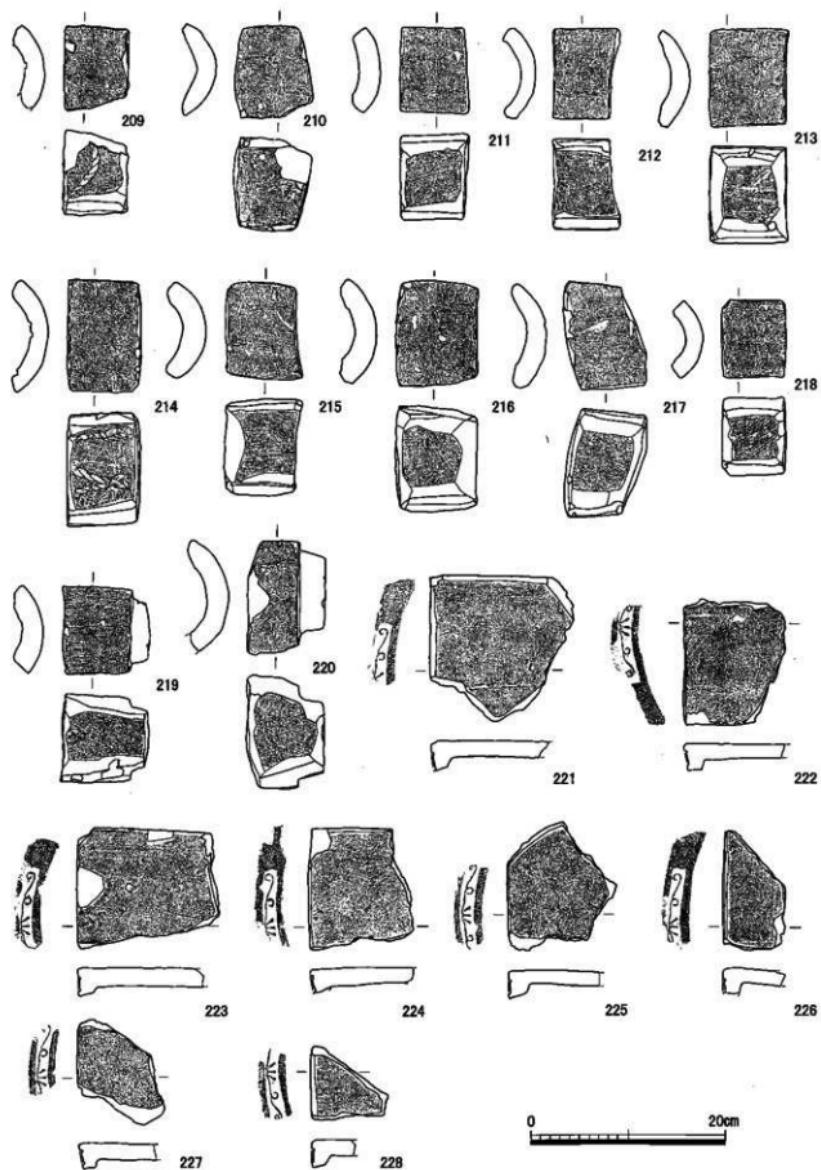
第113図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)



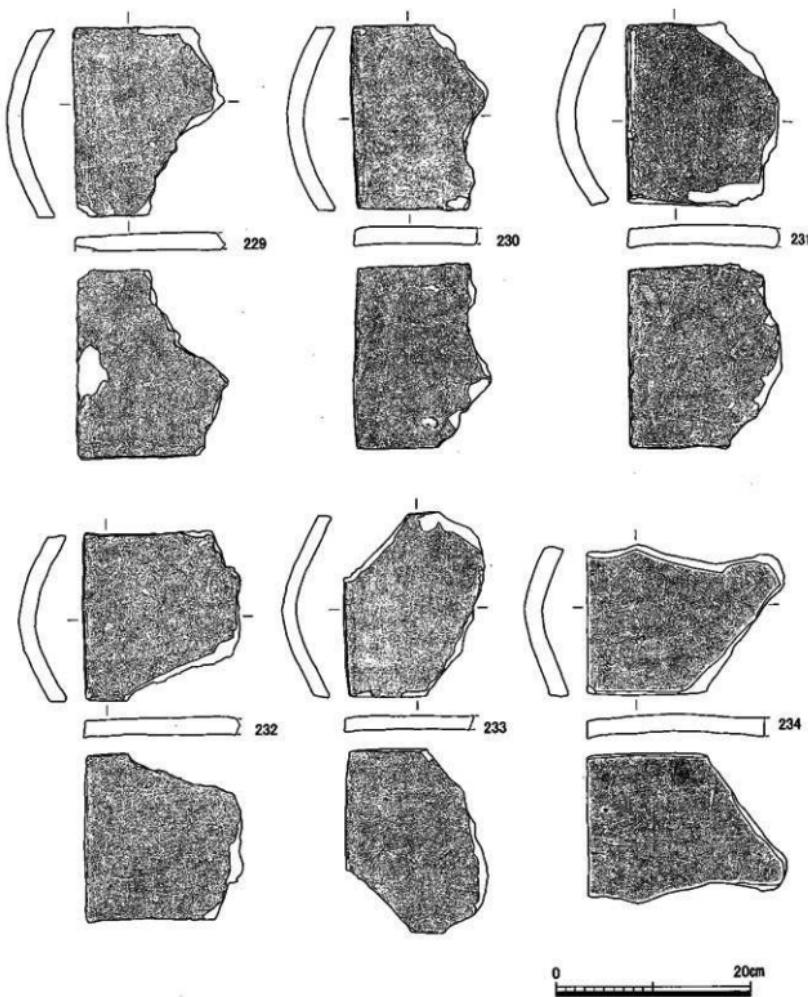
第114図 ニノ丸B地区出土の遺物⑮ (S=1/5)



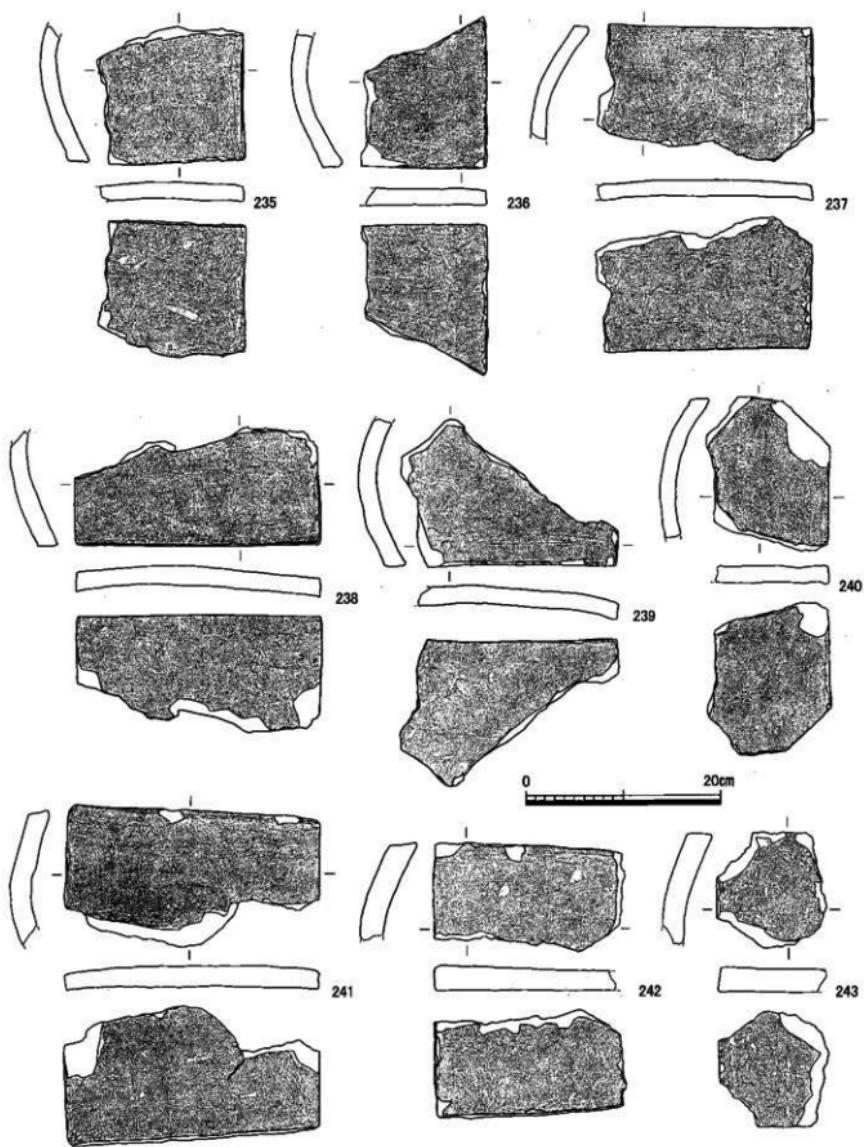
第115図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)



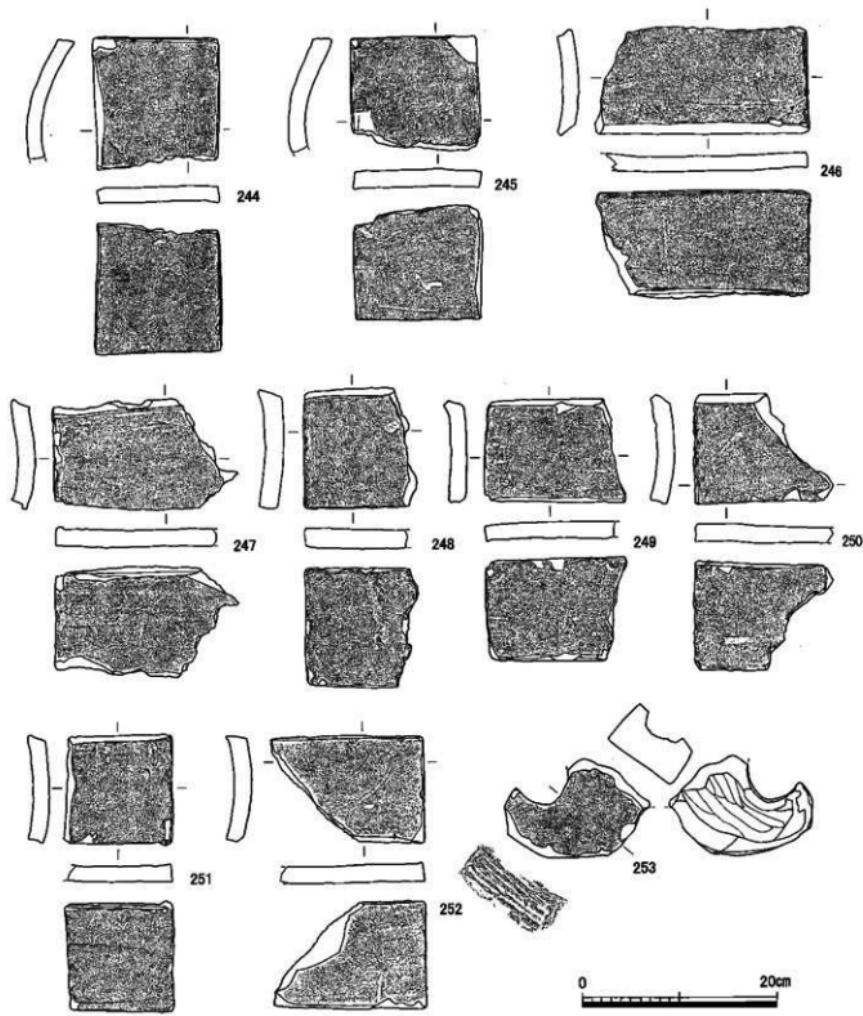
第116図 ニノ丸B地区出土の遺物① (S=1/5)



第117図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)



第118図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)



第119図 ニノ丸B地区出土の遺物⑩ (S=1/5)

第19表 ニノ丸B地区出土遺物観察表①

番号	種別	形態	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	瓶	二ノ丸地区	33区	II層	
2	青磁	瓶	二ノ丸地区	30区	I層	
3	青磁	碗	二ノ丸地区	14-1区	-	復元底径5.5cm
4	青磁	里	二ノ丸地区	33-6区	V層	復元口径9.9cm, 復元底径5.0cm, 高3.4cm
5	青磁	里	二ノ丸地区	33-6区	V層	
6	青磁	里	二ノ丸地区	33-6区	II層	
7	白磁	碗	二ノ丸地区	36区	-	
8	白磁	碗	二ノ丸地区	33区	II層	底径3.8cm
9	白磁	碗	二ノ丸地区	14区	-	復元底径4.6cm
10	白磁	瓶	二ノ丸地区	14区	-	復元底径5.1cm
11	白磁	瓶	二ノ丸地区	14区	-	
12	白磁	瓶	二ノ丸地区	33区	IV層	口径8.5cm, 復元底径3.3cm
13	白磁	瓶	二ノ丸地区	14区	-	底径3.2cm
14	白磁	小环	二ノ丸地区	14区	-	復元底径2.2cm
15	青花	碗	二ノ丸地区	33区	II層	
16	青花	碗	二ノ丸地区	33区	II層	
17	青花	碗	二ノ丸地区	14区	-	
18	青花	碗	二ノ丸地区	30区	階段付近	
19	青花	碗	二ノ丸地区	14区	-	
20	青花	碗	二ノ丸地区	30区	I層	
21	青花	碗	二ノ丸地区	33区	II層	
22	青花	碗	二ノ丸地区	34区	-	
23	青花	瓶	二ノ丸地区	14区	-	復元底径5.4cm
24	青花	瓶	二ノ丸地区	33区	-	
25	青花	碗	二ノ丸地区	33区	II層	復元底径4.5cm
26	青花	里	二ノ丸地区	14区	-	復元口径9.6cm, 復元底径5.0cm, 高2.4cm
27	青花	里	二ノ丸地区	33区	-	復元口径13.4cm
28	青花	里	二ノ丸地区	33区	II層	復元底径7.2cm
29	青花	里	二ノ丸地区	33区	II層	復元底径4.6cm
30	青花	里	二ノ丸地区	14区	-	
31	青花	里	二ノ丸地区	33-6区	VI層	
32	青花	里	二ノ丸地区	33区	II層	復元底径2.7cm
33	青花	里	二ノ丸地区	14区	-	
34	青花	蓋	二ノ丸地区	30区	階段付近	
35	陶器	蓋	二ノ丸地区	33-6区	V層	
36	陶器	-	二ノ丸地区	30区	-	
37	陶器	-	二ノ丸地区	30区	-	
38	陶器	-	二ノ丸地区	30区	階段付近	復元底径25.7cm
39	埴輪陶器	蓋	二ノ丸地区	30区	-	
40	陶器	蓋	二ノ丸地区	14区	-	復元口径10.6cm
41	陶器	蓋	二ノ丸地区	14区	-	
42	陶器	体	二ノ丸地区	30区	-	
43	陶器	擂体	二ノ丸地区	14区	-	復元口径27.4cm
44	陶器	擂体	二ノ丸地区	33区	II層	

第20表 二ノ丸日地区出土遺物觀察表②

番号	種類	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	寸法(cm)		
						外面		内面		口径	底径	高さ
						表面	裏面	底面				
45	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰色	灰色	灰色	灰石、石英、角閃石、2~5mmの砂礫	(31.2)		
46	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰色	灰色	灰色	灰石、石英、角閃石			
47	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰黄色	灰黄色	灰黄色	灰石、石英、角閃石、2~5mmの砂礫	(34.7)		
48	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰色	灰色	灰石、石英、2~5mmの砂礫			
49	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	青灰色	黄褐色	黄褐色	灰石、石英、2~5mmの砂礫			
50	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰色	灰色	灰石、角閃石			
51	瓦質土器	壺体	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、角閃石			
52	瓦質土器	大鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、石英			
53	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子			
54	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	14-区	底土	灰黄色	灰黄色	灰黄色	灰石、角閃石、赤色粒子	(18.8)	(12.6)	5.4
55	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、角閃石、赤色粒子	(18.8)	(14.8)	5.1
56	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、石英、2~5mmの砂礫			
57	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子			
58	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	I層	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(20.4)		
59	瓦質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	灰白色	灰白色	灰白色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(27.6)		
60	土師質土器	大鉢	二ノ丸日	33-40区	II層	褐色、灰黃褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(18.8)	(12.6)	5.4
61	土師質土器	大鉢	二ノ丸日	33-40区	V層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(18.8)	(14.8)	5.1
62	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子			
63	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	II層	褐色、灰褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石			
64	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.2	5.8	3.8
65	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.8	6.0	3.8
66	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	陶瓶付盆	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.8	5.9	3.7
67	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	III層	褐色、灰褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.4	5.5	3.4
68	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	III層	褐色、深褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.0	5.9	3.5
69	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.4	6.0	4.1	
70	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.7	6.2	3.9	
71	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	11.1	5.9	3.9	
72	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.6	5.4	3.9	
73	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	11.0	6.1	3.9	
74	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	11.7	6.6	3.9
75	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.7	6.6	3.9
76	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.5	5.7	3.6
77	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	12.6	6.9	3.3
78	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.0	5.8	3.2
79	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.1	6.4	3.5
80	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	V層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.0	6.7	3.5
81	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(10.9)	5.6	3.0	
82	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(10.0)	5.6	3.8	
83	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	6.7	3.3
84	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.7)	5.7	3.7
85	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.2)	6.0	3.3
86	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	6.2	3.9
87	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(11.1)	5.6	2.9
88	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.4)	5.4	2.1	
89	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	V層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.0)	6.0	3.6
90	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(10.5)	5.2	3.8	
91	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(11.6)	6.0	3.9
92	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.2)	6.3	3.1
93	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.4)	5.7	2.7
94	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.9	5.7	4.5	
95	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	12.1	6.2	4.0	
96	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.4	6.5	3.5
97	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	II層	褐色、灰褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.9	5.7	4.0
98	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	11.8	6.1	3.8
99	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(10.9)	5.9	3.3	
100	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	30区	III層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.1)	5.6	4.0
101	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.0)	5.6	3.6
102	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	10.5	4.8	3.2	
103	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英	(10.0)	4.9	3.5	
104	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14区	褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	(10.2)	4.8	3.1	
105	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	33-40区	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.0)	6.4	3.9
106	土師質土器	火鉢	二ノ丸日	14-区	底土	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.7)	4.6	3.1

カッコ付番号は光吸收

第21表 二ノ丸B地区出土遺物觀察表③

番号	種別	品種	地区	生長区	出土看管	色調		粒土	性状 (cm)			
						内面			口径	底径	高さ	
						外面	内面					
107	土御賀土質	环	二ノ丸庭園	33-25E	II層	褐色、深褐色	褐色	褐色、灰褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	11.7	6.3	
108	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	10.4	4.5	
109	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.7	4.7	
110	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.5	4.5	
111	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.2	4.4	
112	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	35E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.2	4.2	
113	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(10.7)	(5.6)	
114	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	10.5	4.8	
115	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.1)	(5.6)	
116	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.6)	(4.1)	
117	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.6)	(4.8)	
118	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	36E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(9.5)	4.3	
119	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	35E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.5)	(5.3)	
120	土御賀土質	真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.5)	3.5	
121	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.4	
122	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.1	
123	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	4.7	
124	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34-45E	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.8	4.5	
125	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	4.3	
126	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.5)	4.0	
127	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	35E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	6.7	5.4	
128	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34-45E	I層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	6.0	
129	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(7.2)	(3.5)	
130	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	5.9	4.4	
131	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	6.8	4.9	
132	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(6.5)	3.2	
133	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.7)	4.9	
134	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.1)	(5.0)	
135	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.0)	4.1	
136	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	8.9	5.6	
137	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	7.6	5.3	
138	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	35E		褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	6.7	5.5	
139	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	6.5	4.5	
140	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	35E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.0	
141	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.0)	(5.3)	
142	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	7.3	5.2	
143	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.7)	(5.3)	
144	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34-45E	V層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.7)	5.3	
145	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34-45E	V層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	4.2	
146	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	V層	褐色	褐色	褐色	明黄褐色、褐色	5.9	4.8	
147	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34-45E	V層	褐色	褐色	褐色	明黄褐色、褐色	6.2	5.5	
148	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	34-45E	V層	褐色	褐色	褐色	明黄褐色、褐色	6.5	5.5	
149	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	II層	に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.2	
150	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	(5.7)	(3.5)	
151	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33E	II層	に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石	5.9	3.5	
152	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	II層	褐色	褐色	褐色	角閃石、赤色粒子	(7.0)	(4.9)	
153	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	II層	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰石、灰岩、角閃石、金色黒斑	6.1	5.7	
154	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33E	II層	に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、角閃石、赤色粒子、金色黒斑	(5.1)	4.4	
155	土御賀土質	小真	二ノ丸庭園	33-45E	II層	浅褐色	浅褐色	浅褐色	白石英質	3.3	—	
156	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	33-45E	V層	に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英	4.0	2.3	
157	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	33-45E	V層	に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	3.7	2.8	
158	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	2.1	2.8	
159	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	34E		に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英	5.0	3.6	
160	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	33-45E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	5.0	3.8	
161	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	33-45E	II層	浅褐色	浅褐色	浅褐色	灰石、石英、赤色粒子	4.5	2.5	
162	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	5.3	3.6	
163	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.3	3.1	
164	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	34E		褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	4.6	2.6	
165	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	34E		に bei 褐色	に bei 褐色	に bei 褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.5	3.4	
166	土御賀土質	ニコタマ	二ノ丸庭園	33-45E	II層	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	4.8	2.0	

カッコ付きは碳元素

第22表 二ノ丸B地区出土遺物觀察表④

測量番号	種別	出土場所	調査区	地層位・位置	文書	圓錐		色鉛		法量	備考
						表面	凸面	表面	凸面		
167	新丸瓦	二ノ丸地区	14区	II層 (左巻き)	株式三文式 赤絞模、コビキ瓦	ナナ (瓦底部) ナナ	ナナ	灰白色	灰白色	(丸瓦底) 高11.7cm、厚8.7cm、幅8.3cm 瓦底幅8.5cm 瓦頂幅8.4cm、周縁幅1.4cm、周縫8.04cm、	前穴有り
168	新丸瓦	二ノ丸地区	14区	Ⅲ層 (左巻き)	株式三文式 (左巻き)	ナナ (瓦底部) ナナ				(丸瓦底) 瓦底幅11.3cm、内側幅10.3cm、 瓦底幅4.4cm、周縁幅8.0cm、周縫幅7.0cm	
169	新丸瓦	二ノ丸地区	14区	Ⅲ層 (左巻き)	株式三文式 (左巻き)	ナナ (瓦底部) ナナ				(丸瓦底) 瓦底幅12.0cm、周縁幅8.0cm、 周縫幅9.3cm	
170	新丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近	株式三文式 (左巻き)	ナナ (瓦底部) ナナ				(丸瓦底) 瓦底幅11.5cm、周縁幅8.5cm、 周縫幅8.3cm	
171	新丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近 (左巻き)	株式三文式 (左巻き)	ナナ (瓦底部) ナナ				(丸瓦底) 瓦底幅11.5cm、周縁幅8.5cm、 周縫幅8.3cm	
172	新丸瓦	二ノ丸地区	14-15区	出土	株式	ナナ ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑褐色	黑色	(丸瓦底) 瓦底幅11.3cm、 (丸瓦底) 瓦底幅12.0cm、周縫幅8.0cm、 周縫幅8.3cm	
173	新丸瓦	二ノ丸地区	14-15区			ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	(丸瓦底) 高11.8cm、厚8.6cm、幅8.3cm、 瓦底幅8.2cm	前穴有り
174	新丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	(丸瓦底) 高12.4cm	前穴有り
175	新丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	(丸瓦底) 高11.2cm	前穴有り
176	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	高12.3cm、幅8.19cm、厚8.75cm、幅8.24cm、 瓦底幅8.42cm	
177	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	高12.3cm、幅8.14cm、厚8.63cm、幅8.19cm、 瓦底幅8.35cm	
178	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	暗灰色	黑色	高12.3cm、幅8.15cm、厚8.6cm、幅8.24cm、 瓦底幅8.35cm	
179	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	高12.3cm、幅8.18cm、厚8.68cm、幅8.28cm、 瓦底幅8.38cm	前穴有り
180	丸瓦	二ノ丸地区	30区			ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	暗灰色	幅12.0cm、高8.62cm、厚8.18cm	
181	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅11.3cm、高8.47cm、厚8.21cm	
182	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅12.0cm、高8.61cm、厚8.19cm	
183	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅12.0cm、高8.51cm、厚8.22cm	
184	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	暗灰色	黑色	幅11.3cm、高8.67cm、厚8.14cm	
185	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅12.0cm、高8.55cm、厚8.12cm	
186	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	暗灰色	黑色	幅12.0cm、高8.73cm、厚8.23cm	前穴有り
187	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	高8.63cm、厚8.21cm	
188	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	幅12.0cm、高8.64cm、厚8.21cm	
189	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	厚8.23cm	
190	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	厚8.17cm	田園地帯付近
191	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅11.3cm、高8.59cm、厚8.21cm	西面地帯付近
192	丸瓦	二ノ丸地区	33-34区	I層		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅12.0cm、高8.57cm、厚8.23cm	
193	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅13.0cm、高8.64cm、厚8.23cm	
194	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅12.0cm、高8.63cm、厚8.18cm	
195	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	暗灰色	黑色	幅14.0cm、高8.63cm、厚8.23cm	
196	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	厚8.23cm	
197	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	灰白色	黑色	幅13.0cm、高8.71cm、厚8.24cm、 瓦底幅8.11cm	
198	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	幅13.0cm、高8.70cm、厚8.24cm、 瓦底幅8.12cm	
199	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	幅13.0cm、高8.69cm、厚8.23cm、 瓦底幅8.12cm	
200	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	黑色	黑色	幅14.0cm、厚8.20cm、五瓣脚8.17cm	前穴有り
201	丸瓦	二ノ丸地区	30区	複数付近		ナナ、ケズリ、赤目、 赤絞模、コビキ瓦	ナナ	暗灰色	暗灰色	幅13.0cm、高8.73cm、厚8.21cm、 五瓣脚8.14cm	

第23表 二ノ丸B地区出土遺物觀察表⑤

種類 番号	種別	島土地區	調査区・位置	出土層位	文様	調査				地層	備考
						西面	凸面	凹面	瓦面		
202	丸瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	暗灰色	暗灰色		厚13.0cm、高8.3cm、 底面厚3.0cm	
203	丸瓦	二ノ丸地区	30区	南敷付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	暗灰色	灰色		厚13.0cm、高8.3cm、 底面厚3.0cm	
204	丸瓦	二ノ丸地区	30区	南窓付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	灰色	灰色		厚13.0cm、高8.6cm、 底面厚3.0cm	
205	丸瓦	二ノ丸地区	30区	背後付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	暗灰色	灰色		厚13.0cm、高8.7cm、 底面厚3.0cm	
206	丸瓦	二ノ丸地区	30区	I带	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	浅黄色	黄灰色		厚21.0cm	
207	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	暗灰色	灰色		厚3.2cm	
208	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	黑色	黑色		厚3.1cm	
209	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	黑色	黑色		厚5.6cm、厚3.2cm	
210	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、コピキア	ナデ	黑色	黑色		厚27.0cm、幅9.5cm、高15.0cm、厚3.0cm	
211	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、コピキア	ナデ	黑色	黑色		厚27.0cm、幅9.7cm、高15.0cm、厚3.0cm	
212	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫、コピキア	ナデ	黑色	黑色		厚25.1cm、幅9.3cm、高15.0cm、厚3.0cm	
213	圓瓦	二ノ丸地区	14区	II带	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫	ナデ	黑色	黑色		厚26.0cm、幅9.0cm、高15.0cm、厚3.0cm	
214	圓瓦	二ノ丸地区	30区		ナデ、ケズリ、有目、 角張彫	ナデ	黑色	黑色		厚27.0cm、幅11.4cm、高15.0cm、厚3.0cm	凸面織部地顕著
215	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ	ナデ、ケ ズリ	灰色	灰色		厚27.0cm、幅9.8cm、高15.0cm、厚3.0cm	
216	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 コピキア	ナデ	灰色	灰色		厚28.5cm、幅10.0cm、高15.0cm、厚3.0cm	
217	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ、有目、 コピキア	ナデ	浅黄色	灰色		厚27.0cm、幅11.0cm、高15.0cm、厚3.0cm	
218	圓瓦	二ノ丸地区	14区		ナデ、ケズリ、有目、 コピキア	ナデ	灰色	暗灰色		厚26.0cm、幅9.0cm、高15.0cm、厚3.0cm	
219	圓瓦	二ノ丸地区	30区	南敷付近	ナデ、ケズリ、有目、 角張彫	ナデ	暗灰色	灰色		厚29.0cm、幅9.0cm、高15.0cm、厚3.0cm	
220	圓瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	ナデ、ケズリ	ナデ	灰色	灰色		厚27.0cm、厚3.0cm	
221	新平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	三重文、 内側有目文、 外側有目文(一組)	ナデ	灰色	灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
222	新平瓦	二ノ丸地区	14区		三重文、 内側有目文、 外側有目文(二組)	ナデ	灰色	浅灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
223	新平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	三重文、 内側有目文、 外側有目文(二組)	ナデ	灰色	灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
224	新平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	三重文、 内側有目文、 外側有目文(一組)	ナデ	灰色	灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
225	新平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	三重文、 内側有目文、 外側有目文(一組)	ナデ	灰色	灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
226	新平瓦	二ノ丸地区	14-1区		三重文、 内側有目文、 外側有目文	ナデ	灰色	暗灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
227	新平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	三重文、 内側有目文、 外側有目文	ナデ	灰色	灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
228	新平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近	三重文、 内側有目文、 外側有目文	ナデ	灰色	灰色		(平幅) 厚9.1cm、(瓦当部) 高8.3cm、 内側高1.6cm	
229	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	灰色	墨色		幅3.0cm、厚5.1cm、谷深5.0cm	凸面織部地顕著
230	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	黑色	黑色		幅3.0cm、厚5.0cm、谷深5.0cm	
231	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	黑色	黑色		幅3.0cm、厚5.0cm、谷深5.0cm	
232	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	黑色	暗灰色		幅3.0cm、厚5.0cm、谷深5.0cm	
233	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	灰色	暗灰色		幅3.0cm、厚5.0cm、谷深5.0cm	
234	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	灰色	灰色		厚9.1cm、谷深4.0cm	
235	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	灰色	灰色		厚9.1cm、谷深5.0cm	
236	平瓦	二ノ丸地区	30区	海蔵付近		ナデ	灰色	灰色		厚9.1cm、谷深5.0cm	凸面波線3本

第24表 二ノ丸B地区出土遺物観察表⑥

規範 番号	種別	出土地区	発生区 ・位置	出土場所 ・位置	文様	調査		色調			法量	参考
						凹面		凸面		瓦面		
						表面	裏面	表面	裏面	表面		
237	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	厚8.1cm、高さ24.2cm	
238	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ25.0cm、厚さ2.6cm、谷深8.0cm	
239	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	厚8.1cm、谷深8.2cm	
240	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	オーブ 黒色	灰色	灰色	厚8.1cm、谷深8.4cm	
241	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	黑色	黑色	黑色	黑色	長さ26.0cm、厚さ2.2cm、谷深8.7cm	
242	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	厚8.2cm	
243	平瓦	二ノ丸地区	33-4区	Ⅱ層	ナテ	ナテ	にぶい 黄色	にぶい 黒色	にぶい 黒色	にぶい 黒色	厚8.2cm	
244	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ22.7cm、高さ1.5cm、谷深8.3cm	
245	平瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	暗灰色	黑色	暗灰色	黑色	長さ13.3cm、厚さ1.8cm、谷深8.2cm	
246	熨斗瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	ナテ タヌリ	黑色	暗灰色	黑色	幅9.7cm、高さ22.0cm、厚さ1.6cm	
247	熨斗瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	暗灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	幅10.0cm、高さ22.5cm、厚さ1.8cm	
248	熨斗瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	黑色	灰色	黑色	幅11.4cm、高さ22.6cm、厚さ1.9cm	
249	熨斗瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ、ケズリ	ナテ	暗灰色	灰色	暗灰色	灰色	幅9.4cm、高さ22.3cm、厚さ1.7cm	河原跡の参考
250	熨斗瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅10.0cm、高さ22.6cm、厚さ1.9cm	田面沈縁1本
251	板斗瓦	二ノ丸地区	30区	階段付近	ナテ	ナテ	灰色	暗灰色	暗灰色	暗灰色	幅10.5cm、高さ22.3cm、厚さ1.7cm	
252	熨斗瓦	二ノ丸地区	14-1区	麻土	ナテ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅10.2cm、高さ22.8cm、厚さ1.7cm	
253	鬼瓦	二ノ丸地区	30区	I層	ナテ、ケズリ	ナテ	灰色	灰色	灰色	灰色	厚8.4cm	

### (3) C地区の調査

#### 概要

曲輪6は東西3m、南北10mの平場を構成しており、C地区はこのほぼ中央部分にあたる。

C地区では平成8年度から平成10年度にかけて発掘調査を行っており、平成8年度には12区(22.0m<sup>2</sup>)の調査を行う。また、平成9年度には19区(118.3m<sup>2</sup>)、21区(29.0m<sup>2</sup>)、23区(5.4m<sup>2</sup>)、24区(10.2m<sup>2</sup>)の調査を、平成10年度には31区(24.0m<sup>2</sup>)の調査を行う。

#### 土層

C地区の基本層序は以下のようになる。

I層 耕作土層

II層 碳土層

III層 黒色土層

IV層 褐色土層

V層 暗茶褐色土層(A・B地区V層)

VI層 暗茶褐色土層(A・B地区VI層)

VII層 粘質灰茶褐色土層

VIII層 慶長期以前の生活面

地山 一部焦土化(弥生時代の土器含む)

#### 遺構

平成8年度の調査において、12区で集石4を検出する。

また、平成9年度には前年度にD地区で検出した階段2の拡がりを確認するため、19・21区の調査を行い、曲輪6の中央付近で階段を検出している。19・21区で検出した階段は、南側側壁が直線上に並んでおり、この延長上に後述するD地区的階段2南側側壁が位置する。C地区で検出した二つの階段は、踏石列の主軸方向と間隔が揃い、使用された石材もほぼ同じ大きさの自然石であることから同時期の階段と思われる。

このほか、19区より石垣3、溝跡8、21区より階段2に伴う石垣4を検出する。

また、平成9年度には曲輪6の北側に23区を、曲輪6のほぼ中央に24区を設け発掘調査を行っている。両調査区は曲輪5と曲輪6を隔てる野面積石垣の構築時期を確認するために設定したが、調査ではこれを明らかに出来ていない。遺構については、両調査区で集石や低い段差が確認できるが、平面図がなく詳細はわからない。

平成10年度には、本丸地区へ向けて延びる城道を明らかにするために23区の南側に31区を設定する。調査区の平面図がないため、検出遺構など詳細については不明である。

#### 階段2(19区)

19区南側から検出した階段の踏石列で、踏石列の北端は未検出である。検出幅2.7m、踏石列間隔0.6m、高低差0.14~0.22mを測り、踏石の石材には幅40~65cmの自然石を用いる。踏石の形状や大きさ

さは統一されていないが、踏石列上面の高さが揃うように据えられる。踏石列南端は位置が揃っており、端が東西方向に直線上に並ぶ。南端の踏石より南側では溝跡 8 を検出するが、この北側側壁に合わせて踏石が据えられたものと推測される。

西端の踏石列については、東側 3 列との位置関係を明確に出来ないため網掛けを行う。

### 石垣 3 (19区)

19区階段 2 より南へ 1.5m の位置から検出した石垣で、検出長は 2.18m を測る。1 ~ 2 石の石積みが残存しており、東西方向に延びる。石材は幅 40 ~ 60cm、高さ 30cm ほどの不整形な自然石で、北側の石面が揃うように積まれる。

溝跡 8 とは平行して東西方向に延びており、石面も揃うことから溝跡 8 の南側側壁の可能性も考えられるが、溝跡 8 の北側側壁とは石材の大きさや石の積み方に差異があり、D 地区で検出した階段 2 に伴う溝跡 9 とは幅が大きく異なるため本書では別遺構として報告する。

### 溝跡 8 (19区)

階段 2 の踏石列南側より、階段の主軸に平行して東西に延びる石積みを検出する。石積みの検出長は 2.18m で、高さ 0.52m を測る。

石垣 3 を溝跡の南壁とした場合、溝跡は上幅 1.8m、下幅 0.8m の断面 U 字形で、階段 2 に平行して東西に延びており、敷石の有無については調査において確認できていない。北側の側壁は、前述の通り階段 2 の踏石南端に位置するため控えについては踏石によりはっきりしないが、石材自体が小さく長軸を横方向に据えられていることから控えは短いものと推測される。

石材は不揃で、石積みも目地が通つておらず粗雑である。検出した高さは 0.52m で、石積みに倒壊や補修の跡が見られないことから、溝の深さも 0.5m 前後の可能性が高い。

### 階段 2 (21区)

曲輪 6 の西側を南北に走る野面積石垣の際から、石垣の下に入り込む形で東西に延びる階段を検出する。各踏石列の北端は列間で位置が揃っておらず、検出した位置よりさらに北へ踏石が延びていたと思われる。踏石列は、検出幅 3.0m、踏石列間隔 0.6m、高低差約 0.17m を測り、階段の踏石には 40 ~ 60cm の不整形な自然石が用いられる。

21区で検出した階段 2 は、19区で検出した階段 2 と同様に各踏石列南端の位置が揃えられる。また、19区の階段 2 では、これに伴う溝跡 8 の側壁が踏石より南側で長軸を東西方向に向けて石が積まれるが、21区検出の階段 2 でも、踏石列の南側で幅 50cm ほどの偏平な礫を南側の石面が東西方向に揃うよう据えられており、21区検出の階段 2 南側にも溝が存在していた可能性がある。

19区および 21 区で検出した階段は、踏石列間の間隔や高低差、石材に未加工の礫を使用されるなど共通する部分が多く同一の遺構であるが、両階段は曲輪 6 において東西方向に直線状に延びており、階段 2 は二ノ丸地区から本丸地区へ向けてほぼ直線上に延びていたものと思われる。

が據ってお  
側壁に合

の石積み  
、北側の  
性も考え  
た階段2

検出長

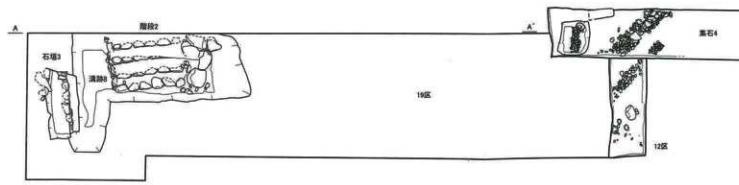
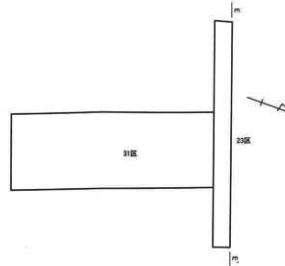
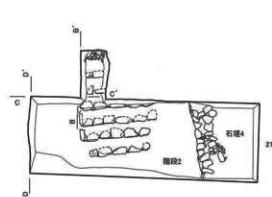
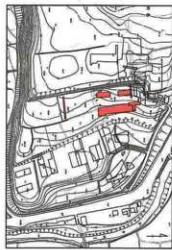
行して  
述の通  
小さく

倒壊

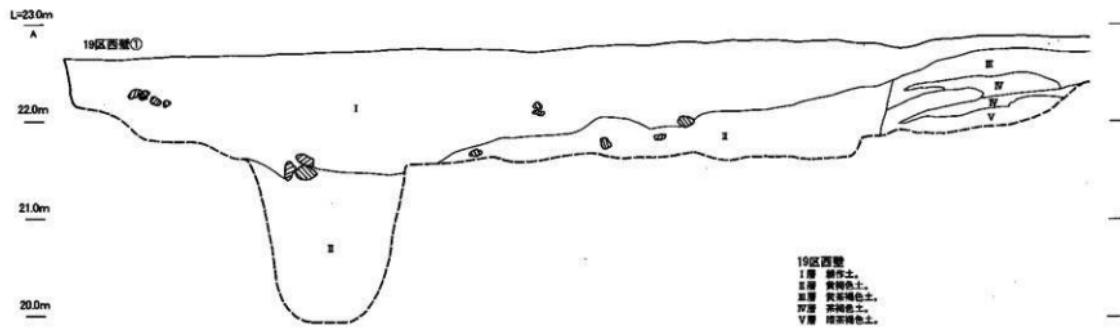
検出  
いた  
は40

た、  
るよ

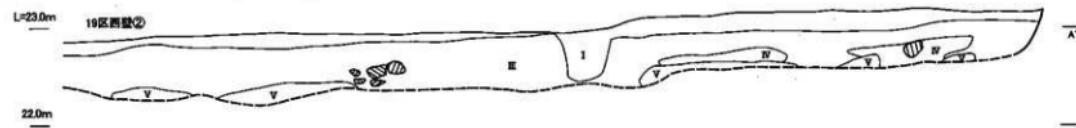
ど



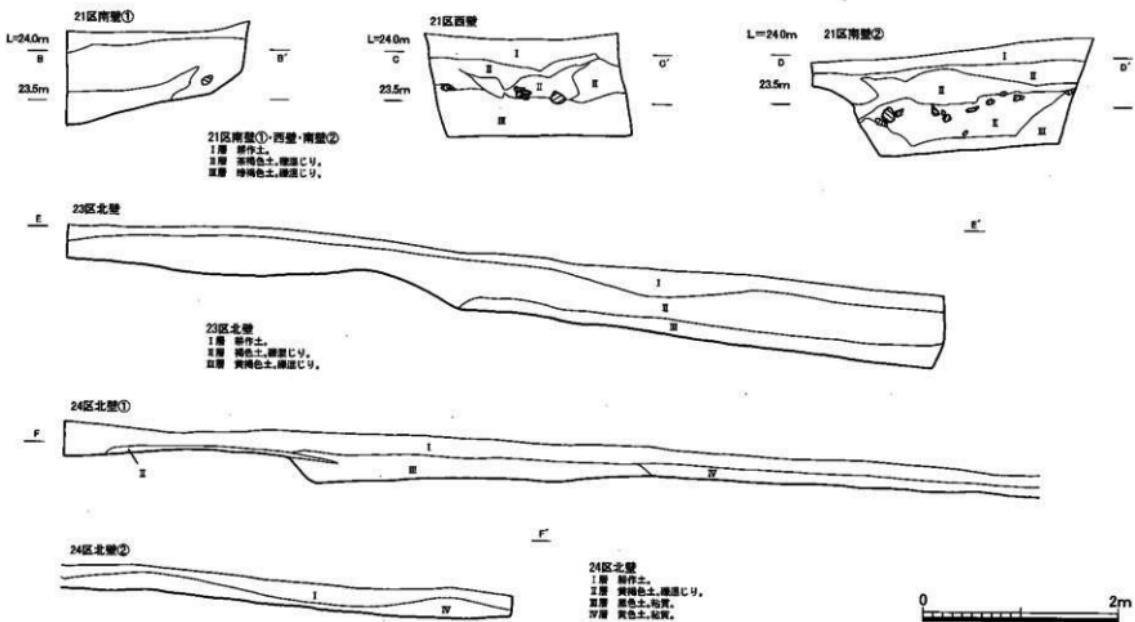
第120図 ニノ丸C地区遺構配置図 (S=1/150)



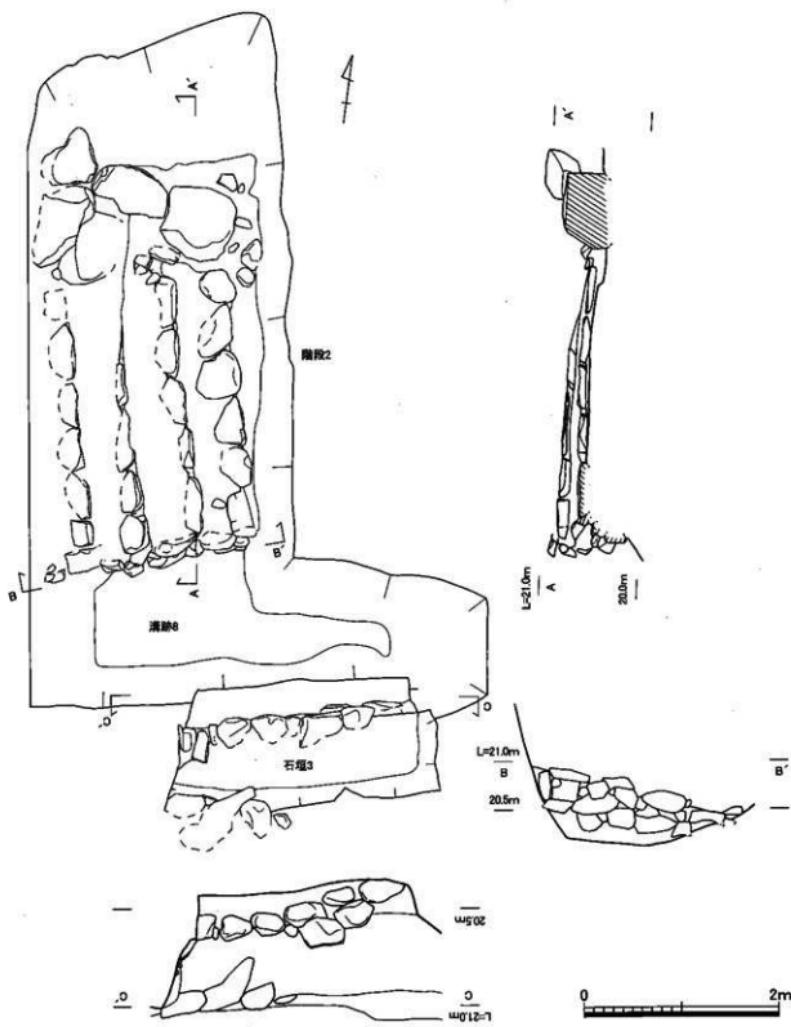
- 173 -



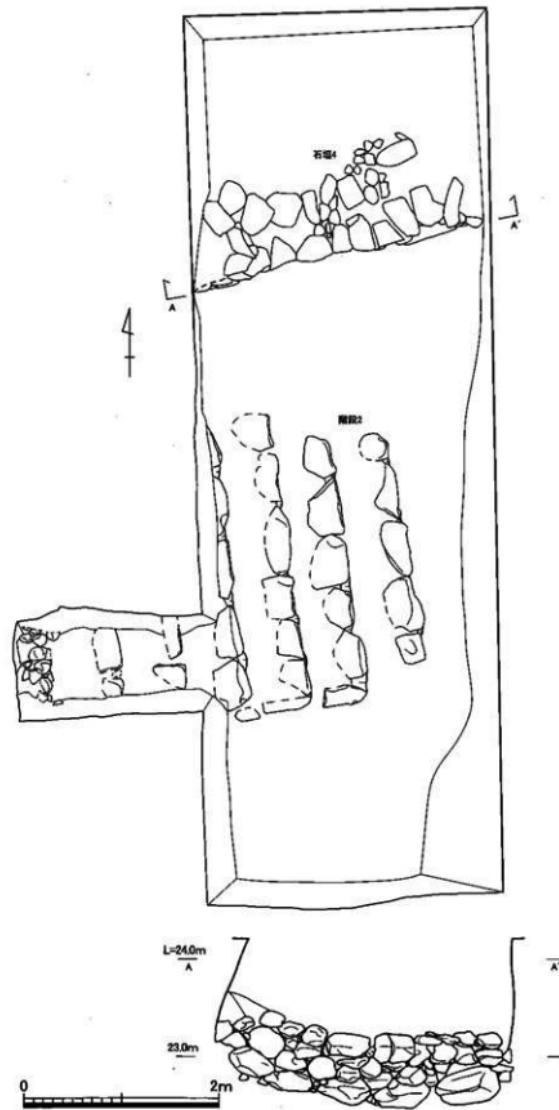
第121図 二ノ丸C地区土層断面図① (S=1/50)



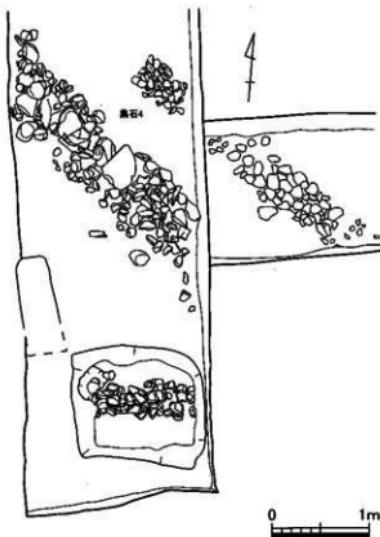
第122図 ニノ九C地区土層断面図② (S=1/50)



第123図 階段2(19区)・石垣3・溝跡8実測図 (S=1/50)



第124図 階段2(21区)・石壠4実測図 (S=1/50)



第125図 集石4実測図 ( $S=1/50$ )

#### 石垣4 (21区)

階段2の北側より検出した石垣で、検出長2.95m、高さ0.76mを測る。石材は幅20~70cmの不整形な自然石で規格性は見られないが、模石には幅50~70cmの大きめの石が高さがほぼ揃うように据えられる。石積みの控えは短い。調査区中央から東壁に向けて石垣上面の高さが揃っており、石積みの控えが短いことから、倒壊せずに現存している可能性がある。

階段2の北側踏石は残存しておらず両遺構の関係は不明な点が多いが、踏石設置面と石垣4の基底部の高さが揃い、主軸もほぼ揃うことから21区で検出した階段2に伴う石垣と推測される。

#### 集石4 (12区)

12区より検出された、小砾の集石である。12区西側にある石垣の下へ続いており、さらに北西方向に延びるものと考えられる。12区北西の14-3区南東側でも小砾の集石が見られるが、これが集石4から延びるものか不明である。また、第12区東側拡張部より集石は南東方向へもさらに続いていると思われる。

遺構の性格については不明。

## 遺物

1~18は青磁である。1~4は同安窯系の資料である。1は口縁部で、外面に模描文を施す。2・3は外面に模描文、内面には劃花文と模描文を施す。4は平底をなす皿の資料で、内面見込みに劃花文を施し、体部との境に段を作る。

5~17は龍泉窯系の青磁である。5~7は外面に鏽蓮弁文を施す。8・9は同一個体の可能性が高い。外面に粗雑な線描きの蓮弁文を施す。10・11は口縁部の資料で外面に雷文帯を設けている。12は端反の口縁部の資料である。

13~16は底部の資料である。13は高台外端部を面取りし、高台内と疊付部分は釉剥ぎを施す。高台全体的に磨耗が著しく、色調がやや白んでいる。また、二次的に被熱したものと思われる、高台付近は黒く変色する。14は外面に成形時の凹凸を残し、高台内と疊付部分は釉剥ぎを施す。また疊付には白色粘土の目跡が残る。内面見込み部分は体部との境に段を作つてやや膨らむ。15は高台内と疊付を釉剥ぎする。疊付外端部は重ね焼きの切り離しのためか欠損部分がある。16は全体に分厚い釉の掛かる資料で、高台内のみ釉剥ぎを施す。粗く貫入が入る。

17・18は香炉の資料である。釉色や復元径が近いことから同一個体の可能性もある。18は高台と脚を持つ。高台内と疊付の部分は釉剥ぎし、体部には算木文を配す。内面は底から体部下位にかけて無釉である。

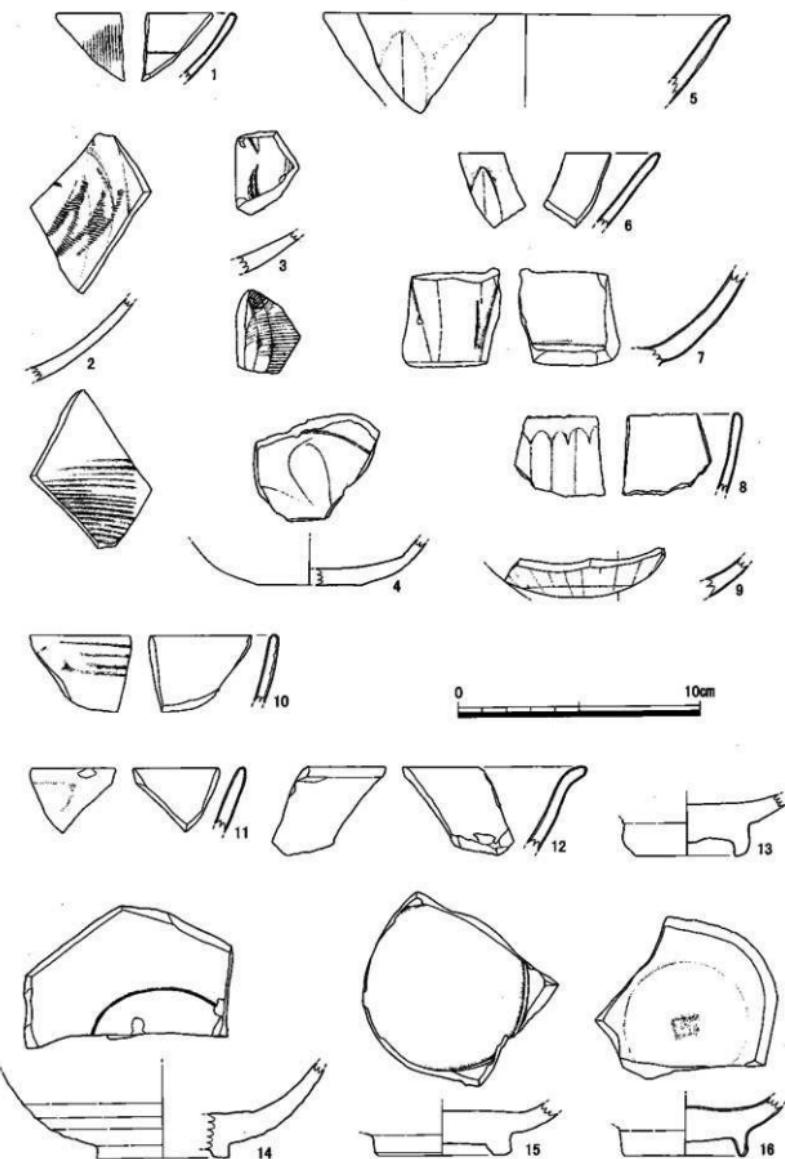
19は青白磁の資料である。高台疊付部分に釉剥ぎを施し、内面体部には蓮弁文を入れる。20はやや磨耗が見られるが高麗青磁の碗口縁部であろう。

21~28は白磁の資料である。21は口縁部外面を肥厚させ玉縁状にする。22は口縁端部をわずかに外側へ折り曲げる。23~26は端反の皿口縁部である。23は高台疊付部分を釉剥ぎする。27は体部から立ち上がつた口縁部をやや外側へ折り曲げる。口縁端部及び口縁部内面には釉剥ぎを施す。28は外面に工具による器面調整の痕跡を残す粗い作りの小皿である。高台付近は釉剥ぎを施すが、わずかに立ち上がる高台疊付部分には釉が残る。

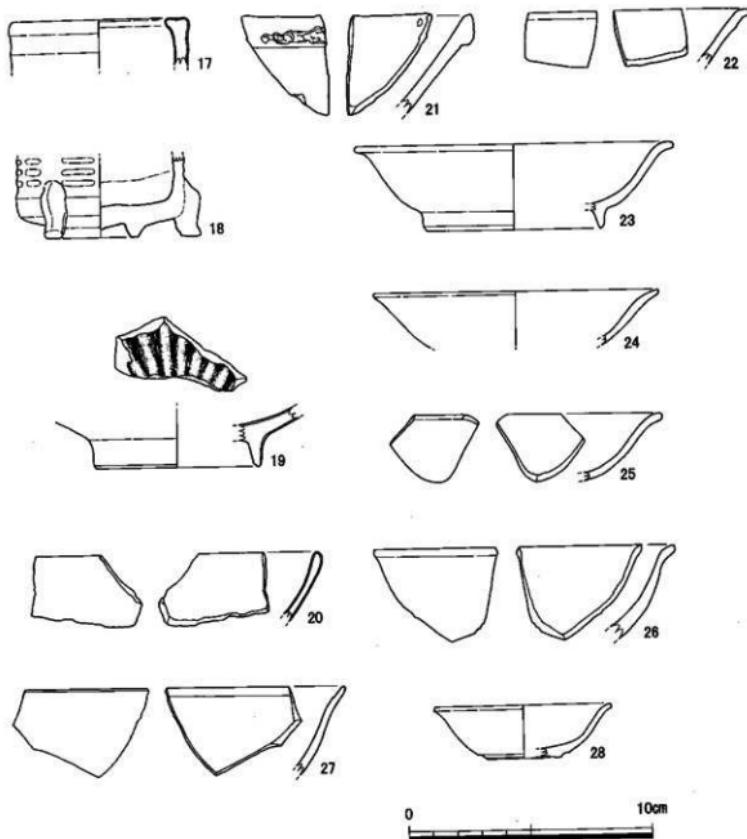
29~64は青花の資料である。29~52は碗である。29はやや外傾して直線的に立ち上がる口縁部を持つ碗で、外面には口縁部に波濤文を入れ、体部にも文様を描く。内面には口縁部に界線2条を入れる。30は外面高台付近に2条、口縁部に1条の界線を引いて、外面体部には草花文を描き、内面には口縁部と見込みにそれぞれ1条の界線を引く。31は内外面ともに口縁部に界線1条を引き、外面には駿馬を描く。32は外面口縁部に2条の界線を引いて、体部は丸文を充填する。内面は口縁部に2条の界線を入れ、見込みにも界線2条を入れてその中を丸文で埋める。内外面ともに黒色に変色しており、二次的に被熱したものと思われる。33も粗製で内外に太線描きの文様が入る。外面の釉掛けは高台には及ばず、体部下半には大量の砂粒が付着する。高台は半周ほどが端部を欠損しており、重ね焼きの切り離しのためであろう。34は粗製で焼成や発色が悪く、全体に貫入が入る。口縁部内外に入る界線は太めである。35は粗製品で、内外に太線の界線が入り、内面見込みには蛇の目状の釉剥ぎを施す。

36は外面体部に丸文、内面見込みに2重の界線とその中に丸文を描く。高台疊付部分は釉剥ぎを施す。37は内外面ともに太線によって文様を描き入れた粗製品である。全体的にぶい発色で、高台疊付部分は重ね焼きからの切り離しの欠損が著しい。高台内には砂粒の付着が認められる。

38・39は端反の口縁部資料である。38は外面に唐草文を描く。39は粗製品で、内外面に太線の文様



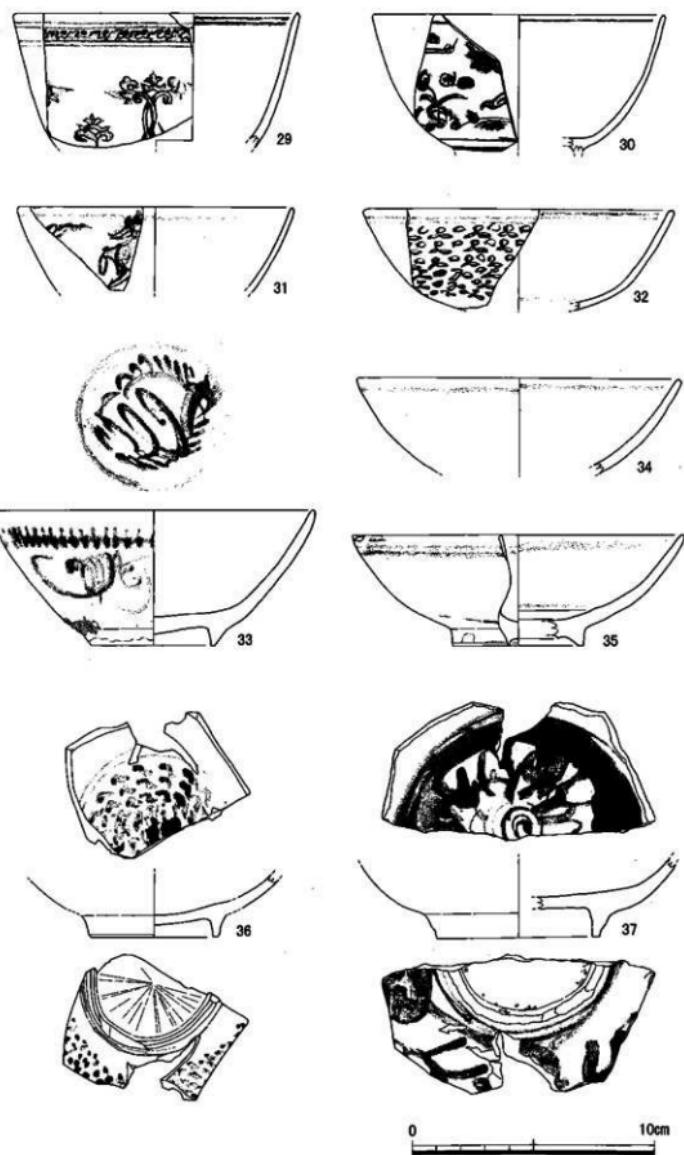
第126図 ニノ丸C地区出土の遺物① (S=1/2)



第127図 ニノ丸C地区出土の遺物② (S=1/2)

を描く。40は直線的に外傾して立ち上がる口縁部である。外面には上下それぞれ2重の界線にはさんで、波瀾文を描く。41は内外面ともに2条の界線を引き、外面には丸文を描く。42は直線的に立ち上で、波瀬文を描く。43は口縁部内外に於ける口縁部で、外面には界線にはさんで唐草文を、さらに体部には草花文を描く。44は口縁部内外に於ける口縁部で、外面には唐草文を描く。45は発色の悪い粗製品で、太線描きの文様が入る。46は脇部の資料で、外面に樹木の文様を描く。

46～52は底部付近の資料である。46は疊付部分を釉剥ぎし、外面には界線を引いてその上には唐草文を描く。内面には2重の界線が見込みに入り、砂粒の付着が認められる。47はやや高い高台を持ち、見込み中央付近は非常に薄い器壁となる。内外面ともに細線描きを施し、墨塗りは行わない。高台疊



第128図 ニノ丸C地区出土の遺物③ (S=1/2)

付部分は削りによって釉剥ぎする。48は高台内に2重の圓線を引き、中には字款を入れていたようである。やや膨らみを持つ見込みには十字花文を描く。49は外面体部に芭蕉葉文を描く。50は外面体部と内面見込みを丸文で充填する。51は外面に唐草文を、内面に十字花文を描く。

53は見込みに穿孔を施した焼台である。外面には唐草文を描く。

54~64は皿の資料である。54は外面に唐草文、見込みに十字花文を描く。分厚い作りである。55は内湾する口縁部の資料で、外面には芭蕉葉文を描く。56・57は墨付に釉剥ぎを施す。57は高台内に2重の界線内に字款を入れるようである。見込みには波瀾文を描く。58は薄手の作りの鉢皿で、鉢部分には内外面ともに界線を2本入れて、その中に文様を描く。59・60は鉢状に折れるが、折れは明確でない。59は発色が悪く、太線描きによる文様を入れる。61は鉢皿の口縁部の資料で、内面には植物文を、外面には唐草文を描く。62はやや小振りになるものと思われる鉢皿の資料である。非常に薄い作りで、細線描きによる文様が入る。63・64は粗製皿の高台部分で、高台付近には多量の砂粒が付着する。

65~97は土師質土器である。65・66は壊である。65は底部の糸切痕が粗く、胎土には大粒の赤色粒子を多く含む。見込み中央にはボタン状の高まりがあり、外面は回転ナダ調整を施す以前の工具による成形痕が後となって残る。66は比較的底面径が小さく、糸切痕は粗い。内面には見込みをほとんど作らず、体部は直線的に外傾して立ち上がる。外面には工具による一次調整が細かい筋状になって残る。

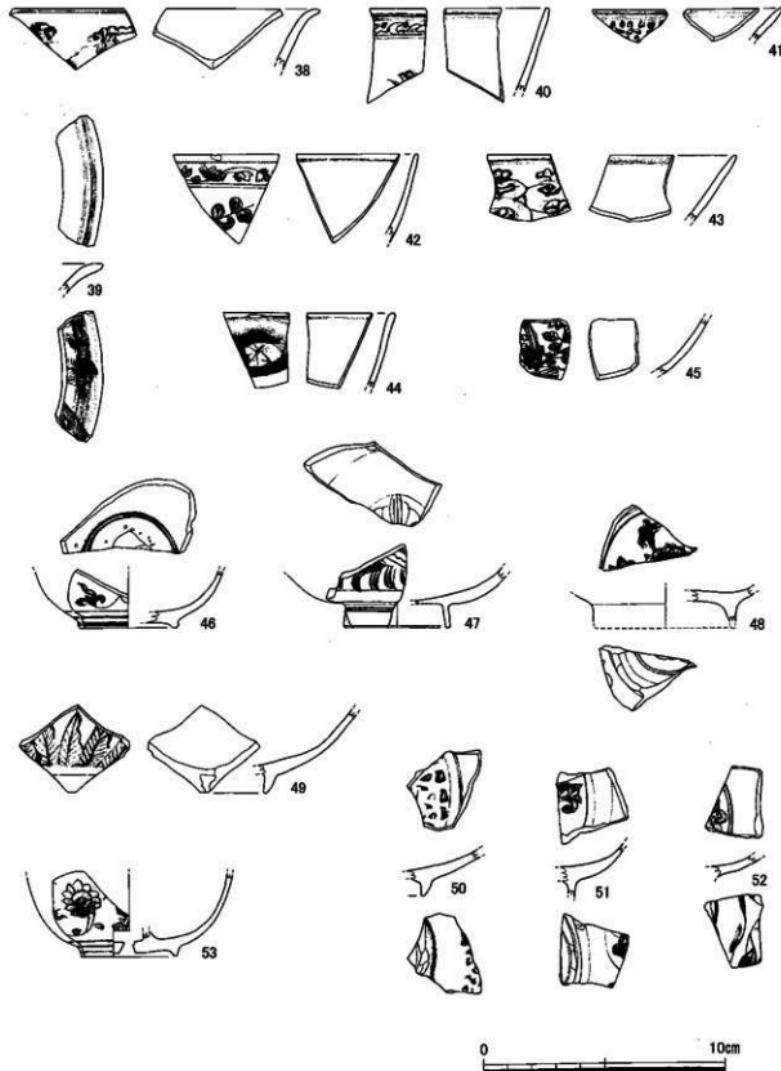
67~71は皿である。67は浅い立ち上がりで体部と底部の境は不明瞭である。器面の状態がよくないが、底部には糸切痕が観察される。68~71は細い粘土柱から糸切したもので、糸切痕は細かい。70は口縁部に炭化物が付着する。

72~86は小皿である。73・77・79・84・86には炭化物の付着が認められる。72は胎土に大粒の赤色粒子を多量に含む。糸切痕は粗い。73~76の糸切痕も粗い。77は細かい砂粒を多く含むせいか、器面が荒れており、底面の糸切痕は細かい。80は他に比べ底径が小さく、糸切痕は細かい。体部中ほどで大きく屈曲する。81も細めの粘土柱から作られ、体部は大きく開いて、口縁部は先細りとなる。82・83は粗い糸切痕が底部に観察される。83は外面体部下半に細かい凹凸が入る。84・85の底部には細かい糸切痕が入る。

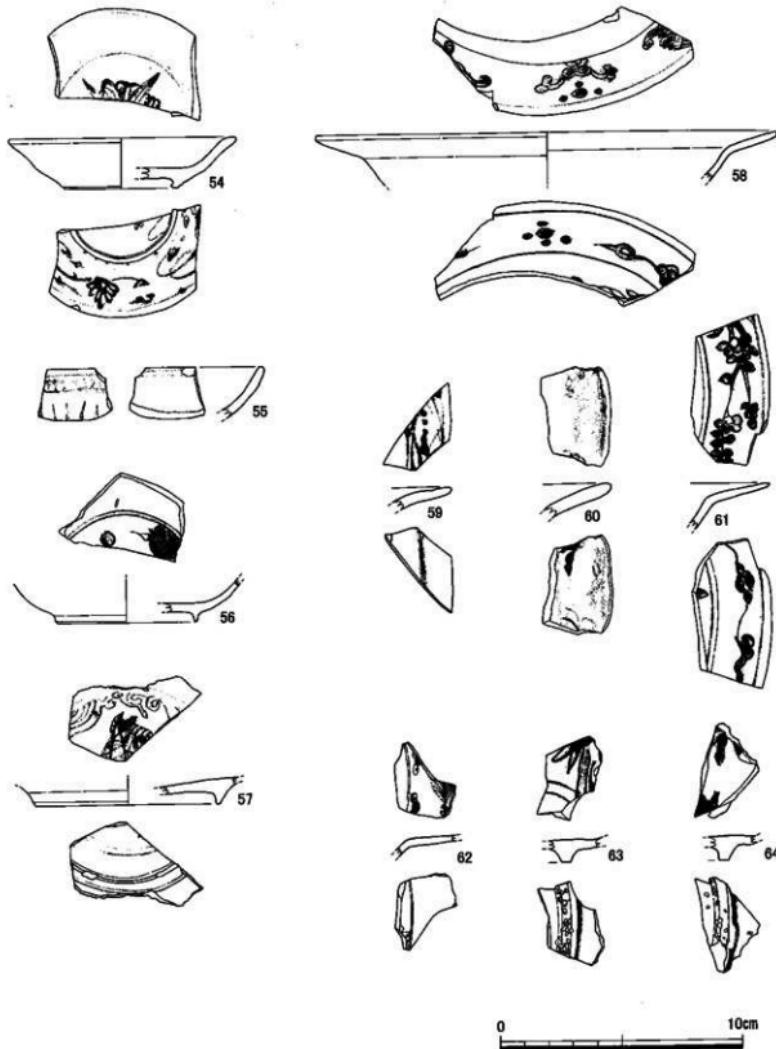
87~89はミニチュア土器である。87・88には底部に粗い糸切痕が残る。89は壺を模したものであろうか。胎土には赤色粒子を多く含むが、精製した粘土を使ったらしく、砂粒は少ない。

90~97は耳皿である。90・91はミニチュア土器からの作り出しである。口縁部両端を内側に巻き込んで成形する。90は糸切が浅く入り、底部の器壁が薄くなって破損している。91は底面に細かい糸切痕が残る。92~94は小皿から作り出したものである。92の底面に残る糸切痕は粗く、93・94の糸切痕は細かい。口縁部を内側に巻き込んで成形している。95~97はミニチュア土器を両側からつまみ出して成形している。95・96は赤色粒子を多く含む胎土で、底面の糸切痕は粗い。97の底面は器面の状態が悪いが、糸切である。

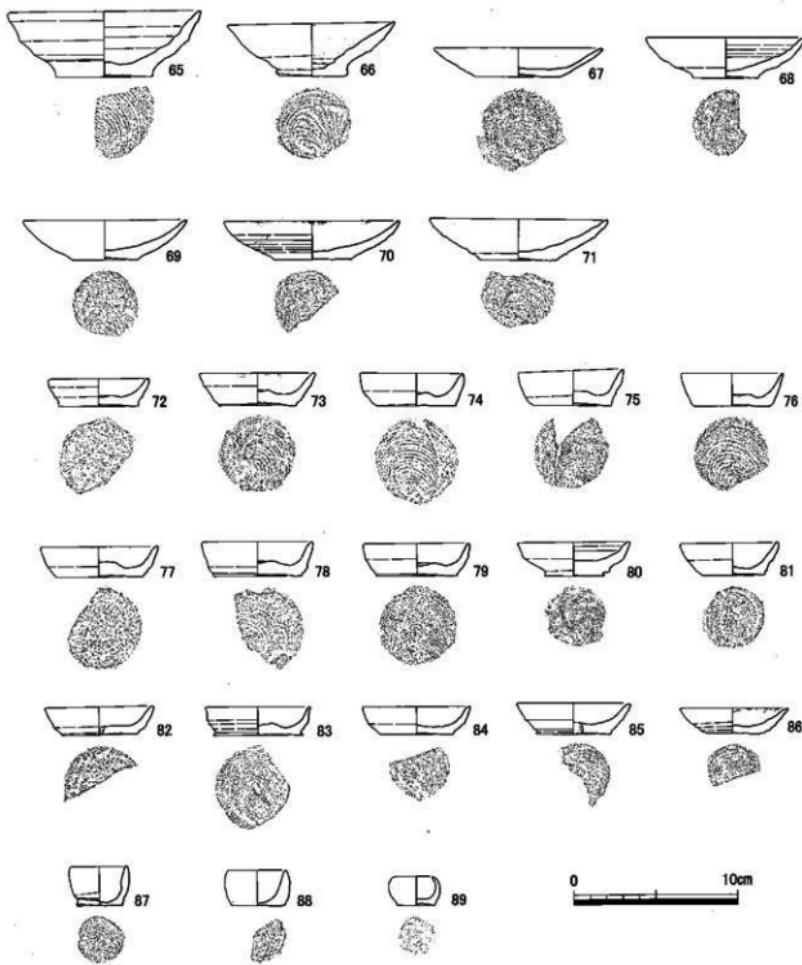
98~113は瓦の資料である。98・99は軒丸瓦で、いずれも左巻きの巴文と珠文を持つ。100・101は丸瓦の尻部の資料である。100は燃しが弱く、厚手である。凹面にはコビキB痕と布目を残し、側縁と玉縁部には面取りを施す。101は釘穴を持ち、凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕を残す。両側



第129図 ニノ丸C地区出土の遺物④ (S=1/2)

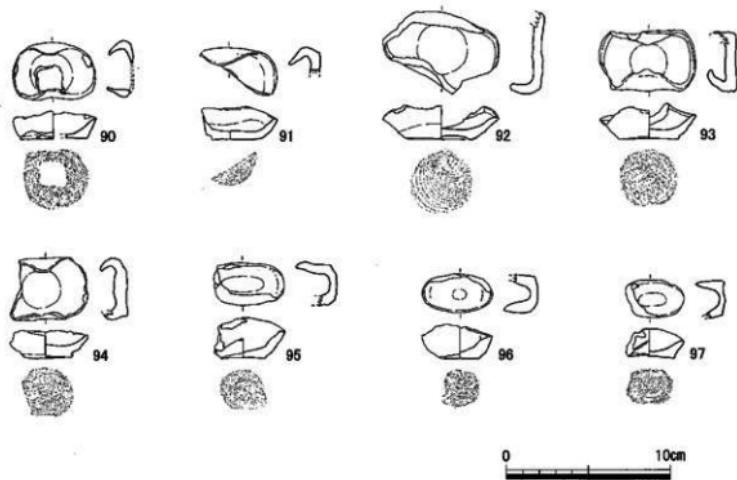


第130図 ニノ丸C地区出土の遺物⑤ (S=1/2)

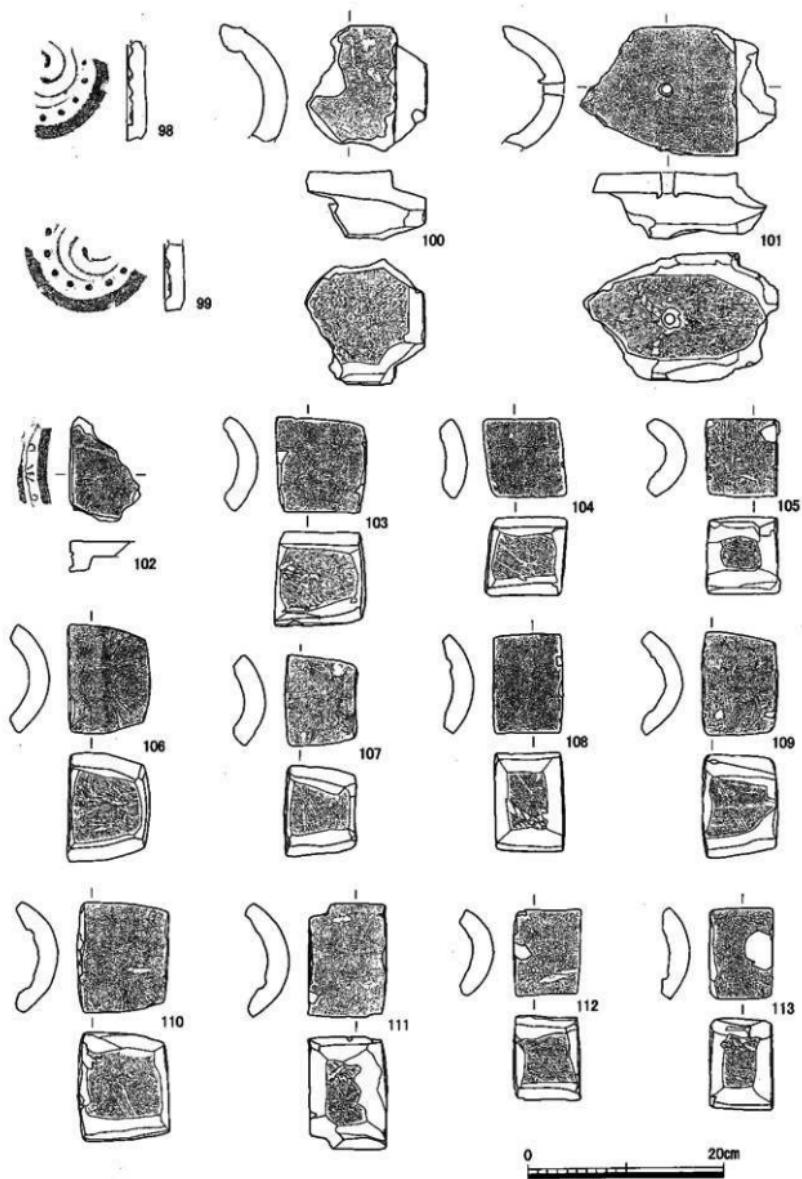


第131図 ニノ丸C地区出土の遺物⑥ (S=1/3)

縁は面取りを施す。凸面は丁寧になでられている。102は軒平瓦である。瓦当には三葉文と唐草文が入る。やや焼きが甘い。103~113は面戸瓦である。112以外は凹面にコビキA痕を残し、108は布目と吊り紐痕も残す。111と113の凹面には離れ砂も認められる。



第132図 ニノ丸C地区出土の遺物⑦ (S=1/3)



第133図 ニノ丸C地区出土の遺物⑧ (S=1/5)

第25表 ニノ丸C地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
2	青磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
3	青磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
4	青磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径4.2cm
5	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元口径16.6cm
6	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
7	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
8	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
9	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
10	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
11	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
12	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
13	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	底径4.2cm
14	青磁	碗	二ノ丸地区	12区	—	復元底径5.4cm
15	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	底径5.3cm
16	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	底径4.9cm
17	青磁	香炉	二ノ丸地区	19区	—	復元底径3.1cm
18	青磁	香炉	二ノ丸地区	19区	II層	復元口径7.1cm
19	青白磁	碗	二ノ丸地区	12区	—	復元底径6.6cm
20	高麗青磁	碗	二ノ丸地区	19区	—	
21	白磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
22	白磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
23	白磁	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元口径13.0cm, 復元底径7.1cm, 器高3.5cm
24	白磁	溫	二ノ丸地区	19区	II層	復元口径11.7cm
25	白磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
26	白磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
27	白磁	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
28	白磁	壺	二ノ丸地区	19区	—	復元口径7.2cm, 復元底径3.0cm, 器高2.2cm
29	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径11.5cm
30	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	復元口径11.9cm
31	青花	碗	二ノ丸地区	12区	—	復元底径11.1cm
32	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元口径13.3cm
33	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	復元口径13.1cm, 復元底径5.1cm, 器高5.5cm
34	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	復元口径13.2cm
35	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	復元口径13.6cm, 復元底径5.4cm, 器高4.5cm
36	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径5.2cm
37	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径6.7cm
38	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
39	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
40	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
41	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
42	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	
43	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
44	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	
45	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
46	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径3.9cm
47	青花	碗	二ノ丸地区	24区	—	復元底径4.3cm
48	青花	碗	二ノ丸地区	12区	II層	復元底径5.8cm
49	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
50	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
51	青花	碗	二ノ丸地区	19区	II層	
52	青花	碗	二ノ丸地区	19区	—	
53	青花	燭台	二ノ丸地区	19区	—	復元底径3.8cm
54	青花	壺	二ノ丸地区	19区	II層	復元口径9.2cm, 復元底径4.6cm, 器高2.1cm
55	青花	壺	二ノ丸地区	12区	—	
56	青花	壺	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径5.6cm
57	青花	壺	二ノ丸地区	19区	II層	復元底径7.6cm
58	青花	壺	二ノ丸地区	19区	—	復元口径19.0cm
59	青花	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
60	青花	壺	二ノ丸地区	12区	—	
61	青花	壺	二ノ丸地区	19区	II層	
62	青花	壺	二ノ丸地区	19区	—	
63	青花	壺	二ノ丸地区	19区	—	
64	青花	壺	二ノ丸地区	19区	—	

第26表 ニノ丸C地区出土遺物觀察表②

番号	種類	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	寸法 (cm)		
						外面		裏面		寸法 (cm)	口径	底径
						明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色				
65	土師質土器	平	二ノ丸周	19区	II層	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	黄石、石瓦、角閃石 赤色粒子	(11.6)	5.0	4.0
66	土師質土器	片	二ノ丸周	19区	Ⅲ層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石 赤色粒子	10.3	4.6	3.1
67	土師質土器	底	二ノ丸周	19区	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	黄石	(12.5)	5.2	1.8	
68	土師質土器	底	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(11.5)	4.6	2.5	
69	土師質土器	底	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.6)	4.0	2.4	
70	土師質土器	底	二ノ丸周	19区	II層	明黄褐色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.4)	4.7	2.5	
71	土師質土器	底	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.6)	4.8	2.5	
72	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.9)	4.9	1.7
73	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.6)	4.8	2.0
74	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	6.3	5.6	2.0
75	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	にぶい黃褐色	黄石、石瓦、角閃石	6.2	4.8	2.3
76	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石	(11.1)	4.6	2.0	
77	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	黄石、石瓦、赤色粒子	(7.1)	5.3	1.9
78	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.5)	5.3	2.1
79	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	明黄褐色	明黄褐色	にぶい黃褐色、赤色粒子	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.4)	5.0	2.9
80	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	6.7	3.6	2.1	
81	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	5.8	3.8	2.1
82	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	黄石、石瓦	(10.5)	(4.6)	1.7	
83	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	明黄褐色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石	(10.2)	5.4	1.7
84	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	II層	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.5)	4.5	1.7
85	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	黄石、石瓦	(10.8)	4.4	1.9	
86	土師質土器	小箱	二ノ丸周	19区	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	6.4	3.3	1.6	
87	土師質土器	ミニチャウ	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、赤色粒子	3.4	2.8	2.4
88	土師質土器	ミニチャウ	二ノ丸周	19区	II層	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	にぶい黃褐色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(11.5)	(3.0)	2.2
89	土師質土器	ミニチャウ	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、赤色粒子	2.2	2.3	1.8
90	土師質土器	耳皿	二ノ丸周	19区	浅黄褐色	暗色	浅黄褐色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	1.1	4.1	1.7	
91	土師質土器	耳皿	二ノ丸周	19区	II層	暗色	にぶい黃褐色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	—	—	2.0
92	土師質土器	耳皿	二ノ丸周	19区	にぶい黃褐色、褐灰色	にぶい黃褐色	褐灰色	黄石、石瓦、角閃石	7.1	3.9	2.1	
93	土師質土器	可皿	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	にぶい黃褐色	暗色	黄石、石瓦、角閃石	6.0	3.6	2.2
94	土師質土器	可皿	二ノ丸周	19区	暗色	暗色	暗色	黄石、角閃石	4.8	2.4	1.6	
95	土師質土器	可皿	二ノ丸周	19区	II層	明黄褐色	明黄褐色	明黄褐色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	—	—	2.6
96	土師質土器	可皿	二ノ丸周	19区	II層	暗色	暗色	暗色	黄石、石瓦、角閃石、赤色粒子	4.3	2.2	2.1
97	土師質土器	可皿	二ノ丸周	19区	II層	にぶい黃褐色	明黄褐色	暗色	黄石、角閃石	—	—	2.8

カッコ付者は復元品

第27表 二ノ丸C地区出土遺物観察表③

標数 番号	種別	出土地区	調査区	出土番位	文様	測量		色調		法量	備考
						四面	凸面	四面	凸面		
96	陶瓦	二ノ丸地区	19区	E面	唐文三把文 (左巻き)					墨色	(瓦当部) 周縁幅1.6cm, 周縁高0.5cm, 幅5.9cm
99	陶瓦	二ノ丸地区	19区	E面	唐文三把文 (左巻き)					墨色	(瓦当部) 周縁幅1.3cm, 周縁高0.6cm, 幅5.8cm
100	瓦	二ノ丸地区	19区	D面						墨色	厚さ1.3cm, 玉縁部長さ3.2cm
101	瓦	二ノ丸地区	19区	D面						墨色	厚さ1.0cm, 玉縁部長さ4.0cm
102	軒瓦	二ノ丸地区	19区	D面	正唐文・ 瓦筋御承文	ナテ	ナテ	暗灰色	暗灰色	暗灰色	(甲板) 厚さ1.5cm, (瓦当部) 厚さ6.0cm, 内区幅1.6cm
103	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, 板目, 瓦筋御承文, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ9.1cm, 幅8.5cm, 高さ3.5cm, 厚さ2.0cm
104	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ7.6cm, 幅8.0cm, 高さ2.8cm, 厚さ2.1cm
105	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ7.3cm, 幅7.3cm, 高さ4.0cm, 厚さ2.1cm
106	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ8.3cm, 幅11.0cm, 高さ4.5cm, 厚さ2.1cm
107	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ7.1cm, 幅9.5cm, 高さ3.2cm, 厚さ2.0cm
108	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, 板目, 瓦筋御承文, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ7.0cm, 幅10.0cm, 高さ3.0cm, 厚さ2.1cm
109	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, コビキ文	ナテ	オリーブ 墨色	オリーブ 墨色	墨色	長さ7.5cm, 幅10.5cm, 高さ4.1cm, 厚さ1.7cm
110	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, 瓦筋御承文, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ9.2cm, 幅11.0cm, 高さ4.5cm, 厚さ2.1cm
111	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ, 瓦筋御承文, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ7.6cm, 幅11.5cm, 高さ4.4cm, 厚さ2.2cm
112	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	D面		ナテ, ケズリ	ナテ	暗灰色	暗灰色	墨色	長さ8.6cm, 幅8.7cm, 高さ3.4cm, 厚さ2.3cm
113	廻戸瓦	二ノ丸地区	19区	E面		ナテ, ケズリ, 板目, 瓦筋御承文, コビキ文	ナテ	黑色	黑色	墨色	長さ6.4cm, 幅9.3cm, 高さ2.8cm, 厚さ2.1cm

#### (4) D地区の調査

##### 概要

D地区は曲輪7の北側にあたり、平成8年度から平成11年度に渡って発掘調査を行う。平成8年度には13区（90.0m<sup>2</sup>）、17区（33.5m<sup>2</sup>）で調査を行っており、続く平成9年度には20区（12.5m<sup>2</sup>）、平成10年度に27区（55.0m<sup>2</sup>）、平成11年度に32区（17.5m<sup>2</sup>）の調査を行う。

##### 土層

D地区の基本層序は以下のようになる。これは、D～G地区共通の基本層序となっており、各調査区における土層断面の土色とは一致しない層がある。

I層 耕作土層

II層 碳土層（15～18世紀初頭頃の遺物包含層）

III層 暗茶褐色土層

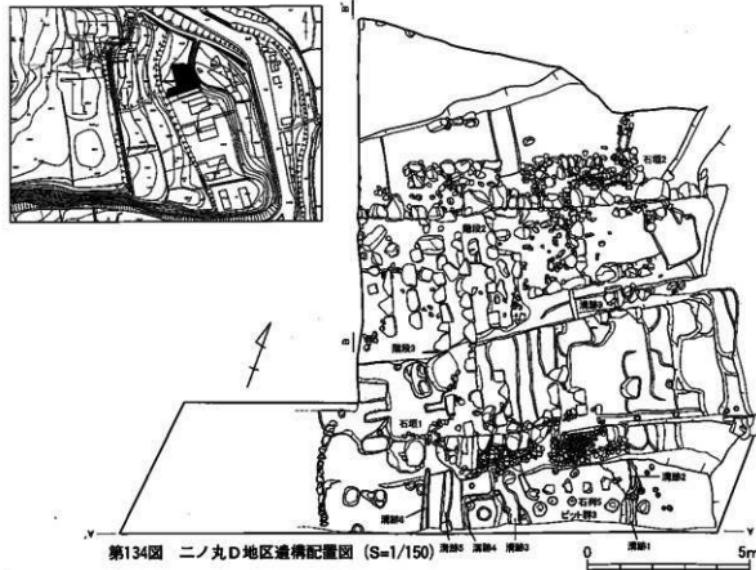
IV層 黄褐色粘質土層

V層 暗茶褐色粘質土層（炭化物含む）

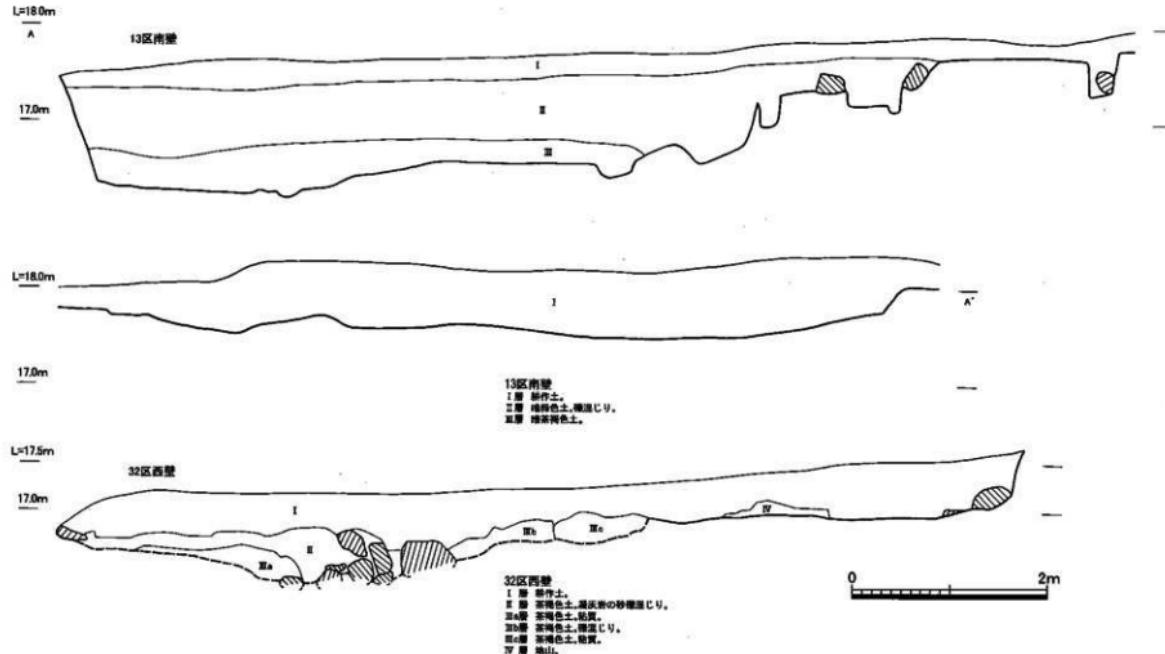
VI層 茶褐色土層

##### 遺構

平成8年度の調査では、13区と17区より石面を向かい合わせて捕えた石垣（石垣1、石垣2）を検出しておる、両石垣の間からは平石をこれに直行するかたちで検出している。平成9年度の調査では、



第134図 ニノ丸D地区遺構配置図 (S=1/150) 清部5 清部4 清部3 0 清部1 5m



第135図 ニノ丸D地区土層断面図 (S=1/50)

この平石を階段の踏石に石垣は階段の南側軸部分にあたると推定し、階段の踏石について把握するため20区を設定する。調査の結果、20区からは南北方向に並ぶ踏石列を検出しており、東側の石面を直線状に揃え、軸が13区および17区から検出した石垣1・2に直行するものと、前記の踏石列下にあり東側石面の軸も前記の踏石列とは平行しないものがある。これ以降、平成10・11年度調査では階段の全容を把握するため、13区で検出した石垣1北側の調査（27区）と17・20区西側の調査（32区）を行う。

このほか、13区の調査では階段南側からはピットと石列を検出している。

#### 階段2（17区、20区、27区）

D地区中央付近より、後述する溝跡9に伴う階段の踏石列を検出している。階段2の踏石は階段3の踏石より約0.2m低い位置に据えられており、切り合い関係からも階段3に先行する。階段東側においては踏石がほぼ現存していないが、西側では階段2の踏石列とは並びを別にし、平行に並ぶ踏石列を4列検出する。ただし、西側においては踏石の大半が階段3の踏石下に残存しているものと推測されるが、階段3検出面より下へは掘り下げておらず階段2の全容は不明である。したがって踏石列の検出長はわからない。踏石列間隔は0.5~0.66m、高低差は約0.15mで、踏石には0.4m前後の不整形な自然石が使用される。石材に規格性は見られないが、踏石上面の高さが揃うように据えられる。踏石とこれに伴う南側石垣の根石上面のレベルは階段3の踏石設置面より約0.2m低い位置にあり、これらの石材は原位置をほぼ保っている。

#### 溝跡9（20区、27区）

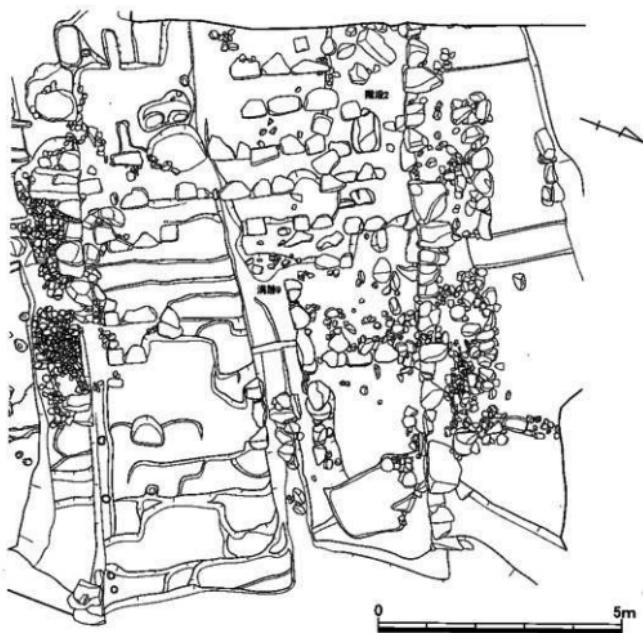
階段2の南側より、東西方向に走る石列を2列確認した。石列は向かい合わせで石面を揃えており、これが階段2に平行して東西方向に走ることから階段2に伴う側溝と考えられる。

溝跡は検出長7.5m、上幅0.92mで、側壁部分には幅0.5~0.9mほどの偏平な石が使用されるが、石材や石積みの方法に規則性は見られない。また、溝跡の底では側壁に使用された石よりやや小さめの幅30~60cmの石が検出されており、溝の底に敷石が敷かれた可能性もある。

#### 階段3（13区、17区、20区、27区、32区）

階段2上面から検出した階段で、南北両側に石垣を伴う。階段東側では踏石がほとんど残存していないが、踏石設置面と思われる段が僅かに残る。西側では、石面を東に揃えた踏石列が8列検出されており、直線上に並んだ石面の軸が石垣1と石垣2に直行する。

踏石列幅は6.6m、列間隔0.78m、高低差は0.22mで、石材には幅が30~70cmの不整形な自然石が主に使用される。但し、一部には五輪塔の地輪や宝慶印塔の基礎と塔身部分といった石塔類も利用されている。階段3の造成に当たっては、踏石設置面から階段2の踏石上面までの比高差が約0.2mしかなく階段2の踏石も原位置を保つことから、階段3造成の際に階段2の踏石を取り除かず、上に土を盛り階段3の踏石を据えたものと推測される。



第136図 階段2(口地区)・溝跡9実測図 (S=1/100)

#### 石垣1 (13区)

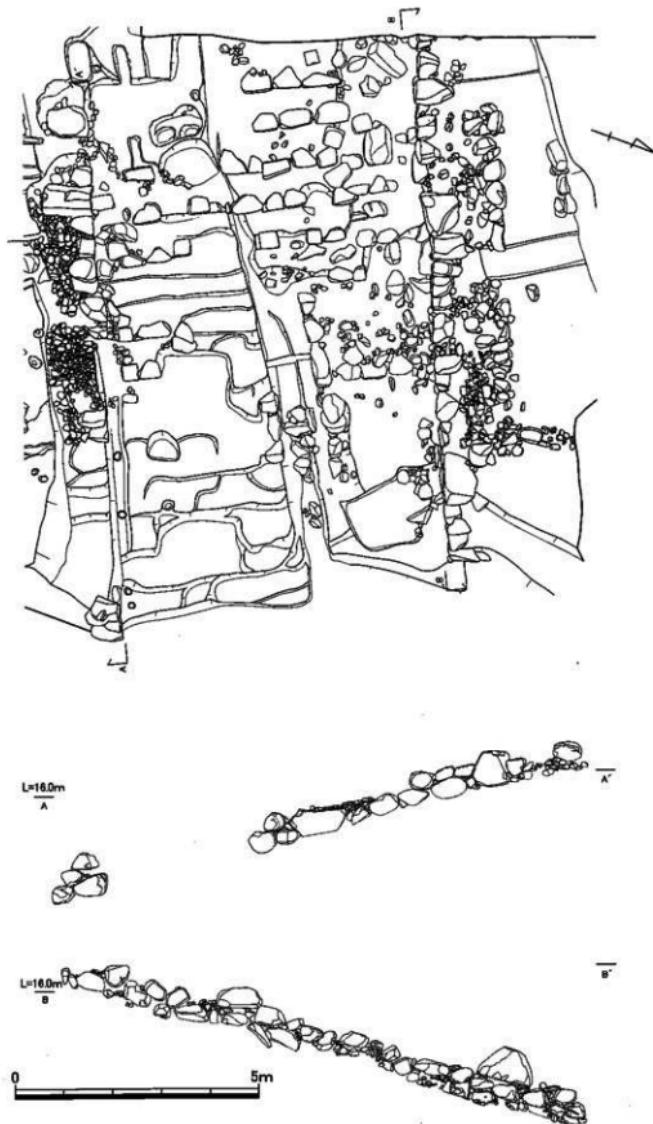
階段3の南側より検出した石垣で、北側の石面が東西方向にまっすぐ揃うように据えられる。検出長は10.2m、残存高0.84mを測り石積みは一部で3石まで確認できるものの、2石目より上段については残存する部分が少なく、石積みの技法や高さについて不明な点が多い。根石は石面の幅を40~60cmに揃え、高さはおよそ36cmになるよう据えられており、横目地が通る。2石目は根石と比べるとやや小さめの石が使用されているが、石面の幅や高さは揃えられており、これも目地は揃っていたものと考えられる。石の揃えは50cm前後のものが多いが、1m程度のものも含まれる。裏込めには、拳大の栗石が1m幅ほど詰められる。

また、石垣の中央部分には幅1.08m、厚さ0.12mの平石があり、鏡石と思われる。

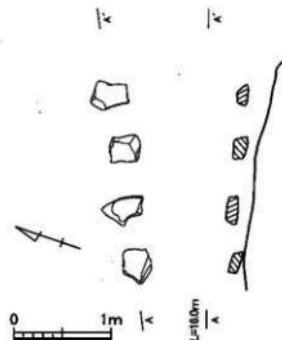
#### 石垣2 (17区)

階段3の北側で検出した石垣で南側の石面が東西方向に揃うように据えられており、石垣1と平行して東西方向に延びる。両石垣の主軸は階段3の踏石列の主軸とほぼ直行するため、石垣1と石垣2は階段3の両袖を形成する石垣であったと思われる。

石垣の検出長は10.7m、残存高1.14mで3石の石積みを確認するが、本来の高さについては不明。東より2.7mほどは石面の幅や高さが揃えられ横目地が通るなど本来の石積みが残るもの、これよ



第137図 階段3・石垣1・石垣2実測図 (S=1/100)



第138図 石列5実測図 ( $S=1/50$ )

り西側では配石が乱れており倒壊または改変を受けたものと推測される。石材には石面の幅が40~60cmの石が多用されるが、なかには幅が1m前後の大きめの石が含まれる。石の控えは短く、裏込めの幅も0.8mほどである。

石垣2の北側では、石垣2に平行して東西方向に延びる石垣を検出する。石面は北側が揃うように据えられるため、石垣2の石面とは反対方向を向く。検出長2.88m、残存高0.58mで、石材は幅0.4~0.6mほどの石を使用する。石材の大きさ等に違いが見られるが、裏込め石を共有しており同一遺構の可能性がある。

#### ピット群3(13区)

13区の南側より、ピットを数基検出する。調査区南東のピットは上面が削平されているが、掘り込みは地山まで達する。直線状に並ぶピットもあるが、詳細が不明なため同一遺構か判断できない。

#### 石列5(13区)

13区南東より検出した石列で、四つの石が東西方向に直線状に並ぶ。石材は、長軸30~40cm、短軸20~30cmと規格は揃っており、石上面の標高も15.8m前後に揃えられる。

石材間の間隔は約35cmと短く、建物跡の礎石とは考えにくい。

#### 溝跡1(13区)

13区東側で検出した断面U字形の溝跡で、上幅0.33m、下幅0.15mを測る。

#### 溝跡2(13区)

13区東側で検出した断面U字形の溝跡で、上幅0.21m、下幅0.27mを測る。

#### 溝跡3(13区)

13区中央で検出した断面U字形の溝跡で、上幅0.46m、下幅0.32mを測る。

#### 溝跡4(13区)

13区中央で検出した断面U字形の溝跡で、上幅0.23m、下幅0.13mを測る。

#### 溝跡5(13区)

13区中央で検出した断面U字形の溝跡で、上幅0.31m、下幅0.2mを測る。

## 溝跡 6 (13区)

13区中央で検出した断面U字形の溝跡で、上幅0.24m、下幅0.15mを測る。

### 遺物

1～5は青磁である。1は外面に錦蓮弁文を持つ碗である。2は高台付近と口縁部を欠損する。体部外面には錦蓮弁文が入るようである。高台内は無釉で、内面見込み中央にはスタンプ文が施される。3は底部の資料で、内面見込み中央には草花文が入る。底部は疊付及び高台内が無釉である。4は皿口縁部で、折れ縁となる。内面体部に文様が入る。5は底部の資料で、腰折れとなる。高台内まで釉が及び、疊付部分を釉剥ぎする。貫入が細かく入る。

6～10は白磁の資料である。6～10は端反の口縁部の皿である。9は焼成が悪く、細かく貫入が入る。10は内外面に蓮弁文を施す碗で、非常に薄手の作りである。口縁部は口禿げとなる。

11～23は青花の資料である。11～17は碗である。11は端反の口縁部で、内面に1条の界線を引く。12は内外面に2条の界線を引く。13は膨らみを持った雙頭心となる見込みに草花文を描く。高台内の字款は「富貴佳器」であろうか。14も13と同タイプの碗で、見込みには人物文を描く。高台内には「寿」の字が入る。13・14は疊付部分に釉剥ぎを施す。15も見込みが膨らみ、内外面に文様を描く。高台内にも字款が入る。16は粗製の資料で、内面見込みには太線描きの「寿」字文が入る。高台内まで釉が掛かり、高台付近には砂粒が付着する。17は胴部の資料で、内外面に文様が入るが、内面は虫文である。

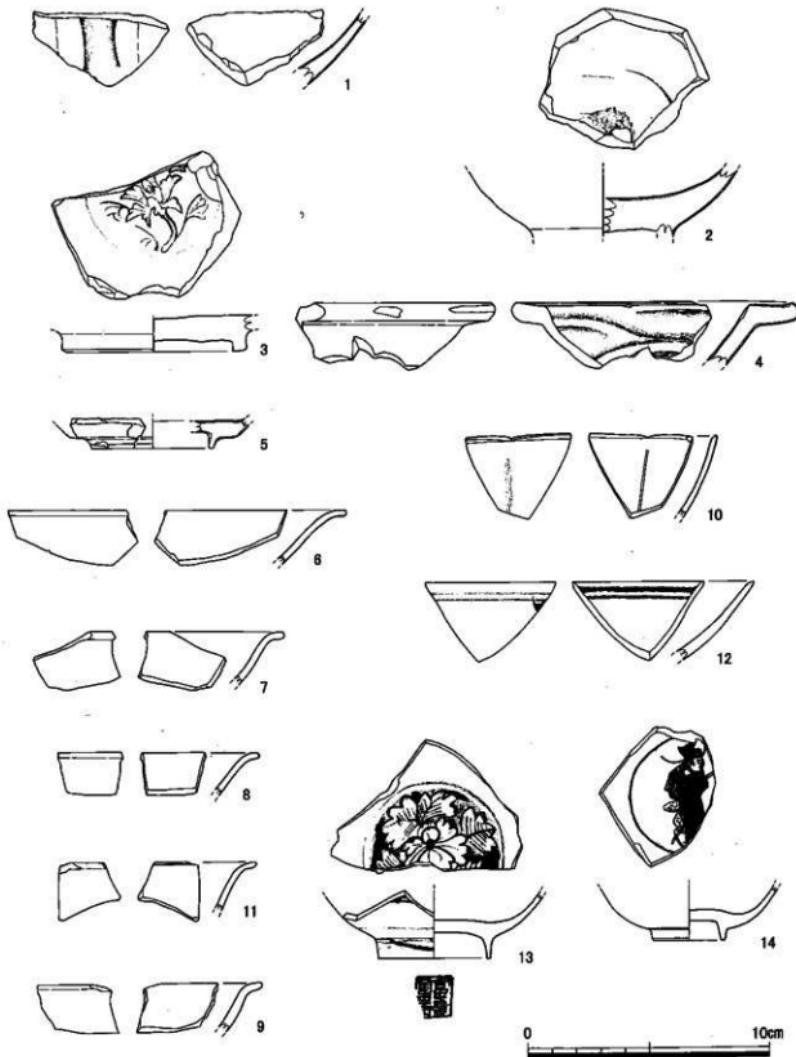
18～23は皿の資料である。18・19は端反の口縁部である。いずれも外面に唐草文を描き、内面には2条の界線を引く。20は内湾する口縁部を持つものである。外面は高台と口縁部にそれぞれ界線1条を引き、内面には口縁部に四方櫛文を入れ、見込みにも界線1条を引き、中に文様を描くようである。21は外面に唐草文を描き、内面見込みにも文様を描く。高台疊付部分は釉剥ぎを施すが、多量の砂粒が付着する。22は外面に唐草文を描く。内面見込みの2重界線の中の文様は玉取獅子であろう。高台疊付部分は釉剥ぎを施す。23は体部が内湾して口縁部に至る資料である。外面口縁部に界線を1条引き、内面にも文様を描く。高台疊付部分には砂粒が付着する。

24は瑠璃釉磁器の碗である。瑠璃釉は外面のみで、高台疊付部分は釉剥ぎを行う。

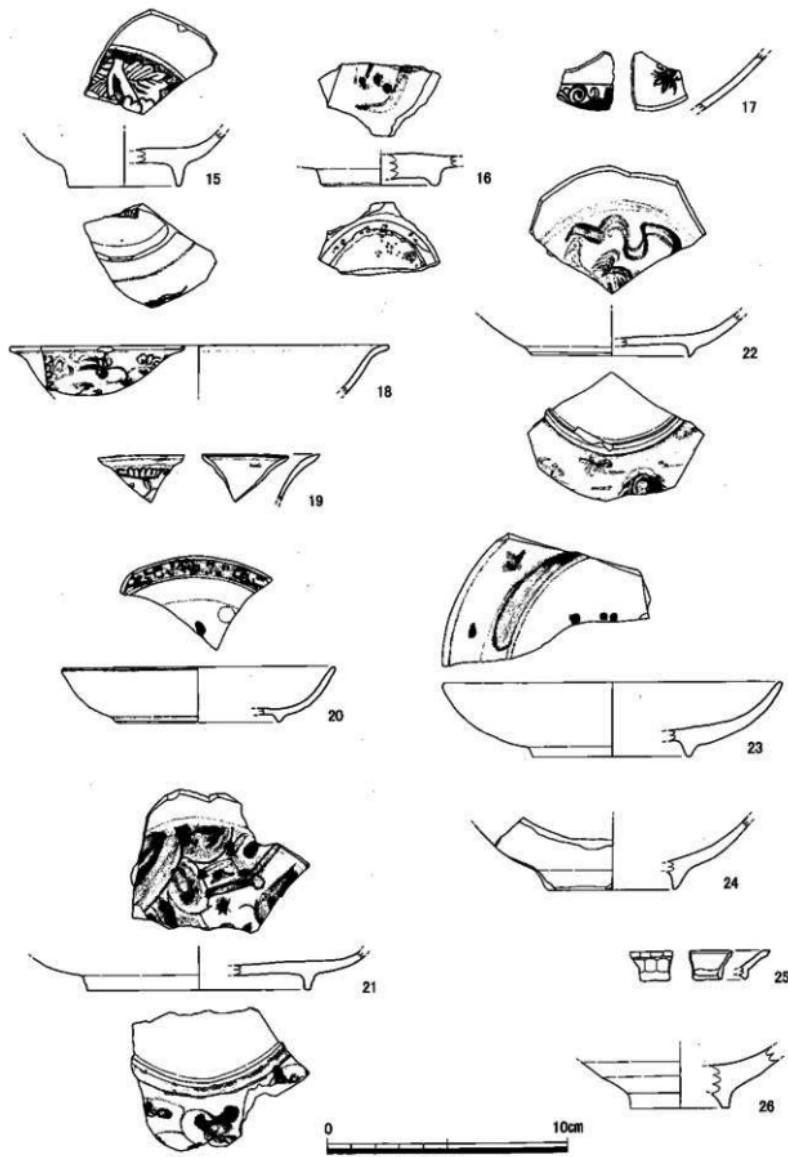
25は翡翠釉陶器の小皿である。型押し作りである。26は灰釉の掛かった、陶器碗である。細かく貫入が入る。

27～34は陶器の資料である。27は陶器の壺で、短く直立する頸部をもち、口縁部は外側が肥厚する。口縁部上面及び肩部には自然釉が掛かる。28は底部の資料で、内外面ともに丁寧なナデ調整である。29は体部が大きく開いて立ち上がる底部で、内外面ともに褐色釉が掛かる。30は外面が無釉、内面が暗赤褐色の釉が掛かるが、内外面ともに胎土中の砂粒が溶けて黒褐色の斑点状の釉となる。

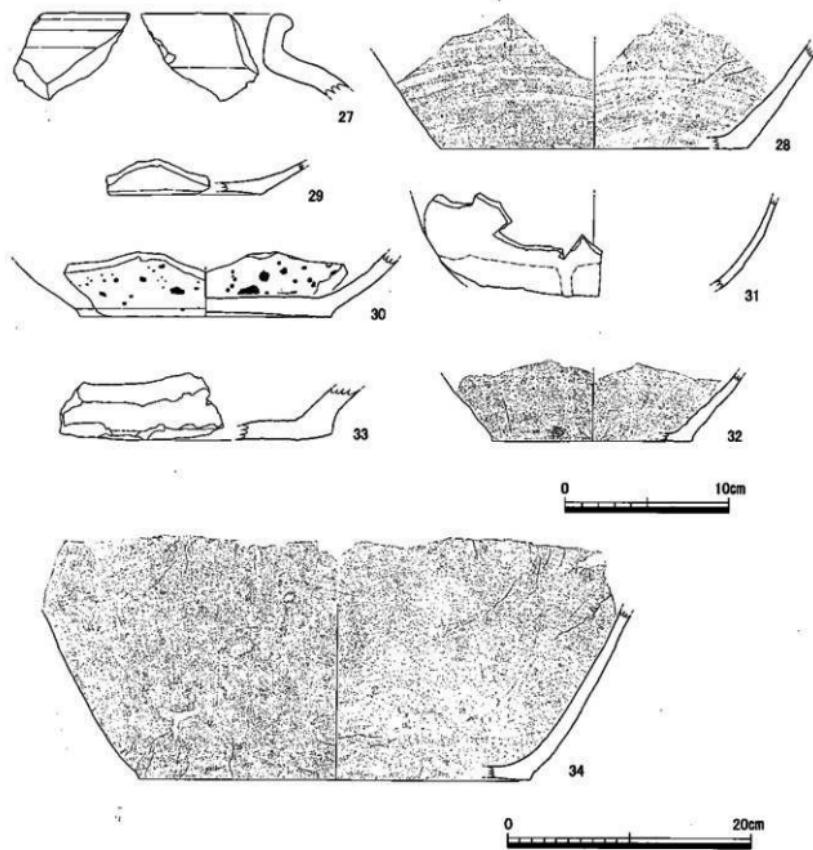
27・32は同一個体であるにぶい橙色の胎土で、外面は底部から体部下位は無釉であるが、体部上位には黒褐色釉がかかる。内面は無釉である。33はオーリーブ黒色の釉が内外面に掛けた褐釉陶器である。34は無釉の焼き締め陶器で、内外面ともににぶい赤褐色を呈する。内外面、底面ともに工具による粗いナデ調整が認められる。



第139図 二ノ丸D地区出土の遺物① (S=1/2)



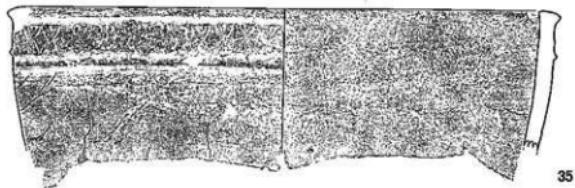
第140図 ニノ丸D地区出土の遺物② (S=1/2)



第141図 ニノ丸D地区出土の遺物③ (34: S=1/4, その他: S=1/3)

35~39は瓦質の火鉢である。35は口縁部外端を肥厚させ、その下に突帯を貼り付けるとともにスタンプ文を施す。燃しによって外面と内面上位は黒色をなす。36は口縁部外面を肥厚させ、その下に突帯2条を貼り付ける。口縁部下には巴形のスタンプ文を施す。燃しによって内外面黒色を呈する。37は外面に突帯1条を貼り付ける。38は底部の資料で、赤色粒子を多く含む胎土である。39は底部から体部が外傾して立ち上がり、外面には底部近くに突帯を1条巡らす。外面には燃しが掛かる。

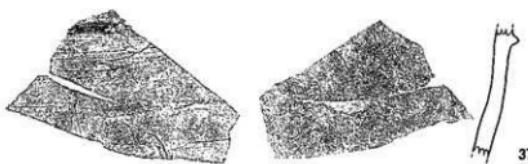
40~42, 44~48は擂鉢の資料である。40は体部が直線的に外傾して立ち上がり口縁部に至る。内面には7本単位のクシ目が放射状に入る。内面は使用によりかなり磨耗している。41は燃しの掛かる資料で内面には5本単位のクシ目が入る。42は片口部分で、内面には刷毛目調整のち、クシ目が入る。



35



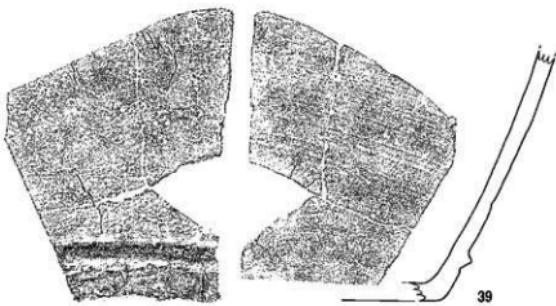
36



37



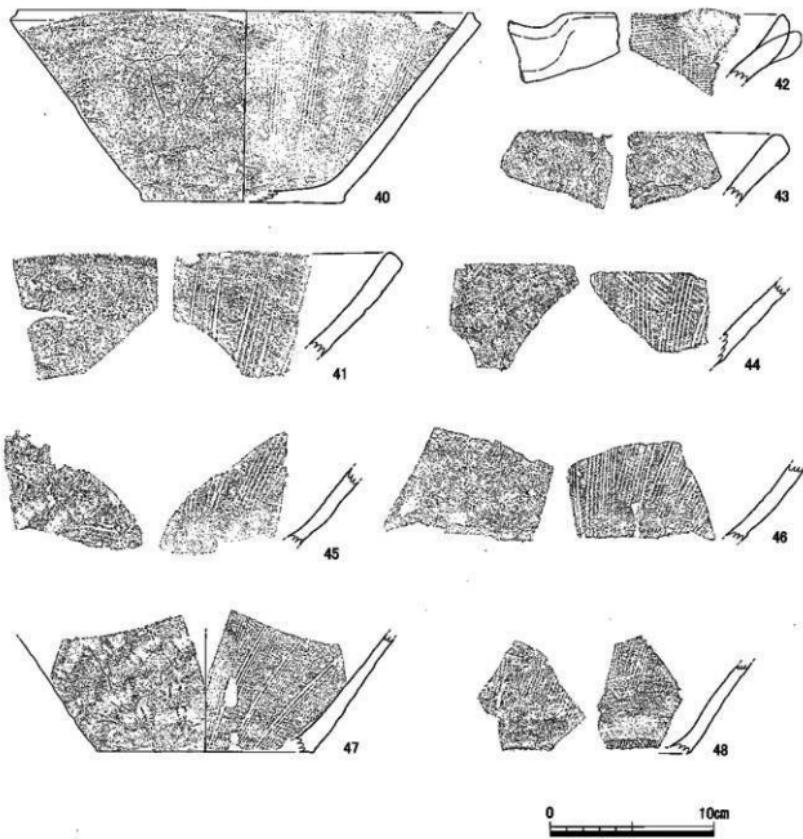
38



39



第142図 ニノ丸D地区出土の遺物④ (S=1/3)

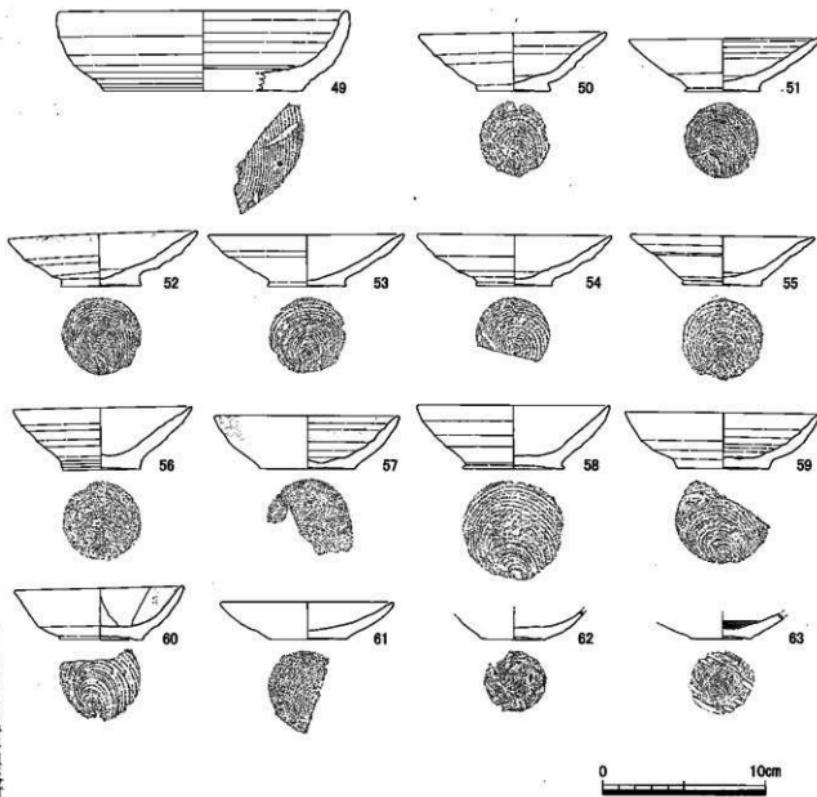


第143図 ニノ丸D地区出土の遺物⑤ (S=1/3)

44は7本単位のクシ目が放射状に入る。45は底部近くの資料で、外面にはユビオサエの痕が残る。内面のクシ目は7本単位である。46も外面にユビオサエの痕が残り、内面のクシ目は8本単位である。47は外面にユビオサエ痕を残し、内外面ともに刷毛目調整を施す。内面のクシ目は9本単位である。48は金色雲母を含む胎土である。7本単位のクシ目が内面に入る。43はクシ目が入っておらず、捏鉢である。

49～88は土師質土器である。49は大型品で、火鉢である。底面には粗い糸切痕を残す。

50～60、62・63は壺である。50～56は内面に見込みを作らず、体部は外傾して口縁部が大きく開くものである。比較的底径が小さく、細い粘土柱から切り離している。底面の糸切痕は、56は細かく入る



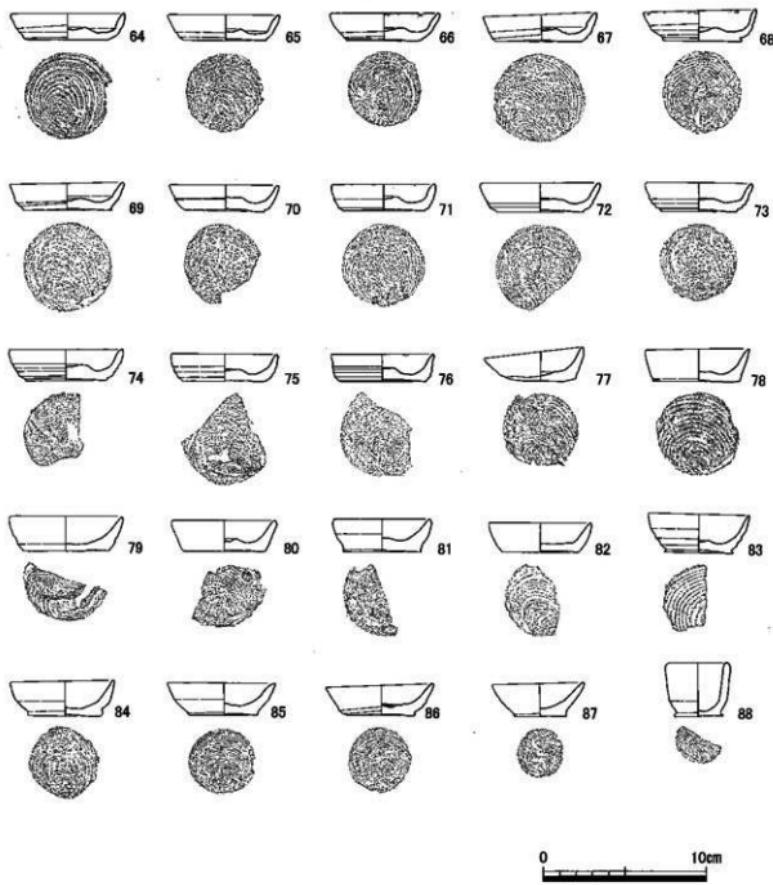
第144図 ニノ丸D地区出土の遺物⑥ (S=1/3)

が、ほかは粗い。いずれも内外面ともに丁寧になでられている。52の口縁部には炭化物の付着が認められる。

57・59は内面に成形時の凹凸を顯著に残し、体部は丸みを帯びる。底面の糸切痕は粗めである。57の内面には煤の付着がある。

58は大きめの粘土柱からの作り出しで、底径が大きい。糸切痕は粗い。内外面ともに丁寧になでるが、外面には工具調整痕がわずかに残る。60はやや腰の張る体部で、底面の糸切痕は粗い。内外面ともに丁寧にナデ調整を施す。内面には炭化物が付着する。

62・63は白色系の資料である。62は石英の小礫の混入が多い。63は螺旋状の工具痕が内面見込み中央に残る。いずれも底径は小さく、細かい糸切痕を残し、棒状の痕跡がつく。

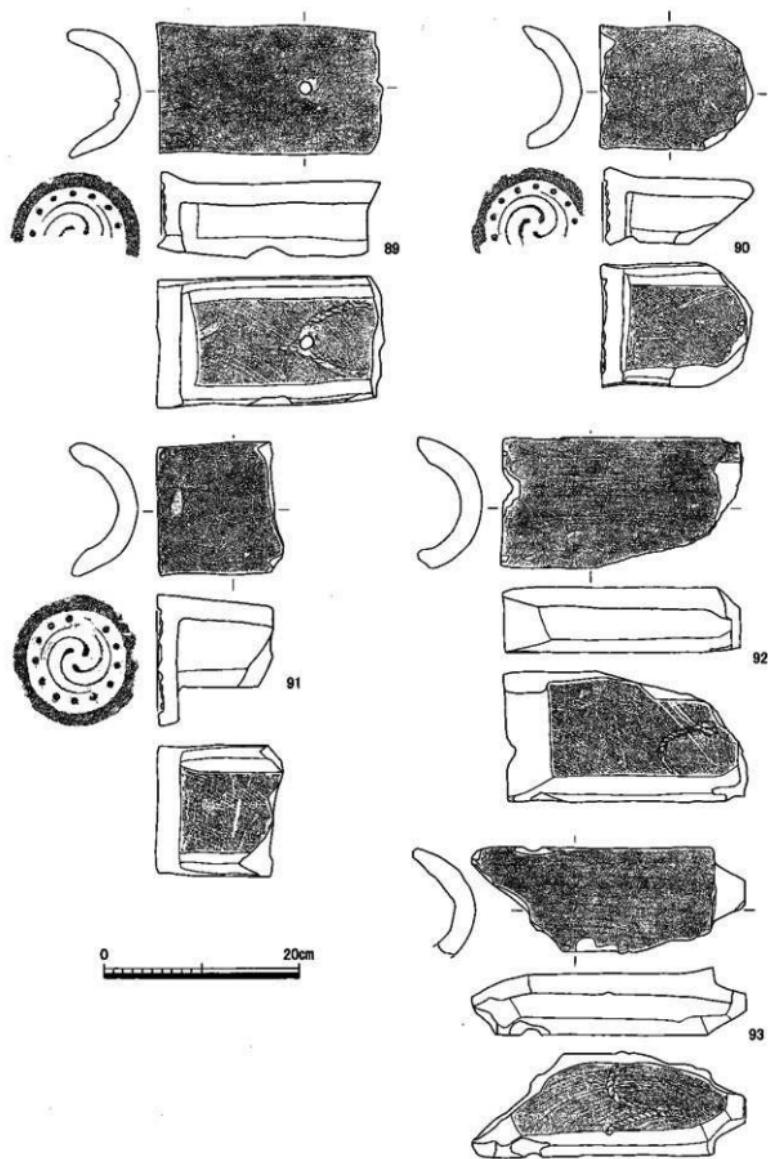


第145図 ニノ丸D地区出土の遺物⑦ (S=1/3)

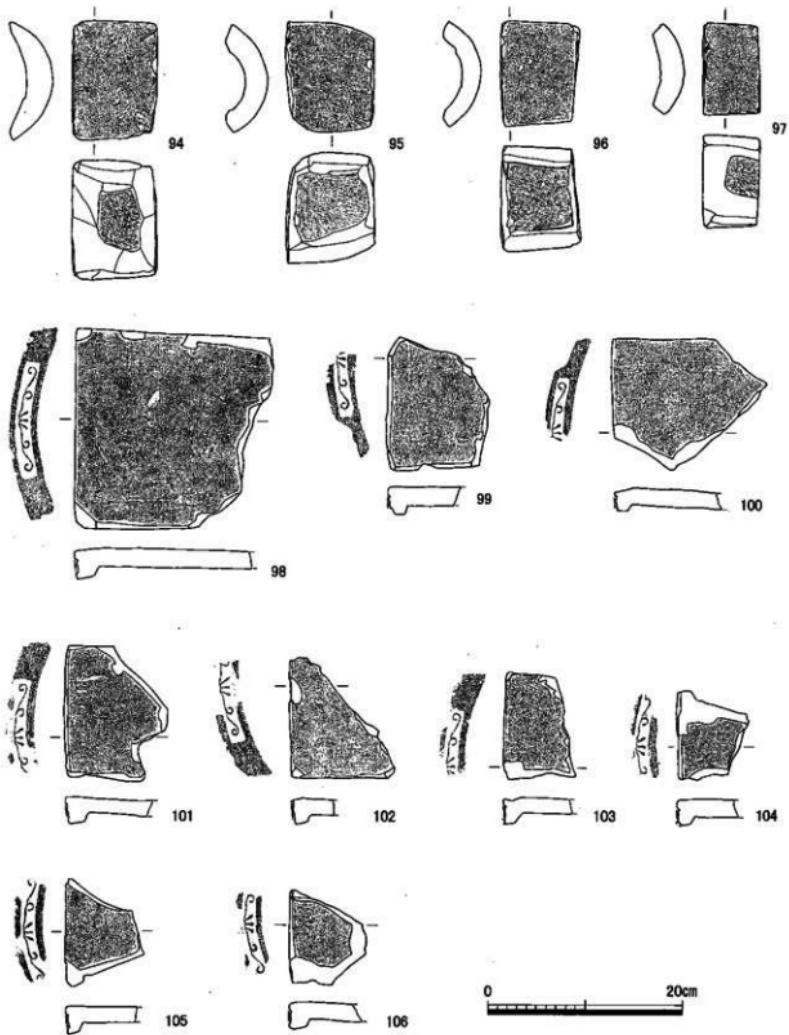
61は皿である。焼成が悪く、器面の状態がよくないが、底面には細かい糸切痕がつく。

64~86は小皿である。64~76は比較的大きめの底径で、体部から口縁部は浅くやや外傾して立ち上がる。内面見込み中央にはボタン状もしくはドーナツ状の高まりを作る。底面の糸切痕は粗く入るものが多いが、65・72・76は細かい糸切痕である。66・68・71・76には口縁部に炭化物が付着する。

77は作りが悪く、歪んでいる。粘土塊を底面に貼り付けて安定させている。底面の糸切痕は粗い。78~81はやや器壁が厚く、底面には粗い糸切痕を持つ。81は赤色粒子を多く含む胎土である。82は赤色粒子を含む胎土で、見込みは平坦である。底面の糸切痕は粗い。83は外面に成形時の凹凸を3段は



第146図 ニノ丸D地区出土の遺物⑧ (S=1/5)



第147図 ニノ丸D地区出土の遺物⑨ (S=1/5)

ど残す。底面の糸切痕は粗い。84は丸みを帯びた体部で、底面の糸切痕は粗い。85・86はにぶい橙色を呈する資料で、底面にはやや粗い糸切痕が残り、内面見込み中央は尖り気味になる。どちらもナデ調整によって不明瞭であるが、内面口縁部に1条の工具痕がかすかに残る。

87は小壺である。細い粘土柱からの切り離しで、底面の糸切痕は細かい。88はミニチュア土器である。底面には糸切痕が残る。

89~106は瓦の資料である。89~91は軒丸瓦である。瓦当部の文様は巴文と珠文である。いずれも凹面にはコビキA痕、布目を残し、89・90には吊り紐痕も残る。89には釘穴が開く。

92・93は丸瓦である。92は玉縁部を欠損する。凸面には長軸方向の工具ナデ痕がつく。凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕を残し、離れ砂が付着する。頭部と側縁は面取りを施している。93も凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕を残し、周縁は面取りを行う。

94~97は面戸瓦である。いずれも凹面にはコビキA痕と布目を残し、94~96は周縁を面取りする。

98~106は軒平瓦である。いずれも瓦当部には三葉文と唐草文を入れる。105はほとんど焼しが掛からない。いずれも凸面は丁寧にならが、凹面は粗い器面をそのままに残す。

第28表 ニノ丸D地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	碗	二ノ丸地区	17区	-	
2	青磁	碗	二ノ丸地区	13区	-	
3	青磁	碗	二ノ丸地区	19区	-	復元底径6.5cm
4	青磁	皿	二ノ丸地区	27区	II層	
5	青磁	皿	二ノ丸地区	17区	-	復元底径6.0cm
6	白磁	皿	二ノ丸地区	17区	-	
7	白磁	皿	二ノ丸地区	13区	-	
8	白磁	皿	二ノ丸地区	17区	-	
9	白磁	皿	二ノ丸地区	13区	-	
10	白磁	碗	二ノ丸地区	13区	-	
11	青花	碗	二ノ丸地区	17区	-	
12	青花	碗	二ノ丸地区	27区	II層	
13	青花	碗	二ノ丸地区	17区	-	復元底径4.7cm
14	青花	碗	二ノ丸地区	17区	-	復元底径4.9cm
15	青花	碗	二ノ丸地区	27区	II層	復元底径4.6cm
16	青花	碗	二ノ丸地区	17区	-	復元底径4.6cm
17	青花	碗	二ノ丸地区	17区	-	
18	青花	皿	二ノ丸地区	13区	-	復元口径15.4cm
19	青花	皿	二ノ丸地区	17区	-	
20	青花	皿	二ノ丸地区	13区	-	復元口径11.0cm、復元底径6.5cm、器高2.2cm
21	青花	皿	二ノ丸地区	13区	-	復元底径9.0cm
22	青花	皿	二ノ丸地区	13区	-	復元底径6.5cm
23	青花	皿	二ノ丸地区	13区	-	復元口径13.7cm、復元底径6.5cm、器高3.0cm
24	埋納物	碗	二ノ丸地区	27区	II層	復元底径5.2cm
25	埋納物	小皿	二ノ丸地区	17区	-	
26	陶器	碗	二ノ丸地区	27区	II層	復元底径4.0cm
27	陶器	皿	二ノ丸地区	17区	-	
28	陶器	-	二ノ丸地区	13区	-	復元底径18.7cm
29	陶器	-	二ノ丸地区	17区	-	
30	陶器	-	二ノ丸地区	13区	-	復元底径15.4cm
31	陶器	-	二ノ丸地区	17区	-	
32	陶器	-	二ノ丸地区	17区	-	復元底径12.2cm
33	陶器	-	二ノ丸地区	17区	-	
34	陶器	-	二ノ丸地区	32区	-	復元底径32.0cm

第29表 二ノ丸D地区出土遺物観察表②

番号	種別	器種	地区	調査区	出土場所	色調	出土			長さ(cm)	
							外面	内面	底面		
35	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	灰色	灰色	灰石、角閃石、白色粒子	2~3mmの砂粒	(42.2)		
36	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	17区	灰色	灰黑色	灰石、石英、角閃石、白色粒子				
37	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	32区	にごい褐色	にごい褐色	灰石、角閃石、白色粒子				
38	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	17区	にごい褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子		(32.6)		
39	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	灰色	灰褐色	灰石、角閃石、赤色粒子				
40	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	32区	Ⅱ等	灰色	灰石、石英、角閃石		(27.4)	(32.4)	
41	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	32区	灰褐色	灰黑色	灰石、角閃石				
42	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	17区	灰色	灰色	灰石、角閃石				
43	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	27区	Ⅱ等	灰白色	灰白色				
44	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	13区	灰褐色	灰色	灰石、石英				
45	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	13区	灰色	灰白色	灰石、角閃石				
46	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	17区	灰色	灰黑色	灰石、角閃石				
47	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	13区	灰褐色	灰色	灰石、石英			(18.1)	
48	瓦質土器	罐体	二ノ丸地区	13区	灰色	灰白色	灰石、石英、角閃石、白色粒子、含色礫				
49	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(17.0)	(12.2)	4.9	
50	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	11.3	4.6	3.6	
51	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	11.8	4.6	3.2	
52	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	11.6	4.9	3.3	
53	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英	(11.9)	4.8	3.2	
54	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	Ⅱ等	褐色	灰石、角閃石	(11.0)	4.6	3.1	
55	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	にごい褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	4.8	2.6	
56	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	にごい褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	4.8	3.8	
57	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	32区	褐色	明褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.1)	5.8	3.3	
58	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	32区	Ⅱ等	褐色、赤色	褐色、赤色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.7)	6.2	3.9
59	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	32区	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(11.0)	5.6	3.5	
60	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	10.5	5.1	3.3	
61	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.4)	4.6	2.3	
62	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	灰白色	灰白色	灰石、白色素			3.5	
63	土師質土器	火鉢	二ノ丸地区	13区	灰褐色	灰褐色	灰石、石英			3.3	
64	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石	5.9	5.0	1.6	
65	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	5.7	5.0	1.6	
66	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	6.6	4.6	1.7	
67	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	にごい褐色	にごい褐色	灰石、石英、角閃石	4.8	5.3	1.8	
68	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	にごい褐色	にごい褐色	灰石、石英、角閃石	6.8	4.8	2.1	
69	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	6.9	5.5	1.7	
70	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.9	1.7	
71	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.3)	5.1	1.6	
72	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(7.2)	5.4	1.8	
73	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	明褐色灰、褐色	明褐色灰、褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.5)	4.6	1.6	
74	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.0)	5.0	1.9	
75	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.4)	5.3	1.7	
76	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	Ⅱ等	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(6.2)	5.4	1.7
77	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.3	2.2	
78	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	明赤褐色	明赤褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	5.4	2.1	
79	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	Ⅱ等	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.0)	5.3	2.1
80	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	17区	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	(6.2)	(5.0)		
81	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	17区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.9)	(4.8)	2.0	
82	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.1)	(4.5)	1.8	
83	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色、赤褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.2)	(4.2)	2.4	
84	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	6.3	4.5	2.2	
85	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	にごい褐色	にごい褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	6.5	4.1	2.0	
86	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	13区	にごい褐色	にごい褐色	灰石、角閃石	6.5	4.2	2.0	
87	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	17区	にごい褐色	にごい褐色	灰石、角閃石	5.5	3.2	2.1	
88	土師質土器	ミニチャウ	二ノ丸地区	13区	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(3.6)	3.0	1.3	

カッコ付は微光輝

第30表 ニノ丸D地区出土遺物観察表(3)

器種 番号	種別	出土地区	調査区	出土層位	文様	形状		色調		法蓋	備考
						凹面	凸面	凹面	凸面		
89	青瓦	二ノ丸地区	17区		唐文三足文 (反書き)	上口:ケズリ、本口: 横筋模、コビキア	ナゲ	暗灰色	暗灰色	(丸玉形) 幅12.5cm、高さ2.5cm、内径15.4cm。 (丸玉形) 瓦厚13.0cm、内径15.4cm。 (丸玉形) 瓦厚13.0cm、内径15.4cm。	軒丸有り
90	青瓦	二ノ丸地区	17区		唐文三足文 (反書き)	ナゲ、ケズリ、本口: 横筋模、コビキア	ナゲ	灰色	灰白色	(丸玉形) 瓦厚13.0cm、内径15.4cm。 (丸玉形) 瓦厚13.0cm、内径15.4cm。 (丸玉形) 瓦厚13.0cm、内径15.4cm。	
91	青瓦	二ノ丸地区	17区		唐文三足文 (反書き)	ナゲ、ケズリ、本口: コビキア	ナゲ	黑色	黑色	(丸玉形) 瓦厚13.0cm、高さ2.5cm、内径15.4cm。 (丸玉形) 瓦厚13.0cm、高さ2.5cm、内径15.4cm。 (丸玉形) 瓦厚13.0cm、高さ2.5cm、内径15.4cm。	無数15
92	丸瓦	二ノ丸地区	22区			ナゲ、ケズリ、本口: 横筋模、コビキア	ナゲ	灰黄色	灰黄色	幅13.0cm、高さ6.5cm、厚さ2.1cm	
93	丸瓦	二ノ丸地区	17区			ナゲ、ケズリ、本口: 横筋模、コビキア	ナゲ	黑色	黑色	長さ24.0cm、厚さ2.0cm、玉隠張表2.0cm	
94	窓戸瓦	二ノ丸地区	17区			ナゲ、ケズリ、本口: コビキア	ナゲ	灰白色	灰白色	長さ24.0cm、幅12.0cm、高さ4.6cm、厚さ2.0cm	
95	窓戸瓦	二ノ丸地区	17区			ナゲ、ケズリ、本口: コビキア	ナゲ	暗灰色	灰白色	長さ29.0cm、幅11.5cm、高さ4.2cm、厚さ2.0cm	
96	窓戸瓦	二ノ丸地区	17区			ナゲ、ケズリ、本口: コビキア	ナゲ	灰白色	灰白色	長さ24.0cm、幅10.5cm、高さ3.1cm、厚さ2.0cm	
97	窓戸瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (一輪)	ナゲ	ナゲ	灰白色	灰白色	長さ25.0cm、幅8.5cm、厚さ2.0cm	
98	新平瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (二輪)	ナゲ	ナゲ	黑色	黑色	(平板) 幅20.0cm、厚さ2.0cm、内径11.0cm、 (丸玉形) 瓦厚12.0cm、内径11.0cm	
99	新平瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (一輪)	ナゲ	ナゲ	黑色	黑色	(平板) 幅25.0cm、谷深5.7cm、 (丸玉形) 瓦厚12.0cm、内径11.0cm	
100	新平瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (一輪)	ナゲ	ナゲ	灰白色	灰白色	(平板) 幅21.0cm、谷深9.1cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径14.0cm	
101	新平瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (二輪)	ナゲ	ナゲ	灰白色	灰白色	(平板) 幅21.0cm、谷深9.1cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径15.0cm	凸面丸れ砂留目
102	新平瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (一輪)	ナゲ	ナゲ	灰白色	灰白色	(平板) 幅21.0cm、谷深9.2cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径15.0cm	凸面丸れ砂留目
103	新平瓦	二ノ丸地区	18区		三葉文・ 馬鹿頭草文 (一輪)	ナゲ	ナゲ	暗灰色	暗灰色	(平板) 幅21.0cm、谷深9.1cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径14.0cm	
104	新平瓦	二ノ丸地区	18区		三葉文・ 馬鹿頭草文	ナゲ	ナゲ	暗灰色	暗灰色	(平板) 幅21.0cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径15.0cm	
105	新平瓦	二ノ丸地区	27区	日場	三葉文・ 馬鹿頭草文	ナゲ	ナゲ	明黄色	灰白色	明黄色	(平板) 幅21.0cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径15.0cm
106	新平瓦	二ノ丸地区	17区		三葉文・ 馬鹿頭草文	ナゲ	ナゲ	灰白色	灰白色	(平板) 幅21.0cm、 (丸玉形) 高さ9.0cm、内径14.0cm	

## (5) E地区の調査

### 概要

E地区は、曲輪7の西側にある東西50m×南北16mの平場中央にあたる。

この地区では、平成7年度から平成8年度にかけて平場の利用実態を確認するために発掘調査を行う。調査区は、平成7年度に1区(40.0m<sup>2</sup>)、2区(40.0m<sup>2</sup>)、3区(45.6m<sup>2</sup>)、4区(17.2m<sup>2</sup>)の4箇所、平成8年度に8-1区(40.0m<sup>2</sup>)、8-2区(11.3m<sup>2</sup>)、8-3区(7.0m<sup>2</sup>)、9区(32.0m<sup>2</sup>)、10区(29.0m<sup>2</sup>)、16区(15.5m<sup>2</sup>)の6箇所、計10箇所の調査区を設けており、主に平場中央の調査を行う。

### 土層

E地区の基本層序は以下のようになる。

I層 耕作土層。

II層 黄褐色土層。拳大から人頭大の礫を多量に含む。15~18世紀初頭頃の遺物包含層。

III層 暗茶褐色土層。

IV層 黄褐色土層。粘質。

### 造構

E地区における調査は平場のはば中央を主体としており、平成7・8年度の発掘調査において階段、石列、礎石群、集石を検出する。ただし、検出層位や共伴遺物について不明な造構が多く、各造構の時期や造構間の時期差を明確に出来ていない。

また、各調査区について以下の注意点がある。

1区では調査区南側において集石を検出したと報告があるが(註1)、集石の検出位置が明確にできず、本書では造構として報告していない。

4区では北東隅で焦土を検出しており、検出範囲については第148図に網掛けを行う。ただし、これ以外の範囲については図面で確認が取れないため、焦土の範囲は拡がる可能性がある。なお、10区についても同様で、調査区西側で検出した焦土の拡がりについては確認できない。

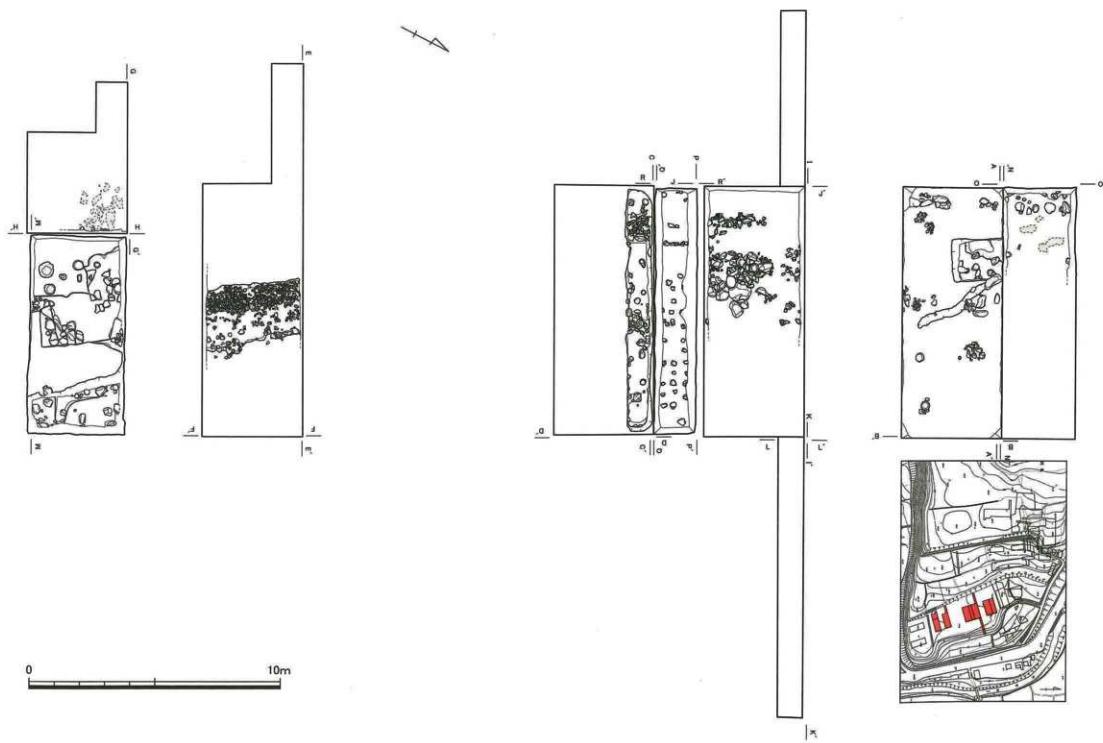
### 階段1(9区)

9区南壁中央付近で4列の踏石列を検出しており、南東側から北西に向けて下る階段を確認する。西側の踏石列は倒壊しており、東側については掘り下げていないため踏石列の両端は確認できない。また、踏石列の南北両側についても、北側では踏石が倒壊のため残存しておらず南側は東側と同様に掘り下げておらず、階段がどこへ続くか明らかに出来ていない。

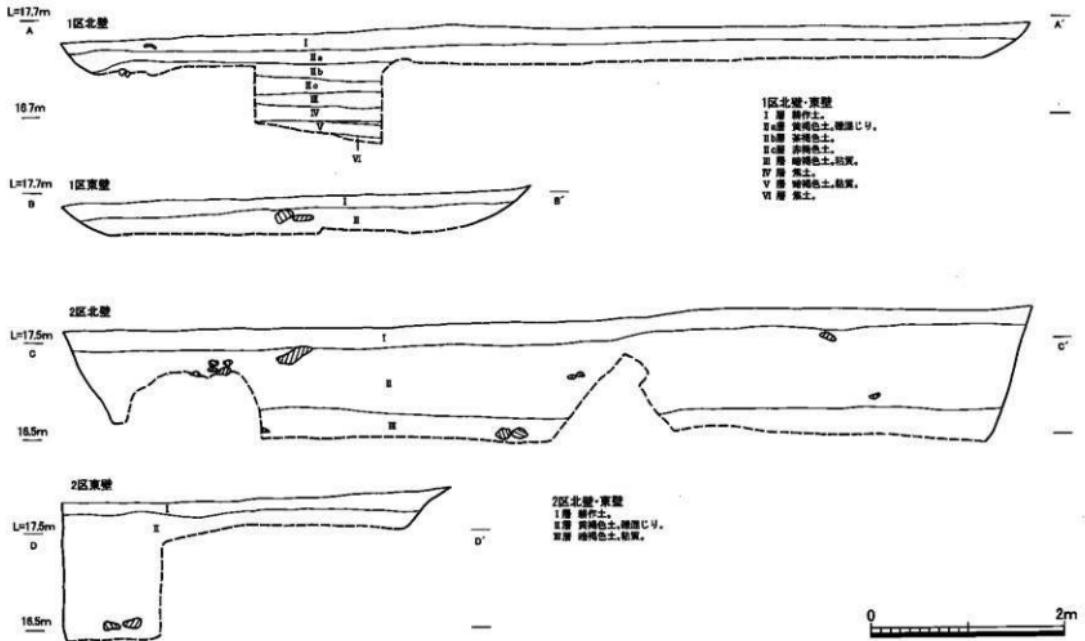
踏石列の検出幅は1.8mで、踏石列間隔0.4m、高低差約0.1mと、ほかの地区で検出した階段と比較すると踏石列の間隔が狭く緩やかな階段であったと推測される。踏石には、幅30~60cmの不整形な平石を主に用いており、規格性はみられない。

### 石列2(9区)

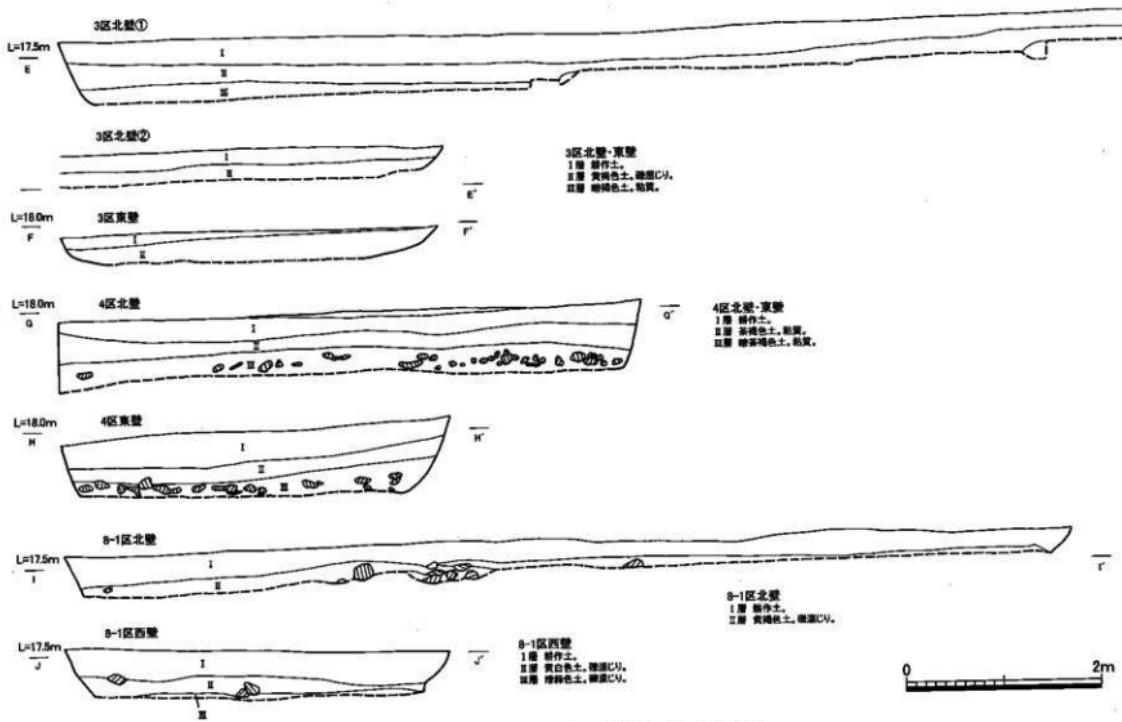
9区南西隅で検出した敷石列で、検出長1.9mを測る。石列は一旦南東側から南西へ向けて直線状



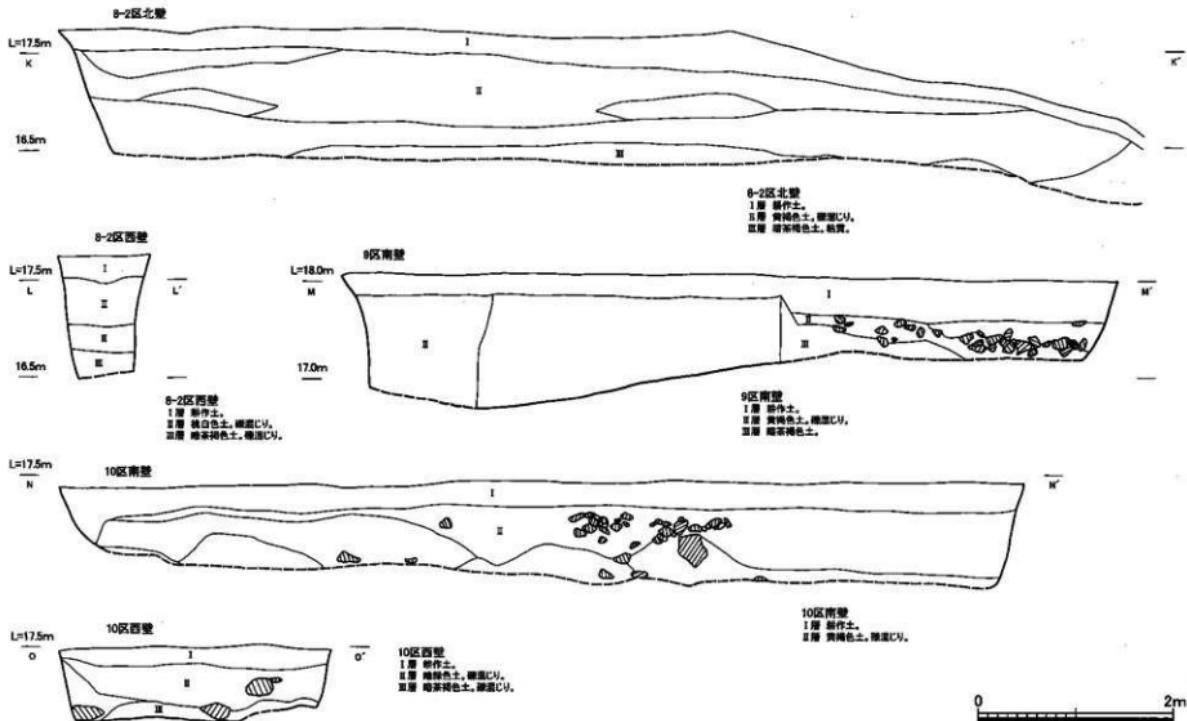
第148図 ニノ丸E地区遺構配置図 (S=1/150)



第149図 二ノ丸E地区土層断面図① (S=1/50)



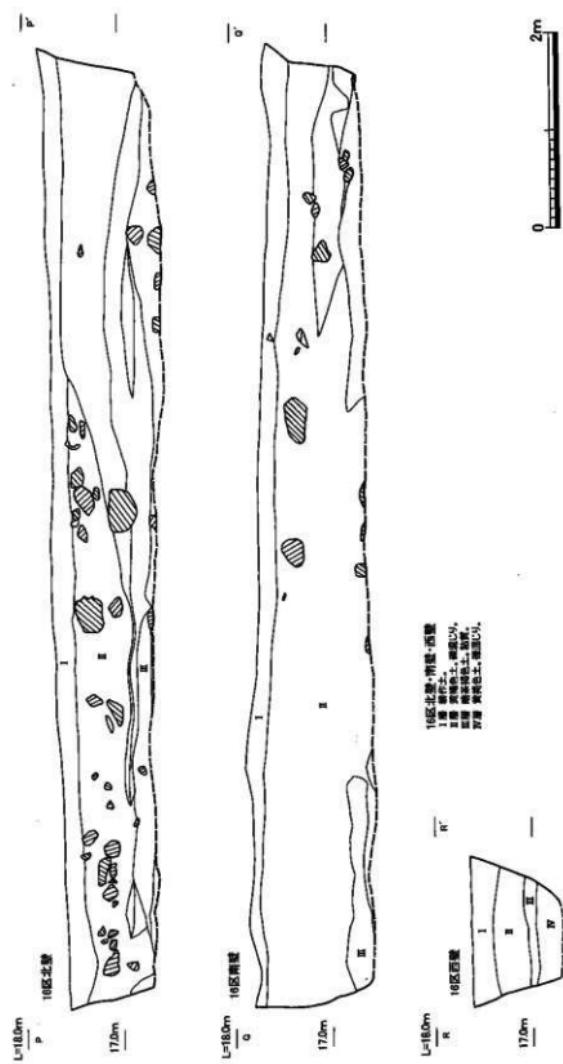
第150図 ニノ九E地区土層断面図② (S=1/50)

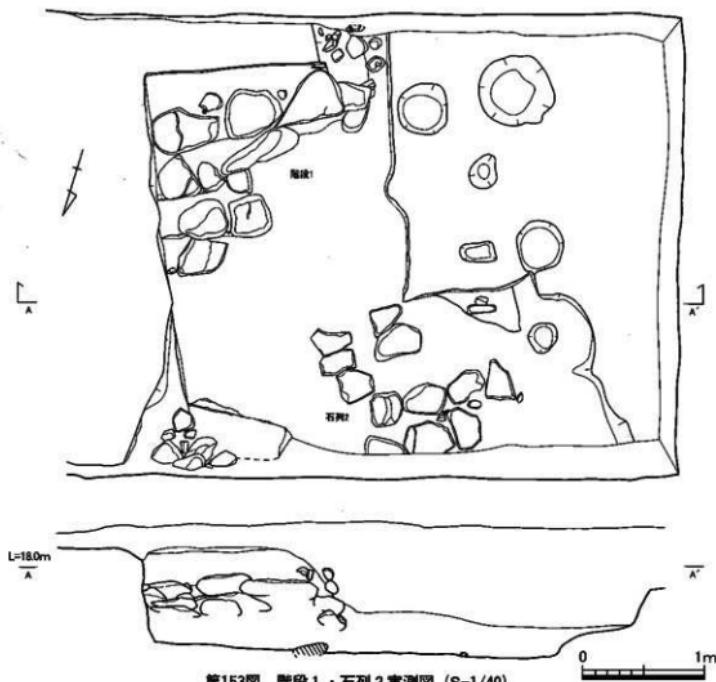


第151図 ニノ丸E地区土層断面図③ (S=1/50)

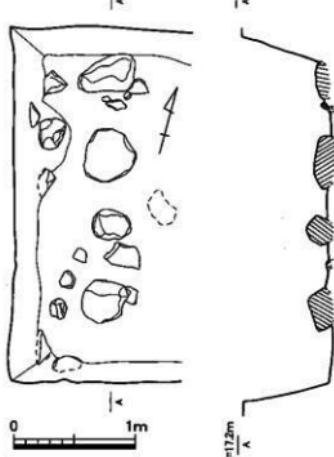
— 216 —

16区之北  
16区之南  
16区西壁  
16区东壁  
16区西北  
16区西南  
16区东北  
16区东南  
16区西北  
16区西南  
16区东北  
16区东南





第153図 階段1・石列2実測図 ( $S=1/40$ )

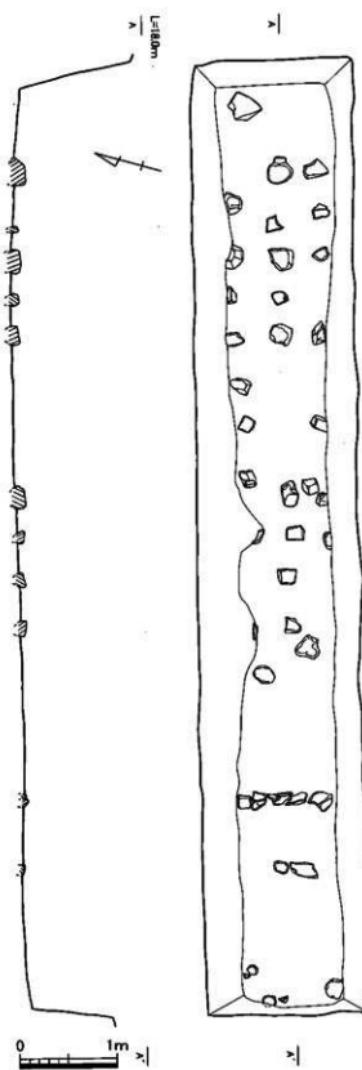


第154図 石列3実測図 ( $S=1/40$ )

に石が並ぶが、途中で西に向けて屈曲する。但し、石列の石は大部分が失われており、9区西側にある4区からは検出していなかったため、拡がりは把握できていない。

東西に延びる2列については石上面の高さがほぼ揃い平坦であるが、南北に延びる石列は南から北側に向けて緩やかな傾斜となる。また、南北方向の石列は階段1へ向けて延びることからこれに統く可能性もあるが、階段1と石列2間の堆積状況が確認できず、遺構間の関係は明らかに出来ない。

石材には、長軸30~40cm、短軸20~30cmの長方形の平石が用いられる。



第155図 紋石群1実測図 (S=1/50)

### 石列3 (10区)

10区西壁に平行して、4石の石が南北方向に直線状に並ぶ。石は長軸が30~50cm、短軸が20~40cmで大きさ、形状は不揃だが、石上面の高さが揃うように据えられており同一の造構を形成したものと推測される。石の間隔は約0.6mを測る。

石列より東側では同様の石は確認されておらず、焦土が拡がる。10区南側にある1区からも石列は確認されておらず、石列の西側、北側は調査されていないため石列の拡がりは把握できない。

### 礎石群1 (16区)

16区東側では、幅20cm前後の正方形の平石を多く検出する。このうち、トレンチ中央では五つの石が東西方向に並んでおり、石の上面は標高16.80~16.85m前後で、平坦になるよう据えられる。石の間隔は、東より0.9m、0.8m、1.65m、0.85mを測り、建物跡の礎石であった可能性がある。

五つのうち西端の石の両側からは大きさ、石上面の標高共に揃う平石を検出する。主軸がわずかにずれるため、異なる並びであったと思われる。石の間隔は1.0mを測る。

このほか直線状に並ぶ石は多数確認できるが、石上面の標高が不明のため、本書では石列として報告していない。また、北側の8-1区では同じレベルまで掘り下げていないため、北側への拡がりについては未確認である。南側の2区では、幅1.0mの断ち割りを1.4mの深さまで掘り下げており、底の標高は16.4mと16区とはほぼ同じ高さとなる。調査区中央では、16区の石と並ぶ石が検出されているが、石上面の標高が不明のため比較できない。また、2区調査時には石を掘り飛ばしている可能性もあり、南側についても石列の拡がりについては今後の課題である。



第156図 柱穴列1 実測図 (S=1/50)

#### 柱穴列1 (1区)

1区南東隅では柱穴を2基検出しており、東西方向に並ぶ。径は0.35m、間隔は1.9mを測り、第2層黄褐色礫土層から掘り込まれる。

#### 柱穴列2 (2区)

2区では北側に南北幅1.0m、深さ1.4mの断ち割りを入れるが、この断ち割りにおいて東西方向にほぼ直線上に並ぶ4基の柱穴を検出する。柱穴の径は0.3~0.4mで間隔は東より1.93m、2.02m、1.68mを測り、第3層暗褐色土層から掘りこまれる。



第157図 柱穴列2 実測図 (S=1/50)

#### 集石1 (3区)

3区中央付近で、第2層黄褐色礫土層から集石を検出する。石は拳大から人頭大の礫で、瓦が含まれる。

#### 集石3 (8-1区)

8-1区西側において、第2層黄褐色礫土層から集石を検出する。3区で検出した集石より大きな石塊を多く含むが、3区同様に石の間から瓦を検出している。

#### 〔註釈〕

(註1) 木村岳士編 1998 『日野江城跡』 北有馬町  
文化財発掘調査報告書第2集 北有馬町教育委員会

## 遺物

1～3、5・6は青磁である。1・2は外面に蓮弁文を施す碗口縁部である。3は底部の資料で、見込みは胸部の立ち上がり部分との境に段を持ち、高台疊付まで釉が掛かる。

5は菊花皿の口縁部の資料である。内外面ともに蓮弁文が入り、非常に薄手の作りで、型押しであろうか。6は皿の資料と思われ、口縁部は折れ縁となる。内面に割花文が入る。

7～17は白磁である。7は碗型の資料で、疊付部分は釉剥ぎを施す。8・10・11・12・13は端反の口縁部を持つ皿である。13はやや外反というより折れ縁に近い。9は外反する皿の口縁部である。14・17は皿の底部の資料である。いずれも高台疊付部分には釉剥ぎを施し、わずかに砂粒の付着が認められる。

18～36は青花の資料である。18～24は碗の資料である。18は外傾する口縁部を持ち、内外面ともに2条の界線を入れ、外面にはさらに唐草文を描く。19も同様の器形で、内外面ともに2条の界線を入れ、外面には唐草文を入れる。20は口縁部が外傾し、内外面に1条の界線を入れ、外面には草花文を描く。21は粗製で、内外面口縁部に太線描きの界線を入れる。22は直線的に外傾して立ち上がる口縁部で、渦巻文を外面に描く。23は口縁部が端反となる碗で、口縁部の内外面には1条ずつ界線を入れ、外面胸部には樹木と小鳥を描く。24は底部の資料で、疊付は釉剥ぎを施し、砂粒の付着が認められる。高台内には字款を入れ、内外面に文様を描く。

25～36は皿の資料である。25は口縁部内外に1条の界線を入れ、見込みには2条の界線を入れてその中に文様を描くようである。26は疊付に釉剥ぎを施し、内面見込みに2重の界線を入れてその中に文様を描く。疊付付近には多量の砂粒が付着する。27は外傾して直線的に立ち上がる口縁部であるが、釉流れによる文様のにじみが著しい。28は口縁部の内外面に1条ずつの界線を入れる。

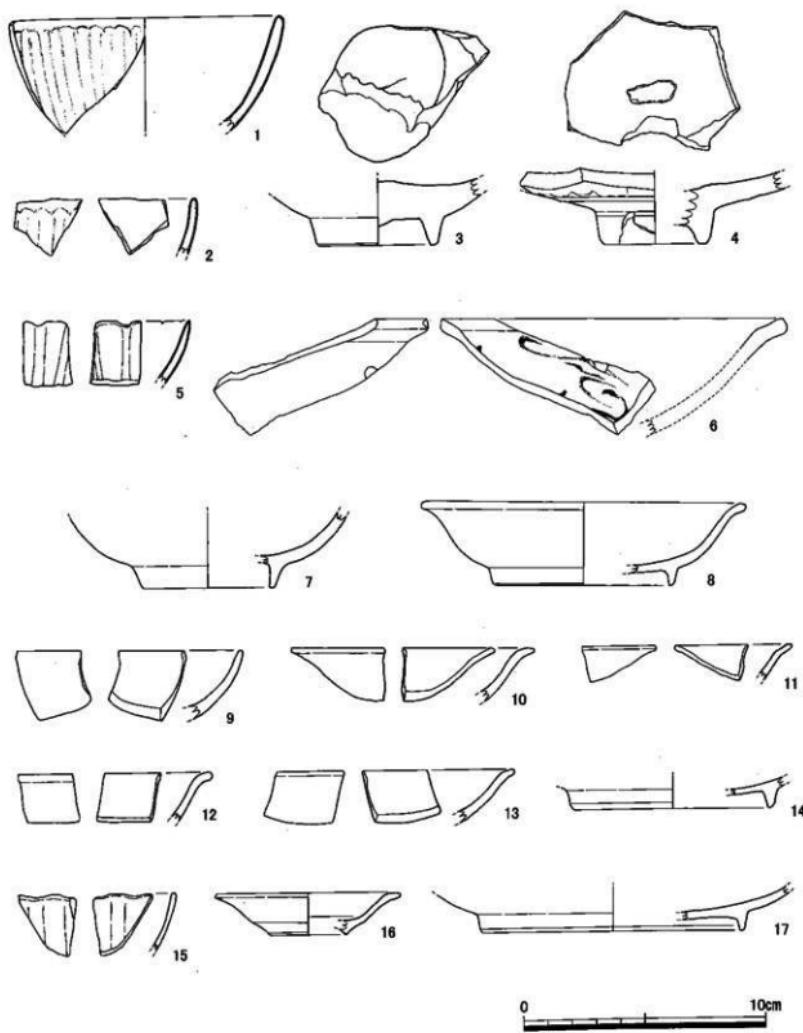
29～31は端反の口縁部を持つ皿である。29は外面が無文で、内面には口縁部と見込みに2条ずつの界線を入れ、見込みに文様を描く。30は粗製品で、発色が悪く、内外面に入る界線は太い。31も粗製品で発色が悪く、見込み部分は蛇の目状の釉剥ぎが施されていたものと思われる。界線は太線描きである。

32は底部の資料で、疊付部分は釉剥ぎを施す。高台内には字款が入るが、残りが悪く判読できない。内面見込みには2重の界線を施し、中に虫と果実を描く。33は底部から腰の張る胸部に掛けての資料で、高台は疊付部分の釉剥ぎを施す。疊付部分には砂粒の付着が認められる。34は厚手で大型の皿の胸部と思われる。粗製で釉の発色は悪く、貢入が細かく入る。胎土は陶質である。文様は内外面ともに太線である。35は大型の鉢皿の口縁部付近の資料で、内面鉢の部分には青海波文を入れる。

36は大型の五彩皿の資料で、外面には多量の砂粒の付着がある。内面には絵付けが施されていたものと思われ、その痕跡が残る。

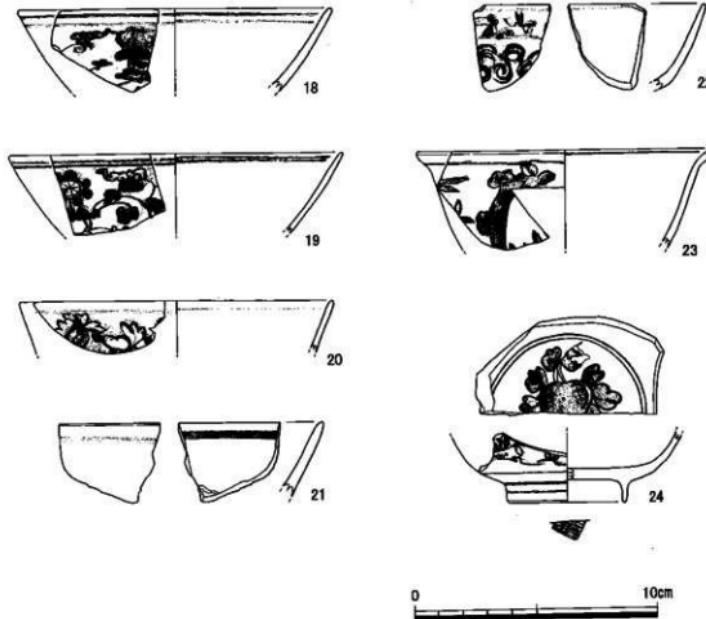
4、37～42は陶質の資料である。37は外面には釉が掛からず、内面には褐色釉が掛かる。38は壺もしくは壺の底部で、分厚い器壁である。39・40は擂鉢の資料である。41は皿口縁部で、唐津焼であろうか。4・42は灰色の釉が掛かる皿の資料で、いずれも見込みに目痕が残る。

43～51は瓦質土器である。43～45は火鉢の資料である。43は八角形の火鉢で、口縁部は断面「L」字となり、口縁部下に突帯を巡らせてスタンプ文を施す。44は外面に突帯を1条貼り付ける。内面には刷毛目調整が顕著に残る。内外面ともに燃しが掛かる。45は脚部である。46は焙烙である。内外面



第158図 ニノ丸E地区出土の遺物① (S=1/2)

ともに焼しが掛かり、外面には炭化物が付着する。47は型押しによる文様がある破片資料である。  
48・49・51は擂鉢である。48は口縁部でやや器壁を厚くし、内面には2方向のクシ目を入れる。50



第159図 ニノ丸E地区出土の遺物② (S=1/2)

は捏鉢で、内面には刷毛目調整が横方向に入る。

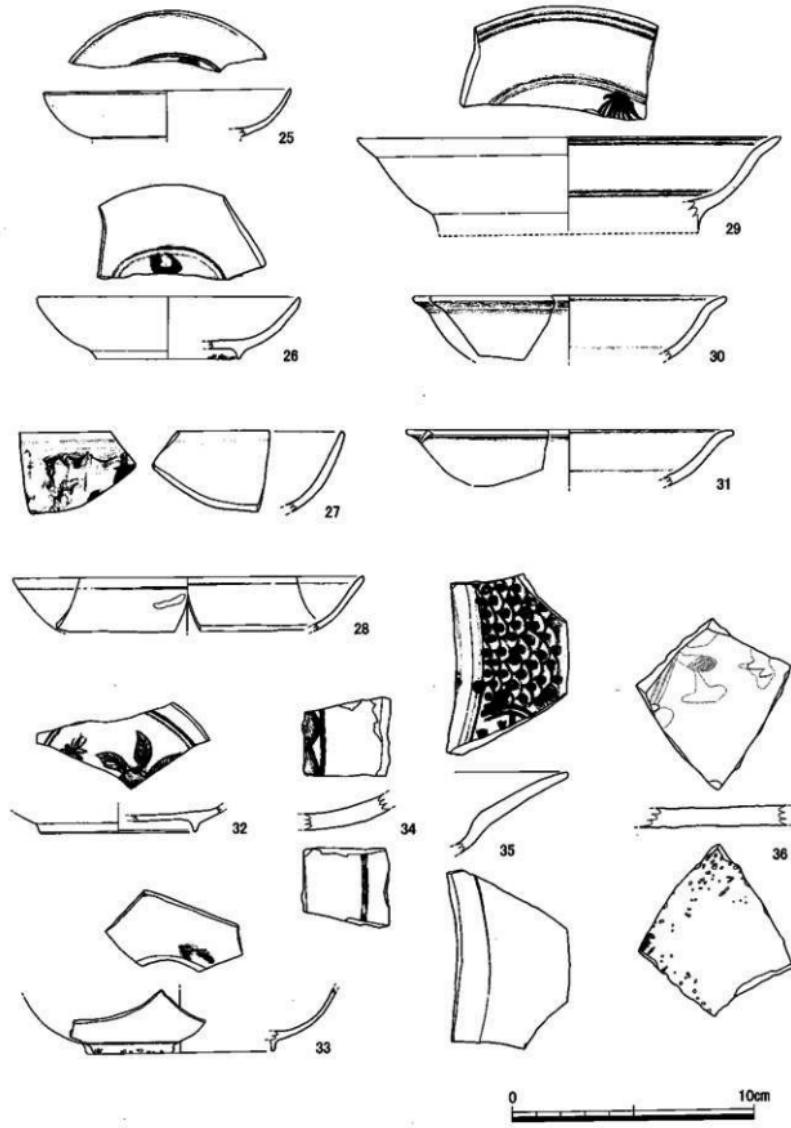
52~76は土師質土器である。52は壊である。細めの粘土柱からの切り離しで、糸切痕は粗い。体部は内面に見込みを作らず直線的に大きく開いて立ち上がるが、立ち上がりすぐのところで段をひとつ作る。

57~58は皿である。いずれも口縁部や体部に炭化物の付着が認められる。54は器面の状態が悪く、糸切痕の観察はできないが、あとはすべて底面に細かい糸切痕が残る。53は糸切を行った後に底部輪郭付近にケズリ調整を施している。

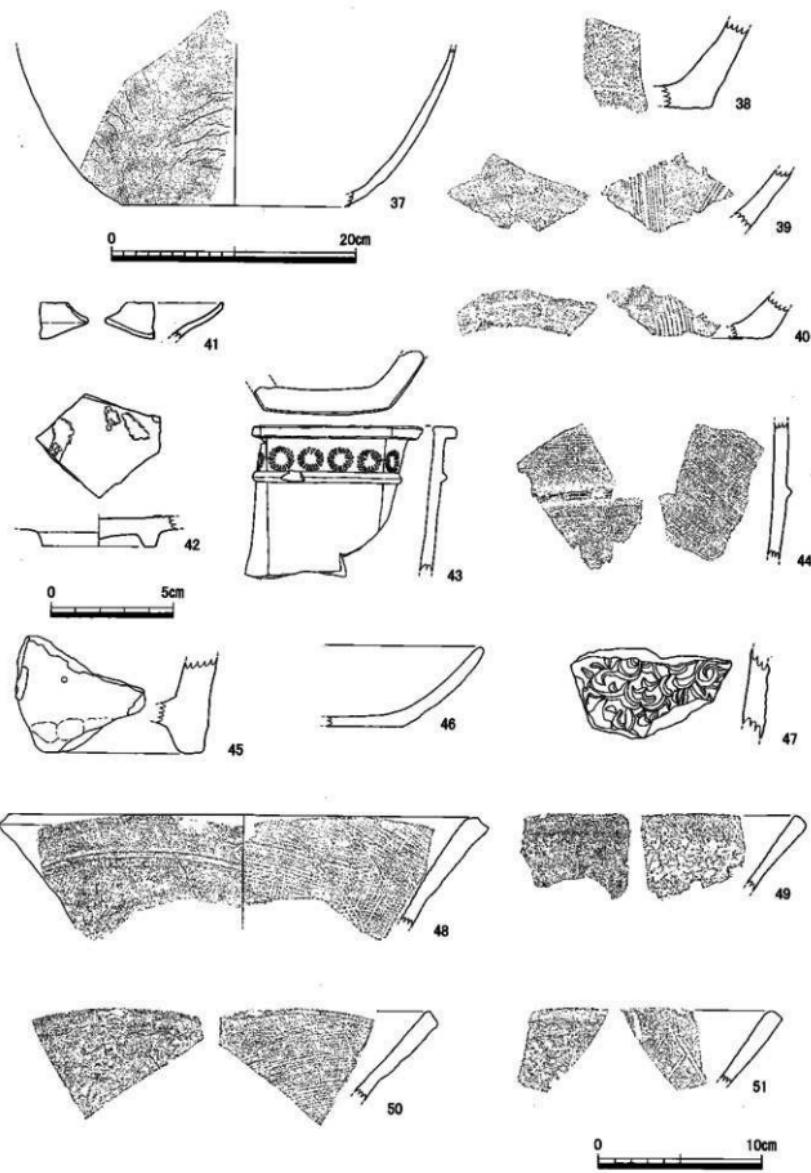
59~72は小皿である。59~67は底面に粗い糸切痕が観察される。59・60は胎土に赤色粒子を多く含む。また、63~65は胎土に細かい砂粒を非常に多く含む。59・62・64・70は口縁部に炭化物が付着する。また、69は二次的被熱のためか、全体が黒色化している。71・72は黄褐色系の色調で、見込み中央が低く尖り、内面口縁部下に1条の調整痕が残る。

73・74はミニチュア土器である。73の糸切痕は粗く、74の糸切痕はやや細かい。74は赤色粒子を多く含む胎土である。

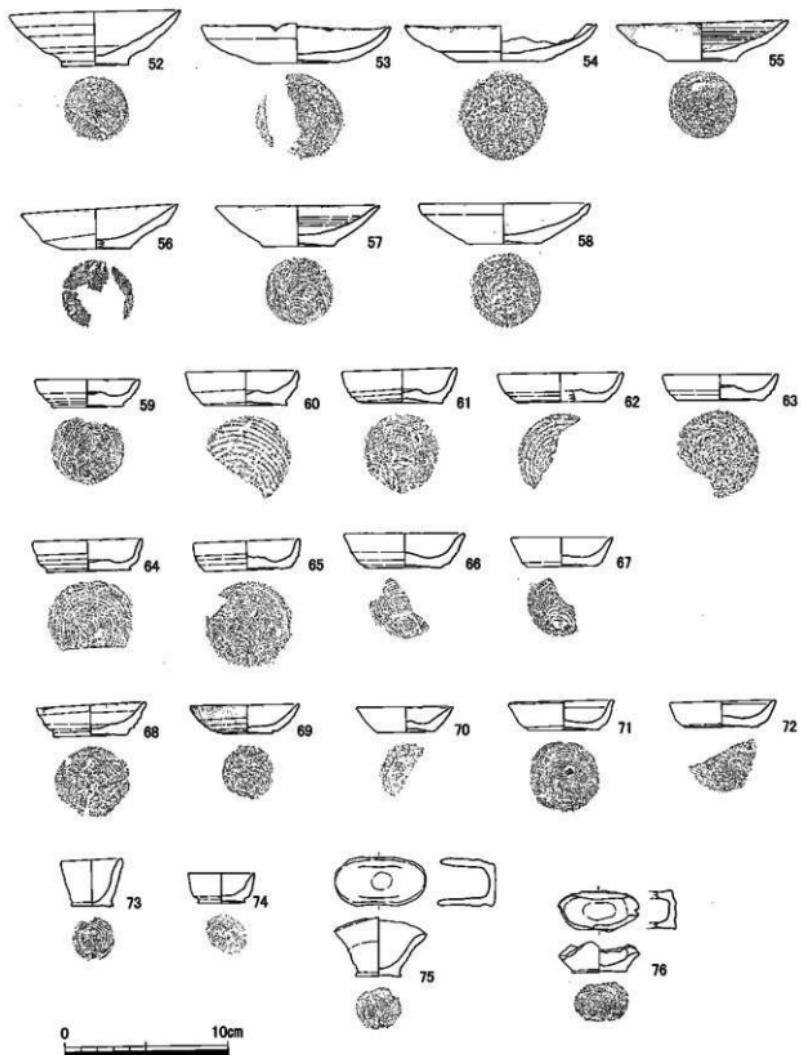
75・76は耳皿で、どちらもミニチュア土器からの作り出しである。75は底面の糸切痕は細かく、やや深めのミニチュア土器を使う。76の底面は糸切であるが、成形時に押さえつけたために消えている。



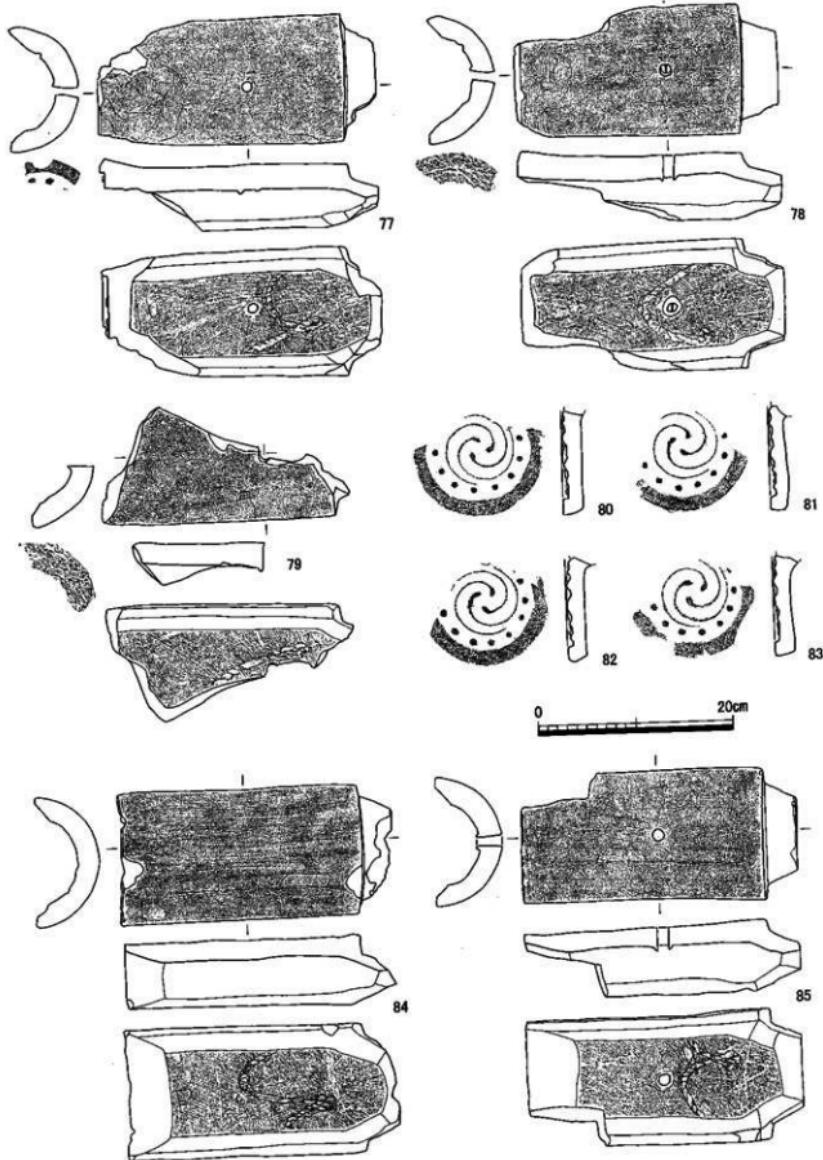
第160図 ニノ丸E地区出土の遺物③ (S=1/2)



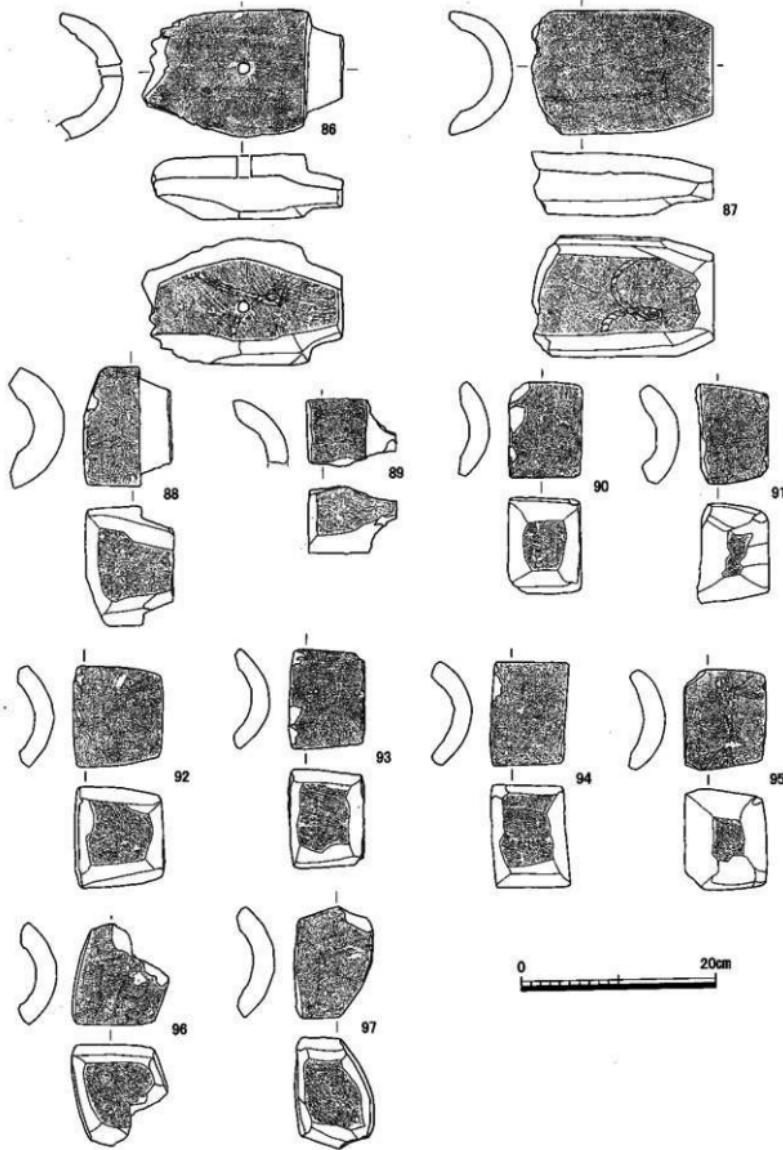
第161図 ニノ丸E地区出土の遺物④ (37: S=1/4, 41~43・45~47: S=1/2, その他: S=1/3)



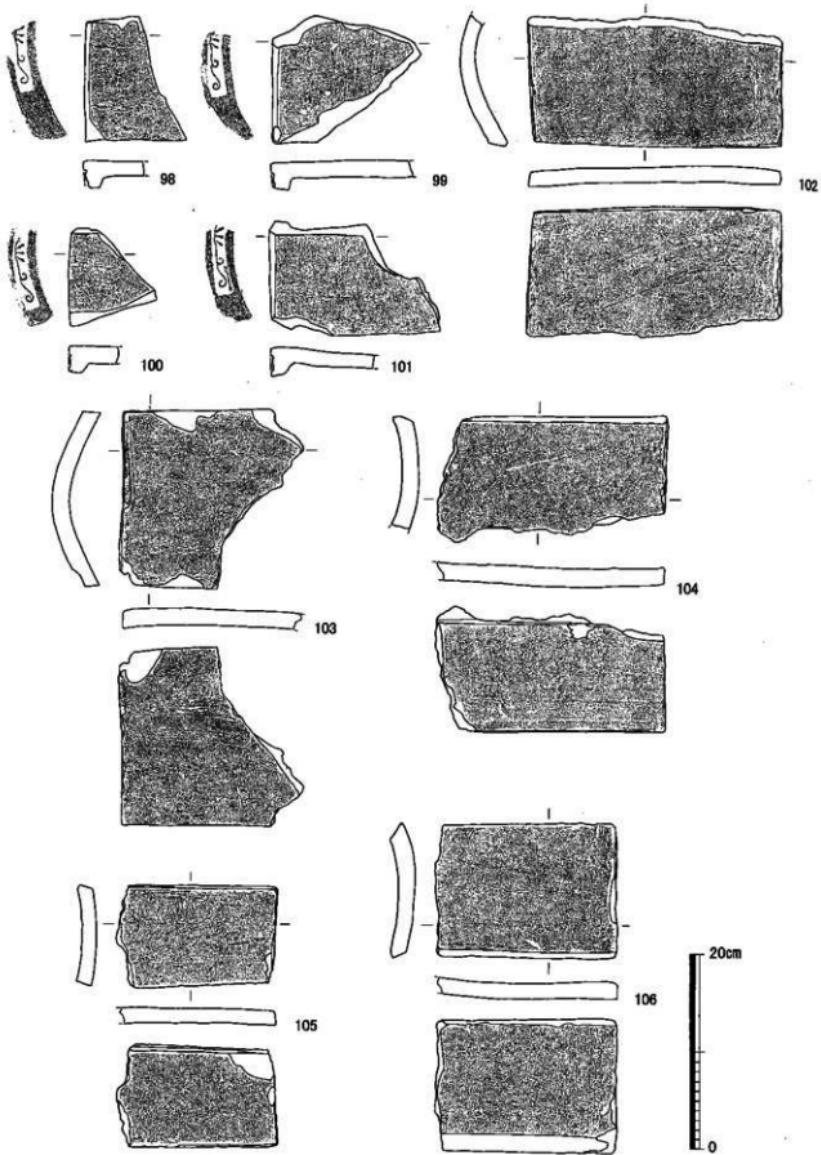
第162図 ニノ丸E地区出土の遺物⑤ (S=1/3)



第163図 ニノ九E地区出土の遺物⑥ (S=1/5)



第164図 ニノ丸E地区出土の遺物⑦ (S=1/5)



第165図 ニノ丸E地区出土の遺物⑧ (S=1/5)

77~106は瓦の資料である。77~83は軒丸瓦である。77~79は凹面にコビキA痕、布目、吊り紐痕を残す。77は瓦当部をわずかに残し、釘穴が開く。78・79は瓦当面を欠損し、剥離面にはクシ目が觀察できる。80~83は瓦当部の資料で、いずれも巴文と珠文を持つ。丸瓦部との剥離面にはクシ目が残る。

84~87は丸瓦である。84~86は玉縁のつくもの、87は玉縁がつかずほまるものである。いずれも凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕を残す。87は離れ砂が付着する。

88~97は面戸瓦である。いずれも凹面にはコビキA痕を残し、周縁には面取りを施す。92・94・96以外は布目も残る。88・89は玉縁部を利用する。97は斜方向に切断する。90・94の凹面には離れ砂の付着が認められる。

98~101は軒平瓦の資料である。いずれも三葉文と唐草文が文様として入る。102・103は平瓦である。102の凹面には離れ砂が付着する。103~106は熨斗瓦である。

第31表 ニノ丸E地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	碗	二ノ丸地区	1区	Ⅱ層	復元口径11.0cm
2	青磁	碗	二ノ丸地区	16区	—	
3	青磁	碗	二ノ丸地区	1区	—	復元底径4.8cm
4	陶器	皿	二ノ丸地区	10区	—	復元底径4.1cm
5	青磁	皿	二ノ丸地区	2区	—	
6	青磁	皿	二ノ丸地区	1区	—	
7	白磁	碗	二ノ丸地区	10区	—	復元底径5.2cm
8	白磁	皿	二ノ丸地区	9区	—	復元口径13.0cm、復元底径7.0cm、器高3.4cm
9	白磁	皿	二ノ丸地区	8区	Ⅱ層	
10	白磁	皿	二ノ丸地区	10区	—	
11	白磁	皿	二ノ丸地区	4区	Ⅱ層	
12	白磁	皿	二ノ丸地区	10区	—	
13	白磁	皿	二ノ丸地区	10区	—	
14	白磁	皿	二ノ丸地区	9区	—	復元底径5.0cm
15	白磁	皿	二ノ丸地区	10区	—	
16	白磁	皿	二ノ丸地区	8区	Ⅱ層	復元口径7.4cm、復元底径3.1cm、器高1.7cm
17	白磁	皿	二ノ丸地区	10区	—	復元底径10.7cm
18	青花	碗	二ノ丸地区	10区	—	復元口径12.8cm
19	青花	碗	二ノ丸地区	1区	Ⅱ層	復元口径13.5cm
20	青花	碗	二ノ丸地区	10区	—	復元口径12.8cm
21	青花	碗	二ノ丸地区	10区	—	
22	青花	碗	二ノ丸地区	1区	Ⅱ層	
23	青花	碗	二ノ丸地区	9区	—	復元口径12.0cm
24	青花	碗	二ノ丸地区	9区	—	復元底径6.6cm
25	青花	皿	二ノ丸地区	10区	—	復元口径10.1cm
26	青花	皿	二ノ丸地区	9区	—	復元口径10.7cm、復元底径5.9cm、器高2.6cm
27	青花	皿	二ノ丸地区	2区	Ⅱ層	
28	青花	皿	二ノ丸地区	10区	—	復元口径14.2cm
29	青花	皿	二ノ丸地区	8区	Ⅱ層	復元口径17.5cm
30	青花	皿	二ノ丸地区	9区	—	復元口径12.7cm
31	青花	皿	二ノ丸地区	9区	—	復元口径13.4cm
32	青花	皿	二ノ丸地区	16区	—	復元底径5.3cm
33	青花	皿	二ノ丸地区	10区	—	復元底径7.5cm
34	青花	皿	二ノ丸地区	2区	Ⅱ層	
35	青花	皿	二ノ丸地区	9区	—	
36	五形	皿	二ノ丸地区	10区	—	
37	陶器	—	二ノ丸地区	2区	Ⅳ層	復元底径18.7cm
38	陶器	—	二ノ丸地区	4区	—	
39	陶器	擂钵	二ノ丸地区	2区	—	
40	陶器	擂钵	二ノ丸地区	10区	Ⅱ層	
41	陶器	皿	二ノ丸地区	2区	Ⅱ層	
42	陶器	皿	二ノ丸地区	10区	—	復元底径4.7cm

第32表 ニノ丸E地区出土遺物観察表②

番号	種別	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	性状 (cm)		
						外面	内面	底面		口径	底径	厚さ
43	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	4区	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子			
44	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	2区	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子			
45	瓦質土器	火鉢	二ノ丸地区	10区	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	黄褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子			
46	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	10区	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	黄石			
47	瓦質土器	大壺	二ノ丸地区	2区	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	黄石、石英			
48	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	10区	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	黄石			
49	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	1区	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	黄石			
50	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	1区	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	黄石、角閃石、赤色粒子			
51	瓦質土器	壺	二ノ丸地区	10区	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	黄石、2~5mmの砂粒			
52	土質實土器	壺	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	褐色	にぶい褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.3)	5.1	2.4
53	土質實土器	壺	二ノ丸地区	10区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	11.6	5.5	2.2
54	土質實土器	壺	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(19.5)	(4.1)	(2.3)
55	土質實土器	壺	二ノ丸地区	10区	褐色、黒褐色	褐色、黒褐色	褐色、黒褐色	褐色、黒褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	19.4	4.3	2.5
56	土質實土器	壺	二ノ丸地区	2区	亞褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	9.5	4.2	2.7
57	土質實土器	壺	二ノ丸地区	10区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(9.9)	4.3	1.5
58	土質實土器	壺	二ノ丸地区	8区	褐色、黒褐色	褐色、黒褐色	褐色、黒褐色	褐色、黒褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.3)	4.5	2.5
59	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.9)	4.8	2.2
60	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	10区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	4.9	2.1
61	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	6.9	4.9	2.3
62	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	4区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	(7.5)	(5.3)	1.8
63	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	10区	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	黄石、石英、角閃石	(6.0)	4.3	1.8
64	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	(6.6)	5.2	1.9
65	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.3)	5.4	1.8
66	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	10区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(7.3)	(4.5)	2.1
67	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	10区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英	(6.1)	(4.3)	1.8
68	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	2区	亚褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.4	2.0
69	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	10区	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黄石、石英	6.5	2.9	1.9
70	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	2区	亚褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.9)	(3.4)	1.5
71	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	8区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	黄石、角閃石	8.3	4.3	1.9
72	土質實土器	小壺	二ノ丸地区	10区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	黄石、角閃石、赤色粒子	6.4	4.4	1.6
73	土質實土器	ミニチャコ	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	黄石、石英、角閃石	3.6	2.5	2.9
74	土質實土器	ミニチャコ	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	赤色粒子	(3.9)	2.8	1.8
75	土質實土器	耳皿	二ノ丸地区	10区	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	黄石、石英、角閃石	5.6	2.6	2.6
76	土質實土器	耳皿	二ノ丸地区	8区	褐色	褐色	褐色	褐色	赤色粒子	4.9	3.3	1.8

カッコ付は復元値

第33表 ニノ丸E地区出土遺物観察表③

通報番号	種類	出土地区	調査区	出土層位	文様	表面			色調			法量	備考
						西面	西面	西面	西面	西面	西面		
						ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色		
77	新丸瓦	二ノ丸地区	4区		模文							(丸瓦部) 幅9.75cm、幅11.1cm、高さ7.2cm、 厚さ2.6cm。(台面部) 周縁幅1.5cm、 周縁高さ5cm、内底高さ3cm	新丸瓦
78	新丸瓦	二ノ丸地区	5区			ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	(丸瓦部) 幅13.3cm、高さ6.8cm、厚さ2.4cm、 周縁幅1.5cm、周縁高さ3cm	新丸瓦
79	新丸瓦	二ノ丸地区	6区			ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	(丸瓦部) 幅2.3cm	
80	新丸瓦	二ノ丸地区	4区	新丸三巴文 (左巻)	(五出筋) ナメ							(五出筋) 幅11.8cm、周縁幅1.0cm、 周縁高さ5cm、内底高さ3cm	
81	新丸瓦	二ノ丸地区	5区	下層	新丸三巴文 (左巻)	(五出筋) ナメ						(五出筋) 周縁幅1.4cm、周縁高さ6cm、 内底高さ5.7cm	
82	新丸瓦	二ノ丸地区	1区		新丸三巴文 (左巻)	(五出筋) ナメ						(五出筋) 周縁幅1.6cm、周縁高さ6cm、 内底高さ7cm	
83	新丸瓦	二ノ丸地区	6区	下層	新丸三巴文 (左巻)	(五出筋) ナメ						(五出筋) 周縁幅1.4cm、周縁高さ6cm、 内底高さ6.7cm	
84	丸瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	長さ24.6cm、幅13.4cm、高さ6.8cm、厚さ2.1cm、 周縁幅2.2cm	新丸瓦
85	丸瓦	二ノ丸地区	2区			ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ24.7cm、幅13.5cm、高さ7.0cm、厚さ2.7cm、 周縁幅2.3cm	新丸瓦
86	丸瓦	二ノ丸地区	2区	表土		ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	長さ24cm、周縁幅2.3cm	新丸瓦
87	丸瓦	二ノ丸地区	1区			ナメ、ケズリ、布目、 高級模、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅12.6cm、高さ6.5cm、厚さ2.0cm	西面織れ模擬瓦
88	面戸瓦	二ノ丸地区	9区			ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ35.0cm、幅12.3cm、高さ5.8cm、厚さ3.1cm	
89	面戸瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ29.0cm、厚さ2.0cm	
90	面戸瓦	二ノ丸地区	9区	西		ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	長さ27.4cm、幅8.8cm、高さ3.2cm、厚さ2.0cm	
91	面戸瓦	二ノ丸地区	9区	西		ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ27.4cm、幅10.5cm、高さ4.0cm、厚さ2.4cm	
92	面戸瓦	二ノ丸地区	9区	下層		ナメ、ケズリ、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ31cm、幅10.4cm、高さ3.8cm、厚さ2.0cm	
93	面戸瓦	二ノ丸地区	9区			ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ37.0cm、幅10.2cm、高さ3.6cm、厚さ2.0cm	
94	面戸瓦	二ノ丸地区	1区			ナメ、ケズリ、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ37.0cm、幅10.4cm、高さ4.1cm、厚さ2.0cm	
95	面戸瓦	二ノ丸地区	9区	西		ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ38.0cm、幅10.3cm、高さ3.8cm、厚さ2.0cm	
96	面戸瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ、ケズリ、コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ35.0cm、幅10.4cm、高さ4.0cm、厚さ2.0cm	
97	面戸瓦	二ノ丸地区	8区	下層		ナメ、ケズリ、布目、 コビキ人	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	長さ37.0cm、幅11.0cm、高さ3.8cm、厚さ2.0cm	
98	斜平瓦	二ノ丸地区	9区		上端模文 (一巻) 三葉文 (二巻) 内側模文 (一巻)	ナメ	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	(平筋) 幅51.5cm、厚さ3.5cm、 (丸瓦) 高さ22.0cm、内底高さ1.5cm	
99	斜平瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	(平筋) 高さ16cm、厚さ3.4cm、 (丸瓦) 高さ22.0cm、内底高さ1.4cm	
100	斜平瓦	二ノ丸地区	9区	西		ナメ	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	(平筋) 幅51.5cm、厚さ3.4cm、 (丸瓦) 高さ22.0cm、内底高さ1.4cm	
101	斜平瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	(平筋) 幅51.5cm、厚さ3.0cm、 (丸瓦) 高さ23.0cm、内底高さ1.5cm	
102	平瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ	ナメ	黑色	黑色	黑色	黑色	長さ36.0cm、厚さ1.0cm、分厚0.4cm	
103	平瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅12.0cm、厚さ1.0cm、分厚0.3cm	
104	斜平瓦	二ノ丸地区	1区			ナメ	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅12.0cm、高さ3.0cm、厚さ1.0cm	
105	斜平瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅10.0cm、高さ3.0cm、厚さ1.5cm	
106	更斗瓦	二ノ丸地区	4区			ナメ	ナメ	灰色	灰色	灰色	灰色	幅10.0cm、高さ3.0cm、厚さ1.0cm	

## (6) F地区の調査

### 概要

F地区は曲輪7の南端にある東西25m、南北17mの平場にあたり、北側に位置するE地区とは1.5mほど高低差がある。E地区とF地区は現在東西に延びる石垣で区切られているが、この石垣は近年の造成と思われる。

平場の利用状況を確認するため、平成7年度に5区(40.0m<sup>2</sup>)と6区(40.0m<sup>2</sup>)の2箇所の調査区を設け発掘調査を行う。

### 土層

F地区の基本層序は以下のようになる。

I層 耕作土層

II層 碾土層(15~18世紀初頭頃の遺物包含層)

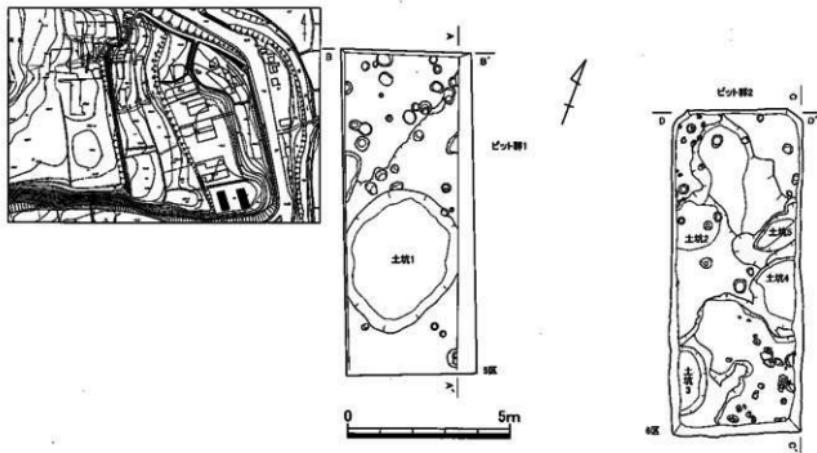
III層 暗茶褐色土層

### 造構

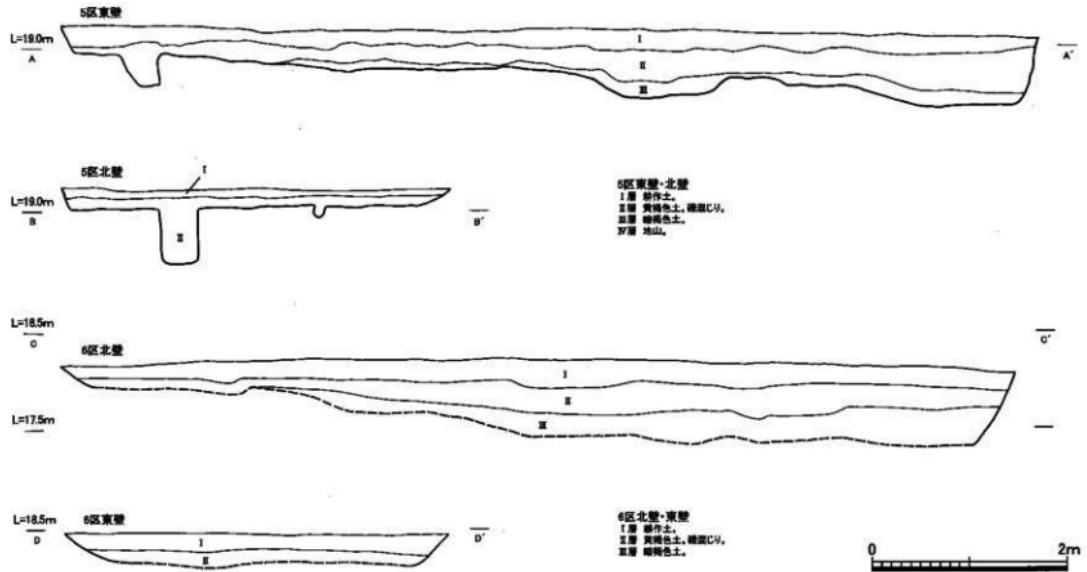
5・6区から、それぞれピット群と土坑を検出する。

### ピット群1(5区)

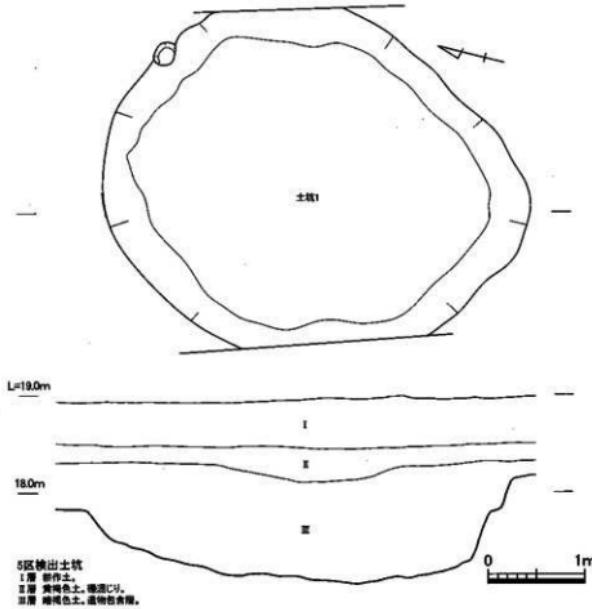
5区北側で検出したピット群で、径は20~40cmの円形を呈する。深さはおよそ10cm以下、20cm程度、40cm前後の三つに分かれるが、深さによってピットを分けても、並びに規則性はみられない。5区で検出したピットは全てIII層下の地山を掘り込む。



第166図 ニノ丸F地区造構配置図 (S=1/150)



第167図 二ノ丸F地区土層断面図 (S=1/50)



第168図 土坑1 対測図 (S=1/50)

#### ピット群2（6区）

6区で検出したピット群で、径は0.2~0.3mの円形を呈する。ピットの径はほぼ揃っており、第3層暗褐色土層を掘り込む。ピット群2において柱筋は確認できておらず、ピット群1との並びについても同様である。

#### 土坑1（5区）

5区南側において主軸を南北方向にとり、長軸4.3m、短軸3.4mを測る楕円形の土坑を検出する。断面はU字形をなしており、地山を掘り込む。

土坑からは213点の遺物が出土しており、このうち壺が109点、灯明皿73点と大部分を土師質土器が占める。瓦は検出していない。

土坑の性格は明らかでないが、大量の遺物が検出されており廃棄土坑と思われる。

#### 土坑2（6区）

6区北西隅付近で検出した南北幅1.5mの土坑で、不整円形を呈する。西側は調査区外のため完掘しておらず、全体の規模については不明。

### 土坑3（6区）

6区南西隅で検出した南北2.1mの土坑で、楕円形を呈する。西側は調査区外のため完掘しておらず、全体の形状は不明。

### 土坑4（6区）

6区中央の東壁付近で検出した南北2.1mの土坑で、不整円形を呈する。東側は調査区外のため完掘しておらず、全体の形状は不明。

### 土坑5（6区）

土坑4の北側で検出した南北1.0mほどの土坑で、楕円形を呈する。東側は調査区外のため完掘しておらず、全体の形状は不明。

#### 遺物

1・2は青磁の資料である。1はやや内湾気味に立ち上がる碗の資料である。口縁部外面に1条の沈線を引く。2は皿の資料で、口縁部は一端折れて肥厚する。

3~8は白磁の資料である。3・4は端反の皿である。5は外傾する皿の口縁部で、外面にはロク口成形時の調整痕を残し、胴部は釉が掛からない。6は口縁部の資料で、断面は先細りとなって大きく外傾し、外面には口縁部下に段を持つ。口唇部には釉剥ぎを施す。7は非常に薄手の作りで、外傾する。8は小杯で、これも非常に薄い作りである。

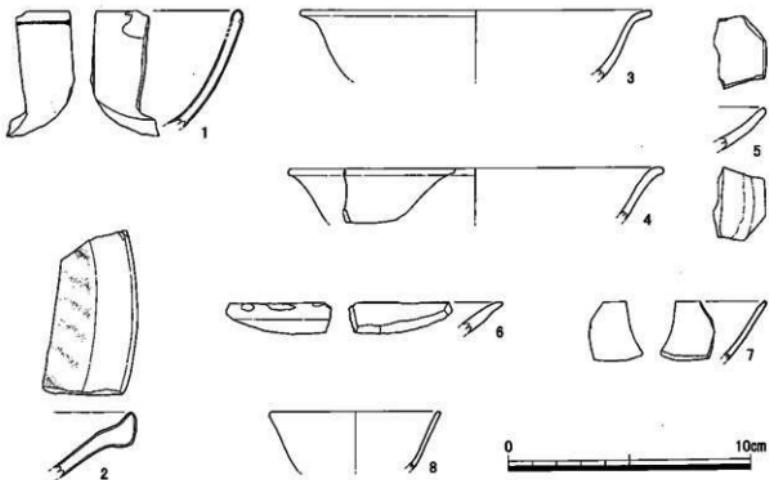
9~28は青花の資料である。9・15は端反の碗である。9は内外面ともに2条の界線を口縁部に入れ、外面には渦巻状の文様を描く。15も内外面ともに2条の界線を入れる。外面には唐草文を描く。

10は口縁部の内外に2条の界線をそれぞれ入れ、外面胴部には丸文を充填する。11も10と同様の器形・文様であるが、釉流れによる文様のにじみが著しい。12は、外面は無文で、内面には2条の界線の下に唐草文を描く。16は直線的にやや外傾して立ち上がる口縁部の資料で、内面には雷文を入れる。17は胴部から口縁部にかけての資料であり、口縁部は外傾して直線的に立ち上がる。内外面ともに文様を入れる。18は外傾する口縁部の資料で、内面には四方擇文が入る。19は高台内の字款の入った資料で、2重の界線の中に「貴」の字を入れる。

13は端反の皿で、疊付部分は釉剥ぎを施している。外面には口縁部に2条、高台部分に2条の界線を入れ、唐草文を描く。14は焼成不良でやや発色がくすんでいる。内面には玉取獅子を描いたものと思われる。疊付部分に釉剥ぎを施している。20は胴部から口縁部へと内湾して立ち上がる。外面には芭蕉葉文を描き、内面には胴部に丸文を入れる。21は粗製で、太線描きの界線を内外面に引き、外面には多量の砂粒の付着がある。22は内湾する口縁部の資料で、内外面に界線と文様を入れる。23は錦皿の口縁部の資料で、内面には青海波文を入れる。24は移花皿の口縁部の資料である。

25は底部の資料で、疊付部分には釉剥ぎを施している。また、疊付部分には砂粒の付着が認められる。26は基筒底の資料で、内面見込みには捺花を描く。

27は肩の張った小壺の資料で、外面には渦巻き文を描いている。28は小杯の資料で口唇部は欠くが、



第169図 ニノ丸F地区出土の遺物① (S=1/2)

胴部でやや膨らみを持ち、口縁部は外反する。外面に簡略的に樹木と鳥を描く。

29~34は瓦質の火鉢である。29~32は口縁部の資料で、口縁部上面は平坦に整え、口縁部下に突帯を貼り付けて、スタンプ文を施す。29は内面に刷毛目調整を施す。

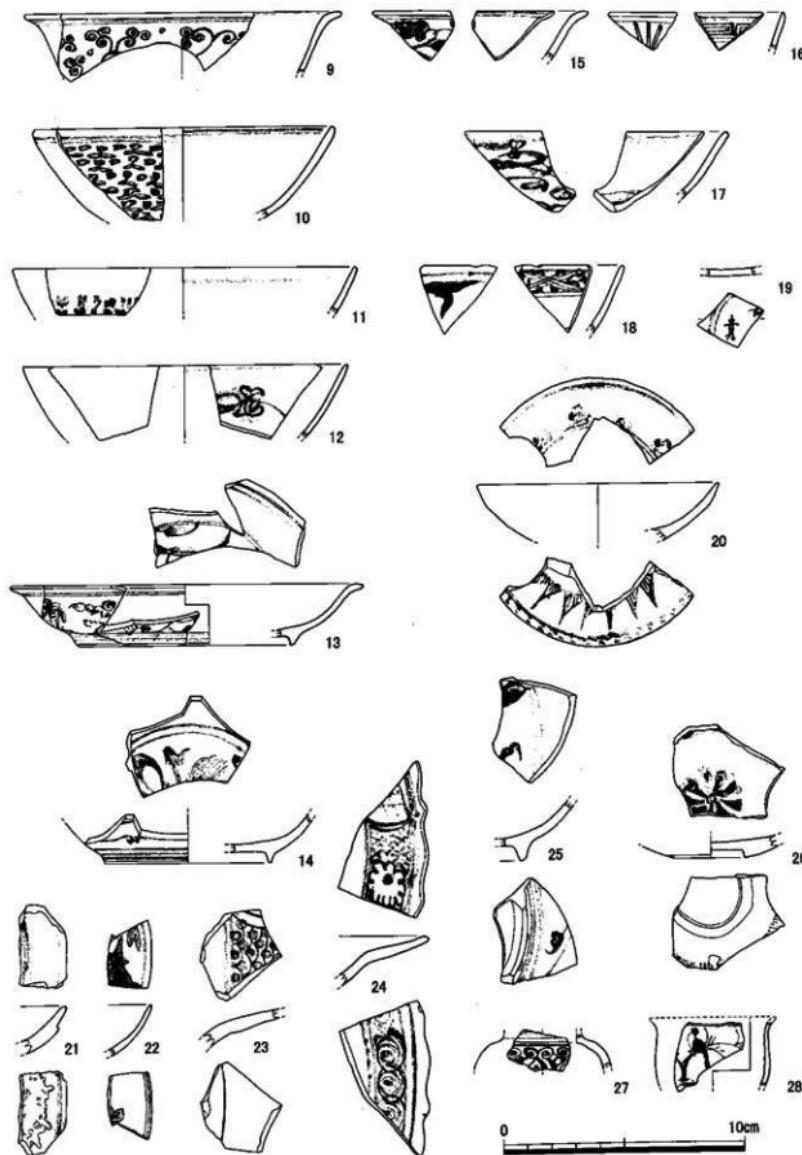
36は備前焼の擂鉢底部付近である。外面体部には成形時の凹凸をとどめ、内面には幅広の8本単位のクシ目を入れる。

35、37~59は瓦質の擂鉢である。40・42・55・56・57は外面にユビオサエの痕を残す。37・40・41・45はクシ目の下に刷毛目調整を観察できる。57は内外面ともに刷毛目調整を施している。56は見込みにクシ目痕が観察できるが、溝が擦り切れなくなるまで使用している。43は片口部の資料である。

60~115は5区から出土した土師質土器である。60~76は壺である。60~68の体部は見込みを持たずにつま先を開いて直線的に立ち上がり、内面の下位で1~2段の段を設ける。底面の糸切痕は、いずれも粗い。外面はナデ調整を丁寧にかけるが、67は成形時の工具痕を筋状に残す。

69・70はどちらも胎土に赤色粒子を多く含み、底面の糸切痕は粗い。71~74は底面に粗い糸切痕が残る。71・72・74の内面は見込み中央がボタン状にふくらみ、螺旋状の工具痕が見られる。73は外面に成形時の工具痕を顕著に残す。75はぶい黄橙色を呈し、全体に薄手の作りである。底面には粗い糸切痕が残り、全体にナデ調整が施されるが、見込み部分には工具痕が同心円状に残る。76は白色系で、全体に薄い作りである。胎土に白色雲母を含む。底面には細かい糸切痕が残り、棒状の圧痕がつく。内面には螺旋状の工具痕が残る。

77~110は小皿である。77は赤色粒子を多く含む胎土である。他に比べ小ぶりで、底面の糸切痕は粗い。78~88はいずれも底面に粗い糸切痕を残す。78は口縁部に炭化物の付着がある。



第170図 ニノ丸F地区出土の遺物② (S=1/2)

89~106は胎土に砂粒を多く含み、ややざらついた器壁を持つ一群である。92・93・97・99には口縁部に炭化物が付着する。また、100には黒斑がある。90・91などは底面の糸切痕が粗いが多くが細かい糸切痕である。

107~110は内面見込みに高まりを持たないものである。108は底面に細かい糸切痕があり、軽く、焼け締まって硬質である。107の底面は粗い糸切痕で、胎土には赤色粒子が含まれる。109・110の糸切痕は細かい。110は口縁部が大きく直線的に開いて立ち上がる。

111~114はミニチュア土器である。111~113はいずれも糸切で、粗い糸切痕が底面に残る。112は糸切が浅く入ったためか、成形後に内面底に粘土をつめる。114は灰白色を呈する白色系で器壁が薄手の資料で、胎土には白色雲母を含む。底面には細かい糸切痕が残る。

115はミニチュア土器を用いた耳皿である。底面には細かい糸切痕が残り、二次的な被熱のためか内外面には煤が付着する。

116~263は6区から出土した土師質土器である。116は脚付きで香炉であろう。底面に残る糸切痕は比較的細かい。

117~138は壊である。117は底面に粗い糸切痕を観察でき、外面には工具による調整痕が明瞭に残る。118は細い粘土柱からの切り離しで、糸切痕は細かい。外面に工具による調整の凹凸が顕著に残る。119は胎土に粒の大きい赤色粒子を多く含み、色調は赤橙色を呈する。糸切痕は粗く、見込みで大きく段を作って立ち上がる体部は外面下位で腰が張り、口縁部はやや外反気味である。

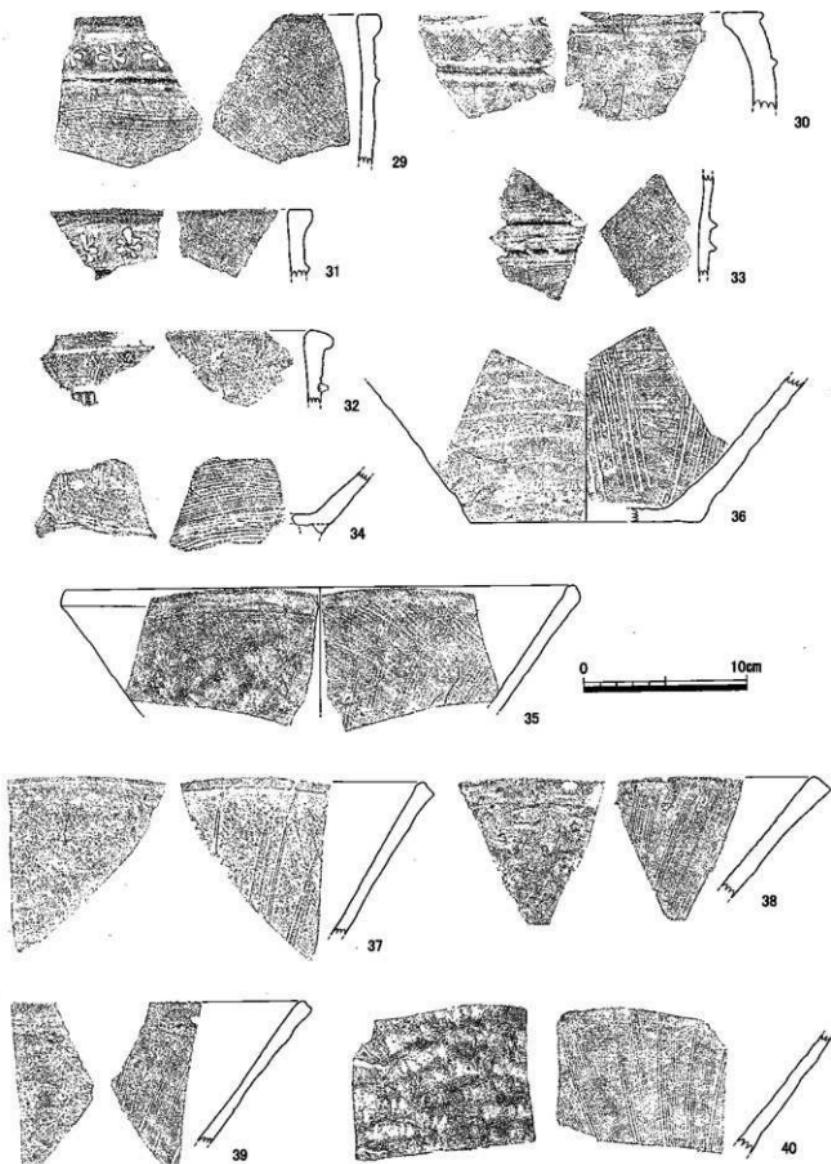
120~134は見込み部分を作らない一群である。体部は直線的に先細りになりながら口縁部まで立ち上がるものが多いため、中には121のように腰がやや張るもの、122・133・134のように内湾気味のものも見られる。また、内面下位の立ち上がり部分に大きなゆるい段を設ける場合が多い。基本的に粗い糸切痕が底面に残るが、126・129・132のように細かく糸切痕が入るものもある。120・123・128は他に比べ粘土柱の径が小さい。外面の調整には、122・124などのように丁寧なナデ調整が施されるものと、123・131のようにほとんどナデ調整がなされず、成形時の工具痕が凹凸となって顕著に残るもの、125・128のようにある程度ナデ調整を施すが、工具の痕跡が残るものがある。

135は底面に粗い糸切痕を残し、外面には筋状の工具痕が残る。136は外面が丁寧にナデ調整されている。粘土柱からの切り離しは、静止糸切のようである。137は底面の糸切痕は細かく、外面は丁寧になでてある。内面上位にはゆるい成形時の凹凸が細かく入る。138は底面に粗い糸切痕が残り、外面は丁寧になでられている。内面には見込み中央にボタン状の高まりがあり、体部には成形時の凹凸が残る。

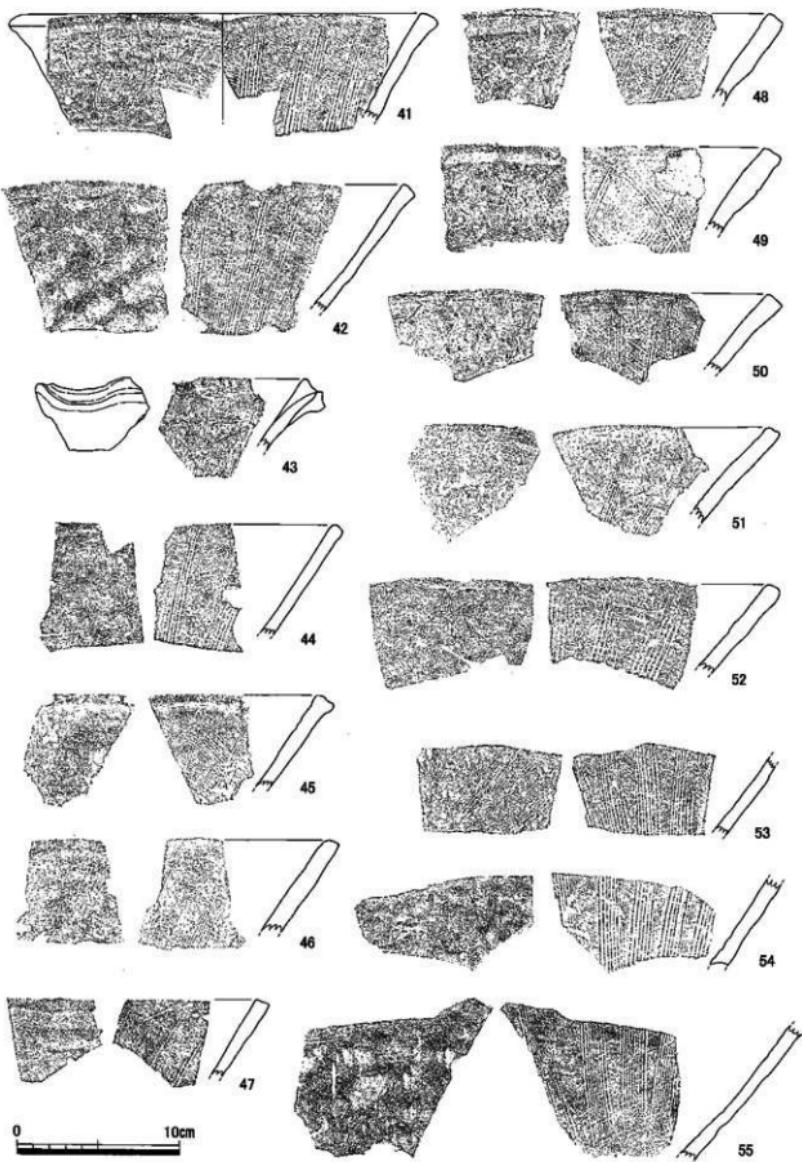
139~142は白色系の土師質土器で、壊である。139~141は同類で、胎土に白色雲母を多量に含み、細い粘土柱からの切り離しで、底部糸切痕は細かい。内面見込みには細かく工具痕が螺旋条に入る。成形後ハシ状の道具で粘土柱から移動させたためか、あるいはスダレ状の敷物に置いたためか、底面には棒状の圧痕が残る。142は胎土に金色雲母を含む。底面の糸切痕は細かく、内面見込みには粗い螺旋状の工具痕が残る。

143~256は小皿である。143~145は胎土に赤色粒子を多量に含む。143・145は底面に粗い糸切痕を残す。143は口縁部が直立する。144は器面の状態が悪い。144は口縁部に炭化物が付着する。

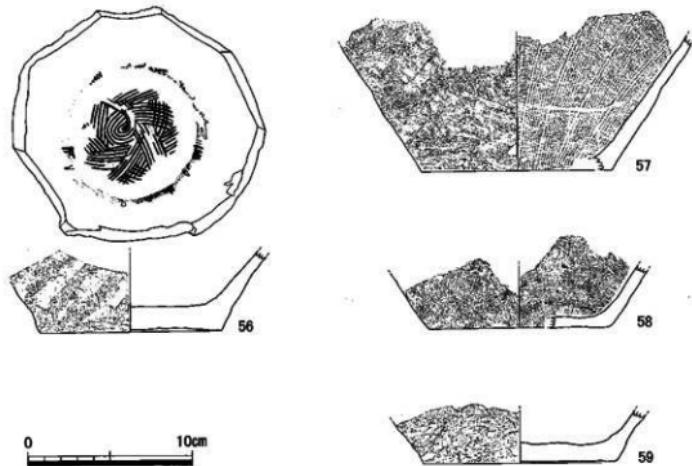
146~231は内面見込みにボタン状あるいはドーナツ状の高まりを持ち、色調はにぶい橙色系をなす



第171図 ニノ丸F地区出土の遺物③ (S=1/3)



第172図 ニノ丸F地区出土の遺物④ (S=1/3)



第173図 ニノ丸F地区出土の遺物⑤ (S=1/3)

ものが多く、胎土に赤色粒子はほとんど含まない。底部の糸切痕は粗いもの、細かいもの両者が混在する。口縁部に炭化物が付着するものも一定量ある。ほとんどが口縁部は開いて立ち上がるが、230・231のようにやや直立に近く深めのものもみられる。

232は底面に粗い糸切痕が残り、内面は底部と体部の境が明瞭である。233の底面糸切痕はやや粗く、体部中ほどで外面には段を造り、口縁部は外反する。234は底面の糸切痕は粗く、見込みの高まりはゆるい。235・236はともに底面の糸切痕は粗く、口縁部には炭化物が付着する。237・238は器壁が厚く、焼成がやや不良である。底面には粗い糸切痕が残る。241は焼成が悪いためか器面の状態が悪い。体部から口縁部へと直線的にやや開いて立ち上がる。

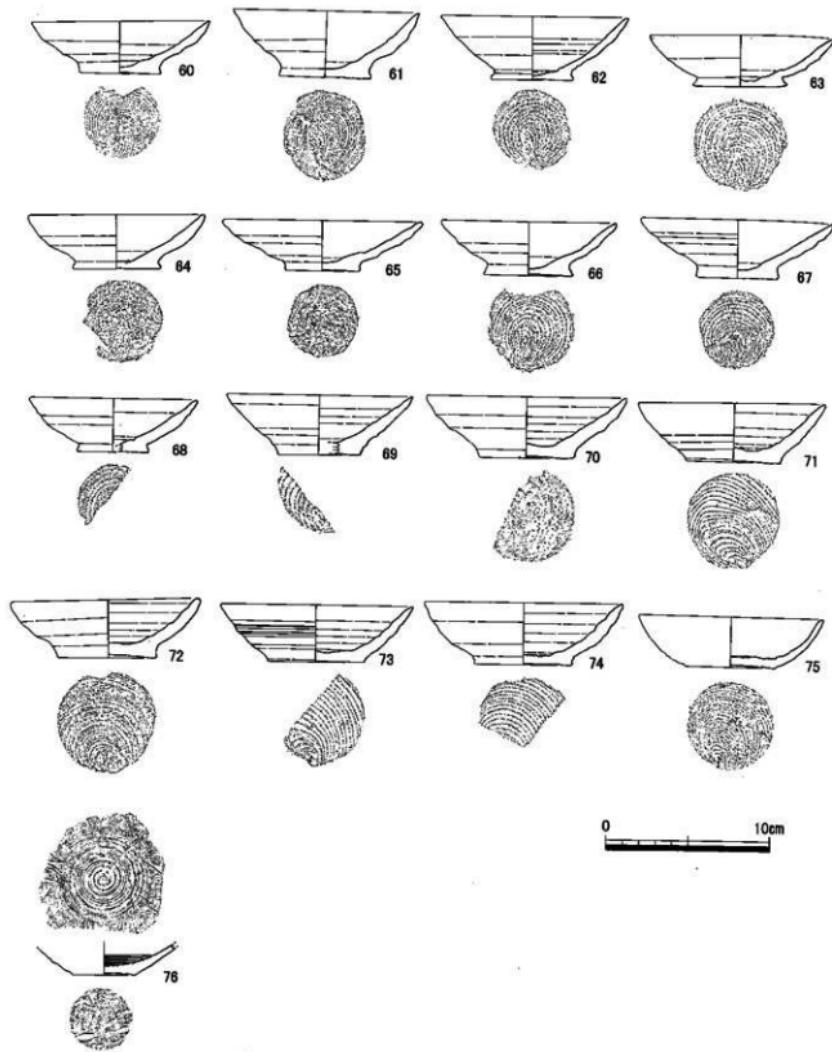
242～255は見込みに高まりを持たないものである。245・247・252は口縁部に炭化物の付着が見られる。252は口縁部の立ち上がりが浅く、外開きである。253は口径の割りに高さがあり、あるいは小壊としたほうがよいか。

256は白色系の小皿である。胎土や色調、調整などの諸特徴は、139～141と共通する。

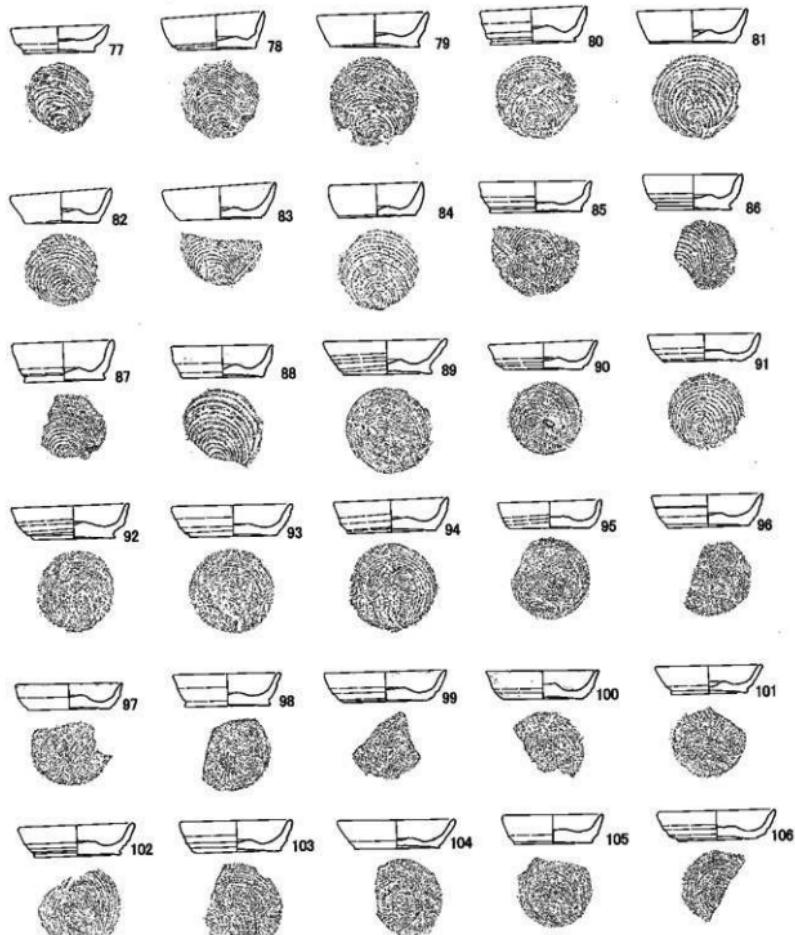
257・258はミニチュア土器である。いずれも糸切痕が底面に残る。258の胎土は赤色粒子を含み、砂粒の混入が多い。

259～263はミニチュア土器から作り出した耳皿である。259～262は底面に粗い糸切痕を残す。263は糸切が浅く入り、底面を欠損する。260・261はやや分厚い作りである。側面から挟み込んでつぶし、259～261は口縁部を指押しして整える。

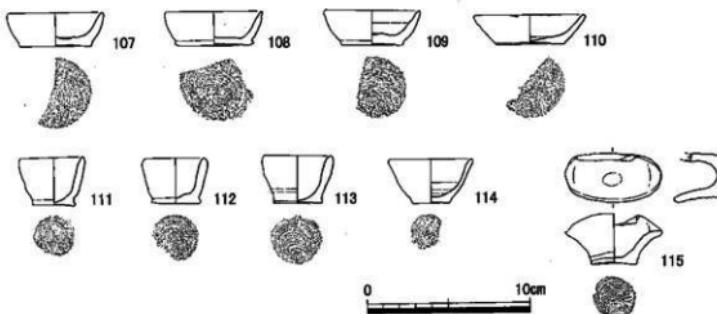
264～267は瓦の資料である。264・265は軒丸瓦の瓦当部で、巴文と珠文が観察できる。266・267は丸瓦の尻部である。266は玉縁で、267は段を持たずすほまるタイプである。どちらも凹面にはコビキA痕が観察される。



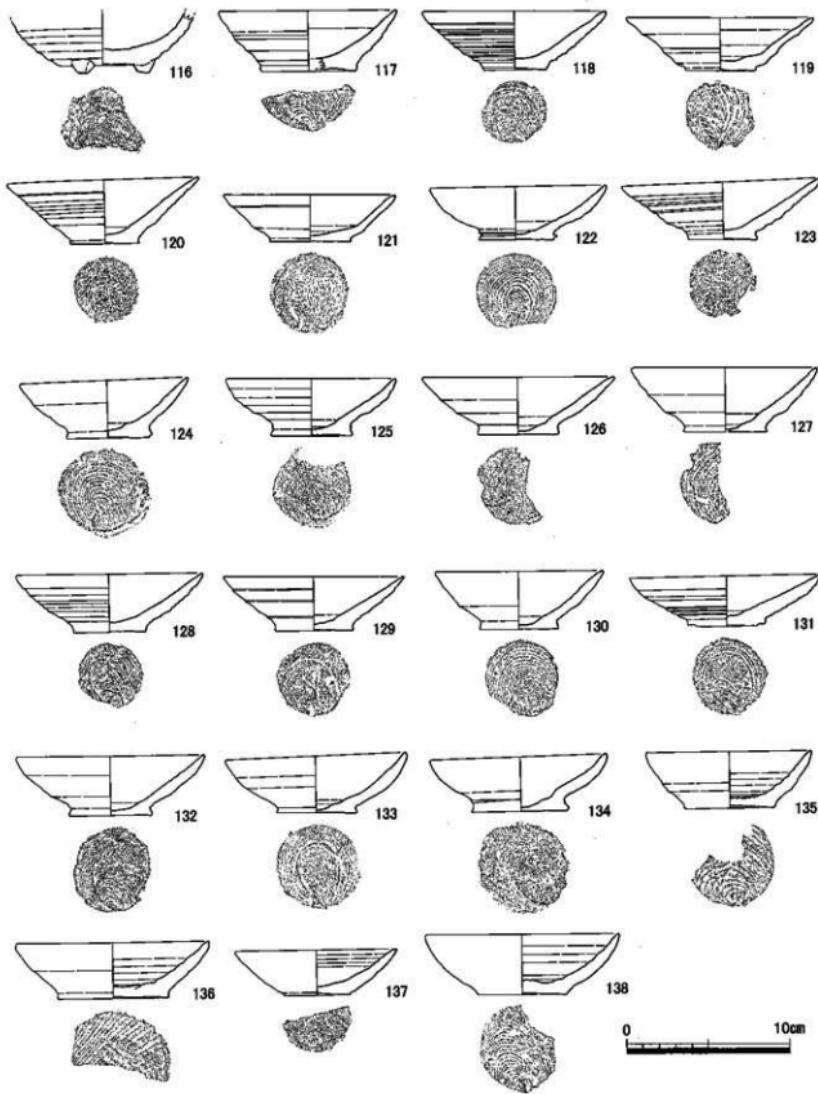
第174図 ニノ九F地区出土の遺物⑥ (S=1/3)



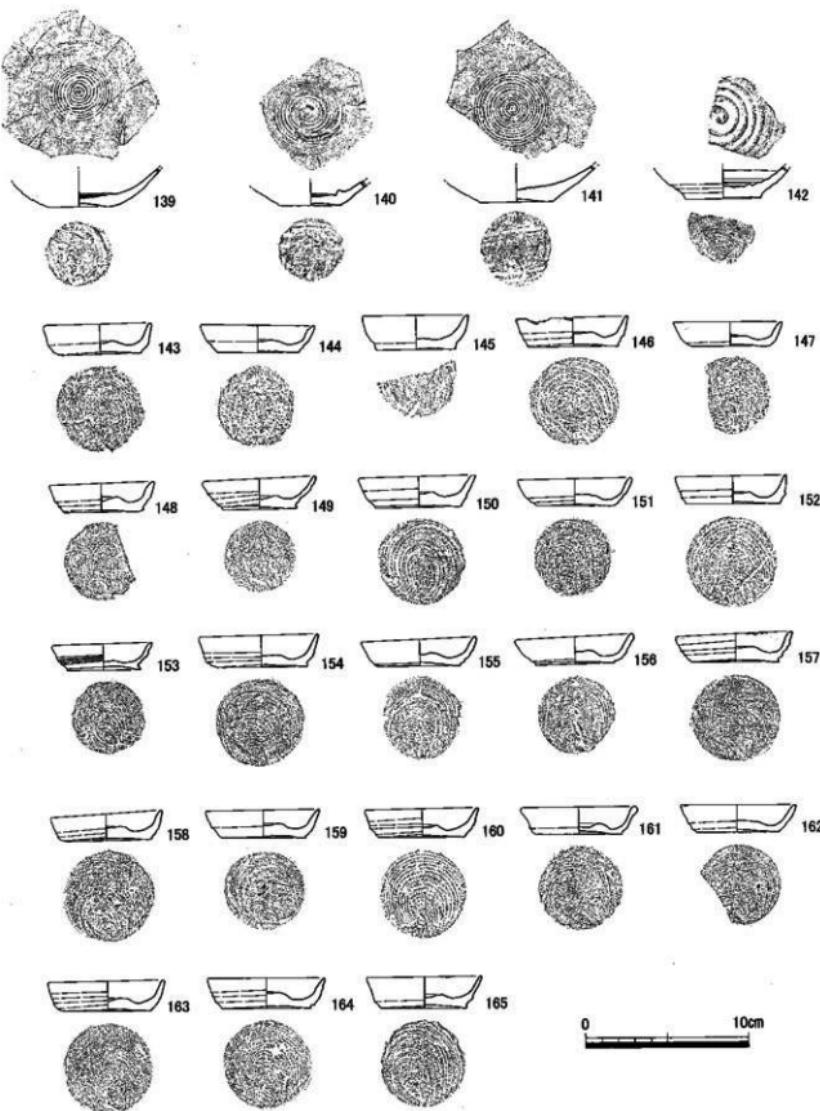
第175図 ニノ丸F地区出土の遺物② (S=1/3)



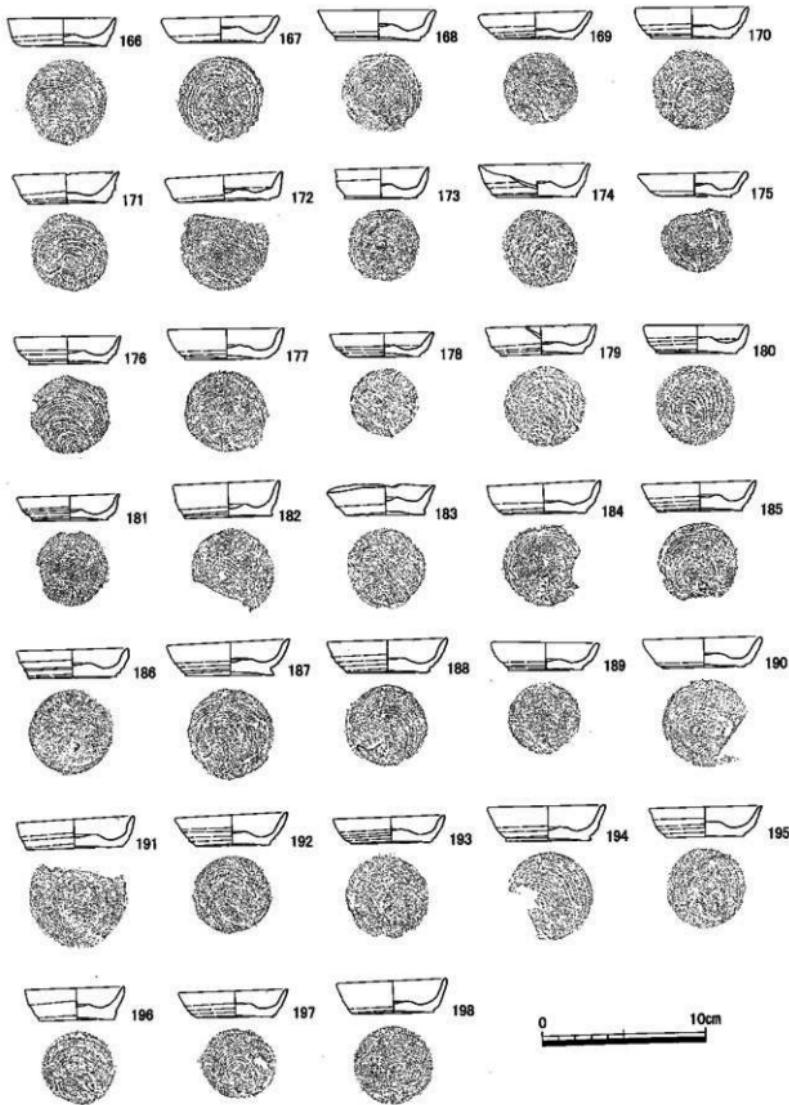
第176図 ニノ丸F地区出土の遺物⑧ (S=1/3)



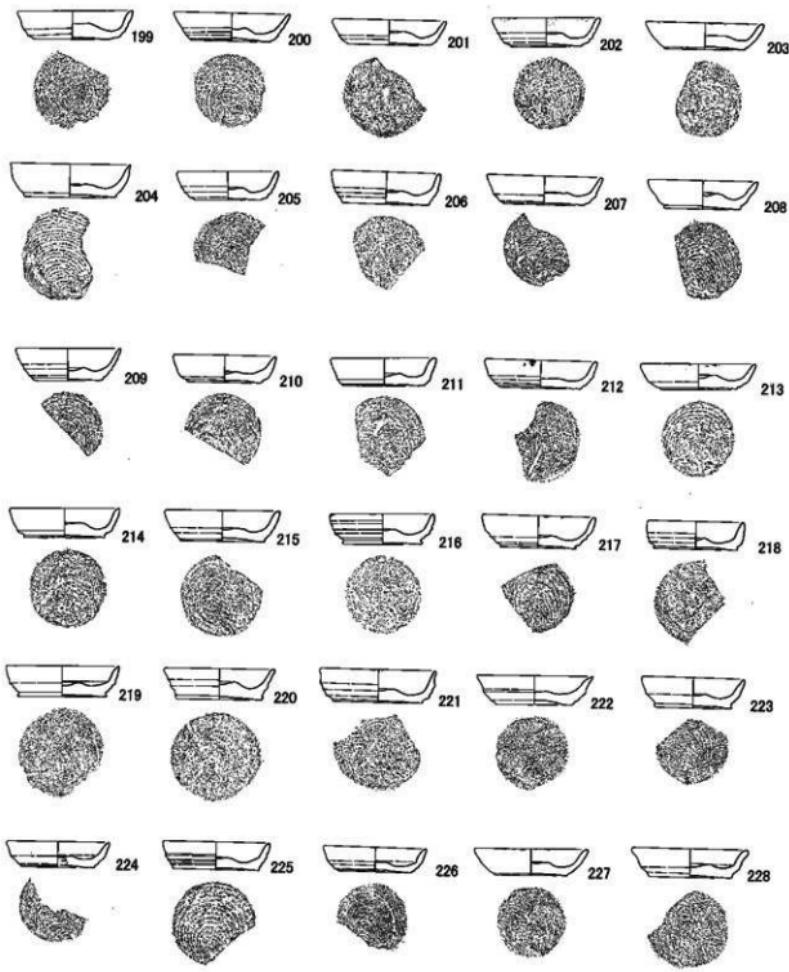
第177図 ニノ丸F地区出土の遺物⑨ (S=1/3)



第178図 ニノ丸F地区出土の遺物⑩ (S=1/3)

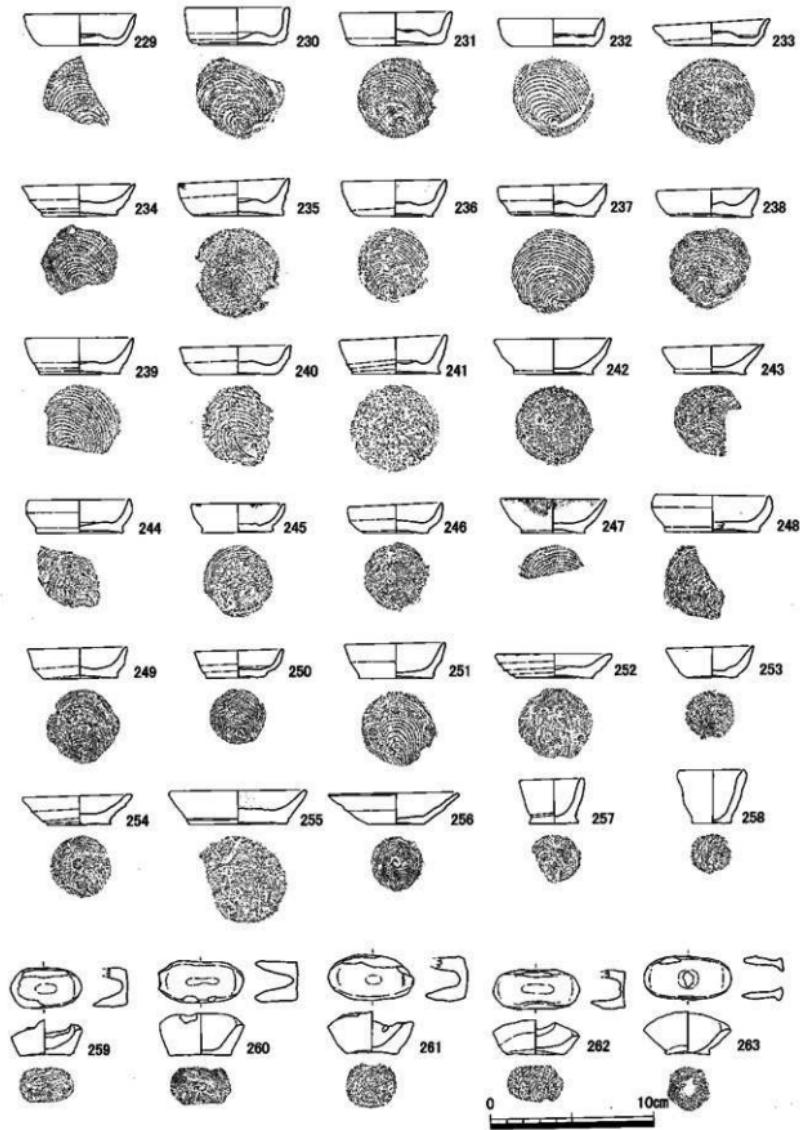


第179図 二ノ丸F地区出土の遺物⑩ (S=1/3)

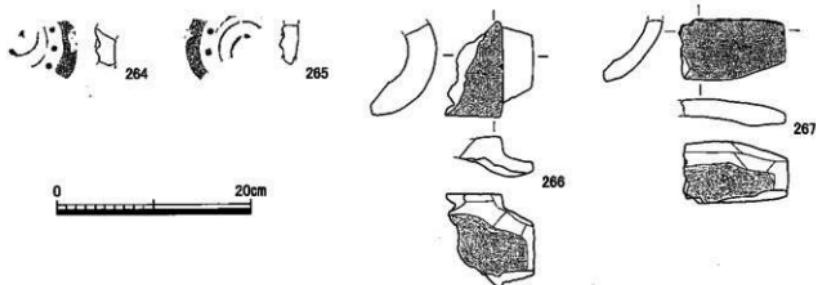


0 10cm

第180図 ニノ丸F地区出土の遺物② (S=1/3)



第181図 ニノ丸F地区出土の遺物⑩ (S=1/3)



第182図 ニノ丸F地区出土の遺物③ (S=1/5)

第34表 ニノ丸F地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	碗	二ノ丸地区	5区	-	
2	青磁	皿	二ノ丸地区	6区	-	
3	白磁	皿	二ノ丸地区	6区	-	復元口径14.3cm
4	白磁	皿	二ノ丸地区	5区	-	復元口径15.2cm
5	白磁	皿	二ノ丸地区	5区	-	
6	白磁	皿	二ノ丸地区	6区	-	
7	白磁	皿	二ノ丸地区	6区	-	
8	白磁	小杯	二ノ丸地区	5区	-	復元口径7.0cm
9	青花	碗	二ノ丸地区	5区	-	復元口径12.9cm
10	青花	碗	二ノ丸地区	6区	-	復元口径12.2cm
11	青花	碗	二ノ丸地区	5区	-	復元口径14.0cm
12	青花	碗	二ノ丸地区	5区	-	復元口径13.4cm
13	青花	皿	二ノ丸地区	5区	-	復元口径14.3cm, 復元底径8.5cm, 高2.5cm
14	青花	皿	二ノ丸地区	6区	-	復元底径6.8cm
15	青花	碗	二ノ丸地区	5区	-	
16	青花	碗	二ノ丸地区	6区	-	
17	青花	碗	二ノ丸地区	5区	-	
18	青花	碗	二ノ丸地区	6区	-	
19	青花	碗	二ノ丸地区	5区	-	
20	青花	皿	二ノ丸地区	5区	-	復元口径9.8cm
21	青花	皿	二ノ丸地区	5区	-	
22	青花	皿	二ノ丸地区	6区	-	
23	青花	皿	二ノ丸地区	6区	-	
24	青花	皿	二ノ丸地区	5区	-	
25	青花	皿	二ノ丸地区	5区	-	
26	青花	皿	二ノ丸地区	5区	-	復元底径2.9cm
27	青花	小壺	二ノ丸地区	5区	-	
28	青花	小壺	二ノ丸地区	6区	-	復元口径5.2cm
29	陶器	滑輪	二ノ丸地区	5区	-	復元底径14.0cm

第35表 ニノ丸F地区出土遺物観察表②

番号	種別	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	寸法(cm)		
						外面		裏面		口径		高さ
						裏面	裏面	裏面		底径	高さ	
29	瓦質土器	大鉢	二ノ丸地区	5区		褐色	灰色		長石、石英、角閃石、赤色粒子、白色葉緑			
30	瓦質土器	大鉢	二ノ丸地区	5区		灰白色	灰白色		長石、石英、赤色粒子、白色葉緑			
31	瓦質土器	大鉢	二ノ丸地区	5区		灰褐色	褐色		長石、石英、赤色粒子、白色葉緑			
32	瓦質土器	大鉢	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子			
33	瓦質土器	大鉢	二ノ丸地区	6区		に赤い黄褐色	に赤い黄褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子			
34	瓦質土器	大鉢	二ノ丸地区	5区		に赤い褐色	灰褐色	に赤い褐色	長石、石英、赤色粒子			
35	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	灰白色		長石、石英、白色葉緑	03.3		
37	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、赤色粒子			
38	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、2~5mmの砂礫			
39	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		灰褐色	灰褐色		長石、石英、2~5mmの砂礫			
40	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、2~5mmの砂礫			
41	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	5区		灰白色	灰白色		長石、石英、金色葉緑	04.0		
42	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		灰白色	灰白色		長石、石英、赤色粒子、金色葉緑			
43	土質質土器	盤	二ノ丸地区	5区		に赤い褐色	に赤い褐色		長石、石英、赤色粒子、白色葉緑			
44	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、白色葉緑			
45	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		に赤い黄褐色	灰褐色		長石、石英、赤色粒子、白色葉緑			
46	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		灰褐色	灰褐色		長石、石英、赤色粒子、白色葉緑			
47	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		灰褐色	灰褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子、白色葉緑			
48	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、白色葉緑			
49	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、白色葉緑			
50	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、赤色粒子			
51	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子、白色葉緑			
52	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		灰白色	灰白色		長石、石英、角閃石、赤色粒子			
53	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、赤色粒子			
54	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	5区		灰褐色	灰白色		長石、石英、白色葉緑			
55	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、赤色粒子、金色葉緑			
56	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、2~5mmの砂礫	01.1		
57	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、2~5mmの砂礫	01.0		
58	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		灰褐色	灰褐色		長石、石英、角閃石、2~5mmの砂礫	01.0		
59	瓦質土器	盤	二ノ丸地区	6区		褐色	褐色		長石、石英、2~10mmの大砂礫	11.8		
60	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		に赤い黄褐色	に赤い黄褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.9	4.7	3.5
61	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石	11.4	5.6	4.2
62	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石	11.5	4.9	3.9
63	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色、に赤い褐色	褐色、灰褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.5	5.8	3.2
64	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石	10.6	5.3	3.4
65	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	12.1	4.6	3.1
66	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	に赤い黄褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.6	5.4	3.5
67	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		に赤い褐色	に赤い黄褐色	に赤い褐色	長石、石英、角閃石	11.7	4.8	3.6
68	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.0	4.4	3.3
69	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色、灰褐色	褐色	に赤い褐色、浅黄色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.0	5.0	3.5
70	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	12.1	5.9	3.7
71	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.4	5.7	3.8
72	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	に赤い褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.5	6.1	3.7
73	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.7	6.0	3.5
74	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		に赤い黄褐色	に赤い褐色	に赤い褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	12.0	5.8	3.8
75	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		に赤い黄褐色	灰白色、に赤い褐色	灰白色	長石、角閃石、金色葉緑	11.0	5.4	3.1
76	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		灰褐色	灰白色		白色葉緑			
77	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、赤色粒子	5.9	4.2	1.7
78	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色、灰褐色	褐色	褐色、灰褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.2	4.7	2.3
79	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	に赤い黄褐色	長石、角閃石、赤色粒子	6.7	5.4	2.3
80	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		灰白色	灰白色	褐色、灰白色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.4	5.2	2.2
81	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色、灰褐色	褐色	褐色、灰褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	5.3	2.1
82	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		に赤い褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.2	4.5	2.2
83	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色、灰褐色	褐色	に赤い褐色、褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.6	5.0	2.3
84	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	5.7	4.9	2.6
85	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	褐色、灰褐色、赤色粒子	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.8	5.5	1.9
86	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	5.0	4.5	2.2
87	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.9	2.4
88	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色、に赤い褐色	褐色、に赤い褐色		長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.9	2.0
89	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色		長石、石英、角閃石	7.4	5.1	2.1
90	土質質土器	瓶	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	褐色、研磨面	長石、石英、角閃石	6.5	4.8	1.8

カッコ付数字は復元値

第36表 ニノ丸F地区出土遺物観察表③

番号	種類	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	寸法(cm)		
						外観		内面		口径	底径	高さ
						表面	裏面	表面		表面	裏面	表面
91	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区		白色	白色	白色	長石、石英、角閃石	6.8	4.7	1.7
92	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	7.1	4.9	2.1	
93	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	7.3	5.3	1.9	
94	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.4	2.0	
95	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	6.3	5.0	1.7	
96	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.7)	4.9	2.0	
97	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、赤色粒子	(6.4)	5.0	1.6	
98	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.4)	5.1	2.0	
99	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色、淡黄色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(7.4)	5.2	1.8	
100	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色、黒褐色	にぶい褐色	褐色、黒褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.8)	4.9	1.8	
101	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(6.8)	4.6	1.7	
102	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、角閃石	(6.9)	5.3	1.9	
103	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、角閃石	(6.7)	5.5	1.9	
104	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	明るい褐色	明るい褐色	明るい褐色	長石、角閃石	(7.1)	5.2	1.7	
105	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、角閃石	(6.0)	4.8	1.8	
106	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	明るい褐色	明るい褐色	明るい褐色	長石、石英、角閃石	(7.1)	4.9	1.8	
107	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	浅褐色	褐色	褐色	長石、角閃石、赤色粒子	(5.8)	4.2	2.1	
108	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.8)	4.7	2.1	
109	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石、石英、角閃石	(5.8)	3.7	2.2	
110	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	5区	褐色	褐色	褐色	長石、角閃石、赤色粒子	(6.0)	4.9	1.8	
111	土師質土器	二ノ丸地区	5区		にぶい黄褐色、赤褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	3.9	2.6	3.9	
112	土師質土器	二ノ丸地区	5区		褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	3.8	3.0	2.8	
113	土師質土器	二ノ丸地区	5区		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(4.0)	3.0	2.9	
114	土師質土器	二ノ丸地区	5区		灰白色	灰褐色	灰白色	石英、白色漂母	5.0	2.2	2.1	
115	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	5区	褐色	褐色	褐色	長石、角閃石	5.9	2.7	3.1	
116	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	5.0			
117	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.8)	(5.8)	3.7	
118	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色、にぶい褐色	褐色、にぶい褐色	褐色、にぶい褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.0)	5.9	3.7	
119	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	明るい褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.4)	4.9	3.3	
120	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	11.6	4.1	4.8	
121	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色、深褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.4	4.9	2.9	
122	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	10.7	4.6	3.4	
123	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	にぶい褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	12.1	4.2	2.9	
124	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	10.3	5.1	3.7	
125	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(10.3)	4.5	3.5	
126	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.7)	4.8	3.5	
127	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(11.1)	(5.1)	4.0	
128	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(11.4)	4.4	3.6	
129	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(11.0)	4.6	3.3	
130	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	長石、石英、角閃石	(10.2)	4.8	3.6	
131	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(11.7)	4.8	3.1	
132	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(11.5)	5.0	3.6	
133	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	明るい褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	10.9	4.9	3.8	
134	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	10.7	5.7	3.5	
135	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(10.0)	5.6	3.5	
136	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(11.0)	(5.0)	3.4	
137	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	にぶい黄褐色、黄褐色	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	長石、石英、角閃石	(9.0)	3.9	2.8	
138	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	(11.6)	5.4	3.7	
139	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	灰白色	灰白色	灰白色	石英、白色漂母	3.6			
140	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	灰白色	灰白色	灰白色	白石、白色漂母	3.8			
141	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	灰白色	灰白色	灰白色	石英、白色漂母	4.5			
142	土師質土器	耳瓶	二ノ丸地区	6区	灰白色	灰白色	灰白色	長石、白色漂母、白色漂母	4.7			
143	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.0	1.9	
144	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、赤色粒子	(6.0)	5.0	1.7	
145	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.4)	5.0	2.1	
146	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	にぶい褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.7	5.5	1.9	
147	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.7	1.5	
148	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	4.8	1.8	
149	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	6.7	4.5	2.0	
150	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石、赤色粒子	7.0	5.3	1.9	
151	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	褐色	褐色	褐色	長石、石英、角閃石	6.8	4.7	1.8	

カッコ付は復元品

第37表 二ノ丸F地区出土遺物観察表④

番号	画面	種類	地区	調査区	出土層位	色調		施土	寸法 (cm)		
						外面	内面		口徑	底径	高さ
152	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	6.7	5.7	1.8
153	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。赤褐色	灰石。石英	6.9	4.5	1.7
154	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	7.1	5.5	2.0
155	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石	7.0	5.1	1.8
156	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	に赤い青色	赤色。石英。角閃石	7.0	5.8	1.8	
157	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	7.0	5.3	1.9
158	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英	6.8	5.5	1.8
159	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.8	5.0	1.8
160	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。浅黄色	灰石。石英。角閃石	6.9	5.4	1.8
161	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	6.9	5.3	1.7
162	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	6.9	5.0	1.7
163	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	7.0	5.4	1.9	
164	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。灰黑色。浅黄色	灰石。石英	7.0	5.4	1.8
165	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	7.0	5.2	2.0
166	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英	6.6	5.2	1.7
167	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色。浅黄色	灰石。石英。角閃石	7.0	5.2	1.7
168	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	7.1	5.1	1.8
169	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	明赤褐色	明赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.7	4.7	1.7
170	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英	6.8	5.0	1.9
171	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	6.6	4.9	1.8
172	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英	7.0	5.6	1.7
173	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。灰黑色	灰石。石英。角閃石。赤色粒子	6.7	4.5	1.9
174	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青黒色	に赤い青黒色	に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	6.7	4.9	2.1
175	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	6.5	4.3	1.8
176	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	6.4	4.5	1.7
177	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英	6.9	4.8	1.8
178	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	6.3	4.4	1.5
179	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色。浅黄色	灰石。石英	6.6	4.9	1.8
180	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.4	4.8	1.8
181	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石	6.3	4.8	1.6
182	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	6.4	5.3	2.5
183	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英	6.7	4.8	1.8
184	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	に赤い青色	灰石。石英。角閃石	6.9	5.9	2.0
185	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。浅黄色	灰石。石英	7.0	5.2	1.8
186	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色。浅黄色	赤色	赤色。赤色	灰石。石英。角閃石	6.8	4.4	1.8
187	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	7.4	5.2	2.2
188	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	に赤い青色	赤色。灰白色	灰石。石英。角閃石	7.3	5.0	2.1
189	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。に赤い青黒色	灰石。石英。角閃石	6.4	4.5	1.7
190	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	7.2	5.1	1.8
191	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石。赤色粒子	7.1	5.8	1.8
192	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.8	4.5	2.0
193	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石	6.5	5.9	1.6
194	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	7.1	5.1	2.3
195	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.9	4.8	1.9
196	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石。赤色粒子	6.1	4.7	2.0
197	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石	6.5	4.5	1.7
198	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.6	5.0	2.1
199	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色。に赤い青黒色	赤色。に赤い青黒色	赤色。に赤い青黒色。薄赤色	灰石。石英。角閃石	7.0	4.5	1.8
200	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英。角閃石	6.8	4.7	1.7
201	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	明赤褐色	赤色	赤色。明赤褐色	灰石。石英。角閃石	(6.0)	5.1	1.5
202	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	(6.4)	4.3	1.8
203	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石	(7.2)	5.0	1.6
204	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	(7.4)	5.6	2.1
205	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。浅黄色	灰石。石英。角閃石	(6.0)	(4.1)	1.7
206	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石。赤色粒子	(6.6)	(5.2)	2.0
207	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	に赤い青色	赤色	灰石。石英。角閃石。赤色粒子	(6.6)	(6.0)	1.8
208	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	に赤い青色	赤色	灰石。石英。角閃石	(6.6)	4.7	1.8
209	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色。に赤い青色	灰石。石英。角閃石	(6.3)	4.9	2.0
210	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	赤色	赤色	赤色。浅黄色	灰石。石英。角閃石。赤色粒子	(6.1)	4.5	1.7
211	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色。灰白色	灰石。石英。角閃石	(6.3)	(5.1)	1.7
212	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	に赤い青色	赤色	赤色	灰石。石英。角閃石	(5.8)	4.9	1.7
213	土師質土器	小瓶	二ノ丸地区	6区	II層	に赤い青色	赤色	赤色。灰石。石英。角閃石	(7.0)	4.7	1.6

カッコ付番は複数個

第38表 ニノ丸F地区出土遺物観察表⑤

番号	種別	器種	地区	調査区	出土位	色調	外側		胎土	寸法(cm)			
							内面	底面					
										口径	底径	高さ	
214	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	明赤褐色、にぶい青褐色	褐色、褐灰色	灰石、石英、角閃石	(6.6)	5.0	1.8	
215	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	にぶい褐色	にぶい褐色	灰石、石英、角閃石	(6.6)	5.2	1.9	
216	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	浅黄色、白色	灰石、石英、角閃石	(6.2)	4.9	1.9	
217	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色、にぶい青褐色、褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.0)	(4.6)	2.0	
218	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	にぶい褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(5.6)	5.2	1.7	
219	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.6)	5.5	1.9	
220	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.6)	5.2	1.9	
221	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	灰褐色、灰黄色、褐灰色	灰石、石英、角閃石	(7.1)	5.6	2.0	
222	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(7.0)	4.7	1.8	
223	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.2)	4.7	1.8	
224	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.2)	4.5	1.8	
225	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	明赤褐色	灰石、石英、角閃石	(6.4)	5.2	1.7	
226	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.3)	4.5	1.8	
227	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英	(6.6)	4.4	1.6	
228	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(7.0)	5.0	1.7	
229	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.6)	(4.8)	1.9	
230	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.3)	4.7	2.3	
231	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.6)	4.9	2.0	
232	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	黄褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.3	5.0	1.7	
233	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色、にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	7.1	5.3	1.7	
234	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.6)	4.5	1.9	
235	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.5	2.3	
236	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	浅黄褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	4.5	2.3	
237	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	6.5	5.1	2.0	
238	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、赤色粒子	6.2	5.0	1.8	
239	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色、明赤褐色	褐色	灰石、角閃石	(6.6)	(4.8)	2.2	
240	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色、浅黄色	灰石、角閃石	6.6	4.8	1.8	
241	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	にぶい青褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	(6.6)	4.5	1.9	
242	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	にぶい青褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.5	5.5	2.3	
243	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	6.1	4.3	1.8	
244	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	(6.2)	(3.0)	2.1	
245	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	5.6	4.1	1.7	
246	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	にぶい青褐色	褐色	褐色	灰石、角閃石、赤色粒子	5.5	4.0	1.9	
247	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	明赤褐色、深褐色	褐色、深褐色	にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(6.2)	(4.0)	2.1	
248	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(7.1)	(5.6)	2.2	
249	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	にぶい青褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	6.0	4.8	1.9	
250	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.2	3.5	1.7	
251	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	にぶい青褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	灰石、石英、角閃石	6.1	4.6	2.2	
252	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色、浅黄色	褐色	灰石、石英、角閃石	7.0	4.7	1.5	
253	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	にぶい青褐色	褐色、浅黄色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.3	2.9	2.0	
254	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	にぶい青褐色	にぶい青褐色	灰石、角閃石	6.6	3.8	1.8	
255	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	(2.2)	5.9	2.1	
256	土師質土器	小豆	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	白色滑石	7.0	3.5	1.9	
257	土師質土器	ニコナツ	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	3.8	3.0	2.8	
258	土師質土器	ニコナツ	ニノ丸F	6区	6区	褐色	にぶい青褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	4.0	3.3	3.5	
259	土師質土器	耳紐	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	4.4	3.1	2.2	
260	土師質土器	耳紐	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	5.2	3.7	2.5	
261	土師質土器	耳紐	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.3	3.2	2.5	
262	土師質土器	耳紐	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石	5.3	3.4	2.1	
263	土師質土器	耳紐	ニノ丸F	6区	6区	褐色	褐色	褐色	灰石、石英、角閃石、赤色粒子	5.3	2.6	2.6	

カッコ付は複元品

第39表 ニノ丸F地区出土遺物観察表⑥

通報 番号	種類	出土地区	測定区	出土層位	文様	調整		色調			寸法	備考
								凹面	凸面	瓦面		
						凹面	凸面	凹面	凸面	瓦面		
264	切大瓦	二ノ丸地区	6区		唐文三巴文 (左巻き)	ナゲ				灰色	周径幅14cm、周長高0.4cm、厚0.3cm	
265	切丸瓦	二ノ丸地区	6区	刀削	唐文三巴文 (左巻き)	ナゲ				灰色	周径幅15cm、周長高0.5cm、厚0.3cm	
266	丸瓦	二ノ丸地区	6区			ナゲ、ケズリ、孔縫底、 コビ今人	ナゲ	灰色	灰色	厚0.25cm、玉縫部底2.1cm		
267	丸瓦	二ノ丸地区	6区			ナゲ、ケズリ、コビ今人	ナゲ	暗灰色	暗灰色	厚0.21cm		

## (7) G地区の調査

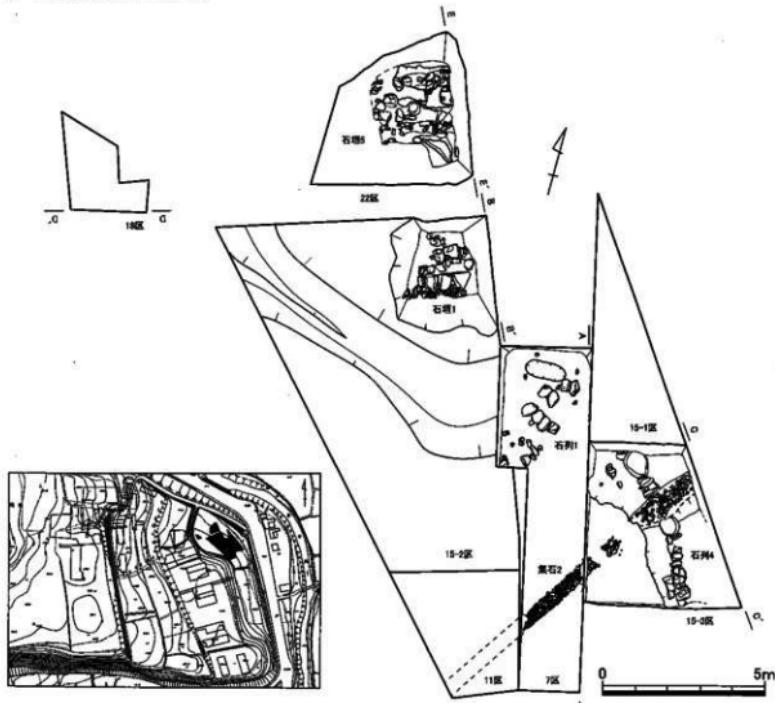
### 概要

G地区は二ノ丸地区的北東隅にあたり、日野江城跡の東側に流れる大手川に向けてやや傾斜している。G地区の東側では、矢櫃線が日野江城跡二ノ丸地区と大手川を切断するように南北方向に走っており、道路建設に伴い二ノ丸地区の東側は削平されている。このため、日野江城築城当時におけるG地区から大手川にかけての様相は現状地形において確認できない。

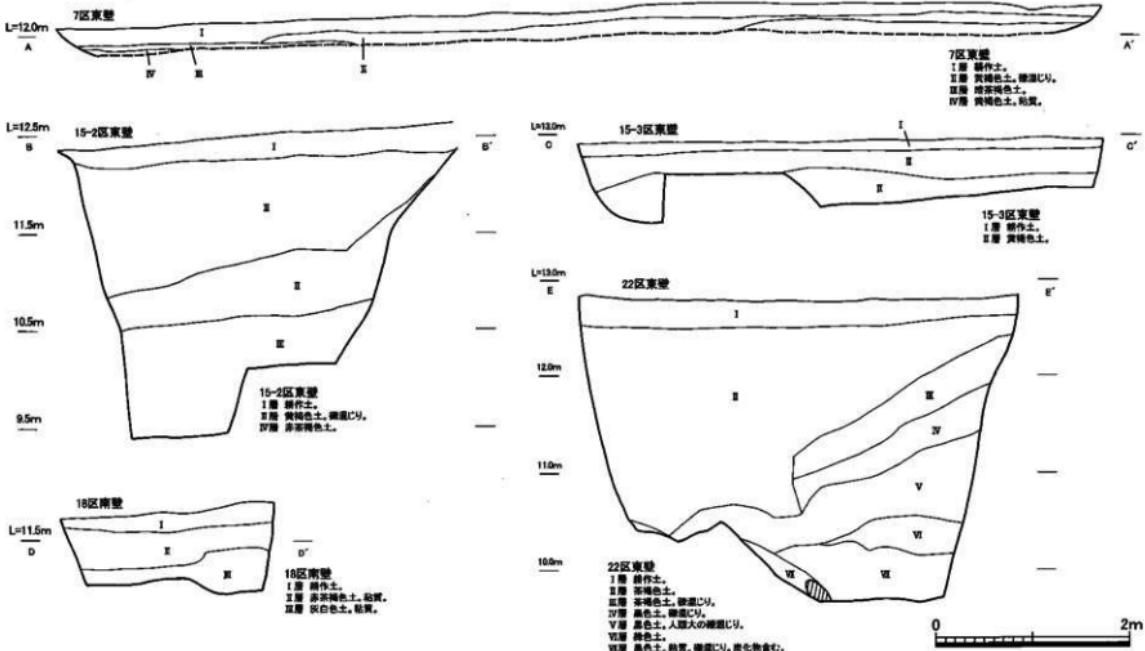
G地区では、平成7年度に7区(25.0m<sup>2</sup>)の発掘調査を行っており、続く平成8年度には11区(7.4m<sup>2</sup>)、15-1区(10.5m<sup>2</sup>)、15-2区(50.3m<sup>2</sup>)、15-3区(14.2m<sup>2</sup>)、18区(4.8m<sup>2</sup>)、平成9年度には22区(18.1m<sup>2</sup>)の調査を行う。

### 土層

G地区の基本層序については過去の報告においてE~F地区と同様の堆積となっており、以下のようになる。ただし、これを各調査区の土層と対比させた場合、Ⅱ層以下については土層断面図で基本層序の堆積を確認できない。



第183図 ニノ丸G地区遺構配置図 (S=1/150)



第184図 ニノ丸G地区土層断面図 (S=1/50)

- I層 耕作土層。  
 II層 黄褐色土層。挙大から人頭大の礫を多量に含む。  
 15~18世紀初頭頃の遺物包含層  
 III層 暗茶褐色土層。  
 IV層 黄褐色粘質土層。  
 V層 暗茶褐色粘質土層。炭化物含む。  
 VI層 茶褐色土層

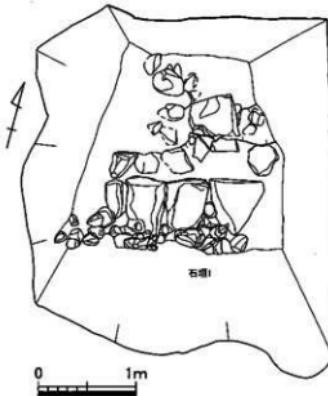
#### 造構

G地区では平成7年度に7区の調査を行っており、調査区の北側では石垣1を、南側では集石2を検出する。集石2については調査区の東西両側に延びており、この範囲確認のため平成8年度には11区、15-3区の調査を行う。両調査区では、7区で検出した集石2の続きを確認したが、11区については実測図がないため、第183図に集石の推定ラインを入れる。石垣1の範囲については、平成8年度に15-1区、15-2区の調査を行なうが、詳細については明らかに出来ない。平成8年度の調査では、このほか15-2区北東隅の断ち割りでD地区の石垣1に続く石垣を検出する。15-3区では南北方向に延びる石垣4も確認する。平成9年度には、15-2区で検出した石垣の対になる石垣を確認するため22区を設け調査を行う。22区では石垣の石材と思われる石を検出したが、大部分が倒壊しており様相を明らかにすることは困難であった。

#### 石垣1 (15-2区)

15-2区北西隅において、東西方向に延びる石垣を検出する。検出長は約1.7mで、基底部の根石のみ残る。石面は北側で揃えられており、南側では幅10~20cmの裏込め石を検出する。石材は、石面の幅が40~50cmで控えは50~60cmを測る。

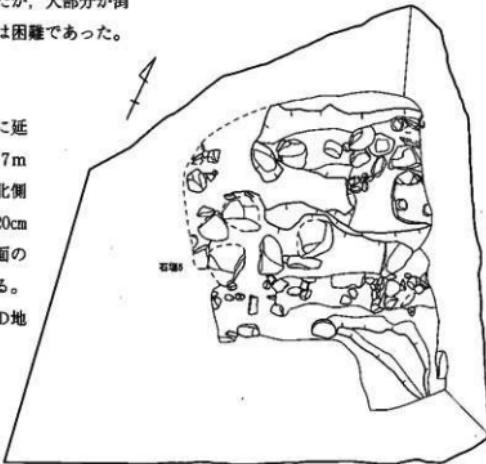
検出した位置と石垣の様相から、D地区の13区で検出した石垣1に続く石垣と思われるが、これに伴う階段の踏石列は倒壊しており検出していない。



第185図 15-2区実測図 (S=1/50)

#### 石垣5 (22区)

22区中央から、東西方向に並ぶ幅



第186図 22区実測図 (S=1/50)

50cmほどの石を三つ検出する。D地区で検出した溝跡9の側壁に繋がる可能性が高いが、全体が倒壊しており原位置を保っているか不明なため、明らかに出来ない。

#### 石列4（15-3区）

15-3区東壁沿いを南北方向に延びる石列で、第2層黄褐色疊土層中で検出する。15-2区、22区で確認されるように、G地区では日野江城が機能していた時期の遺構の上に厚く造成土が盛られており、15-3区で検出した石列は後世の遺構と思われる。遺構の性格については不明である。

#### 集石2（7区・11区・15-3区）

15-3区から11区にかけて、幅3~20cmの小礫からなる集石を検出する。7区南側の集石は検出位置を明確に出来ず、11区についても同様であるが、11区から15-3区にかけて東西方向に延びる。遺構の性格は不明である。15-3区で検出した石列4との切合関係から、石列4より新しい時期の遺構と思われる。

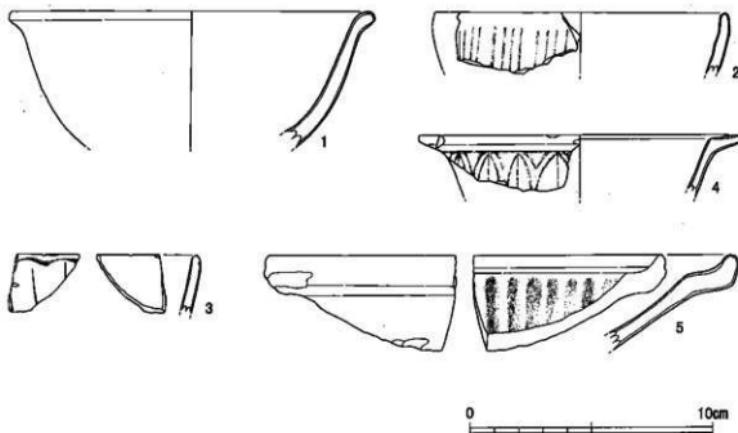
#### 遺物

1~5は青磁の資料である。1は口縁部が外反する無文の碗である。2は口縁部が内湾気味に立ち上がる碗で、外面には線描きの蓮弁文を施す。3は外面に線描きの蓮弁文を入れる。4は口縁部を外に折る碗の資料で、外面には錦蓮弁文を入れる。5は皿で、口縁部を一端外に折り、さらにそこから立ち上げる。体部内面には蓮弁文を入れる。貯入が入る。

6~9は白磁である。6・7はどちらも直線的に大きく外傾して立ち上がる口縁部を持つ。口唇部は上端からなで付けることにより平坦になっている。8は大きく外反する口縁部の資料で、外面には口縁部下で段を作り、口唇部には抉りが1箇所に入る。9は小杯の資料で、高台付近は釉剥ぎを施し、見込みにも蛇の目状の釉剥ぎを施す。

10~22は青花の資料である。10は端反の碗で、外面に文様を描く。11は内外に界線1条を入れ、外面に文様を描く。12は碗の底部から胴部下半にかけての資料で、外面胴部と内面見込みに丸文を充填する。13~15は端反皿の資料である。13は胴部から口縁部にかけての資料で、外面には唐草文を描く。14はやや難な線描きの文様を入れる。15は外面に梵字文を連續的に描く。16は粗製皿で、釉には貯入が入る。口唇部の釉は剥落が著しい。17・18は粗製の皿口縁部で、同一個体であるかもしれない。外面口縁部に簡略化した四方櫛文を描き、内面口縁部にも界線1条を入れる。釉には細かく貯入がいる。19は外傾して立ち上がる口縁部の資料で、外面は無文、内面には文様を入れる。文様は淡い発色である。20は皿の見込み部分であろうと思われる。器壁は薄いが、焼きは甘く粗製である。内面には文様が入るが、獅子であろうか。21は大型の皿あるいは鉢の胴部下位の部分である。作りは粗製で器壁が厚い。内面の見込みと胴部立ち上がりの境には段を設け、見込みには界線を引いて文様を描く。22は底部の資料で、高台内には釉が掛かるが、5mm幅程度の工具で搔きとった痕跡が残る。高台疊付部分は釉剥ぎを施す。内面見込みに描かれているのは玉取獅子であろう。

23~27は陶器の資料である。23~25は貯蔵器の底部である。24は外面に凹凸を残し、底面には離れ



第187図 ニノ丸G地区出土の遺物① (S=1/2)

砂が付着する。25は外面に鉄軸が流れる。26は回転ロクロ成形で、支脚がつく。27は唐津焼で灰色の釉が掛かる。体部下半は露胎である。

28~34は瓦質土器である。28・29は火鉢の資料である。28は底部付近で、体部下位に段を設ける。29は突帯を1条貼り付ける。30~34は擂鉢である。30は口縁部がやや肥厚し、内面には6本単位の幅広のクシ目を2方向に入れる。31のクシ目は7本単位で、外面口縁部は横ナデする。32は薄手の作りで、幅の狭い11本単位のクシ目を施す。

35~71は土師質土器である。35~46は壺である。35~38は底面に粗い糸切痕が残る。外面は工具調整の後ナデ調整で、内面には成形時の凹凸が残る。39も35~38に類する資料と思われ、成形時の調整は同様である。糸切調整も粗い。内面の見込みから体部の立ち上がりで明瞭に境界を作る。

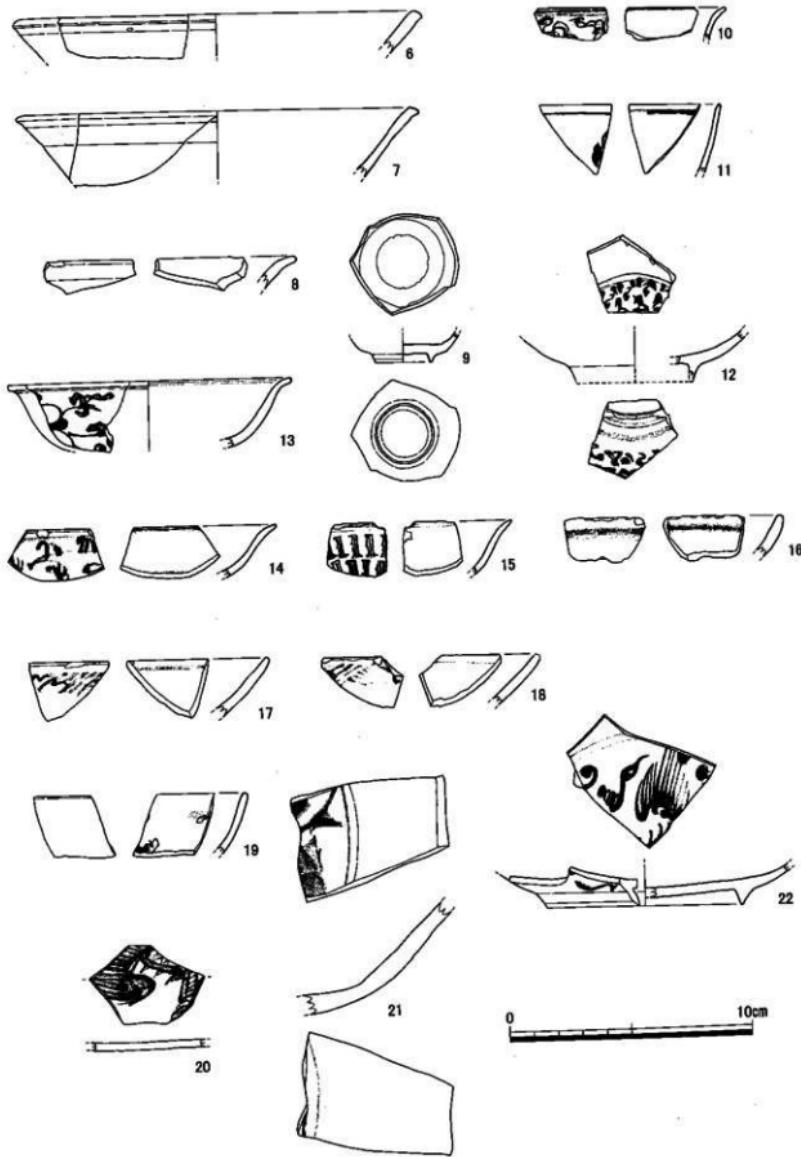
40は底部の糸切痕が細かく、口縁部断面は先細りになる。内外面に煤が付着する。41は胎土に赤色粒子を含み、体部は腰が張って、硬質で軽く焼成が良好である。

42~46は見込みを作らず直線的に口縁部が外傾するものである。43・44のように大きめの粘土柱から切り離したものと、42・45・46のように径の小さい粘土柱から切り離したものとがある。43・46の糸切痕は粗く、ほかは細かい。42は内外面に黒斑がつく。

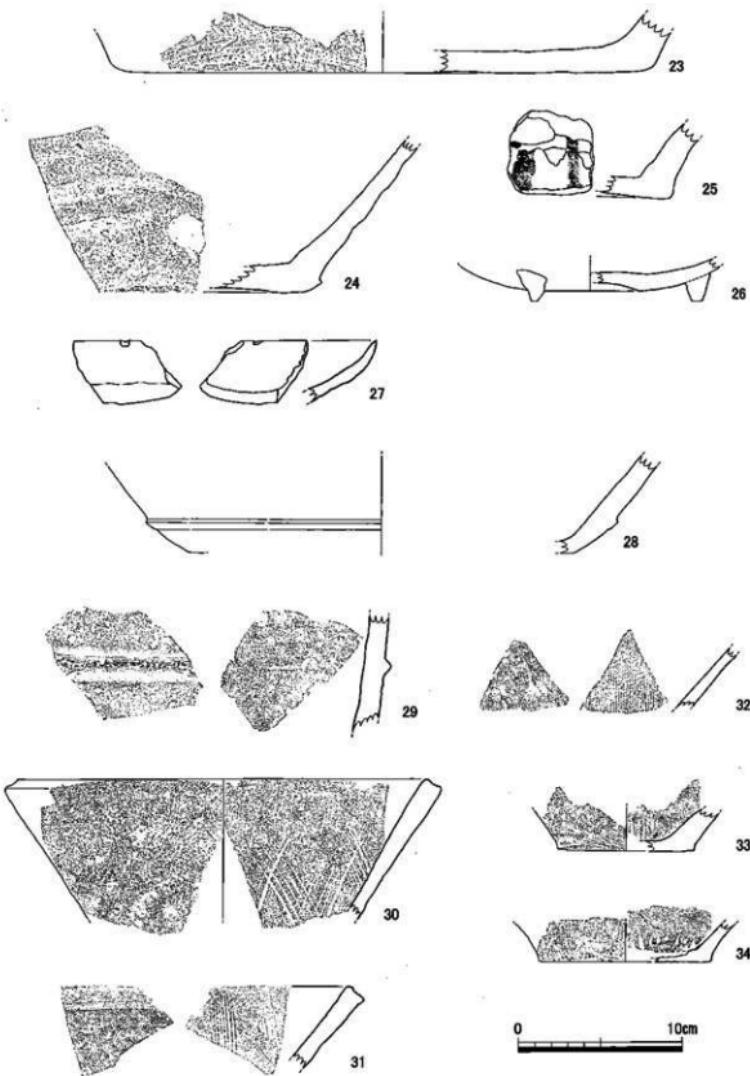
47~66は小皿である。49は赤色粒子を多く含む胎土で、糸切痕は粗い。器壁は厚く、外面体部は腰が張る。50・51も糸切痕は粗く、器壁も厚い。51には口縁部に炭化物の付着が認められる。47は赤色粒子を多く含む胎土で、径の割には口縁部の立ち上がりは浅い。時期的にやや古いものであろう。48も赤色粒子を多く含む胎土で、底面の糸切痕は粗い。

52~54は口縁部が直立に近く立ち上がり、やや高さがある。53は二次的被熱によって全体が黒色化する。57・59・60には口縁部に炭化物の付着が認められる。

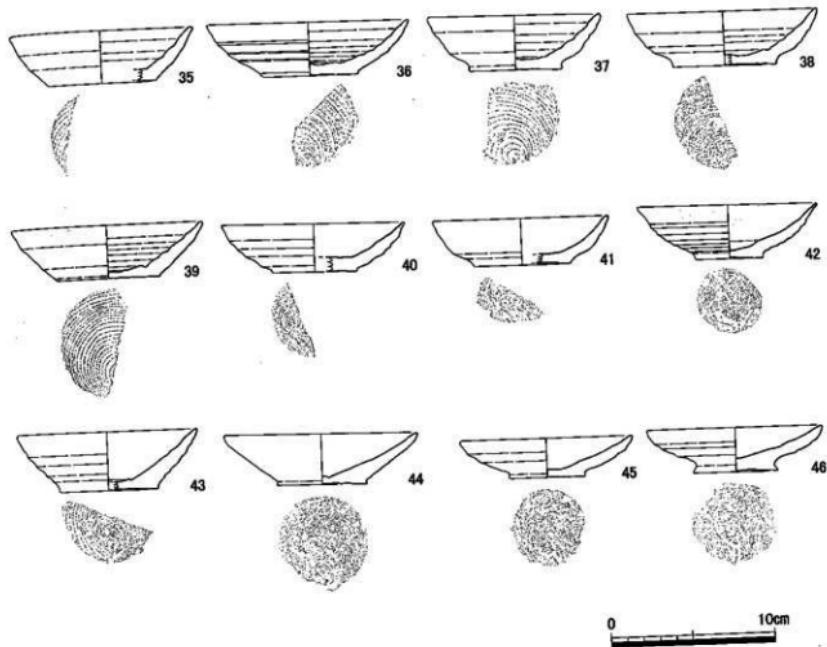
62・63は径の小さい粘土柱からの切り離しで、体部はやや丸みを帯び、どちらも口縁部には炭化物



第188図 ニノ丸G地区出土の遺物② (S=1/2)



第189図 ニノ丸G地区出土の遺物③ (S=1/3)



第190図 ニノ丸G地区出土の遺物④ (S=1/3)

が付着する。

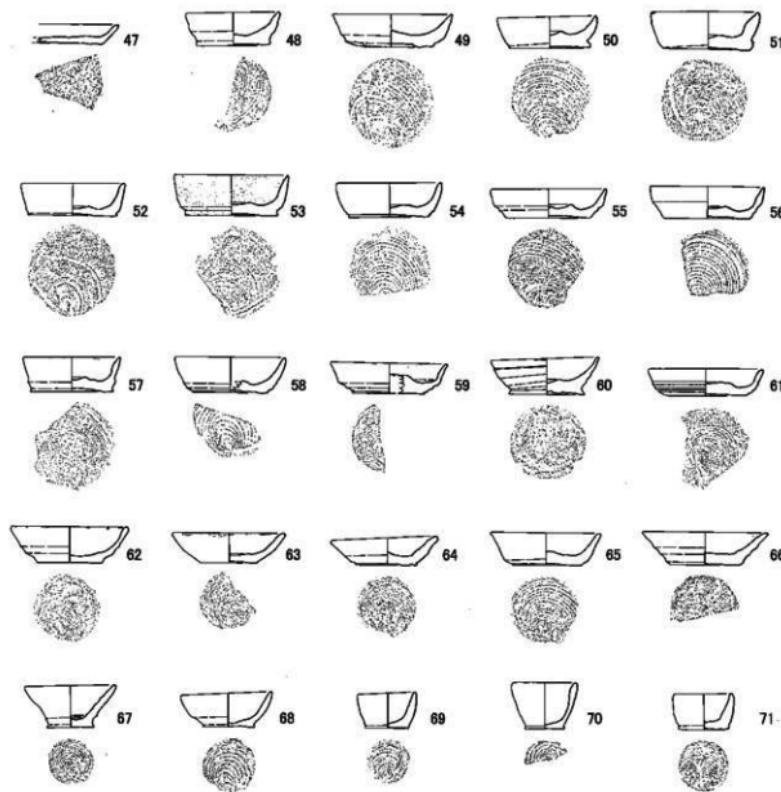
64・65は内面見込み中央が低く尖り、器形的にはやや腰が張って口縁部は外反する。底面の糸切痕は、64は細かく、65は粗い。

66は白色系の精製された砂粒を含まない胎土で、非常に細かい赤色粒子が多く含まれる。焼成が甘く、非常に軟質である。

67・68は小坏で、どちらも粗い糸切痕が底面に残る。68は赤色粒子を含む胎土で、焼成がよく、硬質である。

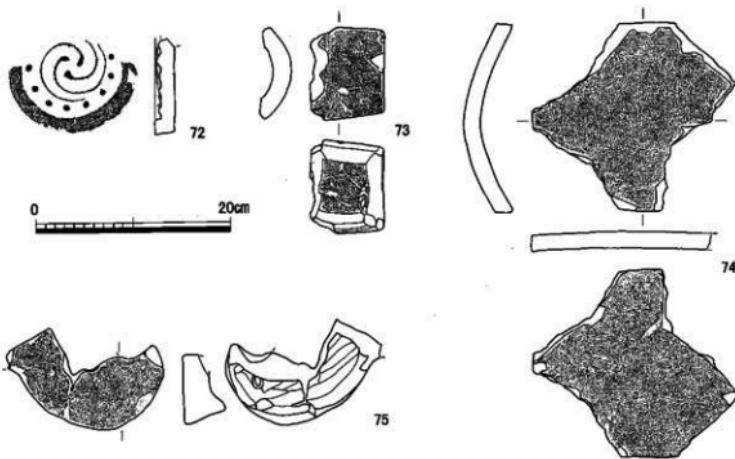
69～71はミニチュア土器である。底面には糸切痕が残され、いずれも粗い。

72～75は瓦の資料である。72は軒丸瓦の瓦当部で、巴文、珠文を入れる。73は面戸瓦で、凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕が残り、周縁には面取りを施す。74は平瓦である。75は鬼瓦の一部で、表面は丁寧になで、裏面にはケズリを粗く施す。



0 10cm

第191図 ニノ丸G地区出土の遺物⑤ (S=1/3)



第192図 二ノ丸G地区出土の遺物⑥ (S=1/5)

第40表 二ノ丸G地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	青磁	碗	二ノ丸地区	15区	-	復元口径14.8cm
2	青磁	碗	二ノ丸地区	15区	-	復元口径12.0cm
3	青磁	碗	二ノ丸地区	11区	-	
4	青磁	碗	二ノ丸地区	15区	-	復元口径13.2cm
5	青磁	皿	二ノ丸地区	15区	-	
6	白磁	碗	二ノ丸地区	15区	-	復元口径16.2cm
7	白磁	碗	二ノ丸地区	15区	-	復元口径15.8cm
8	白磁	皿	二ノ丸地区	15区	-	
9	白磁	小环	二ノ丸地区	15区	-	直径2.4cm
10	青花	碗	二ノ丸地区	15区	-	
11	青花	碗	二ノ丸地区	15区	-	
12	青花	碗	二ノ丸地区	15区	-	復元底径4.7cm
13	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	復元口径11.6cm
14	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	
15	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	
16	青花	皿	二ノ丸地区	7区	II層	
17	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	
18	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	
19	青花	皿	二ノ丸地区	7区	-	
20	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	
21	青花	皿	二ノ丸地区	15区	-	
22	青花	皿	二ノ丸地区	18区	-	復元底径8.0cm
23	陶器	-	二ノ丸地区	18区	-	復元底径29.0cm
24	陶器	-	二ノ丸地区	15区	-	
25	陶器	-	二ノ丸地区	18区	-	
26	陶器	香炉	二ノ丸地区	18区	-	
27	陶器	皿	二ノ丸地区	15区	-	

第41表 ニノ九G地区出土遺物観察表②

番号	種別	器種	地区	調査区	出土層位	色調			胎土	寸法(cm)		
						外面		内面		口径	高さ	厚さ
						上面	下面	底面		口径	高さ	厚さ
28	瓦質土器	火鉢	二ノ九地区	18区		褐色	黃褐色		灰石	石瓦、角閃石、赤色粒子		
29	瓦質土器	火鉢	二ノ九地区	18区		灰白色	深褐色		灰石			
30	瓦質土器	罐	二ノ九地区	18区		に近い褐色	に近い褐色		灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(18.2)		
31	瓦質土器	罐	二ノ九地区	18区		灰色	灰色		灰石、石瓦、赤色粒子			
32	瓦質土器	罐	二ノ九地区	18区		灰色	灰色		灰石、石瓦、赤色粒子、白色素子			
33	瓦質土器	罐	二ノ九地区	18区		灰色	灰色	灰色	灰石、石瓦、(17.2)			
34	瓦質土器	罐	二ノ九地区	18区		灰色	灰色	灰色	灰石、金色露母	(10.0)		
35	瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(11.0)	(5.6)	3.3
36	瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦	(11.0)	(5.6)	3.3
37	瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.0)	(5.2)	3.4
38	瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(11.0)	(5.2)	3.4
39	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦	(11.0)	6.3	1.2
40	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、金色露母	(11.0)	(5.2)	3.3
41	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		に近い褐色	に近い褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.0)	(5.6)	2.5
42	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、(10.0)	4.9	3.3	
43	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		に近い褐色	に近い褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.0)	(5.0)	3.6
44	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		明赤褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(11.0)	5.4	1.1
45	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(10.0)	4.5	2.4
46	土質瓦質土器	杯	二ノ九地区	18区		に近い赤褐色	に近い赤褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(10.0)	5.1	2.7
47	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		明赤褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子			1.2
48	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い赤褐色	に近い赤褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(5.6)	4.5	2.0
49	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い褐色	に近い褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(7.0)	5.4	2.0
50	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い赤褐色	に近い赤褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(6.0)	4.9	2.0
51	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(5.5)	5.3	2.4
52	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(5.2)	5.4	1.0
53	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い褐色、褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦	(6.0)	5.6	2.5
54	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		赤褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦	(6.0)	5.0	2.1
55	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(6.0)	5.0	1.8
56	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦	(6.0)	(5.2)	2.0
57	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		浅赤褐色	浅赤褐色	褐色	灰石、石瓦	(5.0)	5.1	2.1
58	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、赤色粒子	(6.0)	4.6	2.2
59	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦	(7.0)	(4.5)	1.9
60	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		明赤褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石瓦	6.4	4.6	2.3
61	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い褐色	に近い褐色	褐色	灰石、石瓦	(6.0)	(5.1)	1.7
62	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	(7.0)	6.0	2.2
63	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(6.0)	3.4	1.8
64	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、金色露母	6.4	3.8	1.9
65	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		明赤褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石瓦	6.4	4.6	2.3
66	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い褐色	に近い褐色	褐色	灰石、石瓦	(6.0)	(5.1)	1.7
67	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		に近い赤褐色	に近い赤褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	5.4	2.9	2.5
68	土質瓦質土器	小瓶	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、角閃石、赤色粒子	5.4	3.2	2.5
69	土質瓦質土器	1ニチナ	二ノ九地区	18区		に近い赤褐色	に近い赤褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	3.5	2.8	2.2
70	土質瓦質土器	1ニチナ	二ノ九地区	18区		褐色	褐色	褐色	灰石、石瓦、赤色粒子	(3.7)	(2.0)	2.0
71	土質瓦質土器	1ニチナ	二ノ九地区	18区		褐色	明赤褐色	褐色	灰石、石瓦	(3.5)	2.0	2.2

カッコ付者は復元品

第42表 ニノ九G地区出土遺物観察表③

番号	種別	地区	調査区	出土層位	文様	質感		色調	寸法	備考
						凹面	凸面			
						凹面	凸面			
72	新瓦	二ノ九地区	18区		萬字三巴文 (左巻き)			黑色		
73	圓瓦	二ノ九地区	18区		(瓦頭面) ナテ				(瓦頭面) 瓦厚15mm、内径10.2cm、周縁部15mm、底縁部6.5cm、高さ70mm	
74	平瓦	二ノ九地区	18区		ナテ	ナテ	ナテ	黑色	長さ77mm、幅さ40mm、高さ32mm、厚さ19mm	
75	鬼瓦	二ノ九地区	18区		ナテ、ケズリ	ナテ	ナテ	黑色	長さ43mm、厚さ17mm、高さ32mm	

日野江城跡二ノ丸地区については、平成7年度から平成12年度にかけて旧北有馬町教育委員会が発掘調査を実施し、報告書の刊行を行っている。(註1)

ただし、本書では新たに造構番号をつけ直したため、以下の表において過去に報告した造構との対応を示す。

#### (註釈)

- (註1) 木村岳士編 1998 「日野江城跡」 北有馬町文化財発掘調査報告書第2集 北有馬町教育委員会  
 木村岳士編 1999 「日野江城跡」 北有馬町文化財発掘調査報告書第3集 北有馬町教育委員会  
 木村岳士編 2001 「日野江城跡」 北有馬町文化財発掘調査報告書第4集 北有馬町教育委員会  
 木村岳士編 2005 「日野江城跡」 北有馬町文化財発掘調査報告書第5集 北有馬町教育委員会

第43表 二ノ丸地区検出造構対応表

造構番号	報告書	報告書の造構名	地区名	調査区
階段1	第2集	階段状遺構	B地区	9区
		階段I	A地区	26区
		階段II	C地区	19区
		階段III	C地区	21区
階段2	第4集	階段IV	D地区	17区、20区、27区
		階段V	D地区	13区、17区、20区、27区、32区
階段3	第4集	階段VI	A地区	28区
		階段VII	B地区	30区、33-1区
階段4	第4集	階段VIII	D地区	13区
石垣1	第4集	石垣II	D地区	13区
	第4集	遺構としては未報告	G地区	15-2区
石垣2	第4集	石垣II	D地区	17区
石垣3	第4集	石垣I・SF3	C地区	19区
石垣4	第4集	石垣I	C地区	21区
石垣5	第4集	遺構としては未報告	G地区	22区
石垣6	第4集	石垣IIc	A地区	28区
石垣7	第4集	石垣IIa	B地区	30区
石垣8	第4集	石垣IIb	B地区	33-1区
溝跡1	第2集		D地区	13区
溝跡2	第2集		D地区	13区
溝跡3	第2集		D地区	13区
溝跡4	第2集	溝跡	D地区	13区
溝跡5	第2集		D地区	13区
溝跡6	第2集		D地区	13区
溝跡7			B地区	14-1区、14-2区、14-3区、B-1区、B-2区
溝跡8	第4集	溝跡	C地区	19区
溝跡9			D地区	20区、27区
溝跡10	第4集	溝跡	A地区	28区
			B地区	33-1区
土塁1	第2集	SK1	F地区	5区
土塁2	第2集	SK2	F地区	6区
土塁3	第2集	SK3	F地区	6区
土塁4	第2集	SK4	F地区	6区
土塁5	第2集	SK5	F地区	6区
石列1			G地区	7区
石列2	第2集	遺構状造構	E地区	9区
石列3	第2集	石列遺構	E地区	10区
石列4			G地区	15-3区
石列5	第2集	礫石	D地区	13区
礫石1	第2集	素石	B地区	3区
礫石2			G地区	7区、11区、15-3区
礫石3			E地区	8-1区
礫石4			C地区	12区
礫石5			B地区	34区
礫石6			B地区	35区
掘立柱建物跡1			A地区	29区
掘立柱建物跡2			A地区	29区
掘立柱建物跡3			A地区	29区
柱穴列1			E地区	1区
柱穴列2			E地区	2区
柱穴列3			B地区	36区
ピット群1	第2集	柱穴	E地区	5区
ピット群2	第2集	柱穴	F地区	6区
ピット群3	第2集	柱穴	D地区	13区
ピット群4	第2集	柱穴	B地区	14-1区、14-2区
礫石群1	第3集・第4集	石列遺構	E地区	16区
礫石群2		礫石	A地区	28区

## 第4節 大手川地区の調査

### 概要

日野江城跡の東側にある大手川は、北から南へ向かって蛇行しながら流れ有明海に注ぐ。大手川が日野江城跡に最も近接するのは二ノ丸地区北東隅付近で、平成11年度にはこの二ノ丸地区東側の大手川沿いに、南北に並ぶ5箇所の調査区を設定する。各調査区の調査面積は、1区が37.5m<sup>2</sup>、2区23.0m<sup>2</sup>、3区10.5m<sup>2</sup>、4区7.0m<sup>2</sup>、5区21.0m<sup>2</sup>である。

### 土層

大手川地区において確認した層序は、大きく以下の5層に分けられる。

I層 耕作土。

II層 茶褐色土。2区では砾を含まない上層と砾を含む下層の2層に分かれる。

III層 暗茶褐色土。石垣1、石列2の堆積土で、調査区によっては分層できる。1区南西隅では石垣1に堆積するが、北側では削平され岩盤の直上にII層が堆積する。

IV層 茶褐色土。1～4区においては石垣1、石列1より東側で、5区においてはトレンチ全体で確認。大手川が流れる東方へ向けて堆積しており、2区の北壁東側ではIV層中に川砂の堆積を確認する。

V層 碓層。石垣2の堆積土。

### 遺構

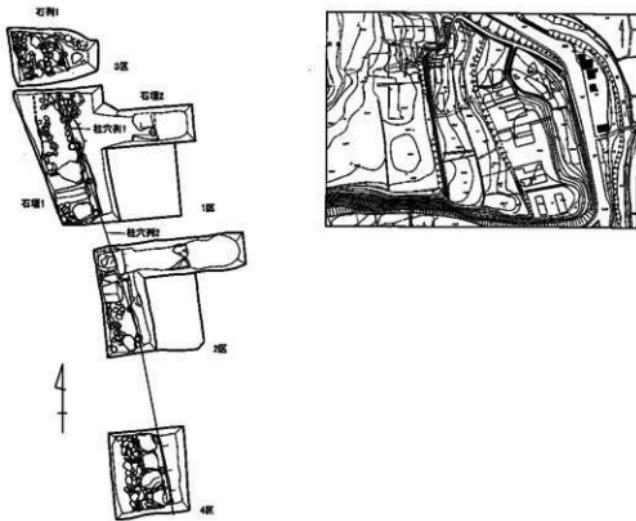
発掘調査の結果、1・2・4区から東側の石面を揃え、南北方向にはほぼ直線状に延びる石垣1を検出する。石垣の北側延長上には幅20～30cmほどの石が並んでおり（石列1）、石垣1の東側ではこれと平行して南北方向に延びる2列の柱穴列を検出する（柱穴列1、柱穴列2）。2列の柱穴列は、柱間寸法に差異があるため異なる遺構と思われるが、両遺構とも上部構造については言及できていない。

3区では、石列1より0.7m東側から長軸が1.35m以上ある木材を検出するが、これについてもどのような遺構に伴うものか明らかに出来ていない。

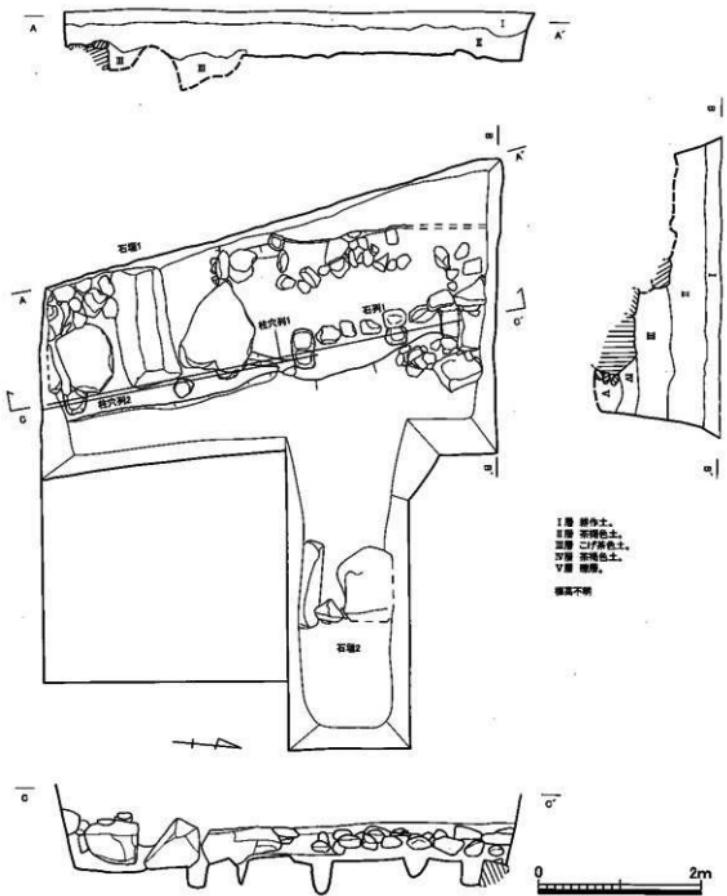
このほか、1・2区では、石垣1より3.0m東側から同じく南北方向に延びる石垣2を検出する。5区では東側で石垣3、西側で石列2を検出しており、両遺構の東側からはそれぞれピットを検出する（ピット群1、柱穴列3）。東側の石垣3は石垣1と同様に東側石面を揃えているが、二つの石垣の軸はややずれており同一の遺構か判断できていないため、本書では別の遺構として扱う。

### 石垣1（1区、2区、4区）

1区から4区にかけて、南北方向に延びる石垣を検出する。検出長は約11.4mで根石のみ残存しており、残存高は0.7mを測る。大手川が流れる扇状地の方向へ石面が揃うように構築されており、城外と城内を隔てる石垣の可能性がある。石材には石面幅が50～80cm、控えが60cm～1mほどの石を用いており、北側の階段付近では控えが1.5mほどで全体に加工が施された石を確認する。



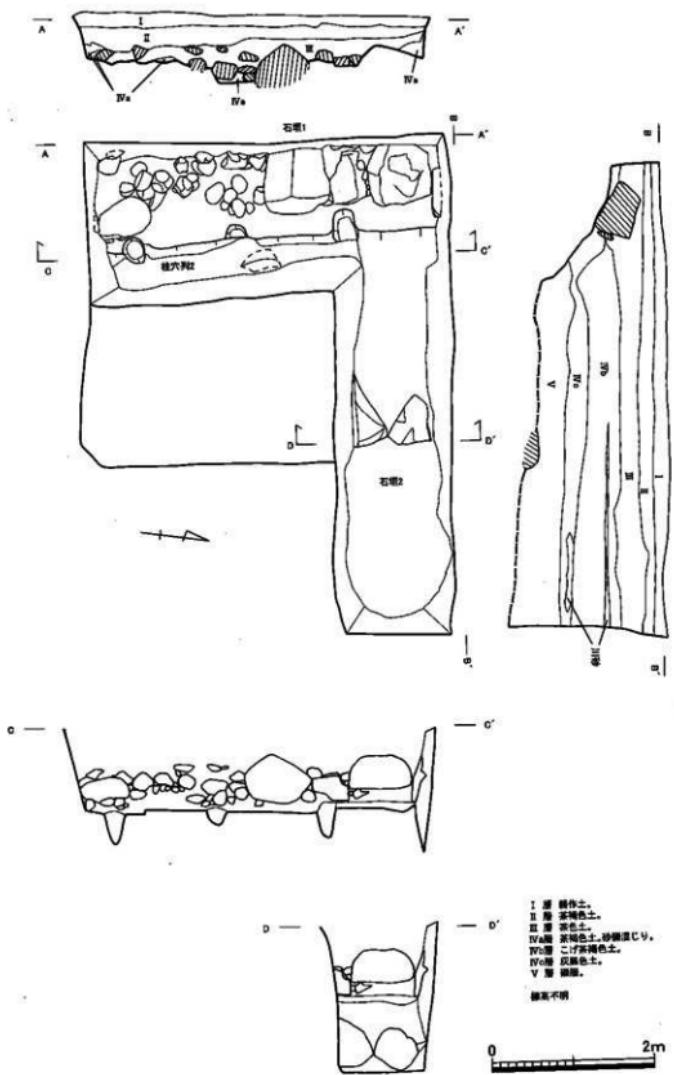
第193図 大手川地区造構配置図 (S=1/200)



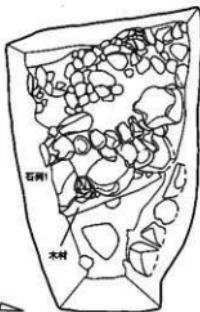
第194図 1区実測図 (S=1/60)

### 石垣2（1区、2区）

石垣1より3.0mほど東から、南北方向に延びる石列を検出する。確認したのは1・2区東側断ち割りから検出した4石の石材のみで遺構の全体については不明であるが、東側の石面を描え、控えが長くなるように据えられていることから石垣の基底部と思われる。ただし、裏込め石は確認しておらず、2区では石材が疊層で覆われていた。検出長は約1.7m、残存高0.5mを測る。

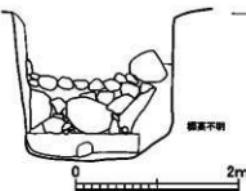


第195図 2区実測図 (S=1/60)



### 石列1 (1区, 3区)

1区北側から3区にかけて検出した南北方向に延びる石列で、南端は石垣1北端から0.6mほど北で検出する。幅20~30cmの自然石が直線状に並ぶが、1区西側では同様に南北方向に石が並ぶ箇所があり、東西方向に延びる階段の踏石であった可能性もある。ただし、検出した石列や石積みについて詳細が分からぬため本書では石列とする。また、石列の東側は石垣1の東側石面とはばら撒つておらず同時期の遺構と思われるが、これについても調査において明確に出来ていない。



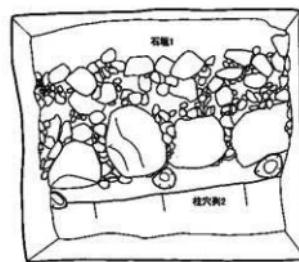
第196図 3区実測図 (S=1/60)



### 柱穴列1 (1区)

1区北側から中央にかけて検出した4基の柱穴が、南北方向に並ぶ。北側の2基については石列1に沿うが、南端の2基は石垣1下で検出する。但し、石垣1北端の石材は石面の向きが他の石材とずれており原位置を保っていないため、石垣1との前後関係については明らかに出来ていない。

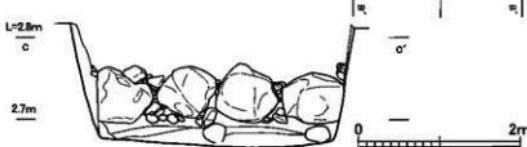
柱穴の柱間寸法は、北から0.7m, 2.15m, 1.9m, 径は0.25~0.3mを測る。



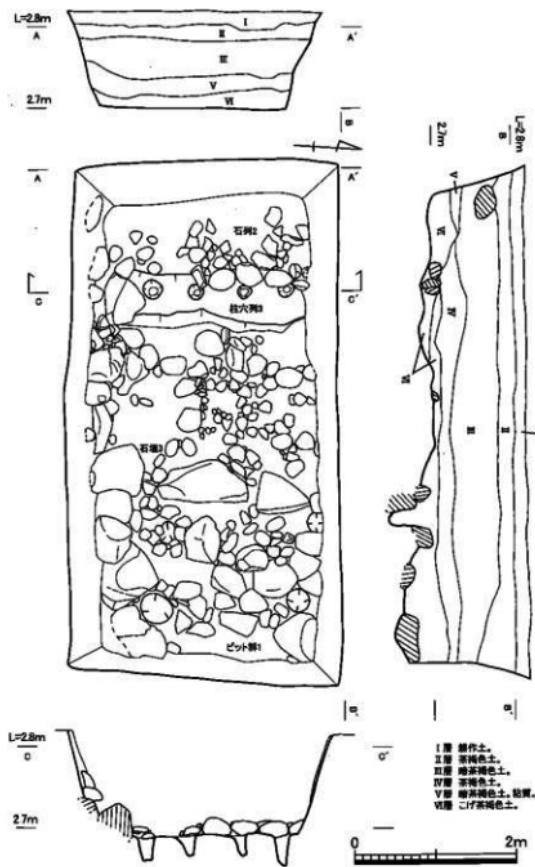
### 柱穴列2 (1区, 2区, 4区)

1区南側から4区にかけて検出した柱穴列で、石垣1の東側に沿って南北方向に8基のピットが並ぶ。検出長は約15mで、ピット間の間隔は北から1.55m, 4.0m, 13.5m, 13.5m, 3.5m, 1.3m, 1.3m, 径は0.3m前後を測る。

中心軸は柱穴列1の軸とほぼ同じだが、柱穴列1と比較するとピット間の間隔が広く、石垣1と



第197図 4区実測図 (S=1/60)



第198図 5区実測図 (S=1/60)

ト間の間隔は東側で1.77m、西側で1.85mを測る。

#### 石列2（5区）

5区西側で、長さ1.0mの南北方向に延びる石列を検出する。使用された石材は35×25cm程度の自然石で石積みはみられないが、西側では拳大の礫を大量に検出しており、何石かの石積みが存在していた可能性もある。

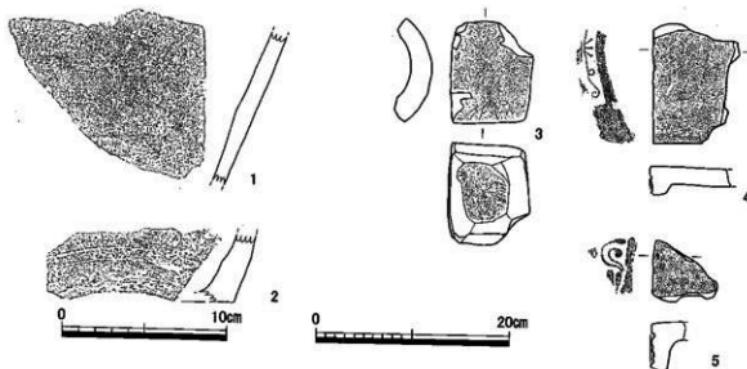
も切り合っていない。  
柱列と推測されるが、  
上部構造については不明である。

#### 石垣3（5区）

5区東側から検出した石列で、南北方向に延びる。検出長は2.7mで、石面を東側で描え大量の裏込め石が検出されることから石垣の基底部と推測されるが、大部分が倒壊して石材が散乱しており、基底部についても原位置を保っていない可能性がある。石面の幅は70cm～1.1m、高さは50cm、控え60cmほどで、石面の幅に比べて控えがかなり短い。

#### ビット群1（5区）

5区東側から、4基のビットを検出する。東西それぞれ2基ずつは南北方向に並ぶが、東側と西側のビットでは軸が多少ずれる。ビッ



第199図 大手川地区出土の遺物 (1・2:S=1/3, その他:S=1/5)

### 柱穴列3 (5区)

5区西側から石列2に沿って検出した柱穴列で、4基のビットが南北方向に並ぶ。平面形は円形を呈し、径は0.15~0.2mとほかの柱穴に比べてやや小さい。柱穴の柱間寸法は0.5mで深さも揃っており柱穴と思われるが、上部構造および石列2との関係については不明。東側の南壁沿いでは瓦が出土する。

### 遺物

1・2は陶器である。1は貯蔵器の体部片で、内外面ともにぶい赤褐色を呈する。2は底部の資料で、壺になるものであろうか。外面にはケズリ調整が施される。

3は面戸瓦である。凹面にはコピキA痕と布目を残し、周縁は面取りを施す。4・5は軒平瓦である。4は瓦当部に三葉文と唐草文を配す。5は瓦当部の高さが高く、逆さの中心筋りと巻きの強い唐草文が入る。滑石粉末が離れ砂代わりに用いられ、時期的には他の日野江城跡の瓦資料より下るものであろう。

第44表 大手川地区出土遺物観察表①

番号	種別	器種	地区	調査区	層位	法量
1	周器	—	大手川地区	—	—	
2	陶器	—	大手川地区	—	—	

第45表 大手川地区出土遺物観察表②

通数 番号	種別	出土地区	調査区	出土層位	文様	測量				法量	備考
						四面	凸面	凹面	正反		
3	面戸瓦	大手川地区			ナデ、ケズリ、布目、コピキA痕	ナデ	赤色	赤色	正反	長87.0cm、幅87.0cm、高さ3.7cm、厚さ2.3cm	
4	軒平瓦	大手川地区			赤色、三葉文、唐草文(二段)	ナデ	場浜色	場浜色	場浜色	(平瓦面) 長度82.0cm、幅81.0cm、 (瓦当面) 内区高1.4cm、瓦当高2.9cm	
5	軒平瓦	大手川地区			唐草文	ナデ	場浜色	場浜色	場浜色	(平瓦面) 軒82.0cm、(瓦当面) 内区高3.0cm、 瓦当高3.1cm	

## 第IV章 総 括

### 第1節 日野江城跡の遺構と遺物

#### (1) 日野江城跡の構造とその変遷

##### ①丘陵の利用と改変

日野江城跡が立地するのは雲仙山系から有明海へと向かって派生する丘陵の末端部（ここでは「日野江丘陵」とよぶことにする。）である。この日野江丘陵の特徴は、眼下に有馬川・大手川の両河川とその河川によって形成された低湿地を望む地理的環境下にあることで、その先には有明海が広がって外海とも通じる。こうした状況は、同時期の近隣遺跡として同じ有馬川水系では今福遺跡があり、また低湿地帯を北側に臨む原城跡も似たような環境下にあるといえる。

日野江丘陵においてその利用が始まるのは、弥生時代である。遺構としてこのことを確認するにはいたっていないが、二ノ丸地区からは弥生時代中期の土器がある程度出土しており、この時期が現段階で明らかな日野江丘陵における利用時期の上限である。

中央に雲仙山系の山々がそびえる島原半島は、大規模な沖積地の発達に乏しいが、半島の東側では比較的緩やかな丘陵や扇状地が有明海へと下っていて、その緩斜面上に時代を問わず良好な遺跡が群をなして展開することが多い。そうした分布のなかでひとつ指摘できるのは、弥生時代前期の遺跡が極端に少ないとことである。これについては、良好な沖積地の形成が少ないという地理的要因によって、水稻農耕文化の受容が遅れたためと理解されている。日野江丘陵も例外ではなく、半島の中では比較的水量を持つ有馬川下流付近で、低湿地を利用して水稻農耕文化が運びながら受容され、その結果弥生時代中期になって隣接する丘陵が新たな居住エリアとして選定されたことを物語るものであろう。

日野江丘陵に居住した人々の労働力は、大部分が丘陵以下の低湿地における耕作地の開拓とその耕作に向けられたことが想定される。しかしながら近隣の今福遺跡では環濠と見られる「V」字溝や墓塚なども検出されており、日野江丘陵においても今後の発掘調査によって住居や埋葬施設など生活にかかる何らかの改変が明らかになる可能性は十分に考えられよう。

その後中世後期にいたるまで、今のところ日野江丘陵において明確な遺構は確認されていない。これは島原半島南部における古代から中世前期にかけての遺跡が少ないと全体的な傾向とも共通している。ただし、日野江城跡における出土遺物を見たとき、中世前期に位置づけられる遺物が多少認められ、このことは日野江城の築城時期にもかかる問題であり、注意を払っていく必要があろう（註1）。

そして、中世後期に入ると丘陵には大きな改変が加わり、中世城郭としての姿を形成していくことになる。さらには16世紀末に入り、近世城郭としての変貌も見られるようになる。日野江城跡における大規模な地形の改変と造成の様子は地形の観察や発掘調査の成果によって知ることができるが、遺物の出土状況から判断してその大部分は中世後期から近世初頭の段階で行われたものと理解できる。近年、荒蕪地の解消に努めることによってより具体的に地形の観察が行えるようになったことに加え、それまで二ノ丸地区中心であった発掘調査が、平成20年度以降本丸地区にも本格的に及んだことで、本丸地区と二ノ丸地区とを比較することも可能になってきた。

ここで、まず日野江城跡における曲輪の配置について見てみたい。本丸地区には曲輪1が丘陵先端

部の最上部に据えられ、階段状に曲輪2、曲輪3、曲輪4が南側に配されている。また曲輪1の裏手には、急斜面の下に曲輪10、曲輪13が配される。大手口とされる二ノ丸地区は、本丸地区と大きな急斜面によって隔てられ、曲輪5、曲輪6、曲輪7が階段状になって大手川へと下る。城の西側は、本丸地区とは大きな自然地形の谷を挟んで、曲輪8、曲輪9が配置されている。さらに本丸地区の北側背後には自然地形を利用した大きな堅堀状の地形が土橋を境に東西にそれぞれ下り、その先に曲輪11、曲輪12が配置されている。

本丸地区的曲輪2・曲輪3は南北60m×東西120mのほぼ長方形に収まる平面構成であり、その北西角に曲輪2が、曲輪1を最上部とする高まりの中腹を利用して位置している。当然のことながら相当の労力と引き換えるものとこの広大な空間を作り出されていると考えられ、この長方形を形作る曲輪2・曲輪3の直線的な曲輪配置には、単に丘陵の頂端部や尾根筋を削平して小規模な平場を造成しているのとは大きく異なるべきであろう。明確な設計意図をもって直線的で広大な曲輪の縦張り配置を達成しているのであり、日野江城の中で中心的性格をもった空間として位置づけられるものと思われる。

発掘調査によても、曲輪2と曲輪3の造成については明らかになっている。平成20年度に実施した曲輪2の調査においては、大型土坑3の南上端の確認のためにトレーニング3を南北方向で設定し、調査を実施しているが、トレーニングの南端部で斜面に盛土造成をして平場の拡大を図ったと思われる状況を確認した。

また、平成21年度の調査では曲輪3の南側と東側について造成状況が明らかになっている。南側で設定したトレーニング4、トレーニング7では1mを超える深さの造成土を確認し、またその造成土下には自然地形をとどめていると判断される曲輪3造成以前の表土層を南落ちの急斜面として確認した。東側で設定したトレーニング9及びトレーニング10では生活面となる整地面形成の前段階で造成したものと思われる人頭大以下程度の硬質粘土塊(註2)からなる盛土層を確認した。トレーニング10において盛土層の深度確認を行い、約1.5mの深さまで盛土層が存在することを確認した。調査の安全上それ以上の掘削を断念したものの、曲輪3と曲輪5との比高差やその間の自然地形を考慮すると、相當な高さにもの丘陵斜面を嵩上げしているものと思われる。

硬質粘土塊の造成部分にはかなりの間隙が見られることから、切り崩した地山粘土層の土塊をなだれ式に次から次へと押しやって造成したことがわかり、その状況は曲輪の造成工事における第1段階の作業工程を示すものといえる。配石や矢板など土留め的な役割を果たすような遺構の検出にはいたっていないが、いずれにしても広大な曲輪3の造成のために相当の労力が注がれたことが想像できる。

また、こうした本丸地区での造成状況は、ほとんどが大規模な石垣を伴っていないのがひとつの特徴である。曲輪の境界や地割に沿って1m前後の高さでせいぜい人頭大程度の円礫を法肩付近に積み上げている部分がほとんどであり、これについても後世の耕作地整備によるものである可能性も完全には拭い去れない。少なくとも法尻から法肩までを完全に大礫の積み上げのみによって構築した高石垣は見られない。大礫そのものは曲輪2下部分や曲輪3・曲輪4の西側部分などでいくらかみられるのであるが、積極的に石積みを採用している印象は薄く、ある程度高低差がある場合は、曲輪造成時の切土法面をそのまま露頭で残して活用している場合が多く見られる。

本丸地区に限らずほかにも切土の露頭・法面は、城内の各所で観察することができ、日野江城跡の

ひとつの特徴といえるだろう。比較的石積みを多用する二ノ丸地区においても曲輪5と本丸地区を隔てる大きな崖面の南半部分、曲輪6と曲輪7との境界となる石垣の下半などは露頭を残す。本丸地区北側の土橋から裏口方面にくだる谷地形の北辺、城下から本丸方面と土橋へ延びる石量を付設した切り通し通路の両壁なども同じく露頭を残している。

各地点の状況はさまざまであるが、二ノ丸地区など概ね丘陵の中でも低い標高域では貝化石を含む半固結の砂礫層が、本丸地区付近の高い標高域では良質の粘土層が堆積しており、いずれも地質的には口之津層群と称される250万~70万年前に形成された水成堆積層群である。こうした切土法面を残す曲輪の造成や通路の切り通しは、半固結した砂礫層もしくは粘土層へ掘削を加えたものであり、日野江丘陵の基盤となっている口之津層群の安定した地盤は、石積みなどによって表面に特別な保護対策を必要とせずとも年月を経ても風雨にも十分に耐久するものであったらしく、この地質的特徴が現在に伝わる日野江城跡の原形を形作ったものと思われる。

一方、二ノ丸地区においては石積み技術を多用して曲輪を直線的に区切り、階段状に配置している状況もうかがわれる。発掘調査によっても二ノ丸地区においては、石垣や階段、石列など非常に石材を多用する傾向がみられる。こうした石材を多用する遺構群に対して、現段階で明確に時期を限定するには至らないが、16世紀後半から近世への時代変化に伴って徐々に改修が加えられていった結果であろうと考えられる。

## ②遺構の配置と構造

まず、本丸地区について見てみることにする。曲輪2においては、比較的まとまった面積の調査を行い、掘立柱建物跡1棟、柱穴列3列、大型土坑3基、溝状遺構6条などを検出している。

掘立柱建物跡については、調査区隅での検出であり、その規模については確定的ではないが、南北3間×1間で南北方向は半間間隔で柱穴が並ぶ。柱穴の掘削は半裁して部分的に行つたが、根固めを目的としたものと思われるコブシ大前後の礫が多数出土したほか、比較的残りのよい土師質土器が出士する傾向が見られた。建物の建設にあたり、地鎮などの儀礼的行為が行われた可能性が高い(註3)。

柱穴列1は、柱穴の間隔が半間で、主軸方向も掘立柱建物跡ともそろっている。同様に柱穴列3も柱穴の間隔は1間間隔で広いが、主軸方向は掘立柱建物跡や柱穴列1とほぼ同じである。柱穴列2は柱間が半間だが、主軸方向はやや他の遺構とは異なり、柱穴のサイズも大きいことからやや時期をずらしていることが考えられる。

大型土坑については、3基を検出しているが、水を透過しにくい良質で厚い堆積をみせる粘土層に掘り込んでいる。縁辺を補強したり、床面に対して敷石などなんらかの措置をしたりという状況はみられない。単に素掘りの今までの利用であったようで、このことは遺構の性格の判断を難しくしているが、溝状遺構によって連結していることから「水」にかかるなんらかの機能を備えていたものとの想定をしている。

発掘調査期間中には、大型土坑の掘り込みが行われている面が良質の粘土層ということで、降雨があればすぐに大型土坑内には水がたまり、当分の間水は引かず、それどころかいったん周囲に吸収された雨水が壁面から湧き出してくることがたびたび観察された。また、大型土坑1や大型土坑3の最下層で検出された褐色粘土層にはそれより上位の造成土とは異なり明らかに遺物の混入が少なく、

土質も安定しており、これを床面への自然堆積の層と見るならば、水を湛えるような施設であった可能性も十分ある。こういったことを考慮すると、雨水を処理するためか、利用するためかは定かではないが、溝状遺構が付設されていることもあり、導水や排水、貯水などの機能が考えられよう。ただ一方、大型土坑の掘り込みが良好な粘土層であることを考えると、例えば粘土の採掘坑などといった考え方もできよう。

曲輪2におけるこうした遺構群について、曲輪全体を庭園との仮定のもと、大型土坑を「池」、掘立柱建物跡を「茶室」との想定も行った。また、遺物の面からも法花や石製風炉といった出土遺物があり、このことを連想させた。時期がややずれるかもしれないが、イスパニア商人アビラ・ヒロン著『日本王国記』には、1595年当時の日野江城の有馬氏の居住空間に対する記録が残されており、「庭」、「池」、「茶の湯」などの記述が見られる。

ただ、大型土坑に護岸をなすような配石やその痕跡もなく、あるいは庭の景色をなすような撤入石材も見られなかった。大型土坑内から覆土と伴って多数の礫が検出されたが、ほとんどが雲仙山系起源のデイサイト質安山岩で、景石となるようなものではなかった。曲輪2の空間と遺構群の性格の決定には、明確な決め手に欠けていると言わざるを得ない。

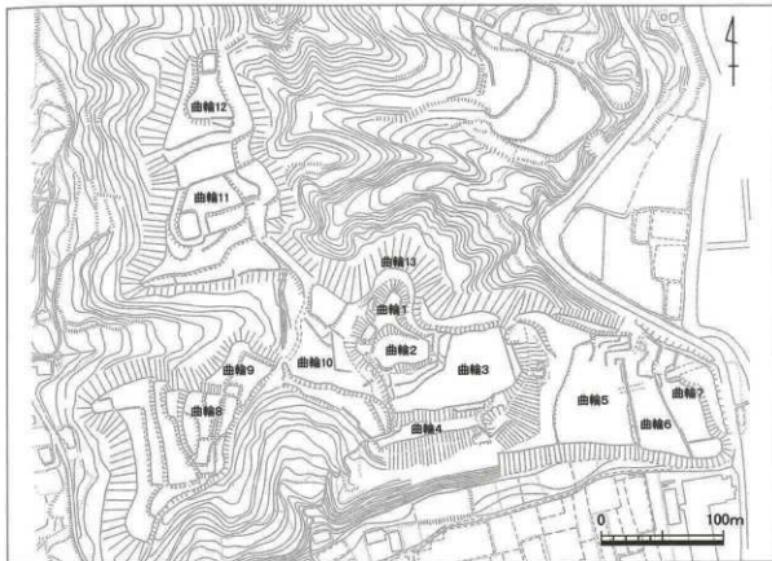
これらの曲輪2における遺構群については、おそらく16世紀末には廃絶した模様である。大型土坑を含む曲輪2の西側半分は土師質土器などの遺物を含む生活面を切り崩した造成土と無遺物の自然堆積層を切り崩した造成土によってごく短期間に埋め戻された状況が確認された。埋め戻しの過程では土師質土器の一括廃棄なども行われていた。また、曲輪2調査区の東側部分、掘立柱建物跡などピット群が集中するあたりでは、その廃絶後に整地化が形成されており、その上面では遺構の検出がほぼ見られないで、その後は単に平場として利用されたようである。整地面の造成は華南三彩など遺物の出土傾向から16世紀末から17世紀初頭と考えている。

曲輪2の遺構群について注目されるのは、掘立柱建物跡、柱穴列1、柱穴列3、大型土坑3の東ラインがすべて主軸をほぼそろえていることであり、さらにはこれが曲輪2・曲輪3を取り囲む長方形の縦横の軸とも整合することである。また、調査区の東側に掘立柱建物跡や柱穴列を含めピットが多数見られ、これは土層の堆積状況を見れば瞭然で、調査区の東側は第IX層が残存しており、水はけがよいためだと考えられる。第IX層は硬くしまって安定した雲仙火山起源の噴出物によるものであり、こうした土層環境も考慮に入れて建物群の配置が決定されたことがうかがわれる。曲輪の造成から遺構群の配置にいたるまで、明確な設計意図が感じられるのである。

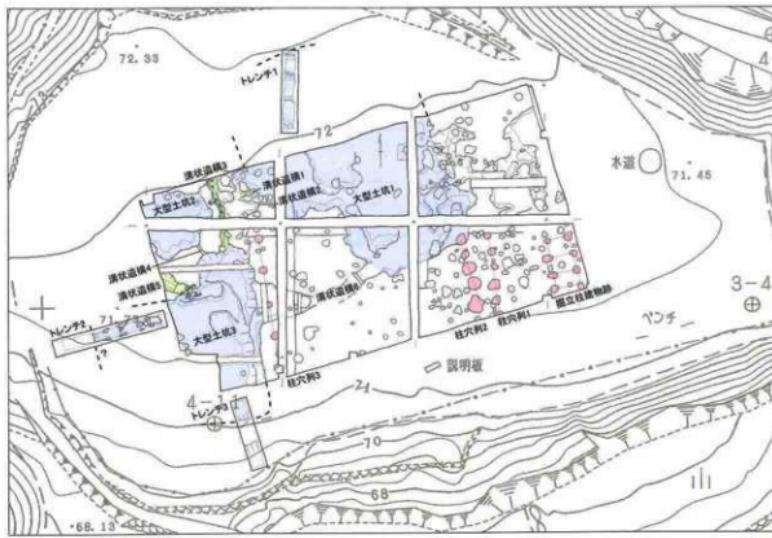
いずれにしても、曲輪2の広く見積もって東西45m、南北25mに過ぎない狭小な平場は、有馬氏の政治や生活の場として主体的に利用されたとするにはあまりにも不十分である。そうした中心的施設とは別の、付属性の性格の場であったと見るべきであろう。

つぎに、平成21年度に発掘調査を実施した曲輪2下、曲輪3及び曲輪4についてであるが、周辺から曲輪3にいたる進入路の検出を主目的として、曲輪の縁辺部を主体にしてトレンチ調査を行っている。結果として通路遺構の検出には至っていないが、今後の調査の指針ともなりうる貴重な情報が得られた。

まずひとつは、曲輪2下のトレンチ1-1及びトレンチ1-2において検出した石列である。石列を構築するにあたり版築工法を用いて土台部分の嵩上げを行ってから大振りの石材を据えており、これを土



第200図 日野江城跡曲輪配置図 (S=1/4,000) (長崎県教育委員会の作図に一部加筆)



留めにして北側にさらに盛土造成を行っている。もしかすると曲輪2への進入路の一部を構成するものかもしれない。先述したが、曲輪3の縁辺部では大規模で突貫的な曲輪そのものの造成状況を確認している。石列はこれと大きく異なって非常に手間のかかる工法を採用しており、本丸地区におけるトレンチ調査の成果の中では特異である。今後時期的な部分も含めて遺構の性格を判断するには検討が必要であろう。また、二ノ丸地区に比べると石積工法があまりみられない本丸地区であるが、曲輪3の東側部分については、曲輪2から曲輪3への南斜面の法尻や城外から本丸まで続く石畳通路の帰結地点などで比較的大振りの石材を目にすることができ、トレンチ1-1・トレンチ1-2の石列と一連の構造物、あるいはその名残りであることも考えられよう。

次に、トレンチ5で検出した溝状遺構についてである。溝は幅2.6m、深さ約90mを測り、北西-南東方向に走っている。曲輪3の南西隅を切り出すような配置になるわけであるが、軸が曲輪3の縱横軸などとはずれており、考慮する必要があろう。構築時期や埋没時期の詳細な紋込みはできていないが、曲輪3の大規模造成以前に掘り込まれた遺構である可能性もある。ただし溝状遺構はいったん上端近くまで埋没したのちに軸を同じくしてトレンチ状に幅を狭めて改めて溝切りがなされており、さらにその床面には杭木の打ち込み痕とも考えられる小ピットを確認している。水はけの悪い粘土地盤ならではの難点を解消するための、矢板などを伴う設備であったのかもしれない。また、同じくトレンチ5においては、地表面近くにおいて玉砂利面を確認しており、これがおそらく曲輪3が広大な平場として整備されたのちの生活面であると考えられる。

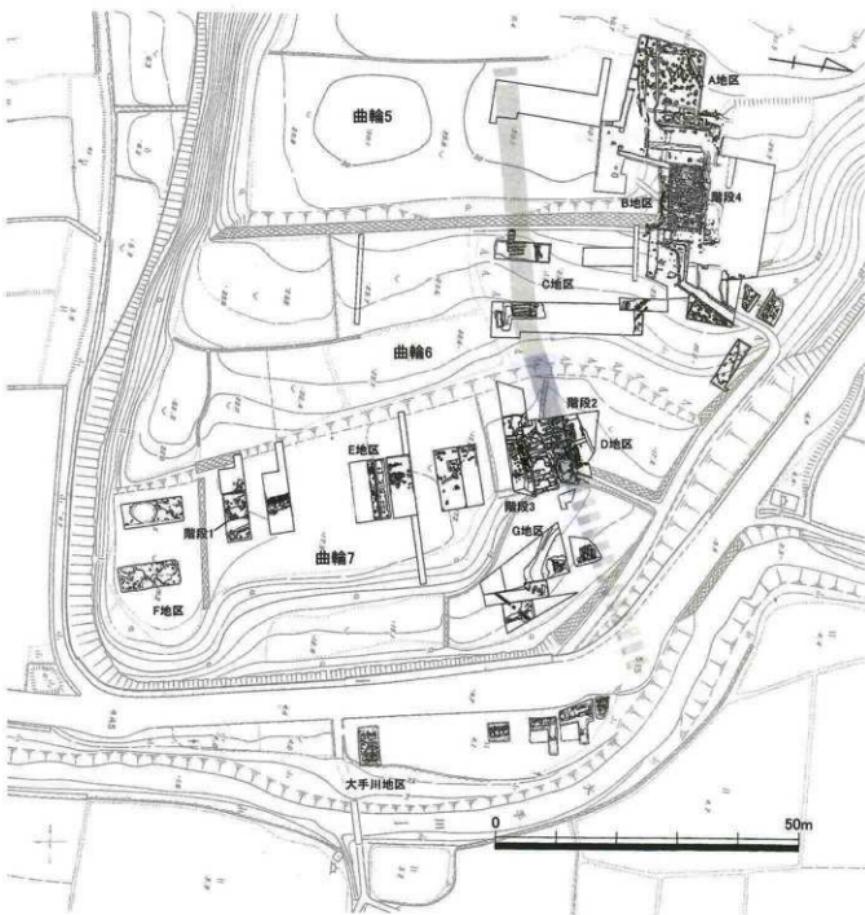
旧北有馬町教育委員会によって発掘調査を実施した二ノ丸地区・大手川地区について見てみると、まず目を引くのは階段遺構の検出である。二ノ丸地区において検出されている階段遺構は4つあるが、これによって、城内二ノ丸地区における通路とその変遷が推考できる。

階段1は4段からなる小規模なもので、曲輪6のE地区南側で検出されている。曲輪7の南端であるF地区がE地区とは段差を持って高くなっていることから、そちらへ向かうための上り段であったのだろう。

階段2は、C地区19区南端、21区及びD地区において検出している。A地区26区の南端においても、本来は踏み石が据えられていたであろう階段状の掘削・整地の状況をうかがうことができる。D地区では階段遺構2に伴って南側袖に溝跡9を確認しており、C地区19区でもその延長になる可能性がある石垣3と溝跡8を検出している。下段のほうではG地区22区において倒壊した石垣5を検出しており、これもD地区的溝跡の延長線上にあることから溝跡であった可能性がある。

こうした状況をふまえると、階段2は南側袖に溝を伴う総延長が少なくとも75mはある直線的な階段遺構であったと想定される。大手川右岸まで下るとするならば総延長が約100mに達する。踏み石には自然亜角礫を用い、幅は約3.0mである。曲輪7での進行方向がW-27°-S、曲輪6での進行方向がW-13°-Sであるのでおそらくは曲輪の境界付近でわずかに屈折するものと考えられる。

D地区で検出した階段3は、大部分の踏み石が残存していないが、残された踏み石には自然亜角礫が多用されている。また、一部に五輪塔や宝鏡印塔などの仏塔の石材も利用されており、B地区検出の階段4と共に通する。南側袖をなす石垣1と北側袖をなす石垣2を伴っており、幅は約6.6mを測る。石垣1についてはG地区15-2区の北東端でも延長部を検出しており、少なくとも階段3が25mの長さを持っているものと判断される。また、大手川地区的石垣1・石列1まで続くと考えるとその長さは



古段階ルート  
新段階ルート

第202図 ニノ丸地区における通路想定図 (S=1/800)

約50mになる。階段2とは一部重複して検出しており、階段2が階段3に先行するものである。階段3の構築にあたっては、曲輪2の破却や踏み石の取り外しなどは行わず、その上に直接盛土造成して新たな踏み石を設置したようである。進行方向はW-24°-Sを探っており、わずかであるが階段2とは方向をたがえている。

二ノ丸地区の東側には大手川が南流するが、大手川右岸の二ノ丸地区と接する地点についても旧北有馬町教育委員会が調査を行っている。ここでは5箇所の調査区が設定され、杭木の打ち込みと見られるビット群や石垣などを確認しており、横木を渡して沈み込み防止の対策をした上で、護岸の整備などが行われたものと考えられる。二ノ丸地区階段2との関係は定かではないが、二ノ丸地区階段3に付属する南側袖の石垣1と大手川地区石垣1は直交する位置関係にあり、石材の規模や材質が同じで裏込め石を伴うなど技術的に類似していることから、同時期の構築が考えられる。大手川地区石垣1については大手川の護岸をなすとともに、城の内外を分かつ境界の石垣であった可能性が高い。

B地区において検出した階段4は、日野江城跡における各種遺構の中でも、最も代表的なものである。22段からなる階段は良好に踏み石も残るが、注目すべきはその踏み石186点のうち五輪塔・宝篋印塔の石材が94点も利用されている点である。こうした石材利用のあり方は、キリスト教大名としての有馬氏の性格を如実に示すものといえよう。

階段の南側袖には溶結凝灰岩を素材とする薄手の切石を立てて利用しており、その石積みには削りこみを入れるなど他の城郭では見ることのない特殊な技術を採用している。加工しやすくはあるが石垣としては不向きな面もある溶結凝灰岩という特異な石材を用いるとともに、南方系か、あるいは大陸系のものとされる技術を採用している。また、北側袖には石垣8と溝跡10を伴っている。階段4を登りきった踊り場正面にあがると石垣6に突き当たる。左手には平石2基が検出されていることから門の存在が想定され、曲輪6から階段4を登って南へ折れて曲輪5へ侵入するルートがあったものと思われる。こうしたことを見ると、階段4の周辺は、構形をなす虎口として想定できそうである。

各階段とそれに伴う遺構の検出状況から判断される二ノ丸地区の進入路の変遷は、大きく2段階に分けて考えることができよう。まず旧段階は、大手川から直線的に曲輪7、曲輪6、曲輪5と二ノ丸をほぼ直線的に上る階段2によるルートである。そして、新段階は大手川からまずは階段3を登り、そこから北へ曲がって階段4へと連絡し、階段4を登りきって南へ折れて曲輪7に至るルートである。ただし、この新段階のルートについては、階段3から階段4への連絡のあり方がまだ不明である。階段3が曲輪6まで登って北へ折れるのか、あるいは一旦階段3が現在までに確認されている地点あたりで途切れていったん北に折れ、さらに現在は未検出の新たな階段が存在して、それを経由して階段4に連絡するのか、この点については今後の検討課題である。新段階ルートの構築については、ルートを構成する階段3・階段4の踏み石に仏塔を使用するという仏教に対しての排他的な姿勢が強く打ち出されており、有馬晴信が受洗した1580年から豊臣秀吉によって禁教令が発令される1596年までの時期が考えられよう。

つぎに、二ノ丸地区における建物跡について見てみる。階段4の西側では、多くの柱穴群が検出されており、3棟の掘立柱建物跡が復元できる。いずれも柱穴は1間の間隔である。この建物群の東側下段にあたる階段4においては、その上面を破却のための埋土で覆われていたが、その埋土には相当量の瓦が含まれていた。こうした状況を踏まえると、掘立柱建物跡については、階段4の構築が行わ

れる以前の遺構であると考えられる。また、B地区16区・2区においては礎石群が検出されており、建物の存在が確認できる。二ノ丸地区的建物が掘立柱建物から瓦葺礎石建物へと単純に移行したと考えるならば、A地区的掘立柱建物跡よりは後出するものということになり、階段3や階段4などと時期を同じくするものかもしれない。

曲輪7の南側にあたるF地区においては、5区・6区の各調査区から土坑の検出がある。遺物については出土状況があいまいであるが、両調査区とも大量の土師質土器の出土があり、他に比べると瓦質の擂鉢が多い印象を受ける。台所などの施設に付属する廃棄を目的とした土坑という評価もできるかもしれない。

### ③本丸地区と二ノ丸地区的性格と関係

本丸地区、二ノ丸地区を中心に地形の変更状況や発掘調査の成果などから比較すると、両者の共通点と相違点がいくらか見えてくる。

地形的な面から見ると、口之津層群という日野江城跡の立地する丘陵ならではの地質的特質を最大限に活用して各曲輪の配置を達成するという点で、おそらく築城当初の段階では本丸地区と二ノ丸地区に限らず、城郭全体に共通したものがあったはずである。そのなかでも特に本丸地区と二ノ丸地区は広範囲の平場スペースが確保できるということで城内でも重要な位置づけにあったのではなかろうか。そしてそれらの原形を活かしながら、度重なる改修が加えられ、徐々に相違点が見られるようになつたものと思われる。その要因としては、中世から近世への時代変遷や火災、原城への本城機能の移転計画などが考えられよう。

二ノ丸地区における石垣、階段3、階段4、瓦葺礎石建物、舟形虎口などは16世紀後半以降の築城技術や社会的背景を色濃く映しだしたものであり、また、階段3や階段4の仏塔を用いた階段などはキリシタン大名としての性格を強く打ち出した遺構といえる。瓦の出土状況や礎石の検出状況から見ても両地区的違いは歴然で、二ノ丸地区では多くの瓦と礎石列などが確認されているのに対し、本丸地区では柱穴の検出はあっても、瓦の出土や礎石の検出は皆無である。

こうした利用状況の違いを古い時期には本丸地区を利用し、新しい時期には二ノ丸地区を利用したというように時期的な差異として捉えることは、本丸地区の広大なスペースがのちにはまったく活用されなかつたことになり、あまりにも不自然である。本丸地区と二ノ丸地区という平場の面積としては城内でも突出した広さを持つ二つの地区が機能を分化し、その様相を連えていったものと捉えられる。すなわち、本丸地区が有馬氏の居住空間として、二ノ丸地区が有馬氏の政治や外交の場として、その役割を分担していくようになったと推測できよう。

## (2) 日野江城跡の出土遺物

### ①出土遺物の内容

日野江城跡における出土遺物の内容について概観すると、輸入陶磁器、国産陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦などがある。また石製品として風炉の出土などもある。

土師質土器の在地編年の定まっていない島原半島において、日野江城跡の利用状況とその変遷を見ていく時、もっともその指標となりうるのは輸入陶磁器であろう。輸入陶磁器の内容は、青花、白磁、

青磁、瑠璃釉磁器、五彩、三彩、綠釉陶器、法花、褐釉陶器などがある。組成比率について本報告では触れることがないが、輸入陶磁器の中では青花が圧倒的に多く、白磁と青磁が一定量含まれ、その他の資料が散見される程度である。

青花は小野縄年の染付碗B群、染付碗C群、染付碗D群、染付碗E群、染付碗F群、染付皿B群、染付皿C群、染付皿E群、染付皿F群が見られる。景德鎮窯系のものが大部分を占め、わずかではあるが芙蓉手の資料もある。漳州窯系とされる粗製の資料も散見される。15世紀～17世紀初頭にその主体をおいている。

青磁は、陶磁器全体からすると量的にはさほど多くはないが、龍泉窯系のものを主体として一部に同安窯系御描文の碗・皿の資料も見られる。龍泉窯系の碗には蓮弁文を持つものが多く見られるが、錫蓮弁文のものは少なく、細線によって蓮弁文を表現したものが多い。15・16世紀を主体として、13世紀末～16世紀の時期が与えられよう。同安窯系の資料は日野江城跡において中世前期にすでに利用がなされていたことを裏付けるものとして評価できよう。しかしながらこの時期の遺構の検出にはいたっておらず、城としての機能をこの時期に備えていたかどうかについては明らかではない。龍泉窯系の資料の中で13・14世紀に位置づけられるものについても同様のことと言える。

白磁については、量的には青花に大きく及ばないが、陶磁器の中では青花に次ぐ出土数である。景德鎮窯系とみられる端反皿を中心としているが、八角环や高台に抉りの入る皿なども見られる。やはり15・16世紀が主体である。

稀有名な出土事例としてあげられるのが、本丸地区曲輪2で検出した法花の資料である。15・16世紀に中国華南地方で製作されたものと考えられているが、詳細は不明なところが多い資料である。生産量そのものが少なかったためなのか、あるいは国内での趣向性を反映して輸入がひかえられたためなのか定かではないが、あまり当時国内での流通がなかったらしく、発掘調査による出土事例についてもほとんど知られていない。大友一族である朽網氏の館跡とされる小路遺跡（大分県竹田市久住町）や首里城（沖縄県那覇市）での出土事例があり、おそらくそれらに続く国内3遺跡目の出土事例ということになろう。

法花は曲輪2において出土しているが、同一個体と考えられる破片資料17点があり、壺形をなすものと思われる。いずれも外面は捺引出し技法による細隆線と沈線によって器面に文様を描き、いったん素焼きしたのちに瑠璃、翡翠、黄、赤の釉薬を充填して再度低温で焼き上げたものと思われ、鮮やかな発色を実現している。内面はいずれも緑釉が掛かる。多くが廢城後の耕作土から出土していく後世の搅乱を受けているが、一部は大型土坑等の埋め込みのための造成土中から出土しており、使用的年代的な下限は16世紀後半ごろと考えられる。

国産の土器・陶器類については、16世紀後半の備前焼の擂鉢や壺が見られるほか、火鉢や擂鉢などの瓦質土器の出土が比較的まとまっている。瓦質土器の中には在地産のものには見られない金色雲母を含む胎土のものなども見られ、一定の収入品があったことがうかがわれる。唐津焼の資料もあるが、その数はごくわずかである。

日野江城跡の出土遺物の中で最も出土点数が多いのが土師質土器である。器種としては壺、皿、小壺、小皿、耳皿、ミニチュアがあり、一部に火鉢としての利用が考えられる脚付で大型のものも見られる。器種にかかわらず確認できる限り成形はすべて回転轆轤による粘土柱からの水挽きによって行

われており、粘土柱からの切り離しは回転糸切りによっている。ヘラ切りと確実に認められる例はない。また、手捏ね成形を基本とする京都系土師器の資料も見られない(註4)。

ここですべての土師質土器について細分を行うまでは至らないが、製作技法と器形の観察が比較的容易な壺・皿の資料を中心に概観すると、色調と胎土の特徴から大きく3群に分けることができる。第1群が黄褐色系土器、第2群が赤色系土器、第3群が白色系土器である。

・第1群（黄褐色系土器）

以下の5類が認められる。a～cは壺、d・eは皿である。

a類 底径は大きめで糸切痕は粗く、内面見込みを広めに作り出す。内面見込中央にはボタン状の低い高まりを持ち、そこから螺旋状に内面体部に5段程度の凹凸を残す。外面体部は工具によって成形を行ったらしく、その痕跡を明瞭に残すものやその後に丁寧に回転ナデ調整を施すものなど個体差がある。赤みの強いものも見られ、第2群との関連も考えられる。

b類 底径は大きめで、細かい糸切痕を持つ。内面には見込みを広く作って体部を立ち上げる。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整を施す。

c類 底径は小さく、やや粗めの糸切痕が残る。内面には見込みを作らず、中心から外開きに体部が立ち上がる。内面体部の下位には成形時の凹凸を2段程度残す。内外面ともに丁寧な回転ナデ調整を施す。他に比べ色調がやや暗い。

d類 底径は小さく、糸切痕は細かい。器高は他に比べ低く、外面もしくは内面に成形時の凹凸を細かく残す。

e類 底径は小さく、糸切痕は細かい。器高は他に比べ低く、内外面ともに丁寧な回転ナデ調整を施す。

・第2群（赤色系土器）

胎土に赤色粒子を非常に多く含み、底径は小さめで糸切痕は粗い。見込みは狭く、体部は中ほどで外へ膨らみ、口縁部はわずかに外反する。内外面には成形時の凹凸を細かく残す。

・第3群（白色系土器）

以下の3類が認められる。

a類 精製した胎土を用いる。非常に薄手の作りのため、破片資料のみで全形をうかがい知ることができるものが少ない。内面見込みに螺旋状の細かい工具痕が残る。底面は細かい糸切痕で、スダレ状の圧痕が残る。胎土に金色雲母を含む。外面には埴汁によるナデ調整が認められる。

b類 日野江城跡出土の資料としては小皿のみであるが、鋭利な工具によって見込みに円錐を刻むものである。底面は糸切痕が残り、端部にはケズリ調整を施して角をおとす。これとセット関係をなすものと考えられる直径14～15cm程度の皿の資料が、原城跡（南島原市）、森岳城跡（島原市）、沖城跡（諫早市）、玖島城跡（大村市）で出土していて、これらの資料は底面には糸切痕を残しておらず、完全に底面全体を削り取ってしまうようである。

c類 細かい赤色粒子を含む精製した胎土である。にぶい黄橙色系の色調で、白色での焼き上がりを意図して低温で焼成したためか、非常に軟質である。そのため碎片がほとんどで、器面は極度に磨耗しており、調整についてはほとんど観察できないが、糸切痕を観察できるものがある。

第1群各類、第2群については、在地系のものと考えるが、製作技法や胎土などの特徴にはそれぞ

れ違いが認められ、製作集団の違いや時期差を反映している可能性が高い。第3群a類、b類は製作技術的には第1群や第2群とはさらに大きくかけ離れており、在地粘土には含まれないとされる金色雲母を胎土に含むなど搬入土器として考えるべきであろう。白色系の色調のものを選り好み取り寄せたことも考えられる。第3群c類については赤色粒子を含むなど在地産と考えられる土器群と共通する部分もあり、搬入土器を意識した模倣土器として捉えておきたい。

また、小皿については今回細分を行うまでに至っていないが、全体的な傾向として内面見込み中央にドーナツ状もしくはボタン状の高まりを持つものが非常に多い。その目的については、①重ねて焼成する際の火の回りをよくするため、②重ねて運搬するときの破損防止のため、③粘土柱からの切り離す際の変形や穴あきを防止するため、④灯明皿として利用する際の機能性を高めるため、⑤京都系土師器における底面にユビオシを施した「ヘソ皿」の模倣、などが考えられよう。

耳皿の出土事例は長崎県域では非常にまれで、日野江城跡の近隣遺跡では森岳城跡（島原市）の出土遺物に見られるくらいである。日野江城跡出土の耳皿は、在地系と考える第1群のものと第3群a類とセット関係をなすと考えられる白色系のものがあり、後者については本丸地区曲輪2において多数出土していることは注目するところである。消費者の階層性や場の機能などを反映している可能性もありうる。また第1群の耳皿については、原形が小皿のものとミニチュアのものとが見られ、耳皿の定義に製作集団間や時期によって認識の違いがあった可能性がある。

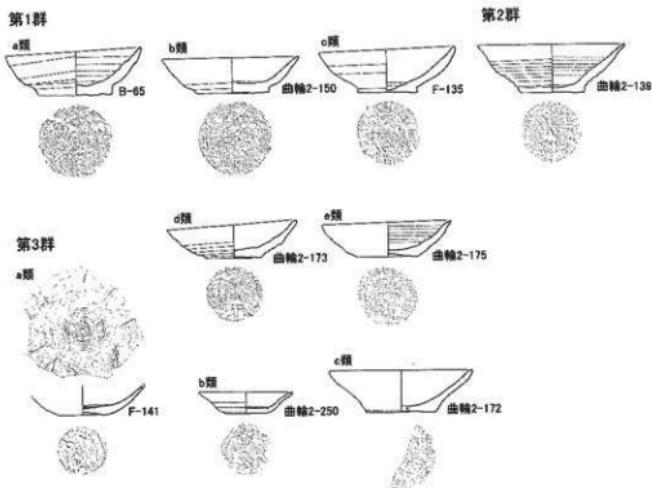
今回の報告でミニチュアとした小型の土師質土器については、そもそも、縮尺模倣の品で何らかの儀式などに用いる特殊なものなのか、遊具なのか、それとも実用品として土師質土器の他の器種とセットをなして使用するもののかはっきりしないが、本丸地区、二ノ丸地区ともに一定の出土量が見られる。

これらの大量に出土する土師質土器の帰属時期については、一部に古相を示すものがわずかに含まれるもの、今のところともに出土する輸入陶磁器の編年的な位置づけにより大枠として15世紀から17世紀初頭にかけての時期と考えられる。また他地域の編年などを参考にすると、壺形土器から皿形土器への移行という点については、他地域と変遷と連動しているものと理解する。しかしながら在地における分類・編年作業の遅れは否めず、今後更なる検討を行っていく必要がある。いずれにしても大量に出土する日野江城跡の土師質土器は、当時の武家社会における儀礼や饗宴文化の受容を示すものと考えることができ、有馬氏が中央や領外の他地域と積極的に交渉し、文化的・政治的に影響を受けた証といえよう。一方、京都系土師器については導入することなく在地系糸切底によってそのほとんどをまかなっている点は、同時期のたとえば大内氏や大友氏などの関連遺跡において積極的に京都系土師器が導入されているとの対照的である。九州西端部という地理的な部分もあるのかもしれないが、その要因については追求していく必要があろう。

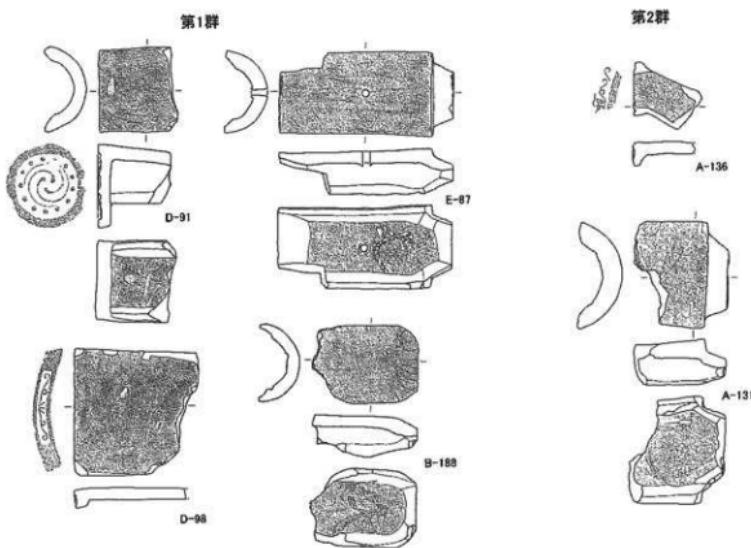
瓦については、鳥衾瓦、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、輪違瓦などが見られる。瓦の出土は二ノ丸地区にはば限られ、本丸地区における出土は皆無に近い。二ノ丸地区における瓦は、製作技法と文様、法量などから大きく2群に分けることができる。

#### ・第1群

軒丸瓦は、瓦当部の文様に左巻きの三巴文と珠文をもつものである。巴文はそれぞれ独立しており、末尾が延びて円錐をなすことはない。瓦当部と丸瓦部との貼り付けはクシ目調整によって接着の補強



第203図 土師質土器分類図 (S=1/4)



第204図 瓦分類図 (S=1/8)

を行う。丸瓦は尻部に段を設けて玉縁部を作るものと、そのまま尻部をすばめるものとの2種がみられる。軒丸瓦、丸瓦の凹面にはコビキA痕、布目、吊り紐痕を残し、一部に離れ砂が認められる場合もある。軒平瓦の瓦当部は平瓦の凸面に張り付けられており、文様は中心に上向きの三葉文を配し、その左右に連なった2転する唐草文を配するものである。非常に強い燻しが掛かり、黒色をなすa類と、a類に比べると燻しが弱く、器面が丁寧になでられて光沢を持つb類に細分できる。

日野江城跡出土の瓦は、大部分がこの第1群によって占められている。a類とb類には法量や成形時における製作技法上の違いは認められず、器面の最終調整と焼成段階での工程の違いを示すものとも考えられる。

#### ・第2群

灰色の色調を呈し、燻しのほとんど掛からないものである。瓦全体の総量からすると、その量はごくわずかであるが、丸瓦、軒平瓦、平瓦の出土があり、第1群とは大きく異なり、全体的な傾向として法量は大きく、厚さがある。丸瓦は尻部を玉縁状に段を作り、凹面にはコビキB痕、布目、吊り紐痕を残す。また、離れ砂と棒状工具によるオサエ痕も残る。軒平瓦の資料については、1点の破片資料が確認されている。瓦当部の高さは第1群に比べると高く、中心の三葉文は逆さで囲いを持ち、左右の唐草文はそれぞれが連なることなく独立して3転する。日野江城跡における出土数はごくわずかである。原城跡においてはまとまった出土があり、軒丸瓦・軒平瓦とともに文様には数タイプがあるようである。

鳥衾瓦の資料は全体でわずか2点が確認されている。焼成や燻しの具合から第1群b類に似るが、そのうちの1点は瓦当部に金箔を貼り付けたもので、中央政権との関係もうかがわれる資料といえる。搬入品としての可能性も考えておく必要があるかもしれない。

#### ②原城跡出土遺物との比較

以上、日野江城跡の出土遺物について述べたが、ここで日野江城跡からは直線距離約3.5kmの近い位置にあり、日野江城跡の支城として機能していたと考えられる原城跡の出土遺物と対比してみたい。

まず陶磁器類を見てみると、輸入陶磁器について16世紀後半から17世紀初頭に位置づけられる遺物の出土量については大きな違いが指摘できる。景德鎮窯系芙蓉手の皿・鉢や漳州窯系の高台に砂粒を大量に付着する粗製の大皿などの資料は、原城跡本丸地区において多数出土しているのに対し、日野江城跡では本丸地区、二ノ丸地区ともにあまり見られない。また、同時期の国産陶器である唐津焼の資料についても同様の傾向があるといえる。

一方、それとは対照的な出土状況を示すのが土師質土器である。日野江城跡における土師質土器の出土量は膨大で、在地産と考えられるものを主体として一部に搬入品と考えられるものも含み、非常に多様である。一方、原城跡本丸地区における土師質土器については今回点検を行ったが、破片資料を入れても全部で90点余りである。完形もしくは反転復元可能なる程度残りのよいものということでいうと9点しか確認できない。うち5点が日野江城跡土師質土器の第1群e類にあたる資料である。残り5点の資料は、直径14~15cmと日野江城跡のものより大きいものの、日野江城跡土師質土器の中で第3群b類とした内面に円錐を持つ資料である。破片資料については、2点の白色系土器片を除いてはすべて黄褐色系土器であり、底面の観察ができるものはすべて回転糸切底である。器形的には皿

型になるようであり、壺形のものを含んでいない模様である。

こうした日野江城跡と原城跡の輸入陶磁器と土師質土器の出土遺物のあり方を見ると、日野江城跡において土師質土器を大量に消費する段階があり、その後食器は陶磁器によってまかない土師質土器にはそれほど依存しない段階へと移行したことがうかがえる。そしてその移行に伴い壺形土器も皿形土器へと形を変えたものと考えられる。中世的な武家儀礼社会からの脱却がこの時期にすんだのであろう。

史実のうえで注目されるのが、1603年から1604年にかけては13代当主有馬晴信がより高い防御機能を求めて新しい城を築城中であるという旨の記録が残されていることである。これについては原城のことを指しているのだと見る向きが強く、この時期に有馬氏が本城機能の原城跡への移転を計画していたとされる。このことを出土遺物の面で照らし合わせてみると、陶磁器類については景徳鎮窯系芙蓉手や津州窯系粗製大皿などの輸入が開始され、また唐津焼の生産が始まった直後くらいの時期にあたり、日野江・原両城跡の出土傾向とも合致する。本城機能の移転については、その目的を達成することはなかったとする見解もあるが、原城跡においても陶磁器主体のまとめた出土遺物があり、少なくとも部分的な移行は行われたのではないかと遺物の面からは判断される。

ただ、皿形土器の出土傾向でいうと日野江城跡の出土遺物においてもまとめた数量が見られ、原城跡本丸地区の出土量を断然しのいでいる。壺形土器から皿型土器への移行は原城への移転前の日野江城において向かえたといえそうである。陶磁器の出土状況を勘案するとその移行は、1580年代～1590年代と考えるべきであろう。

瓦については、第1群の軒丸瓦・軒平瓦については山崎信二氏や橋本幸男氏の指摘があるように原城跡本丸出土のものと同範の可能性が高い。また、第2群に1点のみある軒平瓦の文様は、山崎分類の原城跡軒平瓦D種にあたり、これも原城跡出土のものと同範の可能性が高いであろう。

数量的な部分でいうと、日野江城跡に圧倒的な比率を占める第1群は、原城跡ではごくわずかであり、逆に原城跡で安定して出土する第2群は日野江城跡では低い比率である。全国的な瓦の変遷で言うと丸瓦凹面に見られる粘土塊からの切り出しの痕跡は、糸切りのコビキA痕から鉄線切りのコビキB痕へと移行するとされるが、日野江城跡瓦で第1群はすべてコビキA痕であり、ごくわずかの出土数である第2群ではコビキB痕が認められる。先に述べた本城機能の移転にかかわっていなならば、移転直前の段階でコビキA痕からコビキB痕への技術的な移行があったといえる。

現在までのところ、日野江・原の両城跡において用いられた瓦の生産地については確認されていないが、日野江城跡から南へ約800mの地点には「瓦焼」の地名が見られ、その候補地として考えておく必要があろう。

### (3) まとめ 一現状と課題一

ここまで地形調査や発掘調査の成果をもとに、日野江城跡の地形の変更状況や曲輪の配置、遺構の構造、遺物の出土状況などについてみてきた。また、原城跡との関係についても若干の所見を述べた。

日野江城跡においては、絵図などによる記録が少ないために城内における建物や構造物の配置などについて知るには発掘調査に頼らざるを得ないのが実状である。そういう意味でも蓄積された多くの調査成果を今後も丹念に精査していくことが重要であり、今後調査を行っていくにあたってもその

目的と課題を明確に整理・把握し、細心の注意を払っていかなければならない。現時点での日野江城跡における調査の現状と課題について若干まとめておきたい。

まず、日野江城跡においては本丸地区、二ノ丸地区には発掘調査が限定されており、城の北側や西側の裏口についてはまったくその位置づけが定まっていないのが現状である。耕作放棄によって荒れた状況が長年続いている、これらの解消に努めた上では詳細な地形調査が必要である。また、二ノ丸地区においては、かなり発掘調査が進展して大手口の状況についておおよその内容がつかめてきたが、本丸地区と二ノ丸地区との連絡についてはまだ定かではない。城の西側、裏口方面からの進入路についてもその存在が指摘されている。城全体の構造把握のためには、城外からの進入路をおさえ、各曲輪を結ぶ通路について確認していく必要がある。また、西洋人によって残されている文献史料からは多くの情報を得ることができ、これらを参考としながら歴史的な史実を調査成果に照合していく作業も必要となろう。たとえば日野江城跡は天正年間に火災に遭遇しており、この火災面が特定できれば、その前後における遺構の変遷を捉えることができようし、遺物の縦年作業についても大きく進展するものと思われる。

視点を広げて日野江城跡周辺まで含めたところで言うならば、字図の解析などを含め城下町の位置と範囲についても確認していく必要がある。家臣団の生活エリアや城下に置かれたとされるセミナリヨについてもその位置の特定が求められよう。

有馬氏は戦国期に入って以降急速に勢力を伸ばして発展し、1539年に晴純（のちの仙岩）が家督を継ぐと肥前守護となって全盛期を迎える。しかし佐賀で龍造寺氏が台頭するようになり、1563年の丹坂峠の戦い（百合野合戦）でその龍造寺氏に敗れると、急速に有馬氏の勢力は衰退していくことになる。そうした状況下で同じ1563年に領内にキリスト教が領内に入ってくる。仙岩とその嫡子義貞の治世時にはキリスト教の受け入れに対して相当の葛藤があったことがうかがわれる。その後、義貞は洗礼を受けることとなり、キリスト教も急速に広まって大きく西洋文化が花開いていく。こうした政治的な部分と文化的・宗教的な部分との相反する中で、有馬氏はキリスト大名化し、晴信の治世に至ってようやく勢力的にも復興するのである。戦国大名としての発展、肥前守護としての中央とのつながりや影響力、外的との攻防、キリスト教文化の伝来、原城の築城、中世から近世への時代変化など、有馬氏の動向と社会的な変化をふまえた上で、今後は調査・研究を進めていく必要がある。

### 【註釈】

（註1）宮崎貴夫氏は、日野江城跡と近距離にある今福遺跡において出土したとまとった量の北宋～明代の輸入陶磁器について、私貿易あるいは密貿易によってもたらされたものであろうとし、有馬氏の関与を推測している。

官崎貴夫・町田利幸編 1986 『今福遺跡Ⅲ』長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会

（註2）地山切り崩しによって埋め立てた硬質粘土の土塊について表面の観察を行ったが、土掘り具等の痕跡は確認できなかった。日野江城跡において広範囲に地山層として検出される良質の粘土層やその掘削土塊は、土木工事の際の掘削痕を良好にとどめる可能性が考えられる。今後の調査にあたっては注意を払っていく必要があろう。

（註3）佐世保市所在の針尾城跡において土師質土器のほとんどが柱穴から出土したとの報告があり、同様の事例と考えられる。

川内野篤編 2005 『針尾城跡』 佐世保市教育委員会

(註4) 日野江城跡出土の土師質土器については、上野淳也氏(別府大学)から多くのご教示を賜った。また、北島大輔氏(山口市教育委員会)のご好意により、大内氏館跡出土の土師質土器について実見の機会を得た。

#### 〔参考文献〕

- アビラ・ヒロン(佐久間正・会田由・岩生成一訳) 1965 『日本王国記』 岩波書店  
東京国立博物館編 1978 『日本出土の中国陶磁』 東京美術  
森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No2』 日本貿易陶磁研究会  
上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究No2』 日本貿易陶磁研究会  
小野正敏 1982 「14~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究No2』 日本貿易陶磁研究会  
宮崎貴夫・町田利幸編 1986 『今福遺跡Ⅲ』 長崎県文化財調査報告書第84集 長崎県教育委員会  
大橋康二 1989 『肥前陶磁』 考古学ライブライ-55 ニューサイエンス社  
間壁忠彦 1991 『備前焼』 考古学ライブライ-60 ニューサイエンス社  
森毅 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」『難波宮址の研究 第九』 大阪市文化財協会  
宮崎貴夫 1994 「長崎県における貿易陶磁研究の現状と課題ー主に県本土部地域を中心としてー」『長崎県の考古学ー中・近世研究特集ー』 長崎県考古学会  
宮崎貴夫編 1995 『万才町遺跡』 長崎県文化財調査報告書第123集 長崎県教育委員会  
森村健一 1995 「福建省漳州窯系青花・五彩・瓈瑪地の編年」『研究紀要3 ー設立10周年記念論集ー』 大阪府埋蔵文化財協会  
松本慎二編 1996 『原城跡』 南有馬町文化財調査報告書第2集 南有馬町教育委員会  
外山幹夫 1997 『肥前有馬一族』 新人物往来社  
正林護・福田一志・永嶋豊編 1998 『陣ノ内遺跡』 瑞穂町文化財調査報告書第3集 瑞穂町教育委員会  
高野晋司編 『沖城跡』 長崎県文化財調査報告書第143集 長崎県教育委員会  
後藤一重・吉田寛 2000 『小路遺跡 上屋敷遺跡』 久住町教育委員会  
川瀬雄一編 2000 『沖城跡』 諫早市文化財調査報告書第14集 諫早市教育委員会  
本田秀樹編 2002 『森岳城跡』 長崎県文化財調査報告書第166集 長崎県教育委員会  
川口洋平編 2002 『玖島城跡』 長崎県文化財調査報告書第167集 長崎県教育委員会  
大分市歴史資料館編 2003 『豊後府内 南蛮の彩りー南蛮の貿易陶磁器ー』 大分市歴史資料館  
松本慎二 2004 『原城跡Ⅱ』 南有馬町文化財調査報告書第4集 南有馬町教育委員会  
川内野篤編 2005 『針尾城跡』 佐世保市教育委員会  
松本慎二 2006 『原城跡Ⅲ』 南有馬町文化財調査報告書第4集 南有馬町教育委員会  
山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 奈良文化財研究所  
秀島貞康編 2009 『上野町遺跡1127, 1159地点』 諫早市文化財調査報告書第23集 諫早市教育委員会  
橋本幸男・松本慎二・伊藤健司ほか 2010 『原城跡Ⅳ』 南島原市文化財調査報告書第4集 南島原市教育委員会  
北島大輔 2010 『大内氏館跡X』 山口市埋蔵文化財調査報告第101集 山口市教育委員会



日野江城跡ニノ丸地区遺構検出状況

## 第2節 日野江城跡階段遺構出土の転用石塔について

平成7年度からの発掘調査で多くの石塔類が出土した。これまでの発掘で二ノ丸において四つの階段遺構が出てきたが、とくに上方階段（以下「階段4」と表記）では、破壊されていた階段右側部分の遺品を含め、約100点もの石塔類が出土した。また下方の階段遺構（以下「階段3」と表記）などでも、数点の石塔類が階段の踏み石に転用されていた。石塔類の種目は、その形状から容易に踏み石に転用できる方形状のもの、すなわち五輪塔の地輪や宝篋印塔の基礎さらには塔身部分であり、五輪塔の水輪や火輪さらには宝篋印塔の笠や相輪など踏み石に不向きなものは出土しなかった。

なお、石塔類以外に、階段4とその上方では柱石と礎石が数点出土した。

### (1) 種目・点数・石材

階段遺構（階段3・4）ならびにその周辺から出土した石塔類の種目・点数さらに石材は、第46～51表に示した通りである。とくに転用石塔が集中的に出土した階段4では、合計点数と各段ごとに転用石塔点数を示す。

ただし、第46表では階段3から出土した遺品の合計点数を示しているが、その周辺に散在または集石されている石塔類については出土したものかどうか具体的な状況が不明であるため、本稿の資料としては取り扱わない。また、階段4の遺構では階段右側部分が破壊されており、その攪乱土中から10数基分の石塔類が出土した。この点数は第49表として示す。

これら階段3周辺に散在・集積されている石塔類や、また階段4の攪乱土中から出土した石塔類は、本来は階段の踏み石に転用されていたと思われる。とくに階段4の右側部分から出土した遺品（「第49表」表示遺品群）は、その破壊状況から考えて踏み石に転用されていた可能性が高いように思われる。

この第46～51表からわかるように、現在までに確認した全転用石塔数は135点である。その大部分は五輪塔の地輪であり、全体で103点、全転用石塔数の約76%を占めている。その他宝篋印塔の基礎が14点、塔身が18点、さらに柱の礎石と思われるものが3点、半壊状態の柱石が2点確認される。

ここで確認される石塔類は、島原半島の各所で認められるものが大部分であり、基本的に現地で製作されたものと考えられる。形態ならびに使用石材（主に雲仙山系の安山岩〔デイサイト〕）からみても、その彫出内容は拙い。また柱の礎石と考えられる3点は、ほぼ同形態で有家町の温泉神社石塔群（旧金剛院跡またその周辺で出土した石塔群）の中でも確認することができる。

第46表 階段3出土石塔（総計）

五輪塔	地輪	11点	・雲仙山系の安山岩。 ・11点のうち周辺出土遺品数は5点。
宝篋印塔	基礎	1点	・安山岩。 ・すべて周辺出土（計6点）。
	塔身	5点	・基礎1点は台形状の猫足基礎。 ・塔身2点には、その四側面に「金剛界四仏」種子を陽刻。

第47表 階段 4 出土石塔 (総計)

五輪塔	地輪	76点	・大部分が雲仙山系の安山岩。 ・一部に凝灰岩と多良山方面の安山岩がある。
宝鏡印塔	基礎	7点	・大部分が雲仙山系の安山岩。 ・一部に凝灰岩と多良山方面の安山岩がある。
	塔身	11点	・階段 6段目右端塔身の種子 (金剛界四仏) は金箔が施されている。
その他	柱石	2点	

第48表 階段 4 における各段ごとの点数

	五輪塔・地輪	宝鏡印塔・基礎	宝鏡印塔・塔身	その他
1段目	11		1	
2段目	3	3	2	
3段目	5	2	1	柱石 1
4段目	7		2	
5段目	3		3	柱石 1
6段目			1 (金箔)	
7段目	1			
8段目	6			
9段目	6			
10段目	3	1		
11段目	2	1	1	
12段目	7			
13段目	3			
14段目	3			
15段目	2			
16段目	2			
17段目	4			
18段目	1			
19段目	3			
20段目	2			
21段目	2			
22段目				
合計点数	76	7	11	2

第49表 階段4右側部分の擾乱土中出土石塔（総計）

五輪塔	地輪	12点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雲仙山系の安山岩（11点）、多良山系安山岩（1点）。</li> <li>・多良山系安山岩製地輪に「永禄七年（1567）」銘。</li> </ul>
宝鏡印塔	基礎	5点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎5点のうち安山岩が5点（そのうち1点は雲仙山系の安山岩）。</li> </ul>
	塔身	2点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・塔身1点には、その四側面に「金剛界四仏」種子を陽刻。</li> </ul>
その他	柱石	2点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・安山岩。</li> <li>・同形態のものが、金剛院跡（有家・温泉神社）に1点あり。ただし、金剛院跡の礎石に比べ当城跡出土礎石の背高は低い。</li> </ul>

第50表 階段4と掘立柱建物跡間の通路出土石塔（総計）

五輪塔	地輪	4点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すべて雲仙山系の安山岩。</li> <li>・上端1段地輪1点。</li> </ul>
宝鏡印塔	基礎	1点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雲仙山系の安山岩。</li> </ul>
その他	礎石	1点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雲仙山系の安山岩。</li> <li>・上端に背高の低い円柱を造り出す。地輪とは考えられないで、ここでは柱を受ける礎石とする。</li> </ul>

第51表 合計点数

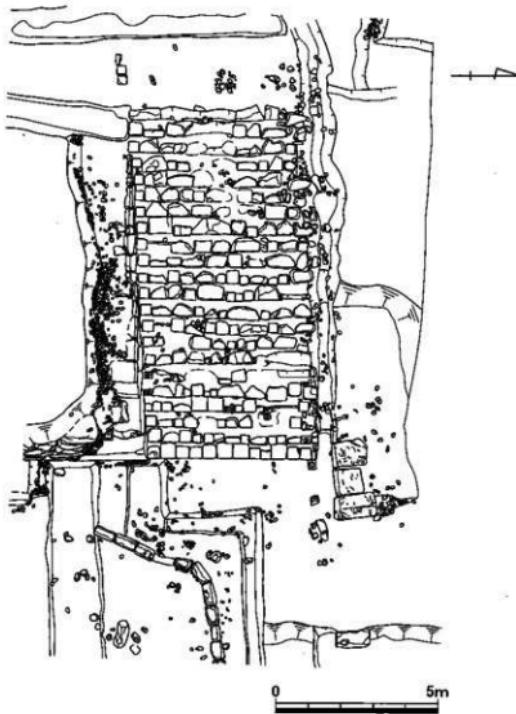
五輪塔	地輪	103点	合計点数 135点
宝鏡印塔	基礎	14点	
	塔身	18点	
その他	礎石	3点	合計点数 5点
	柱石	2点	

## (2) 配列

階段遺構のうち、比較的保存状態の良い上方の階段4に転用されていた石塔類の配列は、第205図に示した通りである。基本的には第1段目横列と左端部分縦一列は初段から最上段まではほぼすべてにわたって石塔類を転用しており、発掘された状況からはL字状の配列が認められる。

ところで、第49表で示した石塔点数は、発掘時、この右端部分階段遺構の上部で搅乱状態の泥土中より出土したもので礫石を含め21点が確認され、右側縦列に配石された21点と奇しくも同数である。また、その上部泥土を除去した後の階段右端部分は、排水溝と思われる凹部分が確認されるが、その凹部分に沿って踏み石がはぎ取られたと思われる遺構が確認できる。のことから、階段右端部分は何らかの事情で破壊され、しかもその搅乱土中から19点の石塔類と2点の礫石が出土したことから、本来は右端部分も左端部分同様、初段から最上段までの端一列に石塔を配石していた可能性がある。また、最上階段（22段目）は、初段と違い転用の形跡が認められない。さらに階段内部にあっては、第48表に示したように初段から4段目までと8段目から12段目までが比較的多く石塔を転用している。

以上のことから、本来は、初段横列と両端の初段から最上段までの縦一列はL字状に石塔が配列さ



第205図 階段4実測図 (S=1/150)

れていたと考えられ、その配列には、たとえ発掘された時のL字状配列であったにしても、何らかの意識的な造作意図が働いていたように思われる(註1)。しかも初段から4段目までの内部(横列)は、ほぼ全ての踏み石に石塔を配置しており、築造当時は、まさに石塔(仏塔)を踏みしめて登り降りする状況があったものと考えられる。「見せるため」の階段を意識して築造された可能性が高い。

### (3) 階段4の主な遺品

①金箔塔身(背高20.3cm、横幅20.0cm)



写真 金箔塔身検出状況

塔身はやや縦長で、その四側面に大きくとられた月輪内に、やや縦長の金剛界四仏種字が陰刻されている。このような塔身をもつ宝蓋印塔は、笠の隅飾が馬耳型に移行する前の形態が考えられることから、その製作年代は1400年代後半から主に1500年代半ばにかけての製作と考えられる。石材は石質の緻密な安山岩であり、その彫出は精巧である。

ところで、この塔身の際立った特徴として、種子陰刻部分に金箔痕が認められる点が挙げられる。県内ではもちろん初めての事例であるが、管見の限りでは新潟県岩船郡栗島の自然石板碑や関東・東北などの板碑、さらに滋賀県などで確認されている。ただ、全国的にも非常に類例の少ない遺品であることは間違いない。

栗島の自然石板碑(類型板碑)は南北朝初期ころの建塔と考えられているが、出土当時は種子(パク〔祝迦〕・アン〔普賢〕・マン〔文殊〕)のマンと蓮台部分に金箔が残っていたという(註2)。また多摩丘陵の至徳二年(1385)銘板碑、八王子市めじろ台の永享五年(1432)銘出土板碑など南北朝から天正期までの計8基の金箔板碑が関東地方で確認されている。

また滋賀県湖北町では、浅井長政の拠城・小谷城の堀跡とされる小谷城清水谷遺跡から五輪塔の風空輪(笏谷石製)が出土し、その四側面に陰刻された「キャ」「カ」の種子部分に金箔が施されている(註3)。

この日野江城跡金箔塔身は階段4の6段目左端に転用されていたものだが、この階段4を登り切った場所からは金箔瓦が出土している。この金箔瓦と金箔塔身には技術的に何らかの関係があった可能性も否定できないが、現段階ではわからない。ただ少なくとも金箔塔身の製作時期は、金箔瓦より先行するものと思われる。また、たとえ塔身の種子部分だけであれ金箔を施した石塔となれば、その造立階層は他の粗雑石塔の造立者に比べ上級勢力に属する人々であったことは十分想定され、実際その彫出内容も精巧である。

なにとはもあれ、この金箔塔身は、全国的にも類例の少ない石塔であり、金箔瓦との関係も含め貴重な遺品であることは間違いない。

#### ②八卦文彫出塔身

4点確認されるが、4点とも石質の緻密な安山岩製である。この塔身は、その四側面に八卦(算木)の文を陰刻しており、正面両側には縦に縁取りの線を入れている。

この八卦文を塔身に陰刻した宝篋印塔としては、佐賀県東松浦郡北波多村立園の瑞巖寺廃寺跡にある伝・波多三河守墓塔の宝篋印塔や県内では長崎市深堀の菩提寺（鍋島家墓地内や17代真法の墓地内）で数基確認できる。これらの宝篋印塔は、佐賀型安山岩製の馬耳型宝篋印塔であり、その形態から16世紀後半から17世紀初期ころの製作と考えられる。階段4で出てきた八卦文彫出塔身も、波多三河守墓塔などと同じ製作時期が考えられるが、とくに縦に縁取り線を入れている縦長の塔身は天正年間の紀年銘をもった馬耳型塔（平戸市安満岳の天正13年銘塔など）に集中しているところから、この階段4の八卦文彫出塔身4点も天正年間に製作された可能性が高い。

なお、八卦文彫出塔は、主に佐賀県側で確認される。とくに六地蔵塔の石幢竿石部分に陰刻されたもの（武雄市上西山蓮慶寺跡六地蔵塔、東松浦郡肥前町六地蔵塔（現在は佐賀県立博物館に移管）、長崎県では壱岐・安国寺六地蔵塔など）や、五輪塔の水輪部分に陰刻されたもの（福岡県嘉穂町麟翁寺五輪塔、佐賀県鹿島市能古見・慶長11年銘五輪塔など）がある。全体に八卦文彫出塔は、室町後期から江戸前期ころに製作されている。

#### (4) 製作年代

島原半島における中世・石塔類の石材は、わずかに溶結凝灰岩製と玄武岩製が認められる程度で、そのほとんどは安山岩製である。ただ、安山岩製といっても、雲仙山系の粒子の粗い安山岩（デイサイト）と石質が緻密な安山岩の二つに大別される。その中で16世紀後半から17世紀になんでも背高が低く形式化した石塔類は、前者の地元雲仙山系の安山岩で製作されている。

今回の日野江城跡で発掘された石塔類の大部分は、雲仙山系の安山岩製（デイサイト）である。この石材の石塔類はその彫出内容が非常に粗雑であり、また各面の面取りが不揃いでであることから、あまり石工技術が高くない現地の石工が製作した可能性が高く、しかも造立階層の拡大を背景に他地域同様大量に製作されている。実際、五輪塔地輪や宝篋印塔基礎の背高はその横幅に対して非常に低いが、この形状の石塔は16世紀後半から17世紀前半に大量に製作されたことが多くの遺品から確認される。のために、この石材の形態からの編年は、地輪や基礎の背高の高低からではなく、その上の火輪や風空輪、笠や相輪の形態から編年をしなければならない。つまり、出土した各地輪や基礎の上にのる火輪や風空輪等を想定した上での編年が求められるのである。

以上のことを前提に、本来であれば各出土遺品を個別に編年をしていくことが必要だが、紙面の都合上、ここでは残存状態の良い階段4の遺品を対象に総括的に編年を割り出し、その他の遺品については全体所見で一括して提示する。

なお、紀年銘が陰刻された石塔は1点だけ確認される。階段4の搅乱土中周辺から出土した五輪塔地輪（上端一段。横幅25.3cm・縦背高14.2cm・上段横幅20.1cm・階差約1.0cm）で、石材は安山岩、彫出は丁寧であり、一段の階差（約1.0cm）も十分な高さをもって造り出され、16世紀半ばから後半の特徴をもっている。専門石工による製作と考えられる。銘文は「春哲／八方／永禄七年二月／□□」（／は行が変わることを、□は不明を示す）となっており、形態上の編年とも一致する。この地輪は搅乱土中周辺からの出土であるため資料としてはやや弱いが、この階段遺構が少なくとも永禄七年以降に築かれたことを示唆するものとして貴重である。

## ①階段4転用石塔の製作時期

発掘段階で実際に階段の踏み石に転用された状態で出土した石塔数は、第47表で示したように五輪塔地輪76点、宝篋印塔基礎7点、宝篋印塔塔身11点の計94点である。

この94点中、そのほとんどは雲仙山系の粒子の荒い安山岩が使われており、その使用石材ならびに複雑な彫出の仕方から考えて、当地またはその周囲で製作された16世紀後半から17世紀前半ころのものと考えられる。

島原半島で確認される中世の石造物は、鎌倉後半ころと考えられる草山の宝篋印塔（西有家町）や千々石町野田名の五輪塔（地輪だけの残欠）にはじまって、南北朝時代・室町時代さらに江戸時代に至るまで、その石材は安山岩で占められている（註4）。

ただ当地の安山岩は、粒子の荒い雲仙山系のものと、非常にきめ細やかで緻密な安山岩に大別される。もちろん、後者の石材が前者に比べ固く、それだけ高い技術をもった専門石工による製作が考えられる。

これまで調査した島原半島の中世・石塔類は、鎌倉時代に比定される石塔のうち草山宝篋印塔は雲仙山系のもの、千々石町野田名の五輪塔はより石質が緻密な安山岩であり、明らかに雲仙山系の安山岩とは異なる。その後の南北朝後半から室町時代後半（14世紀後半から16世紀後半ころまで）になると、千々石町野田名五輪塔同様に緻密な安山岩が使用されている。そして16世紀後半以降になって再び雲仙山系の安山岩が石材として使用される傾向にあり、その形態は簡略化・形式化しており、すべて小型塔として製作されている。

この16世紀後半から17世紀前半にいたる雲仙山系安山岩の五輪塔は、地輪の背高は低いが、その地輪の上にのる火輪や風・空輪の形態は非常にいびつで、また彫出の仕方が粗雑である。そこから製作年代を割り出すことができる。

この日野江城跡階段4に出てくる雲仙山系の安山岩を石材にした石塔類は、石材・形態上の特徴からすべて16世紀後半期から17世紀前半ころの製作と考えられる。

なお、雲仙山系安山岩の石塔類から考えて、島原半島での本格的な石塔製作は16世紀後半以降と考えられ、室町後半以降の造立階層の拡大を背景に、その製作基數は大量にのぼったものと考えられる。

また、この階段4の踏み石で1点だけ確認される溶結凝灰岩製の地輪は、その粗雑な彫出内容から考えて、この階段南側のパズル状に組み合わされた袖石垣と同じように、この周囲（原城跡下の海岸など）で採れる凝灰岩を石材に当地で製作された可能性がある。製作時期は、大部分の雲仙山系安山岩製塔と同じく16世紀後半から17世紀前半ころと考えられる。

## ②製作時期に関する全体所見

第52表は、階段4を含めた全体の転用石塔135点を製作時期ごとに分類したものである。

この分類表から、一部に15世紀後半まで遡れる遺品もあるが、その大半（95%・128点）は16世紀後半から17世紀前半ころに製作されたものであることがわかる。

石材でみると、石質が緻密な良質の安山岩を使用した石塔は15世紀後半ころまで遡れるが、大半は現地の雲仙山系安山岩を使用しており、その石工技術は拙い。仮にこの階段遺構が16世紀後半から末期にかけて築造されたとすれば、製作されたばかりの石塔類が階段の踏み石に転用されたことになり、

その光景には生きしいものがあったように思われる。

なにはともあれ、大半の転用石塔の製作時期とこの階段の築造時期にはそんなに大きなひらきはなく、むしろ製作直後の石塔類が階段に転用されたと解釈した方が妥当と思われる。

第52表 製作時期による分類

製作時期	点数	石材
15C後半～16C半ば	2点	石質が緻密な安山岩
16C半ば～16C後半	5点	石質が緻密な安山岩
16C後半～17C前半	128点	雲仙山系安山岩・凝灰岩

#### (5) 城郭出土または転用石塔の事例

城郭遺構に関係して出土した中世・石塔類の事例は、全国的には決して珍しいものではない。そこで、石塔類が堀跡等から出土したり石垣等に転用されていた主な城郭を第53表に示す。

第53表に示した城郭以外に、二条城（京都府）・丹波亀岡城・彦根城などでも確認されているが、ここに示した城郭に関係して出土した石塔類は、基本的に石垣（裏込め部分も含む）・曲輪・堀跡・土塁などから出土したもののが大部分である。

福知山城（京都府福知山市）では、その調査報告書「福知山城跡」によれば、石垣の中に残るもの110点、天守台地中その他から発見されたもの309点、計419点もの石塔類が確認されている（註5）。また、転用石塔の種目は五輪塔・宝瓶印塔・笠塔婆・石仏であり、石塔類の完形塔は1基もなかったくなっている。また、築城に際し在地の勢力者に石材を集めるために、一定の割当をなし急遽寄せ集めさせたのではないかとしている。この点は、日野江城跡の場合でも十分に考えられることであり、具体的な集石方法を探る上で興味深い。

ところで、「福知山市史」によれば、この福知山城は、明智光秀が繩張りをして横山城を福知山城に改めたこと、近藤寺院を破壊し幕所の石塔を集めて天守台に積んだことなどが記されている（註6）。また石垣に石塔類を転用したことに関しては、城の石垣に利用する便利な石切場のようなものがなかったこと、一ヵ所に大量の石材を有する場がなかったこと、築城に時間的余裕がなかったことなどが、石塔を転用するにいたった背景として述べられている。

大和郡山城（奈良県大和郡山市）では約1000点もの石塔類が、主に天守台・本丸の石垣に転用されている。ただ、石垣裏込め部分でも多く使われているため、全体としては1000点を優に超える膨大な量の石塔類が使用されているという。また最終的に郡山城の石垣に転用されたと思われる多聞城の転用石塔について、「多聞院日記」に「奈良中家並に五郎太石甘荷を命ず」と書かれていることから、各家毎に20荷の集石命令があったことを指摘している（註7）。ただ、ここに記されている「五郎太石」とは通称ゴロタ石と呼ばれるもので、直径10～15cm程度の円礫をさし、石塔類に限定して集めさせた

ものではないが、家毎に命令を發して石材を集めさせたという点は参考になる。

関東の城郭で石塔類を転用している遺構について述べられた柴田龍司氏は、(a)堀跡から出土した石塔、(b)曲輪内から出土した石塔に分けて、その各々の背景について見解を示している(註8)。

(a)の堀跡から出土する石塔類は、堀底に投げ込まれた状態で出土し、しかも他の石造物や礎も含めた石だけの単独出土に限られる。また石塔類が本来は造立されていたと思われる墓所が域内に検出さ

第53表 主な石塔類出土・転用城郭

城名	所在地	出土・転用場所	出土・転用石塔
堀込城跡	千葉県	堀跡	五輪塔・板碑
南敷城跡	千葉県	堀跡・曲輪内	五輪塔・宝篋印塔
椎津城跡	千葉県	曲輪内	五輪塔・板碑
白井城跡	千葉県	曲輪内・土塁	五輪塔・宝篋印塔・板碑
生実城跡	千葉県	曲輪内 (井戸の石段、暗渠)	五輪塔・板碑
石神城跡	茨城県	大溝(曲輪東辺)	五輪塔・石臼
古館遺跡	茨城県	空堀内	五輪塔
白石城跡	埼玉県	空堀	五輪塔・宝篋印塔
今井城跡	東京都	土塁	宝篋印塔・板碑
犬山城	岐阜県	石垣	礎石・五輪塔・宝篋印塔・板碑
名古屋城	愛知県	石垣	礎石・五輪塔・石仏
伊賀上野城	三重県	本丸石垣	礎石・五輪塔
福知山城	京都府	天守台・本丸石垣	五輪塔・宝篋印塔・石仏・石臼・石燈籠など
宮津城	京都府	石垣(工事中出土)	五輪塔・宝篋印塔
周山城	京都府	本丸石垣	礎石・板碑
大和郡山城	奈良県	天守台・本丸等の石垣	礎石・五輪塔・宝篋印塔・板碑・石仏・石臼・石燈籠など
安土城	滋賀県	階段・石垣など	石仏・五輪塔・宝篋印塔・鳥居など
小谷城	滋賀県	堀跡(土手)など	五輪塔など
大阪城	大阪府	石垣	五輪塔・宝篋印塔・石仏・石臼
和歌山城	和歌山县	天守基壇	仏塔石・玉石
築山城	兵庫県	二の丸石垣	五輪塔・宝篋印塔・石仏
明石城	兵庫県	天守台への石段	宝篋印塔
姫路城	兵庫県	石垣	石棺・五輪塔・宝篋印塔・板碑・石臼・石燈籠
松江城	島根県	本丸石垣	五輪塔
熊本城	熊本県	石垣など	五輪塔・宝篋印塔
宇土城跡	熊本県	堀跡など	五輪塔

れる例が非常に多く、その城は在地小領主の居城がほとんどである。また意識して石塔類を堀底に棄てる行為の目的は、「破城」や「城割り」と呼ばれる城の機能を停止させる行為に伴う儀式の一つと考えられる。さらに石塔類を墓所から引き離す行為は、城主であった在地領主層やその領民に領主が交代したことを知らせる意味での精神的影响は計り知れないものがあるとしている。

(b)の曲輪内から出土した石塔類については、これらが曲輪内から出土した城郭（椎津城跡・臼井城跡・生実城跡・今井城跡）は16世紀中葉以降に戦略上の重要な拠点として外部から入った勢力によって大改築を受け、その折城内にあった墓所は破壊され、石塔類は再利用されるか集められて廃棄されたのではないかとしている。

ただ、どのような背景があるにせよ、このような石塔類転用の城郭に共通していることは、その転用部分が石垣や基壇部分が主であり、日野江城跡階段のように踏み石として大量に、しかも意識的に配列まで考慮したと思われる遺構とは、その性格が基本的に異なるものと思われる。

確かに、階段踏み石に転用した城郭遺構は、いくつかその事例を見出すことができる。安土城の大手道Ⅰ区では、「踏石には、石仏・五輪塔地輪等10点が使用されており、石仏面を踏面にしているものが1点認められる」(註9)という。

また熊本城では、地蔵門付近の石段に40点ほどの五輪塔残欠（ほとんどが地輪）が利用されている（註10）。ただし、この石段転用の時期が築城当時のものか、明治7年熊本城が陸軍用地となってから以降にできたもののかはわからないが、ただ、その石塔の配列には一定の規則性は認められず、そこに何らかの精神的宗教的な意図を認めるることはできない。

なにはともあれ、他の石塔転用の城郭遺構を考慮しても、日野江城跡階段のように踏み石として大量の転用石塔を使用し、しかも配列まで意識的に行なったと考えられる遺構は認められず、全国的に見ても極めて特異な階段遺構と考えられる。

#### (6) まとめ 一転用石塔の背景一

今回の発掘で出土した石塔類135点は、全て五輪塔の地輪や宝篋印塔の基礎・塔身であり、階段の踏み石に最初から使用する目的で他所から運ばれ転用されたものと考えられる。そのため五輪塔の火輪や風・空輪さらに宝篋印塔の笠や相輪は、その形から踏み石には向きであるために、この日野江城跡からは1点も発掘されておらず、その転用の目的が明かである。

これまで述べてきたことをまとめると、以下のことが想定される。

①階段築造の時期は、石塔類の製作年代から考えれば、1500年代後半以降であること。

この点は、雲仙山系の安山岩を使用した大部分の石塔類や八卦文彫出の宝篋印塔塔身など、階段踏み石に転用された石塔類の中で一番新しい時期のものが、1500年代後半から1600年代前半ころまでの範疇に入る時期に製作されたと考えられるためである。

仮に、この階段遺構が1580年代後半ころの築造となれば、135点確認される石塔のほとんどが製作されたばかりのものであり、それを破壊し階段部分に転用したとなれば、階段築造当時は非常に生きいき光景があったものと思われる。

②大量の石塔類は、階段踏み石に意識的に配列まで考慮して転用された可能性が高く、全国的にみても類例のない特異な遺構と考えられる。

この点は、とくに階段4の遺構に顕著に示されている。階段4の遺構では、本来は、石塔が初段横列と両端の初段から最上段までの縦一列に転用され、L字状（またはU字状）に石塔を配置していたと考えられる。また、そのL（U）字状の内部に転用石塔の約半数にあたる60点ほどが踏み石に転用されている。とくに初段から4段目までの内部（横列）はほぼ全ての踏み石に石塔が配置されており、築造当時はまさに石塔（仏塔）を踏みしめて登り降りする状況が展開され、「見せるため」の階段を意識して築造されたと思われる。

ただ、その転用石塔のL字状（またはU字状）配列に特別（宗教的）な意味合いがあるのかどうかについては現段階ではわからないが、五輪塔や宝篋印塔などの石塔類は仏教文化の所産であり、しかも墓塔（仏塔）。日野江城跡で確認される石塔は、その製作時期からみてすべて墓塔と考えられる）として、たとえ年忌が過ぎたものであったにしても本質的には故人の魂が宿る性格を有する。それを人が踏む石段に意識的に大量に配置しているということは通常では考えられず、極めて希有な事例である。明かに何らかの意図が働いていたものと想定され、そこに信仰上（キリスト教）の意味合いが強く働いていたように思われる。つまり、城主の信仰がこれまでの神仏信仰からキリスト教へ交代したことを見せる意図で石塔（仏塔）を配した階段を築き、それを通じて領主（キリシタン大名）權威の徹底化を計る「見せしめ」的な要素が含まれていたと考えられる。石塔（仏塔）配石階段から派生する精神的影響には計り知れないものがあったと思われる。

各地の城郭遺構でも多くの石塔類が転用されているが、それらは主に石垣部分や堀から出土したものである。一部に階段の踏み石に転用されている城郭もあるが、そこには日野江城跡階段遺構のように配列まで意識して築造された形跡は認められない。この点から考えても、日野江城跡階段遺構（とくに階段4）は極めて特異な遺構であることは間違いないものと思われる。

なお、階段に転用された石塔は、単に日野江城跡近辺に限らず、非常に広い範囲から集められた可能性がある。紙面の都合上、詳細なデータを挙げることはできなかったが、16世紀における日野江城城主有馬氏の直轄地と考えられる膝下の北有馬町から千々石町さらに西有家町・有家町までの中世・石塔群は、ほぼ全ての遺跡で土中より出土したものであり、意図的に破壊されたことが考えられる（註11）。その中で、北有馬町から千々石町までの石塔群では地輪など日野江城跡階段遺構に転用された種目点数が極端に少ない。それに対して西有家町・有家町では、同じく土中から出土したにも関わらずほぼ建塔当初の地輪等が出土している。

このことから、日野江城跡階段遺構に転用された石塔類は、膝下の北有馬町から千々石町までの広い範囲から集められた可能性が高いが、ただ、その集石の過程で、城主有馬氏からの在地勢力に対する集石命令があったかどうかは不明である。

なお、石塔類転用の背景には、近くに大量の石材を供給する石切場がなかったことも考慮すべきと考えられるが、築城に時間的余裕がなかったからという点にはいささか疑問をもつ。なぜなら階段4の南側袖石垣には、直方体の切石（溶結凝灰岩）を整然とパズル形式に配列した極めて珍しい遺構が出ているのである。このことから考えれば、築造には、設計から採石・彫整・搬送に至る施工まである程度の時間的余裕と計算に基づいた作事が想定されるのではないだろうか。

以上のことから、この日野江城跡階段遺構で想定されることは、第一に、今回出土した階段踏み石に転用された石塔類は、天正8年（1580）に有馬晴信が領内寺社の破壊を行っていることと関係していると考えられる。実際、大村領における天正2年（1574）10月以降の寺社破壊は墓塔まで及んでおり、有馬領における寺社破壊も同じ状況が考えられる。このことは、キリスト教が盛んだった島原半島南中の中世石塔類が、16世紀後半を下限にして主に中世寺社跡などから破壊された状況で出土することからも理解されることである。

第二に、日野江城跡の階段3・4の築造時期は、1500年代後半とくに天正12年（1584）の沖田景の戦い以降における有馬キリスト教隆盛期に、仏教勢力への弾圧ならびに見せしめとして、すでに破壊していた仏塔（墓塔）をわざわざ階段の踏み石に転用、しかも配列まで考慮して使用した可能性が高いように思われる。つまり、有馬・キリスト教の隆盛時期における仏教勢力に対する見せしめ的な築造である。

また、この階段4上部から発掘された金箔瓦と階段踏み石に転用されている金箔塔身は、非常に対照的な遺物である。金箔塔身（仏塔）は踏み石に、金箔瓦は階段4を登り詰めた場所に建つ建物の屋根に葺かれていたと思われ、明と暗を示す遺物として興味深い。現実的には領主（有馬氏）交代がなく破壊行為が考えられない状態でありながら、仏教からキリスト教への信仰上の変化にともなって、このような対照的な表れ方が出てきたのであれば、その意味するものは大きい。

さらに、領主の信仰上の変化を知らしめるためにあえて金箔石塔を踏み石に転用したと仮定するならば、仏教徒への見せしめ的な要素を含んでいたと解釈することもできる。ほとんどの転用石塔は形式化した粗雑な石塔であり、当時の役土層クラスであれば誰でも造立できた石塔であるが、それらの象徴的な遺品として金箔石塔が選ばれ踏み石に転用されたとも考えられる。

ところで、日野江城跡の西方約1kmに位置する古園石塔群は、昭和45年宅地の造成中に偶然土中から出土したものである。各石塔は区画して掘り取った中に整然と埋められており、また石塔群の上からは「六道鏡」を意味するものと考えられる大量の輸入鏡（「洪武通宝」「開元通宝」など）も出土している。この20数基の石塔群は、その形態から14世紀後半から16世紀後半まで各時代ごとの編年ができるもので、多分に有馬氏を含めた上層クラスの墓塔群と考えられる。明らかに意識的に埋められた石塔群であり、その意味するものは破壊等から免れるためにやむなく土中に隠した可能性が高い。この隠蔽する行為と、石塔を踏み石に使用した階段遺構とは密接に関連するものと思われる。つまり、石塔群を破壊しそれらを日野江城の階段に転用するという行為がおこなわれたために、その破壊から免れようと、古園では石塔群を地下に整然と埋め、その上部に儀礼的要素を含ませながら輸入鏡を埋めたものではないかと考えられるのである。

なにはともあれ、今回出土した日野江城跡階段遺構は、キリスト教隆盛期を示唆する遺構として、16世紀後半という激動の時代を象徴的に示した貴重な遺構と考えられ、キリスト教時代の一場面に旧仏教勢力に対する生々しい弾圧があったことを示唆している。島原・天草一揆の舞台となった原城（南有馬町）がキリスト教時代の終焉を示す遺跡である時、両城の立場は、一時代（キリスト教時代）の明と暗を象徴する特異な遺跡であることは間違いない。

〈補註〉

- 註1 階段を築く際、各堆を整形された踏み石で固めることが耐久性に優れた造作方法であると思われるが、そのために整形された石塔をL字状または匁字状に配石したのかもしれない。ただ、3段目から6段目の左端は全体に不釣り合いな小型の宝蓋印塔身が配石されており、疑問が残る。
- 註2 小野田政雄編 1986 『栗島の板碑文化』栗島浦村教育委員会 30頁参照。  
栗島の金箔類型板碑については、古川久雄氏（県陽文化財研究所・石造物研究会代表）のご教示による。
- 註3 福井県小浜市の延文三年（1358）銘宝慶印塔（総高約303cm・花崗岩製）の塔身にも、その四側面の種子が金箔で施されているが、この金箔が製作当初からのものかどうかは不明。現在の金箔は、多分に後代に施されたものと考えられるため、ここでは割愛する。
- 註4 島原半島は基本的に安山岩製塔で占められているが、例外として雲仙市国見町神代地区では溶結凝灰岩製の石塔類が集中的に確認される。また同町と多比良地区でも鎌倉後期の宝塔（塔身のみの残欠）が確認され、さらに有家町四面宮に付随した祇園寺跡とその周辺から出土した石塔群の中にも2基分の溶結凝灰岩製塔が確認される。加津佐町円通寺跡に建つ大智禪師関係の無縫塔（諸座のみ当時のもの）も溶結凝灰岩製である。ただ国見町神代地区での溶結凝灰岩製塔は、他地区と異なり、鎌倉・南北朝期から室町後期まで連続と建塔されており、その建塔には肥後（主に菊池周辺）の影響が濃厚に表れている。確かに島原半島（日野江城跡の岩盤でも確認される）でも凝灰岩と思われる石材が確認されるが、ただ神代地区などの石塔類は、その彫出の仕方や形態から考えて、肥後（主に菊池地方周辺）で製作され搬入されたことはほぼ間違いないものと考えられる。
- 註5 福知山市教育委員会編 1986 『福知山城跡』福知山市文化財調査報告書第9集 福知山市教育委員会
- 註6 福知山市史編さん委員会編 1978 『福知山市史』史料編1 福知山市役所
- 註7 南村俊一編 1975 『石造物都山城址転用材調査概要』郡山城史跡・柳沢文庫保存会
- 註8 柴田龍司 1992 「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究』第6号 中世城郭研究会
- 註9 西家淳朗編 1997 『特別史跡 安土城跡環境整備事業概要報告Ⅳ』大手道 滋賀県安土城調査研究所
- 註10 熊本市文化財調査会編 1969 『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会
- 註11 有馬氏の直轄地として、有家・有馬・口之津・加津佐それに一時的であれ千々石の各村があげられる（外山幹夫 1995 「有馬氏の領国支配」『長崎大学教育学部社会科学論叢』第49号 長崎大学教育学部1～16頁）。

# 図 版



曲輪10調査区全景（真上から）



37区東側（西から）



38区西側（東から）



40区北側（南から）



39区・41区遠景（北から）

本丸地区曲輪10遺構検出状況

図版 2



本丸地区航空写真



調査区全景（北西から）



調査区全景（東から）



柱立柱建物跡（南から）



柱穴列 1・柱穴列 2（南から）



トレンチ 1（南から）



トレンチ 2（東から）



トレンチ 3（北西から）

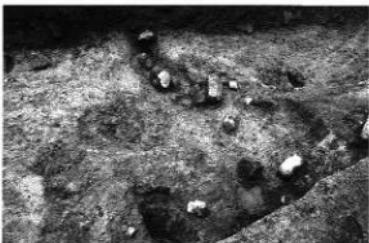
本丸地区曲輪 2 遺構検出状況ほか①



大型土坑 1 (北西から)



大型土坑 3 (南から)



溝状造構 3 (北から)



溝状造構 4 (南東から)



調査区西半部 (北から)



雨上がりの調査区西半部 (北から)



大型土坑 1 内遺物出土状況



大型土坑 1 内遺物出土状況

本丸地区曲輪 2 造構検出状況ほか②

図版 4



トレンチ1(右)及びトレンチ1-2(左) (南から)



トレンチ1-1 西壁土層



トレンチ1-1 中央部土層堆積 (北から)



トレンチ2 碓堆積の検出状況 (西から)



トレンチ2 土層堆積 (南西から)



トレンチ3 旧地形の落ち込み (西から)

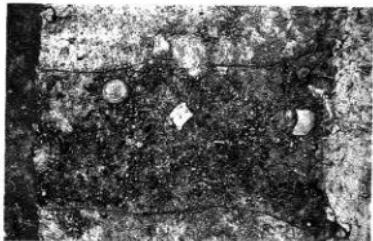


トレンチ4 西壁土層と旧地表付近の遺物出土状況 (東から)



左写真の遺物拡大

本丸地区曲輪3ほか調査状況①



トレンチ 4 遺物出土状況（西から）



トレンチ 5 玉砂利状の礫層検出（西から）



トレンチ 5 溝状遺構（南西から）



トレンチ 5 溝状遺構（北西から）



トレンチ 5 溝状遺構断面図（西から）



トレンチ 6 ピット検出状況（西から）



トレンチ 6 東隅の礫崩落と遺物出土状況（西から）



トレンチ 7 調査状況（西から）

本丸地区曲輪 3 ほか調査状況②

図版 6



トレンチ 7 東壁上部の土層（西から）



トレンチ 7 遺物出土状況（北から）



トレンチ 8 調査状況（東から）



トレンチ 8 遺物出土状況（東から）



トレンチ 9 調査状況（南から）



トレンチ 9 遺物出土状況（西から）



トレンチ10 硬化粘土ブロックの堆積状況（南から）



調査地付近 曲輪 3（西から）

本丸地区曲輪 3 ほか調査状況③



29区据立柱建物跡 1・2・3（真上から）



26区階段 2（東から）



28区石垣 6（東から）

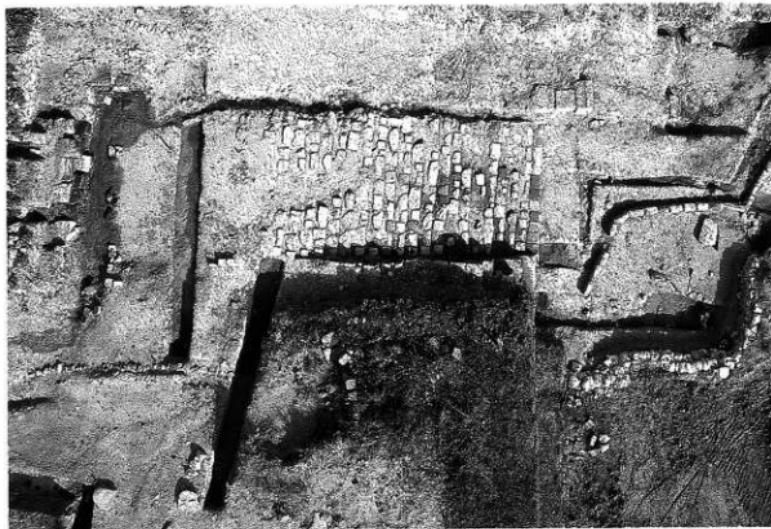


28区金箔瓦出土状況（西から）

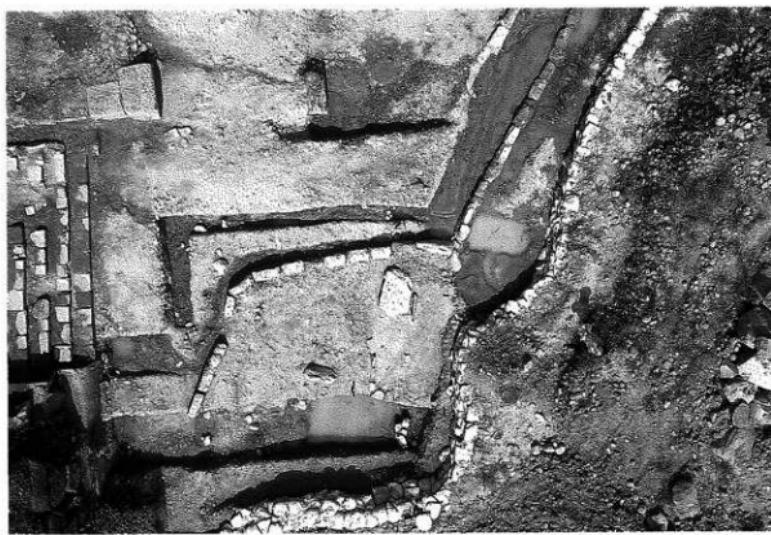


28区礎石群 2（北から）

二ノ丸 A 地区遺構検出状況・遺物出土状況



B地区階段4・石垣7・石垣8・溝跡10（真上から）



B地区溝跡7（真上から）

二ノ丸B地区遺構検出状況①



14-1区全景（南から）



14-1区溝跡7・ピット群4（西から）



14-2区溝跡7（北東から）



30区石垣7（東から）



30区石垣7隅角部「削りこみ」（北から）



34区集石5（西から）



35区集石6（東から）



36区柱穴列3（南西から）

二ノ丸B地区遺構検出状況②

図版10



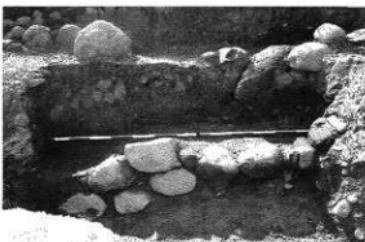
12区全景（南から）



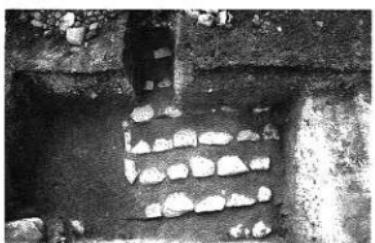
19区断ち割り全景（南から）



19区階段2・溝跡8（南から）



19区石垣3（北から）



21区階段2（東から）



21区石垣4（南から）

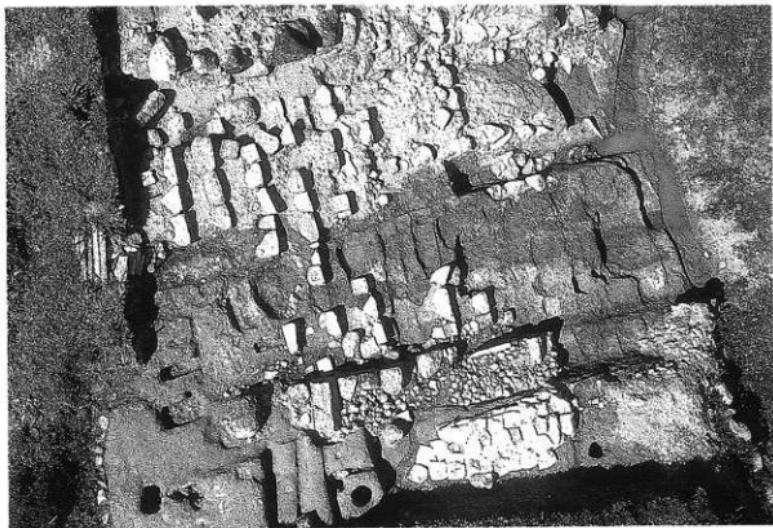


23区全景（東から）



24区全景（東から）

二ノ丸C地区遺構検出状況



D地区階段2・階段3・石垣1・石垣2・石列5（真上から）



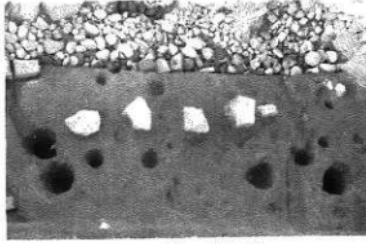
D地区階段3・石垣1（北から）



D地区階段2・階段3・石垣2（南から）



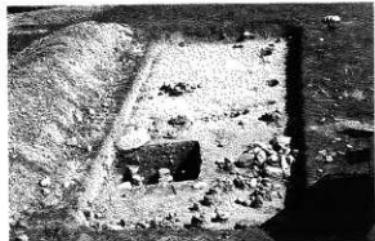
D地区階段3・溝跡9（南から）



13区石列5（南から）

ニノ丸D地区遺構検出状況

図版12



1区全景（西から）



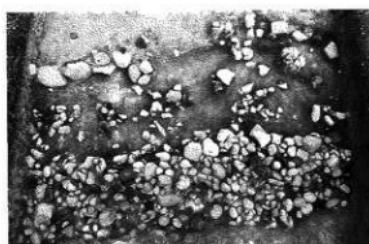
1区北西隅断ち割り（南から）



2区全景（西から）



2区断ち割り（南西から）



3区集石1（東から）



4区瓦集積（西から）



8-1区・16区全景（西から）



8-1区集石3（西から）

二ノ丸E地区遺構検出状況・遺物出土状況



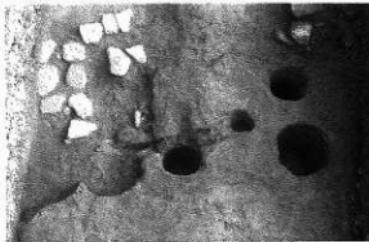
8-3区全景（西から）



9区階段1・石列2（西から）



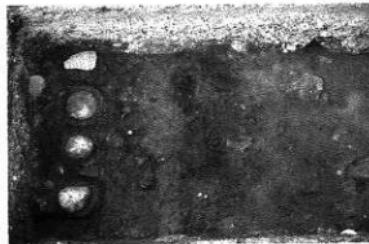
9区階段1（北から）



9区石列2（西から）



10区遠景（西から）



10区石列3（南から）



16区礫石群1（東から）



16区礫石群1（西から）

二ノ丸E地区遺構検出状況

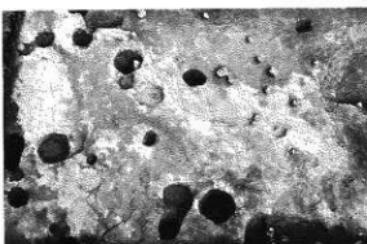
図版14



5区土坑1遺物出土状況（西から）



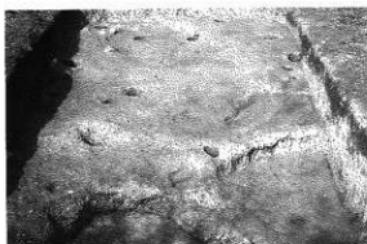
5区土坑1（北西から）



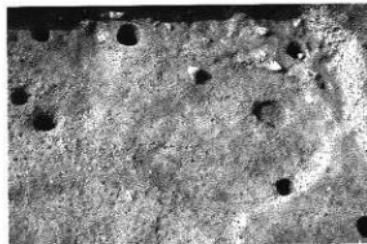
5区ピット群1（西から）



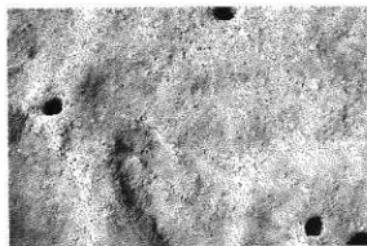
6区遺物出土状況



6区ピット群2・土坑2・土坑4・土坑5（南から）



6区ピット群2（東から）



6区土坑4・土坑5（東から）

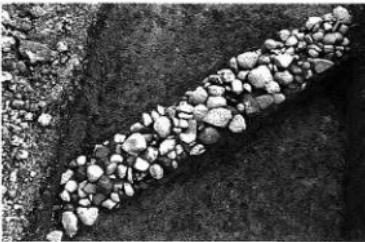


6区土坑3（東から）

二ノ丸F地区遺構検出状況・遺物出土状況



7区石列1（北東から）



7区集石2（南から）



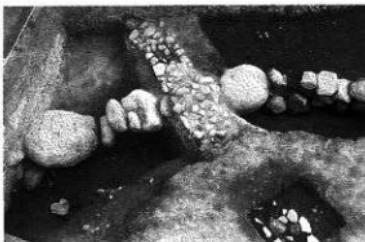
11区集石2（西から）



15-2区全景（北西から）



15-2区石垣1（北から）



15-3区石列4・集石2（西から）



18区全景（東から）



22区石垣5（北から）

二ノ丸G地区遺構検出状況

図版16



1区・2区・3区・4区遠景（南から）



1区石垣1・石列1（南から）



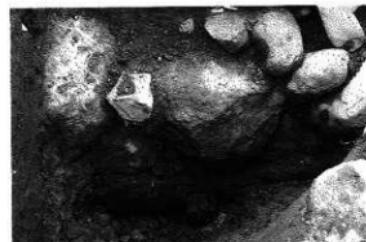
1区石列1（南から）



2区石垣1（南から）



3区石列1（東から）



3区検出木材（東から）



4区石垣1（南から）



5区石列2・柱穴列3（東から）

大手川地区遺構検出状況



本丸地区曲輪10



本丸地区曲輪2

出土遺物①

図版18



本丸地区曲輪2



本丸地区曲輪2

出土遺物②



本丸地区曲輪 2



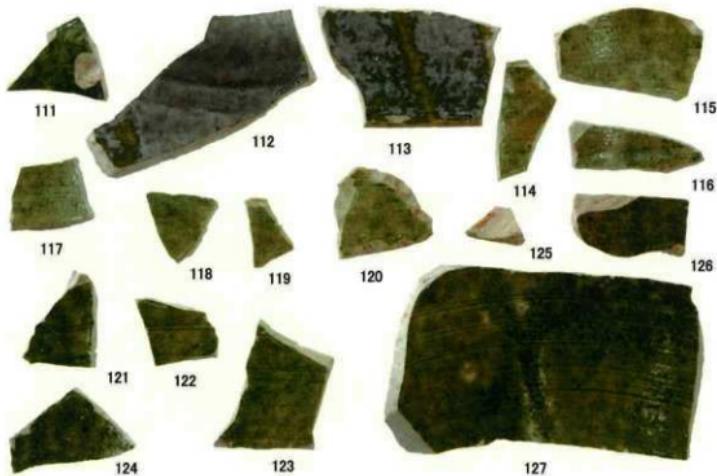
本丸地区曲輪 2

出土遺物③

図版20



本丸地区曲輪 2



本丸地区曲輪 2

出土遺物④



本丸地区曲輪 2



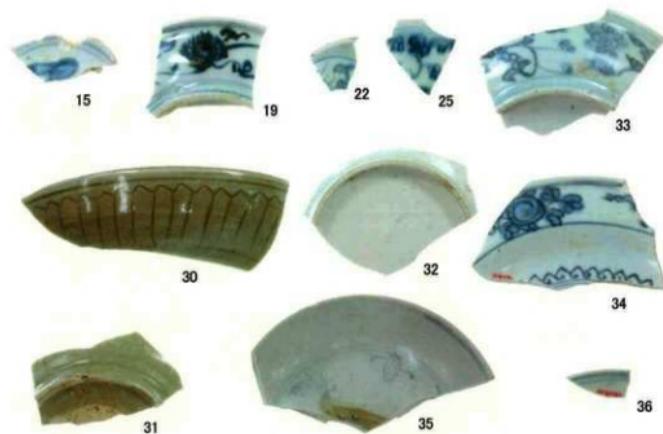
本丸地区曲輪 2

出土遺物⑤

図版22



本丸地区曲輪 3 ほか



本丸地区曲輪 3 ほか

出土遺物⑥



ニノ丸A地区



ニノ丸A地区

出土遺物⑦

図版24



二ノ丸A地区



二ノ丸A地区

出土遺物⑧



ニノ丸A地区



ニノ丸A地区

出土遺物⑨

図版26

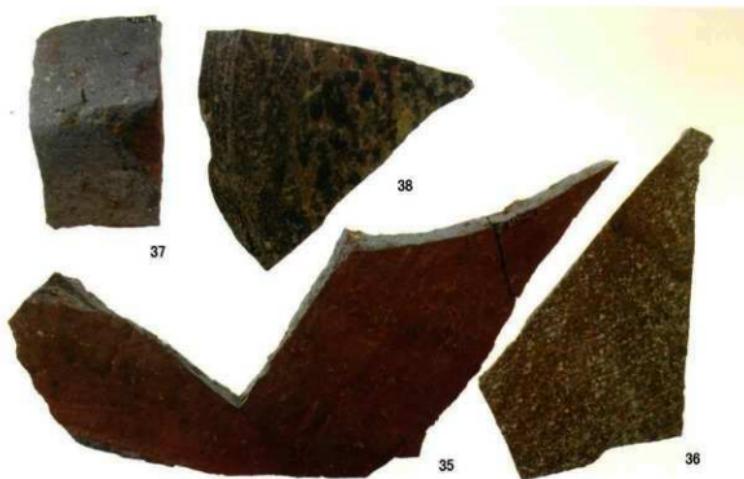


二ノ丸B地区



二ノ丸B地区

出土遺物⑩



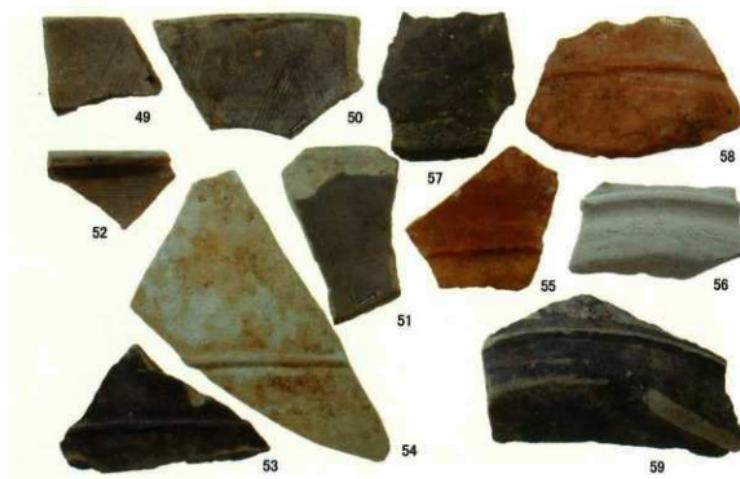
ニノ丸B地区



ニノ丸B地区

出土遺物⑪

図版28



ニノ丸B地区

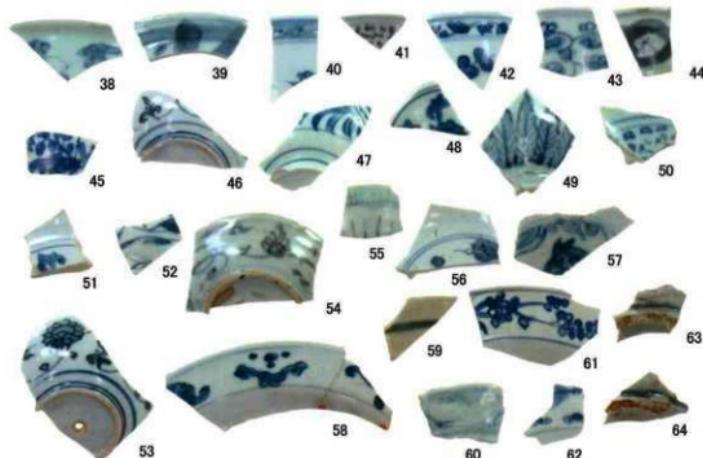


ニノ丸C地区

出土遺物⑫



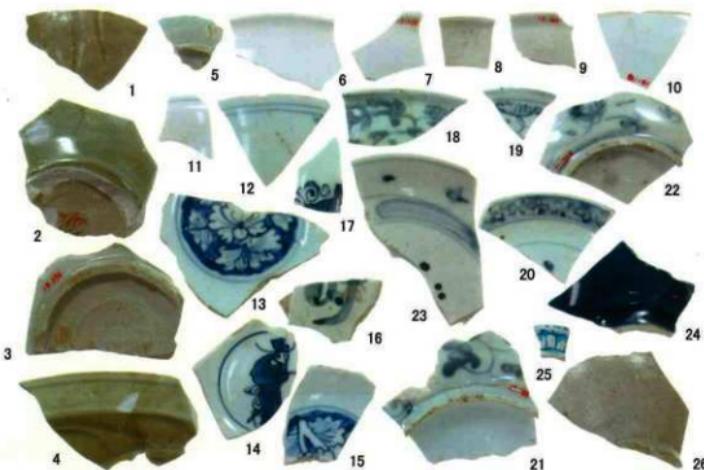
二ノ丸C地区



二ノ丸C地区

出土遺物③

図版30



二ノ丸D地区



二ノ丸D地区

出土遺物④



33

34

二ノ丸D地区



35

36

39

38

37

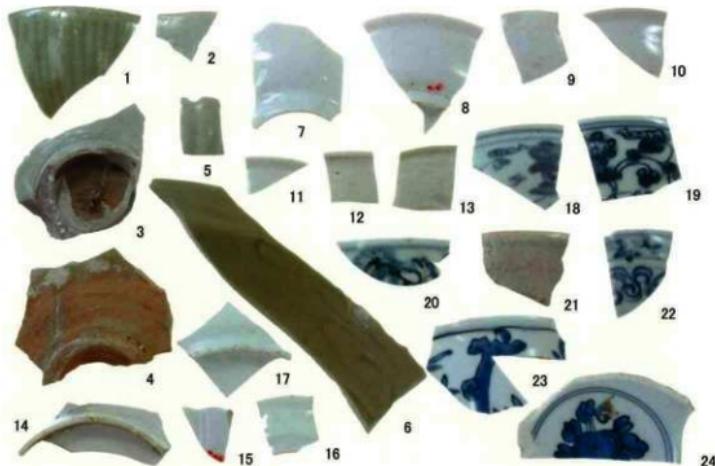
二ノ丸D地区

出土遺物⑤

図版32



ニノ丸D地区



ニノ丸E地区

出土遺物⑯



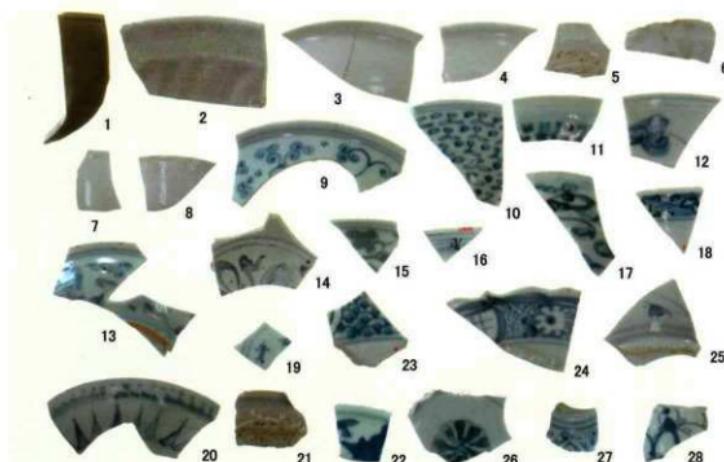
二ノ丸E地区



二ノ丸E地区

出土遺物⑦

図版34



ニノ丸F地区



ニノ丸F地区

出土遺物⑩



二ノ丸F地区



二ノ丸F地区

出土遺物⑨

図版36



ニノ丸G地区



ニノ丸G地区

出土遺物②



二ノ丸G地区



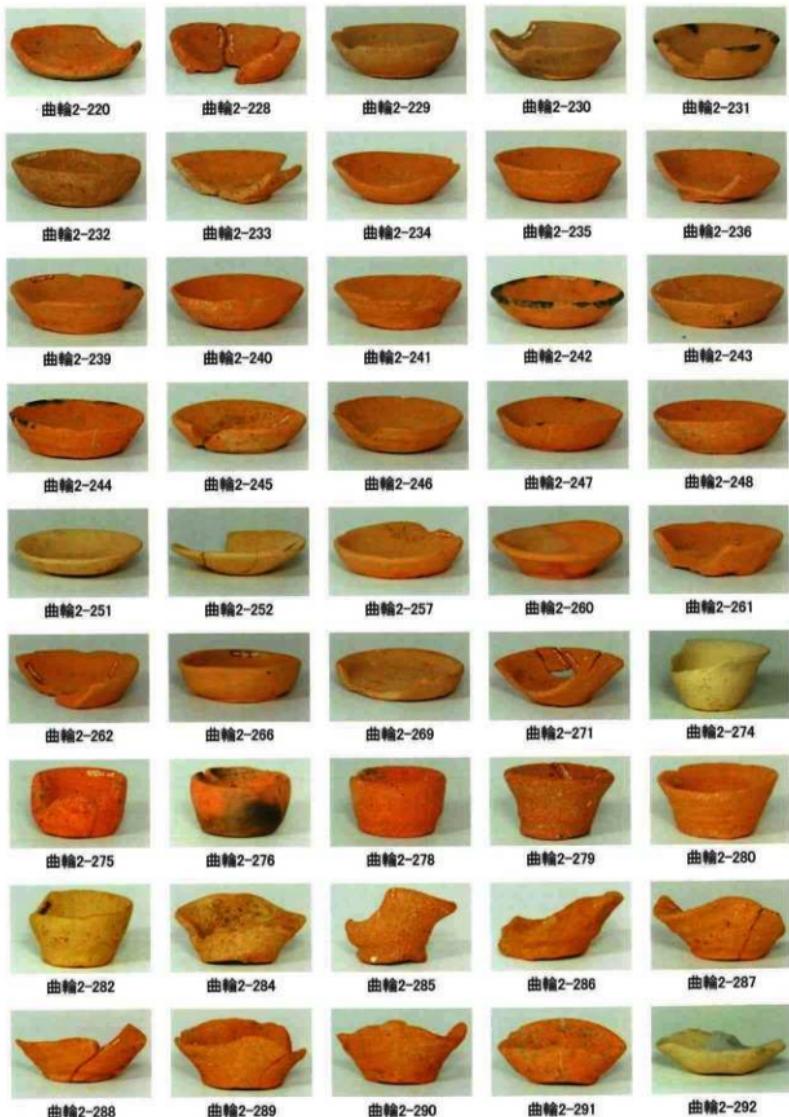
大手川地区

出土遺物⑦

图版38

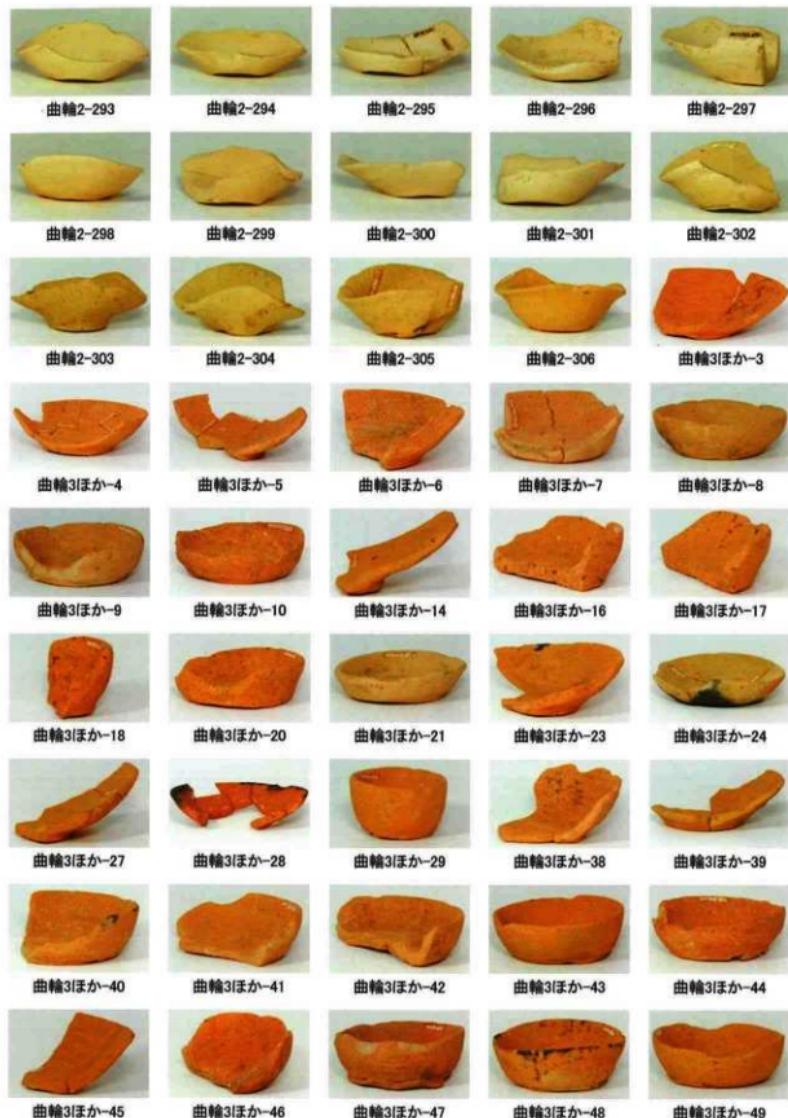


出土遺物②



出土遺物②

図版40



出土遺物②

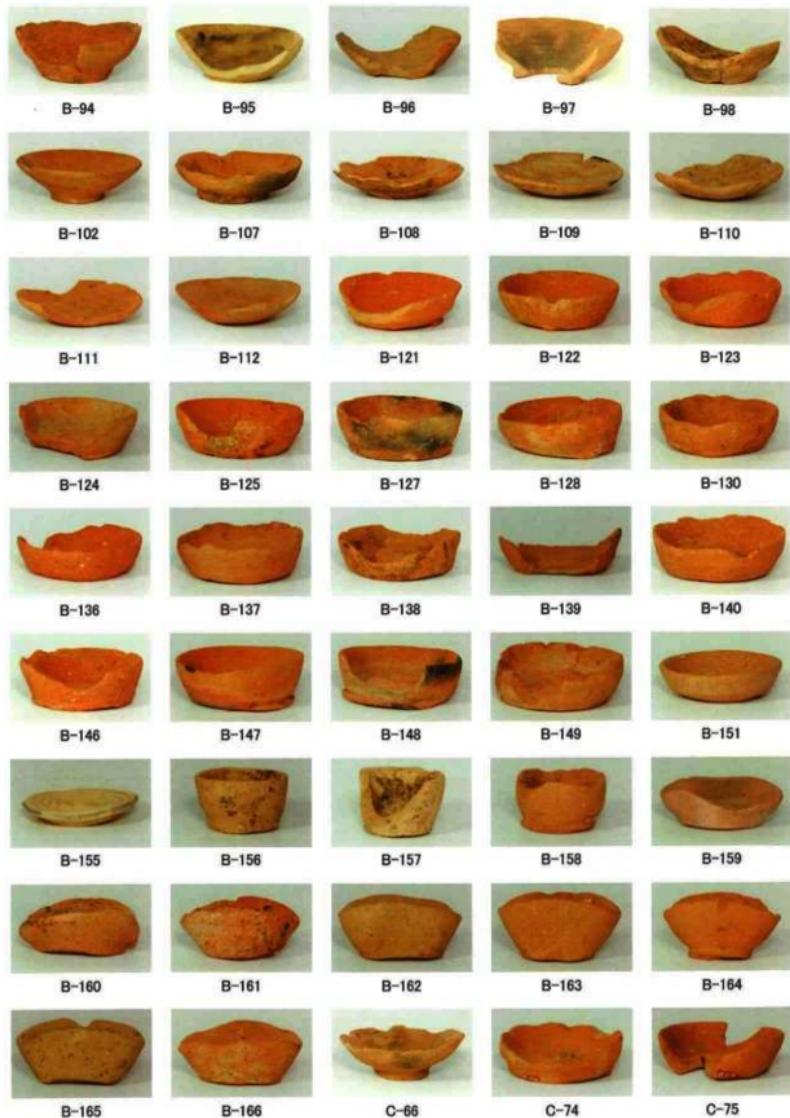


出土遺物②

図版42

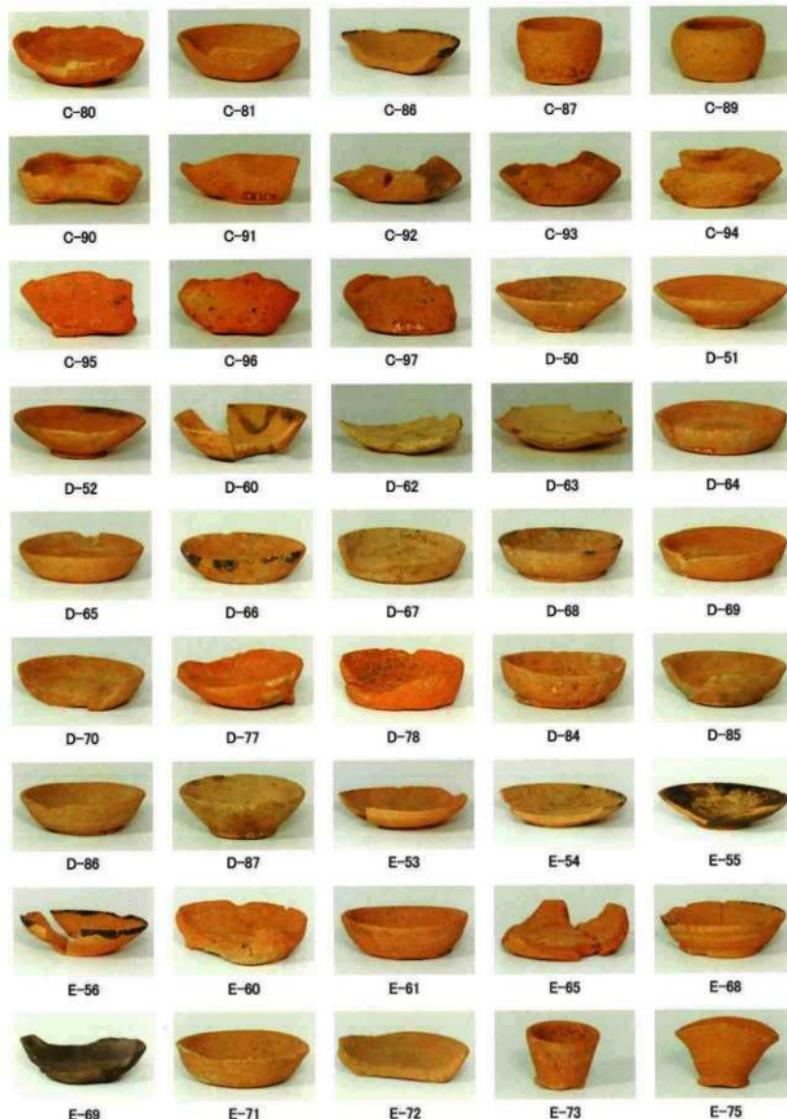


出土遺物②

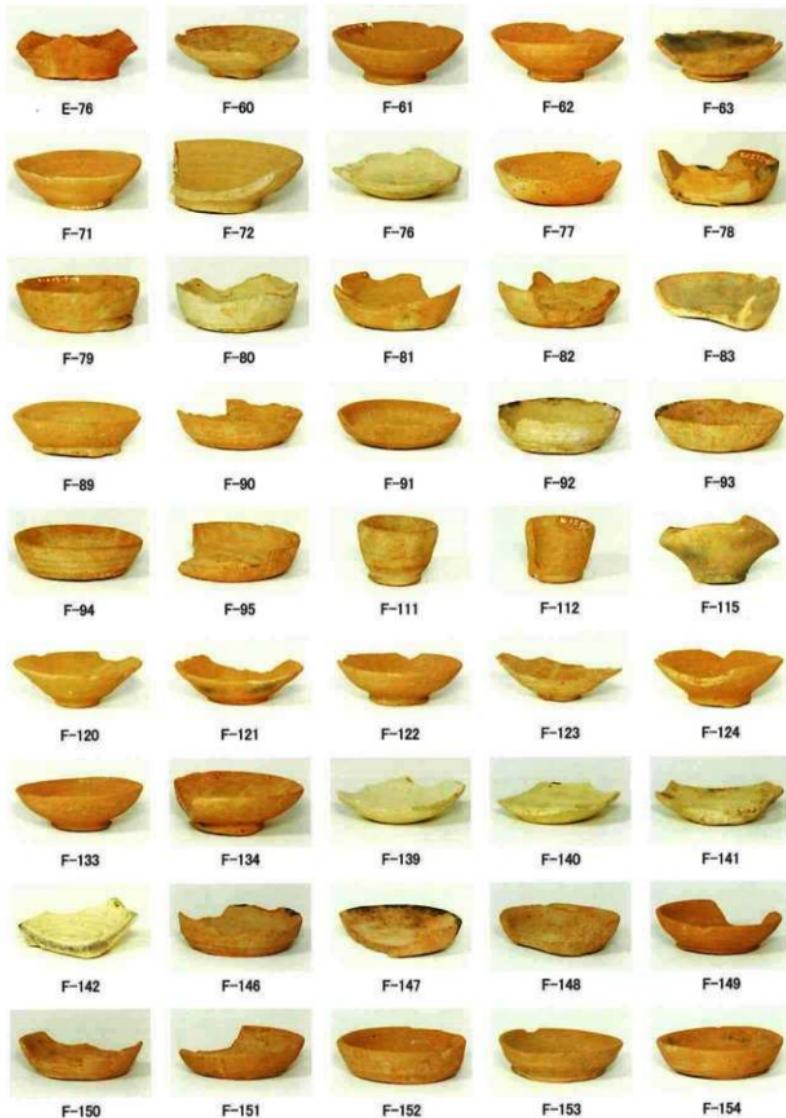


出土遺物②

図版44

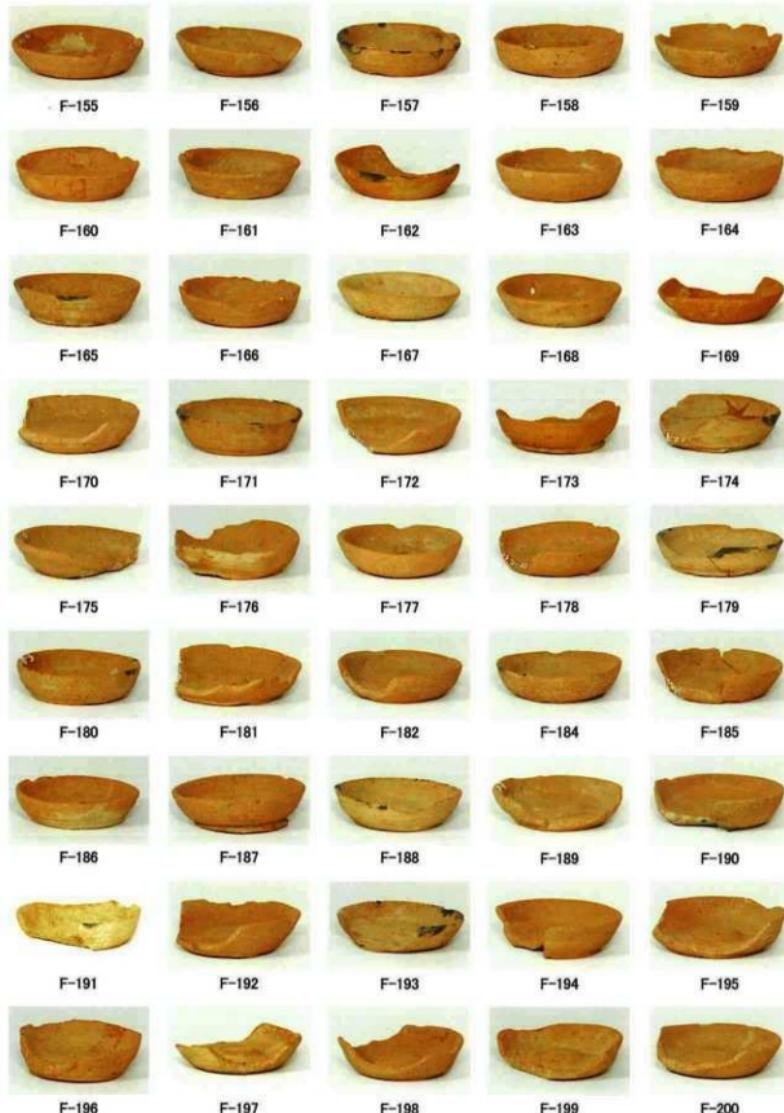


出土遺物②

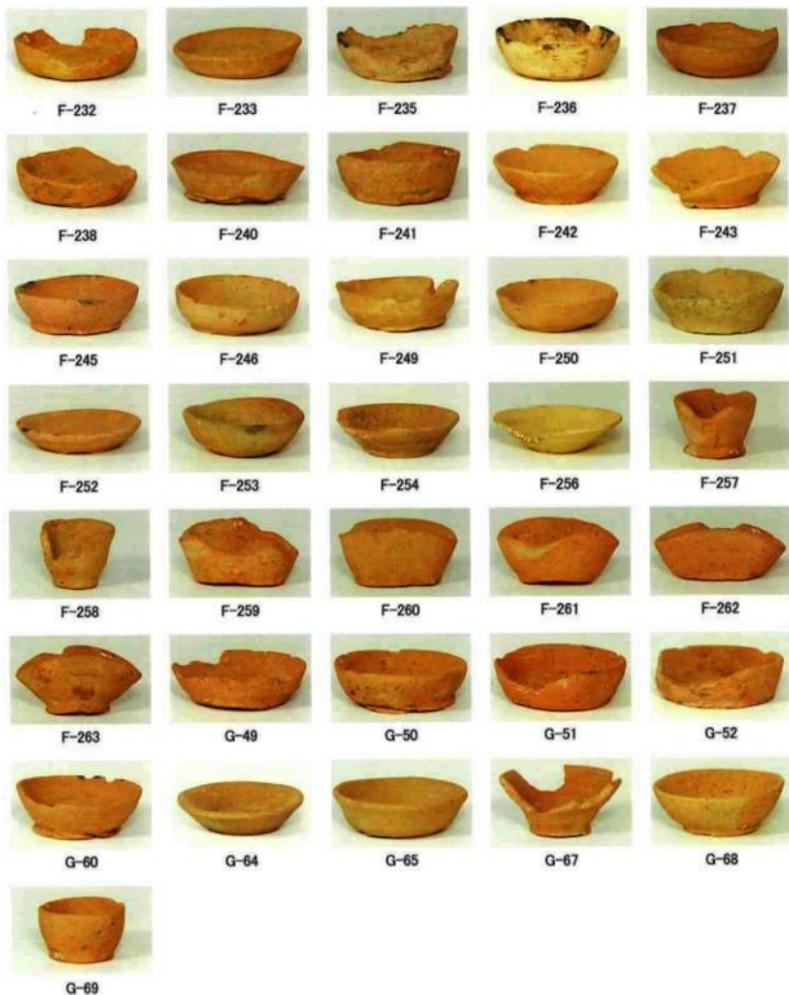


出土遺物②

図版46



出土遺物③



出土遺物③

图版48



出土遗物②



出土遺物③

図版50



出土遺物④



出土遺物③

図版52



曲輪2-307



曲輪2-307



A-126

出土遺物③

## 報告書抄録

ふりがな	ひのえじょうあと そうしゅうへんI							
書名	日野江城跡 総集編I							
副書名	平成21年度までの調査成果							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	伊藤 健司, 大石 一久, 林田 好子, 本多 和典							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL 050-3381-5080							
発行年月日	西暦2011年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号							
日野江城跡	南島原市 北有馬町	42214	101-1	32° 39' 13" ~ 32° 39' 29"	130° 15' 8" ~ 130° 15' 30"	980401 ~ 100331	2361.6m <sup>2</sup>	学術調査
集録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
日野江城跡	城跡	中世	階段 石垣 掘立柱建物跡	金箔瓦, 土師質 土器, 青磁, 白 磁, 青花, 法花	国史跡			

南島原市文化財調査報告書 第6集

## 日野江城跡 総集編 I

2011.3.31

発行 長崎県南島原市教育委員会  
〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 謙早印刷株式会社